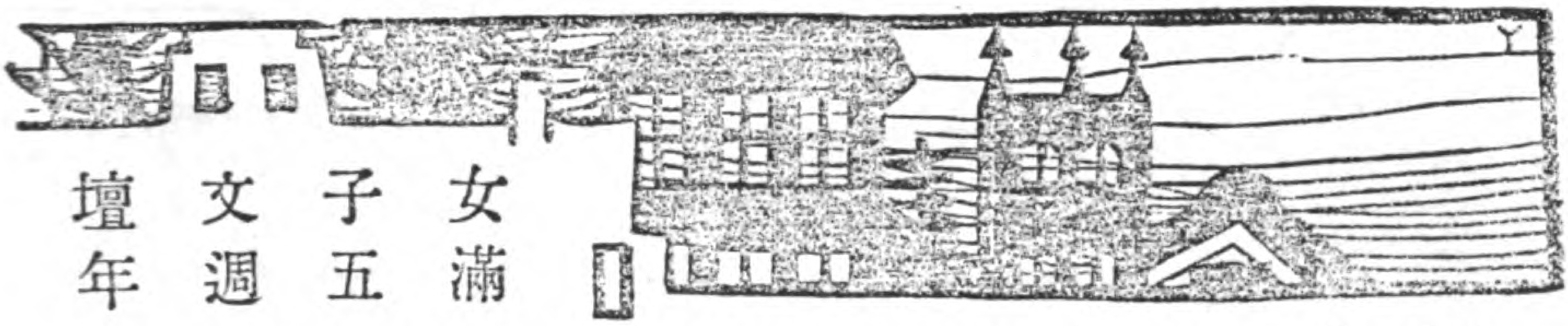
女子文壇

滿五週年紀念號

明治四十三年一月一日發行

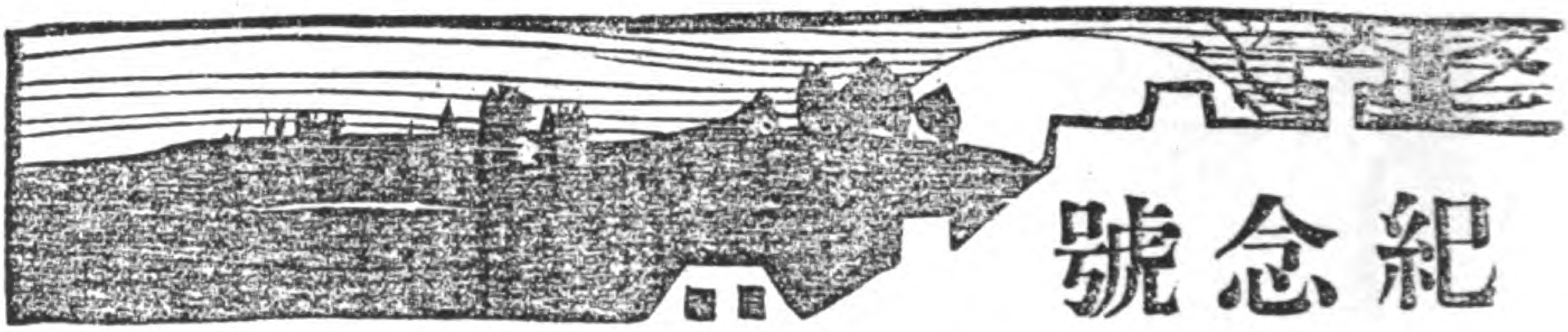


六年第壹號



女子文壇満五週年





名流婦人の日記

【口繪】



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

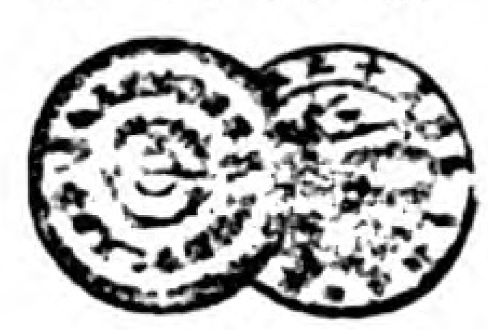
壽美禮おしろい

登録商標



壽美禮おしろい

五二等品評會功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入



ヴワイオレツト水製

ねり製 大壜二十錢 小壜十二錢
水製 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢
玉製
粉製
肉色各種
鉛栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

錫、壺、紅彩蝶帶ひ 錫罐詰入 錢 別製罐詰 五拾錢 大袋 二錢 小袋 一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性ありて◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は溫湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登録商標
西洋白色くなるあらひ粉
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらひ粉

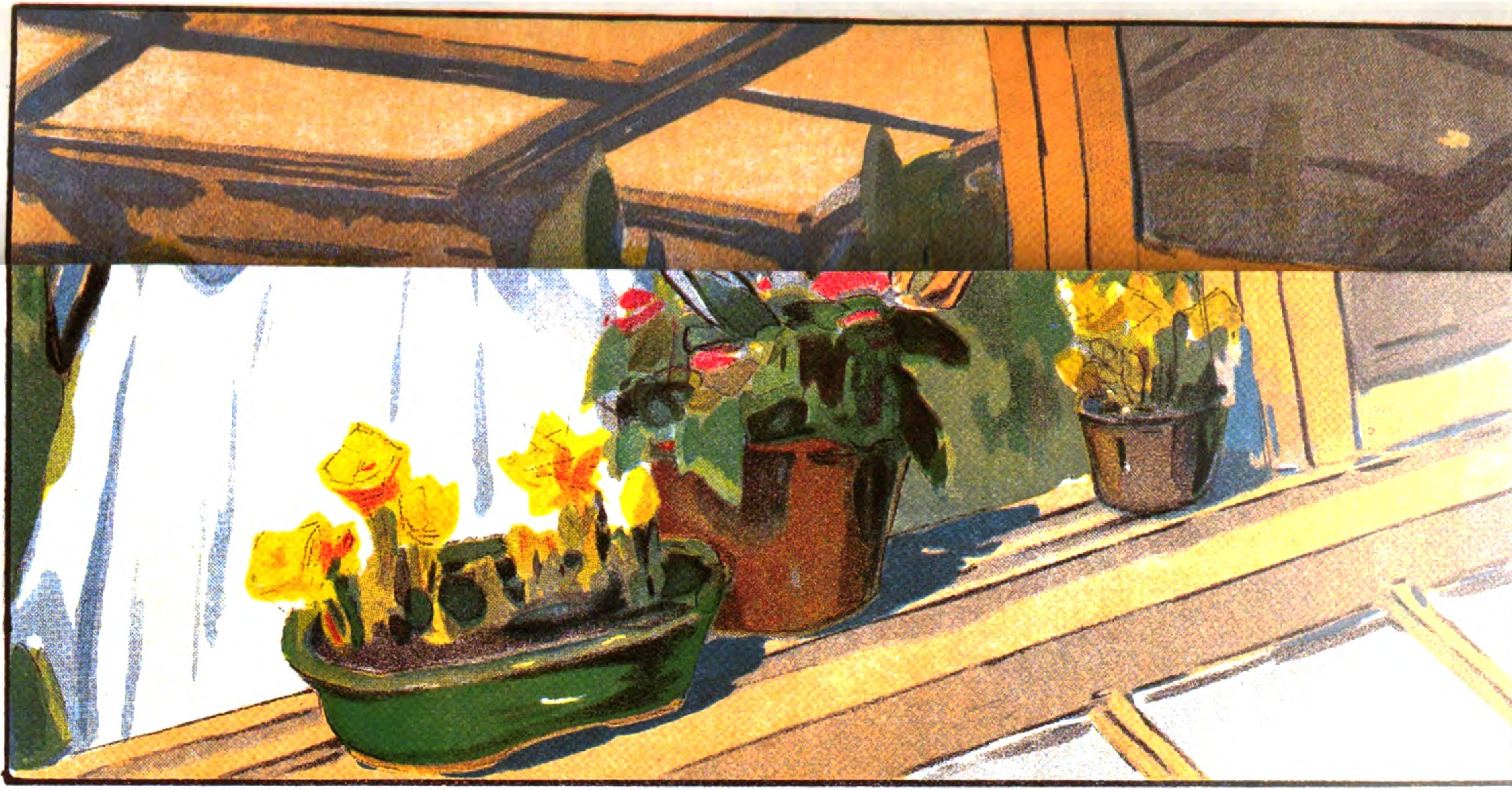


製造本舖 東京東兩國元町(兩國橋際) 壽美禮堂謹製 (電話浪花二七六五番)

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

(扉ノ四)

温室



女子文壇

石川寅治筆

東京麻布大江印刷所製

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

生涯の利益になる記事を滿載す

婦人世界

正月一日發刊 五卷第一號 價一冊拾五錢 郵税一錢五厘 一年分郵税共二圓五錢

▲何人も心得べき衞生知識 村井弦齋

■老父の車の後押をして働く孝行女敎師の話■四つ子を産んだ婦人訪問■何故に彼女を次男の嫁に選みしか 鳩山春子■戊年生れの婦人を訪ふ記

▼十二一重を着て三十年前に洋行せる話 下田歌子

▼良人の入獄には私斯くの如きことを敎へたり… 後藤遞相夫人 後藤和子

▼私が結婚式に伊藤公より受けし敎訓 大倉喜七

▲母親の乳と牛乳と交ぜて飲ませる注意…… 醫學博士 加藤照麿

▲百九歲の長壽を保てる戊年生れの老婆の話……中野きん子

▲女學校を卒業して新家庭を作りし實驗 海軍中尉夫人 御堀松代子

▼雪中を跣足であるき良人を助けて奮闘す 仲萬兵衞氏夫人 仲かぎ子

▼一代に七十萬圓の財産を造りし婦人 松本蔦子

▼熊本籠城中に女子を産んだ實驗 與倉鶴子

■二宮尊德先生に九年間仕へし老女を訪ふ記■縞の袴で通學した實驗談■將校夫人として御用商人の賄賂を斥けし話■十七人の子女を育てた話

▲美麗彩色新案明治婦人すご六 これ本誌獨得の新年大附錄

東京京橋南紺屋町 實業之日本社 (振替口座三二一六)

雪みち



(大江原色版製版印刷)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

本誌を讀まずして婦人は其天職を完ふし得る歟？

▼毎月一回▲

女學世界

▼一日發行▲

第十巻第一號（一月一日發行）　定價一冊……金二十錢　郵稅一冊（本邦）二錢五厘

◎卷頭の裝飾

▼蘭……（六色刷美麗石版畫）
▼新粧の佳人……（彩色石版畫）
▼春の別莊……（精妙なる原色版）
▼名家の令孃……（寫眞版數葉）

◎記事の概要

▽九重の奥……（兩陛下の御平生並びに宮中御賄ひの次第）
▽皇后陛下新春の御すさび……（宮中かるたの御遊び事）
▽上流社會の松の内……（格式を貴ぶ大家庭正月の慣例）
▽貴婦人の世間話……（日々變り行く世間に處する貴婦人の話）
▽歐洲貴婦人の社交談……（交際社會の大山公使夫人の實話）
▽名流婦人の日常生活……（江湖知名の婦人の趣味嗜好）

新年附錄
▼新撰婦人風俗双六……武内桂舟畫（極彩色美裝石版五色刷）

▽榮ゆる權門……（華族、富豪の榮えある家庭生活を描けるもの）
▽新時代の教育を受けたる奥樣の面影
▽大富豪の家庭……（小間使の目に映じたる富豪の生活を描寫せるもの）
▽令孃の春遊び……（女流天才の手になる令孃の正月日記）
▽各地正月物語……（新舊を比較せる各地方の正月風俗）
▽外交官夫人の資格……（表面には光榮あり、裏面には困難あり）
▽贅澤なる臺所ばなし
▽新婚の正月……（才情双絕の稱ある某夫人の新婚の日記）
▽正月行事の由來
▽都下各女學校の校風くらべ
▽別莊の春遊……（避寒地のあそび）
▽三都の娘風俗競べ

東京日本橋本町三丁目 ● 博文館 ● 振替口座東京二四〇

故山階宮妃常子殿下



東伏見宮妃周子殿下



定價一部金貳拾五錢　郵税貳錢 ◁

評論

梗概

研究

詩歌

小品

談話

藝術家と結婚

結婚が創作に及ぼす影響、結婚の可否利害、其他、最も興味ある吾人の聞かんと欲する問題なる藝術と結婚に就いて、親しく記者に語られたる藤村、天溪、泡鳴、孤蝶、有明、天外、瓊音、竹風、晩霞諸氏の談

紹介

評傳

雜錄

口繪

▼發兌元　東京市神田區旅籠町一ノ廿三　文光堂

▲（賣捌）全國各地雜誌書店にあり

名門の夫人



伯爵松平頼壽氏夫人



公爵鷹司熙通氏夫人

公爵德川家達氏令孃



向て（右）長女綾子、（中）綏子、（左）繁子のお三人さも學習院女學部御在學中（四十二年十一月七日御撮影）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大好評の英語雜誌

初等英語研究

愉快に英語の學べる唯一の初等英語雜誌として大歡迎を博しつゝある本誌は新年號より更に新發展を爲せり、光彩陸離、眞に是れ英語雜誌界の空前偉觀也（第三卷第一號一月一日發行本號に限り紙數七十二頁定價金拾錢）

▲英語地理學　新式英文法講義誰にも解し得

▲對譯詳註花咲爺　極めて平易に書き改めたるもの

▲帝國憲法英譯　獨案内式にして寫眞版挿入

▲巴里籠城の犬　趣味津々たる對譯西洋の實話

▲中等英語讀本研究　第二讀本の雜語雜文研究

▲商用英語　新設したるもの受取等の書き方

▲英國學生氣質　對譯註譯例に依りて親切を極む

▲英語の手紙（東京の御土產）

▲第三回懸賞試驗成績發表

▲三太黑主の行方▲日本の海軍▲讀本ひとり學び▲懸賞習字の手本▲食しんぼうの犬▲英語の並べ方▲懸賞事蹟の研究▲和文英譯の公式▲熟語の研究▲オウルドボイスソサエテ▲君の御年齢は▲新年會話▲作文研究▲茶目日記▲日記用語▲新聞の研究▲英語顧問等豐富なり

每月一回一日發行定價金六錢郵稅五厘
半ヶ年分郵稅共四拾錢一ヶ年分七拾錢

新年號の大發展!!!

第一讀本程度雜誌

初步英語

第七號　本號に限り金六錢

英語雜誌の中でこんなにやさしい、こんなに面白い雜誌は他にありません、發行以來非常の評判にて每號賣切れの盛況です、殊に新年號には從來と違つた新記事や例の精細無比の親切な講義が滿載してありますから、是非御一讀を願ひます、

每月二回一日十五日發行　一冊金三錢
六ヶ月十二冊郵稅共四十錢一ヶ年七十五錢

發行所　英語研究社
東京市麴町區富士見町六丁目
振替口座東京一八二三六番

海軍大尉一條實孝氏夫人

(公爵一條實輝卿長女經子)



文學法學博士加藤弘之男の家庭



（照麿氏夫人常子）　（加藤男爵）　（加藤照麿氏）　（男爵夫人）　（令孃雪子）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

見本進呈 つき規則

實用女學講義録

▲講習期一ヶ年半、此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講説し圓滿なる主婦を作る事を目的とす。

▲講義錄は每月二回發行とし講師は教育に經驗深き斯道專門の名家のみなり講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

會員募集 ◉新年と共に會務擴張＝此際至急入會者に限り入會金全免の特典あり

大日本國民中學會女子部

東京駿河臺 電話本局三千四番 同 三千七百七番

大日本國民中學會女學部編述

女子作文全書

▲菊版美装＝定價六十五錢＝郵送料八錢＝

女子に必須なる文章各體の作法を説けるものにて誰でも容易に活用し得らるる嶄新無比の作法なり殊に講述懇切にて文章平易なれば何人も難解の憂なし

▲女子には女子の特色がある、其文章亦女子の特色がなければならぬ。然るに近時の女子の作文を見るに殆ど男子と選ぶ所がない。之は困つた者である▲中には女子らしい文章を書く人があるが其れは昔の型に囚はれた、技巧澤山な、即ち虛禮と僞りの形容で固めたものを書いて立派な名文と思つてゐる。▲本書は此二點の矯正の爲めに出たもので、女子には女子らしい文章を書かせる。而も新しい時代に適するやう其作法と適切なる其文例とを示してある。

東京神田區駿河臺袋町

東京國民書院

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第貳拾八回年度報告

貸借對照表

借方

科目	金額
株金	貳、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
諸積立金	壹參四、四六參・參〇〇
預金及保信金	七貳、壹七五・六五壹
得意先勘定	參七、六壹壹・〇五〇
支拂手形	六六四、四七壹・參參〇
未拂金及借入金	五貳八、壹壹貳・〇八〇
前季繰越金	八、五九八・六九五
當期利益金	壹四貳、〇四〇・〇八壹
合計金	參、五八七、四七貳・壹八七

負債に屬する分

貸方

科目	金額
新株未拂込金	五〇〇、〇〇〇・〇〇〇
地所及建物	五七八、五四四・八七八
機械及什器	九四〇、五〇五・參壹參
石炭需用品備品	六參、八貳參・壹四五
原料、仕掛物、屑物	六四壹、五四四・貳七七
製品及製品送荷	五〇參、五八八・五壹〇
約定濟製品	參貳五、參〇八・五〇〇
職工貸金及假拂金	壹八、五九四・四七壹
銀行當座預及現金	壹參、〇六參・〇九參
有價證劵	貳、五〇〇・〇〇〇
合計金	參、五八七、四七貳・壹八七

資產に屬する分

損益計算

一金五拾九萬貳千七百〇六圓八拾九錢貳厘　總益金

一金四拾五萬〇六百六拾六圓八拾壹錢壹厘　總損金

差引金拾四萬貳千〇四拾圓八錢壹厘

内

金參萬圓也　建物及器械代償却

再差引

金拾壹萬貳千〇四拾圓八錢壹厘　當季純益金

金八千五百九拾八圓六拾九錢五厘　前季繰越利益金

計金拾貳〇萬六百卅八圓七拾七錢六厘

内

金壹萬貳千圓也　法定準備金

金壹萬壹千圓也　役員賞與金

金六萬圓也（舊株一株に付金二圓即年一割二分）　株主配當金

金三萬圓也（新株一株に付金一圓八十錢即年一割二分）　同上

金七千六百參拾八圓七十七錢六厘　次季へ繰越金

右之通り候也

明治四十二年十二月

東京モスリン紡織株式會社

取締役會長　杉村甚兵衛

專務取締役　端善次郎

取締役　山崎作次郎

右檢查候處相違無之候也

監查役　坂本金之助

監查役　人見新助

監查役　金子良吉

追て取締役監查役任期滿了に付改選の處取締役會長杉村甚兵衛專務取締役端善次郎の二氏再選重任尚山崎勝三郎杉村甚三郎靑木五兵衛の三氏取締役に新任又監查役に坂本金之助人見新助金子良吉の三氏再選重任せり

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

優美にして高尚穏健にして着實は本誌の特色

婦人画報

一月一日發行 正月卷二冊 廿五錢 郵税二錢 六冊税共壹圓拾五錢 十二冊税共二圓八拾八錢

書報

▼三皇孫殿下最近御眞影▼
▼各宮女王殿下最近御眞影▼
▼閑院宮三姫宮殿下と犬▼
▼武子女王殿下の御染筆▼
▼毛利公爵邸の妃殿下▼
▼宮中の女官と茶扱み▼
▼歐洲各國王子殿下▼
▼犬と令嬢……
▼日英博覽會出品の色々……
▼正月の遊び……
▼鼈甲は如斯して出來る……
▼松浦伯爵の名園……
▼女▼婦人倶樂部發會式當日の景況……
花の如き令嬢と新郎新婦……
▼其他十數葉の寫眞皆光彩燦爛

二大附錄▼新裝美人 島崎柳塢 戌の新春 中澤弘光▼何れも二頁大石版十數度刷

讀物

◎一般婦人に有たす可き健全なを思想 浮田博士
◎正月の儀式 石井泰次郎
◎朱に交りて朱に染まぬ婦人 中島德藏
◎寡婦の新年……國木田治子
◎新派歌人雪の歌 與謝野晶子
◎家庭の婦人が國家に及ぼす影響 一木內務次官
◎訪門日記 金子子爵夫人……
◎寶船 大町桂月
◎若き婦人は結婚の條件を公言せよ……宮田修
◎舊を忘れぬ我家の新年 三輪田眞佐子
◎新春を迎へて思ひ出る事ども……跡見花蹊
◎樣々なる婦人の正月
◎屠蘇と雜魚
◎正月の衛生
◎小說……大塚楠緒子 長谷川時雨
◎小松原文相夫人と後藤遞相夫人の實驗談は誌上を飾る花……

東京飯田町四の四 東京社 電話番町二三三九

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新聞雑誌と博進社

間斷なく一定の用紙を多額に使用せらるゝ新聞社、又は雑誌社各位が、最も深く信頼し得る理想の洋紙商は、其の規模最も宏大にして、常に内外各種の洋紙を無盡藏に供給し得るの設備を有し、兼て多年の經驗と信用を有するものたらざるべからず

博進社洋紙店は内外洋紙の大販賣者として、既に久しく確實なる江湖の信頼を辱くし、今や一流の新聞社を始め各社、各會各倶樂部の定期出版雑誌を始め、概ゆる社會的、娯樂的の新聞雑誌等殆ど博進社の洋紙に印刷せられざるものなきに到れり、今一例として其の重なる新聞雑誌を擧ぐれば

萬朝報　東京朝日新聞　二六新報　やまと新聞　中央新聞　中外商業新報　毎夕新聞　大阪毎日新聞　大阪時事新報　大阪新報　大阪日報　京都新聞

京華日報　神戸新聞　横濱毎朝新聞　千葉新聞　東海新聞　兩野新聞　下野新報　河北新聞　東北新聞　岩手毎日新聞　岩手公論　岩手日報

長野新聞　北越新報　山陽新報　中國民報　高知新聞　香川新報　愛媛新報　九州日日新聞　鹿兒島新聞　小樽新聞　沖繩毎日新聞　函館日日新報

臺灣新聞　京城日報　朝鮮新報　太陽　太平洋　實業少年　冒險世界　文藝倶樂部　女學世界　中學世界　文章世界　英語世界

數學世界　農業世界　少女世界　少年世界　幼年畫報　婦人世界　日本少年　少女之友　幼年之友　少女界　少年界　婦人界

歴史地理　早稻田文學　商業界　教育學術界　小學校　理學界　中學文壇　演藝畫報　新[illegible]　家庭新聞　ムラサキ　東京パック

グラヒツク　市町村雜誌　サンデー　無名通信　建築世界　女子文壇　少女　婦人倶樂部　早稻田大學講義錄　法政大學講義錄　國民中學講義錄　愛國婦人

日本及日本人　教育實驗界　秀才文壇　少年の友　家庭　醫學中央雜誌　醫事月報　醫事新報

（順序不同）

博進社の希望は、廣く世の新聞雑誌經營者の補助機關として聊か文運の進轉を謀らんとするに在り、其の取引は確實敏活にして、其の信用は次第に増加しつゝあり

洋紙類の時價は雑誌『紙の世界』へ毎號掲載致し候間御入用の方は御申込次第送呈可仕候

東京市神田區錦町一丁目
博進社洋紙店
電話本局（特長四九〇）（一六〇三）（二四一〇）

大阪市東區瓦町二丁目
博進社支店
電話東（長四四五）（一〇五八）

子爵金子堅太郎氏令孃清子



室外の利樂



（遞信次官仲小路廉氏の家族庭園に於ける撮影）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

明星

見よ明星を！聴け自由濶歩の叫びを!!

明星新年號（貳巻第一號）

本號執筆大家

評論　詩　短歌

島村抱月
松原至文
小川未明
人見東明
大中天人
福田有咲
加藤介春
今井白楊
三富朽葉
野口雨情
前田夕暮
兒玉花外
蘆谷蘆村

散文　小說（人焼く烟）ゴルキイ　繪畫　未定

山本蘆葉
水野葉舟
白柳秀湖
木下尚江
名なし草
金子新太郎
竹久夢二
立田弘

以上諸氏の外森川葵村氏大橋玄洋氏佐々木繁氏等總て二十五名家の執筆あり

大懸賞投書募集あり、本紙參照

頁數二百頁　定價貳拾錢郵稅二錢

發行所　明星會
東京日本橋區蠣売町一丁目四番地
電浪（二九〇一番）

讀め二十五名家集を！聴け我が革明の歌を!!

△アイボリー石鹼は萬國浮石鹼の嚆矢なり



△アイボリー石鹼は品質を本位とて體裁の贅費を除く

●新案特許一〇三六二號 衛生的なる改良かもじ發賣●

一丸髷十五錢より七十五錢迄 ●島田髷三十錢より壹圓五拾錢迄 ●銀杏髷廿錢より六十錢迄 ●送料各八錢



本品の特長

一 根元にコロップを装置せるにより舊式のものゝ如く硬からず膚ざわりも軟かなり
二 皮膚を摩擦すること少なきゆゑ頭のはげる憂なし
三 頭痛ある婦人に用ひて爽快を覺えしむ
四 二百度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髮の傳染病を媒介するの憂なし

東京市神田區豐島町十七番地

●諸かもじ製造販賣（振替口座東京一八一八八番）田中金三郎

特約 京橋大西白牡丹・本郷緑屋・淺草駒形百助・淺草駒形紅勘・神田須田町三井屋・日本橋通二櫻屋・外到處の小間物化粧品店に有

村井弦齋先生御證明最良髮油

みやけ油及みやけ香油

みやけ油



東京人形町通三宅堂本舗

定價表

特大	八拾五錢
大	四拾五錢
中	貳拾五錢
小	拾五錢

右送料各拾二錢

代理店 女子文壇用達部

精良品にして舶來品に優る。偽物四方に顯はれたり東京發賣本舗名と商標に御注意。近時大阪みやけと稱し劣等の偽物を販賣する者あり欺るゝ勿れ

販賣所 化粧品商、小間物屋、藥屋、等到る處にあり

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

「夢二式の女」を知らざる青年ありや。「夢二式の眼」を知らざる處女ありや。よしさらば。君よ！夢二畫集を繙け。描かれたる少女に、君は、芳烈なる近代的色彩を見む。輝けるその眼に、咽ぶ花のやうなるチャームを感ぜむ。



◁定價五十錢郵稅八錢▷

著者は、その畫集のはじめに誌して曰へり……十六の春、私は都會へ出た。その頃私は畫工になるつもりではありませぬでした。朱欄長廊の高閣に世の榮華を極めたいとばかりおもふて居た。けれど、都會に於ける漂浪生活の習慣は、私をして何時しか群集に交るとをすら恥ぢるやうにして終つた。白堊高き銀座の街を、伏目勝に歩みながら波うつ胸を抱いて革命、自由、漂泊、自殺等の奔放なる歌を低唱して居た。河野君が、あの赤いジヤケツを着てプレートに立つて球を投げて居た頃でした。私は學校をエスケープしては、運動場の花草のうへに寢轉んで、早稻田に連らなる目白一帶の高原を眺めて、色深い空に漂ふ白雲に、どんなに遠き思をよせたことか。私は詩人になりたいとおもつたけれど、私の詩稿はパンの代りにはなりませぬでした。ある時、私は文學の代りに繪の形式で詩を書いて見た

發行所　東京市麴町區麴町二丁目九　洛陽堂

大賣捌所　東京堂・上田屋・北隆館・東海堂・至誠堂
淺見文林堂・大塚太洋堂《其他全國各書林》

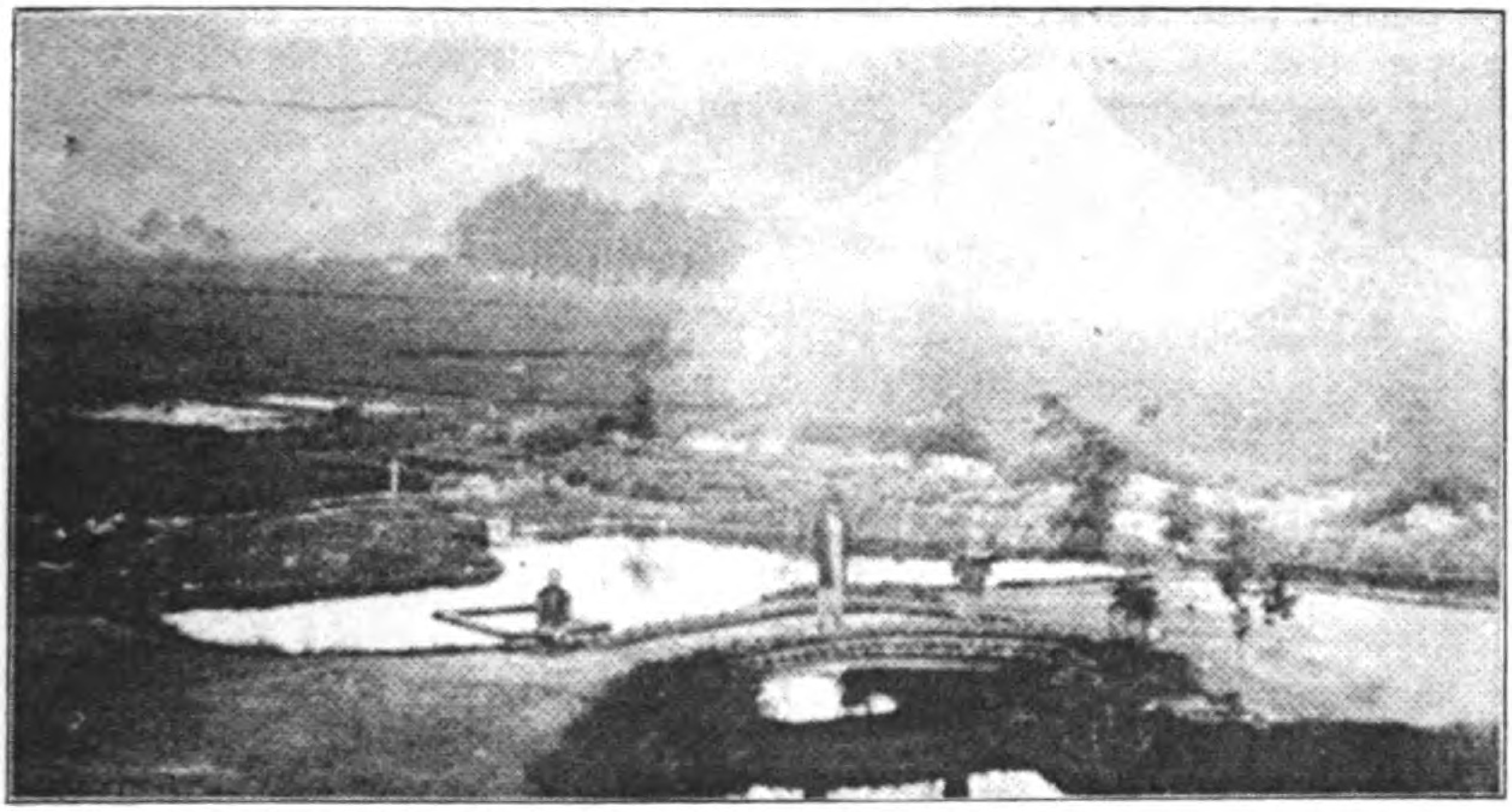
跡見玉枝女史と其門下



（デュア玉蕉）　（デュア玉秋）　（デュア玉純）

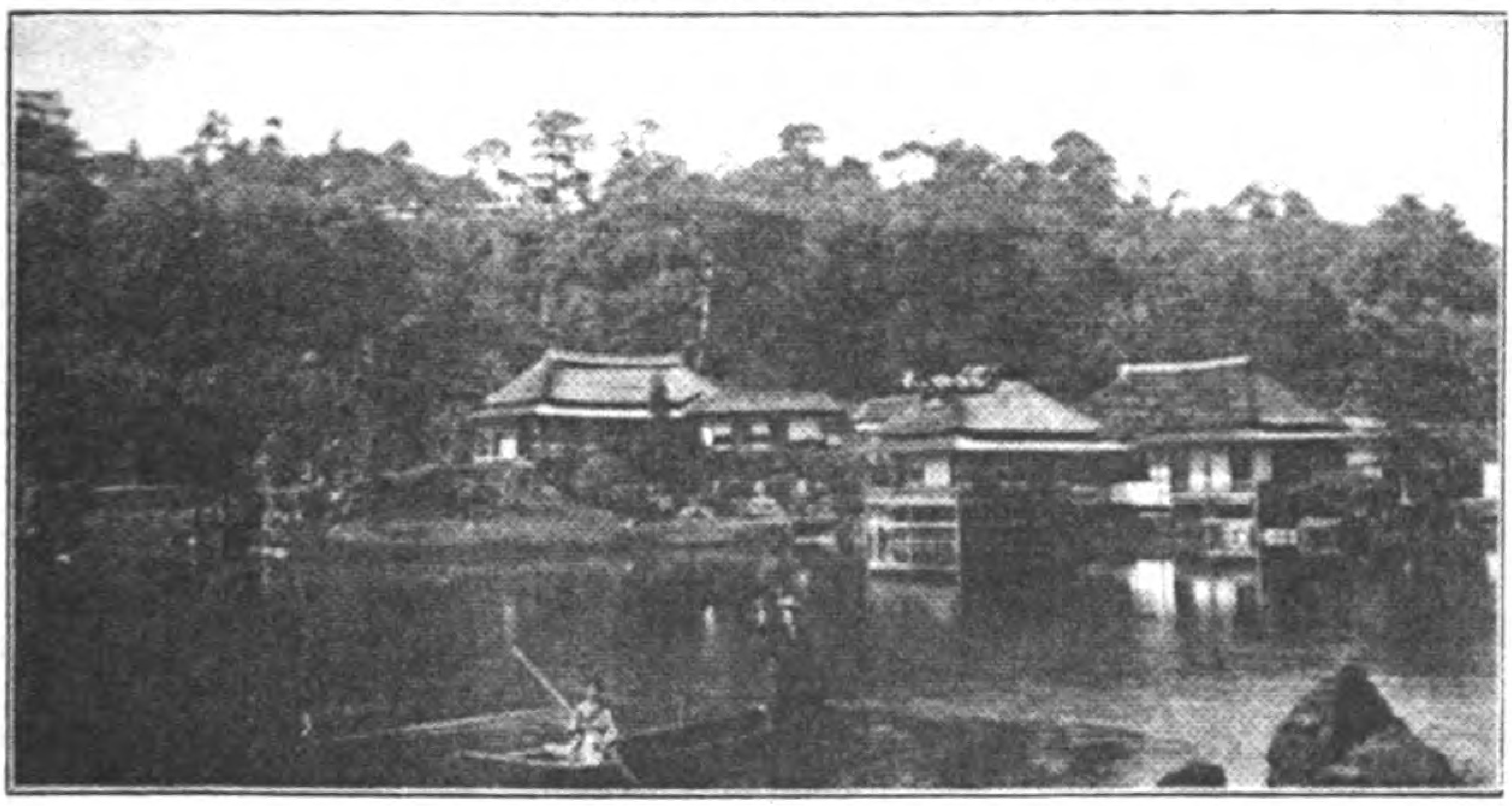
（跡見玉香）　（跡見玉枝女史）　（バルトン玉友）　（中島玉蕙）

鳥海山



（秋田 紅雲子寄）

彦根城内八景亭



（滋賀縣 佐和田よし子寄）

粂路橋



（長野縣 安坂富美子寄）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子技藝研究會長 梶山彬先生著

造花術新書
大和綴菊版頗美本
花葉形切圖二百餘圖挿入
金五十錢
全一冊 送料八錢

刺繍術新書
大和綴菊版頗美本
圖接及雛形圖百五十餘挿入全一冊
金五十錢送料八錢

花たば新書
大和綴菊版頗美本
花葉形切圖百餘たばね方書九枚挿入
金五十錢送料八錢

摘み製作新書
大和綴菊版頗美本
切形及配置圖百三十四箇挿入全一冊
金五十錢送料八錢

袋物製作新書
大和綴菊判頗美本
圖接及説明圖百六十餘挿入全一冊
金五十錢送料八錢

初春手にせらるゝものは玆にあり

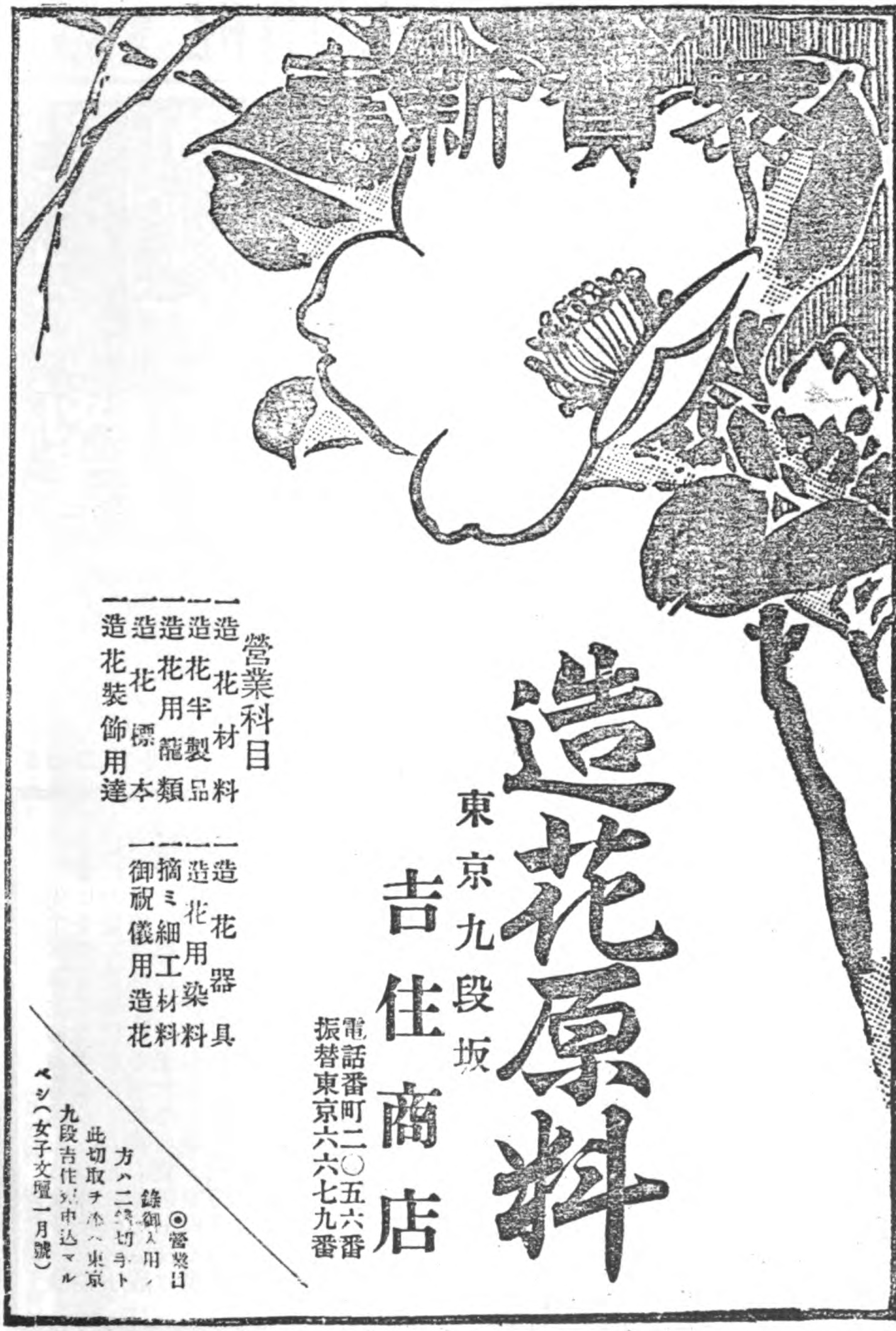
裁縫新書
大和綴菊版頗美本
積り方仕立方説明圖百餘挿入全一冊
金五十錢送料八錢

編物新書
大和綴菊版頗美本
圖接及雛形圖百二十餘挿入全一冊
金五十錢送料八錢

梶山先生が畢生の大著述たる女子技藝叢書は全國高等女學校及び同程度女學校は勿論一般獨習者より女子技藝書中最も實際に適し他の參考書の如く空理空論など無しにて絕大なる歡迎を受け殊に造花術新書の如きは版を重ぬる事既に九回一萬八千餘部は一般讀者の手に歸したのてある其他版を重ねざるは一として無し、されば内容は當時斯界第一にして他に比類無きは喋々するに及ばず、女學校敎員にて此書を手にせざる人なかるべく生徒にて繙かざるもの少なかるべし若し繙かざる人あらば明日と云はず今日只今最寄の書店或は直接弊堂へ御註文下さい寸暇も品切等の恐なし、獨學者及び一般家庭に本書を備へ給へば趣味ある技藝の蘊奥と多大なる利益とを合せて得らるべし、御註文の場合に二冊以上なる時は送料を割引致します。

東京市京橋區
南槇町十八番地
廣文堂書店
振替貯金東京
第四六八四四番

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



謹賀新年

書籍及雜誌

地方販賣部

諸學校教科書及内外各種圖書雜誌類は何れの發行に不拘版元と特約し價格は低廉發送は敏速に御便利を旨とし御小賣共手廣く取次發賣候間續々御注文希上候

御送金便法

振替口座は東京二七〇番に候間御送金の際は最寄りの郵便局に就き御承合御拂込被下候へば安全に着金し速に送本もでき至極簡便なる無料送金方に御座候

書籍陳列場

讀書家諸彦の御便利を計り圖書雜誌は汎く蒐集陳列し殊に新刊物は日々迅速に取寄せ低廉に勉强販賣仕候間最寄りへ御通行の際は御觀覧陸續御愛顧願上候

委托販賣部

書籍雜誌發行の諸賢より其一手販賣方を弊堂へ御委托に相成候へば獨特の擴張法を以て販路務勉仕候間御發行前に御申込被下度萬事御便利に御相談可仕候

女子文壇特約賣捌所

東京市神田區表神保町三番地

東京堂書店

電話本局一二三同二四八同二五五二
振替口座東京二七〇 電略詠〇ト

圖書切手調進仕候

恭賀新年

圖書出版
書籍雜誌卸専門
女子文壇特約販賣所

東海堂

東京市京橋區尾張町二丁目
電話新橋二〇一五 三四三五
電信略號荷印[illegible]
振替貯金八六七

最新刊

法學博士中村進午君
早稲田大學講師井上忻治君 著
法學博士副島義一君序

獨和法學大辭典 全壹冊

背、角、革、釘裝極美、四六版千百五十頁
定價四圓五十錢
二千部限り特價金參圓八十錢
送費内地十六錢臺清韓四十錢

肥滿病の人に告ぐ

多血症●脂肪過多●中氣●酒ぶとりにて御困りの方へ害なくやせて中肉美容となる奇藥あり郵券三錢封入申越あれ詳報す

●東京市小石川第六天町十七番地　池田製藥部

色を白くし

皮膚を美麗にする新藥發見す諸藥を試み効なき人一度使用あれ郵券三錢送れ説明書送呈す

●東京市深川區森下町二三　成功堂

洋畫講義錄

水彩畫を始め油畫木炭畫肖像畫ペン畫等を頗る詳細に講述す毎號美麗なる挿畫頗る多くあり

繪畫講習錄

日本畫の技術と學科とを平易懇切に教授し初學者と雖忽ち上達せしむ毎號着色繪畫多し

當代一流大家數十名執筆、會費各二十?錢、壹ケ年卒業、規則無料進呈

東京市麻布區飯倉四丁目　大日本繪畫講習會

洋畫材料品總目錄　無代進呈

百餘箇の精密なる圖を挿入したる詳細目錄は御一報次第郵税を要せず無料進呈す可し好畫家必携の好冊子也

乳の出ぬ人

及少き人は返信切手封入御問合せあれ必ず一人の子を養に充分な乳の出療法御知せ致升　京橋山下町森田豐子

代々家傳の妙藥
經通丸
月やく樂

調劑元　東京市丸の内

本劑は代々家傳の妙藥にて如何なる難澁の月經滯りも胃腸子宮等を痛めず安々と通じ輕症なるは其夜にあること請合也他藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ定價廿五錢五十錢一圓特製二圓但小包送を望まるゝ方は八錢を要す

有樂町二ノ二　江戸屋



妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀　河村愛子

(とノ四)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

謹賀新年

新築移轉

新年と共に左記の處へ新築移轉仕候今後益々御賣勉勵擴張可仕候間不相變御引立の程願上候

女子文壇
特約販賣所

東京市京橋區元數寄屋町三丁目七番地

北隆館書店

電話新橋一七八九
振替貯金口座七七五〇

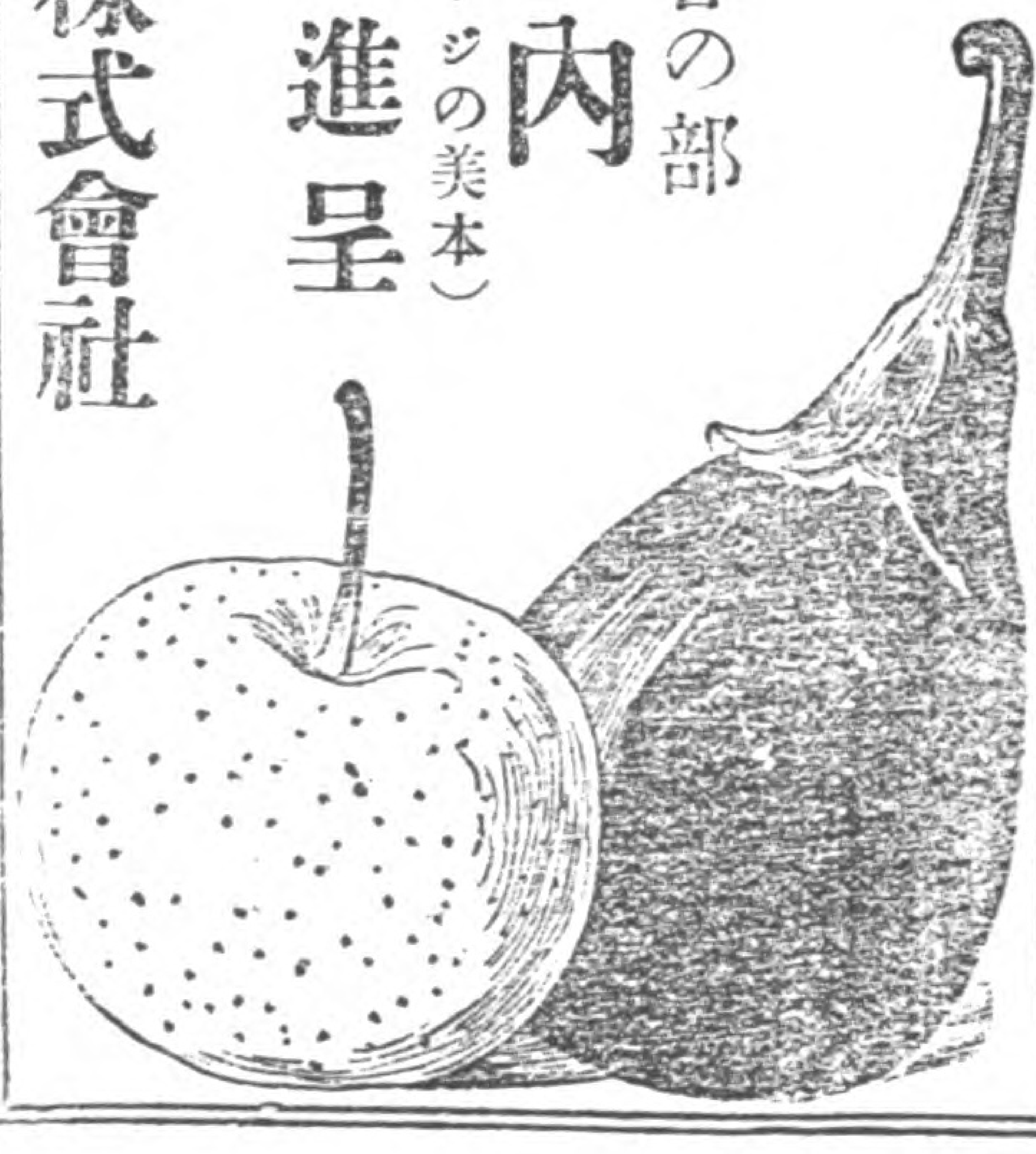


農產林產種子
果樹用材苗木
庭樹苗盆栽類
草花種子球根
種禽種畜農具農書

資本金七拾萬圓
東京內藤新宿電車終點際
電話番町一八一六番

明治四十三年春の部
營業案內
（壽入大版八十ページの美本）
ハガキにて御申込次第
無代進呈

日本種苗株式會社



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

石版
三色版
寫眞版
コロタイプ版
活版
凸凹版

製版
印刷

不鮮明に製版して劣等なる繪畫寫眞の類を挿入するは寧ろ無きに如かず、挿入するならば宜しく『秀才文壇』の如く美術的に且鮮麗なる製版印刷を要す

大江印刷所

東京市麻布區笄町八十一番地

電話芝四百六番

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

謹賀新年

活版、石版
凸版、木版
寫眞版
電氣版
諸版印刷
活字鑄造
各種製本

株式會社 秀英舍
電話 新橋一八番 新橋三九四六番 新橋二三五二番

同第一工場
電話 番町一九番 番町五六七番

鑄造部 製文堂
電話新橋一一三二番

石版部 泰錦堂
電話新橋二二七一番

（とメ八）

盛裝



（東京）高坂せい子孃



（德島縣）西野花菱孃　みのろ孃



（酒田）白畠折枝子孃

誌友



（東京）人見千代子嬢



（廣島）手島政子嬢



（信濃）下枝義子嬢



（京都）町田てる子嬢



（筑前）中西まさ子嬢



（高田）根岸光子嬢



（臼杵）吉田散花嬢

（誌友の諸嬢子に申す最近の寫眞お貸し下さい掲出の後返します）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

小杉天外作

小說 草笛

寫實主義の完成者自然主義の最初の唱導者が十八年間の勞作中より得意の篇を拔いて此の草笛は成れり

全一冊菊判
總クロース
金緣箱入
廣瀨尋常飯澤天羊二青年畫家意匠
最新式美裝
紙數六百九十頁
正價金貳圓
送料十二錢

後藤宙外作

小說 冷涙

現代青年の胸中の秘密を曝露せる作也、現代中年者の戀と活動と涙と惝怳とを描破せる作也、中年婦人の自負と弱點と若き女子の甘夢と苦鬪とを具象化せる作也、

全一冊菊判
美裝鰭崎英朋君意匠
紙數四百頁
正價金八拾錢
小包料八錢

小杉天外作 寫實小說 **コブシ** 菊版全三冊紙數千二百頁前篇七版中篇五版後篇三版クロース美裝正價每篇壹圓宛送料各十二錢

昇曙夢譯 露國名著 **白夜集** 菊版全一冊紙數二白八十頁クロースゴリキイ式美裝正價金壹圓小包料八錢

發行所 東京市日本橋區箔屋町四拾番地 **章光閣** （長電話本局二〇八五番振替口座竹澤章五八九貳番）

（ちノ二）

好評嘖々……殘本僅少速に申込あれ

今の女を知らんと欲する者は此一冊を繙け

家庭日記

◎女子文壇第四增刊要目　十一月十五日發兌

▲お七夜の赤飯と棟上の餅拾ひ
▲草生水日記
▲初めて丸髷に結ふ
▲大呉服店のバーゲンデー
▲憚る處なき女學生の境遇
▲開放したる心の扉
▲晴れの日が近くなる
▲同じ女と生れながら陰と日向の違つた身上
▲未來の博士達の爲に
▲舞臺に出づる迄と、出たる後

▲大地震當時の虎嫗村
▲母に氣を附られて日記を試む
▲新しい書室と新しい少女
▲家事のひま〳〵に讀むツルゲネーフ
▲診察室の三日間　▲引越の日
▲學生時代より家庭時代に移らんとする薄き愁　▲都會生活の一面
▲ある朝、ある午後、ある夜
▲二三日の間に定まる運命
▲猫の線入　▲一生懸命になれ
▲胸圖に遮れて大人びて行く
▲不思議の早起　▲和洋の御馳走
▲夫の愛を疑ふ若き妻のやるせなき思ひ
▲スヰートホーム
▲思ふ儘なる別莊住居　▲出產の日
▲田舍廻りの似而非講師　(以上日記文)

附錄
最近の日記

三宅花圃女史　長谷川時雨女史
大塚楠緒子女史　國木田治子女史
與謝野晶子女史　尾島菊子女史
岡田八千代女史　荒川澄子女史

和歌・・▲鉛筆▲潮▲夜・・▲湯殿の姿見▲お目・・▲壓倒▲門・・▲雨
の室▲戀▲自然美文見へ▲雪降るまで小説の柳▲手紙書簡文
につけ風につけ▲切なる胸新論文・・▲今の女▲妾が心の詩・▲月光俳句・
を姉様へ▲お花の先生へ告白▲母のつとめの下

◎定價金貳拾錢　郵税壹錢五厘
頁二百三十　挿畫澤山　當選作家　肖像密刷

發行所　東京京橋區大鋸町　女子文壇社　(振替壹七九貳)　賣捌　全國雜誌各店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

作文之最良材

女子文壇社編輯局編

女子懸賞文集 第二

◎中判五百頁　特賣價金貳拾錢　郵稅六錢

（各本價なれと賣り切る少は絕す）

懸賞文集 文壇の光

◎大判二百四十頁　特賣價金拾錢　郵稅一錢五厘

世に作文書多しと雖も、妙齡花の如き少女の手に成りし生きかる作文作歌の良書は此等を推して其優なるものとす、女子平生の心掛として優しき文章を學ばんと欲する者は來りて本書に親しめ、新時代の新文藝に接觸せんと欲するものも亦本書を繙け、此の如く廉價に此の如く容易に、作文作歌の道に入るの法は殆んど他になし、敢て之を提供す

東宮侍講本居豐穎先生題詠、文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題狀　國學院學士小森松風君編

美文作法

◎大判二百卅頁　特賣價金貳拾錢　郵稅四錢

美文の作り方を最も明瞭に解說し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば、文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

殘本僅少賣切れると絕版す

報知新聞記者
中村木公君著

實地精査
女子遊學便覽

女學校長眞寫肖像入

特賣價拾五錢　郵稅四錢

殘本僅少賣切れると絕版す

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸孃も之を讀め、一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

東京市京橋區大鋸町十二番地　女子文壇社出版　（振替口座東京第壹七貳九番）　賣捌全國書店

(ちノ六)

恭賀新年

併而讀者諸君之祈健康

女子文壇社主 野口竹次郎

野口貫一
野口金藏
野口龍吉
野口善策

女子文壇主筆 河井醉茗
少女主筆 溝口白羊

一色醒川
小野喜一
大脇愁人
藤木九三
寺田芳子
松永和吉

外一同

磯萍水
羽仁もと子
星野久成
小栗風葉
河井道子
片山春帆
與謝野晶子
横瀬夜雨

竹久夢二
內藤鳴雪
中村枯林
山中古洞
北畠孝夫
水野葉舟
宮崎與平
三隅禎三郎
上代八雲女

村井弦齋著

増補註釋 食道樂

●本書の附錄は從來の米料理百種、パン料理五十種、病人料理百五十種、日用食品分拆表、食器食品價格表等の外新に料理心得の歌百種を加へ申候●臺所に此書を備へざるは文明の家庭にあらずと申す者も有之候●嫁入道具の中には必ず此書無かるべからず、故に婚禮の祝物として最も適當に御座候●病人の見舞に此書を贈らば何よりの慰藉と相成可申候●此書出てゝより天下の家庭料理は面目を一新するの氣運と相成申候、兎も角も一冊を家庭にお備へあらば永久の御利益と相成可申候

春の卷 夏の卷 秋の卷 冬の卷

合本 正價金貳圓 郵税金十八錢 全臺灣清韓金卅五錢

増補註釋 食道樂續篇

春の卷には野菜料理百種、夏の卷には果物料理百種、秋の卷には魚料理百種、冬の卷には肉料理百種の附錄あり

春の卷 夏の卷 秋の卷 冬の卷

各冊 正價八十錢 郵税十二錢 同臺灣清韓三十錢

増補訂正 台所重寶記

正價金壹圓 郵税金拾貳錢 全臺灣清韓金三十錢

●臺所の衛生●臺所の心得●臺所の禁制五十條●臺所の器具●器具の磨き方●掃除の仕方●シミ拔きの法●洗濯の法●諸器の貯藏法●魚類肉類の手輕料理●野菜と菓物の効能及料理●漬物の諸國の名物●臭氣除けの法●害蟲除けの法●水と氷の使ひ方●牛乳味噌等の扱ひ方●漬物の心得●米の擇り方●飯の炊き方等三百餘項あり總て臺所に必要なる智識此中に備はらざる事無し

◎著者の自序に曰く此書の記事は盡く我が家庭の實驗する處にして余は飽く迄も世人に親切ならん事を期すと然り此の如く讀者に忠實なる書は世に多く得易からず

發賣所 東京市麹町區有樂町 報知社出版部 東京市銀座大通新橋際 振替貯金二〇〇番 新橋堂書店



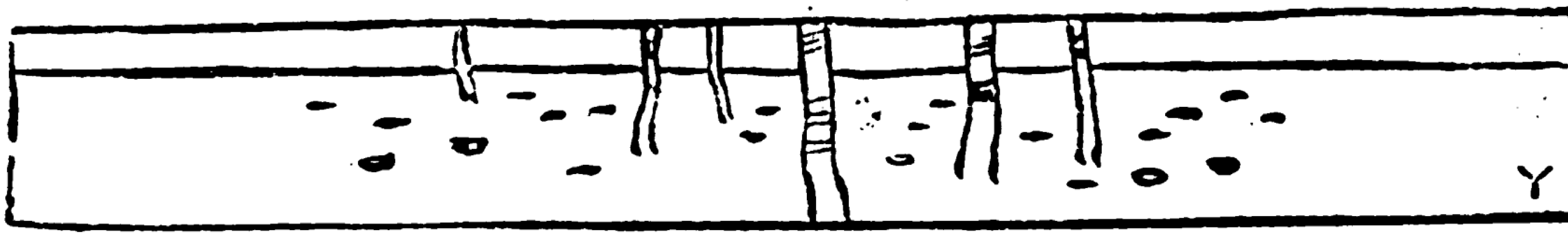
第六年第壹號

明治四十三年一月一日發行

滿五週年！

女子文壇の創めて世に出てたるは、去る明治三十八年一月一日にして、爾來歳を閲すること五、册を重ぬること七十有八册、此紙數約壹萬頁なり。量に於て吾等の爲し得たる處は、數字の示すが如く明確なれど、無形の感化に至りては、吾等の知らんと欲して到底知る能はざる處なり。斯の測り知るべからざる感化を懷へば、吾等の態度は更に愼重なるを要す、想ふに現在の女性は時代と共に動搖して已まざらんとす、此際、女性を中心として文學を標榜する本誌は、文學が人生と密接すればする程、誠實の心を以て永久に若き女子の味方たるべし。

明治四十三年元旦　記者



松の葉

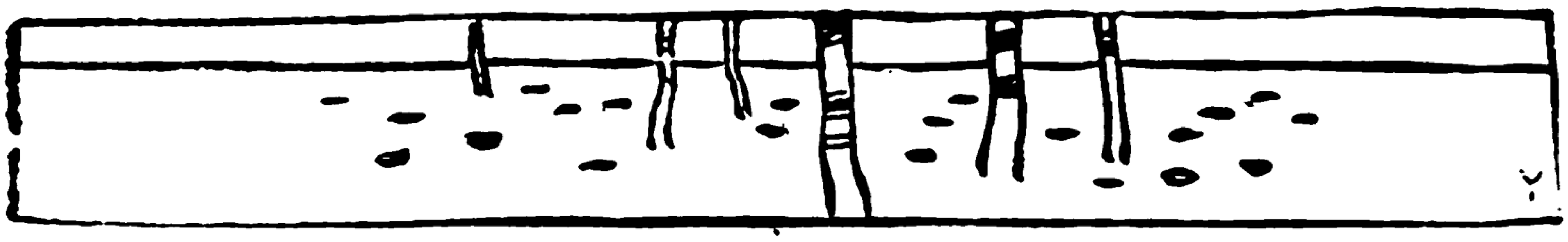
泉鏡花

第一

「團子が貰ひたいね、餡のばかり、」

と根岸の芋坂の團子屋の屋臺へ立つた。……其の近所に用達があつた歸りがけ、時分時だつたから、笹の雪へ入つて、午飯を澄ますと、腹は出來たり、一合の酒が能く利いて、ふら／＼する。……今日は歸りがけに西片町の親類へ一寸寄らうと云ふつもり。坂本から電車にしやうと、一度、御行の松の方へ歩行きかけたが、以前、おまじなひ横町と云つた處、近頃は其處に住居のある、絵かきのお孃さんが名高いので百合横町と、鹿の子、紅、笹島、姫なんどが盛のやうな美しい名を着けた。其の綿屋の前を通過ぎて、小さな道具屋の店に、火鉢、塗箱、茶碗、花活、盃、欝金の切の上に古い茶碗、柱にふらりと白い佛子の掛つた中に、懸地が四五幅、大分古いのがあるのを視めて、――こゝ等には一組ぐらゐありさうな――草双紙でないと自分には用はないが、二本榎の陸奥守に見せたいな、と思ひながら、フト考えたのは此の芋坂のお團子で。――これから出掛ける西片町には、友染のふつくりした、人形のやうなのが二人ある、それへ土産にと思つたのである。

名物と豫て聞く、……前にも一度、神田の叔父御と、天王寺を、其の時は芋坂の方から來て、今戸の邊へ廻る途中を、あの團子屋て憩んだ事がある、が、最う七八年にもならう。――親と親との許嫁



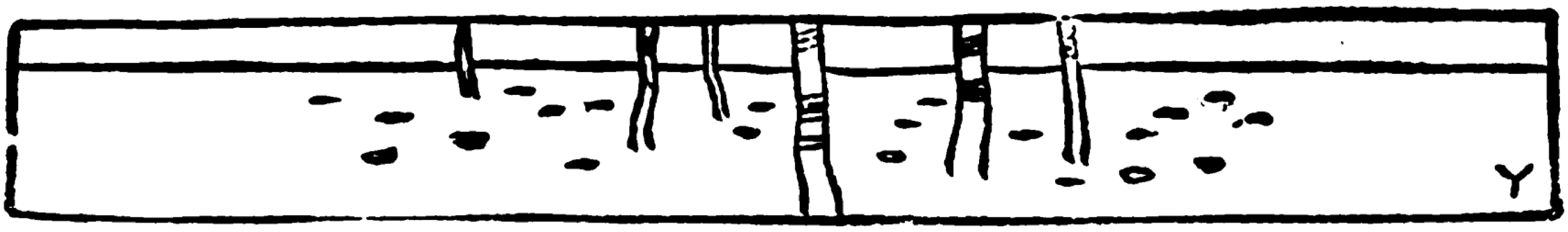
ても、十年近く双方不沙汰と成ると、一寸様子が分り兼ねる、況や叔父と甥とて腰掛けた團子屋であるから、本郷に住んで藤村の買物をするやうな譯にはゆかぬ。

第一芋坂が確てない。何處を何う行くのだつけ、あやふやなものだけれども、日和は可、風も凪ぎ、小川の水ものんどりとして、小橋際に散ばつた大根の葉にも、ほか〳〵と日が當る。足にまかせて行け、行年三十有何歳にして、團子を買ふに、天下何の恐るゝ處かこれあらむと、可い機嫌。て、人通りは少し、日向の眞中を憚る處もなく、何しろ、御院殿の方へ眞直だ、とのんきに歩行き出す。

笹の雪の前を通返して、此の微醉の心持、八杯と腹に積つた其の笹の雪も、颯と溶けて、胸に聊かの滯もない、たぶればたぶるほど結構な酒が一合、海苔に香の物に玉のやうな御飯を添へて、此の代數へて二十四錢は廉い。あゝ、妙なるかな帳場のかみさん、と其となく謝意を表して過ぐる。

やがて、とろ〳〵の目元を、横合から萠黄の色が、蒼空の其より濃く、ちらりと遮つたのがある。蓋し古樹の額形の看板に刻んだ文字の色て。店を覗くと煮山椒を賣る、これも御存じの土地の名物てある。

と通がゝりに見た。此の山椒を、近頃、同じ此の邊に住はるゝ、上野の美術學校の出の少い人から手土産に貰つた。尚ほ其の人が、嘗て修學旅行をした時、奈良の然る尼寺の尼さんに三躰授けられたと云ふ、其の中から一躰私に分けられた阿羅漢の像がある。般若湯を少しばかり、幸ひ腥を口にせぬ場合て、思出すに丁ど可い。容姿端麗、遠く藤原氏時代の木彫だと聞くが、細い指の尖まで聊も欠け損じた處がない、すらりとした立像の、其の法衣の色が、乃し瞳に映つた其の萠黄なのてある。ほ



んのりとして、床しく薄いが、夜などは燈に御目ざしも黒く清しく、法衣の色がまさ〳〵と在すが如く幽に濃い。立袈裟は黑の地に、摸樣は私などには分らぬが、胡粉と紅との極彩色、毛よりも細く斜に置いた、切込みの黄金の箔が、つらりと光つて晃々する。

つと其の姿を思つた。

燒芋屋の前に床几を出して、日向ぼつこをして居る婆さんがあつた。

店の竈の上て、笊の目を透すまて、あか〳〵と日のさした處は、燒芋屋としては威嚴に乏しい。あれは破れるほどな寒い晩に、ぱつといきれが立つに限る。て、白晝の燒芋屋は、呉竹の里に物寂しい。が、としよりの爲には此の暖な日和を祝する。

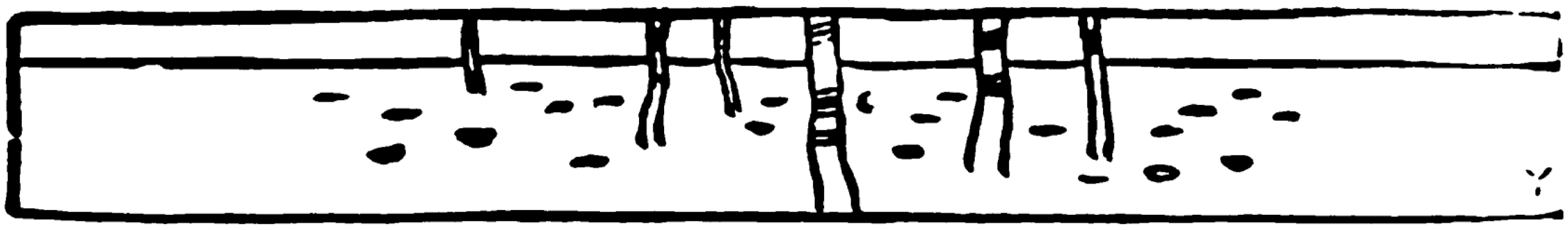
「お婆さん、芋坂へ參るのは、」

「直き其の突當りを曲つた處てございますよ。」

と布子の半纏の皺を伸ばして、長閑さうに敎へてくれる。

第二

其を、四五軒行つた向ふ側に、巾の廣い橋を前にして、木戸に貸家札とした二階家があつた。四五本曲んだり倒れたりだけれども、竹垣を根岸流に取まはした、木戸の内には、梅の樹の枝振りの可いのもあるし、何庭から散つたか、橋の上に柳の枯葉も風情がある……が、川も此の邊は最う大溝で、泥が高く、水が細い。剩へ、棒切、竹の皮などが、ぐしや〳〵と支えて、明屋の前は殊更に其の流も淀む。實や、人住んて烟壁を洩るて、……誰も居らないと成ると、南向きながら、日ざしも淡い。



起すとすれば話には成らぬ。‥‥

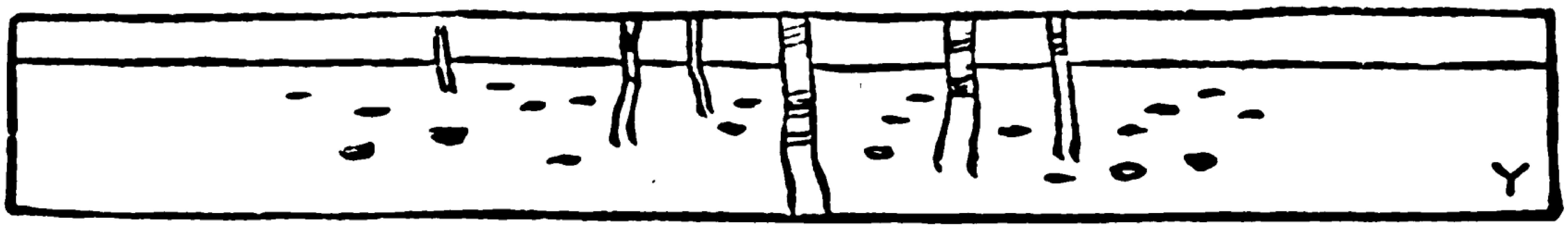
入つて見やう‥‥今前途を聞いたのに、道草をするは、と氣がさして、燒芋屋の前を振返ると、私に教へた時、見返つたを其のまゝに、外を向いてこくり〱と然も睡とさうな懐手の居睡りする。後生樂な。嫁御もあらば喜ばう‥‥近所も可、と雪にも月にも姿らしい其の門の橋を渡懸けたが、忽ち猛然として思へらく、斂金の用意もなし、大晦日近くなり、がつたり三兩、と乃ち去る。

婆さんに聞いた突當りは、錬塀か、高い石の塀腰らしかつたが、其はよく見なかつた。ついて曲ると、眞晝間の幕を衝と落した、舞臺横手のやうな、つらりと店つきの長い、廣い平屋が名代の團子屋。但し御酒肴とも油障子に記してある。

さて案ずるに、團子は附燒を以て美味いとしてある。鹽煎餅以來江戸兒は餘り甘いのを好かぬ。が、何を秘さう、私は團子は餡子の方を得意とする。これから土産に持つて行て西片町の友染たちには、どちらが可いか分らぬが、しかず、己が好む處を以つてせむには、と其處で餡のを誂へた。

障子を透かして、曡凡そ半疊ばかりの細長い七輪に、五つづゝ刺した眞白な串團子を、大福帳が權化した算盤の如くづらりと並べて、眞赤な火を、四角な團扇て、ばた〱ばた、手拍子を拍つて煽ぐ十五六の奴が、イヤ其の嬉しいほど、いけずな體は。

襟からの前垂巾幭なるを、遣放しに尻下りに締めた、あとのめりの日和下駄て土間に突立ち、新しいのを當がつても半日て驅破る、繼だらけの紺足袋て、遺般脚をぬい、膝ぎりの草色のよれ〱の股引て、手織木綿の尻端折が、石頭に角がある、大額、口を逆のへの字に、饒舌をむつと摪堪へて居る、横撫てが癖の鼻頭をひこつかせて、こいつ、日暮里の煙より、何處かの餡を嗅ぎさうな、金壺眼がや



ラリと光つて、近所の犬に遠くから逃げると見える、が、搔垂眉のちよんぼりと、出張つた額にぶら下つた愛嬌造り、ト見ると亡き一葉がたけくらべの中の、横町の三五郎によく似て居る。

人を見ると。顔を曲げて、肩を斜かひにしながら、一息ばた〳〵、ばツと團扇を拍く癖あり。

「餡子のはお手間が取れますッ。」

「ぢや、待たうよ。」

と障子を入つて、土間へ、奴が背に近い床几にかけて、二包み誂へた。

こゝに幾千金とあるべき處をしるさず、作者の苦心思ふべしてある。

入違ひに一人屋臺へ來た。

「七錢だけ下さいな。」

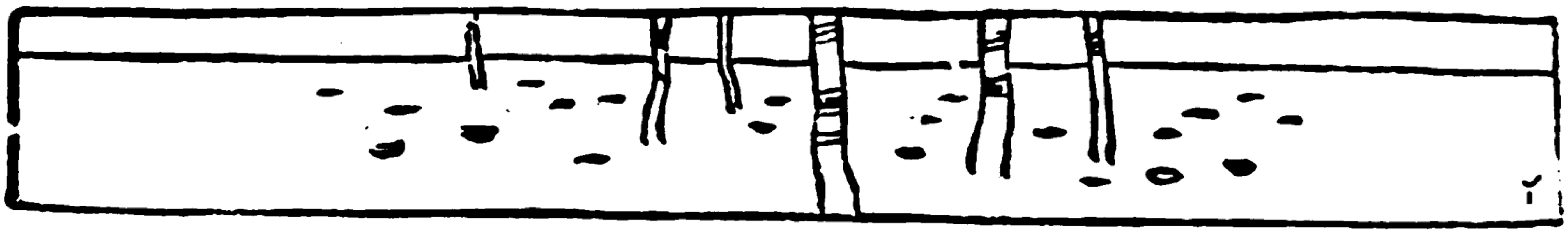
奴、立處に例の癖、顔を曲げ、肩を斜めにしながら、一息ばた〳〵團扇をばツと、

「餡子のはお手間が取れますッ。」

「然う、」

と云つて其處に立つて考へたのは、身綺麗らしい女中てあつたが、私はよくは見なかつた。て、左の隅、屋臺を楯にした處て、年配の爺公と、お婆さん、女が一人、これは背向きて、三人がゝり、一ツ掬つて、ぐい、と寄せて、くる〳〵と餡をつけて、一寸指て撓めて、一つ宛すつと串へさすのを、ト煙草を飲みながら熟と見て居た。

時に、今來た女中の註文が、何うやら餡子ばかりらしいのて、大に意を強うして然るべしと思つて居る……



「では、最う些と經つて參りませう。」

と一度、ふらりと出した風呂敷を、袖の下へ引込めて、胸を抱いて、むかふを向く。

「へーい、」

と甲走つた聲を浴びせて、奴また團扇を、ばたばた、ぱッと煽ぐ。

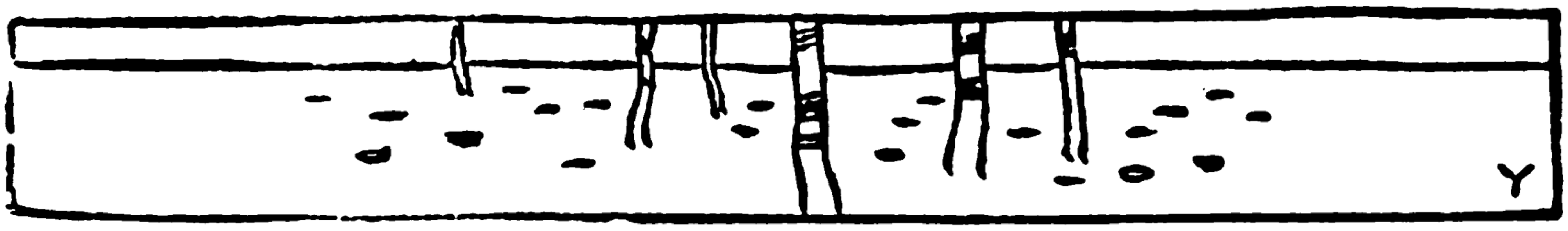
第三

さて手際なもので、煽ぐ内に、じり〳〵と團子の色づくのを、十四五本掬ひ取りに、一掴み、小口から串を取つて、傍に醬油の丼へ、どぶりと浸けて、颯と捌いて、すらりと七輪へ又投げる。直ぐに殘つたのに醬油をつける。が、殆ど空て、奴、此の間に例の、目をきよろつかせる、鼻をひこつかせる、唇をへし曲げる、石頭を掉る、背ごすりをする、傍見をする、……幾干か小遣があると見えて、時々前垂の隙間から、懷中を覗込んで、ニヤリと遣る。

いけずがキビ〳〵した事は！私は何故か嬉しかつた。

客は私のほかに三人あつた。其の三人は、母子づれて、九ッばかりの、絣の羽織に同じ衣服を着た、優しらしい男の兒。些と見習へ、奴、と背中を突いて笑つて遣りたいほどな、人品なもので。

母親は五十ばかり、黑地のコートに目立たない襟卷して、質素な服姿だけれど、ゆつたりとして然も氣輕さうな風采。古風な、薄い、小さな髷に結つたのが、唐銅の大な青光りのする轆轤に井戸繩が、づつしり……石築の堀井戸、それが、廂の下にあの傍の床几に、飛石、石燈籠のすつきりした、綺麗に掃いて塵も留めず廣々した、此の團子屋の奥庭を背後にして、膝をふつくりと、きちんと坐つて、頭



に置手拭をしながら、女持の銀煙管で、時々、庭を指し、空の雲をさしなどして、何か話しながら、靜に煙草を燻らす。

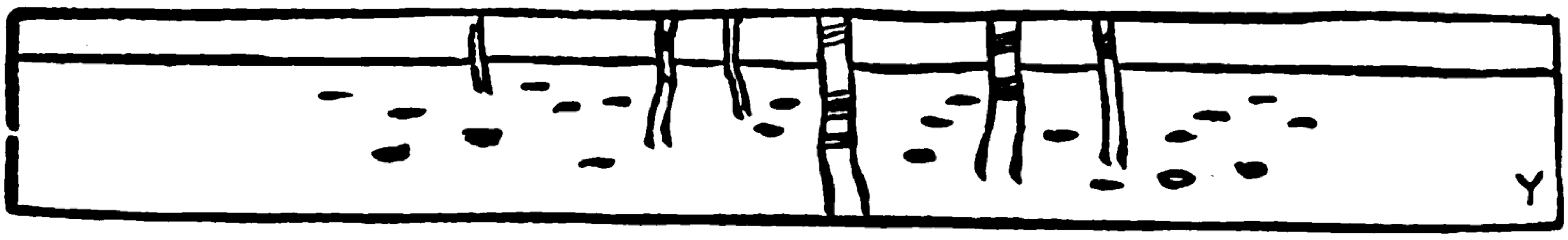
ト對向ひに、一寸背を捻つた、片手を敷込らした座蒲團の端に支いて、すらりと半身、褄を内掻に土間に揃へた。九か二十と見えた、白足袋で、これも勝色の濃いコートを姿よく着たが、弟を前にして、母樣の前であるから、何の見得も、色氣もなう、鼻筋の通つた、生際のすつきりした、目の眦として、眉の柔しい、お小姓だちの色の白い、面長なのを横顔で、ト團子を一串小指を刎ねて、唇に當てたのが、錦繪に描いた野がけの美人にそつくりで、微醉のそれ者が、くろもじを嚙んだより婀娜ツぽい。髮は束髮に、白いリボンを大きく掛けたが、美子も喜いちやんも爲なる折から、當人何の氣もなしに世とゝもに押移つたものらしい。が、天の爲せる下町の娘風は、件の髮が廂に見えぬ。‥‥何處ともなしに見る内に、潰しの島田に下村の丈長で、白のリボンが何となく、鼈甲の突通しを、しのぎて巻いたが偲ばれる。

又其が嬉しかつた。さても此方の床几のが、笹の雪で一合の私は惜い。‥‥容子の可いのに見せて遣りたい。

此の娘も、白地の新しい手拭を、一寸疊んで、髮の上に載せて居た、鬢の色は尚ほ勝つて、保もために一入床しかつた。

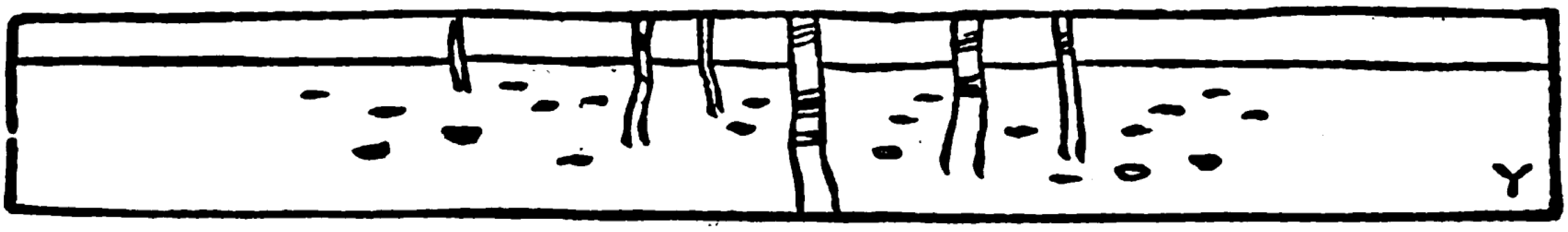
が、其の筈で、いけずな奴が、燒團子のばた／＼で、七輪の尉を飛はすこと、名所といへども雪の如し。

母樣が、膝を彈いて、づらりとづらすやうに跨いて下りると、氣輕にてく／＼と土間を來た。



「其ては、土産の包を何うぞ。」
と奴に言ふ。
「へーい。」
とすとんきやうな聲を出し、螇蚸歷へたり、と云ふ手つきて、團扇を挾んで、仰向く。
「二十錢のを一ッ、十五錢のと、十錢のと都合三包みだよ。」
「餡子ならお手間が取れますッ」
とけろりとして、ソレばた〳〵煽ぐわ。
「皆附燒の方さ。」
「へーい。」
「ぢや、分つたね。」
と一寸前を通る時、私に會釋して床几へ返つた。
いしくも申されたる哉、殘らずつけ燒のお誂へは雜有い、と思ふと、此の方目のふちを赤くしながら、餡こばかりは些と擽い。
また其の餡がゝりの三人の、すくつて、引いて、轉がして、一ッ捻つてッイが、手を揃へ、指を揃へて、ト撓めて刺す時、胸を据える處まで、一樣に鮮かなものてあるが、客が待たうが待つまいが、一向に頓着なく、此方は此方、と澄ました工合が、德川家時代から味の變らぬ賴母しさてある。

第四



處へ、カタ〳〵と冷たさうな下駄の音、母じや人のを故と穿いて來たものらしい、可愛い素足に三倍ほどな、大な塗下駄を打つけるやうに、トンと土間へ入つて來て、七輪の横へ立つた、十二だけれども、九ツぐらゐな、小造りな、小さな江戸の姉さんがある。縞の羽織、筒袖なのを細く着たが、脇あけの口へ、腕を曲げて、些と寒いと云つた躰に、兩手を突込んだ、ふりの明いた處から、紅い前垂の紐が見える、其處へ風呂敷を肱なりに引挾んだ、色の浅黒い、目に張のある、きり〳〵とした顔の、鬢をつと引締めて、おたばこ盆は珍らしく、……これも嬉しい。

「五錢頂戴。」

「へーい。」

「さあ、」

と片手を出して、奴に風呂敷を突つける。ト目をくるりと天井覗きて、

「餡のならお手間が取れますッ。」

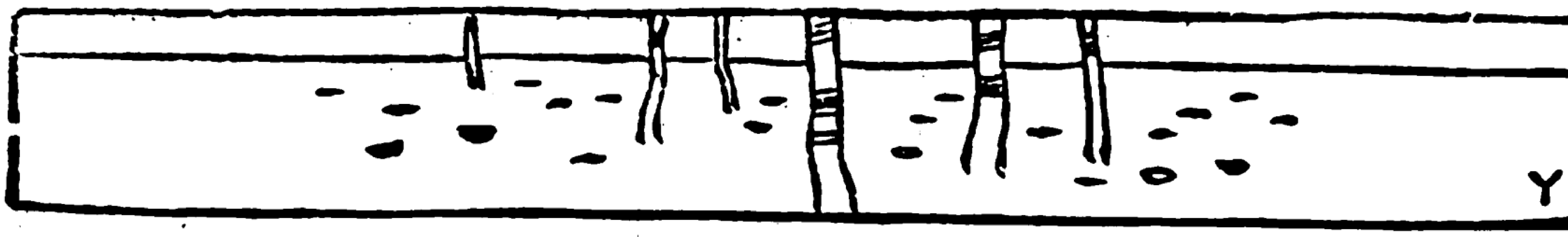
「あら、焼いたのだわよ、兄さん。」

とすつきり言つた。

奴、一本參つた體て、頸を窘め、口を四角に赤くして、餡をつける三人の方へ、外方を向いて笑ひ

「へーい。」

と七輪の上を見計らひ、風呂敷を受取つて、屋臺へ立ち、大皿からぷッ〳〵と煙の立つ、焼きたてのを、ト横目て睨んて、竹の皮に扱きを入れる、と鰭の飜然と刎ねる上へ、ぐい、と尻ッ刎ねに拭布を掛ける。



障子の外へすつと來て、杖を支いて立つた翁がある。

白木綿の布子、襟の黄色にヤケたのに、單衣らしい同じ白の襦袢を襲ねた、石持、やうかん色の黒木綿の羽織を巾廣にしよぼどりと被つて、胸へ頭陀袋を掛けた。鼻の隆い、赤ら顔で、目を半眼にした、眉には黒いが交つたが、泡を塗つた躰に、口元から頤へかけた短い髯は皆白い。鼠のぐたりとした帽子を被つて、片手に其の杖、右の手首に赤玉の一連の珠數を輪にかけたのに、一つの鈴を持添へて、チリリリチリリリと、大な手を振つて鳴らし、

「なうまくさんまんだばさらだ、なうまくさんまんだばさらだ、南無成田山不動明王をはじめ奉り、こんがら童子、せいたか童子、甲童子、乙童子、丙童子、いばらき童子、酒顚童子、其のほか數々二十四童子。」

と丁ど私と向き合ひに、まともに顔を見る處で、目を眠るやうにして爽かに唱へた。

茨木、酒顚も又嬉しい。

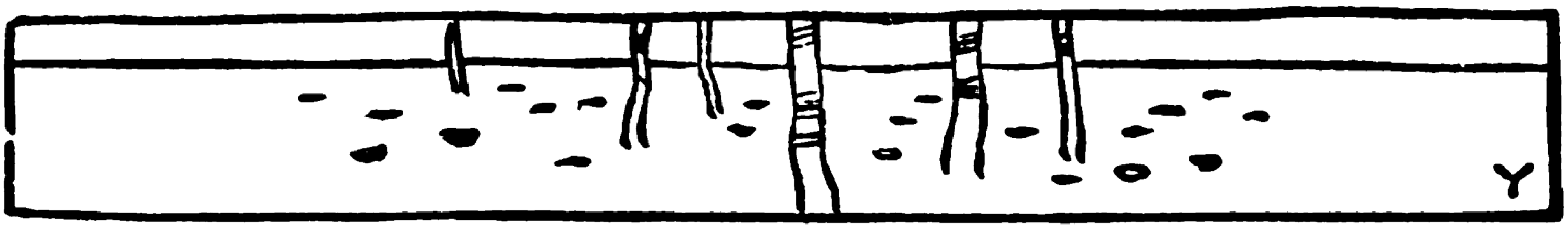
懷の三つ巻へ、ト手を懸けた時である。

「お進ぜ申せ。」

と向ふて餡をつけて居た、其のお婆さんが聲を懸ける。

「へーい。」と奴が、包んだ包みを、ひよいと女の兒に渡しながら手も引込めず、背後の棚に、煮豆、煮染ものなどを裝並べた棚の下の、賣溜めの錢箱をがちやりと鳴らして、銅貨を一個、ひよい、と空へ投げて、一寸と掌へ受けながら持つて出る。

前後して、



「はい、上げます。」

と絨の衣服の、あの弟御が、別の床几に、――しよいと上つて膝を抱いたり、トンと雪駄の上へ足を下ろしたりして居たのが、廂帽子を横ッちよに、土間を跣足て、母様の使に來て、伸上るやうにして布施する手から、大柄な老道者は、腰を曲げて、杖持つた掌に受けて、奴と兩方へ二度頂く。

私も立つた。

氣の寄る時は妙なもので、又此處へ女一連、これは、丸顔の目のぱつちりした、二重瞼の愛嬌づいた、高島田で、茶の毛糸の肩掛、あらい棒島の銘綿の羽織、藍の勝つた、着物は茶の勝つた同じやうな柄なのを着て、阿母のをかはりに持つた、老人じみた信玄袋を提げた、朱鷺色の襦袢の蹴出しの、內端ながら、媚めかしい、九にはなるまい、新姐を前に、一足さがつて、櫛卷にした阿母がついて、此の店へ入りかけたが、丁ど行者の背後を、斜に取まはすやうにして、二人とも立停まつた。

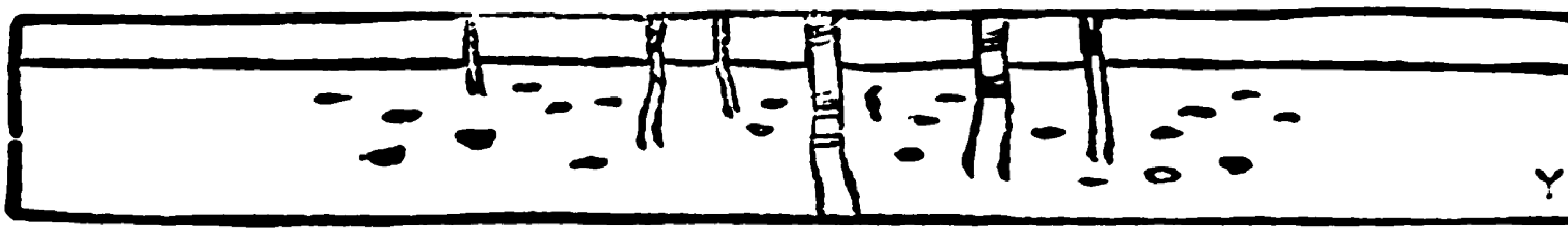
第五

「お前、細いのはえ？」

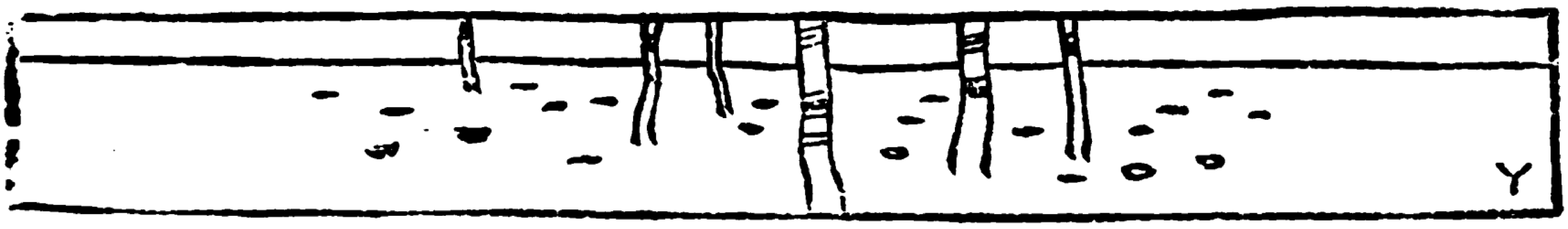
を阿母が言ふ。

「あい、」と頤を白く、淺黄の麻の葉絞りの半襟に俯向いた、伏目がふつくりとする……而して、緋縮地の背負上げを通して、めりんすの打合はせの帶の間から、これは又よそゆきな、紫鹽瀨の紙入の中から、横に振つて、出して、翁に與へた。

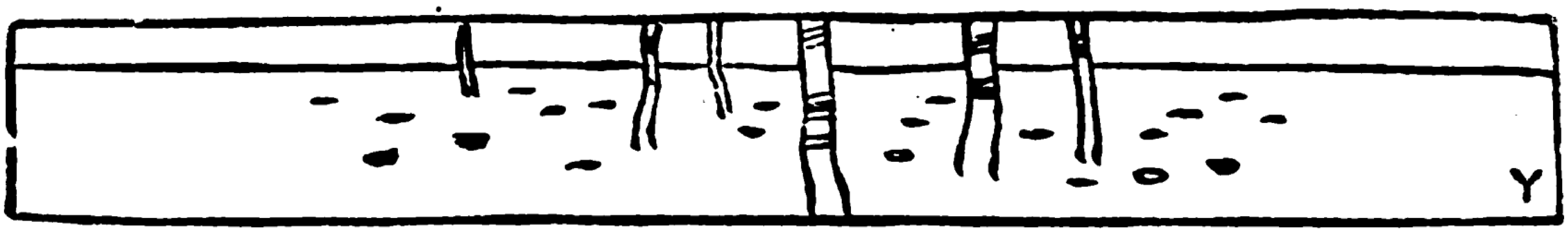
道者は杖を地から離して、手を高く上げて頂いたのである。



時に、見るもいたいけだつたのは、おたばこぼんの小姉さん。
前刻から、人々の布施するのと、……もの和らかな、翁の顔の、真白な髯の中に、嬉しさうな唇の乾々と赤いのを、熟と視めて、……奴が包んでくれた風呂敷を手の上に据ゑたまゝ、片手を腋の中へ入れて、其れでも肌薄な襦袢の襟のきちんとして、赤く細いのも、あはれに寒さうに見えたのが何と思つたか、御手を添へて、結び目を解いて、竹の皮から焼團子、まだ、いきりの立つ温いのを二串取つて、例の塗下駄をカタ〳〵と敷居際て、
「お爺さん、これあげませう、おあがんなさい。」
と出した時、……赤ら顔は其のまゝ溶けさうに俯向いて、目をしばたゝいた、と見ると唇がぶる〳〵と動いた。
床几の娘も肩越に衝と振向いた、一同、熟と二人を見た。
「南無御一統、御家内安全、まめ、そくさい、商賣繁昌。」
と朗かな聲て念じながら、杖も下ろさず、團子持つたなりに額にかざして、背後は日の陰、向つて日向へ、芋坂の方へ、冷めし草履をづるりと曳いて、白木綿の脚絆つけた脚をとぼ〳〵と翁は出て行く。
「や、包みなほして上げやうぜ。」
と徳は孤ならず、ちよろつかな包み加減、抜いた串に皮の開いて、小姉の手の上に餘つたのを風呂敷ごと引奪るやうに取つて、奴は屋臺て、爲直しながら、
「まけて置け、一番。」と皿から捻るやうに引掴んで、別に焼團子を五串添へた。



「此處へも、お團子を下さいな。」
と櫛卷の阿母が衝と寄つた。
きよろりと見向いて、
「餡のなら手間が取れますッ」と仰向く。
「否、焼いたのですよ、」
「へーい」
と相かはらず突走る。
「十錢のを二包み、二包みてすよ、可かい。其うち、十五錢のを一包、皆焼いたのをね。」
「へーい、唯今。」と言ひながら、風呂敷を引いて居る……
「否、歸途で可いのよ。」
「へーい」
「あのね、母樣。」と娘があたりを兼ねた躰て、少し甘へるやうに低聲て言つた。
「然う……ては其の十五錢のなかへ、餡のを交ぜて、――些とて可の。」
「些と、」
と口眞似のやうに繰返して、
「へーい。」
「さあ、それぢやおまゐりをして來やうね。」
「あい、」



と言つて、母娘二人、芋坂の方へ、ト並んで向く。

聞いたり、今の誂も、娘の精々が些とてある。これなる餡ばかり……夥しく怯んで、焼いたのを、と交ぜやうと思つた。

たゞ手間の取れるばかりではない。

餡がゝりはさて澄ましたもので、

「家内安全、まめ、そくさい、商賣繁昌、……だんご大切なら五大力だ。」とあらう事か爺公さまが、今時取つて飾めたやうな洒落を言ふ。

「何を言はつしやる。」とお婆さんは苦笑した。

あの、井戸の側を、庭を切つて裏木戸から、勝手を知つて來たらしい。インキの壺をふらゝこの如くに振つて、金釦にひしやげた角帽、一向かまひつけぬ風て、薄髯も剃らず道放しな、威勢の可い、大學生が大跨に入つて來た。

「いや、どつこいしよ。」

と……あの弟が居る、其の床几の隅に腰を投下ろすと、

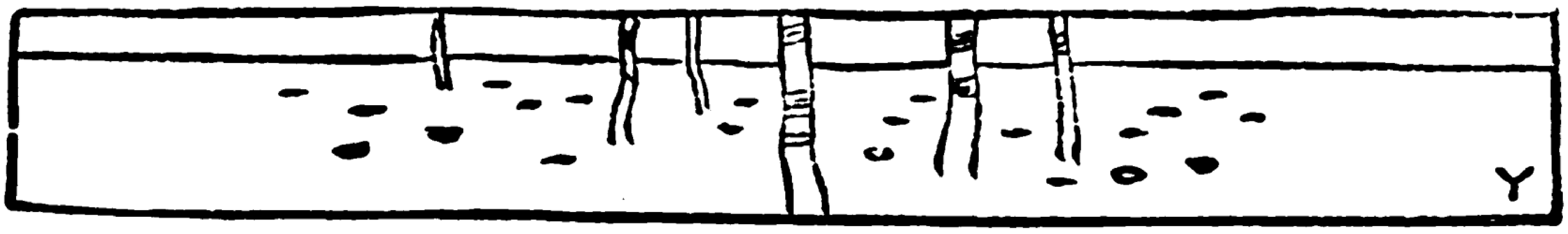
「おう、餡のを一盆、」

と恐ろしく鐵拐に怒鳴つて、フト私と向合つて、顔を見て双方莞爾した。同好の士よ、と前方て思へば、知己なるかな、と言ひたかつた。

いや、面喰つたのは奴てある……例に因つて「お手間が取れます」を言はない内に、眞向高飛車に浴せられて、「へーい、」とも言ひ得ず、鳶に攫はれた顔色、きよとんとして、小姉に再び其の包を渡すと、默つて茶を汲みに行く、石頭のすくんだ背の圓さ。

「しばらく、お二人しばらく、」

と後じさりに、櫛巻と島田の母娘を呼留めながら、行者が擦違ひに、しやんとして逆に戻つて來た。



店頭へ、恭しく彳んて、四邊を見ながら、せまつた聲て、
「誰方もしばらく、……あゝ、野山も越え、川も渡り、劒の下も往來した、が、生れて以來、今日と云ふ今日ほど、人の情の身に深みた事は覺えません。」と聲が途絶えて、チリチリと鐸が鳴つた。
溜息を深く吐いて、
「私は行者ても何てもないのぢや、近頃まて、梅墓里の溝へ出て、間に合はせの易を遣つて居ましたが、好などぶろくのたしにも成らんて、思ひついた擬行者ぢや、信心も何もなかつたが、なあ、揃ひも揃つた、あなたがたのお情、あの娘も聞かつしやれ。」
と小姉に差出した手がふるへて、
「老人つくづく身に染みて、此のまゝては、よう何うも、あの踏切が越切れなんだ。あらためて是から直ぐに、此の杖のなり行脚をして、成田山へ詣てましてな、經一口も知らぬけれども、一念に變りはない、南無成田山不動明王、と偏に唱へて、あなた方の御運長久、無事そくさい、又お若い孃たちの、」
とほろりとして、老の目に涙を湛え、
「行末の御良縁を祈願しまする。いやいや以つてのほかな、此の上、お布施を頂くほどならば、一足ても引返して、恁やうな事は申入れぬ。……あゝ、昔のまゝの江戸を見た。」
と背伸びして、前途の空を衝と仰いだ、棗の面に仙色あり。女の中には、顔に袖を當てたのもあり、袖を合はせて拜んだのもある。一同が禮をした。
「それては、誰方も御健勝て、老人氣も勇めば足も勇んて、行脚の空へ飛ぶやうてござる。」
と呵々と笑つた。
大學生が衝と立つて、
「僕はまだ布施をせん、寸志だが、老人うけたまへ。」

（完）



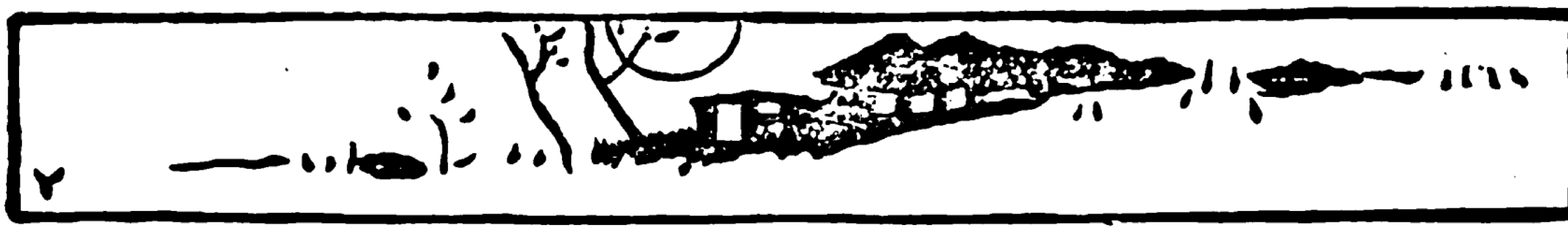
敵地

中村星湖

私は學生時代に大分長い事、伊皿子坂下の萩原と言ふ人の厄介になつて居た。その恩人は私がある專門學校を卒業すると殆んど同時に、病氣て死んだ。その跡には奧さんと子供ばかりなので、何かにつけて私が口を出さねばならなかつた。

死んだ主人が遺した財産の中では、芝の白金臺町にある三百坪程の地面が主なものだ。もとそこは寺地であつて、坊主の不しだらから競賣になつたのを主人が買ひ受けたのだが、地面は此方の物になつたが坊主は何時までも立退かない。それが爲に土地明渡しの訴訟をするやうになつて、擦つた揉んだて其方の方が付かない間に主人は病氣に罹かつて、其事を一番氣に病みながら死んで行つた、死後一年ばかりて、やう〳〵訴訟も濟み、仕舞家のやうな小さな寺の取毀も終へた。

『マア大安心致しました、皆様には大變御苦勞を掛けましたけれど……もしあの地所が間違つて他人手に渡るやうな事でもありましたら、私は父さんにも濟まない――そればかりか、家中引纏めて田舍へ引込まなけりやならないと考へて居りました。マア、ホントウにこれて大安心致しました。』と奧さんの喜びは一方てなかつた。それから色々遣り繰りをして、半年ばかりの間に、月々、六圓と九圓と十六圓ほど屋賃の取れる貸家を三軒建てゝそれ〳〵借付けた。十六圓の二階家は一番後て出來たのだ



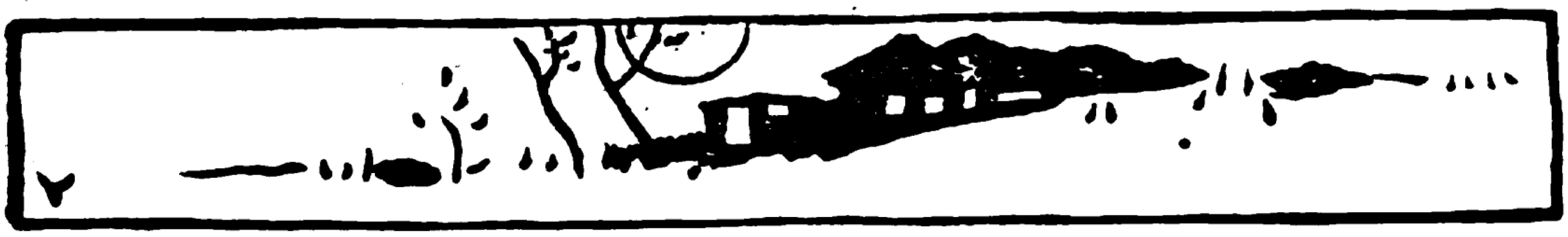
が、まだ壁も乾かぬ前から住み付く人があると言ふ次第て、「高いから何うかと思ひましたが嬉しう御座んす。」と奥さんは差配に禮を言つた。

暫らくすると屋賃が滯り始めた。探つて見ると差配が使ひ込むらしかつたので、今度は、つひその近所に住んて居る知合ひの大村と言ふ老人に頼んだ。差配が變ると間もなく、二階家の人も他所へ移つて行つた。そして其家は七、八と二た月空家になつて居た。奥さんは心配して折々見に行つては、垣が壞れて居るの、半年と經たない内にヒドク住み荒されたのつて、前の借家人を惡し樣に言つた事もあつた。私も前言つたやうな關係から捨てゝも置けないので、その空家を見廻りに行つた事があつた。

それは夏も半ばの事て、素木の小門の三つ並んだ竹垣の内は、木口のまだ生新しい三軒の家を取圍む庭樹が青々と蔭を作つて、三階家の側には年古る百日紅が鮮やかな花を着けて居た。その縁側の戸は押開かれて、新しく差配を頼んだ家のお媼さんが、其所て子供を遊ばせて居た。

「……毎日天氣が續く事てすね、ア、二階の戸は板が反つちまつた！」

斯う言つて、二階へ正面に照り付ける夏の日を仰ぎながら、私は、所々に紫陽花の咲いて居る空地を横ぎつて、西凸頭の崖の上まて歩いて行つた。その崖下には一字の寺があつて、庭の物干竿に襁褓や赤い付紐のある子供の單衣が掛けてあつた。まぶしい程日を浴びたそれ等を木蔭から見下して居ると、私はこの夏――まて二階家に人の住んて居た頃、水準器や地圖を携へた市役所の役人とが一緒に來て、下の寺の坊さんにも立合つて貰ひ、崖下の境を確定した折の事、引き續いて崖上の墓地控地と此方の地所との境を決める時、奥さんの親戚の男と、墓地監理人とが角目立つた事、なほ遡つて



は、辨護士を連れて來て、今は跡形も無い一踏寺の取毀を決行した折の事などが、一時に思ひ浮かべられた。

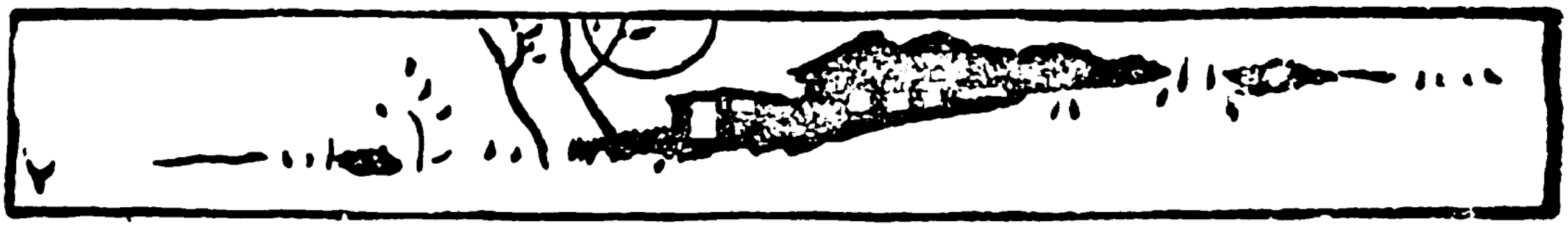
「エライ厄介付きの財産を遺して行つたものだ！前の住職一派の邪魔も何時無くなる事だらう！‥‥と言つて、不動產と言へば外に無いのだから、何うか此所を物にして、相當の收入を得なければならない。」

斯樣な風に考へながら、屋敷を一と廻して、破れた垣根などに一寸手を加へて歸つた。

それから間も無く私の勤めて居る社の休暇があつたので、私は日頃の山水癖から一と月程の長旅をした。その長旅から歸つて來ると、夏敗けのして居た萩原の子供も皆丈夫になつてたし、いつも青い顏ばかりして居る奧さんも上機嫌で、

「二階家の方にも借手が付いて、二三日前に引移つたつて大村から知らせて來ました。あ近所には隨分空屋がありますけれど、私の所は仕合せに、平家の方は始めつから塞がり通しだし、心配して居た二階家もこんな風で‥‥住み手ですか、それは何でも慶應義塾へ通ふ子供を三四人世話してる方で、地方の物持だて言ひますよ。さうてせう、一圓あげて十七圓にしたのに、默つて借りたさうてすから。‥‥それて、此頃また墓地控地の十七坪幾らてすね、あれを是非買つて異れつて申込みがありますが、何うかしてあれをも買入れて眞四角の地面にして、もう二三軒も建てゝ置きたいと思ひますが‥‥」と言つた。

其墓地控地の値段が馬鹿に高い上に、まだ市から監理人が拂ひ下げて居るのではないゆゑ、その相談は捗取らなかつた。其頃私は弟を連れて、萩原家のすぐ隣の下宿に居た。十月の末になると矢張白



金盛に住んで居る或人が『實は監理人から墓地控地を買はないかと言はれましたが、地續きと言ふ所から捜しても萩原さんでお求めになるのが至當だが、あなたの方では手金でもお出しになつては居りませんか。』と訊きに來た。『イヤ私の方ではまだ其所までに行つては居ない。』と答へたが、よく探つて見ると、その猫の額程の土地を種にして、今は萩原家の所有の土地と同じやうに、前の坊主や監理人の一派が方々から金を引出して居る事が知れた。

其時私は、その一種の地所賣買をも一つの職業に算へて見た。

『なる程、金を儲ける……と言ふよりはパンを得る爲には人間は色々の事をするものだ。單に廉いと言ふ條件から子孫の爲に寺地を買つた萩原の主人の遣り方を是認すると同時に、まだ市の所有である墓地を喰物にする彼奴等を非難するわけに行かぬかも知れない。』と斯樣な事を考へた事もあつた。奥さんには、墓地に手を出す事はお斷念なさいと言つた。

けれども奥さんはそれが思ひ切れなかつたらしい。十一月になつてから、また幾回目かの申込みがあつたと言つて相談に來た。そして其時始めてかごとかましく、『二階家の方は買ひ損なひましたよう!……餘り大村のお爺さんがお人好しだものだから。』と言つた。

『どうしてゞす。』

『今に〳〵ツて言つて最早二た月も入れませんよ。』

『敷金は入つてませう。』

『イヽエそれどころぢやない證書さへ入つてないから心配なんですよ。……大村でも氣の毒がつて斯う言ふてすよ。「いかにも田舍者らしく穩やかな婆さんが來て、手金を一圓だけ置いて、家は逗子なん



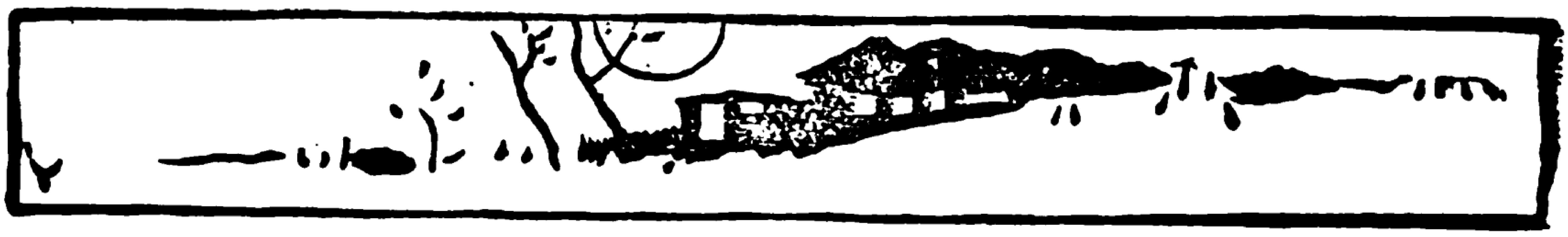
てすが、取りに行くも、おつくうですから郵便でやりましたから二三日内には敷金も參ります……ですが、引越しは、今日が日が好いから致したいものですが、いかゞでせう。と言ふから、どうせ空いてるんだから早速お入りなさい、とウッカリ承け合つちまつたのが惡かつた。」ッてね。」

「ぢやたッた一圓で三月越しも居るんですか？」

「始めの月は半端で五圓だけ入れましたがね、それッ切りです。幾度大村から足を運んでも、今日は明日はて、トウ〱今迄引張つたんですよ。……きのふも隣家の秀島さんの奥さんがお出てなすつて、「眞壁」（二階家の方は眞壁つて言ふんです）眞壁さんてはチャント納め物を致しますか。何だか酒屋なぞでも大幾貸しを拵へたつて溢して居りましたよ。始めの月には二圓かあつた拂ひを綺麗に濟ましたから、安心してドシ〱持ち運ぶと、半月も經たないうちに八九圓も溜つたので催促を始めると、サア一文も寄越さないッて……」斯うでせう。大村の方では有つて寄越さない、ぢやない、全く無くて困つて居る樣子だから……お常もキビシイ方だが、も少し待つて貰ふやうに言つてお呉れ、世話をした俺の方でも切ないから」ッて大村の伯母さんが妹の許へ行つてて言つたて事ですがね、私だッて——ナニ無理に取らうと思ひませう！當分打遣つて置く積です。けれどタヾ居られるのは殘念ですから、金は要らないから立つて貰ふやうに大村へは話して置きました。」

私は私の仕事も忙しかつたので其儘聞き棄てゝ置くと、一日置いて奥さんがまた來た。

「どうでせう、タヾて他人にブウ〱しく居られるよりは貴方一つ行つて住んで下さいませんか。」



斯う言はれて、私は即座に受け合つた。始め貸家が出來た頃には私はまた萩原の家に居たが、いつまでも食客の形で居て、コマ〳〵した事を見たり聞いたりするのが厭になつたから、その一軒を借りたいと言ひ出した事があつたが、脫けられると淋しくて困ると言ふやうな先の口ッ振りと、今更逃げるやうに取られてもと恩を受けた身の苦しい此方の思惑とが搦まつて、有耶無耶の間に打過ぎた。やがて弟が來たのを口實にして隣の下宿へ引越したのさへ、濟まないやうな氣がして居た。

「貴方の下宿も冬はまあ好いですが、夏は暑くて到底も居られませんからねえ。どうせ何處か家をお探しにならにやなるまい。」と奥樣は、おタメごかしを吳れた。

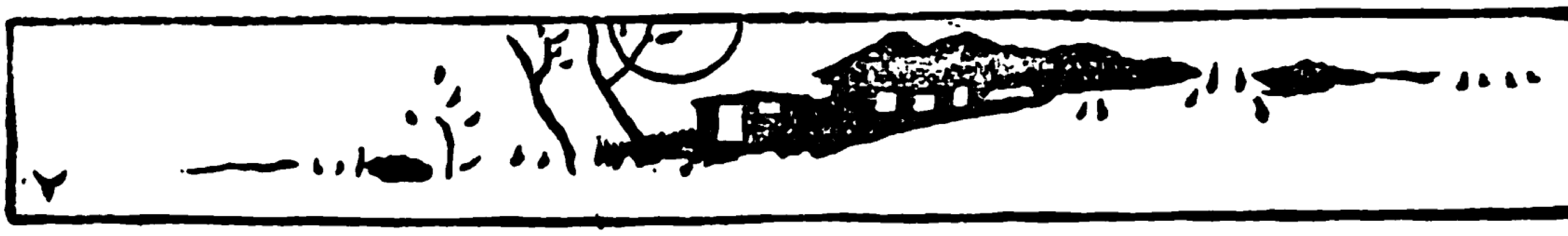
さう言はれるとチヨット厭な氣持もしたが、その實勿怪の幸ひなので、私は

「……さうですか、餘り人を馬鹿にして居る仕打だ。僕が行つてキット追ひ出します。」と言ふうちに自分ながらカッとして了つた。

手向ふ奴を押倒ふさうと言ふ意氣込と、新しい家の主人になれると言ふ歡喜とがゴッチヤになつて、私は明日とも言はず其日のうちに談判に出懸けた。

丁度十一月廿一日の事で、小春日和の暖い上に、社の仕事も昨日で片付いた閑散の身は、新しい仕事に對して一種の作業熱を起した風で、新調の洋服の胸ボタンをキチンと締め、細身のステッキを振り〳〵伊皿子下から高輪御所の前の通りを、土埃を揚げて歩いた。

まづ大村へ寄るとお爺さんは留守で、お媼さんが出て逢つた。大抵は奥さんから聞き知つてる話を、お媼さんは細々と物語つてから、「始め餘り猫を被つて來たものだからね、私共もスッカリ瞞されたのですよ。向ふの積は家が廣いから室貸でもして、その上バチて萬事を遣り繰つて行くらしかつ



たが、うまく客が付かなかつたと見えます…… 何ぼう下女などを差向けても馬鹿にして居て寄越さナいから、此間はお爺さんが自分で出懸けて行つて、「他人の腰をアテの暮しなら十七圓の屋賃は過ぎてらあ、モツト廉い所へ引越さツしやい—ツて言つて來たさうです。」と少し笑つた。「何しろ貴方がお移りならば、お常さんも御安心でせう。——今度の事は私共の失策で、伊皿子へ申譯なしですよう。」とも言つた。

大村の氣を惡くしないやうにとの奥さんの注意もあつたので、私は輕く挨拶を濟ましてやがて貸家の方へ行つた。

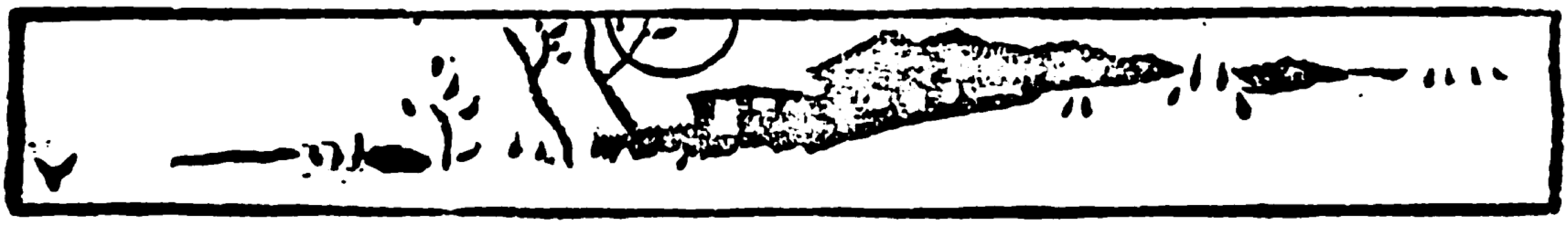
三つ並んだ門はやゝ古びたが、和かい日の當つて居る二階家の手摺は、まだ新しく黄色に見え、竹垣に添つては葉の落ち盡した百日紅の老木の下から、淡紅の山茶花が、青黑い葉の間に咲いて居た。その一番西の「眞壁」と紙の貼り札のある門を入り、突當つて格子戸に音なふと、一パイに日の差込んでる障子を開けて、五十許の肥つた女が、下女のやうな汚い姿で顏を出した。その側には二十二三の背の高い男が黑く汚れたメリヤスのヅボン下を見せてスツポ立ち、ギヨロツトした眼で矢張此方を見た。

「伊皿子の萩原から出ました。」

「ア左樣で御座いますか、どうぞお上り下さいまし。」

外に若い女でも居て言ふかと思つたが、美しい優しい聲の主は、矢張眼の圓な、頬の膨れあがつた中婆さんであつた。髮は無造作に引束ねて居た。

私が靴を脫いで上るうちに、若い男は直ぐ玄關側の入疊に席を拵へて待つて居た。入ると正面の床



の間には、鶯色の壁に古い掛圖を掛け、其前に「小西」と名札のある支那鞄や、大なボール箱が積み上げられ、勝手寄りの卵色の壁際には褐色の大卓子が押付けられ、其上にも色々な物が載つて居た。北は紅葉を散らした澁色の襖で次の室を仕切り、南、緣側の障子は、明るくカツと日を受けて居た。

男が敷いて呉れた座布團は古く薄汚なかつた。

「大變に暖かいてすね。」と私は口を切つた。

男は、窮屈さうに手を膝に突いて坐つて、俯せた眼を折々擧げて私を見た。物を探るやうな一方には當惑したらしい眼付てあつた。

私は言ふだけの事をズン／＼言つてから、「僕の仕事は閑靜の所てなければ出來ない仕事てして、僕自身て此所に住まなければならなくなつたから、どうぞ立つて下さい。」と少し强く言ひ切つた。

「エ？立つて御座いますか……」と例のギヨロリとはして居ながら哀願するやうな眼て、「それは困りました。大村樣へもお願ひして、今月一パイ待つて頂くことになつて居りますが……」

「そりやいけませんよ、今日は明日はて引張つて二十日――昨日までに金が出來ねばキツト立つと言ふ話だつたさうぢやありませんか……昨日になるとまた今月一パイ。……書付も入れるとか言ふお話てしたが、僕の方ては書付けも金も要らないから立つてさへ貰へばソレて好いのです。」

斯樣な押問答か暫らく續くうちに、私は我知らず聲を高めた。

「阿母さん！」と若者は母親を呼び入れて、私の言ひ條を繰返して聞かせた。



「どうもね、家主さんでお入用となられこれは致し方がありませんよ。」と母親は肥つた躰を突躁するやうにして言つた。それから柔らかな調子で「田舎者は呑氣でしで」とまづ卑下して置いて、辯解らしい事を細々と話した。

二階で書物を讀む聲が聞えた。私も聲をやわらげた。

「僕の方で金を欲しいと言ふのぢや無し、たゞ立つて貰ふに無理はありますまい。それも今日を今日と言ふわけではない。月末まで待ちます。

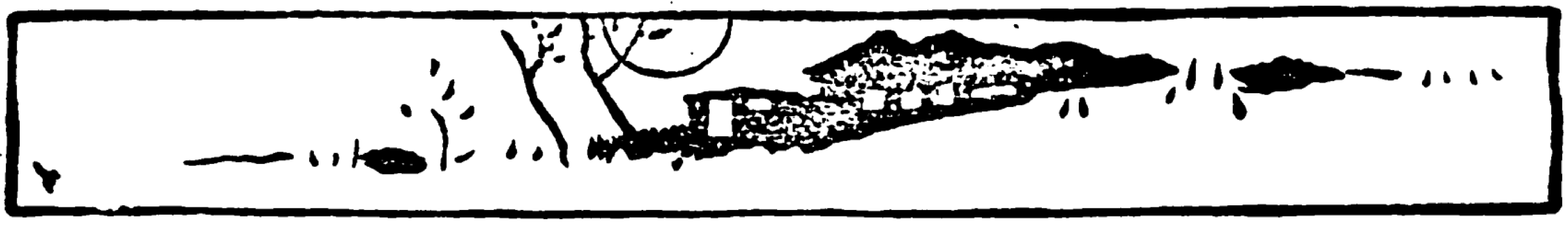
いよ〳〵話も決まつたので起ち上ると、「では書いた物でも差上げませうか。」と若者が言つた。

「イエ宜ござんす。僕自身で來てキメたんだから。」と強い言葉を遺して私は戸口を出た。そして歸つて伍一什を奥さんにサモ一と廉の手柄でもしたやうに話した。

それから二三日と言ふものは、移轉後の新生活を空想しながら、何となく愉快に暮した。

「…これまでは萩原家の近くを去るを一種の忘恩事のやうに考へ、躊躇致し居り候ひしが、招かざるに、放たるゝ時機は到來致し候。萩原家の寒い玄關より下宿屋の二階に移りは移りたれど、矢張呼べば答へ得る必要に余儀なくされてワザと暗き片隅の室を擇び居り候、それ等の事も一週間の後にはすべて過去の夢にて、新居、新生活の主人公と成り得べき兒が嬉しさお察し下され度候…」と故郷の母へ手紙を書きもした。

するうちに、少し風邪氣味なのを押して湯に入つた過ちから、私は氣分が惡くなつた。咳も出た。いやな痰も出た。社まで出懸けずとも出來る仕事だが、新年の準備が突いて來た。その爲に夜深かしする事もあつた。脳味噌はスッカリ乾き切つてゴン〳〵するやうな感じが續いた。



二十九日には、社の歸りに、眞壁の前を通つて見たが、まだ引越す樣子はなかつた。寄らうと思つたが、氣怯(きおくれ)がして寄れなかつた。三十日には「難なく越して呉れゝばよいが。」と言ふやうな弱い心て、ても押して出懸けて見た。二階の手摺には手拭などが干してあつて、動きさうの氣振(けぶり)も無かつた。格子を開けると、眞壁の母親は髮を解(と)かして居た。

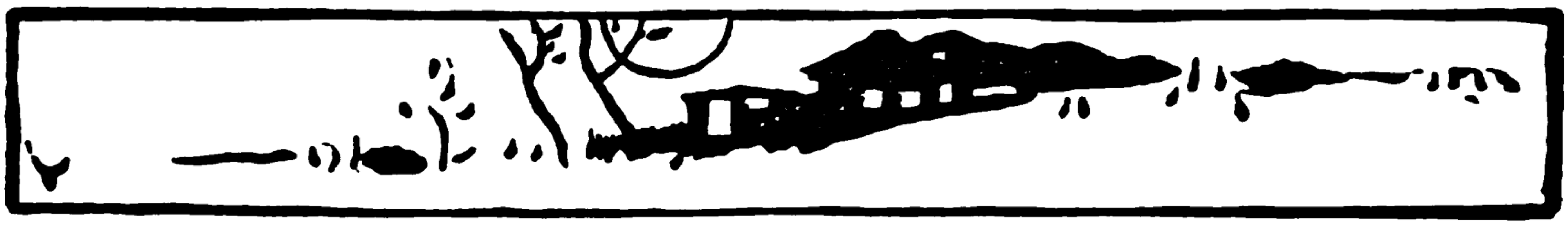
「どうも思はしい家がありませんで……けふもこれから探しに行かうと存じて居りますので……」と平氣な顏をして言つた。

「あれ程堅い約束して置いたのだから」と言ふと「猿町(ゑてまち)の方に心當りが御座いますから、今日其方へ廻つて、夕景にはキット伊皿子へお伺ひ致します……あの坂のどの邊になりませう？」と訊(き)くので私は名刺へ詳しく所を書いて遣つた。すると『お引越しになるには矢張お孃樣など御一緒て御座いますか。』とよく萩原の樣子は知り拔いてゐるらしい。

私は萩原へ歸つて「あの婆あ、田舍者だのなんのつてシラを切つ居て、伊皿子の樣子などすつかり知つてますぜ。……兎も角今夜寄るさうですから來たら直ぐ知らせて下さい。」と言つて置いたが、來たとの知らせはなくて十二月の一日になつた。

トウ〱嘘(うそ)を吐(つ)きやがつた！太(ふと)い婆(ばゝあ)だ！今日に僕だけの荷を持つて押懸けて行きます。」と急に荷造りをして、車に蹤(つ)いて正午頃眞壁の許(とこ)へ行つた。そして下の八疊を開けさせて其所へ荷物を運び込んだ。前日の約束を楯(たて)に取つて動かぬので、向ふでもいよ〱三日には明渡すと言つた。

晝飯は向ふて仕度すると言ふのを、振り拂ふやうにして、近所の西洋料理へ食ひに行つた。そして三日分だけ前金て、眞壁まて運ばせる事にした。



☘

床の間には書物を積み、壁際には本箱を立て、押入には夜具や洋服の箱を入れ、机をば明るい障子際へ据ゑた。「お火を」と言つて見すぼらしい古火鉢を持つて來た眞壁の母親を見た時、茶を汲んだのも飲まず、飯の膳を据ゑたのも押退けた先刻の自分を顧みて「餘りに冷酷だつた！」と恥ぢられつゝ今度は「有りがたう。」と禮は言つたもの丶「さう弱くて何うする！」と自ら勵まし〳〵した。

「向ふて立たないうちに行つても大丈夫でせうか？」と私が出懸ける時、奥さんは危ぶんで居た。私にも其懸念は一層深かつた。机に向つて坐を占めたが、少しも落着かない。襖を隔てゝ何事かヒソ〳〵語り合ふのを聞くと、眞壁のギコロッとした眼や、圖太い母親の躰などが氣になる。

「今日は、魚屋で御座い。」

「裏へ廻つてお呉れ。」

やがて裏の方で押問答が始まる。

「困りますねえ、さう今日は明日はつて、もう幾度上ると思ひます。」

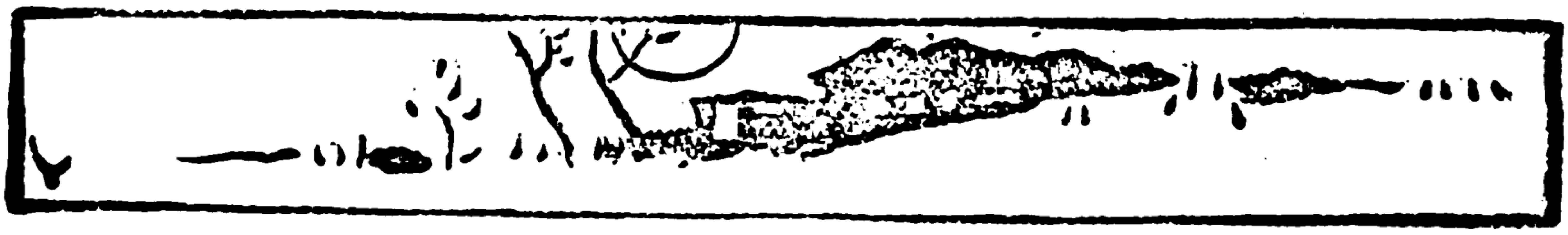
「そんなに大きな聲をしなくとも解るぢやないか。」

…………………………………

一時間置き位にはこれだ。

「今日は、……屋で御座います。今日は頂けませうか……」

「ぢや好うございます。出る所へ出ますからね！」と金切聲で急込む女や、「さう〳〵同じ事を踊つて



番頭さんに言はれやしない！」とショゲたやうな小僧の聲もしたが結局何とか言ひくるめられては『ぢや明日はキットて御座いますね。』と念を押しながら歸つて行く。折衝の任には多く母親が當るらしかつたが、新聞屋が來た時には「オイ貴樣んとこゝ高いぞ……ウ？……代は明日來い。」と眞壁が叱るやうに言つた。

母親の方は女だから、いよ〳〵の場合にも口論じ位のものだらうが、兵に行つて來たとか言ふ彼奴――悴の方は何をするかも解らん。と思ふと、その眼や、その太い腕が恐ろしい。

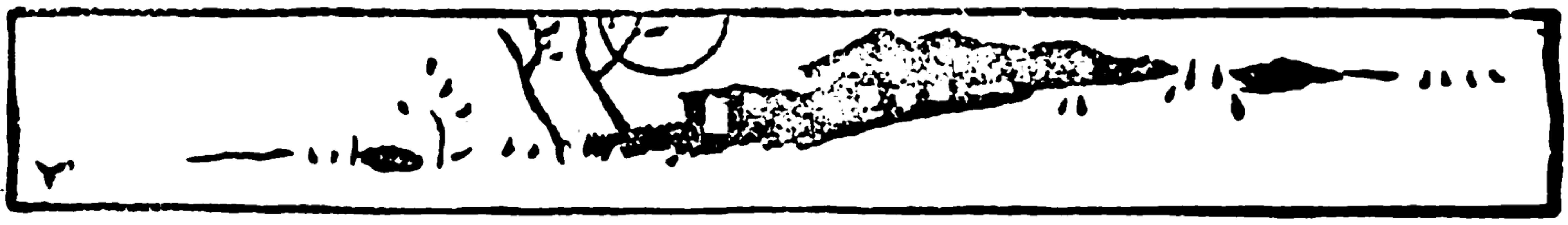
「エヽ米屋て御座い……」

「これから始終取るから勉强するんだぞ……」

「チョット解り惡い所てすから方々車を引廻りました……これから伊皿子下へ歸るには、何う行きましたら一番近いてせう？」と言ふと、母親が例の猫撫て聲て何とか敎へる樣子てあつた。

近所にいくらも米屋はある筈なるにわざ〳〵遠い伊皿子坂下から取る事が解らなかつた。フト、昨日名刺へ所書きをしてあの女に渡したのをすぐ利用して、私か萩原かの名前て、あそこらの米屋を詐つたのてはないかと思ふと、子にも增して親の方が恐ろしくなつた。

カケ取りの聲を聞きながら、斯樣な事を考へて、私は始めの日の午後は、その八疊を殆んど離れ得なかつた。他人の內幕を知れると云ふ好奇心が一つ、も一つは運んて來た荷物に手を着けられてもしてはの危惧があつた。さればと言つて落着いて仕事は出來ないので、折々庭へ降り立つたり、背戸へ廻つたりして、霜枯れの空地や崖、崖下の谷の景色などを眺めなどもしたが、すぐに座敷へ戻り〳〵した。それは自分ても可笑しい程頭が過敏になつて居たが、笑へなかつた。



夕方になるとあわたゞしく格子戸を開けた者があつた。

「小西さん！」と母親の聲で勝手へ呼び込んで何かヒソ／＼言つて居た。

「さうですか、あの大きな卓子をどうして二階へ上げました？……さうですか……ぢや餘り騒げませんね。」

暫らくすると、廊下を、中棧の硝子から此方を覗くやうにして二階へ通る者があつた、背の高い、黒い制服を着た男だつた。少し後れて、靑つぽい木綿袴が硝子を掠めた。

始め二階を明けるやうに掛け合つた時、其所へは高等商業の生徒と慶應義塾の生徒を置かねばならぬ故、階下の八疊で少時辛抱して貰ひたいと言ふ事であつた。二人は親戚の者だとの事だが、話し合ふ樣子を襖を隔てゝ聞くと矢張タヾの間借人らしかつた。

暗くなるのに氣が付いて、私が洋燈と石油を買つて歸つた灯點し頃、「阿母さん」と甘へるやうな聲て入つて來た者があつた。母親が、飴色塗の膳の上に夕餉の料理の白い皿を重ねて私の室へ運んで吳れる背後の三疊に、筒袖羽織を着て小机に向つて居た十三四の少年が、可愛らしいクル／＼した眼で私の方を凝然と見た。「慶應の中學部へ遣つて置きますが、學校が濟みますと算術のお稽古に先生の所へ廻つて夕方遲くてなければ歸りません。」と其の中、母親が自慢さうに問はず語りをした末の子らしい。

夕方からは咳が出た。熱もあるらしかつた。（こんなで、突いて來て居る仕事が日限通り捗取るかしら？」「奴等は何時までああして居るだらう？」と考へて來ると、私の神經はます／＼昂ぶり、物を持つ手の慄へるのを覺えた。「こりや不可ん！」と私はつとめて脂肪の多い西洋料理を貪り、用意の葡



葡酒の杯を重ねた。

明るく暖か〻つた八疊に、やがて冬らしい、寒い〳〵夜が來た。机の前で獨りポツチンとして、勉めて調べ物をして居ると、勝手へは、また一人二人晝間と同じやうなカケ取りが來た。

私は、フト思ひ付いて、引越して金が要るからと、友達へ無心狀を認めた。そしてそれを持つて緣側へ出た時、丁度また一人入つて來て、錆びた聲で「御免！」と言つて格子戶を開けた。「またカケ取りだらう、こん度は何んな催促をするか？」と多少の興味は起つたが、戾つて聞くのも物好き過ぎると、ステッキを鳴らしながら門を出た。

郵便をポストへ投じて歸らうとすると、其側に明るく賑やかな理髮床があつた。我ながら二三日妙に憔悴れた顏だけなりと淸めやうと思つて其所へ寄つた。三十分ばかりしてまた暗い坂を上つて行く私の前を、ガチポチと影のやうな物が步いて居た。それをサッ〳〵と追ひ越したが、歸る門を間違へて隣家まで行き、氣が付いて引返すと、眞壁の門でハタと後れた影に出逢つた。

「オヤ貴方でしたか？」

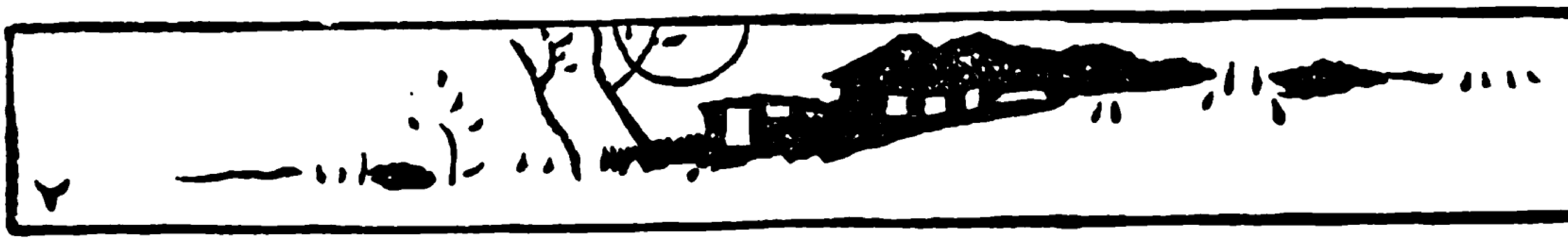
斯う聲を掛けた黑い物は眞壁の母親で、何か風呂敷包を抱いて居た。私は例の如く內庭からあがり、彼女は格子戶を押した。

錆びた聲の男は先刻來た儘らしかつた。

「イヤもう澤山だ。」

「マアそんな事仰有らずに、も一つ召上れ。折角取つて來たんですから。」

勝手では斯樣な問答が續いて賑かであつた。私は好奇心から始終聞耳を立てた。——酒屋に大層な



借を掠らへたと言ふ話は不思議てあつたが、その男のその錆びた聲が次第に滑らかになるに連れて、スッカリ讀めたと思つた。

　錆びた聲の對手には若々しい母親の聲が多かつたが、時々異壁の野太い聲や、少年の無邪氣な聲が混ぢつた。それ等は何うしたハヅミからか年廻りの事を話し合ふやうになつた。

「……この生れ年と言ふ奴が爭はれないものてしてな。申年は猿悧巧と言つて、太閤樣は申の年……………」

「兄さんは何年てせう？」

「お幾歳かな？」

「二十二て子年です。」

「子年の者は、始めに苦勞するが後に樂をする、性分は苦勞性と言ふので心配しなくても好い事まて心配する……。」

「ア兄さんなあ當つてる。……阿母さんは何だらう？」

「五十二の午さ。」

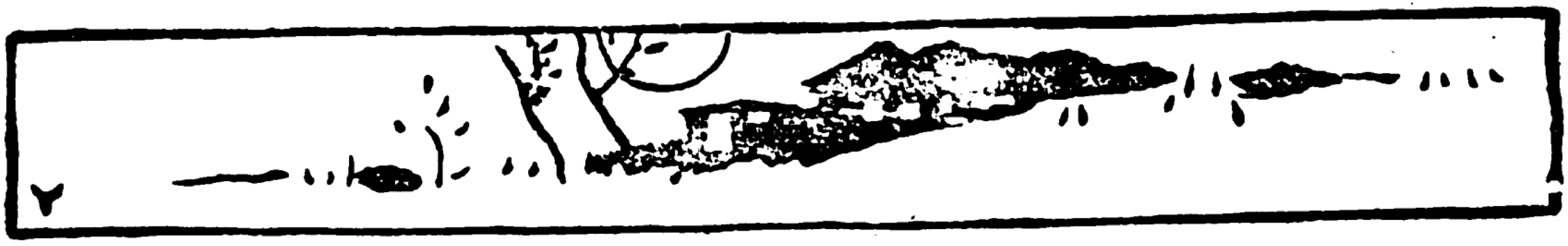
「午かねえ、馬鹿に肥つてるから丑だあ！」

「アハヽヽヽハ。」

「己あ何年だらう？」

「己あつて言葉があるか！」

「ソラ子年はさう他人の言葉節まて氣にかける、ハッハッ！」



その内に錆びた聲は、格子戸のガラ〳〵と云ふ音と一緒に『おや近い内にお移りですな。』と言つた。やがて勝手はヒッソリして、暫らく其所らの戸を閉める音がガタピシとした後、私の室の背後の六疊へ來て皆寐るらしかつた。私も更に葡萄酒を傾けて床に就いた。

二階のゴソ〳〵する音や、詩吟の聲も止むと、家中シーンとして了つた。

「ピシーン」

……………

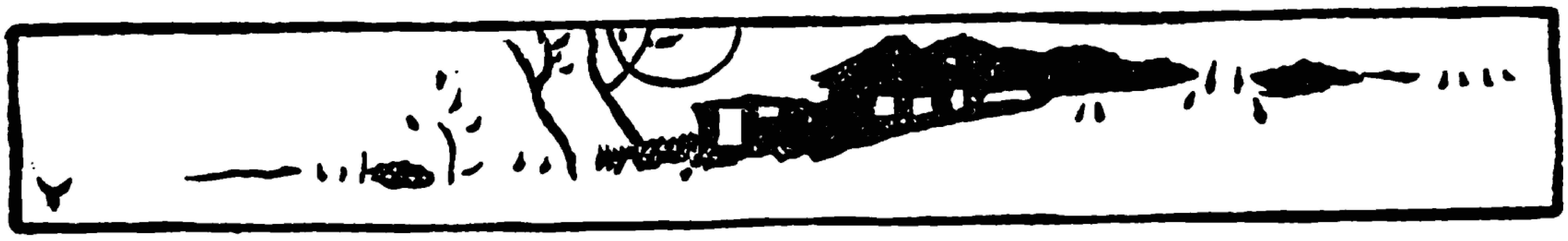
「ピシーン」

……………

微かながら物の罅破れるやうな音が聞き取れる程四邊は靜まり返り、それが氣に掛かる程私の頭は冴えて、呼吸を算へたり、寢返りを打つたりしたが、どうしても寢着けなかつた。寒い。フト故郷の冬の夜を思ひ出した。――鍋などに水を入れた儘忘れて居ると、それがピシーンと凍み破れる、手桶の箍がパチーンとハチけ飛ぶ。立木が鐵砲のやうな音を立てゝ氷り破れると言ふ北海道の大森林も暗中に描かれた。天井を凄ましい騷ぎをして鼠が駈け廻る。遠くの方で犬の唸るのも聞える。それが次第に近寄つて來る。

灯を消したなら寢着かれやうか、と細目にして置いた洋燈を消す前に、私は机の抽斗から大きなジャック、ナイフを取出して蒲團の下へ忍ばせる事を忘れなかつた。

夜が深けるに從つて、眠れないのに從つて、眞壁の神經質の眼や母親の脂肪肥りの躰が、一重の襖を透して見えるやうて、敵地に在るの感がます〳〵深かつた。そして一番鷄を聞いてウト〳〵とした



か、その睡りは二時間と續かなかつた。

ハッとすると、洋服箱を押込んで置いた梯子段下の押入で鼠が荒ばれて居た。襖を隔てゝは厭な溜息が聞えた。洋燈を點けて鼠を追ひ、便所に行き、歸つても、灯は消さずに床へ就いた。それからヤットの事で寝たと思ふと夜が明けた。

「ヤひどい霜だ！」

眞壁の母親が汲んで與れた湯で面を洗ひながら、裏の空地の枯草原へ雪のやうに置いた霜を見ながら、私は斯う言つた。睡眠不足の眼が痛んだ。

「今朝の霜は珍らしう御座いますよ。」

「昨夜も馬鹿に寒かつたねえ。」

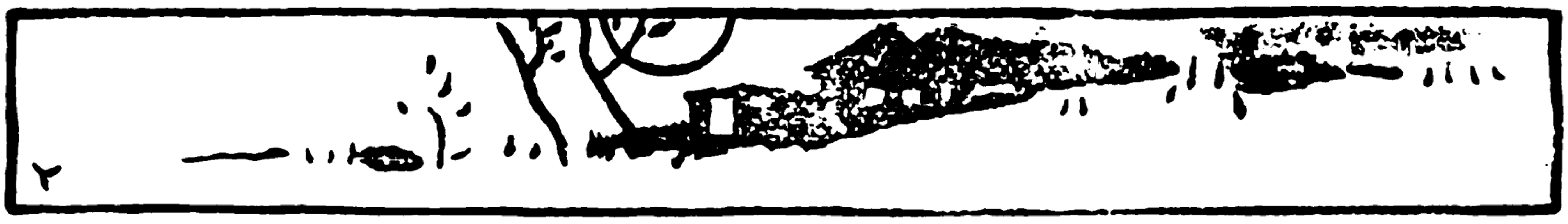
「エヽ寒さも今迄で一番ヒドう御座います。」

「昨夜家の中がピシーン／＼とよく鳴つたが、ありや凍み破れるのか知ら？」

「凍み破れるわけでもありますまい、晝間でもピシ／＼致します。新しい木口が段々乾いて來て自然に罅破れるので御座いませう。」

「ムウなる程！」

西洋料理から注文の朝飯が届く頃には、内庭から八疊の障子へ掛けて朝日が一パイに差し、萎れ懸かつた山茶花の淡紅の花瓣も濕つて見え、青黒い葉からはキラ／＼光りながら雫が落ちた。



九時頃になると室も暖まり、氣も落着いて眠くなつたので、寢衣を被いてゴロりとなつた。割合に安らかな睡りから覺めた時は正午少し前で、圖らずも風邪は脫けたらしく、頭が輕く、躰が幾らか汗ばんで居た。家には眞壁の母親の外は誰も居ない樣子であつた。私は冷たい水で面を洗つて裏の木戶から空地へ出た。

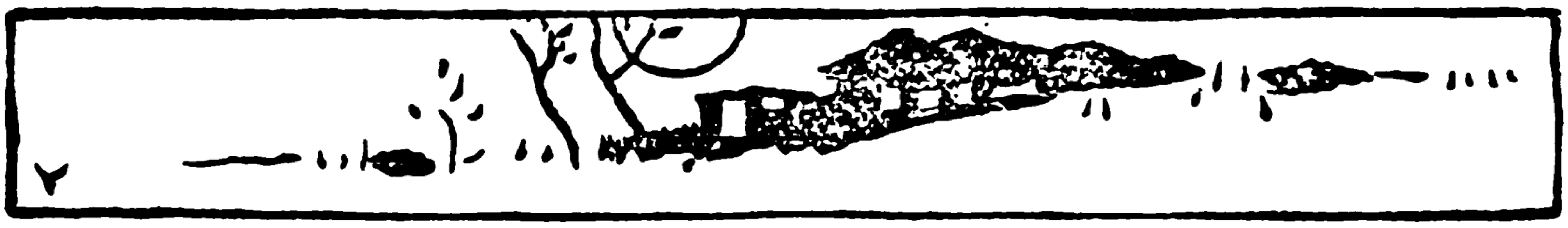
其所にも日が一パイ當つて居て、枯草からは陽炎が立つやうに思はれ、下の寺を見下す崖の北盡頭には、藪のやうに見える山茶花の老木が眞白の花を無數に着けて居た。高い欅の梢ゑには、頭が白く翅の黑い小鳥が、尾を振りながらチン／＼と鳴いて居た。そして黃ばんだ草原には、所々に褐色の落葉が堆かつた。何やら小年時代の故鄕を偲ばせる景色に興を得て、私は家へ飛び戾つて燐寸を持つて來、落葉を掻集めて火を點けた。朽葉の香りのする白煙は、始めはゆる／＼と立ち昇つて右に左に日の光りを潛つたが、やがて豐かに二階の黑い瓦屋根の上に靡いて、末は東、青空の方へ消えて行く。

愉快な子供らしい心になつて、その焚火の周圍をぐる／＼廻つて居ると、眞壁の母親が竹箒を持つて煙の下を潛つて來た。そして其邊の埃屑を火の方へ掃き寄せながら、「大變好い日和で御座います。……乾いてるから好く燃えますね。」といかにもゆつたりとした笑顏を見せた。

その平凡の挨拶に感じたわけでも無いが、何やら私も笑顏を酬ひずには居られなかつた。

「こゝらは佛樣達の坐つて御座つた所かも知れないが、斯うして見れば、タゞの草原だ。……焚火は晝間でも好いもんだねえ。」

興に乘じて、婆さんには通じさうもない、自分にも意味があるやうな無いやうな斯樣な事をも言つて見た。髮の黑い婆さんは思ふ事も無い風で、たゞセッ／＼と焚火の方へ掃き寄つた。



私は書物を取りに室へ戻つて、また來て見た時には、四邊は綺麗に掃き淸められて、焚火のみがひとり燃えて居た。草を藉いて書物を展げた。

『阿母さん厄いぢやないか。』

フト顔を上げると、鳥打を被つた眞壁が垣根際まで來た。そして私を見ると「ア」と挨拶して、勝手口から内へ消へた。

やゝあつて母親がまた出て來て、私の側へ寄つて、「悴が貴方に氣の毒がつて、早く引越さなきや顔が合はされないつて、今も行つて參りましたが、好い鹽梅の家が直ぐにも入れるやうになつてるさうです。」と言つた。

午后には、私は安心して社へ出懸け、夕方歸つたが、まだ引越す樣子は見えなかつた。『明日限りと言ふ約束だから、もし明日になつてもグズ／＼して居るやうなら……』と烈しい事を豫想しても見たが、昨夜のやうにイラ／＼はしなかつた。

矢張折々カケ取りの聲がして、やがて前夜の、あの錆びのある聲も來た。

『明日は引越しだつて、さうですか？』

『へエ……それで少しお金の仕度をしねばなりませんが……』

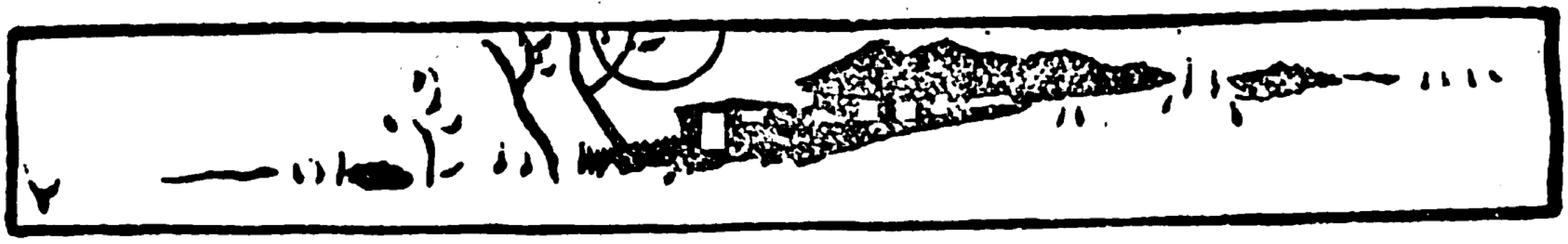
『ようごす、外で都合が出來ませんでしたら私が……』

ハア！婆さんトウ／＼瞞し轉ばしたな――と思つて私は可笑しかつたが、いよ／＼越して行く事が確かになつたので嬉しかつた。

『阿母さん外へ出るの？……そんなら沓下一足買つて來てお呉んな。』といふ聲がして、格子を開け閉てする音がして暫時、三疊で眞壁の兄弟が何か言ひ爭ふらしかつた。すると弟の方は泣き出した。

『不可ないねえ。大きな人が大人にならなくちや。』

『いくら直せつて言つても「己れが／＼」つてゾンザイな言葉を使ふからです。』



「口で云へば好いぢやないか！これこんなに腫れ出したアーア丶ン、ア丶アー」
「そりや兄さんが餘りだ。叩くといふなあ亂暴ですー」
……………………
母親が歸つて來るまで弟の方は大聲立て丶泣いて居た。私は下宿屋へ殘して來た同じ年頃の弟の事を考へて、此方へ呼び入れて何とか賺してやらうかとも思つた。
「正！お前何したの？兄さんが叩いたつて？…少し明ければすぐソレだ！ドウ？… オヤこんなに黒ずんて、困るぢやないか京二！」
それは親心の充ち滿ちた聲であつた。
錆びた聲は夜を更かして歸つた。正（？）と言ふのは長い事メソ〳〵して居たが、六疊へ廻つて寢たらしかつた。その後て、臺所で味噌を擦る音が續いた。母親てなくつて誰であらう！私は氣の毒になつて了つた。
その晩は、すべての者を憐れんでやりたいやうな心で安かに寢た。
翌日の夕方、人を遣つて呼寄せた私の弟が、彼の夜具や本箱を積んだ荷車の後に蹤いて來たと引違ひに、眞壁の者もその下宿人も皆引越して行つた。
その晝間、私は心安く、此方から色々の事を問ひ掛けて、眞壁母子と一時間ばかり話した。眞壁は一昨年工手學校を卒業して、昨年兵に取られ、半ケ年足らずの輸卒勤務を終へて歸つて來たが、口が無くて遊んで居るとの事であつた。
引越した後へカケ取に來た八百屋は『さうですか、移りましたか…あ丶して東京中を食ひ歩るくんだ！』と言つた。
廣い家に靜かに座して、私は彼等の事を考へて見た。

——（四十二年十二月七日稿）——



市街を散歩する人の心持

木下杢太郎

東京の市街を、日曜日の午後あたり、明日は日曜だといふ安心で、と見かうみ、ぶらぶら歩るく程樂しみなものはない。たとへば神田の五軒町あたりは、廣い道の兩側に柳の並木、日にきらめける鐵條の上をけたたましい電車の嵐、と思つて一寸道傍の店先を覗くと、靑く汚れた溫い硝子戸を越してお七、吉三の古い錦繪、その隣を乳房をあらはに髮を梳る女、銘は何れも歌麿筆としてある。全體が靑い調子の横に長い方形の景色繪がある。廣重といふ落欵で鳴海の景とある。代赭の色の、はた白に淺葱の縞模樣、特産の鳴海絞は並び立つ太物屋の軒に吊り下つてゐる。その前の街道をば荷を付けた馬が通る。旅人めく一群の人が通る。

古い錦繪の包藏した情調は音樂の如く散歩する人の心を襲ふ。一種の譬へ難き哀愁が胸の底に涌く。その絶ち難い愛着を捨てて猶も歩を進めてゆくと、思ひがけなくも一列の赤い郵便馬車の驅け來るのに出遇ふ。今得たまどかな氣分は忽ち破壞せられたので、不安の眸を放つて、市街ををちこちと見廻はしてゐると、斜日に照らされて、夢の如く浮び出てゐるニコライの銀灰の壁が目に入る……神田の古風な大時計がぢん、ぢん……と四時をうつ。

——かう云ふ平坦な記述が他の人にも興味があるかどうだかは知らない。併し自分には東京の景物



ほど心を引くものはない。それも單に視覺と、聽覺と、或は空氣の壓迫に感ずる觸覺と、偶は又、日本橋、殊に本町、大傳馬町にきく醋酸、鹽素瓦斯、ヨオドフォルム乃至漢法方劑の怪しい臭ひ、九月の頃にはまた通一丁目、二丁目邊、長谷川町の邊にきく、問屋に出始めた冬物の裏地のにほひ——之等のいろいろの匂ひに感應する嗅覺といふやうなものの方面から見てである。

かくして市街の散歩者は二時間、三時間の漫歩の間に官能の雜り織る音樂を味ふ事が出來る。——

自分は今心が惑ふ。九月の朝の日比谷公園の印象を語らうか。或はその八月の夜を描き出さうか。或は更に興味ある秋の夜の銀座裏町の生活を語らうか。それとも春雨頃の、沈んだ三味線の音のやうに、淡く寂しい深川の河岸の情緒を語らうか。

嘗つて自分が永井氏の「深川の唄」を讀んだ時、このさとの哀れ深い生活が氏の豊麗な才筆に取り入れらるるといふ事を如何に喜ばしくも亦妬ましくも感じたつたらう。かの同盟罷工の一揆のやうに獰くむくつけき文明の侵略軍の、その尖兵にもたとへつ可き電車さへも、この里には、高橋より奥には寄せて來なんだ。だからあの不動樣にも、昔のままに奇しい蠟燭の火が點つてゐる。この娘たちは冬にも足袋をはかぬ。まだ廣い黑繻子の襟をかけて居る。濃い紫の半襟をかけてゐる。赤い手からをかけてゐる。昔の芝居によく出たやうな深川の質屋も、材木屋も、石材問屋も、醬油屋の低く長い藏の壁も昔のままに沈默してゐる。さうして考へて居る。悲しんで居る。緣日にはまだ覗き機關が哀れな節を歌つてゐる。阿呆陀羅經が人を笑はしてゐる。——



ある午後、自分は云ひ難き憂愁に襲はれて、獨り寂しく深川の小溝の縁に立つた。不動様の裏手に當つて居る所であつた。

春の日の午后三時は油の如く靜かであつた。細い雨もしばし途切れて、空の一部には雲の色が黄色になつた。向ふ岸の家の軒には、一面の樹木、中にも新しい檜はかの甘い匂ひを春の重い空氣のうちへ流すかの如く見えた。默つて水の面を眺め乍ら、自分は向ふ岸の新しい二階から漏れる長唄の三味線の音を聽き澄んだ。單調な絃のリズムが流れまた淀む。子供にても敎へて居るのかしらん、時々同じ節を繰り返す。蒸すやうに温い——また柔かな頸に壓されるやうに重い春の午后の空氣のうちに、自分は夢みるやうに、一種の輕い疲勞を感じながら、耳に來る節々に少さき時への聯想、まだ殘つてゐる昔の空想を一々結びつけてゐた。

忽ち自分の後ろから女の人が來た。(こゝはまた渡し場であつた。)黒い襟に、赤つぽい唐棧の絆纏を着た若い女が渡し場の棧橋の端に立つた。女は輕く兩手を擧げる。さうして人を招くやうな手付きをして、かの三味線の方角に呼びかけた。

「ちよいと、ちよいと、もし。」

女は宛もない人を呼ぶ。

「ちよいと、ちよいと、あのね、敷島を一つ。」

自分が——宛もない——と思つたのは間違であつた。三味線の二階の下の店からは(そこは渡し舟の賃を取る所だつた。)急に人も見えないのに返事が聞こえた。

「二つですか?」



「一つ！」

「お釣りぢやあ無いですか？」

「二錢！」

と高く答へた。まだ敷島が八錢の時であつた。

少時らくして年老いた男が客を一人載せて渡し舟を穿いて居た。釣と烟草を女に渡して、それからまた、もうそこに集つてゐた二三の客をまた舟に載せて岸を離れた。その時自分も、昔の淨瑠理に出さうな舟にのつて、眠むたい三味線の音律をきき乍ら老人に竿を穿かして、薄きカアマイン色に曇つた春の空氣を岸のあなたに渡つた……

人は屹度こんな筋もない話を笑ふてあらう。然し鋭敏な官能で、且近代の藝術に慣れた人の空想力はよく自分の不十分な描寫を補つて呉れるのであらう。自分は安んじて更にまた話を續ける。

ああ自分ばどうかして、せめては、かの日比谷公園の九月下旬の曇つた朝の枯草の匂ひを形容して見たい。柵で圍まれたやや廣い方形の園の中には、秋のやや黄ばんだ雜草が思ひ思ひの空想に耽つてゐるやうに匂つて居た。昔の黑田氏のスケッチに屢く見られたやうな、光線の爲にコバルト色に輝いて居る一群の草刈女が、繪の中でのやうに草を刈つてゐる。刈られた草は山に積まれる。日は司法省の屋根の上に出てゐるのだから、柵に立つてゐる人には、枯草の、日を受けない陰の一面が見える。枯草の山の周圍の綠は黄金色に輝いて居る。陰になつた部は、言葉では到底形容の出來ない色に曇つてゐる。せめてあの色調——あの枯草の束だけでも、心ゆく許りに、日本の油繪の上に見たいと望ま



ずには居られなかつた。

司法省、裁判所が日かげになつて漠々と紫色に煙つて居るのも美しい。その下の一列のポプラスの梢の鋒のやうな緑金色の輝きも心を引く。殊に目の前に、堀に沿ふて植はつてゐる木は、漆に似て更に細かい對生葉を有つてゐたが、黄いろい枯葉を雑えた枝ぶりは繪畫的に非常に心地がいい。丁度中から出て來た園丁に其名を尋ねたら「しんじの木つてえてす。」と答へた。

草の中に子供が遊んでゐる。白い蓋をした搖籃車の中に嬰兒が眠つてゐる。遠い小山の下に盛装した一群が現はれた。――凡ては秋の朝の公園の印象を語るに適當な材料てあつた。自分は油繪かきにならなかつたのを悔んだ。

唯出來る丈長く此印象を銘じて置く爲めに、自分は友人を拉してその近くの料理屋の二階に登つたさうして重い緑色のペパミントと濃い珈琲とを併せ飲んだ。欄干の日差はやがて正午に近いといふ事を知らした。――

「では皆さんに申上げますが、之は私の長男てす……」階段に下りかかる時、葦簾の蔭を隔てた隣室からかう云ふ言葉を聞いた。そこには本郷座的に盛裝した一群が卓を圍んでゐた。高い島田を結つた女の後姿も見えた。年とつた男の人が今立ち上つて若い人を紹介する所だつたらしい。そんな聲を聞きながら、自分等は再び外へ出た。

人は沈默してゐる。足の爪先に病でもあるやうに、じつと物うれはしげに地の面を眺めてゐる。そこには海底のやうに緑い孤燈の波をうけて、白と紅との芙蓉の花が神經的に顫へて居た。



星のない八月の夜は暗かつた。どことなしに、然し、なつかしい夏の夜の光がおぼめいて居た。

噴水の夜の音樂。

暗く、陰鬱に、しかも懷しく悲しい水の曲節は、たとへば、西洋樂を聽くに熟せざる吾等若き東洋人が、チヤイコウスキイの夜の曲のロマンチツクな佛蘭西的魯西亞的旋律をきく時に、どこかの國が、はたその國、その國民の烈しき情緒生活が音樂の後ろにかくれて居るとは感じながら、遂に其本體を摸索する事の出來ないやうな覺束ない心持を、池を圍む人に、女に、また青きポプラスの並木に、柔らかき夜の空氣に起させて居るのであつた。

調和を失せる痛ましい日本が、一方に勤儉尚武を鼓吹しながら、同時また恁んな近代的情調を日比谷公園裏に藏して居るといふ矛盾を笑はずには居られなかつた。

共同ベンチに腰を掛けた一群の人はどういふ感じを持つてゐるか、自分は切に知りたかつた。ここは義太夫のさわりに、新内に、宇治は茶に習ひ得た美的需要を滿すに適する所ではなかつた。

高く昇る水は夢の如く白く、迸り飛ぶ水滴は敍情詩の碎けたる靈魂のやうに紫の街燈の影を宿して、さやさやと悲しく池の面を滑つてゐた。

その前に、美的趣味に於て亡國の民は默々として、足の指先の病を憂へるやうに、俛首れて不可思議の音樂を聞いてゐた。

自分は八月の或夜日比谷公園を歩るいて、恁う云ふ光景に出遇つた事を覺えてゐる。

數寄屋橋を渡つて銀座の通りに出ると、そこはもう夏の夜の、涌くが如き歡樂の叫びにふるへて居た。



自分は銀座の通りの雜踏を思ふごとに、その横町で或秋の夜偶然出遇つた一事を想ひ出さずには居られない。——

其夜も、自分は古い妄想に沈みながら街上を漫歩してゐた。その妄想といふのは、どうしたら今の日本に於て、自分等の一生のうちに、心から滿足するやうな趣味の調和に奉する事が出來るだらうかといふ疑てある。自分はもう雪舟や、芭蕉や、寒林枯木や、寒山拾得て滿足する事は出來ない。それかといつて西洋風の藝術はどうしても他人がましい。中村不折氏、橋本邦助氏等が新藝術、綱島梁川氏海老名彈正氏等が新宗敎でもまだまだ滿足は出來ぬ。して見ると今の世は渾然たる調和を望む事は到底不可能の時世である。フイヂアス、パラヂオ、ゲエテエ等が時ては無い。サン・ペトロ、サン・ジヨオルジヨオ、フアウスト等の生る可き世ては無い。——結局自然主義の世だ。印象主義の世だ。成程自分等に、黑衣の男子と、白裸體の女子とを配する「草上の朝餉」(Manet Le dejeuner sur l'herbe)の趣味が興味のあるのも無理は無いのだ。

調和せざる事象に、時代錯誤に、濠渠の上なる帆を張りたる軍艦に、洋館の側に起る納曾利の古曲に、煉瓦の壁の隣りなる格子戸の御神燈に、孔子の尊像の前に額づくフロツクコオトの博士等に——是等の不可思議なる光景に吾等の腦髓が感ずる驚駭を以て自分等の趣味を滿足して置かねばならぬ。から云ふ粗い對照なら東京の市街にいくらでも轉つてゐる。現に此、銀座街頭の散策の間にも自分は出遇つたのであつた。そこは丁度地藏さんの緣日だつた。道の兩側には、折柄の菊の花賣がカンテ



降て白い花に水を灌いてゐた。盲目の三味線彈は自分の足場を一生懸命で捜して居た。ふと氣付くと月の良い晩だ。而かも沛然たる一雨のあとて、煙草製造工場の屋根が銀碧の色に輝いて居た。工場の屋背にはまた半球形の圓頂があつた。それが月の陰になつて暗い紫灰銀色の空氣に沈んでゐる。この珍らしい光景を見ると、自分は、一體どこの國へ來たんだい！と怒號つてやりたくなつた。街道の舗石の上に一團の黑い人群が居る。街頭の謳者を行人が取り圍んだのであつた。

高等女學校のスチユデント、
腰にはバンドの輝きて、
右手に持つはテキストブツク、
左手にシクルアンブレラア、
髮にはバツタアフライ、ホワイトリボン……」

自分は亦此處にも日本らしからぬメロデイを聞いておや〳〵と思つたのである。若し自分が威尼西亞のカナアルの縁をでも歩いてゐるのなら、そこに愿んな節を聞かうとも、乃至はアリオストオ、タツソオ等が古き朗詠を聞かうとも、此時のやうな不可思議な感じは抱かなかつたらう。併し自分は今東京を歩るいて居るのだ。河岸縁には鍋燒溫飩がばたばたやつてるではないか。煉瓦の壁の側の瓦斯燈には松葉の輪に「歌澤」とちやんと書いてあるてはないか。こんな「髮結新左」的情調へあんなべらぼおなバツタアフライ、ホワイトリボンが逼入つて來てたまるものか。然し、事實は、嘘のやうだが、事實だから仕方が無い。愿ういふ風にいふと、全く誇張した修辭法と思ふかも知れないが、知の外の、感情の上には確かに不可思議だ。



それから……自分はぶらぶらと京橋まで歩いて來た。「金澤」といふ寄席の隣の、何とかいふ小さいしる粉屋でしる粉をのんで、その家を立ち出てると、三味線の音は手に取るやうに聞こえて居た。

外は、夜が寒い。月は見えなくつて暗かつた。唯金澤の二階は、ぱつと明るく、燈の光が一面の障子を照らして居た。そこから三味線の音が聞かれるのであつた。軒行燈に「金之助」といふ名が見えたから、多分今のも、あのもう年増の女の三味線彈の長唄であつたらう。一挺ではあつたが、曲は何か賑かなものだつたと見えて、彼の長唄に特有な、單調な、強くリズミカルな節を幾度か繰り返しては、また次の撥音ばかりの荒い節に移つて行つていた。三四人の人が立つて居たから自分も立ち止まつて聽いた。一寸と思ふ内につひ釣り込まれて立つて居ると、そこに立つた人々は急に高聲に罵り乍ら立ち去る處だつた。下の木戸番が、そこに立つ位なら內に入つた方が寒くないぜといふやうな皮肉を云つたのだつたと見える。

「べらぼうめ、天下の往還だ。立ちてえから立つたんだい。」といひ乍ら印絆纏の男が丁度歩きかけた。もう立つ人もなくなつた。ただ、まだおかしな女がまごまごしてゐる位なものだつた。前に緣日の通りでも、無理に、謡者の廻に立つ人の中へ割り込むやうには入つたりした、若い、吾妻コートを着た妙な女だつた。そいつも然し行つてしまつた。て、自分もまた歩き出さうと思つて一足踏む時、まだ何だか後ろの方で人が呟くやうだと氣が付いた。實際、矢張人が居たのだつた。頭の禿げた、ずぶよぼよぼな爺さんが、向ひの家の瓦の壁の前に積み上げられた石の下に蹲んでゐた。そうして何かぶつぶつ口小言を云つて居るのであつた。

「ああ、爺さん、お前か？」



と驚いて自分は叫んだ。同時にこの老爺の事について、かつて聞いた事を思ひ出して急に可笑しくなつた。

もと自分が日本橋の裏通りの居酒屋へは入つた事があつたが、その時、親子づれの浪花節語が門口て國定忠次を語つて行つたあとで、居酒屋の内の人もてんてんに調子づいて、いろいろの歌を歌ひ出したのに遭遇した事がある。その時此老爺もその席に居た。そうして齒の拔けた口で以て、自分も仲間に加はつて、ぼけたやうな「我ものと思へば輕し」と歌ひ出した時には、みんなは笑はずに居られなかつた。

その時聞いた話があるが、この老爺はもと東京の士族で、さらぬだに零落しやすかつた維新後の士族の中に、此老爺は更に酒と女とて到頭この年でまだ河岸の輕手にまで落ちぶれたのださうだ。それても殆毎晩缺かさずに此酒屋にくる。だが、歌を自分が歌つて笑はれたのは其晩初めてだと云ふ。自分こそ歌はないが、歌は本當の好きで、この酒屋を出れば屹度どこかの寄席の近くへ住んださうだ。金澤はすぐ高座の下が往來だから、よくそこでその地びたの上に寢てゐるのださうだ。

「ぢいさん、また來たな」と、さういふ話を知つて居たから、自分は話しかけた。今迄獨言をいつて居た老爺は急に相手が出來たものだから、

「本當さ。なあ、天下の往還てえ、べらんめえ、何つてやがるだ」とやや聲高に自分に云つた。

……そこから、自分はぢき歩き出した。京橋の通りに出ても、實際だつたのか、それとも耳鳴りだつたのか、まだかすかに長唄の三味線が聞こえて居た。

（XL. 09.）

脚本

落潮（一幕二場）

河井酔茗

人物

令嬢　真弓妙子
学生　巴光子
夫人　柿崎直子
婆や　おさく
　　　戀の幻
　　　詩の幻
女中　一人
車夫　一人

場所

第一　湯殿の宵

第二　居室の深夜

湯殿の宵

舞臺は湯殿に直ぐ續く一室、大姿見を据えたる外には粧飾少し、中央に一脚の卓子を置く、卓上には赤き草花を挿したる一輪挿と、二三冊の書物とを載せ置く。合環妙子、二十歳位、湯上り姿の取りつくろはぬ粉粧、椅子に腰掛け卓に片手をついて、うつとり姿見を凝視てゐる。

合唱

しろとしろ　あをとあを
もつれあふ　ひかりより
つれならぬ　うつくしき
おもざしの　いろそはむ

おどろきと　おそれとの
せまりくる　すきまにも
あゝわかき　かゞやきの
かゞりびは　のにもゆる

妙子。　あゝ惜しい、惜しい、鏡に映つた私の影を見ると、此まゝ青春の姿を殘して置きたい。ふさやかな髮の毛も、ゆつたりした胸も、白い肌も、黒い瞳も、頓て他の所有になるかと思ふと、女の誇が鏡から去る影のやうに消えて了う、生れたまゝに一滴の混濁もない私の血汐を、今日まで暖めて置いたのは誰の爲であらう、想ふ人には私の體はあげられない、私は何うしても何うしても知ら

ぬ人に嫁かねばならぬ、諦めも何もせぬさきに、私の身の運びは日に日についてゆく、私の力では支へることの出來ぬ強い人達に抑へられて了つた。もう勝手な夢は見ることも出來ない、夢の鏡は破れて了つたのに、美しい姿はあり／＼と映る。

女中出づ

女中。お孃樣。お孃樣。

妙子。は

女中。お湯ざめに薄着はお毒でございます、此お羽織を召しませ。

妙子。いゝよ、寒くはないから。

女中。ハイ、ても何だか夜風が冷たいやうでございます。

妙子。其處へ置いておけばいゝよ。

女中。ては置いて參ります、早くお召なさいませ。

女中退く

妙子。ゆあみして泉を出づるわが肌に觸るるはつらき人の世の衣。湯ざめがしたら又湯殿に行かうまで。空は春らしうなつて來たが、私はもう青春の歷史を繰返すことが出來ない、私は空しき憧憬に疲れたのかしら、いゝえ、いゝえ、まだ、まだ憧憬てゐる、想ふてゐる。

表情動く

妙子。あゝ同じ心持の人がなつかしい。

卓の上にうつむく、少間、舞臺の光線を心持暗くす、湯殿の壁より、戀の幻、男性、白衣の神々しき姿にて出づ。

戀の幻。妙子さん、妙子さん。

妙子。　ハイ。

見上ろ顔、夢みるやうな表情、憂愁を帶ぶ。

戀の幻。　あなたは戀を僞りましたな。

妙子。　いゝえ、誠實です、僞りません。

戀の幻。　然うなら然うとして置きませう、自分は咎めに來たのでもなく、試しに來たのでもないが、只あなたの胸の血をもらひに來ました。

妙子。　さしあげませう、いくらでも、でも殘酷ではありませんか。

戀の幻。　孰が殘酷か分りません、あの向ふの山の雪が溶けないさきに、あなたはもう此處を去るてせう、書いたものは皆燒いたでせう、けれども鳥の巢はあなたの胸にあるのです、返して下さい、巢を。自分は眠ることも出來ません、生きることも出來ません。

妙子。　マア お待ち下さい、私はもう疾くに死んだつもりになつてゐますから、胸なんか冷たくなつて了つたのです、あなたにあげるなら青春の若々しい血汐です、それがもう涸れて了ひました。

戀の幻。　噓です、涸れたものがそんなに美しい顏をしてゐるでせうか、ゆたかな頰をしてゐるでせうか、あなたは生きて居ます、生きて居る胸の血を何うかして自分に下さい。

妙子。　仰有らなくとも差上たくて悶えてゐたのでございます、今となつては美くも醜くもございません、今に女のぬけがらになるのです。

戀の幻。　ぬけがらなら猶もらひたい。

妙子。　私、何う言へば宜いでせう。

戀の幻。　戀は無言です、沈默です、誠實を證して下さい、生命を貰ひに來たのではない、生命はあなたのもの、誠實は此方へ下さつたものではありませんか。

妙子。　何うしたらそれをあなたに捧げることが出來ませう、からだ？　こころ？　離せるものなら離したうございます。

戀の幻。　靜に考へて御覧なさい、自由とは得手勝手を指して云ふ言語ではありますまい、苦痛に堪へて心の眞に殉ずるのが自由ではありますまいか、樂に成立つものなら男と女とは皆戀をします、苦しいから恐れるのです、逃げるのです、逃るものは何處までも自分は見免しません。

妙子。　ではお許し下さらない？

戀の幻。　一度許したものを再度何を許すのです。

舞臺更に青し

妙子。　歌の戯れを、今まで書いて上げた手紙は皆一時の戯れとして見免して下さい。

戀の幻。　あゝ墮落、あなたは墮落しました、現實に服從しました、戀を欺き、詩を欺き、はては自身を欺いてゐるのです。それで處女の誇がありませうか、青春の純潔はそんなに價の安いものでしたか、水平より下に隠れた船は無いのも同じです、それであなたは淋しく思ひませんか、不安てはありませんか。

妙子。　えッ

戀の幻。　それてあなたは誘惑に勝つたつもりでせう。明るい道へ出たつもりでせう、惡魔の手から脱れた氣でせう。誘惑かも知れませんが、人生の尊い影は其刹那に閃いて居たのです。あなたは戯れ

だと云ひました、勿論戯れてす、其戯れが全く人間の眞の相を表はしてゐないてせうか。人と人と摺れ合ひながら、風に騒ぐ木立のやうに、只ざわつくばかりて、皆が思ひ思ひにかけはなれたことを思つて、淋しい、暗い途を歩いてゆく時に、戀から見出された誠實ほど眞なるものはない、魂の戯れなら戯れてもよい、是を咎めて罪惡だと云ふ者は、罪惡に荒んだ輩が、眞に歸れないから詐まうとする陷穽に過ぎません。

妙子少しづゝ頭を垂れてゆく。

戀の幻の同體より分離せしかの如く（後ろより）詩の幻現はる、扮粧も殆ど同じ、但だ着衣の色は極く薄き紅色、詩の幻は始終舞臺の上を徐ろに逍遙ふ。

戀の幻。　斯う說いて來ると、戀を段々理窟詰にするやうてすが、情と情と相映り合つた刹那にこそ、言語にも行爲にも、寸分の隙も見出し難いが、一度齟齬つて間隙が出來ると理窟が生じて來る、理性に訴へるより外に心の間隙を充す方法がない、それてなくてさへ世間は、言語と行爲の矛盾て保つてゐるやうに見えるのに、深いところから來る美しさが、表に現はれる機會がなかつたら、魂はから〱に乾いた木葉のやうになつて了ふ、其機會を戀にも捉え、詩にも捉えながら、あなたは何うして逸さうとするのてす。

妙子。　戀に逸れましても詩には逸れません。

詩の幻。　何とも分らん、忘れさうてす。

妙子。　あら懷しい詩の姿、何うしてあなたを忘れませう。

妙子起上る、詩の幻と妙子と殆ど同じ距離を保ち、舞臺をゆるやかに步きながら對話す。

詩の幻。　何とも分らん、あなたは忘れまいとしても、忘れさせるものがあるのてす、それてすから

今はお別れに來たのです。

妙子。　疑り深い方ね、私は詩に執着を持つて居ります。

詩の幻。　いくら執着があつても、青春の血汐が涸れると、詩の潮も亦涸れるのです、今に昨日通つた停車場のやうに詩を忘れてしまひます。

妙子。　だつて私は何處までも詩を愛します、戀には二つあつても足りぬ私の生命でございますけれど、せめて詩の爲になら役に立てたうございます。

詩の幻。　若い時の戀と、若い時の詩は、人間の昔語りに殘るばかりです、我等は若い時を持つた人を探してゐるのです、女王の冠でも時日がたてば古びます、役に立てたうても、自然に滅びゆく青春の姿と共に、我等の影も薄れてゆきます、戀のやうに一時に面を背け合ふことはなくとも、次第に遠ざかる霧のやうなもので、ものが明確と見えるやうになれば霧はありません、斯く言ふ我等も幾人となく失ふ度に悲しいのです、併しわざ〳〵お別れに參つたのは、まだそれほど遠く離れて居らぬ證據かも知れません。

妙子。　暫くでも宜しいから傍に居て下さい、あなた方に行かれて了うかと思ふと、心細くて、心細くて堪へられません。

戀の幻も二人と共に少しづゝ歩む。

戀の幻。　詩は離れやうと思へば、離れられるから然う言ふのでせう、自分には胸の血を下さい、それとも去れと言ひますか。

詩の幻。　去れとも言へまい、胸の血を與へることも出來まい、君も強さうに見えてまだ根は弱いのだ。

戀の幻。　我は弱くない、對者(あひて)が弱いのだ。

詩の幻。　弱い對者(あひて)の後方(うしろ)に強いものが控えてゐるから動かし難い、それぱかりでない、強いのを盾(たて)に吾儕をする男の多い間は、眞の強いのも通らない。

戀の幻。　此處に二人の味方がある、妙子さん、強くなれませんか。

妙子。　はッ

妙子表情變る、恍惚(うつとり)と二人に手を取られんとす、忽ち奥の方にてお孃樣、お孃樣と呼ぶ聲す、詩の幻退く、次で戀の幻退く、妙子、元の椅子に凭りなほり恍惚として遂に卓の上にうつふす。

獨唱きこゆ、ピアノ演奏。

歩はしづかにあしおと忍び
少女(をとめ)のそばにうかゞひよりぬ
戀のまぼろし歌のまぼろし
一人の姿二つに見えて
たはむれ誘ふうてなの上に
ほこりの花の咲くとはいへど
たゞあこがれの胸躍らせて
きざはし踏めばくづるゝ響

獨唱終つて一分、間(ま)を置く、舞臺の明り元にかへる。　婆やおきく、お孃樣、お孃樣と呼びながら登場、直ぐ妙子の傍に來る。

おきく。　お孃樣、お孃樣、先刻(さつき)からお呼び申してゐましたのに、お返事がないので、何處にゐらつしやいますかと存じました、お孃樣、お孃樣、まア此(こ)んな所でお睡り遊ばして、お風邪(かぜ)でも引いたら何うなさいます、お孃樣。

（妙子頭をあげる）

妙子。婆やか、私睡つて？

おきく。うたゝねを遊ばしたやうでございます。

妙子。自分では睡らないつもりだが、やつぱり夢かしら、例の空想に耽つてゐたのがツイとろ〳〵と夢になつたのかしら。

おきく。何か吉い夢でも御覧遊ばして？

妙子。いゝえ。

おきく。お目出度い日も近づきますから、マア澤山吉い夢でも御覧遊ばせ、オ然う、然う、かんじんの御用事を申上るのでした、あの柿崎様の奥様が、もう歸るから一寸お嬢様にだめを押して置きたいことがあるので、彼方へいらつしやいましとの仰せでございます。

妙子。姉様はまだ入らしつたの、私もうお目にかゝらなくても宜いことよ。

おきく。あなたは宜くても奥様が然う仰るのですから、いらつしやいまし。

妙子。今行きたくないわ、此まゝ靜にして置いておくれ、少し考へごとがあるから。

おきく。考へ事はいつでも出來るじやございませんか、お姉様はあゝして自分のことのやうに御心配していらつしやるのですから、些とはお氣を利かして、お禮の一つも仰るやうになさいませ。

妙子。嫌な婆や、私から頼んだことではあるまいし。

おきく。あらまア呆れたお嬢様、何うしてそんなに吾儘におなりなさつたのでせう。

妙子。私吾儘よ、お前には分らないことだから、姉様には宜しく言つておくれ、ね、婆や。

おきく。それは困りました、それではちよつとでもお顔をお出しなさいませ、御挨拶だけで宜しうございますから。

妙子。うるさいね、じやあ直ぐに行てよ。

おきく。直ぐいらつしやい。

婆や退かうとする入違ひに、柿崎夫人なほ子丸髷姿、しとやかに入來る。

おきく。おや奥樣、今直ぐお孃樣がいらつしやるところでございます、私が餘計な饒舌をして暇をつぶして居りました。

なほ子。なに宜いよ、一寸だから、あ、婆や、お煮花の熱いのでも一つ持つてお出。

おきく。畏りました。

婆や退場、なほ子椅子に凭る。

なほ子。妙子さん、私もう歸りますからね、餘り遲くなつても家の勝手がわるいから。それで晝間言つたことは能く了承だてせうね。

妙子。ハイ。

なほ子。日は二三日と云ふのですが、都合で四五日と云ふことになるかも知れんから其つもりで居て下さい。

妙子。ですがね、姉さん、其四五日をもう一年ばかり延して頂く譯にゆきますまいか。

なほ子意外と云ふ樣子、婆や茶と菓子を持つて出る、直ぐ退く。

なほ子。何とお言ひなの。

妙子。もう一年延して下さいませんか、何う考へても氣がすゝまないんですもの。

なほ子。　成程、それはお前位の年齢には能く氣が迷ふものだけれど、先刻も能く言つた通り、先方は慶應義塾出の敏才だと云ふし、實家は倉庫の七戸前もある造酒家、何一つ不足はないのだから、願ふても無い良い縁談です、それに大きな聲では云へないが、今此の家も雜多の出費つゞきて、以前のやうに餘裕はない、然う云ふ家と縁組をして置いたら、弟の爲にも氣丈夫だし、病身のお父樣を安心させるには何よりでせう。

妙子。　お父樣にも安心させ、弟にも此家を皆遣つてかまひませんから、私だけもう一年自由にさせて下さる譯にゆきませんか。

なほ子。　ふーん、また學問に氣が迷ふたのかね、そりやお前は書物もお讀だし、文章もお書きだし、萬事は能く分つて居るだらうけれど、まだ今の時代で女の一本立は、だうして、だうして危險よ、其證據にはお前のお友達で、然んなことを云つて家を出たものに成功した人が一人でもありますか、光子さんだつて、生じつか女學校に通つて書物や雜誌を讀み噛つたおかげて、氣位ばかり高く、始終家の中ても光子さんのことから起る紛亂が絶えないと云ふじやありませんか。

妙子。　私のは巴さんとも意見が違つてよ、あんな突飛な解放論なんか……。

なほ子。　まアさ、假令ば意見は異ふにしても事は一つてす、私の言ふ事はお前などから見ると極く平凡てせう、私も平凡だとは知つてゐます、けれども世間並外れては何が立つてせう、先づ第一に吾身の立つてゆくやうに考へをつけねばならぬてせう、其上て詩が好きなら詩も作らうし、文章が面白ければ文章も書かうし、そんなことに干渉するやうな先方とは違ひます、私だつて大切の妹を遣るんてすもの、あたまから束縛しさうな家へは決して勸めません。

妙子。　それは分つてゐますけれど、何だか餘り急ですもの、もう一年くらゐ考へさせて貰つても宜さうに思ふのです。

なほ子。　宜くありませんとも、こんな話はパッと花が咲いた時にまとめて了はぬと、一つぐれ出すと何處までぐれるか知れないものなんですよ、ね、兎に角四五日中に見合をして、ほんの形だけで、式は後になつても假祝言を早くしたいと云ふことだから、然うして極りさへつけば、後はいくらでも妙子さんの思ふやうにしてあげます、私は氣が急くから今夜はもう歸りますからね、いろ／＼氣を迷はさずにね、その氣になつて頂戴、家の爲を思つて、ね、妙子さん。

妙子。　は

なほ子。　オヤお前羽織を何故被ない、寒いじやないか。

なほ子起つて手づから羽織を妙子に被せやうとする、妙子も起上る。

妙子。　は、私被ます。

なほ子。　お被なさいよ、若い間はいろ／＼の取越苦勞や、餘計な心配をするもんだけれど、後になつて考へてみりやつまらないことに氣を揉んだものだと可笑くなる位よ、サア早く袖をお通しなさい。

羽織を肩に載せたまゝ妙子物思ひに沈んでゐる。

なほ子。　では私歸りますよ、早く居室へ行つておやすみなさい。

妙子。　ハイ。

妙子一歩あるき出す途端に、羽織肩よりすべり落ちる。

なほ子。　あらまア、此子は何をぼんやりしてゐるのだらう。

なほ子困つたと云ふ樣子、妙子遠くを見てゐるやうな表情、舞臺かはる。

（つゞく）

釣

ペエテル・アルテンベルヒ作

鷗外口譯

「釣なんといふものはさぞ退屈なものだらうと、わたしは思ふよ。」かういつたのはお孃さんである。大抵お孃さんなんといふものは、釣のことなんぞは餘り知らない。このお孃さんもその數には漏れないのである。

「退屈なら、わたし爲はしないわ。」かういつたのは褐色を帶びたブロンドな髮を振り捌いて、鹿の足のやうな足で立つてゐる小娘である。

小娘は釣をする人の持前の、大いなる、動かすべからざる眞面目の態度を以て、屹然として立つてゐる。そして魚を鉤から脫して、地に投げる。

魚は死ぬる。

湖水は日の光を浴びて、きらきらと輝いて、横たはつてゐる。柳の匂、日に蒸されて腐る水草の匂がする。ホテルからは、ナイフやフオクや皿の音が聞える。投げられた魚は、地の上で短い、特色のある踊ををどる。未開人民の踊のやうな踊である。そして死ぬる。

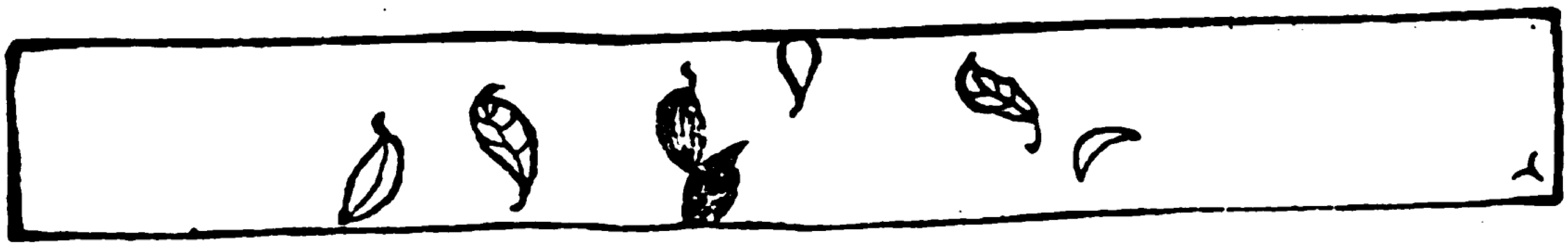
小娘は釣つてゐる、大いなる、動かすべからざる眞面目の態度を以て釣つてゐる。

直ぐ傍に腰を掛けてゐる貴夫人がかう云つた。

"Je ne permettrais jamais que ma fille s'adonnât à une occupation si cruelle"

「宅の娘なんぞは、どんなことがあつても、あんな無慈悲なことをさせようとは思ひません」と云つたのである。

小娘はまた魚を鉤から脫して、地に投げる。今度は貴夫人の傍へ投げる。



魚は死ぬる。

ぴんと跳ね上がつて、ばたりと落ちて死ぬる。

單純な、平穩な死である。踊ることをも忘れて、ついと行つてしまふのである。

「おやまあ」と貴夫人が云つた。

それでも褐色を帶びたブロンドな髮の、殘酷な小娘の顏には深い美と未來の望とがある。

慈悲深い貴夫人の顏は、それとは違つて、風雨に晒された跡のやうに荒れてゐて、色が蒼い。

貴夫人はもう誰にも光と溫とを授けることは出來ないだらう。

それで魚に同情を寄せるのである。

なんであの魚はまだ生を存してゐながら、死なねばならないのだらう。

それなのにぴんと跳ね上がつて、ばたりと落ちて死ぬるのである。單純な、平穩な死である。

小娘はやはり釣つてゐる。釣をする人の持前の、大いなる、動かすべからざる眞面目の態度を以て釣つてゐる。大きな目を睜つて、褐色を帶びたブロンドな髮を振り捌いて、鹿の足のやうな足で立つてゐるのがなんともいへないほど美しい。

事によつたらこの小娘も、いつか魚に同情を寄せてこんなことを言ふだらう。

「宅の娘なんぞは、どんな事があつても、あんな無慈悲なことをさせようとは思ひません」などと云ふだらう。

併しそんな優しい靈の動きは、壞された、あらゆる夢、殺された、あらゆる望の墓の上に咲く花てある。

それだから、好い子、お前は釣をしてお出。

お前は無意識に美しい權利を自覺してゐるのであるから。

魚を殺せ。そして釣れ。

（をはり）



演劇の種類

坪内逍遙氏談

世智辛い浮世とは、昔からの諺であるが、近代のやうに、人々の自意識が鋭くなつて來ては、一段と、此の世智辛さを感ぜざるを得ない。隨つて、之れを緩和するために、娯樂と云つては語弊があるが、人心を慰藉する、新らしい機關がなければならぬ。然るに、世界の文明國中で、日本ほど此の慰藉機關、特に新の字を冠らすべき慰藉機關の備つて居ない國はなからう。演劇もあり、音樂もあり、繪畫もあるが、何れも前代の遺物であるか、然らざれば未成品の低度にある。新代に生れて、鋭く新代の苦痛を經驗する人々に取つては、此慰藉機關が無いといふことは、非常な不幸であると思ふ。而して、この慰藉機關の内で、最も著しい働をするものは、音樂と、演劇とであらうと思ふが、その二つながらが我國には未だ本式に備つて居ない。音樂のことは、暫時さし置いて、演劇だけに就いて云つて見ると、劇場の數は隨分に多く、俳優にも新派舊派と、種々の團躰があつて、脚本の種類とても、隨分夥しいのであるが、それで尚新代の要求に

は添ふて居ない。然らば、我々の欲しいと思ふのは、果して如何樣な演劇かと云ふことになると、先づ一度、現時內外て行はれつゝある、劇の種類を上げて見る必要がある。

劇の種類と云つても、悲劇とか、喜劇とか、又はドラマとか、ヴォードヴィルなど云ふ區別を云ふのてはない。けだし悲劇喜劇など云ふ區別は、古代グリース全盛時代の習慣に基いて區別したのてあつて、十九世紀頃までも行はれ來つた名稱てはあるが、今日ては、寧ろ、唯惰力的にのみ用ゐられて居るので、最も近代の作には、悲劇とも喜劇とも付かない劇が多い。それ故に、只今話さうとするのは、それてはない。劇の觀者に與ふる感銘の性質上から見ての區別てある。之れが自ら三種ほどに別れる。第一を話の便宜上假に普通娛樂用と名付け、第二を、含味反省用と名付け、第三を、遊神同化用と名付ける。元より妙な名前てはあるが、之れは自分が假りに付けたのてあるので、これだけては解りさうにもないから、少しく說明をして見よう。

第一の、普通娛樂用の劇は、一般內外に行はれて居る俗受向きの演劇を云ふので、之れを大別して二つとすれば、可笑味を主とするものと、悲哀又は悲嬉混交を內容とするものとてある。大阪俄の樣なのは前者に屬し、本鄕座、歌舞伎座などて演ずる時代物世話物などは後者に屬する。普通の婦人連や、一般の觀客は、斯かる演劇を見て、充分の感興を覺え、數日の勞苦を忘れ果てることもあらう。併しながら、稍や識見が高く、觀察力の秀でたものに取つては、これ等の演劇は、時としては寧ろ不快感を覺えしめることがある。或は見て居る當座には、つひ釣込まれて笑つたり泣いたりすることもあり、自分を忘れることが無いでもない。併し歸つてから考へると、何だか誑されたやうな、馬鹿にされたやうな心持がしてならないことがある。英語に所謂「阿呆の樂園」に遊んだと云ふ感じが殘る。斯樣な他愛もないやうな演劇も、見識の下琉な人々に向つては、永久に必要でもあらうが、それは

尙、お伽芝居が子供の爲めに必要であるのと同じ意味に於いてであらう。見識の中流以上の人々に向つては、又別種の演劇がなくてはならぬ。其處で第三の含味反省用とも稱すべきものが成立つに到つたのである。

彼の思想劇、又は問題劇と稱するのがそれで、その最も有名なのは、イプセンであるが、大體に於いて同じ流に漂ふ作家は、海外には澤山ある。問題劇とは、或一つの主義又は理論を捕へて來て、之れを脚本の作意全體の上に寫し出し、隱然として之れに對する贊否の意を表明するやうに仕組んだ作を云ふのである。勿論、此の問題と云ふのは、一箇人に關するのではなくて、社會全體に關するを例とし、宗教、道德、その他社會制度全體の批評に及ぶのである。而して之れに自ら深淺があつて、單に夫婦の關係、又は親子の關係などを論ずるに止るが如きもあれば、イブセンの作の如く、夫婦親子の關係を土臺にして、隱然社會全體に對する哲學的槪論を呈出し來るのもある。斯う云ふ作になると、見て居る間の感興が、先きの娛樂用の演劇を見て居る時とは全く違つて、情に訴へると云ふよりも智に訴へて、觀者の含味咀嚼若くは自覺反省を促しつつあるが如く感ぜられる故に、悲嬉交々到ることはあつても、不思議に考へることに氣を取られて、泣かれも笑はれもせず、見て居る間も考へ、歸つてからも考へざるをえないことが多い。中には、バーナード、ショーの樣な問題劇の作者もある。此の人の作となると、外面は喜劇の形式で現れて來て、それ故に、最初には取り外して笑ふこともあるが、併し少しく反省すると、忽ちその笑を引込ませねばならぬやうに、感ずる。何故ならば、作者は飽くまでも大眞面目で、社會人間の缺點を摘發しつつあるのだから、可笑味よりも、苦味辛味が勝つて、笑つた觀者自らが、その實諷刺せられて居るのに心付いて、幕が下りる頃には、我知らず澁面を作る樣になる。此の種の劇は、未だ日本にはない。此間有樂座で演じたイプセンの「ボルクーン」は、我國に於ける思想劇實演の嚆矢である。

斯う云ふ演劇は、作者に依り又見方に依つて、人生智識の上に多少の益を與へて、觀者自身の自覺に資することも少くないが、それと同時に、作者の思想が健全てなかつたり、又は曲解若くば誤解せられ易かつたりすると、隨分弊害を醸すこともある。假令、作その物は健全であつても、觀者その人が識見が低く、且自分勝手に主觀的にのみ劇を解釋する癖の人であると、時として不測の弊を醸すこともあらう。彼のイプセンの「人形の家」などが、その初興行の當時に於いて、種々の誤解を醸し、此處彼處に於いて、家庭の風波を呼起したと云ふのも、無理ならぬことである。殊に丁年前後の男子や、未だうら若い婦人などは、兎角單純に事を解し、一圖に感情的に人生問題に對する傾向のあるものだから、此の種の劇を見るに當つては、多少の警戒を要することと思ふ。

自分は以上二種の演劇の外に、尚一種の演劇があり得ると思ふ。又あらせた方が好いと思ふ。而して、それが過去に於いてはあつたし、將來に於いてもあり得べきである。それが前に**遊神同化用**と名付けたのである。即ち、智に訴へると同時に情にも訴へ、含味反省せしめると同時に忘我遊神せしめ、その清さに、その高さに、その美しさに同化し、自然の間に向上の念を發揮せしめるが如き劇を云ふのである。セーキスピヤーの劇の優秀なものには、慥かに此の力がある。又見たことはないが、ワグナルの音樂劇にも多少この種の味がある樣に思はれる。我國の能樂や歌舞伎の中にも、その秀でたものには多少此の類の特質があつたのだが、時勢の變遷、その他幾多の理由があつて、少くとも新代の觀者に向つては逐々にその力を失ひつつある。實際この缺陷を補ふべき新らしい同化用の劇が出來なければなるまいと思ふ。而し此の種の劇こそ、未だ充分に反省力の發達しない、ともすれば感情に流れ易い青年男女、及び自意識の勝ちすぎた近代人に取つて、最も適當な演劇であると信ずる。問題劇、思想劇の如きは、一通り人生の辛酸を味ふて居る人々に見せたい演劇で、然らざれば誤解せられ易いと云ふ弊があ

る。よしや然ういふことはなくとも、場合によりては一段と自意識を強烈ならしめて、徒らに煩悶の度を加へしめることに終ることもあらうからである。彼の「阿呆の樂園」に遊んで、一日を愚な夢に過すことは新代人の堪へ得ない處であらうが、淸く、高く、美しき別天地の間に髣髴として人生の眞趣を捕へ、之れに依つて、發奮向上の念を起しうることは、必ずしも、新代人の厭ふところではあるまい。而して自分は特に、現代の青年婦人達に向つて、此の種の演劇を推薦したいと思ふのである。

女流文學と精神生活の根柢

片上天弦

女流文學者は西洋にも例がある。イギリスで言ふなら、小說家ではジエーン、オウステン、ブロンテ三姉妹、それからジオージ、エリオツト。詩人ではブラウニング夫人、ロゼツテイの妹。フランスでは小說家にジオルジユ・サンドなどがある。女流が文學者として見込みに乏しいと一概には言へない。しかし今日の日本の女流の小說家には、あまり感服することが出來ない。一葉女史はとにかくえらかつた。一葉論は相馬御風君のが正月の「早稻田文學」に出るさうだから、そしてそれには婦人論がしてあるそうだから、面白からうと思つてゐる。

女流は細かい觀察や感情には富んでゐるであらうが、とかくその感情を十分に批判して、その意味を十分に考へ味つた上で、表白することがむつかしいやうに見受ける。上つらの一寸したところはわかつても、深い意味とか味ひとかがよく判らないやうに見受ける。とにかくこれからの文學者は、或る意味の哲學者――人間として人間のことを考へる人でなければならぬ。婦人の哲學的修養は、今の日本の教育程度ではなか〳〵の難事である。何も專門に哲學研究をする必要はないが、さういふ方面ことに眞の深い興味を感じさせ、叉その興味を滿足させて行くだけのことが、今のところなか〳〵難事であらうと思ふ。婦人としてから

いふ方面に興味をもつ人は、よほどまア風變りな人てあらう。

第一どこの女學校へ行つて見たところて、本當の意味て人間學――哲學を教へてくれるやうな、さういふ方面の興味をよび起してくれるやうな學校は恐らく一つも日本にはあるまい。第一さういふことが、文學をやらうとか何とかいふ種類の婦人の爲めばかりてなく、すべての婦人の爲めに――人間としての女の爲めに必要だといふことすらも、わかつて居られる先生はまアないだらうと思ふ。實用向きてない料理法を教へたり、何とか躰操を教へたりする先生はあつても、又、青年男子に對する心得幾ケ條を、幾度もの會議て決議する先生はあつても、肝心根本の哲學――人間學に關する興味を呼びさまさうとするやうな先生は一人もないやうてある。それて女子の高等教育と言つたとて、どうも甚だ不安心な次第てある。實際のところ、さういふ要求を以て子女を托するに足る女子高等教育機關といふものは、まだ日本には出來てゐない。ミッション、スクール出の女流に、わり合ひにしつかりした人のあるのなどは、大いに考へ合せねばならぬことてあらうと思ふ。私はミッション・スクールてない、もつと自由な精神生活の根底を與へる企てがあつてもよかりさうに思ふのてある。どうせハイカラにやるなら、それ位まてアドエンチユアをやつて見なければ、形式ばかりて內味はぐにや〳〵て直ぐ饐ゑたり腐つたりしてしまふ。また實際そんなことは、大したアドエンチユアても何てもない、あたり前のことてあらうと思ふ。

それをするには、近代文學や近代思想の一般を、相當見識のある教師が講じる位のところから始めるのがよからうと思ふ。女子の高等教育といふからには、それ位のことはやるのてなければつまらぬ。人間としての自覺、婦人としての自覺を、生意氣になれぬ位までに十分に與へる工夫がしてほしい。生なかの高等教育は半可通にしてしまふ。今の高等教育と稱するものは、まアそれが多いやうに思ふ。

女流文學も、一方てかういふ教育が下地を作つて來なければ、特殊の天才は別として、今のところ確かな地盤を据ゑさうには思はれない。而してこの種の教育は單に文學者養成の爲めてない。人間としてあらねばならぬものてある。(談)

月のたまもの（散文詩）

蒲原有明譯

氣まぐれな月が、搖籃に寐て居る汝を窓から覗いて、私かに、「この兒は心から私の氣に入つた」と言つた。

そして彼女は緩やかに雲の階段を蹈み降りて、窓玻璃を透いて、そッと忍び入つた。してまた母たるもののしとやかな慈愛から、汝をのぞき込んだ。と、汝の顏に彼女の炎が映る。汝の眼が綠に、汝の頬が甚く蒼白く見えたのと、全くその所爲だ。汝は眼をさまして彼女を見戍つた、その時に汝の瞳が不思議なほど張りきつて居た。彼女は兩の腕で汝の頸を柔らかく擁きしめた。それからといふもの、汝はいつもこの抱擁にあくがれて涙を流した。

だが此處に、彼女の歡喜の光の浪は部屋中に漲り渡つた、青燐のアトモスフエアのやうに、燦爛たる鴆毒のやうに。そしてこの生ある光明が物を思ひ、そして斯う言つた、――「私は永遠に汝に接吻を與へる。汝はいつ迄も私のやうに美しいだらう。汝は私の愛するもの、私を愛するものを愛するだらう。水と雲を、夜と寂寥を、廣大無邊な綠の海を、形もなく盛り上つた、水を行くに行かれぬ世界を、遇ふに遇はれぬ戀人を不自然な草花を、人を醉はしむる香氣を、ピヤノの上にしだらなく疲れて、しやがれた好い聲で、女のやうに歔泣く小猫を。

「そして汝は私の戀人から慕はれ、私に媚びる者から媚びられるだらう。汝は綠の眼を持つ人々の皇妃となるだらう。私が夜なかに寵愛して頸を卷いたことのある人々の皇妃――その人々は矢張、海を、廣大無邊な綠の海を形もなく盛り上つた水を、行かれぬ世界を、遇はれぬ女を、秘密な敎儀の香爐のやうな蠱の花を、そしてまた彼等の痴愚の表象とも見ゆる放恣で、快樂に耽ける動物を愛して居る。」

そして、呪はれたる、わが愛する氣儘者の君よ、私が汝の脚下にひざまづいて、汝の中に、彼の畏ろしい女神、運命の名附親、この世なるすべての亂心者の蠱惑的な保姆の像を探り求めるのも、斯うしたわけからである。（ボオドレエル）

金鳳華

與謝野晶子

かきさぐる惡夢のあとのみだれ髮鉛結べるこゝちこそすれ

○

指はれて蛇頭ともなる病なさむ時にも見捨てたまふな

○

たのもしきさもやおはさぬ知らねどもわが心今ここにとどまる

○

いと近く妻聘る人とあるほどのありのすさびにつくりつること

○

君が來て住むもよけむとたのまれぬ水のかたへに紅梅咲けば

○

何方か二方に走する心とは知れどもいまだゆくへしらずも

○

春草にむらさきげまん金ぽうげ人殺す族立ちまじるてふ

○

この人は左衿してはしるべきゑびす少女のむれなりしかど

○

かけひより水の落つるをききながら心にひそむ昔おもひぬ

○

戀するにかねて備へし心より半は云ひしことにしありける

○

因緣のまぬがれぬ故われと住む女童なりと君の申さく

○

われを見て頰を染め行きぬ菜の花の中の道より來し騎兵たち

○

もの縫ひねてここちよげにも擬伸びする二尺ばかりの男の子を見つつ

○まきて寝しその手枕の清らさにおほくおとらぬ白雪ふれり

○よそにわれ聞かむ君をば鬼食むも流行の病すると云ふとも

○わがこころ住家をいでて方違へせむゆきぬるある人のがり

○旅に行き戀しかりきと歸りこし日よりいのちは生くべくなりぬ

○われらみな聖女たるべしかくちかふその張本の娘なりしか

○まめやかに君が後見するよりは歌よむことが好きなれどわれ

○わが知れる三人の人のあらうがふもあはれなるかなその二人死ぬ

○菊の香は逢よりやや人めかし髪など撫でぬにほふまにまに

○神無月いろいろの菊花咲ける中に豆食む黒の大馬

○何やらむぬるきあかりをたよりつつ歩むがごとし幸なるや

○花ちらしめぐりみしかな君が居る亭の四方の若くさのみち

○千童にそろへ着せまし赤はみし色目いとよき雲のかさなり

落葉林

若山牧水

多摩川の水のほとりにめぐり來ぬけむりながるゝ秋のゆふべに　（以下旅にて）

白々とゆふべの河の光るありたひらの國の秋の木の間に

山かげに吸はれしごとく四五の村巣くへる秋の國に來にけり

雲うすく空にながれて凪ぎたる日林のおくに落葉斷えせず

落葉樹まばらに立てる林間の地平にひくし遠山の見ゆ

身を起しまた忍びかに歩をやりぬ落葉ばやしのおくの木の間を

手ふるればはらゝはらゝと落葉す林のおくのひともと櫟

林間の落葉を踏みつ樹に倚りつなみだかきたれなにを歌ふぞ

なが〱と地上に身をばよこたへぬ夕陽のまへの落葉林に

かきあつめ白き落葉に火をやりぬ林のおくへ白き烟す

落葉の林のなかにひやゝかに鐵路走れり限りを知らず

うすあまき煙草の毒に醉ひはてぬ黄なる林の奥のひとりは

T氏とK氏

眞山青果

紹介狀

この頃は晴々しい、暖かい冬の日和がつゞく。

母は年寄の氣まめにまかせて、押入の古行李どもを椽側にひろげて、片付け方に急がしい。斯うして床脇の袋棚ばかりも空けて、そこに佛樣のお厨子を据ゑる積りなのである。東京に家を持つて四年目のこの秋、初めて母を國元より呼寄せ、代々の佛壇も菰荷にして搬んで來た。

昨夜の遲仕事に疲れて寢重い頭を茶の間に出すと、母は茶棚の上から横封の封筒を出して、「行李の底からこう云ふものが出たが、紙屑と一緒にして籠へ入れても好いのか。大切なものなら別にして置いたら好いてせう。」と渡してくれた。表書には、

Mr. K. T——, Harashiku, Tokyo.

と馴れた手跡で美しく書いてある。中には未見のT——氏へ宛てゝ、足下の著書「思出の記」によりて救はれたる、この傷ける魂を足下の前に送る。足下はこの執拗にして偏癖なる一青年の正直なる涙に動かされべきを信ず。この青年を信ぜよ。老いたる神の僕、米國人、D——より、と開き封にして書いてある。

——それは七年前。その七年間が鳥の翅の如く私の心を閃いて過ぎた。

新しき世に行くと云ふ張り詰めた希望の中にも、寄りどころの無い孤獨の悲しみを抱いて、追はれるやうにわが故郷を出でたのは今から七年前であつた。暮の二十二日。私は汽車の窓に隨ふ奥州山脈の疊々の雪にきらめくのを眺めて、寂しい三等車の木の腰掛に顫えて居た。

丁度藤村氏が小諸の山間から「水彩畫家」を世に出した年。東京中の人は將さに來らんとする大戰前の不安と沈默とに痙攣の頂上にあつた。

その出發と云ふ朝。D——先生は長い間の放浪に疲

れ果てた私の軀をいたわつて、チラ〳〵と雪の降る中を停車場まで送つて來た。大きな掌に私の手を握つた時には、その大きな眼に涙が一杯溜つて居た。剛い白い髯が鐵のやうに光つて見えた。そしてポケットから出して渡したのは、今あるこの紹介狀と、本國仕立の厚い青縞のジヤケツとであつた。

當時T——氏は世の聲名から隱れて、原宿の雜木林の中に靜かに休息して居た。

「優しい心、優しい心。」

D——先生は八年以來繰返した言葉を、又この場合になつて新しく私の心に彫り付けやうとしたのであつた。私は足をふるはせながら俯向いて居た。

時と人と心と、そして各々に供えられた胃袋と。

その後の七年間は私に取つても最も事の多い時であつた。又私の從ふ仕事の上から云つても颶風のやうに急しい時と云ふことも出來る。私は私の貪欲なる胃袋の爲めに働かねばならない。——人の胃袋は血となり肉となる食物の外に、名と虛榮と不安と空虛とへ饑餓をも感ずる——。時々立停つて振返つて見ると、この七年間を極めて長いやうにも又短かいやうにも考へるけれど、私自身にはたゞ多忙なる今日一日が連續して來たとしか思はれなかつた。あの激しい變轉の中に引摺られて、好くも今日まで仆れずに來たものだと染々思ふやうなこともある。

T——氏のところへもその後一年ほど出入して居た。然し折角D——氏の與へた紹介狀は行李の底へ投込んだまゝて、宛てられたる人の手には觸れもしなかつた。變つたことの好きな私は初對面から自分の言葉だけて、原宿なるT——氏の小暗らい玄關を訪ねて見たのだ。新しく道を開き新しく活きやうとするその時の私は、一毫だも他の助けによりて自分の運命を拓らくことを男らしくなく思つたのだ。

あゝ、頑なゝる心! この頑なは長く私の心を埋んだ。

三年目の夏T——氏は三等室の暗い船室に乗込んて、その眞摯なる心からヤスヤナ、ポリヤナの哲人を

訪ひに出掛けた。然しその頃はもう此方から背いて路傍の人になつて居た。

私はT——氏の與ふるものを好まなかつた。魚の代りに蛇、パンの代りに石を與ふる人のやうに思つた。

袖の長い、暖かい靑縞のジヤケツも小石川に初めて家を持つ頃までは僅かに行李の底にあつたと記憶するけれど、今では何うなつたか探がしても見當らない。林中の若木が日光に餓いて伸び出づるやうに、好く活きたいために動いて來た七年間の事どもが、この頃になつて初めて深く思出されて來た。考へて見るほど忘れて居たことが多いと知つた。

この紹介狀は悲しい私を吊ふ碑のやうなものだ。

私はこの紹介狀を再び見た時の感じを、この先き幾度び經驗する事であらうか。私はこの苦い經驗なしに活き得る人の生涯を羨むのである。

終りに近かき日

昨夜は珍らしく安眠を得たとて、病人の顏は冴々しく見えた。聲もシツカリして居る。これが危篤の瀕死のと東京の新聞に每日傳へられる人かと思はれる程である。痩せた手付に西洋苺の牛乳を啜りながら、元氣好く話して居た。兩の頰がホツと赤味して美しい少女の眼瞼を見るやうである。

窓の外には初夏の活々しい光線が溢れ漲つて、物の色が濃く黑々と見えた。看病する人達もこの閑を偸んで、銘々の洗濯ものなぞに忙しかつた。

看護婦の案内も無く、ドシ／＼と廊下を踏み鳴らして東京から西洋畫家のK氏が訪ねて來た、恰幅の強く逞ましい、見るから活々した人であつた。新聞紙に包んだ額のやうなものを抱いて來た。室へ入るなり「熱い々々。」と叫んでワイシヤツ一枚になつて額の汗を拭いて居る。

「そんなに熱いかい。」病人は畫家のまくり上げた太い腕節を見て居た。

「熱いの何んのつて、些つと步るいて見るが好いや。砂地が燒けて大變なもんだぜ。」と病人の枕元へゾン

ザイな胡坐を組んで座つた。

「何うだもう産んだが、電報が來るだらう〳〵つて毎日待つて居るんだぜ。」

「駄目〳〵、中々産みやがらねえ。然し僕もこれでお父さんになるかと思ふと、妙なものだね、身體がムツ痒いやうな氣がするぜ。——眞逆に女房のお産と聞いて、裏の畑へ鍬を擔ぎ出しも爲まいが、この頃は外を歩いても赤兒の啼聲が妙に耳に付きやがる。」と天井を見て笑つて居る。強壯な血液はその若い顔に上つて、一層活々して見えた。

病人の乾いた黒い唇にも優しい血が流れた。渠はこの若者の結婚の席に大切な人として坐つた。その頃から午後は寒氣がしたが、未だ肺臓の底にブス〳〵と鳴る不快な音も聞かなかつた。酒も思ふまゝ過ぐして、二人の若い男女の前に嬌激なる戀愛論も吐いたものだ。それが一年前。その時驚いて自分を見上げる初々しい娘の顔が目にハツキリと見えた。春の夜、この幸ある人達の新しき家を取圍く青葉、煙つたやうな蒸氣に包まれて居た。

「どれ一つ描いて見べえかな。」

畫工はカフスをまくり上げて立つた。ある著者の挿畫と云ふ名の下に、この病室の模様、この病人の顔がこの畫工の筆に描かれる約束になつて居たのだ。

「いやだな、この顔を描かれるのは心細いな。」と病人は笑つた。

「勝手なことを云ふ。精々お氣に召すやうに若く描いて上げませう。」と畫工も笑つたのである。

然し室に居る他の人々は流石に心から笑ふ氣にはなれなかつた。

病人は光線の取り工合やコンポヂシヨンやに就いて様々の注文を出した。初め描き掛けた圖取りは取換えさせられた。

「これだから厭になるよ、素人の少し目の明いたのは。描かれる者は默つて描かせるものだ。」と畫工は立つて茶を啜りながら、わざと投出したやうなことを云つた。

「馬鹿を云へ。病人だから病人らしく描かせてやるんだ。」
「飛んだ氣の若い病人だ。」
窓の上端まで開放つた光線は溢るゝばかりに入り込んで、常に見馴れた者の目には室の中の様子が變つて見えた。病人は眞白なシイツの上に身體を投げて、その上には緋繻子の羽毛蒲團がスツポリと深く腮の上までかけられた。
繪を描く時の畵工の目は、恐ろしいほど鋭く氣が昂つて見えた。唇に、目の縁に隈取る黒い鉛のやうな筋は容赦なくスケッチ帖の上に顯はれた。
「何うだ、もう疲れたらうね。又の時にしやうか。」
暫くして畵工は手を置いて病人の顔色を窺ふのてあつた。
「なアに好い、何うせ描きかけたもんだ。最少し我慢しやう。」
「でも無理をしちや惡るい。又後刻にしても好いだらう。」
「然うか、ぢや然うしやうか。斯う凝として居るとね、肺臓の破れたところか呼吸する度に笛のやうに鳴るんだ。君等にや聞えまいが、實に不愉快な音だよ。夜、一人てこの音を聞いて居ると耐らなく辛らい。」
畵工は強いてその話を聞付けないやうに帖面に鉛筆を走らして居た。
緩かな浪の音が遠く／＼海の方から響いて來た。
午後、光線の工合を考へて、ベットを少し横向きにして、畵工は又午前の繪を書きつゞけた。病人は又穏和しく畵工の云ふ通りな姿勢をして居た。
「實に穏和しくなつたものだ。以前は中々斯うして寫生なぞさせた人ぢやない。」と書き終つた時畵工は獨り語のやうに云つて修正の筆を動かして居た。
「爲方ないから我慢して居るのさ。丈夫なら誰が肖像など描かせるものか。どれ。」と病人の痩せた手はスケッチ帖の上に伸ばされた。
「未だ駄目だよ。何うせ家へ歸つてから印象を頭に活かして書き直ほすんだから。」と云譯しながら、その

手帖を病人の手に渡して見せた。

傍の人々はその帖を見た時、病人は何んと云出すだらうと云ふ不安に襲はれて、その方を見ないやう、開いて居なかつたと云ふやうな注意深かい態度を取つた。

然し病人は默つて自分の病衰した畫像を眺めて居た。

「駄目だよ。」と畫工はその帖を病人の手から取つた。

蒼い午後の空には少し風立つて、白い光つた雲が湧き立つやうに浮き上つた。病人はもうこゝに來てから三月以上もこの空を眺めて暮らしたのである。

午後の藥餌に多忙なる時がソロ〳〵來た。



三味線林

小島烏水

須走から三里も來ると、黒砂が一面で、川の底のやうに窪んだところに出た、荷車の轍が二筋づゝ、入り亂れたところは、太い燒火箸を、宛てがつた痕のやうに、喰ひ込んでゐる、まあ言つてみると、野の片頰が燒け爛れて、大痣を殘したのである、花紅葉の木々を載せた野も、一皮――しかもホンの薄皮を破ると、この土だ、これが露骨に剝き出しになつてゐるのだ、鋼鐵色に光つて、濶く裾野の腹を横斷してゐるのだ、さうして野面だけ、點々として些少ばかりの色取りを殘して、人間の世と連絡をつけてゐる。が、恰度航海のときの信號に、赤燈や綠燈を掲げるやうに、この黒光りの土が、大野原に禿げてゐるのも、何か天上に向けて、信號してゐるやうだ――いつか富士山の二合目邊

から、下を瞰たときに、さう思つた、鳴らない警鐘を、旅人は草鞋の下に踏んで、日夕に往來する、さうして太洋の深藍色と同じに、この裾野の、鮮明な、黒光りの砂土は、共にその限り知られぬ深さと、秘密とを示してゐる。

ふと見ると、石標の折れたのが、仆れてゐる、右神塲山神社道としてある、神塲山とは、何の山だか知らない、さうして須走へ十八丁、峠へ一里半などと、細い里程表が彫みつけてある、私がこゝて佇んだやうにして、石を覗き込んで、もうこれから何丁て、どの宿へ着くなどと合點しながら、疲れ足を引き摺つた旅人が、日に幾人となくあることてあらう、その人々は、菅笠を傾けて、眼前にそゝり立つ富士山や、その半腹を匝ぐる雲や、また山蔭に沈む夕日を、さまざまの感情を以て仰いだことてあらう、……併し直ぐ眼と鼻の間の、疎らな小林に氣が注いた人があらうか。

二三十坪の枯れた楢林の中に、ところどころ蒼緑の小松が交つて、しよんぼりと黒砂の上に――痣に剃り殘された薄毛のやうに、片寄せられてある、この林が何となく、人懐つッこい匂ひがする、紅の殘葉が、枝にこびりついて、獨樂のやうにクルクルと回轉してゐる、その眞ッ直ぐの、高い空を、灰雲はしきりに飛ぶ。

荷擔ぎの男は、この林の名を、三味線林だと、私に敎へてくれた、さうしておもしろい昔話を、聽かせてくれた。

むかし何がしといふ長者があつた、この廣々とした大野原に居を構へて、永らくの間、何不自由なく住んてゐたが、長者に、たつた一つの不足があつた。

富士は朝に鮮やかに光り、夕には又洗はれたやうに、新らしくなつて霽れる、その色に不足はないが、寂びしい、長者は秋の雲は高く飛び、低くさまよい、時には林の中を迷つて、向ふに拔ける、時雨が忍びやかに拔き足して行くこともある、動くものはこのやうに風ばかりではなかつたが、長者はやはり寂びしかつた。

諸ろの自然の變化も、活動も、光明も、只だ塊まつ

て視線に入つて、通過するばかりである、長者の胸を掻き拗るには、たつた一つの音律が缺けてゐる。

そこへ三味線を彈いて、唄ひながら旅藝人が來た——話は三味線が渡つてから、間もないときのことである——長者は屋敷へ足を佇めさせて聽いた、樂人は腕の限りに、妙音を彈く、霧ふりかゝるときの唸りとも違へば、風が林を搖かすときの吼へるのとも違ふ、菜の花の間をせゝらぐ雪解の水の呟やき、それでもない、長者は秘密の谷底へ、と匍ひ下りたやうに、別の世界へ來て、言ふに言はれない壓迫を感じる、かつては萬象我に在りと信じてゐたが、今こそ思ひ知る、人間を缺いてゐたことを。

長者は三味線を讓つてくりやれと言つた、樂器は樂人の魂である、御屋敷とならば換へませうと、拒むでみたが、それが「出來ない相談」にはならなかつた。

三味線一挺と交換した長者の屋敷、——その跡へ楢林が茂つて、さや〲と風に喋ぐ、この深沈な默の、大野原の底から通ふ執着の聲が、人間に附き纒つて、地上二三尺のところを呻くのである、この葉摺れの音を聽いてゐると、何やら喉を洩れかゝた言葉が唇まで來て縺れたやうである。

雅歌

我が愛する人の聲聞ゆ、視よ彼の人は山を飛び岡を越えて來る。

我友は羚羊と若き牡鹿に似通へり、視よ彼の人は我等の傍なる壁の蔭に立ちて、窓を覗き格子を徹して閃く。

我が愛する人、我に語り初めて言ふ、我が愛する女よ、立ちていでよ。

視よ。冬は既に過ぎ去り雨も歇みはて、

もろ〲の花は地の上に現はれ、歌うたふ時は來りぬ、やま鳩の聲も我等の地にきこえ、

無花果の樹は其芽を出し、葡萄の蔓は花咲きて薫しき香氣を放つ、我が愛する女、我がいと麗はしき女よ、立ちて出でよ。

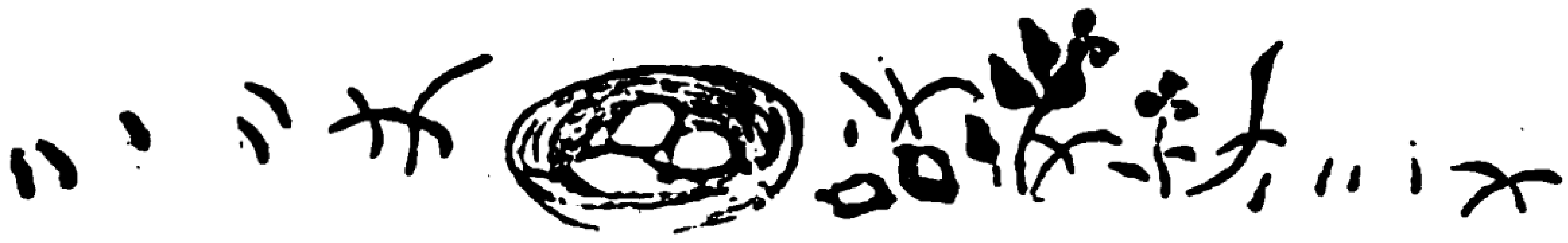
斷崖の巖の下なる磐の間に居る我が牝鳩よ、我に汝の面を示し、我に汝の聲を聞かしめよ、蓋し汝の聲は甘く汝の面は快し。

我等の爲に葡萄園を害ふ狐と小狐を捕へよ、我等の葡萄園は花盛なり。

我が愛する人は我に、我は彼の人に屬す、彼の人は百合花の中にて群を飼へり。

日涼しくなりて影の消ゆる時までに歸り來れ、山の切開けたる上に居る羚羊と若き牡鹿に習へよ。

(ソロモン雅歌第二章の後半)



憂愁の庭

三木露風

I

夢は青く静かにして、
月の光の中にたゞよふ。

見たまひしや、わが心の奥を、
古き昔の繪織物、
おぼろに消ゆる美しさを。

憂愁の庭に、
花はみな咲きて散り布き
小鳥は、空に飛ばんとして夢む。

あゝ、
見たまひしや君はまた
ロメオの若き語らひを、
朧ろなる織物の、かき消ゆる心の奥を。

悲哀に隠るゝ
白き額、
嘆息に燃ゆる胸。
さし伸べたる戀の手は、甘くしてやはらかなり。

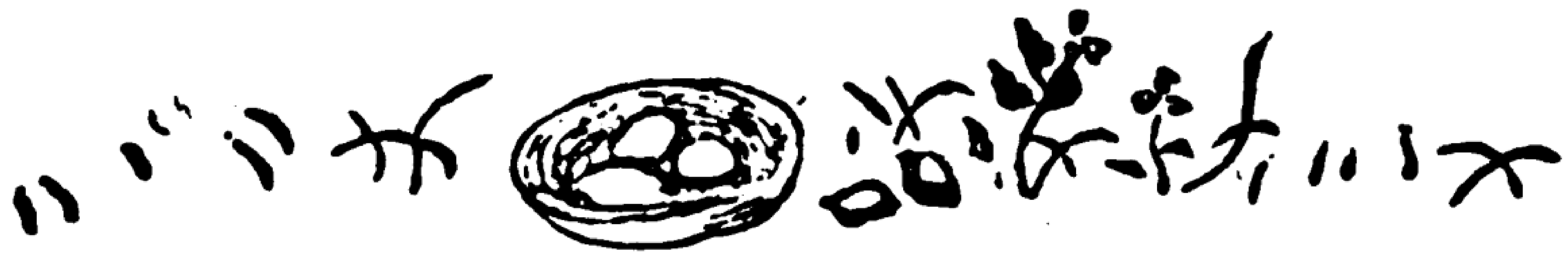
音なき園にかゞやく夜………
かゞやく夜。
人と花と、見たまひしや
あゝ、かく、美しく静かなるを。

II

月は舞踏に疲れ、
花やかにして懶うき床に眠る。

今宵、地上には戀の柩をつくり
あまたの花を飾り、
ひそ〳〵と從ひゆく人の群あり。

月の前を過ぎり
憂愁の園を出て〻
音なく從ひゆく人の群あり…………



III

おぼろに曇る夜はなつかし、
戀の室はたのし、
君がねむりは花の如く
白き腕は浮きて見ゆ。

かの窓より、
光は忍び入り、
美しき淫行の夢は斷續して
ふたりの身を抓らす。

あゝわれらが柩はこゝにありしか、
われらが戀を守るべく。ふたりの床に——
春。

IV

紅き小鳥はかくれ去り、
わが憂愁の庭に
朝も、夜も、空しき風は溫るむ。

紅き小鳥はかくれ去り、
巢はいつしかに毀たれたり…………

おぼろに消ゆるふたりの夢、
古き〳〵われらが戀物語。

——「感覺と美の憂愁」より



黄落集

前田夕暮

菊の香をむさぼりかぎぬ晩秋の日光のなかのさびしき男

白菊の青き蕾をにぎりゐる汝が兒の指とともに吸はまし

かへりゆく女よ汝が肩あげのさびしきあとに埃くみゆ

受話器とるあまりに遠き海の音の君が言葉にまじるこゝちし

うつりゆく女のこゝろしづやかにながめて秋をひとりあるかな

またしてもわが儘ゆゑの嫉みごとほとんど君に困じはてける

夕されば風ふけば木の葉散り來ればうす昏のなつかしき子よ

うらかなし歸りて君が父の前いふいひわけのおぼつかなさも

泣きしあとのさびしき顔しかへりゆくかへりてはやく泣き寝入りせよ

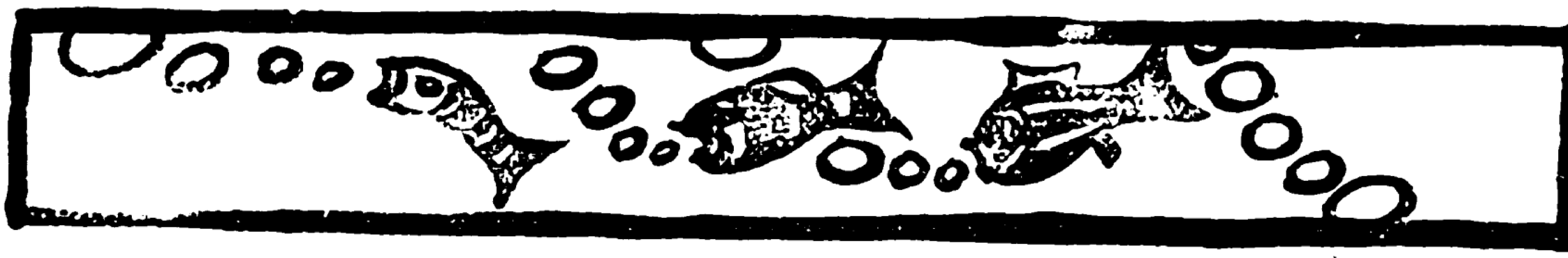
荒れ狂ふあらしの中に髣髴す悲しきかなや女の顔の

うす暗き校正室の北窓にもたれて夜をまつをとこあり

あわたゞしく追はるゝ如く悔ゆる子の弱きこゝろを君壓抑す

群集の背にたゞよへるかなしみを夕日のかげに遠くながめぬ

顔あまた暗きかたよりわれを見る死なる一語をふと思ふとき



薄暮の瞳

川路柳虹

…………………
また、迷ふやうに薄暮がきた、
蒼ざめて、私の額を曇らす光りは
軟かな、つれない匂を室内に漂はす、

ものゝ隅に擴がる影、
とり聚めた光り、青みを帶びて顫ふ中に、
疲れた今日の「思」は
安らかな心を覓めてゐる。

薄暮のひそやかな一とき、
逃げ去るやうな光りのなかに、
あはたゞしく迫りよる影の深みに、
忘られぬ日の髪の香油の漂ひ、——
その白い面——
なつかしげな瞳は寂寥の中を獨り輝く。

胸の薔薇

胸に敷きつめる薔薇の薫り……
夢を包む薔薇のかをり、
薄黄の匂ひは甘く滴つて、
軟い心が眠りそめる、

露はその花片に潤ひ、
綠りの葉は濃やかな情を包む、
刺はとけて……なし……
只胸にしきつめる薔薇……花片……
その薄黄な夢、甘い夢……
甘い、甘い蜜の夢。

響動

吉江孤雁

駿河台下て電車を降りた。

左手の横丁を少し登つて右へ折れると、小川町小學校の前へ出た。「秋月社」といふ小さな黒地に金文字の看板が出てゐる。擦りガラスの戸を開けると、

「やあ、お久し振り、如何したね、死にでもしたかと思つた、」と出し拔けに中からあびせ掛ける。

「冗談ぢや無い、失敬な、用事があるなら來ればよいぢやないか」

「まあ、そう向にならずに、お上りなさい」

と、きよろつと眼の光に、番頭面の、前垂を掛けた、蒼黒い男がいふ。私は帽子も取らずそのまゝ上り込んだ。六疊て、取次ぎも雜誌賣捌き事務所も兼帶の室、突き當りが今の男、左が廣告掛り、向つて小さな机を据えて小僧が坐つてゐる。

「秋岡は稀には面を出すかい」と私は訊いた。此番頭面の男も、秋岡も私も、その他三四人の者が同じ雜誌社に居た事があるので、私は時には此處へ寄つて連中の消息を聞くのに多少の興味を繋いでゐる。

「えゝ、やつて來ます、相變らずひよろ〳〵と」

「そうか、吉村は」

「え、吉村、吉村は死にましたぜ」といつたがそのまゝ見掛けてゐる帳面の方へ氣を奪はれたか、語尾が輕く消える。

「死んだ、吉村が」私は思はず聲を擧げずには居られなかつた、

「えゝ、死んだんだ」と落着いてゐる。

「どうして死んだんだ」

「どうしてつてね、まあ、斯うてさあ、此前の日曜か何んかに、そら日比谷公園へ英國の海軍の軍人か何かが來た事があるてせう、あの時久振りて吉村に逢つてね、それから、一所に是非自分の家へ來いと言

ふもんだから行つたんだね、あの寫眞通信社の二階に夫婦共同居してゐてね、私等も其處で遲くまで色々な事を言つて飲んだそてしやう其晩私等の歸つた後から直ぐ惡くなつたらしいんでね、後で聞いて氣持が惡くて仕樣がない、でも、少しも知らないでゐると、一昨日の朝だ、私が起きて表ての戸を開けると、何か戸の間に狹まつてゐるぢやねえかね、何だと思つて見ると、その前の晩に遲く來たらしい「ハガキ」でさあ、吉村が死んだつていふ知らせでしやう、魂消(たまげ)ちまつて、それから飯がすんで急いで悔みに行つて見たんです、その寫眞の通信社へね、すると、棺桶なんか店に置くのも邪魔だからつてんで、昨夜の中に燒場へやつちまつたんだつて、おや、細君はつて訊(き)くと、細君は亭主の無いに一人で居る理由も無いつて今朝お里へ行つちまつたんだつていふんでしやう、それにお里は何處かと訊くと、何處だか解らないつて言ふんでしやう、何だかね、狐にでもつまゝれたやうな氣がして、少し計り包んで持つて行つた香典(こうでん)もやり場處がないので持つて歸つて來たんでさあね」

「うゝむ」、私は何だかあまり無雜作な話に言語(ことば)の出しやうもない、番頭面(ばんとうづら)の男は、すら〳〵話して了つて、またその儘帳面へかゞみ込んで、連(しき)りに赤いインキの付いたペンで何か細かな數字を書いてゐる。ペンを働かして居るのも、吉村の話をしてゐるのも別に變つた樣子もない、私はそれ以上話を引き出したり、言い掛けたりする氣にもなれなかつた。

一人でポケツトから大和を引き出してマツチを擦(す)付けて喫(す)つてゐた。――吉村といへば十人近く居た編輯員の中で、寫眞係として敏腕といふ事は他の社の者や新聞社仲間の者にも名は知られてゐた。戰爭當時から、燒打事件、凱旋軍(がいせんぐん)、觀艦式(かんかんしき)、などに至るまで、朝から晩まで飛び廻り通しだつた。それも江戸兒に似合はず湯には入る事が嫌いで、夕方社員の爲めに特に社でたてゝ呉れる湯にでもは入る際(すき)には何か種とりに出掛けて行くといふ側の男だつた。酒は隨分飲んだ、

編輯長の合手で殆んど徹夜して飲みつゞけた事も度々あつた。最初は新聞社の校正係だつたのを編輯長が採用してそれから次第に登つて、一時は編輯次長のやうな姿で社內でもなか〳〵羽振が好かつた。其羽振の好いまゝに他から見ると隨分勝手な事もしないでは無かつたらしい、それに酒癖もあまり好い方ではない、路上でも關はずに喧嘩を初める。厄介も、多いが、何をいふにも健康で人の二倍も三倍も働くといふのが社主の目を付けてゐる點であつた。

「如何しました、ひどく考へ込んでしまつたね」、と不意に番頭面が聲を掛けた。

「いや、餘り無雜作な死方だからな」

「だつて、其方がいつそ樂ですぜ」

「だつて……」

「はゝゝ、まあそうですよ」

それから暫くして私は秋月社を出た。

復た電車へ乗つた、新宿の終點まで來た。

新宿の通りから右へ折れて大久保の方へ歩いて來た、晴れた空は夕暮かけて一層澄み渡つて、星が輝き出した、都會の上はぱつと紅くなつて、星はその中に搖めいてゐる。どう〳〵といふ物の響は、電車の音、人聲、馬車人車の轟を交えて、どよみ渡る、私は其どよみを耳にしながらうつ向いて歩いてゐた、――都の市を通つてゐる總てのものは此どよみを立てながら何處か大きな深い淵へ吸ひこまれて行くのではあるまいか、何か大きな物が口を開いて皆々呑み込んで居ののでは無いだらうか、吉村なども、いつか私の知らない間にあのどよみの中へまき込まれ切り刻まれ、今はもう何處えか消えてなくなつたのだ、と思ふと、夕暮毎に郊外から懷しく賑やかに聞いてゐた此市のどよみが急に恐ろしくなつて、私は思はず家路への歩みを早やめた。



赤色

兒玉花外

秋の上野美術展覽會で竹内棲鳳氏が舞子の繪「あれ夕立に」と、今一枚、矢崎千代二氏の三人の舞子が四條河原の床几で夕涼する畵を見た。私は其の絢爛目を燬くやうな濃艶な色彩に全く魅せられて了つたのだつた。

折しも、秋十一月上野は紅葉が眞盛りて、白壁の歐風の展覽會場を出ると、私の千紫萬紅に魘せられた兩眸が、俄に紅葉の爛熱の灼火に射られて、砂上に危ふくグラ〳〵と仆れやうとした。――更に一枚榊原蕉園女史が筆、一美姫が宴果てた後高欄に凭れて醉醒小桃に似た薄紅の頬を風に任せる繪も、確に私の眼を眩ました一つだ。

私に取つては、昨年の秋は實に幸福であつた。信州碓氷峠の紅葉の血潮の壯觀にも逢つたし、(丁度此時自分は伊藤公が哈爾賓で横死を遂げられた報を知り、眞に勇ましい英雄の最期に感極まつて双眸に熱涙瀧の如く、連れの一畵家の水筒を奪ふやうに夫れに波々と冷酒を注いて、私は滿山鮮血の樣な碓氷の紅葉の中慨然天を仰いで大に痛飲を爲た。偶然にも水筒に赤い繪具が着いてゐてこの唇を血に染めた。又其前日には、露國高架索の風景のやうな輕井澤では白銀の薄の波濤が數十町も山丘に長う連亘して、那邊からともなく吹來る山國の秋風に急に倒れ伏すその美觀！秋の極晴渡つた蒼空に太陽はクルと舞ふが如く熱烈な光線を落すと、幾萬莖とも數知れぬ薄が恰も長劍の樣に彼方此方に閃めきつゝ突立つてゐる絶境！自分は此時、怎うしても彼の決鬪に殪れた露國バイロンと稱せらるゝ詩人レルモントフを憶起さぬ譯には往かなかつた。軍人にして且つ狂熱な詩人が筆禍露都を追放されて、山地高架索を彷徨した長劍の姿を長い薄で偲出して、其上に識らず熱い泪を注いだ。――其折優しい尾花が女の髪

のやうに私の涙の重みて横に靡いた。

私は亦、平生多きな〳〵な淺間山の火も天を焦く黒煙も見た。輕井澤からは此山までは四里も途は在るのだが、自分は火の燃える女性の膝許に飛んで行きたくも思つた。私は一生に一度は伊太利に飄遊して縱令羅馬の古都の名殘は觀なくとも、世界に名高いエトナの燗紅の活火山と、今一つ黒髮黒瞳頗る東洋人に酷似した容貌雪に似る伊太利美人を一目でも覩たいものだ。

私はよく墨田川畔の濱町邊りて怪しげな若い女が庇髮に眞に燃える如な艶紅な罌粟の花簪を見ると、屹度豊熱直情なダヌンチオ戯曲中の伊太利女を連想せられるが、男でも女でも人間である以上は、全體に溢るゝ斗りの熱い血と、燃ゆる心と、黄金の腦味噌を持たねば駄目だと常に考へてゐる。私は我が日本が世界に類の無い火山國であり乍ら今一層狂熱的國民でないのが遺憾てならぬ、富士の烟を歌つた詩人西行、淺間を高歌悲吟した歌聖人丸、業平去つて又と世に熱烈なる多恨の詩人は此の物質的な社會には生れて來ない。自分は姿形の頗る圓く優しく素直て且つ熱烈の火を噴く淺間山に、四里を隔てゝ潤む瞳を放つて惚れ〳〵と眺めた。

以上、去年の秋には私は、紅葉や、火山や、上野の展覽會で舞子の綺麗な繪畫や、また市中では銀杏のヒラ〳〵と散る黄な葉やら、色々樣々な美しいものに緣があつた。願くは吾等の一生は斯ういふ華やかな色彩の中に終へたいものだ。古詩人アナクレオンの墓には自ら花が咲いたと傳へられる。今の世は餘りに理窟が過ぎてゐる、吾等は鐵の頭腦よりも寧ろ鉛だつて錫だつて關つた事でない、冷たい固い物に囚はれるのが實に恐ろしいのだ、詩人には之れが實に大敵なのだ。佛蘭西當りでは文士美術家抔には大抵の事は社會は大眼でみて其の天才を國民が發揮せしめるさうだが、私は眞に平素から羨ましい事と思つてゐる。

私は今年は更に〳〵、花に、露に、青葉に、風に、月に、雪に、否な、私の生涯には免れぬ雲に嵐にでもよい、願くは華やかな、變化ある、奇拔な月日の多か

らん事を獨り胸に考へてゐる。

弱者

溝口白羊

昨日私は何かに誘ひ出されたやうな氣持でフラリと家を出た。

初めは小石川に居る自分の友人を尋ねに行くツモリであつたのだが、毎もの癖の狹い小路を縫ひ〳〵、廣い通を避けて歩いて居る中に、代々木の傍へ來て了つたので、急に旅と云ふ事が懐しくなつた。それで何かなし中野までの切符を買つて電車に乘つた。

雲車に乘り乍ら、通つて行く路々の立木の姿を見て居ると、どの木もどの木も矗々と自然に生ひ立つた木がないのに眼が着いた、フト我の壓迫と云ふ感じが強く私の胸に起つた。

自然を破壊して行く文明の暴力を呪ふと云ふことは既に舊派の文學者の創作にも窺はれる傾向であつて、それを今更自分の新發見だと誇るのではない。私は寧ろさう云ふ幼稚な呪詛から私自身を回避したいとさへ思つて居るのであるが、單に外面の物理學的若くは化學的變化に止らない——内面の深奥に於ける生の破壊と云ふことは、實に戰慄すべき生物界の危機ではあるまいか。と思ふ。

私はこれまで何度も停車場の傍で、殆んど時毎に浴びる煤の爲めに黒ずんだ立木の、葉も稀らに枯れかゝつて居るのを見た。汚れた鈍色の物臭い空氣の中に轉がつて居る東京人が、せめてもの休息場として、追はれた獸のやうに逃げて來る公園で、百年以上も立つたと思はれる古木を、二三人の人足が大鋸で挽切つて居るのも見た。併し古い歴史が滅びる代りに、新らしい歴史が生れるのを私は別に悲しい事とも思はなかつた。瘤寺の古い杉の樹挽切られる響を聞いてハーン先生が自分の身を挽切られるやうな氣がすると云つて悲

んだ、と云ふ話を聞いても、たゞ詩人らしい感想だと思つたゞけてあつた。何方かと云へば私は新しい歴史を建設するが爲めに、古い歴史が其犧牲となつて滅びると云ふことは、生物の終焉として最も自然の理法に適した且つ最も勇しい最期てあると確信して居る。

だから文明の交通機關の爲めに凡ての沿道の樹が煤煙の害を被り、新開の町が出來る爲めに由緒ある鎭守の森が滅びたとて、そんな事は何うでも可い。そんな事はどうても可い。——私は今日、この沿線に見た多くの立木の何れも是れもが、我を僞つた不自然の姿をして不態に並んで居るのを見て、泣き度い位情なくなつた。

生存に適する進化——と云つて了へば夫までだが、何が進化だらう。煤烟を避ける爲めに枝を反對の方へ振つて、そして線路の乾燥した興味のない方を避けて根を反對の方に張つて居るが爲めに、荷の勝過た樹梢の重味て地を甞めるやうに倒れかゝつて居る姿、何と云ふ醜い姿てあらう。斯んなに自分を僞つてまても何故生物は生きて居たいのか氣が知れない。

大久保村に來ると、沿線の立木が稍少くなつて、此處まで擴がつて來た都會の翼が、更に線路を越えて前方を襲はうとして居る。トタン屋根や霜に逢つたら直ぐ響き破れさうなサクイ瓦屋根の家續きを見て居ると、踏切から眞直に續いた小路の外れに、先月新婚して間もないK——の家の屋根が見える。今にあの屋根に襁褓を干すのであらう、とさう思ふと、他事ながら氣の毒て堪らない。

Kも實に可哀想な女てある、新婚して間もない、睦じくして居る夫婦を捉へて、可哀想だと云ふのは少々酷かも知れないが、少くとも世間平凡の幸福を自分の幸福だと思はしめられた彼女は確に可哀想てある。

Kも初めから家庭の人となつて、我を殺さうとする程愚な女てもなかつた。が併し其煤煙だ、線路だ、曲つた木だ。

「私も到頭お嫁入を致します。」

と南葵文庫の玩具展覽會場のバルコニーで——嫁入す

る前の日、私に遺言して白裝束を着て、大久保村へ往つた。

「嫁入しても我儘ておいでなさい」

と私は只それだけを云つて別れたのだが……

女は遂に其處女の儘にして、木は其若芽の儘にして死得なかつた。どれもこれも生存慾の誘惑に捷ち得ない弱さの罪である。

私はもう外を觀まいと思つた。

女學生と小說

柳川春葉

友人が直接に聞いたのだと云つて、私に話した事實てあるが、或大學程度の嚴格な學校として知られて居る某校の女學生が、自ら『愛の問題に關して、自分等は何うしても理想の愛ばかりては滿足出來ない。』と高言したと云ふ事を聞いた。實に驚くべき事て、已に女がラブと云ふ言葉を、口外するすら、女としてよく〱意外であるべきに、斯んな事を高言するに到つては、實に驚歎するに外はない。これは實際に女が感じて云つた事か、或はたま〱然う思つただけの事を口外したのか、此處が第一の問題てあるが、抑こんな事を口走ると云ふ事が、何も此の女學生ばかりてないのは事實らしい。して見ると彼の平塚某の樣な女は、別に珍らしくもないのてある。處がこの事を聞いて居た或人が云ふには、『それは慥かに、一面講師が生徒に諂る結果として、男子の高等教育程度の人に對して云ふべき男女問題などを、智識の薄い、感情の固らない頭に入れる結果てあらう。』これは一面から觀察した事て、その重なる原因は、現代の所謂教育家なる者が無暗に門戸を閉じて、小說とか、その他少しても女子間題に關して論じた書を見せない結果てあらうと思ふ。

我國て、初めて彼の自由黨の起つた時代には、自由と云ふ事は、非常に惡い國家を亡すものだとまて思つ

て、それを暴壓したにも拘はらず、一方では、新思想、新時代の福音として、その初期時代には、容易にして自由の如何なるものであるかを了解する事が出來なかつた。今日の女學校は恰度同樣な方針を取つて、害を及ぼして居ると思ふ。自分等の願ふ處は、何故小說を讀む讀ませぬと云つた問題よりは、如何にして小說を味ひ解すべきかを敎へて貰いたいと思ふ。小說を讀ませぬと云ふ樣な事は、到底實行しえないのみならず、却つて惡い結果を及す塲合が多い、而して、所謂『怖いもの見たさ』と云つた好奇心を呼起して、普通の何でもない事が、却つて非常に感動を與へ、挑發的とも感ぜられる樣になり、それが時としては、神の言葉の樣に大なる感銘を與へる塲合が多い。

翻つて、彼等敎育者が、目して小說の爲めに害されたと云ふ實例が、果して何如であるかと見るに、それは勿論皆無と云ふ事は出來ないにしても、その害なる例は甚だ少いものである。それを恰も蛇の如く忌み恐れて、却つて多くの學生をして、節穴から覗はしめるやうな結果を來すのだから、隨つて惡影響を惹起すのである。例へば、色慾問題とか、情事に關した文字を見せまいとするが、到底日に見る新聞紙上から、之等の文字を除く事は出來ない。それは恰度板を持つて大河を堰く樣なもので、自然に任せて置いたらば何でもない事が、それを堰留めようとする結果、却つて氾濫すると同樣で、門戶を開いて置いても、勿論固意に基くものは惡いが、何でも關はないで、自由に時代の勢に任せて置くべきである。又、他の一面から云ふと、此の起るべき惡弊に對して、之れを平氣で過ぎるだけの素養を作らしめて、徒らに好奇心を起させない樣にするべきである。

て、要するに、斯んな有樣であるから、隨つて女性と云ふ、殊に現時の若い女學生などに關しては、二葉亭氏が云つた樣に『自分は女學生を書いて見たいと思ふが、何うしても今の女學生が解らない。』と同樣て、實際自分なども、現時の若い女の心持に關しては實に何とも云ひ樣がない。唯その變化の甚だしいのに驚くの外はないのである。（談）



新年御題　詠進歌選出の次第と御歌所の現在

松原良文

歌御會始

歌御會始は宮中の儀式としても、重んぜられるばかりでなく、一般の勅題詠進者も亦御前披講の榮に預らうと競ふて詠進するから、其歌數、幾萬に上ると云ふことて、實に我國現在の年中行事の中ても最も注意すべきものてある。

當日の儀式のことなどは大抵各新聞紙上にも發表るから、玆には餘り新聞などに見えない御歌所のことがらや、又詠進歌のことなどに就いて少しく述べて見やうと思ふ、先づ順序として御歌所の濫觴から語ることにしやう。

御歌所の起因と詠進歌の濫觴

「古今和歌集」の序に「御書所の預り紀友則云々」とある御書所と云ふのは、今の圖書寮と御歌所を合した樣な役所てあつたから、今の御歌所の由つて來る處の遠い事も分るてあらう。扨て是が時代に伴ふて變遷もあり、盛衰もあつて、明治三年に到つて初めて今の樣な御歌所になつたのてある。

詠進歌に就いては、明治四年迄は、皇族を始めとして、華族、勅任官以上の者に詠進せしめられたけれど。明治五年になつて「判任官に至る迄、歌道に心懸け有之輩は詠進可致」との達しがあつた。然し未だ官吏て無くては詠進が出來なかつたのてあるが越へて明治七年には一般人民の詠進を許されたのてある。そして明治十一年迄は、詠進歌は御歌所て取集めて各府縣別に製本して歌御會始めの當日、御覽に供へたのみてあつたが。其の翌年からは現今の樣に其の内の佳什を撰拔して御前披講を催ふす樣に成つたのてある。

御題の選定と公布

新年の御題は御歌所の所長、及び各寄人等が、各々考案して其の内數種を、御前に奉ると、陛下がお定めになる。然し此の奉つた題が御意に召さない時は、更に又奉つる、時としては　陛下御自から示される事も在すとやうに承はる。かくして御題をお定めになつた後、官報て公布せられる。然して、明治十一年迄は毎年其の年の歳首に公布せられたものだけれど、かくては遠隔の詠進者に不便があらうとのお思召て、明治十二年からは、前年の十一月中旬頃に布達される樣になつた。て其の御題も明治五六年頃迄はなか〳〵むつかしいものであつたが、人民一般の詠進を許されるやうになつてからは比較的平易になつた。て現今は明治十年前後の御題を覺えて居る人も少なからうと思ふから其御題を左に擧げる。

春來日暖（明治三年）。貴賤迎春（四年）。風光日々新（五年）。新年祝道（六年）。迎年言志（七年）都鄙迎年（八年）。新年望山（九年）。松不改色（十年）。鶯入新年語（十一年）。新年祝言（十二年）。庭上鶴馴（十三年）。竹有佳色（十四年）。河水久澄（十五年）。四海清（十六年）。晴天鶴（十七年）。雪中早梅（十八年）。緑竹年久（十九年）。池水浪靜（二十年）。雪埋松（二十一年）。水石契久（二十二年）。寄國祝（二十三年）。社頭祈世（二十四年）。日出山（二十五年）。巖上龜（二十六年）。梅花先春（二十七年）。寄山祝（二十八年）。田家煙（二十九年）。松上鶴（三十年）。（三十一年より三十二年迄は英照皇太后の御喪中にて此行事なし）。松上鶴（三十三年）。雪中竹（三十四年）。新年梅（三十五年）。新年海（三十六年）。新年松（三十七年）。新年山（三十八年）。新年河（三十九年）。巖上松（四十年）。雪中松（四十一年）社頭松（四十二年）。新年雪（四十三年）。

詠進歌選出の順序

毎年一月十日迄に全國から集つた詠進歌は。寄人五人各々手分して、先づ第一に書式の規定に反したるものを除き。次に寄人が選ぶのである。然し不公平があつては不可から、先づ一定のものへ細書する、これには歌に番號を附けるのみて族籍姓名を除いて置く。これを數冊にして各寄人が見る。見て。佳と思つたものの番號を數首ても數十首ても集める。（譬へば七人の寄人が一人二十首として百二十首となる譯だ）て。この選ばれた歌のみを又一冊として各寄人が調査して數首の佳什を拔き、是を集めると譬へば二十首なり三十首なりの數となる。是を更に嚴重に調査して初めて御歌所長の手元に達く。此の間、各寄人は互に詠進歌の批評は一言も語らないと云ふ事てあるから、寄人自身

も、何れが當選するかが不明てある、最後に。所長は數首の佳什を確定するのてあるが、此の內に會心の作が無かつた時は前調査のものから再び撰出する。

斯くして選出された歌は歌御會始の席上に披講されるのてある。

明治七八年頃までは詠進歌の數も漸く數百首に過ぎなかつたものが、近年に到つては三萬首近くの詠進歌があるから歳末より歳首にかけて御歌所の多忙は言ふまでもない。

落選の歌も乙夜の覽に入る

前述た如く嚴重な調査の後に撰出された歌は、御前披講の光榮を蒙るものてあるが、その撰出に洩れた大多數の詠進歌は何うなるかと云ふに、詠進者たるものは必ずしも落膽するに及ば無い。即ち一方に調査しつつ有ると同時に他方の役人――錄事其他――は應募歌を學校別、或は歌會の如き團體別、及び各府縣別に編輯して立派に製本する。そして是を　兩陛下の乙夜の覽に供するのてある。漏れ承る處に由ると　陛下には、二三ヶ月の間に綿密に御覽遊ばさるゝとか、其の上、御奧の女官を初め宮內高等官にも拜見を許される事がある。而して、愈々御用濟になると、亦御歌所へお下げになる、御歌所では一々之を整理し管理して置く。時に由ると「何年の詠進歌」と指定なさつてお召しに成る事があるので。斯くの如く後々迄も叮嚀に藏して置く譯てある。

詠進者の心得

縱へ御前披講の榮を得なくとも、叡覽あらせられる以上は詠進者の本懷てあらうけれど、中には其の榮さへ得ない歌がある。是は詠進者の方に心得がない爲て、或は日限に後れたり、書式に違反したりするからてある。即ち沒書になるのだ、此場合は如何に秀逸てあつても採られないのだから、詠進歌は是非とも每年正月十日迄に宮內省へ届く樣に差出す事が第一て、次は書式の事、之は御歌所てもいろ〳〵苦心して每年官報に出て、次いて一般の新聞雜誌等に轉載されるから見落さぬやうにしなければならぬ。

元來、歌は思想を卒直に三十一文字に現はせばいゝとは云ふものの、其の內には眞面目な態度が無ければ不可と云ふのが御歌所の大方針て、殊に、陛下の御覽に供するのてあるから、禮を失した樣なのはいけ

ない。譬へ、文字は下手でも致し方は無い謹んで書いたものでなければならぬ、又、歌も一心になつて詠んだのなら至誠人を動すて、佳作たるに足りると云ふのである。

聞く處に據れば、書式の相違や、日限後に到着した爲て沒書になるのが毎年一割はあると云ふ。此の不幸な詠進者に對して御歌所でも非常に惜しんで居る、だから詠進者は此の邊の事を能く考へねばなるまい。

月次會

月次會と云ふのは、毎月定期の御歌會である。題は毎年歳末に新年の御題と共に、御歌所の官人が撰定して勅許を得るものであつて一ヶ月に二題即ち一ヶ年に二十四題を前年十一月頃に定められる。この會は、一般の詠進を許されない、唯、寄人や參候を召して、前に出してあるその月の兼題を披講する――素より陛下もお詠みになる事であらうと恐察する――この日は寄人、參候のみで無く宮內官や其他の人々をも召される事がある、て兼題許りで無く、當座に御題を賜はつて詠む事が多い、此の時は、色紙や短冊に書くのである。

此の月次會は毎月五日と定められて、一月には歌御會初めがあるので、特に二十五日として。其他、陛下にはお差支への無い限り月の五日に御會が催されるのである。云ひ忘れたが新年の歌御會初めは毎年正月十八日と定まつて居る。

お召し歌

お召し歌と云ふのは、御歌會初めの當日、特に何某、何某の歌を奉れと仰せられて奉つる歌である。御歌初めの時、皇族又は臣下の歌に「年の初めに雪中の松と云へる事を仰言によりて詠める歌」。と讀み上げるのがそれである。てお召しになつた歌は式の時に讀み上げる、然し時間も無いことであるから皇族の外は宮內官と華族の小部分である。月次會にもお召を蒙つて奉つる、これは女官や宮內官に多いのであらうと察せられる。

京都の歌會

會名――向陽會とか云つた――は忘れたが、京都には舊公卿華族を中心にした大きな歌會がある、殆んど半官半民であつて、　陛下のみ惠みに由て、年に二

回づゝ、御歌所の寄人が勅命を拜して下向する、そして歌會を開いたり、又添削したりするのである、毎年歌御會始めに、發聲、講頌、其他の諸役を仰せつかる中に此の會員も這入つて居る。

所長、寄人、參候、錄事

終りに現在に於ける御歌所の人々の事を書いて見やう。

先づ御歌所には所長、一人。寄人七人。參候十五人主事一人、錄事五人。以下雇員があるのみであるが錄事（判任）を除く外は皆な名譽職（無報酬を云ふ）である。

第一所長が男爵高崎正風氏で。主事は阪正臣氏。（寄人を兼ぬ）。勅任寄人は本居豐穎氏と井上通泰氏の二人、他の阪（主事）、中村秋香、鎌田正夫、大口鯛二。千葉胤明の五氏は奏任寄人である。

參候は宮地嚴夫、前田利鬯、西三條實義、荻原嚴雄、小杉榲邨、長谷信成、藤枝雅之、須川信行、猪熊夏樹、町尻量弘、東坊城德長、遠山英一（錄事を兼ぬ）の諸氏である。錄事は大口、鎌田、千葉の三寄人と、遠山と、加藤義清の諸氏である。

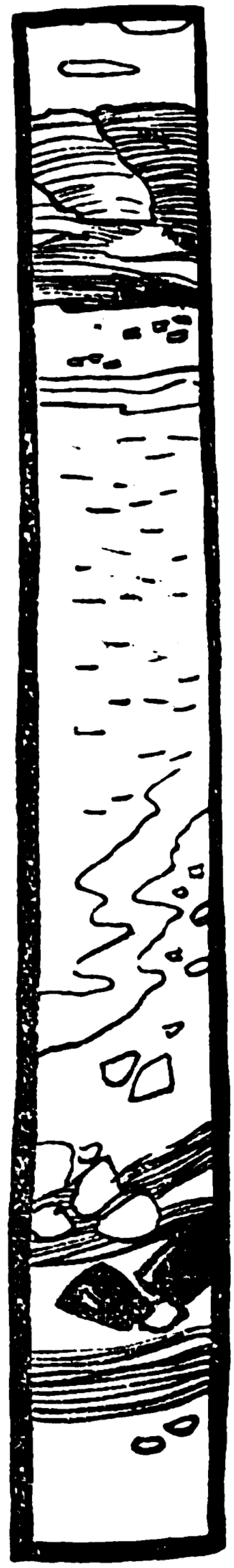
高崎男は初めからの學者でも歌學者でもなかつた、鹿兒島の藩士で御維新前後には京都で盛んに亂暴をした急激な勤王黨の旗頭であつた、今の本官は樞密顧問官である。阪主事は歌人としてよりは書家、殊に假字書の名人で、女學校の習字帖で名の知られた人である、色紙や短冊に歌を書くことに於ては千葉寄人の方が特色を持つてゐる。

本居豐穎は東宮侍講として又本居宣長の學統の後繼者として知られ。井上通泰氏は醫學博士、中村秋香氏は以前盛望のあつた國學者である。

參候の內で宮地嚴夫氏と前田利鬯氏（子爵）の官は掌典であり、西三條（伯）長谷（子）藤枝（男）東坊城（子）の四氏は公卿以來の華族である、小杉榲邨氏は文學博士である。

總じて御歌所の方々は香川景樹の系統の人々が多い職掌を云ひ殘したが、所長は、　陛下の御歌を拜見する上に、御歌所の總てを處理し、主事は事務を總べ、寄人は歌詠の事の總てに關する編纂や、撰述の事を各々分掌する、參候は、歌御會の儀式や其他の事を分掌し錄事は、事務を分掌するのであるけれど、苟くも御歌所に關係の有る人で歌詠みでない人は無い。

名流婦人の日記



はしがき

現代各方面に渉りて名流婦人の日記を蒐集したら好からうと思ひまして、皆さんにお願ひいたし、左の通り玆に發表することゝなりました。日記は其方々の實際的生活を語るものですから、一讀直ちに其方の日常が分ります。

特に年號を記してないのは凡て昨年即ち明治四十二年の日記です。珍しいと思ひましたのは跡見先生の日記でございます、慶應四年と云へば明治に改まつた歳ですから、今から數へて見ますと約四十年以上の昔の日記です、書いてある事柄も興味がございます。

加藤醫學博士の奥様も能く日記をおつけ遊ばす方で、明治二十三年に博士と御結婚の時より今日に到るまで續いて日記をつけていらつしやいます、月の初めに半紙二つ折の本を二帖づゝおこしらへになり、それに日記をお書きなさいますので、それが年と共に積んで山のやうになつて居るさうでございます、此處に掲げますのは御覧の如く、一昨年博士が洋行中の日記の一節でございまして、此は一週間毎に取纏めて博士の手許へお送りになつて居たのでございます。

佐々木信綱氏の奥様の日記は昨年の夏逗子の別墅に避暑中の分でございます。

實用會話塾を開いて居られる北川美那子先生の日記は、先生がアメリカに御滯在の時の日記で、實は英文で書いてあつたのを、本誌に掲載するため特にお願ひして譯して頂いたものでございます。

加納子爵令嬢の日記は鐡子様と其御姉妹方お三人とて明治三十八年の春、上總一宮へ御旅行なすつた時のヿを書いたものでございます。

棚橋絢子先生の日記も見せて頂きたいと願ひましたが、御都合で日記に就いてのお話に代りました、其積りで皆さんも御覧下さい。

中に二三人の方は御本人のお望みで、わざと御姓名を洩らした方もございますが、名門又は名家の方々でございます。

歳の始の一月一日はまた日記の初めの頁です、此時に當りまして此等多くの名流婦人の日記を皆さんと一緒に拜見することを得たのは、誠に記者の榮とする處です、此等各日記を御寄せ下さいました皆様方にも記者として深く鳴謝の意を表して置きます（一記者）



跡見花蹊

跡見女學校長

慶應四年戊辰正月三日　子　晴

祝膳例のごとし、晝後殿様私宅へ成らせられ御供歸りとて御あとより壽邦院様良姫様成らせらる、千代瀧様御とも、御祝酒などいだし御かるたの御相手つかまつる、御滿足いふばかりなし。

此日七ッ時より伏見出火あり。皆々様夕方御歸殿遊ばさる、折から伏見の方角に火手起る、徳川がたより發したるとか、扨はどうしたことかと驚きのあまり祝酒のあとしまひそこ〱御殿に至る、この火手は會津の仕業なりとか、時もあるべきに正月の三ヶ日にとおもへどいかにとも詮すべなし、何となく心落付ざるも恥かしく我とわが心を沈めてスハヤといはゞの用意心ひそかに貯へたり。

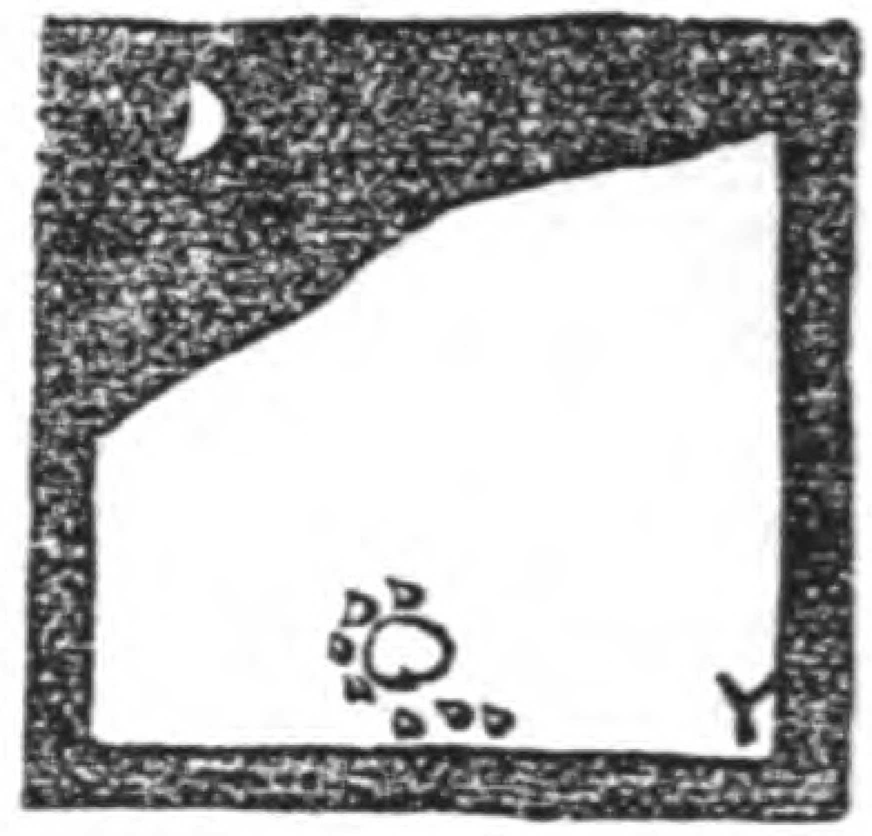
四日　丑　晴

朝來砲聲近くきこゆ、スハヤ一大事よと、朝のこと手早くしまひてそこ〱に御殿へ參る、きのふよりの伏見合戰に薩兵大勝したると承る、伏見合戰終りて今は鳥羽戰爭の最中なりなど氣も心もそゞろなり。此朝御所の警衞非常に嚴重にて六門のかためなか〱なり、並の人など恐れて參殿むづかしきなどいへど女の身ながら御大事助け參らせんと馳せつけたり、追々せまりて黒谷にありたる會津藩殘黨發砲するまでになりたり。めでたき新年、嬉しき年始の宴も一場の夢とさめて市中の騷々しさいはんかたなく、いづれも立退にいそがし。母様もいそぎて參殿いたされ、御上御姫様がた岩倉様の御別邸に御立のきあらせらる、母には俄に老女の御代として御供申上ぐ、御殿の中は御上は殿様ばかり女にては千代瀧様に私と二人のみ御奧の御留守番となる、御表の士寸時も休まず警衞、そさ〱おこたりなし。

ことほぎの聲はいつしかいまはしき

さけびにかはる年のありとは
大君の御こゝろいかにおはすらん
をみなかなしきわが身なるかも

女なりとも勤王にかはりやあらんと、人には言はじたど知るこの日記。



山脇高等女學校長
山脇房子

二十七日　土曜日　晴　温度　五三

六時離床、室内掃除、家内見廻り扮裝等例の通り、鳩山夫人羽田氏清藤氏等より電話。

疊や五人客間の表替に來る。

小倉、河野、芳子より來狀、小倉、河野へ返書す、原松本へ送狀。

ミセスボールス、ミスウエルス教育上の事につき來訪、近日學校參觀の筈。

十時昇校、校務を見、寄宿舎巡視、二號六號の整頓せるを賞し、其他の掃除不行屆、障子の破れ、蜘蛛の巣、生花の水等につき注意す。

吉田氏平山氏來校。

十二時半歸宅。一時半平田内相の令息結婚披露に行く、來賓は蜂須賀侯爵前田侯爵母堂各大臣其他三百名講談百面相手品等の餘興あり、平田男爵の今日の出世令息令孃の善良なる發達は其裏面に於ける温良貞肅なる夫人の力によるもの大なるを深く感ず。

坂本戸田夫人、有賀木村大石氏來訪、不在面會せず

五時四十分月蝕を見る。

遠藤より兄嫂病重き旨來電、早速小倉長尾へ通知す。

夜、加藤、森氏來談。

服部、鈴木、佐藤氏より來電。

海事協會、安川へ送狀。

學校、教育會等へ電話す。

ナミ子より富士子信子の正月着の事に付相談あり、縞物よりも紋物の方上品なるべしと答ふ。

會計簿、日誌を認む。

十時就床。

二十八日　日曜日　晴　温度　五七

六時離床例の通り。

大工七人、土方三人、塀修繕の爲め來る。

嵐城、玉木、齊藤、同仁會より來狀。

鶴子、關、清水夫人、小林姉妹、辻岡氏等來訪。

十時遠藤病人を見舞ふ。

十二時學校生徒の會食に出席、着席の次第、卓上の心得等を教ふ。献立はクリヤスープ、ベーキフエッシユ、フエザンコロッケー、コールトフエザン、カリフラワー、ロースダーク、プラムプリン、アップルゼリー其他果物カーヒー、出席者二十名、夫の卓上談話あり

三時歸宅。

四時、東洋婦人會の相談會に出席、鍋島會長肝付男爵服部博士夫妻等參會、來月七日總會のこと規則改正等のことに付相談、十時歸宅。

華子より來狀、易德病氣にて心配せりと、いよ〳〵

一月出產なれば夫と離れて歸國するも心もとなく、大坂の兩親よりは連りと歸朝して出產してはと申さるれど何れに決すべきやと申來る、產婆だによき者あらば良人の側にて出產する方互に安心なるべしと返書す。

串戶、白川、武藤、來訪不在中面會せず。

此日(日曜日)は一週中の樂みとして、いつも子供孫等の來遊する日なるに、生憎遠藤の病人學校の會食婦人會等の爲め會する事を得ず、物足らぬ心地す。

矢川に明日の櫻會會場の事を申附く。

新山夫人より電話、櫻會へ區長招待のことにつき相談あり、同意なる旨を答ふ。

會計簿日誌認む。

十時就床。



醫學博士加藤照麿氏夫人
加藤つね子

十月三十日
今日は學習院女學部附屬小學校の運動會にて、四郎(二男)小學生として最後の運動會故來てくれよとのことにて、正午より行き、午後四時歸る。
第十二便伯林より屆く、
三十一日
掛取忙はしく思ひしより、出費多く種々と考ふ。主人より旅行中の委しき日記風の御手紙屆く、種々と想像す、中々寒氣烈し。
十一月一日
稀な好天氣なり、長男成之(學習院寄宿舍)定刻より來り、上野の展覧會に行き、正午來て早晝にて、末永氏(家庭教師)子供三人連れ淺草に行き、夕方歸る。
二日
早朝六時より鉛五學習院の遠足會にて上野ステーションより大宮に行き、皇孫殿下も御成あり、松茸、シメジ、二三本取り來る、父上樣に差上ぐ。
第十三便伯林より屆く。

北垣氏來り、國産の松茸多く送らる、但馬會、出石會より案内あり、斷る。
三日、天長節
早朝より子供出校、伯林にはがき新聞を出す、父上御參內にて御肴下さる、增田氏へも分配す。
四日
好天氣「醫時新報」と鉛五よりはがき、伯林に出す、夕方委しき御手紙屆く、當方よりも委しき手紙出す。
五日
曇天寒し、午前十一時半、二番町の本宅へ上り、十二時母上同道して、赤十字社に入院の馬渡夫人を見舞ふ。
六日
曉雨降る、六時より、鉛五は靖國神社參拜に學習院より行く、午後より皆々同じく靖國神社に行く。
七日
皇孫御殿より殿下、御あかつき衣、下賜さる。
午後四時前より銀座にて買物し芝に行き先日上京の

竹田氏一同と會食す、歸る。
靖國神社へ五郎は三澤と鉛五は末永先生と行く。

八日

成之定刻より來り、十日より修學旅行あるので、種々買物す、門司の晴比古さん、上京にて御出になり、夜二番町に上り、昨日御下賜の　あかつき衣、御兩親に御目にかける。



石川博士夫人

十一月二十日

今日は好天氣にて暖かさも暖かく、主人を送り出し一週間前に西洋洗濯教授の高山先生を雇ひ、種々なる方法を習ひたるを實習して見んものと思ひ、白色の衣類など多數取出して洗濯しつゝある處へ、十一時頃に女子文壇社の婦人社員の方が訪問されたれど、氣の毒だとは思ひながら面會を謝絶す。

今夜は帝大に於て通俗講話あり、二木醫學博士の演說故行けと、良人に進められしまゝ共に行く、長男は第一高の友人と行き、二木博士の御話もなか〳〵に面白く、時の過ぐるも忘れ、次に良人の演說を聽く、演說をきくなどいふことは身を委ねしより、今日が始めなり。

二十一日

午前は高等師範附屬小學校にて、布敎話會ある故在學の次男を連れて行く、いつもの樣に校長先生と知事さんの注意を何にかと受け、また受持先生よりも種々と敎訓などされ、子供がかくまで親切の中に敎授され居るかと思ひ人知れず淚を催しながら校を去り、直ぐに其足にて淺草に行く、娘の琴の師匠にて今日は、習ひに行きて始めて琴さらひあるとのことにて、見れば、まだ舌もよくまはらぬ乙女さへも、種々と演じ、斯くして覺えさするまでいかばかり先生の苦勞せられしか。八時に電車に乗り歸宅せんと思ひしも、今日は

とりさまにて、どれも〳〵滿員、漸く乘り、下車すれば姑が心にかけて女中を迎ひによこされ、歸ればお茶などわかして寐もやらずして老體の身をも省みて待遠ふげに迎へられ、其心のうれしさ何にたとへんかたなく、學校で聞きしこともまた、師匠宅にて見たることなど、まどひして話すとよろこんで〳〵きかれる、趣味も同じく和氣藹々と人世無上の幸福と思ふ。之に反して姑と別居するとか、又爭ひなどあると云ふことを時々耳にするが、何に原因するかと疑はれ、若しも別居などすると老體で心淋しさところか、なほ心細く暮さることかと、あれこれとはてしなく思ひ、娘なんかは決して姑のなき處へやるものでないと考へつゝ寢につく、時は十二時半なりき。



女子商業學校學監　嘉悅孝子

十一月十二日　晴

五時半離床。いつもの通り學校の雜巾がけ、終つて顏を洗ひ、髮を結び、ねまきを更へて日課の手習、此頃は朝の時間が短かいので、一二枚書くと直に朝飯の拍子木がなる。食事をすまし、新聞に只一通り目を通すと、直に授業時間、教場に出かけると、海老名といふ生徒の父御來らる、面會す。鳩山樣より電話、やがて林田さんから今直伺ふとの電話、十一時頃阿部奧樣御來車、いつも乍ら御親切、尾崎樣より「學問と生活」送り來る。

午後內務省教育品展覽會に至る、美術學校の先生がた、生徒がた、及跡見女學校の先生がたにも御目にかかる、兄上御來校、夕食をさし上ぐ、夜矢吹氏及瀧人來る。

仝十三日　晴

五時半、離床、日課いつもの通り、朝一時間の授業終る頃、苦學生になりたいとて一女學生來る、說諭して返す。やがて名刺を持ち來るを見れば秦とあるに、こはめづらしと請じまつりしは、二十年前成立學舍にて

み教受けし秦政二郎先生、誠にうれしきもの、林田さん原稿持ち來ましぬ、今日中に見ておけとの厳命。午後來ると電話かけし人の來まさぬためゝづらしくもこの原稿此日の中によみ終りぬ。夜卒業生小鳥齋藤の二人來りて、とう／＼散歩に引出され、淺草見物の田舎ものとなりぬ。

仝十四日　晴

六時離床、今日は日曜ゆゑ學校の掃除はお休み、その代りの日課の洗濯をなす、九時より伊東先生御來車、お淘宮の御門入式を行ふ、今日は母上及矢吹のおばあ樣に市村座のおともの御約束かねてなしありたれば、午後はいつもの通り、御老人がたの御守りて世の中を忘れての別天地、かしらを全く空しくして只ぼんやり芝居の見物一ヶ月一度のこれが命の洗濯日、松田義雄氏明朝八時半にて渡韓すとて來ましぬ。

仝十五日　晴

六時半離床、今日は八時半には新橋へ義雄さまをお送り申す、歸りに大田黒樣と林田さんに用事あつて伺ひ十時過ぎ歸宅、岡田奥樣へ御約束ありて電話かけんと歸り見れば、岩邊房子さま御來車、一と言二た言おはなしするうちに十一時の時間となつたので、お客をまたせて授業す、矢吹時中氏來校、用をすまし房子さまと久しぶりて食事す。美術學校の指原さんより電話、午後一時間授業、岡田奥樣御來校、夕刻千駄ヶ谷に至り夕食は母上と共にす。

仝十六日　晴

指原氏より電話、けふは午後の授業故、午前土子先生の御宅に至り、歸途美術學校に先刻の電話によりて至り、指原さんと談合すべき事あり、歸りがけに新築校舍寄宿舍參觀、この學校のあれだけになるはいつの頃にや、生涯の中一度はあの位の校舍は持ち度もの。十二時頃歸宅、先刻大久保の内田男爵家より電話との事てこちらより電話す、白杉奥樣より今行くとのお電話、二時頃御來校四時頃より白杉家に至る、九時歸宅す。

仝十七日　晴

朝は例の通り、けふは學校に時間のない日故、この

暇に原稿書かんと机にかゝると、引つゞく電話とお客樣とう〳〵一枚もかけず、十一時頃母上御來校、博文舘より渡邊氏太平洋に何か話せとて御出、午後は御花の稽古なりしが政子樣お出。つゞいて上妻奧樣御來校に御花をやめて夕食を三人ともにす、おひるは母上と共にす今日は外のお客はおことわり申す、九時頃までお話しす。

仝十八日　晴　風つよし

いつもの事すまし、朝は一時間を終り、內田樣に行き、亞米利加に召つれらるゝお雇人の御相談をなす、すんだ所に御客故、直に歸宅せよとの電話、急ぎ歸る、松山氏なりき、引つゞき淺川氏矢吹氏來らる、おひる後、横濱火災保險會社に至る、二時頃歸宅、高木樣より電報來り居る、眞野先生よりの御紹介にて島まさ子さまお出なりし由、おめにかゝらず、渡邊とか仰せらるゝかた御來校、裁縫講義錄の御相談受く、民子樣御來校、夕食を共にし御一所に根岸に至る。

羽仁もと子

婦人の友主筆



私は日記をつけて居りません。それゆゑ御申越により、この一日のことを記してお送り致します。特にこの日を擇びました譯は、その前日までは、雜誌のために多忙を極め、この日初めて閑を得て、お求めに應ずることが出來たからで御座います。

雜誌〆切近くの數日は、充分に子供の相手になつてやることが出來ませぬので、〆切の翌日はどこでも子供の望むところに、一緒に散歩することにして居ります。

風少し吹きたれど、晴れたる日。主人七時三十分の汽車にて東京行、午前の中は、女中たちの用事の指圖身のまわりの雜用などを濟ませ、晝の食事を終りて、子供の望むがまゝに八幡樣に行く。家のまわりの田圃みちはいと靜かに、子供は思ふまゝに無邪氣なる物語りしてやがて並木みちに出る。初冬の鎌倉。殊に土曜日曜などの休日でない日の鎌倉は、大通りもむしろひつそりとしてゐる。赤きやしろを遙かに正面に望みつ

ゝ、熊と鳩に餌をやること、いまあつた幼稚園のお友達は太郎さんといふとなど、子供はなほも語りつゝ行く。やがて手放して渡るといふのが自慢の太皷橋につく。次には石段を勘定して上る。六十あつたといふ。遠方のお祖父さんの年は、まだこれよりも多いのと問く。石段の下の熊の餌箱は、生憎空虚であつたので、こゝにて群がる鳩に餌をやる。かあさんの發起で寶物を見る。袴をはいた老人の入口で渡した切符をすぐにまた同じやうな老人に返した後は、やゝ暗き寒き人氣なき廻廊に唯二人。數多き硝子越しの名刀には、左程の興味も覺えず。過ぎゆくまゝに、靜奉納の品と、運慶の作物能の面など目に留る。昔の人の入念入魂の作、そゞろに人の心を壓するものあり、いつとはなしに、次々と樣々の思ひに耽りつゝ、一々心を留めて見る。子供は話がたきを失ひ古びたるものにも飽いて、歸りませうといふ。廊下の出口にかけてある梯下を下り、手を携へて、六十の石段の上に立つ。大銀杏の葉は落ちつくし、遠近の紅葉いと美し。



歌人佐々木信綱氏夫人
佐々木雪子

八月十一日、くもらはしき日なり、風もつよく秋めきたる日なれば海には行かぬ事にす。子供らは食台行李などを机として、手習するあり本讀むあり、何事もまけじと中の子の、此頃覺えしアイウエオを繰返す聲さても賑はし。來客やら電話やらさゝる用事なければ、はしためらはゆる／＼縫物す。いつもの魚やまた例のアヂばかり故今日はかまぼこにす。餘りに塵の舞込めば、障子たてこめゐしに夫君入り來給ふ。くさ／＼の土産子らにわかちたまう。逸人昨日退院せし由、嬉しい、じきに兄樣と今度はお祖母樣もお出なさると皆喜ぶ。夕風いよ／＼まさるに散歩をやめて、子供らは家族合せなどす。

十二日、向ひの植木屋の庭に兎がゐると聞き、目覺

ひるより道子背負はれて見に行く。赤き帯赤き傘、只嬉しげなる子供らともなひ、夫君と平田ぬしの別荘を訪ふ。樓にのぼるに、江の島やかなたこなたの白帆も手にとるやうなり。松室ぬしの案内にて、花畑を過ぎ山の頂きに至れば、木の間より養神亭のあたり箱庭の家のやうに見ゆ。手折てたまひし百合の花、寫生の料にと喜ぶこと限りなし。家に歸ん來るに暑さ烈しきまゝに、涼しき裏庭のかげを撰びて遊びゐる。此間にとこゝかしこにと書狀かく。中に清國武昌なる篠崎氏に向け、百度を越ゆと云ふ御わたりに、あの涼しかりし今朝の山の風海の風を、袋にみてゝ送らまほしう思ひしなど書きてやる。夜更る迄子供らの喜ぶ花火あげて遊ぶ。

　十三日、日さし出ぬ程に海添散歩す、貝ほうづきはや珍しからずなりて、汐の干るをまち小魚手づかまへにせんと騒ぐ。小さき海老逃げまどふさま、あはれながらいとをかし。德富氏の畑の南瓜いと評判よろし。夫君今夜曙會ある爲晝の汽車にて歸り給ふ。採集網とり出して兄妹連れだち出づ。

　十四日、祖母君逸人のむかへに停車場迄ゆく。時少し早ければ構内いと靜なり。廣告の看板もくりかへし見る勇氣なく、柱時計とにらみくらのみしてある程、どう／＼とひゞきて汽車つく。くづれ出づる人波の中より子供らは早く見とめて葛原先生よと口々に云ふ。白岩夫人にも行逢ふ。夫君より葛原氏に言傳せられ、逸人は明日との事なれば、道すがら牛肉トマトなど買物しつつかへる。外風呂の蚊はげしく、今はなか／＼に都こひしなど云ふものあり。

　十五日、逸人の汽車の時間わからねど、迎へにと出し途中にてゆきあふ。母君腹はげしく打臥し給へりときくいと心もとなし。兄様／＼と小さき妹らの物語つきず、川向のさる別荘の犬と猿とは不思議に仲よしなりと、富士子の話秀逸なり。暑さ强し。

　十六日、夏島へ舟あそびすべく、大きなる子のみ葛原氏と果物菓子のまうけとり／＼にさはし、暑き日盛を、村芝居今日よりはじまり、金ピカの上下つけたる

が馬にまたがり、どん〳〵と太鼓たゝきつゝねりゆく。陣笠かぶりて、赤き長き袖これも馬にて行くよく見れば女にてありし、ぞろ〳〵と小供らはやしたてつゝ從ひ行く。葛原氏四時の汽車にて歸り給ふ。夫君よりのくはしき書狀つく。母君のは盲腸炎の再發なるべし、看護婦賴みたり、模樣によりては電信かくべしと。打より都の噂のみして過ぐ。子らは浴後又蟹退治すとて、緣の下石垣のほとりを暗くなるまであさりさわぐ。

十七日、富士子昨夜半より發熱九度をのぼる。今日は晝の汽車にて氷の荷來らず、やう〳〵逗子中にてこれ丈けなりと、少しばかり氷もとめ來る。旅先の病氣ほど心細きものなし、醫師大腸カタルなるべしと云はる。それ〳〵消毒して、只一人別室に移す。むしあつき夜、早くより蚊屋つりて、病むものも看護するものも苦しさ堪へがたし。母君の御樣子や如何に、今なほ電信來らぬはさして重りたまふ事なきなるべし、只ねんずはるかに病みふし給ふ母君の事、まのあたりなやむ幼子の苦しびいかて〳〵安らかにとのみ。



長谷川千代

「太陽」記者長谷川天溪氏夫人

十一月二十二日、晴

別に變りしことなし、夜に入りて、新潮記者來訪せらる。又早稻田大學の學生諸氏三名來らる、本屋長州屋明治二十年頃の書數冊を持ち來る、其の中に『妹と背かゞみ』の初版ありとて主人大に悅ぶ、私には興味なし。

二十三日、晴後曇

今日は、祭日とて早朝より數人の來客ありて、忙がし。殊に昨夜は夜更したれば、寢過して片付きしは十一時なりき。女子文壇記者來訪せらる。先日より、私の日記をと促されれど、常より其用意もなければ、堅く辭したれど、再三の請求にて拒みがたく遂に約す。午後より風呂を沸して浴す、松崎氏の子供純一佑男二人來りてまた書本などさがし出し緣側の日あたりに、

寝そべりて、例の無邪氣のいさかひ始まる。主人二時よりダウキン。及びゴーゴリ。の誕生百年祭ありとて、千駄谷なる志賀重昂樣四松庵に行く。私は先達よりの齒醫者に行く、今日は常の道を通らず、砲兵工廠の方より、壹岐殿坂をのぼりてゆく。奥樣はいつも變らずもてなさる。今日にて療治終る、夕暮急ぎ辭して本郷通りに出て、小間物や障子紙など買ふ、九時半頃主人歸る。紀念會にちなみてや、志賀樣よりのお土産に獨逸種の鯉を籠に入れて持ち歸る。見れば鱗は日本のよりも、大きく肉も肥えて見ゆれど、薄氣味惡くて料理せんとも思はれず、大家にては人數多ければ、喜ばれんとて持ち行く。今一つの土産は藁づとにて、中は何とも判じがたくふじのと二人にて種々判じたれど皆當らず、中は四國の干柿なりき。されど餘り日數經たるにや、虫付きゐたるはいと惜しかりき。

廿四日、雨天

十時頃より雨降る。正午過ぎて急に思ひたち白木屋へ買物に行く、歸りて見れば、宮口の不二雄ちやん來られしとて、火鉢の前は片栗を食したると、又は玩具にて取みだされたり。主人は太陽の編輯用にて小石川工場に赴きたりと平日よりも遲く歸宅す。夜は帯を縫ふ。



ペチエラ、オブ、アーツ
實用會話塾長
北川美那子

明治三十三年十一月一日　木曜日

六時半起床、日光うすく霧こむ、二日前より快氣に向ふ。此日はサラヴアンに、デモクラットの集會あるとてカーテス一家は早朝より出かけた、ブライアン氏の演説もあり前夜より中々さかんに小村のうわさとりくにて同行をすゝめられたが、斷りて只一人靜まりかへりたる家の家巣に籠る。昨夜の泊り客主婦の妹夫妻もいつたらしい、若い美しい婦人にて米人にしては早婚なりと主婦は憂ひて語られたる事もある、馬車も持ずあるたけの金もて旅行する、食ふ、などに消費時

々來てはお口言頂戴するらしい、美人と云ても日本人好だ、この前には言葉をかはした事もなかつた、遠慮といふのはペラ〳〵いへないと殘念でもある、笑はれもしまいがと只時の挨拶文はうそらしいガーツルードに引ばられてよんどころなく下に降りた時にのみてあつた。

十二時頃てあつたプロフエッサー、ハッテン來り、アンチリゼーが晝食を御馳走するからと例の厚意御深切にみちた言葉をもたらして、樣子をみながらおとなはれた、多分カーチス夫妻の留守を知つて、淋しかろふと御兩人の胸より出たのだらうと嬉しく行つた。此家のみだラキングチエヤーを食事に用ひられるのは。いつもの如く三角に食卓をかこんで、種々好な料理を味ふて今日は病氣の後とてアンチは手傳せて下さらず先生とおはなしして部屋に居れといはれ、不得止其意に任せて大統領選擧、共和黨、民黨、投票者などに付きて、又賄賂、ワイヤープール、など內幕をきゝいよ〳〵政治家なんと云ふものゝ價うちが知れては敬まうむもうせた、お隣を辭した時は一時間程過ぎて二時に近かつた、ポケーもアンチが賜ふた、足をそらして町に行買物した二十五仙。雜誌をうく。故里より暫らく音信なし、無事なのはしれて居ても斯云ふ折にはおとつれがほしい、深切に友人らが訪うて來た、多くは外國傳道に興味をもつた人の樣てある、前夜ミスヘースが寫眞を賜ふた、一人娘といふので何事も思ふ樣になさるが中々同情家である。日たつぷりくれて疲れて下の人はかへつた、ガーツルードがタムラお土産とキヤンデーを三つ持てトン〳〵とたゝいた、涙はもろくおちた。アヽ旅客。

二日、晴　脊のいたみ漸々よし、町の小學校は休み、小供は樂しげに遊ぶ、プラクチスはやめた、校長が歸つて來て握手した、いつも親の樣に感ずるのは此人だ、月曜日の科業に三分のノートを認め來れといふてかへつた、午后よりプラフに共和黨の演說あり、グリーキ車にて町中を男女唱歌を吟じ、且太鼓をたゝき大いに勇氣付いてある。撰擧の時はいつもかくありとい

ふ、女にても熱心家あり、米風として婦人の言葉によりて主人は多く投票すと云ふ或る意氣込たる婦人は、近隣を行めぐりて善人に肩をもて、酒屋を助くる様な大統領は米國の恥なり、己が黨にかゝわらずに此擧を決せと勸言する者あり、此町の多數は共和なれど、民黨も中々ありと云ふ。何處に行ても選擧のはなして持きり、こん度はブライヤンのものだと民黨いふ、局外者にも中々興ありておかし。

祈禱會あり出席す、ランプのほやくもりて不都合てあつた、句を誦して終る、あとて又青年男女學生ブラゞに出かけた、演說者は疲れも見へず滔々とやつて居つた、花火もあがるがつまらぬものだ我國のとくらぶると。十二時迄はやるそうだ、時々青年男女て親友ても黨派ても言ひ爭ふのだ、中たがひも時々はあるそふな、自由國といふものゝ習慣はおもろしい。あまり民黨がいつもまける、少しは勝てばよいとも思ふた、如何にも米人の心神はアッカヒヤの中にもう三十日斗りくらすのだろふ每日引續き黨派々々のラリーがあるのだ、といふ、學科を怠たる生徒もある、投票のため歸つたものもある、さすが校長や職員さんはおち付顏して居るが、家の中てはそうてもないといふ、神に適當な人物を與へて下さいといのるのは殊勝に感じた。

カーテス夫人は急病だといふ、夜中に醫者を呼び大さわぎてあつた、戶外は賑やかだが九夜中に床に入つた。

●●自註　カーテスは私の初めて下宿した家、プフエサーハツキンはギリシヤ語と獨語の敎師

加納子爵令孃

加納國子



四月四日

朝大森發、七時三十五分に發す、新橋着五十五分、それより尾張町に行き、電車に打乗る、數多の停留塲をへて兩國橋に着きぬ、八時三十分なり、步む事十分にして兩國停車塲に到りぬ、待ことしばらくにして汽

車にのる、十時十分なりき雨は少し晴れて、うす日さし渡りぬ、高架鐵道にして人家盡く眼下に見ゆ、淺草の十二階、上野のパノラマ館等もはるかに見えて愉快なり、四分にして本所に達す、これより汽車は平地を行く僅か五分にして早龜戸に達す、停車すること五分、七分にて平井に達す、小岩に達せしは十時三十七分にして平井より六分なり、本所よりは景色同じ、二三分にして市川を渡る大なる川なり、これより先は千葉縣にして東京府と千葉縣との境なり、停車場より二丁にして桃林あり、あだかも花の盛にして桃色一ばいなり九丁ばかり行けば鴻の臺あり、古へ里見好寶が北條の軍と戰ひし處とて歷史家の多く杖を曳くところなり、中山に着す、中山法經寺、牡丹園共に名高し名產としてこんにやくを產す。

七分にして船橋に達す、十一時なり、僅かにして津田沼に到着せりこゝより習志野に一里なり、こゝには徵發せる材木荷車うづたかく積みありて停車場を賑はしむ、十分にして幕張に着す、速力いと早くして松林をくゞりて稻毛に着きぬ、汽車にのりてより始めて汽車にすりあひぬ。この次は千葉のことゝて皆支度をなす、しばらくして女子高等小學校あり、千葉につきしは十一時四十三分なり。こゝにて房總鐵道に乘りかへ、十二時四分汽車は停車場を去りぬ。本千葉をへて曾我に至る、元千葉には千葉縣廳を始めとして重なる役所あり、これより一帶は總武鐵道とことなり、皆森林の中を行く、二十分にして野田に着しぬ、かすかに見ゆる田の面は兩三日の雨の爲、河かとうたがはる程水滿ちたり。土氣をへて大網に着す。此間に長き隧道あり、東金に行くには此處にて乘りかへ、しばらく停車して藻原に着す、又もや雨はふり出しぬ、こゝを出てしは十一時四十八分、停車場前には一面の茶畑あり、停車せしは三十分間なり。平沼に着く、この次は一宮のことゝてうれしさ限りなし、一宮に着く二時二十分なり、きよ文治むかひに來り、きよの進めに是非なく東屋に行く、しばしやすらふ程に長十郎歸り來る、直ちに倶樂部に至る、夕飯の後再び東屋に至る、齋藤つる來る、

倶樂部にかへり湯に入りて床に入る、九時半なりき、波の音高くしていねもやられず、早く夜のあけよかしと思ひつゝねむる。

四月五日

朝、目さむれば五時すぎなり、戸を明けて見れば空は曇り居る、齋藤つる來る七時半なり、淺野より迎ひ來りし故に四人にて行く、きよと共に一宮川を船にて下り、橋のきはにて上り、海濱に至る、連れ來りし船頭のいへらく、今日は舊三月三日なれば潮よくば蛤出づべしとて、堀り見しに大なる蛤出でぬ、よろこびて拾ふ内數多出でぬ。風呂敷に數多くなりて、よろこび居る内に雨ふり出しぬ、海濱なる御園の番屋にて、雨のやむを待つ程に、船橋の翁傘を持ちて迎ひに來りし故に至る、十一時なり、晝飯をすまして休み居る處へ、御園彌七來りて多くの貝をもろふ、一時頃再び船にのりて一宮川を上りてかへる、雨は益々烈しくなり、淺野方にて遊び、着物をきかへて堀内氏の家を訪づれぬ。それより城跡を見に行く、すき井戸のみ殘れり、山を巡りて觀明寺に參る、いと淋しき寺にして二個の大碇數多の具を帶びてそなへあり。大綱の者獻ぜし由、それより玉姫神社に詣づ、神武天皇の母君玉姫を祭る、境内いと静かにしてこゝにも同じき碇一個あり、觀明寺よりやゝ大なり、齋藤つるの招きによりて遊びに行く、淺野方より迎ひ來りし故にかへる、母上より御文來る、夕七時堀内の媼來る、湯に入りて八時床につく。



谷内せい

鑛山業家谷内氏夫人

一月十五日、晴　三十八度

十五日の祝ひをすまして、下女を宿へ遊びに出す、午前十一時、主人は横濱の雜貨店の支配人が米國に出帆なさるのに付て、先方の御主人に何か差上やうと思ひて、其餞別品を銀座まで買ひに行く、午後一時三十分。此折り親類より出産の知らせ有りしが、主人留守

の爲めゆかれず。十六日に行く事にする、ゆくまもなく主人は午後七時三十分に歸り、東京名所の本を買つて御出てになつた、けふは子供二人とも病氣故、部屋三四回見廻り十一時にやすむ。

十六日、晴天、四十度

けふは昨日よりも少しあたたかにて午前中に親戚の見舞に行かむと思ひしが、職人が食堂のオイロカペートを張りに來り十二時迄かゝる。午後二時より親戚にゆかんとて四谷の飴やに行きたるに、折惡しく、のぞみの、品がなく、二三軒先きの飴やにて入用の飴を買ふ、電車を待つうちもけふは寒き風吹きて耳や鼻がピリ／＼としてさむくつてたまらなくなつた。漸く電車に乘つた時ははや三時、先方へ四時に着き、玄關にたのみしに二十二三の丸顏の下女出て來る、其飴と下女に手拭四本目錄四包を渡す、夫より案内に連れ玄關の次の八疊に行き、先方の老御夫婦樣に御面會して四方山の御話し有り、次に御子息樣が韓國に御出でになりしお話し有り、私より是非若御奥樣と赤坊さんに御目

にかゝり度と云ひ、老奥樣の案内にてはなれ産室に入ると御産婦と赤坊さんとならんで御やすみになり、傍には看護婦一人居るのみ、此處に十分程居り、産婦に長咄しは惡いと思ひ、八疊に戻り茶とカステイラの御馳走になり、五時三十分歸る、其時は空腹の爲め寒さが一層に身にしみ、いそぎ甲武電車にて家に歸り夕飯を濟ます、ちようど六時、少し立つと親戚の者、娘の見舞に參り、貸家の門戸の話し有りて、十時に歸り行く、娘は風邪てあつた。

十七日、晴天、三十度

六時三十分に起き、神佛に御禮を濟す、端書が屆ひた、赤羽に奉公して居る國元の知人の娘である、十八日遊びに來ると云ふ知らせて有つた。午後一時より主人は友人より依賴の人を尋ねに行きたるにじきにわかり、明日當家に來るとの事て、主人は四時に御歸りになり、四時卅分に妹が娘の見舞に來り、二重廻し買わんかと持參せり、餘り品質がよろしくない故之を返す、七時下女自分用事にて青山にゆき、返りにペンキや建

具やにより用事を濟し十一時頃歸り來る此時妹も歸らんと申たりしが、亦四方山の咄しにて十一時に歸つた家中の戸しまりなし、子供の處を見廻り十一時卅分に眠る。

十八日、雪　三十六度

七時に起き、けふは誠に寒さが嚴しく午前九時赤羽の國元の知人の娘が參り、四方山の咄し赤羽の櫻草の咄し、さくら草は赤羽が一番よろしいとの事、又所の咄し有り、此時牛込の人來り、十疊の座敷に通し、主人面會致し十一時頃に御歸りになり國人の娘に晝飯に五もくずしを出しちやうど雪がちらちらふり出した、空には鼠色の雲動き、何となく世間が淋しくつて寒むくつて、雪が降るからけふはとまるがよいとすゝめたが、どうしても歸ると云ふ、午後三時に國人の娘は牛込まで行くと云ふて歸つた。其時に反物と小遣、外に主人に土産を渡し、停留場まで下女



に送らせた、雪は今盛んに降り出した下女は四谷に買物に行き、三時歸宅す、夫より妹の處に御飯むし貸す先方より水コンロを借り、其時國元に送る束あられ一斤買ひ七時に歸る、晝は雨と替り、きれいなる銀世界もア丶丶おしいかな雨の爲めに景色もメチヤ〳〵になる十一時に勝手の戸じまり火の用心注意して十一時三十分にやすむ。

十九日、雨、四十二度

私は風邪の爲めけふは八時二十分に起きた、娘も全快して皆學校に行く、午後一時、國元に手紙を認め、母上の小遣拾圓として封入し、小荷物に舊の年暮品其中に手紙を入れ、下女に郵便局に出しにやる、ちようど三時であつた、其次に友人の與樣に手紙を出す、はや雨もやみたれども、曇り天氣て、此日私は風邪の爲めに心地惡しく、下女に風藥を尋ねしに、そばやの茶は大曾宜しと云ふゆゑ、そばや茶を買にやり、之をすぐに呑み、何てもあつき物を食せねばいけぬとの事故、へんな茶も有るものと思ひて、うどんを食べる、九時四五分に休む、此夜南風には雨つよく吹き、外は物すごいほどであつた、それでもいつもの如く火の用心だけは見廻る。

二十日、晴天、五十二度

今日は風邪の爲め九時三十分に起き、あたりを見れば、きのふに引きかへて、好天氣、暖き事丸て四月頃の季候なり、ア丶丶何となく、心地よし。青山なる建具や職人來り主人は建具の注文すとて話し居り、自分は正月二十日の、雜煮を祝ひ、下女髮結來り、十時三十分鑛山の事にて客きたる。試驗の結果良好との事。硝酸にて燒付などして居たり、十二時、晝飯を出す、午後一時に以前庭内に居つた巡査遊びに來る四日より十四日間、胃病の爲更に休み居た由、二時に歸る、前の客も三時に御歸りになる、次に親戚の者來り、貸家の門戸なをりたりと云ふ、此時主人はあの門戸は天氣になればよくなり、雨が降ればわるい天氣豫報のやうだと一同大笑ひ致しました。下女に、フランスパン、買ひにやり、餘り暖氣故地震てもあるまいかと案じて居

ると、よいあんばいに雨降りになり、安心致した、相かわらず見廻りをなし、火の注意して、十一時にやすむ。

二十一日、雨、四十六度

私は未だ風邪がなをりません故、八時三十分に起き此日は雨降りて別に午前中は記ず事無し。午後一時五十分主人は近隣の友人の家に行き夫より芝の友人へ行くと申して御出かけになつた、二時頃に下女は當町建具やに敷居の直しをたのみに行く三時横濱より雑貨店の支配人が來りしに、折り惡しく主人の留守故どうなすつたと思て下女に尋ねにやりしに、幸ひ御出になり、すぐに家に歸り、色々の御話の末に、先日買來りたる名所の本と手紙を渡し、後に酒肴を出した、七時に横濱へ歸られた、此時雨は止む、家中の見廻りを無し火の用心注意して十一時にやすむ。





鐵道院旅客課長木下淑夫氏夫人

木下良子

十二月一日、晴

主人と私とが近來兎角健康の勝れないのは、手近の用事さへ人任せにして自分達は少しも働かないから運動不足の結果であらうと思ひ、せめて自分達の寢室の雨戸だけなりと自分達の手て繰あける事にきめた、處が此朝主人はそれを實行したけれど、自分は寢坊をしてあはれ書生に先んじられた。

朝食を終ると主人は惠美ちやんと婆やを連れて、三越へ諸大家珍重の玩弄物參考品を見に行つて、布團皮や玩弄物など種々買つて來られた、午後よりその布團皮を裁ちて下女に縫ふやうにしてやる、妹の玉ちやんが學校の歸りに立寄り髪を結つてくれとのこと、今日は桃割がいつにない好く出來たと大喜びて歸つた、夫れから下女相手に運動場を大掃除した、清々して心持よ

く夜食の仕度などして、惠美ちやんを湯に入れたら、昨日まで喜んで這入つて居つたのに何故か今日に限つて泣いて大騒ぎするから、直ぐに上げた。

二日、晴

今朝も書生に雨戸を開けられて、愈々實行が出來ないと皆なて大笑ひ、主人を送り出し、何かと主人の辨當の仕度して居ると惠美ちやんが、立ち上りては一足二足と歩み出し昨日三越から買つて來た犬を引張つて、危なかしくも二三歩、歩くやうになつたのを見て嬉くて／＼何に例へやうもない。午後より來信の皆樣へ手紙の返事をかき、それから各社から送つてきた雜誌を一通り見て、夕方書生を相手に羽子つき居る所へ醫師來り胃腸を診察して、大分宜くなつたと云ふ、此日は惠美ちやんに閉口したから、今日は婆やに入浴さして貰ふ、それでも泣くので食事をして居たが、氣が落ち附かず二度も湯殿にいつた、ほんに子供ほど世話のやけるものはないと思ふ、食後主人と雜誌の批評抔して、主人が寢についたから自分は日課の手習を始めた。

三日、晴

今朝は少し氣分が惡いから運動場に出て羽子を突く書生二人と三十分間程運動し、それから朝食を終へいつもの如に仕度などし、主人が出勤前に髭剃る手傳をして送り出した。

午後下女の掃除を見廻り尙床間や書棚などは、つや拭し、床には挿花し今日は、いつになく思ふ樣に活られた、それから三人の下女へも髮を結つてやり自分も結ひ、晝食をすまし居る所へ妹の玉ちやん來る、茶の湯の先生も約束通りお出てになり、いつもの樣に稽古し、ついでに正月の屠蘇器につける飾りものや床の間の寳來の飾りものなど、毎年の如くに敎示され、これて正月が明日に來ても心配ないと一と安心した、夕方より主人が精養軒に送別會ありとて行く、不在に惠美ちやんを遊ばして居ると獨り立ちて二間程も歩行き、亦判然聽分けられぬが片言交りに何かと頻りに獨言いふ、一しほ可愛いと思ふ。



女醫　吉田賢子

十二月一日、水曜日、晴
昨夜から深川の親類に泊つてゐる、午前七時半起き出て食事を濟し一二の雜談を交して十時半歸宅す待ち居る患者を診察し、十二時半晝餐午後二時懇意なる某夫人御出になり三時半歸らる、同時に白神茂子樣御出あり、御談を承り晩食を共にし十時御歸り、日記其他の用事を濟まし十一時半就蓐す。

十二月二日、木曜日、晴天
午前七時半起床、居室の掃除常の通り冷水浴をなし午前八時半朝食、夫より診察所に出て十二時半晝食、午後一時半自分の小狗の爲め病院へ至り、夫より芝の公園の某家に寄り昨日來客の爲め往診を怠りたれば急ぎて往診し、八時半歸り晩食後直に又往診十二時歸る。

十二月三日、金曜日、晴
午前七時起床、平常の通り掃除冷水浴をなし髪を結ひ、食事をなし、今日は少しく暇あり新聞を讀み居たるに四谷の黒澤樣より座敷開の招待を受く、二時間程して同じく招待を受けられたる深川の大村信子樣見えたれば、同道して趣く、數奇を凝らしたるお庭先、お座敷など詳しく拜見して饗應に與り午後二時辭す、傳馬町二丁目より電車、三宅坂にてやんごとなき方の御通行の爲め電車暫く停る、銀座にて大村さんと別れ歸宅後往診、白神樣近火ありしとの事に見舞に立寄る八時歸る、其日の用事を調へて十一時半就蓐す。



某伯爵令妹　たけ子

一月元日、晴
初鷄の啼き初むる頃から目が覺めた、除夜の鐘とともに妾は十八才の處女となつた、七時頃一同揃つて、お屠蘇の祝儀が濟む、其頃から續々と回禮の人が來た、

十時頃には玄關の名刺受も山を築く、彼是して着物を着更へたり、何かして居る内に氣の早い妹は遣羽子をしやうと勸めるので、お庭へ下りて突いて見る、其時はお類も一緒になつて勝負した、妹は暮の内からお友達と練習したとかて流石に上手なもの、妾など迚もかなわない。

二日、曇

朝から鉛色の雲がどんよりして居るので、雪でも降らなければやいゝがと、豫定より少し早目に御年始旁々年玉を下女に持たして、俥で琴のお師匠樣の處へ行く。先生も切髮にされて被在るが、今日は黑の紋羽二重をお召になつて被在るので、大變品よく見えた。何處かお出掛になる樣子だつたので、凡そ十五分もお邪魔して歸る。夕飯後兄や妹などと歌留多會を開き、其内幾回かの勝負はすんで中休みとなり、お茶が出たりおすしが出たり、はや夜も更けて十時半、妹は直ぐと寢る、妾はこの日記を書く、襟の邊りがそゞろに寒い。

一月三日　晴

朝から晴れ渡つた空には一點の雲もない、其上風は少しもないので妹は大喜び、女中を合手に羽子を突いて遊んで居る、それに引き替へて弟は風がないので凧が上らないと云ふて悲觀して居る、妾は暇なので日射のいゝ緣側に出て二三の雜誌新聞を讀み耽つた。



千鳥

某高等官令孃

十一月廿一日

大隈伯邸で催される秋香會の通券を頂いたので、好いお天氣ては有るし此れぞとの用事も無いから森田さんを誘つて早お晝で出掛けた。もう御門前は人力車で埋まつて居た、門を這入ると自働車や、馬車がずらりと並んで居て、入場口には赤い印を胸へ付けた人が四五人居る。會場には葭簀の屋根を張つて、人々の丹誠を凝らして作り上げた黃菊白菊が、鶴の臺、浮猩々、筆染川、抔何れ風雅な名の下に、今日を晴れと艶を競

ふて居る美しさ。素人目にはどれを甲乙とも定め難いが、審査の結果に一等に當撰したのは、玉樹後庭の花、賞品は金梨地へ菊花模樣の蒔繪の手箱、是れを受ける人の得意さが想はれた。

山茶花の咲き亂れて居る蕭洒な茶室の側を通つて飛び石傳ひのお庭に這入ると、龍田姫の手染の紅葉と、形ち面白き幾本かの松に包まれた築山、その麓の池のほとりには、なよ〳〵と露にも堪ぬらしき濃紫の野菊を、そこゝにあしらつたのが仲々に捨て難い趣が有る、更に林を成したる楓の下の紅葉の落葉と零れ松葉を無造作に掃き寄せて作つた小道もわざとらしからて、宛然昔の大内山の繪を見るやうな心地がする、其の生きたる繪の中には、振りの袂も重げなる姫御前、裳を片手に抓み上げて靴の運びの輕やかなる西洋婦人、羽織袴の男子、シルクハットに鼻眼鏡のジエントルマン、抔三々五々逍遙するのが、丁度軒の深い奧床しい日本座敷と白壁の西洋間とが立ち並んで居るのとに照應した。



東京高等女學校長

棚橋絢子

私が日記をつけ始めしより、今日に至るまで、三十一年になります、その動機と云ふのは外でもありませんが、あまり物事を忘れつぽいものですから、どうしたら忘れないやうに出來るかと種々と考へまして、日記をつけるに限ると思ふて、つけ始めた次第でございます。

日記と申しましても、文體などもかまはず、只だ其の來客と、悲しかりしこと、うれしかりしこと、手紙を出した處と、手紙の來た所その他家族中で變つたことのありましたことを、必ずつけて居ります。それてすから、子供なんかゞ、何々さんがいつ御出になつたか知らんなどと、さはぎますから日記を見て知らせてやります、また手紙なんかも何日に誰某に出したが、返

事がこないと云ふやうな時に、日記をしらべるとよくわかります、新年は澤山の年始狀が參りますが、この時だけは、今日は卒業生から幾枚、在學生から幾枚、知人より幾枚と云ふやうにつけておき、自分より出すのも、同樣につけて居ります、ですから今より幾年前は幾人來た、生徒が幾人よこしたと云ふやうなこともわかります。

日記は夜寢る前必ずつけて寢ます、一晩でもつけずに寢ますと、それこそ忘れ勝ちになりまして、思ひ出しがたくなります、旅行中とか、また親戚に泊ります時には、一一日記を持つて歩くと云ふことも、面倒なものでありますから、一寸何にかにざつと覺え書きして、あとで思ひ出してつけて行くやうにして居ります。

日記のつけ初めは、なんだか、厭になることがありますが、つけ始めると、面白くつてとても、やめられません。

皆さんに日記をつけて居らしやいますかと、尋ねますと、時間がないの、忙はしいの、やれ、子供があるの。なんのかんのと、申されますが、それほど時間を費す、わけでもないし、子供が邪魔になると申ましても、寢させてからもいくらも書けることですから、一日のうちの仕事として、必ずつけなければならないと自覺して居りますと、忘れる氣づかひはありません。

日記をつけると云ふ事は一つの克己心の奬勵にもなりますので、今日は筆を持つのが嫌だ、もう日記など書くのはうるさいから早く寢て了ひたいと思ひます時でも、否々日課だから是非とも此れだけは濟まさねばならぬと云ふ氣になつて、何んな妨げがあつても必と書くと云ふ習慣をつけると、段々それが癖になつて、つけすに寢ると心が休まらないやうに思ひまして、一つの勤務に對する遂行心を養ふ助けにもなります、極つてする事はすると云ふ習慣が養はれるかと思ひます。

日記などは、どなたにでも出來ることでございますから、自分の多年經驗上、皆さんに是非とも、日記をつけることをお勸め致します。



婦人の寂清生活

木下尚江

（一）

獨身生活を清守せんとは、男女を問はず何人も必ず一たびは思ひ立つ所の問題ならん。而して其の能く之を成就するもの丶殆ど皆無なるは何故ぞ。辯護の辭は夥多あるべしと雖も、畢竟理性明かならず、意志堅牢ならずして、容易に情慾の克服する所となるが爲めに非ざるは無し。吾人之を思ふ毎に、冷汗禁ずること能はざるなり。

人即ち曰く獨身生活は不自然なりと。吾人は「不自然」の辭を拒絶せず。然れども問題は自然か不自然かに在らずして、其の謂ふ所の自然或は不自然なるものの價値如何に在るなり。世には「自然」の一語を以て最終の眞理となすものあれど、吾人は遂に之を理解すること能はざるなり。吾人は寧ろ常に此の所謂「自然」なるもの丶、明白に一個の妄想に過ぎざることを知る。所謂「自然」を一排し去るに非ずんば、眞理の實相得て見るべからざるなり。看よ、獨身生活を不自然なりと罵倒する諸君子は、滔々として情慾の奴隷にして、而して自ら之を覺悟すること能はざる天下の痴人に過ぎざることを。

情慾の猛火燃え初むる青年の胸奥に「獨身生活」の疑問、清風の如く薫ずるもの、是れ豈に貞潔なる神女

の、耳語に非ずして何ぞ。貪慾にして愚昧なる人の子の悲しさは、天女の忠言に心耳を傾くることを爲さずして、果敢なくも情火の囚虜となり、相率いて永遠の罪に入る。悔ひて又た還へることを能はざるなり。

吾人は今日の青年男女に向て、大勇猛心を振起して、以て獨身生活の疑義に當らんことを熱心屬望せずんばあらず。

(二)

吾人は尼僧の生活を歎美すると同時に、多くの尼僧の境界に對して憐憫の情なきこと能はざるなり。吾人が途上見る所の多くの尼僧なるものは、決して自己の決意より來れるものに非ずして、外力の脅迫より成れるものなればなり。自ら取りたる尼僧の生活や尊貴なり。已むを得ざるの尼僧の心事や悲むべし。吾人は此の不得已的尼僧の故を以て「尼僧」其物の價値の殆ど全く破壞し去られたることを哀悼す。新しき若かき比丘尼出でよ。而して人の心より此の自然の迷霧を一掃せよ。

(三)

世或は怒りて不健全なる厭世思想を鼓吹するものとなさん。健全か不健全か。吾人之を知らず。而かも吾人が見る所、聞く所、接觸する所の文明社會が、全然一塊の腐肉團にして、到底厭離の外また途なきは、吾人の疑はざらんとするも得べからざる所、而して此の貪慾、虚僞、奸惡なる社會的現象なるものは、一に人心の原板より反射したる幻影に外ならずとせば、吾人遂に世を厭い、我を憎むことを避くべからざるなり。豈に又た健全と不健全とを問ふの暇あらんや。

抑も十九世紀の文明は自然主義の文明なり。見聞接觸する所の現象を以て世界となし、感覺する所の快不快を以て人生となす。此の滔々たる濁浪の大勢に脅迫せられて、は、基督教の如きも、亦た其の本來の厭世的福音を忘却して、肉的歡樂の謳歌を是れ事とするに至れり。歡樂の恃むべからざるは、永き世の人の經驗し餘れる所、而かも傲慢愚痴なる人の子は、其の內的の寂寞と荒涼とを隱蔽して、泡沫の歡樂を追ふて狂奔是れ誇る。而して自ら標して健全なる思想と云ふ。吾人

の君、不幸にして之に追随するを能はざるなり。

（四）

歡樂の世に在りて最も得意なるものは女性なり。最も悲慘なるものも亦た女性なり。而して其の最も哀憐すべきものも恐らくは又た彼等女性ならん。彼等は情慾の餓鬼の飽食する所となるを自覺せずして、却て其の玩弄を名譽とし、其の侮辱を榮光とし、笑を鬻ぎ媚を賣りて、揚々として得色を漲らす。姿色に苦慮する若かき文明の女性よ。卿等の中、若し娼婦の淫心なきものあらば、乞ふ試に左手を擧げよ。

墮落せる世は、却て放蕩淫逸の自由の爲めの故に獨身生活を言ふもの少なからず。是に至りて「獨身生活」も亦た將に切齒哭倒するの外なからんとすなり。

旅にゐてさびしき人は八ちまたの
人中ゆき涙わすれぬ
春の雪たわわに降れり上加茂の
村につづける堤の松に
かしこくも飢をしのびし少女とも
ほめられずしておとろへ亡ぶ

晶子「佐保姫」より

されど戀こそ（リヒヤルドデーメル）

秋元蘆風

なべての深奥を
君よ、さぐれ。
目ざすところに
觸れぬべく。
　されど戀こそ
　かなしきもの。

憧憬は歌へど、舟の中、
その舟もまた
喉なり、それは
かれを吞む。
されど四周を牙に圍まれ、
生は座りて、歡び歌ふ。
　「あゝ戀よ！」——

文士と家庭



文士と家庭と云ふことも一つの問題であらうと思ひます、記者は此問題に就いて四五人の説を聽取しました、玆には佐野天聲氏と、國木田治子氏の談を掲げます、窪田通治氏、長谷川時雨氏其他の分は次號以下に發表することゝしました（記者）

佐野天聲氏

下宿時代の家庭觀と實際の家庭――都會の生活――趣味の一致――隣の若夫婦――笑聲の絶えぬ新家庭――因果律

私は家庭を持つてから、未だ歳月が短かいので、作家と家庭と云つた問題に就いて、別に纏つた家庭觀もないが、私が下宿時代に夢想し理想した家庭と、現在持つて居る家庭に就いて考へると、結婚當時、即ち初めて家庭を持つた一年間と云ふものは、田舍て親戚の離座敷を借りて暮らした。だから別にその當時は、家庭として、直接に社會との交渉、又は影響と云つたものも、比較的に少いので、取立てた家庭問題も起らず、生活と云ふ側から云つても、田舍て然も親戚の離座敷に居たのだから、至極平穩無事て、暢氣に暮して、自分の事業に對しても、思ふ樣に筆を採ることが出來たのである。

處が、出京して、東京で家庭を持つやうになると、第一に田舍に居た時のやうに暢氣て居られない、即ち生活難を感じて來る。それに自分は何處へ務めるてもないから、毎日朝から晩まて宅に居るので、從つて有所家庭の出來事直接に見聞きしなければならない。その内に今度は子供が產れた。而してこの子供に馴れな

いと云ふことが、自分の事業をするのに取つて、非常に不愉快を感ぜしめた。原稿を書いて居る時など、傍であばれたり、又泣聲などが聞こえると、氣が落付かないで、不愉快で堪らない。隨つて思ふやうに事業が出來ない。斯うなつて見ると、自分が下宿時代に夢想し理想して居た家庭とは、全然異つて、家庭とは實際こんな不愉快なものかと、今更に一時は、失望せずに居られなかつた。而して、作家として如何かして愉快に書き、愉快に考へ、愉快に遊ぶことが出來ぬものであらうかと思つた。

　然るに、一年餘東京生活を續けて居る内に、次第に家庭に馴れて來た。而して自分が原稿を書き、或は檢べ物をしたり考へたりして居る時に、常日のやうに、子供が傍で騷々しく暴れたり泣いたりしても、それが別に癪に觸るでもなく、又左程にうるさくもなくなつて來た、而して自分の事業に關しても、以前のやうに失望を感ずるでもなく、案外に平氣に思想を錬り筆を採ることが出來るやうに成つて來た。翻つて、下宿時代に夢想した家庭と、形作つた當時の樂しかつた家庭と、その後一年間の不愉快な係累のうるさかつた時とを考へて、現在の家庭が此處で一變して、漸次面白く樂しくなつて來たことを感じ出した。玆に到つて、自分は、下宿時代に理想したやうな家庭は唯夢想に留るかも知れないが、少くとも現在の自分の家庭が、だん〳〵その理想の曙光を仰ぐやうになつて來て、一時は馴れなくてうるさかつた子供に對しても、次第に愛情が密かになつて、それが今迄の不愉快を打消して、面白く樂しくなりつゝある。も一つは、自分の妻が、自分の事業に對して、同じ趣味を持つて此の事業を扶けてくれる事である。實際作家として、己の趣味を味ふことが出來ず、又己の事業を解さない妻を持つたとすると、これ程一生涯不幸な悲慘なことはあるまいと思ふ。自分の妻のことを云ふのは、少し變かも知れないが、自分の妻は勿論平凡ではあるが、自分の事業を解し、出來るだけこれを扶けて呉れ、文學の趣味も相應に味ふことが出來るのは、自分は勿論、作家として

の家庭に取つて大に喜ぶべきことだと思つて居る。而して、理想希望と云へば際限がないが、自分が今日に到るまでの、三様の生活狀態も、所詮妻に依つて多少の希望がひらめいて來たのだと思ふのである。

次ぎに、斯麽ことを話して好いか悪いか解らないが、自分の家の直ぐ隣に、海軍の中尉か何んかの母堂が、居られるが、此の夫人は好い年をしながら、それでも自分の子供に世話になつて、心配を掛けたりするのは心苦しいと云つて、自分一人手で、下女をも使はずに、素人下宿を手一つでして居られる。而し、奥座敷には、新婚後間もないと云つた、若夫婦を世話し、二階には一人者の、之れも軍人を置いて居るが、此の二人は朝早くから、毎日戸山學校か砲工學校へ通て居るが、その階下の若い妻君と云ふのは、夫が始終不在であるから、自分は朝夫が出て行くと、琴を持出して彈じ初める、此頃では山田流をあげて了つて、今度は生田流を習ひに行つて居る。而して又近頃は、裁縫を習ひに何處かへ通つて居られる。處がこんな風で、毎日々々遊んでばかり居て、朝から寢るまで、暇さへあれば自分勝手な事ばかりして居て、そして夕飯を食べる時なども、自分が些つとも夫の世話をするでなく、此　家の母堂が自分で膳も運ぶし、お茶なども汲んで出すと云つた有様で、お飯を盛るのにも皆な母堂に給仕をさして、此の若い妻君は平氣なもので、當然と云つた風で、自分は夫と同じやうに据膳で母堂に給仕をさして居る。私は此の若夫婦の家庭を見て、實に氣の毒に堪えない感がする。私の妻などは女の事であるから、朝から晩まで遊んで暮らして、何時も琴の音などが聞えるものだから、遂ひ深い考へもなく、彼の御夫婦はお氣樂だとか云ふが、自分は何時もそれに向つて、何に幸福なものか、その幸福らしく見えるのは、一時の外面だけである。何れ間もなく此の若夫婦は一個の家庭を作るに相違ないが、その時の悲慘な光景が、彼の華やかな自由に見える家庭の底に潜んで居ることが、あり〳〵と見透つて居る。何れ國へでも歸つて家庭を持つやうになると、姑もあらう小姑もあるに相違ない。自

私は現在の若い夫婦の家房の有樣を見るに付けて、寧ろ、その時の不幸な家庭の、何時も喧鬪の絶えないとてあらうと思つては、實に氣毒で同情に堪えないのである。

自分は此の家庭の有樣を見るにつけて、その幸福に見えるのは、實際は不健全な幸福であつて、違つた軌道を廻つて居るので、決してうらやむべきものでなく、却つて忌み嫌ふべきである。

又、つい此の隣家に、自分の從弟が家庭を持つて居るが、此の從弟は高等商業を卒業して、今は三井のセルロイド株式會社に出て居るが、去年妻君を貰つて、家庭は至極平和で、何日も笑聲が絶えたことのないと云ふのは、實際こんな家庭を指すのである。日曜毎に大抵友人とか、同僚などを招いては賑かに酒などを出すし、又時々は一家打連れて散歩や、見物にも出掛けるし、その老父なども來ては三四日も宿つて行くと云つた風で、家庭こそ、實際に幸福な家庭と云ひ得るのである。然らば、何うして此家庭が平和幸福で



あるかと考へてみると、それは矢張因果の道理から來たもので、今日從來の家庭が幸福であるのは、その親父のお蔭で、親父と云ふ人は、非常に理財の道に秀てた人であつて、隨つて從弟も至極平和な圓滿な家庭の内て成長して、幸福に順風に帆を上げたやうな生活で育てられたから、その當然來るべき結果として今日の狀態になつたのである、その父と云ふのは、又國家者てあつて、理財の道に通じた人と云つても、別に他人の貧苦を見て知らぬ振をして居ると云つた風でなく、困る者は扶け、正しき人を保護して、唯々多收少出を旨としたのに過ぎなくて、好く家のため社會の爲めに盡した、その應報として、七十年間に積んだ德が、その子に及ぼした結果として、今日の圓滿な幸福な家庭を作ることが出來得たのである。翻つて、自分の家のことを考へて見ると、之れも慥かに因果律の結果として、當然斯くなるべき運命である。私の家庭と云ふのは、駿河の富士山の麓の大宮であるが、父の代までは、三千俵位は入つた土地での大地主であつて、祖父は地方での事業家で、町の名主なども勤めて居て、世間からも非常に尊ばれて、その頃水戸烈公に地球儀を献じた事もあつて土木事業などを盛んに起したりしたものである。處が父の代となつて、町民と意見が合はない事があつて、それ以來、町民に反抗して、常に意に滿たない不平の結果、遂に放蕩に身を持潰すやうになつて了つた。せめて學問でもあつたならば斯んな風な事になるてもなかつたのだが、意志の强固であつたのが、却つて變な方に傾いたので、この父の不健全な事業の事蹟が、その子たる自分等に報ゐるのは當然である。だから父が物質と云ふものを徒費した結果として、自分等が物質的に不幸をするのも因果律の然らしむる處てあつて、その代りに精神的方面では、祖父や父の影響を受けて、幸ひにも潔白な、意志の强いとか、見識の高いと云つた恩を受繼いだ點に於いては、決して他人には劣らない美點であると思ふのである。

　自分は何時も、斯んな事などを妻に云つて聞かせて、從弟の家庭を見るに付けて、要するに、「蟹は己の甲に

似せて穴を掘る。』と云ふ諺のあるやうに、佐野天聲の家庭は、佐野天聲らしい家庭を形作らねばならぬ、それはまさに我々が取るべき方法であると常に云つてゐるのである。

國木田治子氏

「破産」と「親子」――家庭に於ける獨歩――獨歩と原稿――「渦ヶ原より」のモデル――田山さんの蒲團――今の家庭

作家と申しましても、私などは他のお方の様に餘り書きも致しませんから、別に作家と家庭など云ふ、お話はご座いません。

今度出します『破産』ですが、彼れはご存じの通り獨歩社が解散する時の事を書いたのです。それに獨歩が近時畫報社時代と、何でも三十七年のお正月でした、金貨百圓の賞さがしに書きました、『親子』と云ふ小說とを合せて、一冊とすることにしました。

獨歩のことでございますか。家庭として別に今取立てて申上げることも御座いませんが、家では隨分何らかと云ふと、嚴格な方でした。而して、自分では無性でしたけれ共、人のだらしない風が嫌ひなので、掃除とか子供の世話なども、隨分やかましく申しました。樂みと申しましては、釣位なもので、それも極近來のことで、鎌倉に居ました時分、能く滑川に沙魚釣りに出懸けました、人に話をして聞かせるのが非常に好きで、妹なども、『兄さんの家に行くと、色々なお話を聞くから悧怜になるけれど、宅へ歸ると馬鹿になる。』などと云つて居た位でした。

報知新聞社の外交記者をして居ました時代は、隨分酒を飲み初めまして、その時分は、小說家になる考はなく、政治家になるつもりでして、其方に野心がありましたから、政黨の人達と、能く紅葉館に飲みに行きました。それから最も盛んでしたのは、近時畫報時代から獨歩社時代に懸けてでご座いました。或時斯んな事が御座いました。それは何でしたか、或小さい新聞か何にかに關係して居まして、酒に醉つた上句、その社長の宅へ行つて何か癪に觸つたとかで、散々その人を罵倒した上で亂暴して、何でも硝子を破したりした

まうですから、その社長も心配して、遂には餘りの亂暴さに辛棒し切れず、自分で交番へ引張つて行つて、巡査に引渡したらしいのです。二人の男に連れられて、家へ歸つて來てからも、「何で俺を交番なぞへ連れて行つたか、怪しからぬ奴だ。」と非常に憤慨しまして、自分で短刀を探出して、「これから出懸けて殺してやるのだ。」と大變に荒れて、なかなか聞かないのです。下女は恐がつて泣きますし、ほんとに困り切りましたが、送つて來た二人の男と共に止めて、漸く寢かしましたが、寢て居ながら「何う云ふ譯で交番へ連れて行つたのか、それを談判して來い。」と申しまして、何うしても聞かないものですから、仕方なく、夜の十二時過ぎに、子供を二人も連れて、その社長の宅へ行つた事がございました。

　小説を書くには、なか〱書き澁りの方でした。家の方が困るからと云つて、賴みましても、そんな事ではなか〱書きませんでした。原稿の締切前になつて、せつぱ詰らなければ筆を執らないのでした。「忘れ得ぬ人々」だとか、「河霧」だのを、國民の友に書きました當時も、收二さんが、「印刷の方が、頁を開けて待つて居るのだから、早く書いて呉れ。」と催促しられましては、「午後の三時迄に書く。」とか、明日の午前までには書いて終ふ。」などと云つては、能く喧嘩でした。

　私の書きました、彼の中央公論の「モデル」でございますか、彼の「モデル」の實際のモデルですか、彼れは些つと親戚先きの娘でして、小い時から藝者屋に居まして、近い頃一本になつたのですが、藝は相當にありますが、今頃の藝者に似ず固いものですから、自分でもお客を取らないのです。そんな風で、今では藝者を廢させて了ひました。

　家庭とモデルですつて、それは獨歩が彼の「湯ヶ原より」の中に、私の實家の母と二人で、湯ヶ原へ行つた事を、御存じでせう、「啞然、茫然、泰然。」とか云つて、母の事を書いたのです。處が、母は少しもそんな事を知らなかつたのですが、その後或時、母が知人の宅へ行きましたら、「貴方哲夫さんと一緒に湯ヶ原へ

お出でゞしたか。」と聞かれたさうです。それで、「え、行つた事があります。」と答へると、「それでは之れを御覽なさい。」と云つて、『湯ヶ原より』を示されたので、母は非常に怒りまして、その後暫時は私の宅へ來なかつた事が御座います。

それから、之れは私の家の事ではございませんが、先日田山花袋さんのお宅を訪ねますと、何でも『蒲團』をお書きになつた當時たやさうです。餘りに世間の評が高いものですから、奥さんのお里のお母さんが、田山さんのお宅へお出でになつて、『何故娘のことを彼んなにお書きになつたのです。もともと私の方から貰つて下さい、と賴んだのではありません。貴方の方から、たつて貰いたいとお望みになりましたから、上げたのですから、』と非常に立腹せられたさうです。田山さんも何と云つて返辭をしたら好いやら、お困りになつて居られますと、奥さんが横から、『それでも宅では、あんな事でも書かねと立つて行けませんから。』とおつしやいましたさうです。

今居ります家でご座いますか。芝居の近處でもあり、それに藝者町の近くでございまして、子供達の教育の爲めには、好くないと思つて居るのですが、直ぐ前に實家の母が住んで居るものですから、何かの都合で此處に居るのですが、近い内に何處かへ越したいとも思つて居るのです。

此間なんかも、寅男さんが學校で惡戯をして、お友達と喧嘩かなんかして泣いたさうです。すると先生が、寅男さんに云つて聞かせて下すつて、『寅男さんのお父さんは豪い人でしたから、貴方もそんなに泣くのぢやありません。』と云つて、今度は教壇に立つて、死んだ獨歩の事を生徒に話して『寅男さんのお父さんは、非常に豪い人で、皆なの人々から惜しまれて亡くなられました。皆さんも大きくなつたら、人から可愛がられて、惜しまれる樣にならねばなりません。』と云はれたさうです。



花束の作り方と用ゐ方

水野葉舟

昨年中、本誌で公にして居ました「花言葉」について、私は尚ほ、その「花言葉」を應用した遊戯を二つ三つお話し致さうと思ふのです。

と言ふのは、何故かと言ひますと、たゞその遊戯が面白いと言ふだけでは無く、或る時、私は或る人から、あれは何の爲めだ、如何言ふ必要から起つたものだと言ふ、問を發せられた事があります。

この花言葉と言ふものについては、あれを公にする一番初めの時に、私はその性質について、一應説明して置いたつもりです。だが、まだその上にこの花言葉といふものは如何な事に使つたら面白いだらう?、又は如何な事に使ふものだらうと言ふやうな疑問を起された方々もあつたらうと思ひますから、私は自分が知つて居る、遊戯を二つばかり御紹介して見ようと思ひ立つた譯です。

先づ、その第一は「花束」即ち Bonquets です。

△花束

花束の作り方と言つても、別に何にもありません。たゞ任意の花を、或る數だけ集めて一束にするのです。

この花束と言ふものは、近來、何處でも花を賣る家では、期節々々に就いて、種々な束を作つて賣つて居るてせう。

處て、花言葉を應用した花束と言ふと、たゞ單純に美しい花を集めたと言ふのでは無く、あの多く花が、夫々に意味を持つて居るてせう?、あれをその花束を作る人が、必要に應じて配合させ、さて、それを集めて見ると自ら、或る心持が、その中に表はれて居る。まあ言ひ換へて見ると、手紙を書くと言ふやうなものです。例へば、此處に廣葉のレンリ草(Everlasting-pea)と、夕顔の花と、勿忘草とを一束にして人に送つたとするとその花束には斯う言ふ、意味が隠れて居るのです。

「今夜逢つて下さい。忘れちやいけませんよ。」これは

廣葉のレンリ草――逢つて下さい。

夕顔――今夜

忘れてはいけませんよ――勿忘草



と言ふ風に各、花に意味を持つて居るからです。

と、斯う言ふ風にして、この花を以て、手紙の代用をさせる事が出來るのです。

處で

△これを使ふのには、

その使ふ人が、互々、夫々に工夫をさせる必要がある。もとより花言葉の花の數は極めて少い。それて持つて、複雜した種々雜多の心持を表はすのですから、出來るだけその言葉を活用させて、様々の場合にあてはめて使ふと言ふ事が必要である。それは丁度、暗合の符諜を使ふ時と同じやうな苦心が入るのだと思ふ。

それて、この花言葉を使ふ事にかけては、セイロン附近にある、或る島の娘や、トルコの婦人は天才を持つて居ると言はれて居るそうだ。それて、この花を使ふのが進歩して居る國ては、花が無ければ、花を描いた畫を使ふ事もある。尙ほ進んてはその花の形をハンケチて作り、その花の香のする香水をそれにふりかけて代用すると言ふ處さへある。て、花が一寸得にくい時には、その代りに花の繪を使ふのもよからうと思ふ。

△花束の作例

それて、こゝに一つ花束の例を五つ六つ上げて見る。これは前に述べた事を更に明にする爲めてある。

一――あなたは、むら氣て、無分別て、僞をつく。だから人に嫌はれるのだ。

むら氣――アペーチナ
無分別――巴旦杏の花
僞をつく――鷄頭
嫌ふ――ペーシル

それて、アペーチナと、巴旦杏の花と、鷄頭と、ペーシルとを一束にして、この意味を表はす。

二――「欺されない用心をなさい。危險が近づいて居る。おはづしなさい。」この花束は夾竹桃と、白

のフライツラツプと、石南と蒲公英(或はあざみの種)を束にする。

用心——夾竹桃
欺く——白コライツラツプ
危險が近づいた——石南
外せ——たんぽゝ

三——あなたが知らぬ顏をして居るので私は悲しい。あなたが冷淡たから私は氣が沈む。」この花束は紫の馬鞭草と、芥子と、枯葉と、カグナス、カスタスとを集めたもの。

あなたの事て私は悲しい。——紫の馬鞭草、
無頓着。——芥子の種。
氣が沈む——枯葉。
冷淡——アグナス、カスタス

四——「嫌からずに降りて來て下さい。さうして獨りて淋しがつてる私を慰めて下さい。」この花束はエスタスコツイアと、ヤコブの梯(ヤコブス、ラデツア)と、梨の樹と、ヒースとを集める。

嫌がるよ——エスクスコツイア。
降りて來い——ヤコブの梯子。
慰める。——梨の樹、
獨りて居る淋しさ——ヒース

五——「私はあなたの好奇心を失望させるのが好きだ」この花束は赤い薔薇の花と、山梅花と、スヽカグの枝とを集める。

すきだ——赤い薔薇
失望——山梅花
好奇心——スヽカグ

以上の例は、ほんの僅少なもので、たゞ花束を作る上の心當りになるやうにと思つてゝある。これて見ると至極簡單てあるやうだが、それても中々工夫が入る事と思ふ。

△更に

も少し簡單な事では、この花言葉を覺えて皆さんが用ゐられる簪、或は畫はがき、又は折々の愛する花の贈りものなどに、自らその意味を付けて、希望をかたり、隱した心を傳へ、又は自分の思ひをやる事も出來るだらうと思ひます。

この樣な事は、一時、この花言葉が初めて我國に譯された時分に、學生の間て種々の事が行はれたと言ふ事を覺えて居ます。

△花言葉の變化

さて第二には、花言花の變化の方法について要點だけを述べて置く。

て、この變化と言ふのは、一つの花があるとする、處て、その花の意味に反對するやうな——例へばその葉をむしるとか、針をとるとかすると、その花の意味が自ら變化して來る。即ち反對の意味が出來て來る。

それについて、例をあげて説明をすると、薔薇の芽の針を取つてしまつて、葉だけ殘して置くとする。さうすると、「もう私は恐くはない。私には希望がある。」と言ふ事になる。即ち刺は恐怖と言ふ事を、葉は希望を意味するのである。

もし、葉と刺と兩方を取つてしまふと、薔薇の芽は「もう、希望も恐れも無い」と言ふ事になる。

斯う言ふ風に、それ〴〵、その花の固有の意味に依つて、それの形を變へると、種々の變化を作る事が出來ると思ふ。

次には、花束に於ける花の位置に依つて、種々の意が出來る。例へば花束のとつてんに持つて行つて。マリーゴールド（孔雀草の一種）を置くと、「心中の苦悶」と言ふ事になるし、底の方に持つて行くと、「知らぬ顏」と言ふ事になる。

花が右の方に傾かしてあるには自分の心持を表はす——即ち「私」と言ふ時。左の方に傾けると、「汝」「あなた」と言ふ事になる。

英語でイエス（Yes）と言ふ時、「左樣です」と言ふ時には、花束を渡す時に、一寸こちらの唇につけて見せる。

ノー（No）いゝえと言ふ時には、花束の中の花の花辨を一寸むしつて置くか、或は切つて置く。

以上で、花束に關する符牒は止めにする事とし、さて第三には

△花占ひ

とても言はうか、花言葉を利用した遊びを二つ三つお話しする。

第一の方法では、それをする人達が、まだ花の意味を少しも知らない人達でなければ駄目だ。

先づ。こゝに一つの大きい花束を持つて來る。その中からそこに集まつた人逹が思ひ思ひの花を引きぬくのである。さて、てんで持つた花の意味に依つて、その人の未來の配偶者は如何な人である…と言ふ事を判斷する。

例へば、それが春であつたとすると、菫、ヒヤシンス、櫻草、雛菊、三色菫、山櫨、水仙とこれだけで作つた、花束があるとする。それを互に引いたとすると、菫の人は「貞節の人」、ヒヤシンスは「遊び好き」、暗色のヒヤシンスは「悲しい事」、櫻草は「單純な人」正直な人」、雛菊は「早く立身する人」、三色菫は「親切な人」「愉快な人」「考へ深い人」、さんざしは「有望」水仙は「大膽な人」と言ふやうに判斷する。

次に又、その花の集め方に依つて、その配偶者の職業をも知る事が出來る。

百合は高位高官の人。薔薇は美術家。薊は軍人。柏の葉は百姓。ローレルは詩人。ジギタリスは法律家。松柏類は醫敎師。チニリップは不動産を持つた人。時計草は僧侶、牧師。マリーゴールドは商人など

處でこれは遊ぶ人が花の意味を知つて居ない場合だ。しかし、もし知つて居る場合には、花束をすつかりきれて包んで、花の下から、籤を垂してそれを引けば出來る。

しかし、花がある時節なれば出來るが、もし花の無い時分だつたらば、その花を描いた、畫札を作つて、それで遊んでも出來る。



男性の爲に與へられたる刺戟

激烈なる反抗

百數十枚の日記を裂く

一つ葉

彼の女は自覺する所在つて、霜月半の深更に人の寢息を伺つて、百數十枚の日記を裂いた、願はくは爐の中に燒きたかつたが都の中では、さうも行かぬ。

日毎にせめてもの思ひやりに欺かざる飾らざる、又客觀した告白も一年餘りも書いたのだ、然し〳〵欺かざる飾らざる者のみが、世は愛して呉れるであらうか、寧ろ暴露するともごまかして行くものが愛するであらう、殘忍な盲目な世に對する復讐は、假面である、裏切てあると、彼の女は思つたのだ。

一度自分を刺激した起り事は、忘るゝ能はざるものであるのに何の益あつて日記を書かう——と、思つては見たものゝ、一年に渡る自分の心を寸斷するかと思ふと、痛烈な懺悔に胸を突かれたのである。自分は戀を冷嘲し愚弄して來た女には違ひないが、矢張生命は戀であつた。君が半生に於ての最大快樂は？と問はれゝば、戀に笑み戀に泣いたと云はなかつたら、それは眞赤な虚僞である。成べく自分の幼稚な半生を斯うした早熟な浮いたものに仕度はないが、永い間を此の胸に秘めて來た汚いものに倦んだのだ、邪魔になり出して來たのだ、恐怖の在るうちは異様な響を與へて居て呉れたが、もう何の刺激もなく黑い痕跡を止めて居る許りなのだ、秘密！此の黑い汚點を早く取り除いて下さい？それは異性からの同情を持つて聞いて下されば宜いのだ、一體男は僞りの多い者だらうか、正直な者だらうか、欺かれた事がないから私は知らぬ、變るまい離れまいとは戀する人の紋切り形て、變つた相手が繰り返す許りなの

だ、早く飽きた方を欺いたと云ひ、何時迄夢を見てる人の方を捨てられたと云ふ、何れは捨てられ飽きるのに定つて居る、成功者はそれが割合に永く續いて、諦めやうが宜い位に止まる、私は何時も飽きるので、相手を捨てた勘定に成るのだ、戀も行き摺りの人に胸を轟かしたり、レターの交換位で滿足してる中は詩的な感想を持つて居て何の形式を求めてもなく腦裡の空虚を、ふさぎて行くに足りるのだから——神聖の神聖のと云ふなら此の時代より他に無いだらう、甘い涙を流して詩的な事を云つては泣き合つて居る時代を過ぎたら、もう眞摯な分子のみでは無い、その後は歡樂を求めると云ふやうな遊戯なもので、其の時既に精神的に堕落したと云へば云へるであらう。

彼の女は日記を裂く前に此んな事を繰り返した、そしてどう思つたか殘した二三枚を繰り返し〳〵讀んだ、一はさつき、一は其年の神無月の或る一日。

お七のやうな戀

五月十二日。

世の中の凡てに泣き囚えて、畢竟心にもなき小さき犧牲とならんよりは、瀧谷樣！彼の君が熱烈なるみ肉の焔に熔けて死なん、美しき愛の火中あゝされど〳〵。

黑髮の一條だにも人の御手にはふれまじ、例へ一國のキングがその王冠を捧げんとも——我處女の命こそは、永劫消き神の御手のものたらん。」と、歌つて來た此の妙齡のプライドを——。

キスは肉の第一歩である事を豫期して、それさへ拒み反抗して來たものを、誠の戀のあかしには君の凡てを給へと云ふ……あゝ私は苦しいどうしやう。

あゝ僕は文明を呪ふ、今迄あなたを八百屋お七のやうな女だと思つて愛して來た、嫌だめ〳〵。

文明は女までを汚し腐られた、眞の戀には、實驗のやうに理性の何のとあろう筈がない。つまり實驗は此の戀に切手をはり印を押すのを拒むのだ、拒む筈だ僞りの戀なんだから、僕を欺かうとするのだ、此の戀と云ふ、證書が不要になれば、ソット裂いて捨てる氣なんだらう」譯るやうなお聲！あゝ私は目を瞑つて戀に醉ひたい……つまり八百屋お七になりたいのだ……（下略）

すゝめられた盃

十月十五日。

新橋のステーションから汽車に乘つた、何處迄連れられて行くのか某樣が切符を買つたのだが、何れ此の近郊だらうと高をくゝつてすまして居た、意外に夕陽は沈む紅い〳〵色をして——、驛で下りた私は、すました顏をして默つて後をついて歩くと、陽はもう沈んで、薄暗い草原に出た、星月夜！星月夜！詩も思ひ出せなかつた。

「少々歩いたでせう。」

「いゝえ」

「いゝえは、ちと酷でせう」とやられた。無邪氣な子供ぢやあるまいし、此んな處まで日暮近く誘ひ出されるは何の譯だか知れ切つた話だ！好奇心も在るが先の弱點を一度握つて見たいからだ。何時も私は其の爲にわざ〳〵受身で誘惑に近づいて囮さながら、先の弱點を發見するのが一種の誇りなんだ、歡樂なんだが、醉つてはだめだ、却つて自分に弱味を作つて、苦しまればならぬ、覺めた時に面倒臭い！！、此の點はすゝめられた酒盃のやうなものだ、日はとつぷりと暮れて星許りが燦爛と輝いて居

る、家様は甘い〳〵言葉を囁されたけれども。私は木像だから返事一つしやしない、その辯擺手も振りほどかうとはしなかつた、彼の人は家庭に生活に倦きた揚句、新しいもの〳〵と、遂に私に求めて來た人だと思ふと癪に障る。「私はもう清い美しい少女ぢやない他へ行つてお求めなさい刺激を與へて欲しいとなら、も少し大きなものを探したらいゝでせう」と云つてやりたくなる。歸宅八時三十分。

裂いた日記を大川に流す

僅かに百五十日間を經た日記に、餘りに甚しい心の懸隔を、彼の女は流石に驚いた、濁らぬ心の少女なら戰慄して泣くてあらう、五月から十月迄の六ヶ月間、もつと〳〵著しい出來事は作つたけれども、此の日より此の日迄の境遇と共に、日々の起り事の複雜なのに驚かれる、此の二枚のコントラストて七ヶ月間に、荒廢して行つた心の默移が明晰に思ひ出された、嗚自分は宗教も道徳もない墮落者！



秘密の袋はシッカリと胸を包んて、ボロも出さずに守つて吳れるけれども、私はどうかして汚い袋を放逐したいのだ、邪

覺て〳〵堪まらない、奇麗に掃除したく思ふ、木も水もない故郷の平原に、心の煙の白く立ちのぼるのみ見たいけれども、都住居には土もない、引き裂いてハンケチに包んだ儘、醉狂にも隅田川迄流しに行つた。誰かの手にすくひ上げられてハンケチの中から、つぎ足しては讀み〳〵されたらどうしやう、見た人は又どう云ふ判斷を下すだらう、流れて〳〵海の潮に散らされる事を――又すくひ上げられるなら詩人の御手に――、と靜かに〳〵流れ行く白い小い包を見送るべく、夕陽射返す吾妻の橋畔に人足しげき中を佇んで、彼の女は斯う斷つた。

靜に戀の過去を想ふ

二つ葉

十二歳より夢みたる空想の戀

私が男子といふのを少しながらも「男子」と理解したのは十二歳の頃でありました、九歳のころから、いさゝか考へたのですが、やはり夢の夢の様な淡い影でありました。清らかな柔らかな十二歳の少女のかしらに、最初に、俤きざんだのはKと云ふ男子でした、私よりは年下でありましたけれども、學校では、同じクラスの童でありました。私はその童に逢ふて、いつも胸ばかり騒がしました。見られると面羞くうつむいたり、他所へ行つたり出來るだけさける様にしてそれてゐて、なるべく〳〵其影の仄かに――仄かに見ゆる所へいつも行くのでありました。醉ふ様な心地でありました。初戀と言はゞいへませうか。私は彼の童を、大きくなればきつと立派な男になるにちがひないと思ふて崇敬しました。そのわけは彼の童の容貌が一きは他の見童をぬきんでゝゐたからと、その無言の中に賑なところがあり、他の童どもを威壓する力があつて、しかもしづかなのを愛しました。はじめは單に崇拜てあつたのが、二年三年つもるにつれて戀ひしくも甚はしくもなりました。學校よりの行きかへり松林に夕日美しき小路を、凛々しき童はかへつてゆくのを見送つて、私はひとりよくみかへりました。しかしものを言つたことは一度もありませんかつた。其中私は女學校に入學する、K様は中學校に入る。女學校の三年頃から私は大變な神經質となつて、自分のからだの弱いのを悲しみ、ひいて厭世を思ひ、文學を思ひ、宗教に入り、十年來片戀の夢から、ふつつりとはなれて、十九歳の春、學校を卒業したのでありました。この間私の頭に「男子」はK様ばかりしか影を投げてはゐませんてした。市井の少女こそ心は蝕つてゐやうけれども、私は實に無邪氣に、健氣に、思ひ思ひながらも、たれに知られることもなく、隠れてゐました。私は、口外する必要をほとんど感じませぬてした。それは結婚を思ふ事が皆無てありましたからてせう。私はいつも此の清かりし純なりし初戀について神様に謝します。世に私の如き九歳から十九歳まで一個に思ひつめ忍びくらした戀はまとすくなからう。大いなる理性のはたらきは否れながらたしかに認められるので、うれしいのであります。

人格を慕ふ

宗教と文學とに心清々しく十九の年をはりてあくる年となつて、Sといふ男性が私の眼に無上の光をなげました。やはりこの人も、色黒く、額廣く一文字の眉濃い天晴な容貌に氣をひかれて畏怖を感じ、無言て、しかも仕事の立派な――それてゐて恐ろしく無邪氣な、子供々々したところを尊敬しました。教育のある女は決して美男子に心動かされはしな

い。戀といつても結婚を思ふのでもなく接吻をのぞむのでもない。眼と眼と見かはして美しく愛らしく互にとけ合ふ如き微笑を浮べるにすぎませぬ。私はS様を思ふまいとしても忘れはしませんでした。しかも狎々しくものいひかはすことはありませぬ。たゞ親切にしてくれ打解けてものを頼みました、ある秋の日こすもすの花紅白床しく庭にさいてゐる學校の一室で、子供も二三人裁縫をするとて紫や黄やの布ぎれをひざにおいて、針はこばしてゐます私白い唐縮緬で、よだれかけ縫へたところへS様が來ました。よだれかけ出來ましたと見上げて笑むとおつとりした靜かな聲であゝ、出來ましたな。私からそつと取つて、御自分の首にしてみてにつこりなすつたその時の無邪氣な顔といへば、今にありありとするほど美しく、清く、感じました。偉大なる力を藏する男が、子供子供しう初心にふるまふほど、私の胸を恍然たらしむる者は世にない。Sさまはまこと六尺の大男であります。この人の「人格」は誰もほめるあゝめざましき君よ、めざましき事業あれと私はいつもこの人の爲に祈ります。今は別れて相見ることもまれまれとなりました。

冷靜なる判斷

從弟どうしてもまるまる違ふた性格をもつてゐたのはふしぎなので、S様の本家の長男といつてTといふ青年がありました。艶かに色白き頬にいつも紅さして、すらりとした脊、上向きがちに踏ありく下駄音まで小氣味よい優男で辯もたつしや、文もつくる歌もよむ。美男子でありました。ある朝私へ人傳に手紙がある。私は決して男子の誘惑に恐れない。戀すべき女ならばなれ――私は獨身女であるべき心に何の波たつことあらうか。夫を思ふより妻母たらんより私は一日も早く閨秀作家たらん事を思ふて勉めてゐるのでありまするもの、それには〇〇新聞の短歌欄をうけもつてゐるについてどうぞお作よせていたゞきたいとある。私は歌は作らない、それはおことわりいたしますと言ふた折、斷つたのがもととなつて、折々文壇上のはなしを聞くともなしに聞く。はじめから私をよくいたわるし。いとしがる五月から九月まで百五十日がほどは私を訪はぬことはなかつた。

ずいぶん熱烈でありましたが、いつも激すると眼が血走るほどになつたり涙ぐんだり、身をふるはして、天を仰ぐ顔は、眞に眞に美しく思ひましたが、一指も私にかける事はありませんでした。高潔な人だ、詩人らしき人だと私は思ふてゐたのが、思ひもかけぬ波瀾があつて告別し、この人は妻をもちました。それは、この人と私との交りを、悪しく言ひふらすものが出來、私がTさんに欺かれ弄ばれてゐるとて、人が私を保護し、私にTが女たらしであること、輕薄漢であることをつげました。Tさんは私を妻にとのぞんでもくれました。然し私にことわつて、他の方面に配偶をもとめて良家庭をつくるやうにすゝめました、私には執着はなかつたのですから、私から別れて下さい交を絶つて下さいとねがふてそれ以來逢はずなりました。彼は六里も東の小さき町へ新婦をともなふて去つたのです、その去る日でしたらうか。山上の孤影‖外套をきて杖をさげた、凛々しい姿が、家の東の××山のいたゞきにあらはれ、久しく久しく私の家の方を見下してたちすくんでゐたのはT様にちがひありません。私は今、彼を輕薄才子とも思ひません弄ばれたとも思ひません。美男子はみなあゝしたものと觀察し得たばかりです。

安全なる人に眼が着く

Kを思はず、S忘れ、Tと去りて私の眼前に私の今の心の對象となつてゐる若き男はO様であります。私の年は二十二歲、もう青春の人戀し

さの情はどこにありませうか。若き男の迷ふのを狂ふのを教訓する闘隆だけはくはしく知つて、酔ふこと歌ふことは失ひました。O様は風采上らざる方です。短き首、小さき身丈、辯も拙なく顔色もあざやかにない。たゞこの人には、熱質があるのを捨てがたく思ひます。金をためる事もたくみらしい、この方の奥様になる方は仕合てあらうと思ひます。する事がじみてある。どつとしたこと、飛びたつやうなことはしませぬが、しかし危険はいつてもありませぬ。安全です。俗人といはゞ言へ、國家にはかかる質實なる、熱心なる平和なる人を要するてはありますまいか。この人に、文學は無用です、何の勢力もないことを私は面白く思ふてゐます。文學を感じない男は、どこどこまても淡きこと水の様てありまするが、仕事はきちんきちんと氣をこめてやつてゐます。どうした事によりてか、文學の方面に於ける私へは、そしらぬ顔をしてゐて、談笑の間に無邪氣にふるまふ私を世にまたなく思ふてくれる様子です。

しかしこの人はもう既婚者てあるから、観察してみると云ふだけて、べつだんなこともないのてあります。

以上四人の男子をかきつられてみました。私は、まだまだ多數の男子を知りゆくべき行末をもつてゐます。思ふのに。男子は女子よりか數等偉大なる力量をたれもたれも、もつてゐます。そして戀の結婚のといふことは、彼等の重大なる問題てはないならしい。戰闘の愉快に生きゆくばかりが眞の男子の志らしいのてあります。

女よ、浅間しき心起さざれ、たゞそれはあなた自身をはづかしめるばかりにすぎない。戀ひすとも口に出すことは、もとめらるゝともゆるすことは厳に禁じたいとおもひます。男は、あなたの思ふてゐる男とはちがひます。眞の「男子」のわかつた方の多くなる日は、健全なる女の時代とよばれませう。

自覺したる個性と個性との衝動

三つ葉

呪はしき結婚

喜代子さん、あなたも都合て家庭を持つて見ようかと御思ひなさるよし、而してそれについて、是非私の意見を聞かせよとの御申越し、併し私は別にとやかく申上ろ權利は御座いません。

けれども强て云へと仰有るなら、喜代子さん、私は不贊成です。而して更に私が友としてあなたに、こんな事が御願ひ出來るものなら、一生ミスて通して頂き度い、淋しくともわびしくとも、その方がお互新思想の影響を些てもうけた者には、どんなに幸福か解りません。

喜代子さん、結婚は實に厭ふべく呪ふべきものですよ。

こんな事申して、私共夫妻の戀時代を御存じのあなたには、定めし定めし不思議に聞えるてせう、併し事實です。

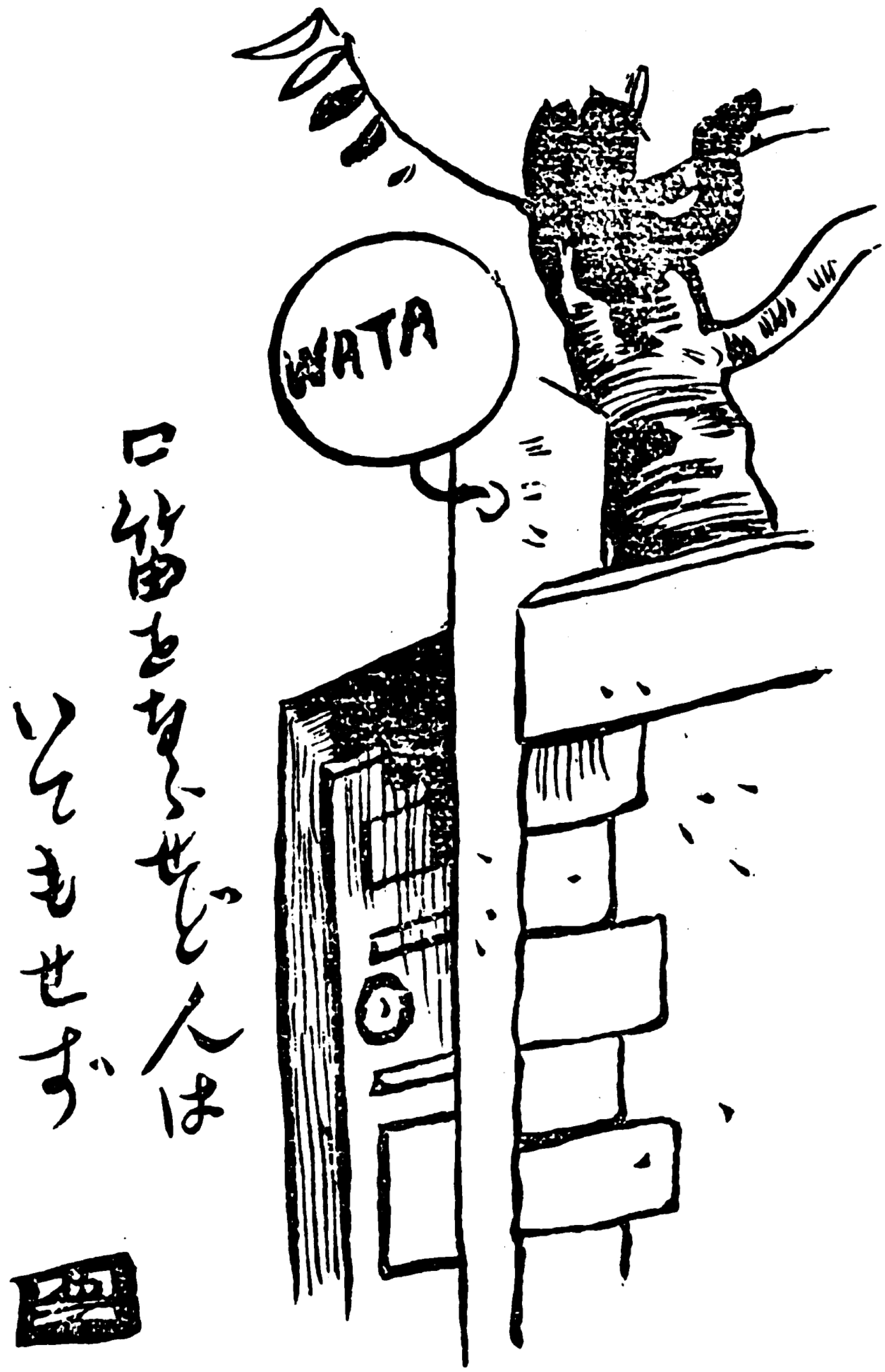
何と云ふ悲しい事!

喜代子さん、あなたは本當になさらないかも知れない、けれ共これは本當の事て、此私が散々苦い思ひをして來た安價ならざる告白と御承知下さいまし。

勿論私共夫妻のやうなものばかりてはない、世間には善良なる良人、善良なる細君もありませう、併しそれは極めてまれて、家庭中心の舊思想者、神の使徒のクリスチヤンは知らず、假りにも現代の新思想にふれ

た青年で、眞に善良なる良人たり得る者がありませうか、彼等はあくまでも自己中心で、少しも制限せられざる自己を通さなければ承知しません、而して其時、細君たる女がその暴虐を默つて忍び得れば兎に角、あなたにしろ私にしろ、そんな苦しい思ひをして迄男子に屈辱しなければならん理由を知りませんもの、どうしたつて平和な家庭をつくる譯には參りません。

喜代子さん、これまで私はあなたにさへ、こんな事申上た事は御座いません、ですけれども、私共夫妻は今お互に相反目して、もう以前戀時代のやうなスヰートな處と云つたら、爪の垢程もなくなつて、毎日／＼感情の衝突はおろか、今や根本から離れ／＼にならうとして居るんです。



痛ましき家庭

私は以前のスヰートな時代を思へば思ふほど、猶更現在二人の狀態がわびしく痛ましく、死んでも足りないやうな氣がいたします。ですから如何にかして今一度、樂しかつた昔に返し度い。と斯う思つて、それを良人に計りますと、良人は嗤、お前は空想家だ、自分の描いた空想通りにあてはめやうとした處で、そんな譯に行くもんぢやない。戀人から良人となり父となつた男に、當然起つて來る本能的性情を知らないから駄目だ、そんな空想なんかに囚はれてる暇に、ちつと悟つたら可いだらう。こんな事を云つて、毎日外で御酒を飲み、醉つて家へ歸つて來る

のは、いつもいつも夜の一時二時、それも歸つて來るうちはまだしも、無斷で出たきり三日も四日も歸つて來ない事もあり、いかな夜もいかな夜も十二時を過ぎない事はないと云つた有樣。而して其翌日は例の宿酔て定つて寐坊、十一時頃てなければ起きないんですものれ、それも音無しく起きるのてはなく、早く起きなければ出勤の時刻がと、それは〳〵毎朝〳〵喧嘩なんてす。それも五日や十日の事なら默つて忍んでも居ませうが、一月と續いては、女ごゝろの躰をこわしはしないか、病氣になりはせぬか、勤め先きの首尾は如何、それにはまた、財政上の問題も伴つて、米屋の支拂は如何、酒屋は如何、お喜代さん、此の寒空にまた赤ん坊の胴着さへ造り兼れてるんてすものれ。ついやきもきして入釜しく云はずには居られません。すると女の癖に生意氣だ、默つてろと餘計に反抗するんてす。

何と云ふ惡家庭！

男の眞相は結婚後に知れる

强々様になつちまひます。併し如何にかして樂しい家庭にしなければならんと思て、泣きもしかこちもして、少しは家庭と云ふ事も考へて呉れるやうに嘆願すれは、乃公はヒステリーのお相手をつとめる譯には行かないの、家庭の犠牲になる事は出來ないのと、そんな事計り申て、てんて取り合つてもくれません。

されぱと云つて默つて忍んて居れは、猶更可い氣になつて、亂行は日にましつのて行くばかり。

如何様、私はヒステリーかも知れません。併しそのヒステリーには如何してなつたか、私は斯う反問して見たいと存じますの、皆な皆やきもき物を思ふからてはありますまいか、あゝ男程我儘なものは御在いません。

お喜代さん、彼等が女にやさしくするのは結婚前、自分の慾を滿さうとする時ばかりてす。一度其慾を滿したお最後、彼等は直ぐに殘忍冷酷な動物的態度に出なければ承知しないんてす。

馬には乘つて知れ、人には添つて知れ。

古い諺てすけれど、男は結婚後てなければ、眞の自己をさらけだして、女をいぢめは致しません。

それを知らないて、戀愛時代、二人て家庭を持つたら彼様も此様もしと、眞面目らしい顔して私語かれた共言を、うかと眞にうけた女の不幸、けれどもそれも女の不注意て、われとかゝつたわなてすから仕方もありません。仕方がなけれども如何にかして脱し度い、此間もお友達を宅へおつれ申して、散々辭拂つての上、良人それ自身も家庭が嫌て、どうにかして私からのがれ度い、家庭からのがれて自殺した夢を殆んど毎晩のやうに見ると申して居りました。

良人も左樣思ひ、私も左樣考へる、そんならばいつそ申し合ひの上て離婚しちまつたら如何、私はこんな事を思つて、その事を相談しますと、離婚し度いと思つたつて、さうたやすく出來るお互の關係か如何か考へても見ろと申しますのよ。

全く已に赤ん坊もある私共夫妻、離別されたい、家庭からのがれ度いと思つてたところて、さうたやすく解决のつく譯のものぢやありません。

吾儘は男にのみ許すべきか

喜代子さん、いつか國木田先生の「欺かざるの記」を讀んて、あのなかにある先生の失戀事件について、先生を戀して結婚して置きながら、同棲して間もなく先生を見捨てゝ逃げて行つたお信さんと云ふ彼の女れ、

あれを酷く攻撃して、先生に同情して、憎むべき女だとあなたと二人で散々惡口しましたつけれ、ですけれ共今になつて私考へて見ますと、同情すべきは獨り先生ばかりぢやない、却つて憎いと云つた其のお信さんの氣持ちがよく解るやうな氣が致します。

國木田さんは私の良人のやうに、恣な行爲をなすつたか如何か、そんな事は存じません、けれ共、我儘な人であつた事はたしかなやうに思はれます。

男の方で少しも制限されない自己を恣に振舞つて見いたと思ふなら、女だつても等しく人間、あまりに壓迫され屈辱されてそれで默つて堪へられませうか。

お信さんが逃げ出したのは無理ないと思ひます。

私のやうに家庭を呪ひながら、やはり斯うして家庭の人として苦しむのは、つまり男氣がないからで、それ丈けの事を敢行したお信さんは實にエライと思ひます。

喜代子さん、私も今少し考へて、或は斷然離婚されるのかも知れません。

離婚されて如何、決して今よりいゝ生活をなし得られるであらうなど、そんな事を思て居る譯ぢやありません、或はより悲慘な狀態に立至るかもはかられません、併し、今の苦痛からのがれ得れば何よりも幸福、後の不幸は又其時如何にでも出來やうぢやありませんか。斯う云へば區々たる感情に支配されて居るやうですが、つまり私共現代人が結婚なんかしたのが間違ひなのだ、悲劇は其處に始つて居るのです。

安價に得られぬ參考

併し、現代思想に囚はれた御連中の中にも、案外善良なる良人たり得る男子のないでもありません、良人のお友達で、此の方もやはり私共と同時に戀の關係から家庭をおもちになつたのですが、其の家庭は實に圓滿以上で、それは／＼實に羨ましい、彼樣した家庭に生き得たら嘸愉快だらうと思はれる程ですの。其方はたまさか友達と出會つて御酒なんぞ召上る事があつても、可い加減なところで、僕は失敬して歸らう、細君に早く歸る約束したからとか、細君のこしらへたものなら、どんな下手なものでも皆甘いと思つて食ふよとか、僕は餘程あまく出來上つて居ると見えるとか、左樣した事を平氣で云つて、原稿生活をなすつてらつしやるものですから、夜も晩くまで筆をかんで、家庭の財政上困らぬやうにお働きなさる。

けれ共其方の內心に立入つて見ると、やつぱり苦痛がない譯ではありますまい、唯、それを忍び得ると得ないの相違かと考へますの。ですからつまりは其人其人の細胞の組織問題になるんですわれ。

私の良人のやうなのか、善良なる良人たり得る其のお友達の方のやうなのか、此二つの男は、結婚後にこそそれと解りもしますが、結婚前、別して戀に熱した眼には見分けのつくものぢやありません。

喜代子さん、あなたも都合で家庭をお持ちなさるかも知れぬと云ふ、どんな都合でなのか、それは私には解りませんが、若しかしてお持ちになるのなら、よく／＼冷靜な眼をもつて、善良なる良人たり得るの人をお撰びなさい。と云つた處で、結婚前には、あらゆる男は皆善良なる良人たり得るやうな事を云ひ、而して又如何にもさうらしい態度をとりつくらつて居るものです。

喜代子さん、幸に此私の安價ならざる告白を參考として下さい。

胸を貫かれた白羽の矢文

四つ葉

男子の雜誌へ投書したのが事件の發端

もう彼これ半年以上もたつて居ながらどうしても胸から去らない××××の四字―いまだに私は此ために苦しんで居るのです、奈何かして捨てたい去りたいと何程あせつても駄目です、一度深く刻みつけられた印象はなかなかに消え去らない。

今からちやうど一年半ばかり前でした、友人の家で何氣なく○○雜誌のページをくつてはからず印象を殘したのが今も胸にある文字です、誌中の秀才は幾人あつたか知れませむ、決して彼だけが秀才と云ふのではなかつたのでしたが、何故か其作は一字一句おそろしく私の心をチャームしたのです、其翌月からはかゝさず雜誌を取つては自分と同じ思想の人の作を見て、ひそかに其佛を想像して見ました。元々文學の道は下手の横好きの方ですから今迄も婦人雜誌には大分投稿もして様子もわかつて居るので、男子の多數な雜誌とは知りながら投稿したのが私のあやまりでした、初めの二三ヶ月はたゞ雜誌のすみにのつたと云ふ位に過ぎなかつたのでしたが、幸か不幸か四ヶ月目に天位をしめたのでした。例によつて「御芳名はかれて誌上にて拜見致し候」の交際希望者の手紙は七八本參りました「決して無暗に交際などするな」とはかれて父から申渡されて居ますので、かう云ふ手紙には只の一本も返事などだした事はなかつたのでしたが、此度來た手紙のうちの一本こそ、あゝ自分が日頃より作をしたつて居た××のよりでした、其手紙をぢつと見つめて幾度か迷ひました、兩親にきけば交際を許されようはずはなし、けれど此まゝ捨てるには忍びない、むかふも文學上の清い交際としてあるもの……私さへしつかりしてかゝれば何も差つかへはないわけ、而し男女の交際は危險だと云ふ事は、修身の時間に耳へたこのできる程きかされて居る、もしかの事があつてはならぬ、あゝ思ひきつて灰にしようかと幾度か火上にかざしては見たが、紫の炎がひらひらとブラックインクで染められた洋紙をなめ去ろふとすると、自分の手は自然とうごいてそれをさけたのです、とやにはにペンを取つて返書をすらすらとしたゝめ、前の手紙はつと文箱へ納めて終ひました。

美しき文字に欺かる

藍色の横封筒を袂に入れて平日の通り「一寸御學へいつて參ります」と許を得て何氣なく家をでました、途中思ひわずらひポストの前に立つても又暫しためらつたのでしたが、終に心を決して投入しました。翌日學校から歸ると机の上に一本の封書がのつて居たのです、もしやと裏を返すと果して○○花子としてあつたのです、はつと躍る胸をおさへて封を切りました、すらすらと書き流した文章は、何と美しかつたでしやう、胸の底の底までそゝりました、どうすれば斯く迄私の心をひきつけるのかと、しみじみと感じて幾度かよみ返しました。

母のでまへは同じクラスの親友で、此度病氣のため一時退學した○○花子さんと文學上の交際が致したいと許をこふたのです、平生の私を信じて居る母は一も二もなく許してくれましたので、それよりは月に三四

本の文通をかゝした事はなかつたのでした、○○花子と申す名は私からこう云ふ女名前でよこしてくれとたのんだのです、常に文學上の交際であると云ふ事は、絶えず私の胸に納められて居たのでしたが、今此小さい胸に多大の傷をおうて苦しもうとは思ひもよりませんでした。

小學校以來いつも首席をしめて、級長と云ふ名譽を只の一度も他人にゆづつた事のなかつた私！學術優等品行方正の賞狀も幾枚かもつて居る。人からは後指一本さゝれた事のなかつた清い美しい私の生涯は、あゝ餘りに短かふ御座いました、知らず〳〵現代の風潮に染まつて、惡るいと知りつゝ親までも偽はり、見もせぬ人と交際など致すとは、我ながら何たる事でしようかりにも親をだますとは何と云ふ――罪を私は犯したのでしやう。

恐るべき迫害

常に注意深いと人から云はれて居た私が、如何なるはづみで此やうなおそろしい惡魔にみいられたのでしやう…？數ケ月間の私の魂は××のたくみな筆先に、捕はれて居たのです、もと〳〵文學上の交際でしたから絶えず詩歌の交換をして居りましたので、其中には隨分熱情のあふれた作も見えました、けれど私はそれをたゞ詩歌として受けて居ましたのに、忘れもしませむ三月の二十日、突然見るにしのびない程の熱烈の手紙をよこしました、急におそろしさと不安にはつとした私は、初めて夢からさめたやう、再び元の私に返つたのでしたが、もう其時はおそかつたのです。私の美しかつた心はこと〳〵く黒雲におゝわれて終つたのでした、其夜は悔と不安とにおそはれて終に一夢も結ばず、心は嵐の如く亂れたのでしたが、如何に情のこもつた手紙を與えられ様とも、只一度の面會もせぬ男子の意にしたがふ事と、まだそれ程迄に心は腐敗して居なかつたので、今となつて異性との交際の危きを知り、翌朝早速絶交狀をだしました。折り返して前日にました熱烈な文字を用ゐ、男子たるほこりを捨てゝ迄の手紙をよこしましたが、一度決した私は再び筆を取りませんでした、續いて又一通、それも返書は出しませんでした、最後に來た一書はあらゆる暴言を以つて私を侮辱し、あまつさへ強迫的の文句をつられたのでしたが、かつて自身に落度はない、どこ迄も潔白な交際であつたと信じて居る私は、敢てあらそいもせずうち捨てゝおいた處あゝ筆にするも口惜しさに堪えませむ、××へ送つた手紙と、一葉の半身寫眞とは日ならずして校長の手に落ちたのです。校則の嚴格なるは世間へ知れ渡つて居る學校の事ですから、たとひ自分ばかりは潔白だと申たとて、情にもろい私の手紙です、まして校則を破つて男子と交際をした罪が御座いますから、其まゝには濟まされません、私はよびつけられてきびしい調べを受け、何もしらぬ保證人は寢耳に水の注意をあたえられたのです。もはや卒業前でしたから、停學だけはのがれましたが、級長たる名譽は遂にうばはれ、近く來る卒業式に總代として私がよむべく定められた祝詞は、あゝ他の人にゆづられて終つたのでした。

他の生徒はくわしい事情を知らぬにもせよ、かく俄に變更した事などうして怪しまずに居りませう。今迄多くの人より信用を得て居た私はわづか一本の手紙の爲に斯くも悲境に落ち入つて終つたのです。悲しみのうちに待つた卒業式日は次席の人のよみ上げし祝詞を無念の涙と共にのみこみ、校長よりの社會へ立つべき注意のお言葉も、いち〳〵我が身にしみ入り、胸の傷をおさえて堪へがたい涙にむせびつゝ、握りしめた卒業證書は只一枚。

今迄かゝした事のなかつた賞狀は、今學務のぬける終りに至つて終に得る事が出來ませんでした。

悔恨と痛憤に充ちたる胸

自分の心に滿足をあたえられなかつたために、是より世に立とうとしつゝある處女の身を、おそろしき悲哀の底におとし入れるとは、如何に男子の意地だからとて餘りに常識にはづれた行爲ではありませんか、あまりの口惜しさに堪へがたい私は、此免狀を破り、殘酷なる彼の心をうらんで死を決しようかと幾度かこんな心もおこしました、あゝ此不名譽な卒業式！あゝ生涯私の涙の歴史です。

日頃から沈鬱な私はこれ以來、益々沈鬱になつて、ひたすら部屋にこもり、こらえ得ぬ悔と悲しみとに袖をぬらして居ます、初めに理性にとんだ温和な人と胸に刻みつけられた印象は、あはれ今となつて恐ろしい殘酷なる惡魔と變じて、ひるとなく夜となく絕へず私の胸を苦しめるのです、以前の私がどうてあろうと、一度失つた信用はなか〳〵に取りかへす事が出來ませむ、いまだに嚴かなる兩親の瞳は信用のない我が身の一擧一動にそゝがれて居るのです。

あゝ私ははなやかなる處女時代を過まりました、異性より與へられた此傷は、いつになつたら消えるので御座いませう、あゝ一度汚がされた胸は、いくらあせつても〳〵再び元の純潔にかへる事が出來ないのでせうか、もう是以上は筆に致されません、どうぞ處女たる方は此私の記事を見て知らず〳〵身近をおそいくる誘惑を、お防ぎなさるやう身にかへて祈ります。

私は餘りに胸の痛恨に堪へかれて此處に此記事を發表しました、此れと同じやうな想ひに惱んで居られる方も世には多少ありさうに思ひます、實に一時の迷ひから暗黑の恥辱が、明るみへ出るわけてすから、處女たる間は凡てに注意して光明正大なる行爲を取つて下さい。

注意の對象としての男子

五つ葉

男子と云ふ者は一見淡泊すぎて呆氣ない程てすが、それが內に籠りのない誠實な處とても申しませうか、女子に望んで得られぬ眞實な堅忍な美點を男子に得られると信じて、是がほんとうの強い自分の友であろうと存じましたのが、私が男子に依て與ふられた最初の印象てございました。

然し月日の經つ中には、又男子に依て受る弊害、恐ろしい誘惑など申す事をも自覺致して參ります、けれどもやつぱり若い時代の一顰一笑は凡て男子に依て與ゑられる刺戟の一つてございませう、どんな方ても女はやつぱり同じやふな御心持はきつとございませう、まあ時節柄かるた會に就て申上て見やふなら、御立派な御座敷に寄り集て、歌留多を遊ばす、御讀手は御隱居様、御取りになるは美しい奥様や孃様方、たゞつゝましやかに淑やかに時々のお笑ひ聲も、さして騷しくはございませず、皆様もたゞ歌留多に夢中て居らつしやいますが、此所へ四五人ゝ殿方ても御交りなさろうものなら、さあ大變、にはかに花子様の御様子が變る、葉子様の御表情が激しく、御座は一層お賑やかになつて參ります。其間には襟も揃ゑてみる。帶も撫てゝ見る、御髮ゑもちよい〳〵御手が行くし本職のかるたも腕を揮はればならずと、なかなかの御心遣ひ、リボンが曲つたかしらと一寸直しかゝると「はあ、ありました乙女の戀事なんて持牌をぬかれる、はつと赤くなると言ふ騷ぎ、露骨に申せば女は男子に與ふられる刺戟に依て、妙に心に萬事の注意を促がされるのてございま

せう。

總じて女子は心弱い爲めに又刺戟され易いものでございますから小さいは手紙の往復、大きいは直接對手の自分に對する言語や、擧動に依て其時々に受ける刺戟もございます、往來を歩いて居りましても、向ふから男子達が來る、それが學生でもあつて擦れ違ふ時に「ヤア素的」とでも言はれやふものなら恥かしい、が何んとなく快しいそれと反對に口惡の方でゞもあつて向つて居ながら「ナンダお多福」なぞと言はれてさつさと行き過ぎる方がありますが、そんな時きはほんとに泣き出し度くなる位、御友達行も嫌になつて仕舞ひます。でも男子の見た男子と、女子から見た男子とは又違ふやうで御座いますチ、どう致しても女子から見れば買ひ被つたり欲目に見たり致しまして同性間に於ける樣な細密な調査は遂げられないと見えます、其勢かして男子に賞められるより同性の人に賞められる方が、何んによらず眞實な價値があるやふで、それも知人では例の御世辭でございますが、垢の他人に振り返つて見られて、殊に老人などが何氣なしに「マア美麗な孃樣だ」などゝ言はれるのが一番心地よく皆樣の御耳に響く事と存じます。

問はず語り

勿忘草

ある良家に奉公て居ります女なぞは既う三十を幾つか越しておりますのですが、まだ結婚もせず、只着物ばかり拵らへては喜んでゐるやうなのでムいまして、兄といふのが實の兄でなく腹ちがひなのですけれど、餘程以前に實家へ歸つてた時兄と何か紛糾があつた節にも、餘程逃出して遣らうと思ひましたけれど、さうすれば今迄折角拵らへた着物を全然奪られて了はなければ成らないと思つて、苦しい日を耐えて居ましたといふ話、冷たい不安な心にくるしみ乍らも夫れが爲に逃出しもしなかつたので、そんなにまで着物やなんかゞ大事なのかしらと思つたら可笑しいと云ふよりも云ひ難い想に打たれました。智識の低い人達は精神上の苦痛よりも物質上の苦痛の方が重いのだらうかと今でも時々思ひますのです。

て、見得坊で綺羅をはるのが當世ですが、其反應として經濟の觀念が是非起つてくるわけになるのではムいますまいか。派手になると同時に一面には中々つましい處のあるのが現時の女なのでせう、と存じます、何しろ女は處女時代が一番暢氣でせう。すこしの缺點も人が許して呉れますが、妻となると既うさうは參りません其代り人に屈しない威はつきますけれども。

假令ば片方が處女で片方が既婚の人で、同等の女性を二人つれて來るとしても、必ず人は既婚の人の方をたてるものです。

ですから結婚して了へばもう處女の圃と境を劃つた地に立つのです。第一に煩いのは世間の批判で、これからして避ければならず、一體世間の輿論といふものには、嫉妬、猜疑、羨望、いろ〳〵な物が交つてるのですから堪まりません。

女は妻となつてしまへばある場合は全く孤獨です。私の友に感情のやさしい人がありまして、此の春お嫁にいらつしつたのでしたが、「芳はれ、今他人の中に交つて毎日表面はたのしく暮してゐますが心の淋しみをお察し下さいましな」といふお手がみを戴いたとき、私は女といふものゝ持つ哀愁を沁々思ひしみたのでムいました。この方は今迄平和な樂しい家庭にお育ちになりましたので心持のすなほな若々しい方ですけれど、これから眞惱の世の中をお知りになる事でせう。今迄でも決して世間見ずではいらつしやいませんでしたが私には何だか僞はしいやうな心地が致されます。



女の地位を高めんとする露西亞婦人の過激なる活動

エミリヤ、パルト、バザン

元來露西亞と云ふ國は、國の內で始終戰爭をしてゐるので、其一つの現象として、婦人の革命的虛無主義的運動も含まれてゐるのです、女子の地位を高めんとして、女性の權勢を保たんとして、活動するのは尤ものことですが、其方法を非常手段に取らうとするのは過激の嫌ひがあります、併し又其處に蓬勃たる反抗的精神の開展を見ることも出來ます、彼等は何んな思想を抱き、何んな活動をしてゐるかと云ふことを知るのも、世界に於ける婦人の動靜を知る爲に最も必要であり、又興味ある問題です、今、其外國文學通に依りて語られたる事實上の悲劇を紹介するに當つて、一言を添えて置きます（一記者）

露西亞の女性の權勢とか地位が、兎に角、現時の如く、佛蘭西、獨逸、英吉利などの諸國の婦人の地位と同等に迄到達することが出來たのは、一方から云ふと、時勢の然らしめた事ではあるが、それでは少しく漠然として居る。も少し適切な言葉で、詳細にその原因を云ふと、露西亞の虛無主義者のお蔭であると云へる。この虛無主義と云ふ言葉は、ツルゲチーフが初めて『父と子』の中で使用した言葉である。然し、その虛無思想なるものは、何も露西亞持有の思想だとは云へない。ビクトル、ユーゴーなどの著書の內にも、『飽くまで自己を無視して行けば、その結果として、必ず虛無思想に落入つて了ふ。』と云ふ事を書いて居る。それからジヨセフ、ルメーストルも、已に虛無主義なる言葉を使つて居たが、その虛無的の思想を持つて居る人間を、

實際生きた人間として描出したと云ふ功勞は、當然ツルゲーネフが擔ふべき名譽である。ツルゲーネフの『父と子』の主人公であるバザロフは、何等の權威をも、何等の獨斷をも承認しないが、然し、少くとも科學だけは信じて居たと見える。信じると迄云ひえないにしても、少くとも、科學に興味を有して居たことは慥かである。

一躰、虛無主義なる言葉の本質の内には、佛蘭西流の革命的な思想も這入つて居るし、その後には、獨逸から來たカントの哲學とか、ヘーゲルの思想などが加つて居る。それは革命文學者のヘルツエンだとか、革命家のバクーニンの書いたものの中に、明かに表はれて居る。元來の思想が、露西亞持有の思切つた、一種の運命觀と混じ合つて、謂はば、實際の虛無主義が出來たのである。此の虛無主義を奉じて居る人には、最初は自分一家の哲學的思想として、持つて居たのに過ぎないが、彼のニコラス一世が即位してから、あらゆる手段方法をして、佛蘭西、獨逸邊に漲り溢れて居た革命思想を、壓倒しようとし、出來得るならば、露西亞をして全歐洲から隔離せしめて、沒交渉の地位に立たせたいとまで考へて、その方法を講じたのである。處が、露



四　春の日光と鹽の音

西亞國民の一部は、勿論この行爲に默つて服從して行くことは出來ない。此處に到つて、初めて虛無主義なる言葉を口に出して論じる樣になつた。しかし未だその思想主義を實行して、政府の處置に反對するまでには到らなかつた。此の虛無思想を實際の行爲に現はして、政府に反抗した人々は、虛無主義者と呼ばれる人々ではなく、革命家とか、反動者と呼ばれた人だけであつた。然るに、ニコラス一世皇帝の末頃になつて、此の虛無主義者と革命家との二種の思想が結付いて、虛無主義者が所在現象を、アンニヒリートすると云ふ思想を、實行に現はすようになつたのである。

詳しく云へば、當時の政府の當局者を暗殺するとか、國家の要路に立つて居る人々を暗殺するとか云ふ樣な事を實行するようになつた。て、農奴を開放して、革命家連の氣に入るべき筈であつた、アレキサンダー二世すらも、終に虛無主義者の爲めに、爆烈彈を投ぜられて死ぬと云つた現象が表はれるようになつた。而して此事件が有つた時代が、虛無主義者の最も勢力を逞くし、激烈を極めた運動をした時代であつた。暗殺と云ふ事が好いとか惡いとか、又は毒殺、銃殺の結果が好かつたとか惡かつたとか云ふ事は、別問題として、その虛無主義者の活動が、露國の婦人の地位、權勢などを高めたと云ふ結果を生じたのは、一見面白い不思議な現象である。

露西亞ばかりではないが、一體佛蘭西あたりでも然うであるが、革命の運動に婦人が加はると、その運動が活氣付いて、華々しくなるものである。彼の佛蘭西革命に、マダム、ローランが顏を出した事や、シャルロット、コルレーが參加した事は、慘憺たる佛蘭西革命をして、猶、物凄さと同時に美しさを帶ばしめたものである。露西亞の虛無主義者は、何も革命に花を添へる爲めに、婦人を入れたのではない。然し、婦人が加つて、その運動が華やかになつたのは、佛蘭西の革命と同じ結果である。それでは何故に此の革命運動に婦人が加つたかと云ふと、それは露西亞の婦人の地位を明かにせねば解らない事である。當時の露西亞の

婦人の狀態は、この時代までは、他の歐洲諸國の婦人の地位に比較して、痛ましく哀れにも壓付けられて居たものであつた。露西亞の婦人は、恰度土其古の婦人の如く、深い面紗を被つて、顏を人中に現はさなかつたものである。處が、或皇后がベールを顏に懸けなかつた事が、宮庭で非常な恐惶を惹起したが、その皇后の行爲が原因となつて、露西亞の婦人がベールを外す樣になつた。斯んな風で、女性の階級は、重荷を負はされた衣服の樣なものであつた。それから、貴族仲間では、女は土其古宮庭の妾婦とか、召使などと餘り違はない悲慘な狀態であつた。而して、露西亞の社會中でも、最も物の解つたと稱せられ居る人であつても、女は鞭でなければ制御すべきものでない、と思つて居た。法律の制約する文言では、女は何も男に劣るものとは定めてはないのみならず、自分の財産を監督する權利をも免して置いたのであるが、一種の不文の法律とも云ふべき、習慣の束縛のために、法律上の自由も權利も縛られて居たのである。處が、虛無主義者が政治上の權利の平等を稱へると同時に、それを婦人の上にまで及ぼして、男性と女性が同樣の他位に立ち、同等の權利を主張し得るようにならねばならぬと云ひ出した。苟も、露西亞の女の地位が、男の地位よりも劣ると云ふ事に關しては、レルモントフなども、甚く論じたことであつて、男女の關係は、自分の奴隷を屈從させたり、自分の飼つて居る犬が、主人の命に忠實に從ふ樣なことで滿足すべきものでない、男は女の識見に報ゆるに、識見を以つてし、男の靈魂に報ゆるに、靈魂を以つてすると云ふ、人間の戀愛に關して云つて居るが、此の思想は、プラトーンの所謂『戀愛は、元來一つの靈であつたのが、半分づつに分れ居て、それが元の一躰に合しようとするものである。』と云ふ說から來たものである。然るに、彼の虛無主義者は之れを實現しようと努めたものである。

其處で、先づ若い虛無主義者等は、自分の知つて居る限りの婦人を傳導し初めた。處が、その結果として、若い露西亞の婦人は、强烈な獻身的な、絕躰の信仰、

無限の活動力を以つて、彼等の虛無主義者に報ゐた。その有樣は、恰度クリスト教が、初めて羅馬に入つた當時に於いて、クリスト教を信ずる若い女達が、世界の人間は總て兄弟姉妹であると云ふ說を敎へられて、自分等の社會上の地位が、男と同樣でないにも拘はらず、クリスト敎徒が、自分等を男と同樣に取扱ふと云ふに感じて、獻身的に信仰を奉じて、所謂歷代の暴逆や迫害を堪え忍んだと同樣である。一方、傳導する虛無主義者の方でも、婦人の案外に役にたつのを見て、益々婦人の間に傳導するやうになつた。而して自然と、華やかな活氣を、革命運動に加へると云ふ結果を來した。

その運動の結果として、隨分婦人の風紀が極端であると云ふまでに進んだ。即ち、若い婦人達は頭髮を短くして、眼鏡を懸け、男子の着る樣な、裝飾もなにもない衣服を纏ひ、粗末な服裝をして、煙草は吸ふし、酒は飲みだすし、總て、從來の服從的な時代の、婦人の美點として居た、身だしなみと云つた樣な事は、馬鹿氣た事として、顧みない迄になつて了つた。然しながら、一方には、男子に敗けない程に勉强もし、働きした。而して如何なる仕事でも、男の出來る事ならば、出來ない事はないと云つて實行する、意志と覺悟を養成するやうに努めた。斯んな風の、男に劣らない、負けないと云つた思想が、露西亞全國の婦人の間に行渡つて、露西亞の婦人の地位や權勢が、非常に高くなつて來た。此處で又、少しく明かにせねばならないのは、一體、露西亞では、婦人が未だ處女時代は、兩親の監督が非常に嚴重であるが、一度結婚すると、自由な境遇に居られる事になつて居た。其處で、自分の自由を得やうとするには、結婚するのが一番好い近路であつた。併し、結婚が然う輕々しく出來るものでもないから、此處に彼等の間には僞婚なる事が盛んに行はれるやうになつた。それは、自分の知つて居る虛無主義者の若い男に賴んで、假りに自分の夫になつてもらうので、兩親がその男を相當と見て、玆に二人の結婚を許可すると、二人は如何にも眞面目らしく、敎會で嚴格な結

婚の式を行ふ。而して兎に角世間躰は夫婦になる。然しながら、二人は別に夫婦の關係を持つて居るのではない。唯此の二人は、最も嚴肅なる一生の運命の定まる儀式であつた、結婚するのは、自由をえる爲めの踏台にしたに過ぎないから、二人の若い男女は、此の式が濟むと、まるで元の他人であつた時代の生活を續けて行くのであつた。勿論、その中には、その儀式が原因て、實際の戀愛になつて、遂々夫婦の關係を結ぶに到つたのも少くはなかつた。然し、大抵は結婚式が終ると直ちに其日の内に、此の婚禮を行つた若い男と女とは、別れ〳〵に北方に出懸けて、主義の傳導に從事したものであつた。

此の、地方へ主義の傳導に出懸けると云ふことは、露西亞の革命家が考へ出した、新らしい革命運動の手段として、非常に有功な運動であつた。革命家は、爆烈彈を携へるとか、短劍を振ふとか、ピストルを放つとかの方法で、從來の舊社會を破壞して、自分等の企圖して居る、新しい社會を建設しようとしたが、何うしても、然う思ふ樣に急には行かなかつた。と云ふのは、此の革命家等が考へて居る思想と、同じ思想を抱いて居るもの、つまり言葉を變へて云へば、眼の開いて居る人が、未だ少なかつたのである。而して、一般の農民などには、何故に革命家が皇帝や大臣を暗殺するか、何故にあんなに奮激して、都市を亂すのか解らなかつた、解らないのみならず、却つて怪しからぬ、行爲であると思つて居た位である。其處で、革命家等は、一般の勢力を得、社會を中心から覆して行くには、何うしても此の地方傳導をするに如かずと考へて、斯かる人々を教育して、眼を開けさせねばならないと氣が付いた。而して、續々として此の方針を實行して、地方傳導を盛んに行つて、各地方の人々を教へ導く運動をする樣になつた。その仕方は、例へば殖民地に巡檢する、屯田兵の組織に似たものであつた。即ち前に云つた如く、僞婚で以て自由な身になつた若い女達は、多くは地方に出懸けて行つて、地方の富豪の家の家庭教師になつた。それから、病院の看護婦とか、又は、中

には地方に行つて居る、同主義の傳導者の男等と共に、小さい病院とか、學校とかを建設して、施療とか、夜學とかをしながら傳導に務めた。で、斯かる若い女達の中には、隨分の好い地位の婦人も混つて居た。默つて家庭に居れば、交際社會の花と呼ばれて、若い男の注目の焦點となる樣な女も澤山あつた。又は結婚すると、直ちに伊太利とか、佛蘭西とか、瑞西などへ新婚旅行に出懸けて、華やかな快樂に飽くことの出來る婦人も居た。然し、斯う云ふ人々は、その地位も富も、破れ靴の樣に見捨てて顧みずに、主義のため、思想のため、女性の地位權勢を高めよう、婦人の自由を得よう、理想の社會を實現しようと云ふ希望以外には、何等の考もなく、唯獻身的の主義の傳導のために、力の限を盡して活動したのである。

然しながら、一方では又、虛無主義者は依然として、最初の手段たる、暗殺の行爲をも決して捨てたものではない。所詮、一方では地方傳導と云ふ、地味な、極めて派手でない仕事で、一般的除々たることではあるが、社會の思想を根底から開發する、大事業を行つて居る傍、又、一方では着々として革命の火花を散して、人の耳目を驚かす暗殺を實行したのである。此の革命黨の運動に關しては、二つながら婦人の勢力なるものは、實に驚嘆するばかりであつた。での地方傳導に於いても面白い話はあるが、後者の暗殺事件に關しては、行爲が思切つた華やかな事だけあつて、種々な驚くべき出來事があつた。

今、その婦人の革命家の話を書くに先つて、少しく彼等革命黨員の暗殺に關する方法を話すと、當の暗殺せらるべき人を指定するのを、『死刑を宣告する。』と云つて居る。その死刑を宣告した者を殺すべき、即ち死刑執行者を撰擇するには、抽籤を以て定める。その鬮に當つた者は、假令、それが自分の親を暗殺する役に當つても、當然死刑を執行せねばならぬ。しかし、革命黨と雖も、依然人間の血を受けた者であるから、成る可くは、斯かる場合には、如何に主義の爲めとは云へ、餘りに面白からぬ事として、一時は他の人と交代する

と云ふ方針を取つた事もあつたが、それでは到底實行に障礙を來してならないので、遂には、一度鬮に當つた者は、斷じて死刑を執行せねばならない事にした。て、若し故意に死刑の執行を仕損じた場合には、今度はその者が死刑を執行せられると云ふ、恐ろしい事になるのである。其處で大概の者は、大義親を滅す、と云つた覺悟で實行した、然う云ふ例は、露西亞の革命史を讀む人々には、殆んど珍らしくない事である。しかし、適に自分の近親な者に對して、死刑を執行しかねて、遂に自分が自殺を遂げたと云ふ話も稀にはある。今之れから話さうとするのは、自分の叔父を暗殺しようとして、遂に自殺をした若い女の事實である。

日露戰爭の眞最中に、露西亞本國で起つた出來事であると、モーリス、ベリング氏が書いて居る。或貴族の家庭に育つた娘で、ヘレンと云ふ若い女があつた。拾七歳の頃に、誰に教導されると云ふ事なく、自然と自分がその思想を抱くやうに成つて、革命黨の仲間に入つた、而して死刑執行委員の中に入る樣になつた。處が、或地方の知事の職を奉じて居る政府黨の一人が、その地方の革命黨に對して、暴逆な所置を行つたと云ふので、死刑執行委員は、此の知事に向つて死刑の宣告を下した。其處で、鬮を引いた處が、その執行者の鬮がヘレンに當つた。然るに、その知事なる人は、ヘレンが血を分けた實の叔父に當る人であつて、彼女は幼少の時に別れた切で、久しく會はなかつた。然し、ヘレンは兎に角暗殺の死刑を實行する爲めに、爆裂彈を持つて、遙々とその地方へ出懸けて、役所へ出頭して叔父に面會を求めた。

暫時、應接間で待つて居ると、にこ〳〵した笑顔で叔父が這入つて來る。

「ヘレンか。好う訪ねて呉れた。」

と云つて、然も懷かしさうに、「お前幾歳になつたのだつたかなあ。實際大きくなつた。」

と大喜びで、忙しい時間をさいて、いろ〳〵と昔のヘレンが未だ小さかつた時の話を繰返した。そして、

死んだヘレンの母の話を思出したり、その時分のお前の友達は何うしたかなどと尋ねて。際限もなく話し續けた。

然るに、ヘレンは爆烈彈を抱いて、久しぶりて會つた叔父から、こんな懐かしい言葉を聞いて居る内に、今迄は人民の敵、社會の毒虫とばかり思詰めて居た叔父が、次第に懐かしい人に變つて了つた。一撃の下に暗殺しようと思つて居た決心も、何時の間にか緩んで、今はもう、到底爆烈彈を投げる勇氣もなくなつて了つた。

叔父は、尙言葉を續けて、

「お前一體一人て來たの。而して何處に宿つて居るの。」

と、ヘレンは

「いえ、今來ましたばかりて。」

と、心の苦痛を顔に表はすまいと、故意と氣を落付けて答へると。

「何の事て來たの、私に會ひに來たの、まあ今晩にてもゆつくり話さう。私の家は知つてるだらう。」

と彼は、應接間のガラス窓を開けて、「あれ、彼處に見るだらう、彼の教會の尖塔の横が然うだから。一緒に歸ると好いのだが、未だ少し用があるし、お前も勞れて居るだらうから、先へ歸つて從妹のチルンにも會つてやつて呉れ、嬉ぶだらうよ。それては馬車を云付けてやらう。」

と。何處までも嬉しさうに、給仕を呼ばうとすると、ヘレンは、

「いえ。些つと近くにお友達が待つて居ますから、勝手に馬車に乘ります。」

と云つて斷つて。「それでは、お先へ失禮いたします。」

「それては。……」

と、叔父はヘレンを玄關口まて送り出して、二人は其處て握手して別れた。

而して、ヘレンは茂つた樹立の間を拔けて、此の役所を出た。叔父は再び自分の室に歸つて、今や椅子に

腰を下さうとした一刹那。悽ましい爆聲が、役所の門前に當つて響いた。

と、役所の前は忽ち巡査や憲兵が集るし、役所の役人等も驚愕して、馳けて出て見ると、今しがた知事なる叔父を訪問して出たばかりの、ヘレンであることが解つた。

——つまり、ヘレンは主義と人情との間に、板ばさみになつて、自殺を遂げたのである。



形式的の艶書

マクス、オーレル

「戀文は火に燒け」とは古來屡々男女兩性に與へられた勸告であるが、予輩は更らに「斷じて戀文を書く勿れ」と云はんと欲する。其理由は恁うである。

何時か離婚法庭若は違約裁判所に出頭するやうなことがあつた場合に、證據書類として、自分の書いた戀文を聲高らかに讀み上げられてもすると、六尺の男子それこそ正に鼠に化して壁の穴にても這入り込むか、てなくとも、少くとも地下數千尺の底に身を潜め度いほどに、羞恥しい念をしなければならないからだ。

人知れず自分獨りで讀んでさへ顔から火が出る思のあるものを、どうして他人に讀み上げられて羞しいとも思はず悦に入るものがあるものか。あれば狂人だ。いや狂人と云へば、戀文を書いて居る間こそ、心の調子が外れて居る時なので、一生懸命の大眞面目で書けば書くほど、狂人國に深入をして居るといふものだ。そして、當に其書いて居る時が正氣の沙汰で無いばかりではなく、書いた文句そのものが何等の意味もなさぬ絶對の囈語だ。女に戀文を送るやうな男に限つて、多くは其女を全くの不幸に淪めて了うのを見てもわかる。かのカーライルでさへも、其妻に消息するに蜜の如き文字を以てして、しかも遂に優しい言葉の一言もかけなかつたといふてはないか。

餘程異常の場合は特別だが、さもない限は愛人と言葉を換はす機會は幾何もあり得る、又造り得る。であるから、何も赤い顔をしなければならないやうな手紙を書かずとも、會ふまで待つが良い。そして其會つた時に思の丈を述べると、戀文と同樣の、否夫れ以上の喜を對手に與へることが出來て、しかも累を後に及す愛は無いてはないか、一寸こゝに氣早の人々――凩は寒い、と云へば、夫れては冷藏庫の空氣も凩か？と詰りかゝつて來るやうな人々――の爲めに斷つて置くが、如上戀文を書く勿れと云つたからとて、何も敢まて異性間の音信を絕て終ふとか、若くは男が女に送る手紙の中には愛の一言も入れてはならない、とかいふ意味てはないことは勿論てある。

てはあるが然し、こゝに注意すべきは、假んば妻や愛人に手紙を書くにしても、其場合熱情的なことを認めるのは宜しくない、といふことてある。然ういふ時には、溫和に、寧ろ冷かと見ゆるほどに書いて置く方が良い。

‥‥君在まさずは一日も生きてあらむ思だに無し‥‥などと書くに至つては、實に馬鹿の骨頂てある。第一、然う書いた所て死なない限は眞實てないてはないか。よし又、夫れが幾分の眞實を含んて居る場合てあつても、夫れては徒に相手に附込む機會を造つてやるやうなものだ。之と異つて、甘つたるい言葉は些末も用ひないて、しかも相手の胸底に自身の、暖い情の絃を響かせ、「他し女とあらむよりは君と共にこそ」といふやうなことを、夫れとなく承知させて置くのは大して惡くは無からう。が然し、筆に調子がついて、「君は我に二なき人」などと一生懸命の形に陷つては駄目だ。

一體、手紙の中に情火の有つたけを燃してしまへば、再び會つた時に云ふことが無くなるわけてもあるし、それに、然う激しく書いてしまへば、終にはその書いた通り實行しなければならない破目に陷らないとも限らぬ。「良人が何處かへ旅行して吳れば良いに。さうすれば又、あのやうな手紙が貰へるのだから」と妻に思はしめるに至つては最後だ。世の良人たるものは、妻

そして當にかく思はしむべきである、曰く。

妾の良人は試に賢明な方だ。下らない囈語は、書かうとしてもあの方には書けやしない。ほんとに氣高い、書かないで行ふ方だ。

人前で其妻に對するに非常な威嚴を以てし、そして愛の手紙などは斷じて書かない、といふ類の人の中に、却つて最も其妻を愛する良人を見出すことが多い。

戀文を書くやうな男は、同時に又、戀文を保存して置く男だ。女は、戀文をいつ迄も保存して置くやうな男をちつとも思つて居るのではない。かゝる行爲は、誠に折角の男が地位を女の水平線以下に引き下げるもので、氣の利いた女は、女の眞似をするやうな男を念頭に置く氣遣はない。

予は、ヴエルテル(ゲーテの小説の主人公)——最も病的な戀文の筆者なる彼のヴエルテルを目して、文學に現はれたる最も唾棄すべき感情的白痴とするに躊躇しない。まだうら若い中に自殺してしまつたのは、彼れに取つて未だしもの幸福であつたのだ。

人若し愛人と遠きに隔つて居たならば、日常の出來事、日記の類の、眞實にして且素朴なる手紙を送るべきである。告ぐるに急なる事が起つた場合には電報を打つべし。斷じて戀文を書くべからずだ。かくして置けば、再び相見ん折には、愛人は以前に優る熱情を以て迎へるであらう。—福光東衣譯—

表情體操とは何ぞや

日本女子大學講師　白井規矩郎



表情體操といふのは、ツヒ近頃佛國のデルサート、といふ人の組織したものですが、唯今では歐米の諸國に弘く用ひられて居ります。殊に俳優とか演說家とかになるには、是非とも此體操を一ト通り研究いたさなければならぬ樣になつて居ります。又た此體操を應用いたした、パントマイム則ち默劇術とでも譯します樣なものは、女子の運動遊戲又家庭の慰みなどゝして頗

る實現せれらて居ります。

表情體操の理屈とか組立とかに付ては、迚も一二頁の中に詳しく御話も出來ませんし、また御話いたししたとても餘り面白いものでもありませんから、其は申ますまい、併し此頃小學校などで致して居る「桃から生れた桃太郎」とか「モシ〳〵龜サン」などの歌につれて體操する樣なものは表情體操ではありません、あれは動作唱歌と申して外國でも別にしてありますので、表情體操と動作唱歌とは全く其組織を異にして居るものであります。

表情體操の主とする處は身體の何れの部分でも自分の思ふ通りに動かし、且つ其動作が人にも自分の考へと同じ樣に見へる樣にいたすのであります、日本の踊なども則ち表情體操の一種でして、先日も何にかの雜誌で踊を奬勵せられた方がある樣に見ましたが、自分なども之れは大贊成であります。

表情體操の中には歌の體操もあれば、目の體操もあり、手首だけ又足先だけの體操などもありますので、丁度日本の踊を習つた方は、身體がキチンとするのと同樣に、此體操を習ひましたものは、身體が何處となく寛かに美しくなりまして、又御客に參つて目の付け處がないから袖を持て見るの疊の塵を捻るのといふ樣な事はなくなります。

日本の踊も運動としては誠によい樣ですが、其れに伴ふ歌が如何にも下品であるのと、手振の野卑な處もありますので、其まゝ嚴正な家庭に入れるといふのも出來難い塲合がありますが、自分は表情體操と踊とを斟酌した樣なものを、家庭用としたらば如何であらふかと思つて居ります。

パントマイムは前に申す通り表情體操の一種でありますが、其材料は神話とか祈禱とか重に宗教に關したことが多いので、叙景とか叙情とかいふものは比較的少ないのですが、兎に角日本の家庭用としては外國のものを其まゝ致して見た處で演ずる人も見る人も餘り興がありません、其故自分が時をり女子に試みます節にも、其骨だけを採つて肉付けは成るべく我邦に適す

る樣にと考へて居ります。
次に松風といふパントマイムの一節を御目に掛けませう。

松　風

水ようたへ

始め起つて居ります、徐かに右足を前に出して、兩手を兩脇から胸へ來たし、左の方を足に組みまして左前の下斜を見ます、此間始めは體を左足て支へ、段々と右足て支へる樣にして。

こゑたかく

兩手を兩脇下の方へ向て開き伸ばし、直ぐに上に掲げ掌を半は上向にして、頭を後ろへ屈げ、上を見て體を後の足て支へます。

かぜようたへ

右足を一歩後へ引き、右手を頭の上から8の字を斜に書く樣にして指頭きを肩の上に載せ、左手は右手と共に半圓を畫く樣にして下ろして後ろへ送ります、腕を捻つて掌を後ろに向け、體をやゝ右後斜に回して、目は左の肩から左手を見る樣に。

こゑたかく

右足を左足にそろへ、兩手を胸の前に來たし、輕く兩掌を合せ……直ぐに

左足を一歩後に、體をやゝ前に屈め、兩手を兩脇に下ろし次に左足を右足にそろへ、再び胸の前に輕く兩掌を合せ……直ぐに左足を一足前にして、徐かに左手を左上斜に右手を右下斜に伸ばし、顏を右手に向けます。

はるは

左足を右足よりも一歩後に引き、左手を左後下斜に右手を左肩の前にして、體を左後斜に向け、顏を左手の方へ向けます。

つねに

體を左足に支へ、右手に圓を畫きながら脇に下ろし體は段々前に、顏は右手を動かすと共に前へ向く。

とひ

急に能く右膝を屈げ、右手を右の腰にあて肘をグツト後ろへ引いて左前斜を見て
次に急に輕く左足て支へ、膝を眞直にして

きつゝ

右手を徐かに前の上から細長い圓形を畫く樣に搖かして、體を前足と後足とて互に支へる樣に搖がし、終りに左上斜を見て。

うれひ

右手を徐かに脇に下ろし、左足を右足にそろへ、……直ぐに
徐かに兩脇を胸に來たし、掌を胸にあて頭を下げて前の下を見て、

しらぬ

右足を一歩前にして、左手を上に右手を下にと開き目は右手を見て

おのがやど

右足を左足にそろへ、兩手を徐かに下ろして……直ぐに右足を後斜に引き右手を腰にあて、體を右足て支へ、左の前下を見ます。

是はまだ長いものてすが、先づ大體は斯樣なものてあります、併し細い動作や又移り變る工合などは迚も詳しく記すことは出來ませんので、若し演じて見たいといふ方へは御話をいたしてもよろしいが、又自分て工夫するのも面白いてしやう、其れに此の原作は有名な「ホーム、スウヰート、ホーム」て、文部省の唱歌集にも「埴生の宿」といふ歌で出て居りますから、其節を此歌に合せて致せばよろしいのてす。

初暦妻めとる日も見當らず　虚子
初暦更に死ぬ日はなかりけり　鬱太
折てさすそれも門松にて候　一茶
六日入日なかに七日の齋かな　鬼貫
藪入の赤染衛門はなしける　大江丸



女性と色彩の觀念

文學士　澤村胡夷

京の朝の町を、深い霧がくれに白川の方から出町のあたりへ出て來る花賣女は如何にも雅びやかて、幾度も詩人や畫家の題目となつて現はれて來ました。勿論之れには舊い都の大路など言ふ連想もありまして吾々に興味を添へるのでありませうが、今之れ等の事情を取りはなして、單に一個の女性として之を色彩の上から見たらば何てせうか。

京の花賣女の顏は白いと誰ても言ひますが、是は女が白いのては無くて女の着物が黑いのてありまして寧ろ彼等の濃い黑い着物が白く顏を見せるといふ方が適當かも知れませぬ。京へ一度足をふみ入れた人は誰も知つてゐる事てあるが、實に彼等は多く濃い紺木綿の着物をつけてゐます。而して其襷が花やかな色て、

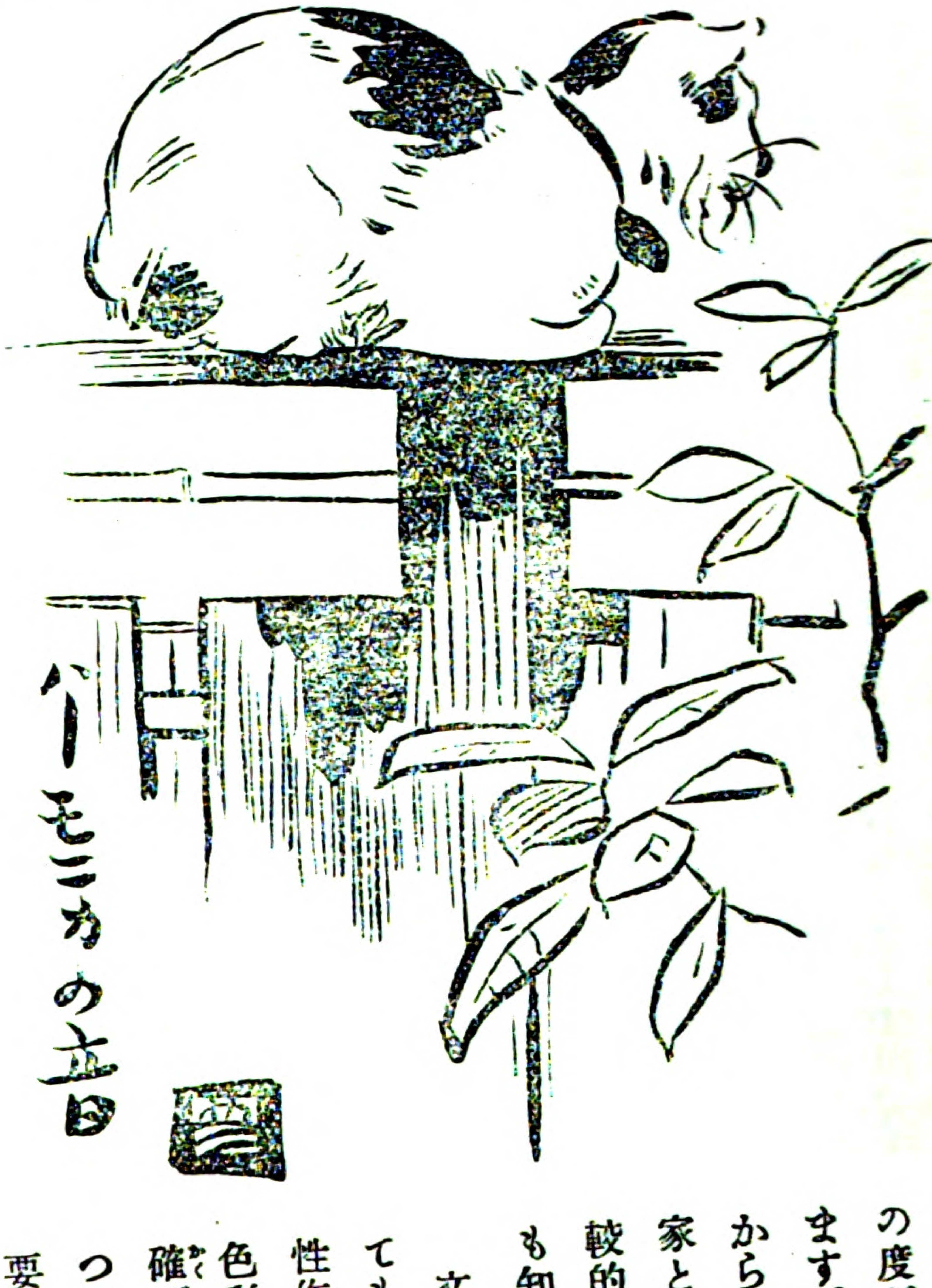
着物と割合によく調和を保つてゐます。然し遠慮なく言へばその襷の色などは決して高尙な色柄とは思はれぬものが多いに拘はらず、甚だしく吾々に惡感を起させなのいのみならず、却つて花やかな感、頗る喜笑的な調子を彼等が與へるのであります。想ふに之は黑い全體の色が赤い派手な襷の色に依て多少破られながら而も襷が着物の地色を壓倒するに至らぬから起るのでせう。

兎に角も京の花賣の若い女が、所謂花賣姿をしてゐる時は其姿の全體を色彩の上から見ましても甚だしく惡感を起させませぬが、若し彼等を吉田祭や加茂祭の時に、他の裝ひに於て見るときは何てあるかといふに是は毫も所謂田舍女の樣子と相違がありませんのみならず、之がかの花賣の女達かと驚かるゝばかり沒趣味な姿だと言ふを憚りませぬ。かれ等の姿が、沒趣味だといふのは着物の着こなしが大に與つて力がありませうが、私はこゝでは主として色彩の上から言ふのてあります。そこて田舍の女と言つて都會の人々から區別せらるゝのは之を色彩の方から言へば如何なる點てあるかと言ふことを述べて見ませう。

私は都會の女が輕跳浮薄に流れ易いのを好まぬのてあつて田舍の女を決してけなすのではないが、所謂田舍女の事を身姿の色彩の上からのみ言へば、都會の女は田舍の者よりも色彩的訓練が進歩してゐることは爭ひ難い事と思ふ。田舍の者は例へば盛裝したとすれば、一々の着物の部分、即ち其帶、其襟、それから下着だの、襦袢の袖だの、着物の裲、其他帶止などは都會の者に劣らぬ、否、隨分より以上の高價の品々てあることは奇しくない。然し、彼等が色彩上の田舍ものたることは依然として續てゐるのてある。其最も主な理由を述ますと第一、色彩上個々の部分の色が統一してゐない事て、即ち着物の一々の部分の色が獨立してゐる事てあります。次の理由は着物の全體の色の調子が著しく煤んだ色てあるか、又は突飛に單調な色てあるか、の二つの中てあります。

元來女性は男性に較べると色彩上の觀念が發達して

ゐるやうで、女性は確に男性よりも色彩的訓練といふべきものが深厚でありまして、或は遺傳的に或は經驗的に、色彩上の觀念が男性に優るやうに出來てゐます。第一、吾々が、色を見別るのは無論眼でありますが、此眼の色を見別る力が男性よりも女性の方が鋭敏であることが事實であります。色盲と言つて例へば綠とか黄とかと全然見る事の出來ぬ人があります。人に依ては世界が唯一色に見えてゐる人がありますが、此色盲は女性が男性よりも統計上少いのでありまして、之は恐く女性の方が色彩的訓練の深厚な事の結



果であらうといふ事になつてゐます。色彩的訓練の方から言ば同じ男性でも畫家と普通人と較べると畫家の方が遙かに色彩訓練の度が高いのであります。この點ばかりから言へば女性は畫家として立つのに比較的好都合であるかも知れません。

文學上の作物に就ても概して言へば女性作家の方が比較的色彩的觀念が精密明確であるやうで、從つて其作物にも色彩要素が豐富であるのは爭ひがたき事實であります。一事物の觀察をしても女性は其色彩的觀察甚だ鋭敏精細であつて侮り難い勢

を示してゐます。我國の古い女流作家の中でも觀察力の鋭利であつたのは疑ひもなく枕草紙の著者としての淸少納言でありませう。實に枕草紙は色彩の要素が豐富であつて、淸少納言は頗る鋭敏な色感を有てゐたらしい枕草紙の『さしぬきは』、『狩衣は』、『ひとへは』、『下襲は』、などの條に色彩上の彼女の考を漏してゐるが、なほ『木の花は』といふ條などには、頗る鋭敏な彼女の色感を推すべき材料を殘してゐます。一部分を引用すれば、卯花に就て、

紫野のわたり近きあやしの家どもおどろなる垣根などに、いと白う咲たるこそをかしけれ。あを色のうへにしろきひとへがさねかづきたる、青くちばなどに通ひていとをかし。四月のつもごり五月のついたちなどの頃ほひ、橘の濃く青きに、花のいとしろく咲たるに、雨のふりたるつとめてなどは云々。

また『木は』といふ條の中にも、

花の木ども散りはてゝ、おしなべたる綠りになりたる中に、時もわかず濃きもみぢのつやめきておもひかけぬ青葉の中よりさし出たるめづらし

など如何にも作者が色彩の上に鋭敏な感能を持てゐた事を推想せられるではありませぬか。

以上は都會の女と田舍の女との色彩訓練、次にまた男性と女性との色彩訓練の事を述ましたが最後に田舍都會の別なく一般に都會ならば都會の女の中でも種々其色の撰擇が異ひますが、これは着物の地色などに著しく現れて來るのであります。無論着物などの一體の地の色調は流行といふ一種の勢力が絶ず動かして行くのであるが、先づ是等を眼中に入て考へても、吾々から見れば着物などの色は其人本來の好尙の表現と思考してよいと思ふのです。かう見れば、着物地の撰擇といふ事は其人の趣味の高低と關係のあることは勿論てある田舍風だと言つて地方人を笑つてゐる都會の婦人が知らず知らず低劣な好尙の中に溺沒して了ふ事があるとすれば寧ろ更に笑ふべきてはありますまいか。鋭敏な色感を享得した女性は須く、色彩觀念の向上を努めねばなるまいと私は思ふのであります。

注意深い人は、最も類似した色彩を見ても其を識別する能力を持つ　居ますが、全體の婦人を見ますに、大抵は細かい識別はつかないやうてす、極めて概括的な見方をしてゐます、第一色彩を言表はす言語からして大いに不足してゐると思ひます。



箏の先生と其流派

きく

今東京で行はれて居りますのは申すまでもなく山田流と生田流で御座います、本當の八ッ橋流をひく人はほとんど現在に無いと申すことでございます。

數年前までは全く山田流の全盛期で、生田の勢力は誠にあはれなものでしたが、近頃また漸々に生田も發展して參りました。

兩派を比較しますに、山田は派手で賑かで、生田は少しくすんだ、こまやかな傾がございます、山田は節まはしに骨が折れ、生田は手の込んだ點がむつかしいかと思ひます。しかし大體におきまして兩派ともあまり大した相異はございません、たゞ各得意とする曲がちがふ位のもので、琴の本曲の組四十八曲並びに、琴紋特別許物などゝいふごく大眼目とする曲は、何流でも悉く同じでございますから、あまりこせ〳〵と山田だの生田だのと申す流派はたてるにも及ばぬ位でございます、其の證據には兩派で同一の曲を合奏しますに何のさゝはりも御座いませんのですから。

主に生田は上品な家庭に喜ばれる傾向がございます山田の獨得の或種の曲の長唄に相近い様なのは派手向に喜ばれる理由でございませうか。

山田流の大家としては萩岡、今井、山本、高橋、榊田などいふ方々がお弟子も多く、お弟子の家庭は皆よいところで、お孃樣にも專門家にもよく彈く方がございます、其演奏會などは、それは〳〵眼のさめる様な美しいものでございます、生田の方では松島、出井、德永、小井手、加藤、米川などの方（大家もあり新進もありますが）を擧げませうか。

此他なほ佐藤、山室、町田、上原氏、家として古い山勢、山登氏、數へればまだ〳〵ありますが、これらの人が東京の各處に、それ〳〵稽古所を開いて、日夜斯道をはげんで居るのでございます。そして其弟子た

ちの專門に業を開いた人々をすべてあはせますと、千人ほどあるさうでございます、なか／＼盛なものでございます。

外へ稽古に行く人は大抵親がゝりの修業盛りでございますが、奥様方もすくなくはございません、たゞそれらの人は遲く始めたので、づッと娘時代より習ひつゞけて、結婚後まで稽古をするといふ人はごく稀といつてよいでございませう。

稽古所は朝と、學校の放課後が混雜いたします、其間午前十時頃とか、午後の二時前後などはごくゆるりとしたもので、自分の順番を待つ間など、めい／＼種々の雜談の花を咲かせます、尤も別室のない家でございますと、稽古の邪魔になりますから、それこそせき拂ひ一つ高くは致しません。

大抵十歳前からはじめましたり、十七八には可なりひけます、奥許を十四で普通(といつてもまづ早い方)とりますと、それから本當の面白い曲を習ひませう、そして五六年熱心に修業しましたり、三絃や尺八と合奏してもしつくりゆく樣になりませう。

月謝は普通二圓位、尤これは奥の方の事で初めの方なら一圓位でございます、師匠にもよりますから、七十錢位のところもないではございますまい。

それに表から裏、中、奥と許狀を受けますお金がかれこれ五十圓、これも小い師匠なら三十圓以内でもすみませう、これでも他に御披露の費用は入ります、派手な師匠には春秋のおさらへについての費用が、まづ當日の衣裳の代價は別として、會費は普通が一圓から二、三圓どまりてすが、自分が或曲をひくとすれば三味線の人に一圓、尺八の人に一圓、琴にも、といふ樣な譯て少くも五圓は一回にかゝります、このほかごく派手な山本さんあたりは、松竹梅ぐらゐのものをひくのでも、來會者に唐ちりめんの風呂敷をくばるといふ話、隨分大勢に手風呂敷を出しては大變な事と思はれます。

序に琴は稽古琴が廿圓前後、少し上等が三四十圓から七八十圓、これらはごくむづかしいこのみになりまして二三百圓が上の部の普通、五百圓を出ますともう贅澤の部で、さして音色に相異があるのでなくて、たゞ金や象牙の細工の功拙、材料の多少などでございます、すべて高いものがよいとはかぎりませんが、樂器などは殊に左樣て先頃の四十年博覧會のときにも、千圓位いのがいくらも落第して、僅か三十圓あまりのが第一等の部に入つたと申す事てございます。



NeW Year's Greeting.

Hana :—Good morning, O-Yuki-san; I wish you a Happy New Year!

Yuki :—I wish you the same, O-Hana-san; thank you very much for your early call. Please come in.

H :—No, thank you, I have come just to give you my greeting; I have many other calls to make.

Y :—Indeed, it is very kind of you to call on me. Excuse me for my delay.
Did you see many callers in the streets?

H :—Yes, I saw a good many; and I was surprised by the great difference between yesterday and this morning. Yesterday every body seemed busy and anxious; this morning every body looks happy and peaceful.

Y :—Yes, indeed, we feel to-day as we were newly born in Paradise.

H :—Where do you go in the morning?

Y :—I must go to our school for the New Year's ceremony. And you?

H :—I am down for a New Year's call on Aunt Kato at Shiba.

Y :—By the way, we are going to have a card party to-morrow evening. You will join the party, won't you?

H :—That will be fine. I will come, sure. May I bring a friend with me? She is a capital player.

Y :—Yes, certainly, please do so.

H :—Good-bye. ***Y*** :—Good-bye.

新　年

花:—お雪さん,新年は御芽出度ふございます

雪:—お花さん,御同様に御芽出度ふございます. お早々と御出て下さつて有難ふございます,どうぞお這入り下さい

花:—いーえ,さう致しては居られません,一寸御年始に參つた許りて,まだ外にも澤山廻る處があります

雪:—左樣てすか,此はお出て下さつて誠に御親切有難う存じます,手前からはまだ上りませんて甚だ相濟みません. 如何てす,町には大分年賀の人が出て居ますか.

花:—はい隨分澤山見受けました,して昨日と今朝との樣子の違ひ方には驚きました. 昨日は誰も皆忙しさうに心配さうに見えましたが,今朝は皆福々しく安々とした顔をして居ます.

雪:—本當に左樣てす,今日は天國に新に生れた樣な氣がします.

花:—今朝は何處へいらつしやいますか

雪:—新年の式に學校へ行かねばなりません. して,あなたは.

花:—私は芝の叔母の處へ年始に行くわけてす.

雪:—時に,私共は明晩歌留多をする積りてすから,あなたもお出て下さいませんか.

花:—それは面白うございます. 屹度參ります. 大變上手な友達を一人連れて參ては如何なものてせう.

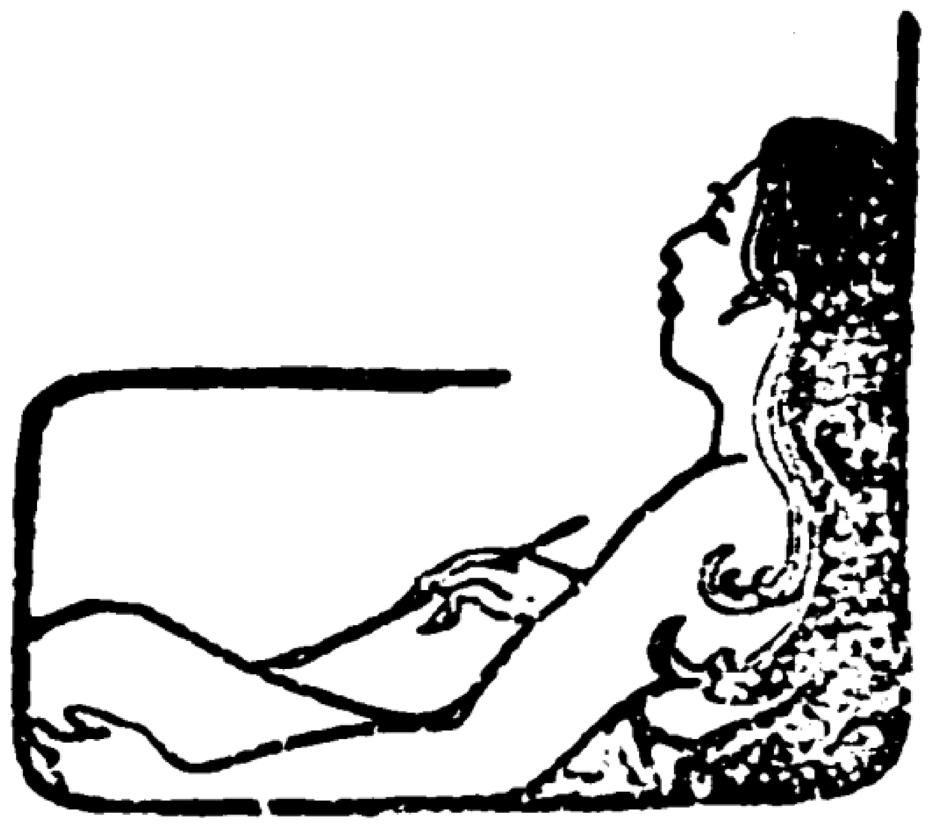
雪:—はい宜しうございますとも. どうぞ.

花:—左樣なら. 雪:—左樣なら.

英 文

(第六年第一回)

星野久成



What He Forgot.

A certain elderly gentleman suffered much from absent mindedness, was frequently compelled to seek the assistance of his servant.

"Thomas," he would say, I have just been looking for something, and now I can't remember what it is," Whereupon the obliging Thomas would make suggestions.

"Was it your purse, or spectacles, or check-book, Sir?" and so on he would inquire, till he hit upon the right object.

One night, after the old gentle man had retired, the bell rang for Thomas, and on reaching the bedroom he found his master rambling restlessly about the room. "Thomas, Thomas," he said, "I came up here for something, and now I have forgotten what."

"Was it to go to bed, sir?" suggested the faithful retainer.

"Ah, the very thing, the very thing! Thank you, Thomas. Good night!"

忘れつぽい人

稍老境に近づきたる某紳士あり，健忘症に惱みければ，止むを得ず屢々從僕の補助を乞ひたり

彼は常に「吾は今まで何か探して居たのだが，何であるか思ひ出せない」と言ふと，世話する役目のトーマスは之を思ひ起さしむる種々の言を提出して，

「それは錢入ですか，又は眼鏡ですか，又は小切手帳ですか」抔と尋ねて，終に本物に言ひ當つるを常とせり．

或夜，此紳士が寢室に退きし後，鈴を鳴らしてトーマスを呼びければ，僕は寢室に行きしに，主人は落ち着かざる樣子にて室内を漫步して居りしが，「トーマス，トーマス，吾は此處へ何かの用で來たが，何であるか忘れてしまつた」と言ひければ，

「そりやお寢みになる事ではありませんか」と忠僕は建言せしに．

「アヽ，其事だ，其事だ．トーマスよ，有難う．お寢みよ」

〔註〕A certain man（某氏）と some man（或人）の區別を恕んに，甲は其人を知て居るも特に其名を示さざる時．乙は其人を知らざる場合に用ふ． elderly=somewhat old, 稍々老ひたる． suffered (from), を惱んだ，に罹つた． absent-mindedness, 放心，忘れ易きこと． he would say 及び其他の would も此處にては「何時も云々した」と常習を示す． obliging =accommodating, 世話する． suggestions, 思ひ出させる言． hit up, 命中す． on reaching=when he reached, 達した時． rambling=walking about aimlessly, 漫步する．

西洋婦人新聞

▲殺人未遂罪　Hamburg に若夫婦がゐる。夫婦は喧嘩をして妻が夫に拳銃を打ちかけた。罪命は殺人中直をした。併し檢事が告發した、罪命は殺人未遂といふのである。

▲歌うたい　Eulenburg 伯の二男 Sigwart は伯林て寄席に出る歌うたひ Helene Stynmann と結婚した。此一家はこれまで貴族と結婚しない、二女 Augusta は父の書記の妻になつた。末の娘は畫工 Hansheye の妻になつた。末の息子は寄席に出る歌うたひ Telly Mark をめとつた。

▲肉聲の目覺時計　目さまし時計にいろいろな口上をいはせるのが出來た。女の優しい聲て起されることも出來る、號令て起されることも出來る。

▲女中が不足　獨逸には女中が足りない、傭ふ方が百あつて、傭はれる方が八十ある位の比例てある。但、Posen, Westfallen, Sachsen, Elsass-Lothringen 丈は例外てある。

▲室内の空氣　葡萄牙から獨逸への通信にこんな事が書いてある、葡萄人程蒙昧な民はない、湯治場ては窓をあけさせないから、獨逸人は泊つてゐられない、或る葡萄牙の富人が子供の敎育を獨逸の少女に賴んだ、ところが室内の空氣が惡くてたまらないのて、稽古の間窓をあけさせやうとする。主人が不同意を言ふ。とうとう主人のいふには、あの娘は多分肺病だらう。それてなくて、そんなに澤山空氣を欲しがる筈がない。肺病の人に子供の敎育は頼まれないと云つて、ことはつてしまつたといふのである。那人と日本人との習慣の違ふ所を思ひ合せるとそういふ事情もあるだらう。此話の末に葡萄牙の女がどの位馬鹿だかといふ證據に、かう云ふ事が擧げてある、或獨逸人が月の晩に散歩をしてゐると、葡萄牙の女が傍へ來て、佛蘭西語てこういつた。"Madame, avez-vous aussi la lune en Allemagne?" なる程馬鹿てそういつたのかもしれない。併し獨逸位曇天の多い國は少ないから、馬鹿てあゝこういつたら面白からう。

▲女學生と黑人　獨逸の女學校の寄宿舍に居る女學生が、郵便切手を集めるといふ名義て、Togo（アフリカ）の獨逸語學校の黑人學生と通信を始めて、中には艷書の交換をしたのがあるといふので、問題になつてゐる。

▲御飯炊き　下女の好いのが少くて困るといふことが全歐羅巴の問題になつてゐる、そこて Goethe に御飯炊き Charlotte Hoyer に惱ませられたといふ昔話が新聞て紹介せられた。

▲六萬圓の家賃　ペエテルブルグ一番高い屋賃を拂つてゐるのは誰かといふ問題が出た、取調の結果は侯爵夫人 Zenaide Nikolabeiuna Jussupau の一年六萬圓の屋賃てあつた。

▲舞踏室の自殺　ペエテルブルグて陸軍大將 Schlepellow の催ほした舞踏會の最中に英國婦人 Miss Slett が座敷の眞中て拳銃自殺をした。大將に戀の遺恨があるのだそうだ。

▲結婚年齡　女は何歳て結婚するが好いかと云ふ問に、いろいろな答をしたのを集めたのが出た、

滿二十五歳以後　Mary Sutton
滿三十歳以後　Wintred Graham
若き内（互に過誤を勘忍し合ふ利あり）Helen Mathers
何歳にても（性質が合へば差支なし）Coulson Komahan

▲獅子自殺　九月三十日に巴里 Montey 座て、獅子つかひの情婦 JosephineRipoche は男の使ふ三匹の獅子に裂き殺された。自殺の目的て獅子を刺戟したのださうだ。

▲アイスランド語の「羊」と羅馬語の「子」と似てゐる、羅馬妃 Alxandra がアイスランドの殖民地のエピスコポス（僧官）を訪うたとき可笑しい事があつた。妃。「子供は何人お待ちてす。」僧「二百なります。」「お世話が大變てせう。」僧。「なに、草原に放して置いて片端から食べます。」

▲證據　白耳義から歸る途中の葡萄牙の伯爵夫人某は、Passa 停車場附近て、雨天の爲めに裾をまくつて歩いたところが裳の下に縫ひ附けて隱してゐた、紙卷煙草四十二箱を巡査に發見せられた。

▲樂人の妻　嫉妬て小間使を自殺させた樂人 Puccthe の妻は遺族に金を拂つた丈けて無罪放免になつた。

▲ゲーテの幽靈　Goethe が生れてから百五十年になる、もう餘程其人物が傳說らしくなつて來た。Wiemar の舊宅にはをりをり姿を現すといふ說がある。それから Frauen Plan（今の Goethe Platz）の舊宅が Eckermann の住んでゐた Deinhardts Zasse 十三番地まて、地下隧道があるといふ說もある、舊宅の庭と畠との間に石垣に扉がある。これを開放して置くと Goethe の靈が美しい少女をつれて散歩に出るといふ。さういふ少女が生前にも Goethe に附いてゐた。或時孫娘 Alma が庭にゐると、金色の髮をした、目の青い、知らない女が附いてゐたので、孫娘が病氣になつたともいふのてある。



短篇小說

水野葉舟選

○緣日（天賞）

筆子

靜かな晩秋の夜に、突拍子もない樂隊が起る、早や凍りかゝつた道に下駄の音は冴えて、人は多く緣日に行くので、私も母と一緒に出掛けた。日和を見た商人は夥しく並んで居た。大白飴の看板と筋向ひには例の、活動寫眞が盛んに樂隊をやつて居る、木蔭を楯に怪談映し畫のうそ淋しい小屋掛もあつた。權現の境内は、油煙と瓦斯と混じ合つたる異臭が、此良夜を無殘と濁して、右往左往の人影は、社頭の白熱瓦斯にカッキリと照らされた。神樂堂では今鹽吹が踊つてるのを、大人も子供も口をあいて見てる傍へ、小穢い老爺さんが、青い如何にも酷つぱ相な蜜柑をならべて、「さあ、本場の紀州蜜柑、甘いのが一摑み一錢」と可い加減な事を云つては、子供等の食慾を誘つて居る。山門を出ると黑山のやうな人だかりだ、見ると十七ばかりの娘が踊つて居る、薄暗いカンテラの燈で、容色もさして醜い方ぢやない、莚の上を素足で寒そうにいじけて居る、後で三味線を彈くのは父でもあらう、勢のない聲で「：：實に遣る瀨がないわいな」と歌ひ終つた。學生も見て居る、職人も、奥樣も御隱居も。然しながら此二人の前には、纔かの端錢しか落ちて居なかつた。

「春と花と：：」親父は續けて彈き出す娘は又彈かれた樣に舞ひ始める、銀杏返しの亂れ髮が一入憐れを留めたので、私は少しの鳥目を遣つた。すると母は何時のまにか、此人込を放れて居る、追ひつき樣、

「可哀相ぢやありませんか、あれぢや何程の貰ひもないでしやうに：：」

「え、何、今のかい」と母は、植木やの黃菊の株を眺

めながら浮の空の返事だ。私は妙に苛々として、

「ねえ、何だか私同情されますわ、さう思はないの、え、阿母様」

「奉口でも仕たがいゝに……詰り怠惰者なんだね」と歩を轉じながら、至つて冷やかに且嘲けるやうに、

「彼様のはお前、案外に困つちや居ないものだよ」

「あれて……」私は眼を見張つて、眞逆々々と口の中で呟いた。私も少女なら彼も少女の、露霜置く夜一夜恥を曝らすといふのは、よくせきの悲境に落ち入つたればこそだ、私の眼には奈何も、彼娘は哀愁の影に包まれてるとしか見えない。

「でも、何でせう、當人だつて出來るなら奉公仕たいと思つてるてしやうにね――」

「さあ、奈何いふものかねえ」と母は氣のなさゝうに云ひながら、土人形の見世やら、一品十八錢の袋物やと、軒別に眺めて行く。

緣日て合力してるのは、强ち彼親子而已ぢや無い、藥師で見た一寸法師も、摩利支天に居た老爺さんも、私は一向に同情を呼び起せなかつたのに、今夜に限つて彼親子が氣にかゝる、けれ共母は更に念頭に置かぬ、此話を進むる程、耳煩はしく倦怠を感じたと見えて、人中に氣恥しいほどの大欠呻を洩した。

「まあ阿母さん――私はぽつとして見返る途端、マガレツトの美人とすれ違つた、と、强い香水の匂ひは暫し人波の中を漂ふて居る、私はそゝられる樣な心地て、足早に母を追ひ越した、八重垣町の角に露店を張つた古着やが、若い內儀さんを捕へて「如何して此不景氣に一錢だつて設かりあ、實際の處私は賣つて了ふのです」とべら〳〵の絹中形をひろげながら、賣りつけてる、歸りは大通りを眞直に、私は猶その事を思ひつゞけながら、質店の角に來た時、ドコ〳〵と烈しい神樂の大皷を聞くと、俄然口を開かずにゐられなかつた、

「ね、阿母さん、彼は親子てしやうかね」「何が……」とつかぬ顏を「そら、先刻踊つてた娘よ、」と好奇心の眼を光らす、母は妙な顏をして私を見たが、

「さうさ、大方娘なりおかみさんなりやつて居るんだらう」と冷然として答へた。

「眞逆ッ」と私はさへぎつたけれ共、其言葉は痛切に胸に響いた、又同時に、それは餘りに酷なる觀察だと思つた。

「ね、君子、彼古着は甘い事を云つて賣りつけたね」と母は他の話をしかけたが、私が默つてるので此度は

獨語のやうに「世の中はなんでも狂言をやつて、暮さなきやならないんだね」と呟いた。

世の中は狂言——私は急にそれが眞理のやうな氣がした、世の道德も法律も我慾の爲には省りみぬ下流社會の彼等だもの、或は母の想像も、事實に近いかも知れぬ、生活の方便として、緣日といふ舞臺に立つて人の同情を呼ぶべく、狂言をしてゐるのぢやあるまいか、否、踊りの娘ばかりぢやなく、彼蜜柑賣りも古着やも一つの狂言だなと考へた。私は果然、熱した血は氷の樣に冷めて了つた。



（天賞）　石工　水戸上市　玉川すま子

（評）感じ方、考へ方は幼いと思はれる處があるが、作者はしつかりと、見た丈けの事を書き表はしてある。また心の幼い少女の心持が　正直に書けて居る。それよりも母親の方は更らに一層いゝ。自分はこの作者には少からず感服した。

○凩（地賞）

大分　原田澪子

木枯の吹く度にさわ〳〵と煤けた障子が鳴つて、外には人通りも稀に、寂とした淋しい夜である。七つになるお竹は、係煩悩で評判の祖父さんと二人炬燵に入つて他愛もない話に耽つて居る。颯つと音を立てて通つて行く風に話を途切らすと、表の方で咳をする聲が聞える。表にはお竹の伯父夫婦が八疊の一間を仕切つて荒物の店を出して居る。伯母さんは痰の氣があつて、始終コホン〳〵咳をする。祖父さんが又始まつたなと思ふて居ると、やつと息づかひの直つた伯母さんが、

「祖父さん今夜は滅法寒いなあ」と襖越に聲をかけた

「あゝ、一人かい、炬燵入りに來んかい」

「伯母さん、來なはりまつせ」と是はお竹が言つた。

「炬燵は結構で御座りますばつてん、今夜源さんが留守じやけん、お竹未だ起きてるかい、祖父さんと來なはり、お茶がわいてるばい」

「祖父さん行こうい」とお竹が先づ表に行く。

「店も思うたより溫かな」

と祖父さんは、フウフ吹ら乍ら甘そうに熱い茶をのむお竹は小さな膝をチヨキンと曲げて、伯母さんが別けて呉れた煮豆の皿を火鉢の緣に乘せて、可愛い口をもぐつかせる。チン〳〵と柱時計が十時を知らせた。お竹の母は夕食後出たきり歸つて來ない。お流と云つてつい去年來た許しの二度目の母である。お竹の父は賣藥の行商人で四五日越にしか歸つて來ぬ。家に居る時は人目にも可笑しい程お竹を可愛がるので、繼母のお流には如何してもなづかず、買ひ度い物や欲しい物があると、お竹は父の歸りを待つてるのが常だ。それで母のお流にも氣に入ろう筈がなく一寸した事からよく

「貴君や祖父さんが餘りあまやかすから」と云つては時々紛紜が起る。爭を好まぬ父は常に受太刀、年老いて嫁に一目も二目も置いて居る祖父さんは

「お竹の躾にあなたまで餘計なお世話」とねめつけられて了ふ。女同志の睨合ひから、伯母さんは勢お竹贔負で、祖父さんと寄るといつもお流の話が出る。

「今夜お流さん、何所へ出てかな」

「何所へ行つたか？おつ母居らんが却つてええない、なあお竹」と愛に溶けそうな眼でお竹を見ると、細い頤を輕くひいてお竹は嫣然して見せる。

「あゝ始終ツケ〳〵云ふたつやちな祖父さん、子供だもの無理やなか、今迄女親なして育ててあつたもんだ

け、そうお流さんの云ふ樣にばかしもいかんたい」と炭をついて火を吹き初め乍ら伯母さんは云ふ。話好きの伯母さんは、餅でも燒いて御馳走しようと思つて居るのである。

「あの光つてる眼を見い、どうしたと云つてはすぐにらまれるけ、なあお竹」と云つて暖かくなつた自分の手で小さなお竹の手を握つて見て、

「おゝ冷たい、まつと近うよれ」

お竹は寂しく笑つて、祖父と伯母の顔を左見右見して居たが、やがて灰をならして、今日始めて敎はつた漢字の犬と云ふ字を何度も〳〵書いて見て居たが、

「あらッ」と云つた樣に愛らしい眼を見張つた。

「左樣〳〵、ほんとになあ」と云つて居た伯母さんが

「何かいお竹」

「今うちの前で足音がしたごたる」

祖父さんも一緒に耳をすましたが、それらしい音もしなかつた。祖父さんと伯母さんとは色々とお流について話した。時々罵り得た樣な言があるとお竹も共に三人して高笑した。燒き冷ましの餅は猫板の上にかたくなつて、お流の話もようやくつきた頃になると、お竹はコクリ〳〵と居眠りを始めた。

「お流さんはまた、今頃迄も何を喋り廻つてるのだろうな、お竹睡むけりやあ、早う去んで寢なはり」

と伯母さんは時計を見て吃驚したらしく、

「宅も、最う歸つて來さうなものだに」と云つた。

お祖父さんは今一つぱいと熱い茶をすゝつて、お竹をゆすぶり起して奥に歸つた。

表の話を立聞きして、そつと裏から歸つたお流は、嶮しい目を光らして、ツンとして火鉢の側に座つて居た

「あらお母ア」とお竹は思はず叫んだ。祖父さんは媚びる樣な調子で、

「何時戻つたかい」

「一時間許り前に戻りました」語尾が强く震ふた。

祖父さんは氣付かぬ容子をして、

「おゝ寒む、今夜もまた霜が降るわい」と獨り言してさつさと自分の部屋に入つて、お竹を抱いて寢た。

天井裏で鼠が騷いて、背戸の柿の木に風が鳴つた。お竹が微かに震へて居ると、祖父さんは捲き込む樣に抱きしめて、「よし〳〵」と小聲で云つた。

少しく、ペックが書き足りなく思はれる處もあるが、中々書き馴れた筆だ（評）

○新しい年（入賞）

神奈川縣　矢野きみ子

菊子は夕暮せまる勝手に、米を磨いてゐたが、不圖其手を止めて、帯の邊を見た。而して思はず一人顔を紅く染めたのである。

暗い座敷の方から、三毛猫がのそり／＼勝手へ來て菊子の直ぐ膝の脇へ首を出したのを見て、菊子は急に思ひ出したらしく手を動かした。

心の中では、何時夫に言はうか、五六日前からどうも身體の工合が變だと思つてゐたらば……必然それに違ひない。夫に何と言つたものだらうか――と考へてゐる。と、何時か又手は休まれる。菊子は今年二十。若い身ではあるし、身重になつたらしい樣を、夫に何と言つて好いかとそれを考へるので、時々人がもう氣付きはしないかしらと帯の邊を氣にする。而しては一人紅い顔をして羞かしさうな笑を洩らすのである。――

四方は何時か暗くなつた。菊子は米をやつと磨ぎ終へて、水を擶みに近所の共用栓へ行つた後へ、夫の義之助が勤めから歸へつて來た。眞暗な座敷へ上つて、勝手を透して見たが菊子のゐないのを見て、洋服の隱袋から煙草に付けてくれる小さな燐寸を摺つて、洋燈へ灯を點けた。座敷はぱつと明るくなる。押入とは反對の壁に新しい簞笥と鏡臺のあるのが眼につく。

義之助は直ぐ洋服を脱ぎにかゝつた。二十五六の丈の高いやさしさうな男だ。

胴着を脱いてゐる所へ、勝手から菊子が這入つて來て、

「お歸へりなさいまし」と丁寧に言つて、押入から着物を出し、夫の脊にかけやうとした。

義之助は胴着をぬいて、かけてくれた着物に手を通してヅボンを脱ぐ。二人の影が簞笥やら押入の唐紙やらへ、大きく小さく映つてゐる。――今迄靜かであつた座敷は、何となく暖かさが籠つたやうである。

夕飯の時夫がじつと菊子の顔から帯の邊へ眼をやつたのを見て菊子は、はつと紅い顔をして、持つてゐた茶碗を膝に置いた。

夫の顔にも若々しい血の色が見えてゐる。

「菊、何だい紅い顔をして……」と夫は眼に笑ひを見せて評かい半分に言つた。

「え！」

菊子は只斯様言つた許りて、一層顔を染めたが、夫が未だ此身を知らないのを安心したやうに思つた。て、明日にてもすつかり打明けやうかしら‥‥とさも大事のやうに考へた。

「やつぱり菊はまだ子兒だなあ‥‥。もう半年にもなるぢやあないか‥‥」

夫は何時も期麼冗談を言つては菊子に諍かう。時には怒らしてしまう事さへある。それを餘計面白がつて、果ては菊子もつい嬉しさうに笑ひくづれるのてある。——今も其麼氣て義之助はゐた。

「あなたもうよして頂戴よ。——」



（地賞）萬歳　青森　松尾千代子

菊子は又かと思つたが、嬉しさうに夫を見た。——座敷には若い夫婦の楽しい思ひが滿ち〳〵した。

もう正月にも一ヶ月はない程、何處の家でも其仕度に騒しい。菊子も夫や自分の晴着やら、歳暮年始の配りものやらて、二人切りの世帯てはあるが、大分忙しい思ひてある。——菊子は夫を持つてから始めての正月てはあるし、其れに身體も全く身重になつたと決つたしするので、楽しさ嬉しさは一方ならない。夫には

未だはつきりそれとは言はないが、二三日前里の兩親には打明けて置いた。夫にも早く言はう〳〵とするが、どうも氣遲れがして――夫は必然喜んでくれるが、どうしても羞かしさが先に立つて……。菊子は何をしてゐても斯麼事を考へ出す。――

此日は冷たい風が吹いて一日終つた。菊子が勝手の仕事を苦もなくやつてしまうと義之助が歸へつて來た「お歸へりなさいまし……」と言つて、夫の顏を見ると、妙に沈んでゐるやうだ。――菊子は直ぐ不安の思ひをした。今迄なかつた事。別に何とも言はないが、顏色も惡いし、一寸見たゞけでも何時もの夫の振舞とは違つて弱々しい。――が、其樣も膳に着いた時にはもう影もなかつた。

「あなた……」と膳を引いてから、机に寄らうとした夫を呼んで菊子は、自分の身體を話した。すると義之助は非常に喜んで、さうか〳〵と幾度か言つた。菊子は其樣を見て、もう歸へつて來た時の夫の顏を忘れてしまつた。

風は夜になると靜まつたが、二人が床に着く時分には、ハラ〳〵と雨が降つて來た。

翌々日菊子は夫から、紙入れを落したが直ぐ拾ひ手があつたので、自分に戻つたと、人とも付かず自分ともつかずの話を聞いた。て一時は驚いたが夫の笑つてゐるのを見て、あの時がきつと落した時だつたらうと安心した。――

益々新しい年は近づいて來る。――二人は希望に滿てる新年を、一日を早く迎へやうと思つた。

やさしい女の心持が嬉しい。（評）

【秀逸】

○養子

丹後　村岡文也

野崎先生は、燒物の大辨當を、ぶら〳〵して、洋服に利久と云ふ不格好な風で、うす暗い細町をがつ〳〵と行く、これが每日である、黑い洋服は、ねずみになつて、昔し流行つた太いずぼんをはいて、下駄も齒が入れてあるかないかわからんやうなのを、引ずつて、うつむき勝ちに道のはしばかり通り、中背のやせた眼の妙に光つたひげ男である、それでも、月給二十二圓の首席訓導で、下には二人の敎員がある、學校でも、至極忠實に職務をつくすので校長のうけも大へんよい、

學校の格子の下を通ると、うすぐろい、顔して熱心に筆を走らしてゐる、野崎先生が見える、河原町から切り通しへ出る、細道の中程に古い格子つきの家がある、これが野崎先生の家で、先生には、不釣合ななりをした細君と、十三を頭に、三人の子供がある、それに五十七八の中婆さんもある、僅か二十二圓で、五人を養はなければならん會計の苦しさは、野崎先生を、遂にかうしてしまつた、けれど、細君も婆さんも、小ぎれいな風で、朝早くから身じまいもして、子供あいてに其の日〳〵を暮してゐる、今日の教員會でたま〳〵はいた、自分の氣焔を思ひ出したり、校長が讃成した事や、色々思ひ浮べて、いつにない、うれしさに、つい足もういて、氣のついた時は、早や、自分の家の前に來て居つた、ガラ〳〵と格子を開けて入ると、いきなり、ワッと、泣く子供の聲がする、つゞいて細君の、甲高い聲がする、今までつゞけた樂しい心地も、もう消えて、いやな思ひが湧く、だまつて茶の間まで行くと、

「お歸りかへ！」と長煙管を片手にもつた、養母親が底光りのする目を、ギロリと、むけた、先生は正しくかしこまつて。

「はい只今」と頭をさげ、ぬすむやうに、顔を窺ふた、先生の目には、恐怖といつて、いゝやうな暗い〳〵かげが、見える、先生の、ヂリ〳〵した視線は、やがて、するどい視線と、はたと、行きあつたので、すぐ眼をたれ、見るともなしに、茶棚の最中を見た、奥には子供のねだる、あまつたれ聲がする、不快は胸に滿々とする、一寸養母の樣子を見て、こそ〳〵と、自分の室へ行くと、いよ〳〵子供の聲が、やかましい、勝手に着物を、着かへ、机の前に座つたまゝ、養子の身のはかない事を思ひつゞけた、云ひたい事も現在母と云ふ人がありながら、云ふ事も出來ず、頭の上るべき妻にも、遠慮しての……」

茶の間から、カン〳〵と氣儘な、甲しやくて、たゝく煙管の音に、はつと、思つて、學校の、しのこりの事務にとりかゝつた、

「お歸りなさい」と糸じまの袷に黒繻子の帶をしめた、細君が茶を持つて來た、先生は一寸ふりむいたなり、默つて、茶をすゝつた、

「貴郎今日米屋が來ましてね、是非と云ふんですよ、どうかならないでしやうか」、細君は、結ひたての、かみを、玉かんざしの、先でかきながら先生の顔を流目て見た、

「どうかならないかつて、こちらに、一文もあるじやなし」

不平がむく／＼と、頭を上げるので、あいそなくいつてのける、細君は憤として、

「だから、相談してるのじやありませんか、あるから出して下さいと云ふのじやありませんよ、何も、そう怒らないでも、いゝのに、すぐ、あゝだから」細君は横むく、

「だつて、お前はわしがもつているかのやうに、云ふからさ、お前の方は、どうだ、」先生は筆を置いて、細君の方を、むいた、

「貴郎には、うつかり相談も出來やしない、貴郎もなし、私の方も、そう／＼あるでもなし、それだから相談するんです、私の方にある位いなら、何にも貴郎に、話さないでも拂ひます」

「わしが、なにか云ふとお前はすぐむきになつて、それだから……」何か云はふとすると、

「おたみ…たみや…」と、茶の間からしわがれた、いじの惡い聲がする、細君は走つて出た、先生は、あ――と太息して、書きかけの、仕事も放つて、庭の方を見た、すぐとなりからもれる母子の、ひそ／＼聲がとぎれ／＼に、耳に入る、先生は、熱心に聞かうと、耳をすまして居る、

「父様これあげやう」と、ねだつて、やう／＼貰つた三つばかしの菓子のうち、一つを、おしげもなく持つて來る、五つばかりの女の子、先生は見る／＼うつくしい、顏の眉が開け、手招きして、ひざにのせ、

「誰れにもらつた、母樣にか」子供は、うれしそうに足を、兩方へ、ぴん／＼さして、むしや／＼菓子をかぶりながら、うなづく、先生は初めて、笑つて子供のなすがまゝに、さした、子供は目にたまつてゐる、涙をふちにこすりつけて、先生の口に、一つ放りこみ喜々として、のびたあごひげの、動くのを笑つてゐる、やう／＼ひざから下して、又仕事にとりかゝつた、筆はせわしく動く、けたゝましく聞える、豆腐賣のラッパは、うす暗い夕ぐれの町の、隅々までひゞき渡る、どこも、ちら／＼と火影が見えだした、先生は火もない、室に、やはり筆を走らしてこんよくすわつてゐる、

不充分だが、女の筆としてはよく書いてある（評）

○疑　惑

神田基子

傳通院前て、電車を降りて、表町百一番地と訊いたら直ぐ知れた。大きな炭問屋の向側て、表通りに、低い黒板塀を巡らした、小綺麗な構へてある。

私は横手の格子戸の方へ、廻つて澤田といふ、其表札を見上げ乍ら、案内を乞ふた。

出て來たのは、六十許の、おきやんらしいお老婆さんてある。

「へい〳〵菊子樣？菊枝樣て厶りませう。まあ少々お待ち被成て」

其儘奥へ引き返して行つた。

菊枝!!!私は、不審の眉を顰めた。

すた〳〵と、聞き覺えある足音が近附いて。

「アラ、梶村樣、まあよくねえ、さあ何卒ね、汚い所てすが」

「ぢや御免下さいまし」

吁嗟に下駄を揃えて、大層なお瘠せ方よと、泌み〳〵凝視り乍ら、あとに従いた。

「まあ久濶てす事、お疑りも無くて、本當によくまあ、歸つて下さいましたわねえ」

など、打ち解けて語るけれど、私の胸に蟠まつてゐる、疑惑の雲には、無意味な一言一句さへ妙に響くのであつた。

「上海は如何てすか」

思ひ切つて突込んだ。

「はあ私、全て病んて暮らしましたの。時候や食物が、まるつきり違ふんてすもの。六ケ月計り本當に寢つきりて、何處見所ても無くつてねえ、ほゝゝゝ、お咄しも、出來無いわ」

僻耳か、如何にも言譯らしく、聞えた。

「ても其麼變つた所を、御覽になつて、本當にお羨ましいわ」

咄は途絶えた。私は寄と、亂雜な、室内を、見廻した。火鉢の側には、金盥がある。鏡がある。幾枚と無く、押し丸めた、着物や襦袢が、だらしなく、塵だらけな行李の上に載せてある。

此麼中ても、ちやんと身化粧を、怠らない、菊子さんの、けば〳〵しい顔に、自と目が移つた。と、きつとした目と、はつたと逢つた。と双方慌てゝ素向乍ら、

「今日も佳いお天氣てすねえ」

と、菊子さんが紛らした。

「秋は宜ござんすねえ、まあお花の綺麗な事」

私も庭に目を轉じた。十坪の庭には塵一筋止めず。

ざくろや、杉の小木の間に、何れ縁日物らしい、樣々の鉢植が置かれてある。

「本當に美事な花ですねえ」

胸は、亂痲のやうだけれど。

「え〻此家のおぢいさんが、忠實で、好だもんですから」

「アラ相ですか、お二人切ですか、此家は」

「え〻左樣なんですよ、息子さんは、何處か、下町の方で、商法とか、仕て居るんですつて。私既う、此家も廢めやうかと思つてますわ」

菊子さんの口振では、又何か御迷惑相。

歷乎とした、御實家もお有りだと仰言るのに、幾ら、母樣が、なさぬ中だつて、小さい妹弟が五月蠅つたつて、年中、詰らない、同居住居などなすつて、夫れに猶、上海だなんて、本當に、什麼も分らない。

偵察も覺束ないわ。級友に申譯も立たないけれど。

「菊枝樣、お客樣ですよ」

例のお老婆さんが次の間から云つた。

「誰方？」

お老婆さんはホ〻と笑つた。菊子さんは、立つて、何かひそ〳〵耳打した。

私は堪まらず厭に成た。

いつ迄居た迚、面白くも無し、不審も晴れず、もうい〻加減にと思つて、菊子さんの座に返るを待つて、暇を告げた。

菊子さんは、如何にも不安相で、幾度か、とめたけれど。

結局、來四月から學校はやり直すといふ事丈けを、突き留め得たので、無理矢理に辭した。

格子際に、ハイカラな杖があつた。さく〳〵と、庭の方へ辿る樣な足音を聞いた。

空色のパラソル傾けて、歩を急がし乍ら、樣々に考へた。

どうも、あの上海行は。……。

ちらほら、單衣を着る人さへあつた、五月頃、一日でもお羽織を離さなかつた。

「田口さん、かびが生えてよ」

みんなに、よく戯談はれた。

「だつて私、餘まり肥つてみつともないんですもの」

毎時、顏赧らめて恁う仰言つた。

實際あの頃は、肥つて被居た。しかし其割にお弱かつた。

都合て上海へ行くから、當分お目に懸れないとて、暇乞に出校た時は、別けても、御不快相だつた。仍お羽織召して。

が、今のすらりつとした。御無病らしい御様子。それ計か、いつぞや九段下迄御一緒に行つた時、五六人の支那人の一行に逢つた。菊子さんは、つと避けて、右の袂で顔を隠して、一行は一様に振返つて、高聲に、何事か、云つてゐた事もあつた。

噫、解決らない。

ホッと息して不圖、氣がつくと、もう電車通りだつた。

も少し、友人に逢つた初めの不思議な感に打たれた心持を(四邊の雰氣を)丁寧にしツかり書いたらば、後の方が生きて來るだらう。(評)



(入賞) 晩酌の使 名古屋 瀧澤とし子

○二階の人

土佐 も丶の花

多田様が二階の二疊半に來てからもう一月餘になる。

多田様は女學校の四年生だ、朝は眞暗い中に起きて椽先に鏡臺を持出して油も水も付けずに髪を結ふ、此間かも、まだ鏡に顔の映らぬ程暗いのに洋燈も點けて居ないから、私の方は格別用もなし、「多田様、其れちや結へないてしやう、丁度洋燈があきましたから」と持つて行くと、「否不用ませんわどうせ此様髪、髪ばかり好うたつて、ウフー」妙に冷笑して自暴に、櫛を荒く使ふ、私は暫く見て居たが、前髪に取りかゝつたから氣を利かした積りで洋燈を持つた儘、向側に廻ると「不用つたら、彼方へ行つてゝ頂戴

うるさそうに、ガタンと鏡を閉た、私は妙な人だと思つて默つて階下たが其日は口も利かなかつた。

七時になると學校へ行く、それ迄に袴も着けてるが七時にならねば何樣しても行かない、雜誌なんか讀んでゐる。不格好な束髮に、白襟を後に一寸程出して、それても袴は、腰を高く前下りに氣取つて着けてゐる。「行つてらつしやい、」と云へば、「は、」と何やら口の中で云ふが默つて居れば其儘出て行く、恐ろしく大股で歩くかと思ふと、急に立ち止つて首を傾けて考へる樣して見たり、何も無い道の傍の草に見入つたりしてみる。留守の中に二階へ行くと、其邊は雜誌ばかり散らかしてある、塵の積つた本箱の上には、一月前と同じ形に聖書が置いてある。

妙な群氣な人だ、何日か母に、「私の袴程褪色たの着てる人は無いでしやうね、ほんとに見外無いでしやうね、」と白くなつた海老茶袴を見せてた事を、見た事があるから私が少しでも打解けて貰ふ積りて、「多田樣、貴女の緒も隨分になりましたね、」と其處を掃く時ふと目に入つた紅緒の褪せたのを笑つたのを、「褪めたつて、此緒てすか、貴女のは好いこと、其筈よ貴女は心も若い燃ゆる樣な心だけれど、私のは御覽の通りよ、もう褪め朽ちて、人間も最う、私の樣に褪めちやあ終極よ」と嘲笑つてゐたが其れを昨日も、「おや、亦緒を更へなくちやあいけない、他人にまて云はれるんだから」と獨言の樣な皮肉云つてた、私は其れから餘り口も利かない、晩は日暮前にはきつと歸つて來る、御飯が濟て二階に上るともう其れつきり階下て來ない。日曜なんか此地からは二里も無い故鄉へ歸つた事も無い其れかと云つて出外でもなく障子を閉めて何やら仕て居る。「御兄妹はおありなさるの」と母が問ふても、「溜水のぼうふらの樣に湧いてゐます」。此れから外に何も云はない。折々私なんかゞ階上て行くと、「何か御用ですか」と眞面目に裁判でもする樣に尋ねる。母なんかには其樣でも無いが、何故か私には快い笑顏一つ見せた事が無い。此十日程以前だ、干物を片附けて居ると、緣の柱に倚つて唱歌を歌つて居た、細い透つた美い聲だ、ふと私と瞳が逢ふたのでニッコリすると、多田樣は微笑さへ見せず、ガタンと障子を明けて還入つた。翌日、「多田樣、貴女の唱歌初めて聞いてよ、面白かつたわ、ほんとにお上手ね」と云ふと、「ホヽヽ、歌ふ人の胸の苦痛を知らない人は面白いてしやうよ、歌はしてさんざ、嬲てヽ笑ひたいてしようよ」と嘲笑つ

て居た。一昨日三田樣と云ふ人がお訪問て來た。週に一度は必度來る、ニコ〳〵した愛嬌のある人だ、此友とは打解けて話して居る、笑ふ聲なんかも日常の多田樣とは思へない。私は何樣事を話して居るかと楷子の上り口て聞いてみた「ねヽ多田樣、貴女女學校濟んだら何する心意なの、家庭を離れたらとても學生時代の樣なおやあ無いてしやうにね、」不安想な三田樣の聲だ、「貴女はほんとに弱い事ばかり云つてるわね、どうせ私なんか家に居つたつて酒ばかり飲んてる父親にや叱られ、兄夫婦にや邪魔者扱ひにされ此樣割の惡い事あ無いわ、まだ今月になつて一度も歸らないわ、何樣てもして下等社會に働く積りよ、意志さへ強固なら何事ても出來ぬ事無いと思ふわ、女だからつて何も不合理な結婚に甘じて、夫に無理云はれたつて、唯、恐れ入りました畏まりましたて、朽ちんならん定理は無いわ、ウフ……」多田樣は冷やかに馬鹿にした樣に笑つた。暫くして三田樣が「昨日ね光谷樣に逢つたのよ、丸髷に結つてね、以前はよく生へた儘だつた眉も奇麗に揃へてほんとに好い細君振りよ」一寸言葉を切つて「皆學校退すと奇麗になるものね」「あヽ友は卒業すれば華やかになる、私は塵まみれになつて働く、何だか吾身が可愛想になるわ」投げ出す樣に多田樣は云つたが何となく弱い、哀れみを乞ふ樣な、沈痛な響があつた。二人は暮れる迄此樣事ばかり話してゐた。

少し荷が勝ちすぎたと言ふ感じがする。この材料に對して研究が不足なのらしい。(評)

○母の姪

徳島縣　野　菫

(今晩は)障子を開けない内に、其聲は消えて終つた(伯母樣！御無沙汰しました)すつと上つて來たのは母の姪のおみつ姉樣だつた。

(あら！)私は縫物を押しやつた。

(おみつか早うお上りな)

私は姉樣がおんぶしてゐた治ちやんを抱きとつた。

(まあ、やつと來なかつたなあ、何うしてゐた)

(そりやお母樣此んな赤樣が出來たぢやありませんかねえ、姉樣)つて云ふと母樣は始めて眼鏡をとり除けた。(さう〳〵大きくなつたか)と私の方へのぞき込んだ。

(伯母樣、私今日素麵を食べましたの、すると直ぐ腹が傷み出しましたので何うしやうかと思ひましたわ)

(さうか、最うお産して幾日だえ)
(さうですな、四十日にもなりますわ大抵の物は氣をつけて…伯母樣が言つたやうに、我慢してたのにまだ…)
(そして痛みは何うだえ)
(えゝ最うちつとも痛みませんのよ)
(まあよかつた事、何ても油つこい物は氣をつけて食べない方が…)
(だつて四十日ですのにねえ)
(さうか早いものだなあ、此の間のやうだつたに、伯母樣早う來てつて敏子が呼びに來たのは)
(だつて間に合はんのですもの、伯母樣てなきあ、お祖母樣は彼んなだし…)
(矢張り何かえ、むづかしいのか)
(そりや最う内のお祖母樣は、誰だつて知つてる通り直りませんわ)と姉樣は困つた顏をする。
(今朝もねえ、敏子が側を通つた時に足が一寸觸れたの、すると何時もの大きな聲て老人を子供までが粗末にするつて騷ぐんですもの)姉樣は尚語を續けた、
(そして直ぐ本家へ行きましたわ、告げに行つたのでせう)。本家とは夫の父母の家、姉樣の夫は先妻の子て、後妻にれきとした男の子があるから、特務曹長まで昇つて昨年營所から歸ると父の妹の常夏と別家してゐるて其折合は仲々むづかしいと云ふ事である、
常夏(今てはお祖母樣)大變に身體が強い、昔の學問があるので何かとせゝかましい、姉樣は夫許りだ、皆んなにらんてゐる。
(さうか矢張りだに困るのう、ても最う年がとしだから、出來るだけ我慢お仕)
(それは最う、私は辛棒してゐますわ)と云つたが不安な顏をしてゐる。
(此の間もねえ伯母樣、治子を守りしてゐて、祭禮に來る時は祖父樣から着物が來るよつて云ふのですよ、聞えよがしに、あきれるぢやありませんか、最う三人目だにねえ、里だつて續くものですか)と云つたが又語をついて、
(だけど里も惡るいの、出來ると便をしたに、何の音もなし誰れも來ないんだもの…)
治ちやんが泣き出した、私は姉樣に渡した、乳房を含んで泣き止んだ、すると姉樣は側の風呂敷包みを取り寄せた、赤い布や白い布、友禪染やら…ても姉樣は一つの新聞紙に包んだのをとり出して、外には目をや

らぬ。正月前に矢張恁んなに買ひ物した時、一ぱいに擴げて友禪を出して此れは敏子の襦袢、模樣が好いだら、其れか！と私が手にしたキャラコの模樣入り、それは羽織の裏地に仕やうと思つて買つたの、好いかしら…斯んなに一々話して呉れて、皆なて笑つたり、賞めたりしたんだもの、何だか物足りなく思つた。

姉樣は治ちやんがスヤ〳〵眠るのを見て（伯母樣！此れねえ）と包を母に渡す如にした、母樣は膝をすりよせた、姉樣の聲が低かつたので、



年ゆく日　　名古屋　板澤とし子

（あのねえ、今も云つた如に里から何の音もないので三人目とは云ひながら、老人の手前も有るものだし、私が肩身が狹いから、此品を里へ送つて呉れませんかそしてねえお祭禮に來る時里の物にして持つて來て呉れるやうに）と云つて治ちやんの寢顔をのぞいた。母は只うなづいた。

（里が里なら此恁にねえ伯母樣！それにせめて母樣でも生きてたら私が…　…私が心配しな

いても……」母は又うなづいた、そして話を外へ（子供を何うした！連れて來ればいゝに）と云つた。（だつて聞えちや惡るいと思つて、來るとは云つたのだが置いて來たのですわ）何うしても話がしめる。母様は私を呼んで（今姉様が言つたやうに一寸手紙をお書き）と云つた。私は二階に上つて其の通り書いた母様が上つて來たので讀むと（此れを彼のかたわの伯父（姉様の父）が見たら何んなに思ふだらう、たとへ母親がないとて、里が落ちぶれたからと云つたつて、嫁が其れだけ氣をつければいゝに、彼んなにおみつを泣かして）とぢれつたさうに、云つて手紙を持つて行つた。

二人が下りて來た時、治ちやんが何に目覺たのか、姉様が起つてすかしてゐる。

（おみつ！此れおあがり）と今日したお萩をお茶ですゝめた、

（有が度う、頂きますわ、私許りは伯母様とこだけ、何所へ行つたつて話が出來ないのですもの、此所へは來なくつて）とお萩をとつた。

姉様が歸る時、母様は竹の皮包みをこしらへて風呂敷に包むやうにと渡した、

今夜は姉様と赤様許りであつたので、何だかさびしかつた、一しほ姉様が哀れに見えた。

女らしく、細かい處がある。（評）

○其後　やよひ

「私こんな學校には一日も出たくないわ――」房さんは口癖に斯う云ひ出した、細中先生對房さんの暗闘は尚續いた、房さんの親友に秋さんと云ふのがある、二人は只近頃の交際であつたがどちらも異性間の戀のやうに深く思ひ合つてゐた、無口な、氣にくわぬ事があるとろくに返事もしないやうな房さんも秋さんばかりには心から打ち解けてよく話す、疑問の的である變物の房さんを一番よく知つてるのは秋さん一人と云つてもいゝくらゐ、その交際初め、或る人から妨害されたにもかゝわらず、もうそれは、傍から見てゐても、ねたましいくらゐ毎日のやうに手紙を出す、日曜にはどちらかゞ訪ねて行くと云ふ樣子、

秋さんと細中先生とは再從兄であつたから房さんに對する細中先生の陰からの言行は知る限り秋さんを通して房さんの耳に入つた、

「補習科などになると丸て昔の、大奥か、尼寺のやうなものだからね嫉妬心ばかり深くなつて、梅本…房さんの性…ばかりにはかゝわらぬ、誰の事でも少しばかり賞めると、房が大さわぎてね」と仰有た事も、全級で一等美人のHさんが夜中細中先生を訪ねて、房さんの事も云つてしまつたらしい、と云ふ事も皆悉はしくは傳はつた、

「それは恐ろしいやうな天才だ、僕等、とてもかなはんよ、あれでも少し、美であつたら」と酒の上ではあつたが友達と話してらしたのは秋さんもさすがにはなさなかつた、細中先生はまだ獨身である、

同級生間はこのはなしで持ち切りと云ふ姿になつた、先生の言葉の通り、嫉妬から、わざと大袈裟に云ふ人も少なくはない、そのうちに暑中休暇になつた、房さんは歸省した、その前に秋さんを訪ふて一日はなしてゐたそうだ、あの血も涙もないのかと思はれる程、冷い房さんが正體もなく泣き伏してるし、秋さんも泣きながらなだめてゐたと、秋さんの妹からきいたが、後で思ふと、房さんがもう學校は退るが米子に轉校するかしても鳥取には來ないと云ふのを秋さんがなだめたのだらう、房さんは何時か、そんな語氣をもらした事があるから、誰にも知らさずわざと、終列車で歸郷つた房さんを、秋さんは、停車場までおくつて此所でも二人は涙の中に別れを告げたと云ふ事實を見た人がある、これ等の事は在鳥る補習生間に評判となつた、兎に角房さんは何事か決心したに違ひないこの休暇中に、細中先生は結婚された、相手が夜中房さんの事をはなしてゐたと云ふHさんだから可笑しい九月に入つて學校は始まつたが房さんの姿は見えなかつた、細中先生は矢張補習科に出て皆の醉ふやうな文學の話など熱心にしてゐられるが生徒は前ほどにさわがない何日か校長の宿直の日の夕方、應接室で校長と、房さんと、や丶聲高に云ひ合つてゐられたと云ふ事が小使の口から傳はつた、校長の宅から房さんの出て來たのを見たと云ふ人もあつた、退學したのだと云ふ想像説は今事實として搏まつた、十月の或る雑誌に『師弟間』と題して房さん對、細中先生の事を小説に書いて投書した人がある、今や房さんの事も忘れかけた學校ではこのためまた、大分さわがしくなつた。

K、と云ふ匿名が用ひてあつたので、作者についてはずゐぶんといろ〳〵の説がたつた、或は房さんだとも云ひ、房さんと秋さんと共謀…と云ふが、秋さんが

房さんの意を受けて書いたとも、級の誰彼だとも云つたが、これについて秋さんはかう云つてゐた、

「まア、あの作者が房さんだつて?、ずいぶんだことそれに房さんなら、もつと上手てすわ、そんな事云つて貴女ぢやないこと?、ほゝ……、多少氣味のよいと云ふ笑ひ方をする、細中先生も秋さんを疑つてらしたらしい「僕も見ましたがね、梅本だろーと思はれるところもありますがね第三者てなくつちや書けぬところもありますし、秋さんが、梅本と仲がいゝつて事だから秋さんかと思ひます、實際現今、學校にあれだけ書くものはありませんからね」と同僚にはなしていらしたそーだ、秋さんは、私立女學校の出だが文筆は鳥取では確な方だと、房さんは今高等師範の受驗準備に一生懸命だと或る人からきいた。

細中先生は十二月限りて止めて、一年志願兵に出られる筈てあつたがどんな都合てか三月まて引き續いていられるそーだ、歡迎黨と失望黨と相半ばと云ふ事だ、秋さんの樣子は此頃少しもきかぬ。

少女の世界には、こんな事件が澤山あるのだらう。（評）

○哀愁

下谷妙子

涼子が小學校から歸つて來た時、母親のお光は、狹い臺所を、一杯に取散らして、女中相手客の膳拵えに忙はしかつた。涼子は臺所の閾際に突立つて、お光が奈良漬を刻む手許を眺め乍ら、『力江さんなの?』と小聲て尋いた。『あゝ。』とお光は薄笑つた、『相變らずお全盛だと見えるわね。』『さうさ、又。』と云ふお光の聲をきゝ捨てゝ、涼子は自分の居間へ入つた。一間置いた座敷から起る、兄夫婦や、力江さんの華やかな笑聲をきゝ乍ら、銘仙の學校着を、ゴッ／＼した、綿入の常着を更えて、着物は其まゝ、新らしいカシミヤの袴だけ、丁寧にたゝんてをいた。而してベッタリと机の前に座て、『厭だあ、あんな女に逢ふのは。』と泌み／＼厭そうな顔をして考へた。然し逢はぬ譯にはゆかぬと思つて、しぶ／＼立上つた、自分の居間を出る時、隅の柱に掛けてある、細長い姿見に寫た其の自分の青い顔をふと見て、馬鹿に情けない樣な、心細い感がして泣き出し度くなつた。斯樣な思て賑かな座敷へ入つて行た。兄の進は、力江さんと黑ねりの膳を並べて、お酒を飲

てた、嫂のお秋は面白相な顔して、二人のお酌をした、涼子が入つて行くと、三人の眼が一度に涼子に集つた。力江さんはもう、その美しい眼の傍をホウと赤くしてた。涼子は艶めかしい姿だと思つた。『オヤ、お涼さんお久振りイ、毎日お奉職て？、感心だことね、エ、あゝ此頃胃病だつて。いけないのね、成程顔色が悪いよ』と元氣な聲で、テキパキと蓮葉な物云いをする。それても、一寸氣づかはし相に、濃い眉をひそめて、病人嗅い涼子の顔を、マヂ〳〵眺めてた。涼子は斯麽様子をされるのが癪にさわるよ思た。何も云はづに、他方むいて笑つた。嫂のお秋が『學校の歸り、醫者の處へ寄つたの？少しは快くつて。』と低い聲て、優しくきいた。涼子は『快くもないわ。』と氣のない聲で答えた。

『困たのね。』としんみりした聲で淋しそうに涼子の顔を眺めてた。力江さんはもう、此方にはお搆いなして、進に今の藝者の内幕は酷いと云ふ事や、待合の女將だつて、時にやゝやりて婆の役目を務めるんだから、自分なども、髮一つなつて、銀杏返ては、雛妓などが馬鹿にして、押が利かねから、大抵は丸髷に結ふのだと云ふ事を例の浮きつぽい調子て、高聲に語つてた。進は只無暗と、面白そうな顔して、一々感心してきいてた。

『此の襟止、素的てせう、蠣殼町の大將に貰たの、それてもダイヤだからね。』『ダイヤ、どれ姉さん、オヤ鹿の眼球になつてるんだね、あゝキラ〳〵光るわ。』お秋は小兒の樣に騒いだ。『オヤ見せろ、あゝこりあネクタイピンに好い、義姉さんの襟止にや頭が少し大きすぎるよ、拙者が貰い受け樣かな。』進は自分のシャツの襟へ刺してみた。『慾ばつてるよ、今度又ダイヤの指輪一つ注文してをいたから、それが出來たら、眞珠の方秋ちやんに遣ろう、素人くさいから。』こんな談をきいた涼子は、默つて座を立つた。

『姉さんも、とんだ好い姉さんを持つて、幸なこつたね。』と茶の間へ來て、お光にさゝやいた、『本統にさ。恥かしくもなく。』とお光は嘲笑的に云つた。『女性もあゝなつたらお仕舞いだ、何と思てるんだろう、姉さんもよく恥かしくない。』斯麽ことゆい乍らも、涼子は自分の衷心、何となく物足らぬ寂しい思の、ひそんでる事を考へて、眞面目に哀愁を覺えた。

（少し丁寧に、書いてほしい。折角の話もこう亂雑に書かれては駄目だ（評））

房さんの意を受けて書いたとも、級の誰彼だとも云つたが、これについて秋さんはかう云つてゐた、
「まア、あの作者が房さんだつて？、ずいぶんだこと房さんの性質としてあんな事が書けるものですか、それに房さんなら、もつと上手ですわ、そんな事云つて貴女ぢやないこと？、ほゝ……、多少氣味のよいと云ふ笑ひ方をする、細中先生も秋さんを疑つてらしたらしい「僕も見ましたがね、梅本だろーと思はれるところもありますがね第三者でなくつちや書けぬところもありますし、秋さんが、梅本と仲がいゝつて事だから秋さんかと思ひます、實際現今、學校にあれだけ書くものはありませんからね」と同僚にはなしていらしたそーだ、秋さんは、私立女學校の出だが文筆は鳥取では確な方だと、房さんは今高等師範の受驗準備に一生懸命だと或る人からきいた。
細中先生は十二月限りで止めて、一年志願兵に出られる筈であつたがどんな都合でか三月まで別き續いていられるそーだ、歡迎黨と失望黨と相半ばと云ふ事だ、秋さんの樣子は此頃少しもきかぬ。
少女の世界には、こんな事件が澤山あるのだらう。（評）

〇哀愁

下谷妙子

涼子が小學校から歸つて來た時、母親のお光は、狹い臺所を、一杯に取散らして、女中相手客の膳拵えに忙はしかつた。涼子は臺所の閾際に突立つて、お光が奈良漬を刻む手許を眺め乍ら、「力江さんなの？」と小聲で尋いた。「あゝ。」とお光は薄笑つた、「相變らずお全盛だと見えるわね。」「さうさ、又。」と云ふお光の聲をきゝ捨てゝ、涼子は自分の居間へ入つた。一間置いた座敷から起る、兄夫婦や、力江さんの華やかな笑聲をきゝ乍ら、銘仙の學校着を、ゴツ／＼した、綿入の常着を更えて、着物は其まゝ、新らしいカシミヤの袴だけ、丁寧にたゝんでをいた。而してペッタリと机の前に座て、「厭だあ、あんな女に逢ふのは。」と沁み／＼厭そうな顔をして考へた。然し逢はぬ譯にはゆかぬと思て、しぶ／＼立上つた、自分の居間を出る時、隅の柱に掛けてある、細長い姿見に寫た其の自分の青い顔をふと見て、馬鹿に情けない樣な、心細い感がして泣き出し度くなつた。斯樣な思で賑かな座敷へ入つて行た。兄の進は、力江さんと黒ぬりの膳を並べて、お酒を飲

てた、嫂のお秋は面白相な顔して、二人のお酌をした、涼子が入つて行くと、三人の眼が一度に涼子に集つた。力江さんはもう、その美しい眼の傍をホウと赤くしてた。涼子は艶めかしい姿だと思つた。『オヤ、お涼さんお久振りイ、毎日お奉職て？、感心だことね、エ、あゝ此頃胃病だつて。いけないのね、成程顔色が惡いよ』と元氣な聲で、テキパキと蓮葉な物云いをする。それでも、一寸氣づかはし相に、濃い眉をひそめて、病人嗅い涼子の顔を、マヂ〳〵眺めてた。涼子は斯麼様子をされるのが癪にさわると思た。何も云はづに、他方むいて笑つた。嫂のお秋が『學校の歸り、醫者の處へ寄つたの？少しは快くつて。』と低い聲で、優しくきいた。涼子は『快くもないわ。』と氣のない聲で答えた。『困たのね。』としんみりした聲で淋しそうに涼子の顏を眺めてた。力江さんはもう、此方にはお搆いなして、進に今の藝者の内幕は酷いと云ふ事や、待合の女將だつて、時にや、やりて婆の役目を務めるんだから、自分なども、髮一つなつて、銀杏返ては、雛妓などが馬鹿にして、押が利かぬから、大抵は丸髷に結ふのだと云ふ事を、例の浮きつぽい調子で、高聲に語つてた。進は只無暗と、面白そうな顔して、一々感心してきいてた。

『此の襟止、素的てせう、蝦殻町の大將に貰たの、それでもダイヤだからね。』『ダイヤ、どれ姉さん、オヤ鹿の眼球になつてるんだね、あゝキラ〳〵光るわ。』お秋は小兒の様に騒いだ。『オヤ見せろ、あゝこりあネクタイピンに好い、義姉さんの襟止にや頭が少し大きすぎると、拙者が貰い受け様かな。』進は自分のシャツの襟へ刺してみた。『慾ばつてるよ、今度又ダイヤの指輪一つ注文してをいたから、それが出來たら、眞珠の方秋ちやんに遣ろう、素人くさいから。』こんな談をきいた涼子は、默つて座を立つた。『姉さんも、とんだ好い姉さんを持つて、幸なこつたね。』と茶の間へ來て、お光にさゝやいた、『本統にさ。恥かしくもなく。』とお光は嘲笑的に云つた。『女性もあゝなつたらお仕舞いだ、何と思てるんだろう、姉さんもよく恥かしくない。』斯麼ことゆい乍らも、涼子は自分の衷心、何となく物足らぬ寂しい思の、ひそんてる事を考へて、眞面目に哀愁を覺えた。

―少し丁寧に、書いてほしい。折角の話もこう亂雜に書かれては駄目だ（評）

○妻

豐後　佐藤みどり

昨日おきぬさんから届いた手紙を思ひ出して、夫も留守だと云ふし、私も久々振りで昔のお友達と話して見たいやうな心地になつたのでお母さんにそう云つて午後から訪問ことにした。

私が家を出る時お母さんは

「先様ではお子さんもある事だし、あまり久しく居るとお邪魔になりますよ」と云はれたが私は久しく逢はなかつたお友達に逢われると思ふと何となく嬉しくてそは〳〵と出たので。

おきぬさんの家は山の手の淋しい百姓家であつた、やつと尋ね出して私はいそ〳〵して家の前に立つた、――と私はそこらの穢ない取ちらばつた有様にむつとしていやだと思つた。

「ご免なさい」と聲をかけると障子がすうつと開いて子供を抱いたおきぬさんの身躰が見えた。

おきぬさんは「まあ」と吃驚してせか〳〵そこらを片付はじめた。

穢ない襤褸布がそこら一面に散らしてあつて膝から下した子供ががさ〳〵はひ廻る。

おきぬさんは斟酌して。

「こんな穢ないところへ御案内して、座るところもございませんやうで」と云ふ。

やつと片付てから私は座へ上つた。

「御丈夫そうなお子さんですわね。おたのしみでしようと、」云ふと

「いゝへ〳〵、私は何時も此子に泣かされるんですよほんとに子なんか持つものだございませんよ」

と泌々云ふ。

おきぬさんはお茶を淹れるからと云つて臺所の方へ立つて行かれた。

私は子供の機嫌を取りながら忙がしそうに働らいて居るおきぬさんの後姿をちら〳〵見た。

實用的なかたい木綿の着物に黒い目立ぬやうな小さい帶を締めて、髮のほつれ毛がふら〳〵風に動いて居るおきぬさんは時折五月蠅そうにほつれ毛をかきあげる

私は人の親になるとあゝならねばならぬのだらうか？と思つた。

お茶が湧いておきぬさんはいそ〳〵上つて來た。

「建坊お前お邪魔になつてばかり」と私の膝から子供

そとつて乳房を持たせながら。
「まああなたのお若くしてゐらつしやること」と沁々と私を見て云ふ。
私はふと二三年以前、村の或祭の夜花車の中で私達が華々しく着かざりあつて三味線を彈いた時を思ひ出した、其中におきぬさんも交つて居た。
そしてもつと美くしい着物を着て見たいと云つたのはおきぬさんだつた。
すまない事だが私は今のおきぬさんを見てふと笑つた心の中ではあつたけど。



舞ひ初め　牛込　小澤素山子

そうして私はまた思つた。私達だつて一度は斯うなるのだと。すると私は無言のうちにおきぬさんが私達を導く先生のやうに思はれて
おきぬさんも俯向いて居る、私も俯向いて居る。
ふと私の手の上には涙が落ちた。
「何にもございませんのにおまねき申してすみません」とおきぬさんは云ふ。
「いゝへ、斯うして久し振てお話しするのが樂しみてすわ。」

「だつて私はもうお婆さんですわおほゝゝ」と仍尚俯向いて笑ふ。

私は何となく其言葉が老けて居るやうに思はれた。

私しは家を出る時家庭に關した雜誌等三四冊持て出たので、いろ〳〵理想的な家庭のお話も承りたい、また私もいろ〳〵の事を樂しく話したいと思つて居たのだに雜誌を出して讀む勇氣も家庭など理窟のやうな話しする元氣もすつかりなくなつてしまつた。

二時間許りしておきぬさんの無理に止めるのも聞かず辭して出た。おきぬさんの家の前から長い田圃道が眞直に續いて、それを折れて山道に入る迄私は逃げる者のやうに走いた。

山道に入つてから私は「人の妻になるとあゝなるのか知ら?」と獨り言を云つた。

女の下等な心持を味つた。（評）

○三次夫婦

佐波靜子

「今歸つたよ」と三次は木小屋に木をおろし乍ら聲をかけると、中の間に仕事着をつくらふて居たお富が「早かつたのう」とふりむいて、又せつせと針を運んて居る、三次は椽に腰かけて、刻煙草をやり出した、秋の空は淸くすみ渡つてさつと野分が音靜かにすぎた、お富は前の田にまぐさはんでる牛を見やり又三次の方へむいて「お前さんこんな村奥は嫌になつたよ、後にせめて人つ子一人住まぬ、まあ今頃は山へ行く人も通るけれど此後は誰も來ぬおいらしみ〳〵いやになつたよ」といふ三次は腹たゝしげに「おつと何度いふても同じだ、先祖から傳はつた屋敷、今更どこへ行く所があるか、お前が嫌ならどこえでも行くがいゝ一膝たてゝ兩手て頭おさへる「はあ〳〵こんな草深けい村奥に二つも年下の亭主と一所にならうより、いけつて云へば、今日が日でも‥北海道へでも一稼ぎに行うか、西の方の村て根性がいゝから來てくれつてえ所があるから」言ひおへてせゝら笑つた、「行く〳〵つて行つたものがないつて貴樣の事だ、早いけぶつ〳〵云はんて」

二人は隙さへあれば、こんな事を云ひ合つてゐる、三次の家はお富の外に三毛が一疋居るばかり、藁ぶき屋根の、薄暗い家、白かべの落ちかゝつた土藏、軒の傾いた納屋、昔の面影が哀れに殘つてゐる、父母はとうに彼の世の人となられた、彼は二反歩の田を耕した隙々におぢから習つた桶のたが代へと桶作る事を業とし

て居る、薄曇りの日等家の後を通るとスツ〳〵とカンナかける音がする、細い霧の降る朝めくら縞の半天着て、道具箱を脊負て來た、今しも三次が向ふ鉢巻てコツン〳〵とたが入れをしてゐる時、隣の爺がくはえ煙管て「大變寒うごす」と閾の所へ腰を下して無意識に見ていると思出した樣に、お前所のお富さあ此村や近所の村々に四五人平均にあるちうから正直一方ではならんぞえ、餘程、氣を付けねえと盗人がたくさんだよ、無理もねえよ、一寸出るにもそば粉をうんと塗つてるのだものなあ」納屋に稲こいてた下女も言葉を添へて、「今年はお前のお母の三年忌てねエか、佛事をせにやならねエからそば粉を多と使ふなつて言傳て下つせエ」といふと皆て大笑三次は思ひきつた如に「なに爺やん二人共永らく此家に使てもらつた上に、隱居さんが世話まてしてくれたから出るの出すのといはんて暮したいと思つても年の巧は仕方のないもの、出たいと云へば隙をやるばかりさ、私等は如何でもがまんしるが世間の口がやかましいからのう」と年にも似ずしんみりといふた、其夜三次は一時頃まて何やらひそひそ祖母と話してゐた、三日程たつた夕方お富は一ばい大きな風呂敷に包んだものを抱えて來た、家ては夜臼潜りて近所の人も四五人來るお富も手傳をしてゐた、常から歌好きのお富は一つも出さぬ、他の人が「二の字絣着て兵兒帶しめて山へのぼるは矢崎さん」などゝあて歌、謡ふのをだまつて聞いてゐた、てお富も祖母とおそく迄話して居た翌夜十二時頃隣村の矢崎とやらいふ人の處へなかうどなしに、嫁したそうな、村の若いものはそれ見たかと云はんばかりの顏してゐる、世の風評も滿更うそてないらしい、三次は後もとらず、冬近い雨の日も木枯の吹きおろす夜も朽ちはてた納屋の中て桶の裏をたゝいて居る。

○競爭者

神戸　落山葉子

チリンチリンとベルが鳴つて、電車が動き出す。燈火の美しい大阪の市を、今更の樣になつかしみ凝平と見返つて居たけれど、だんだん見えなくなる。「オヤ」、と私の肩に、誰かの手がふれて、驚いた。「貴方何處へいらして」、ふりむくと、津村さんだ。二人は、例の昔の樣な、單純な挨拶をして、向ひ合つて、腰をかけた。箱の中は、極廣くて、静かだ。電氣燈は二人と、田舍漢の爺樣を照らして居るのみ。「ほんとにうれしいわ。淋しがつてたのですよ」、とはいつた。「私こそよ。こんないゝお伴が、あらうとは思ひもよりませんてした。」津村も、なつかしさうにか

ういつた。この三月までは、互に敵の様に、よく競争をしたものだが、今晩は、何ともいへぬなつかしい思ひがした。二人の間に、暫時、話が途絶える。津村さんは、スッパ〳〵葉巻を燻らして居る。白い美しい指には、寳石入の指環が折々光る。

「野田さん、私閑なものだからね、こんなものを、稽古したのよ、」平氣な津村さんには、只呆然と、して見て居た。

「お結構ですよ、」私はすげなくいひ放した。

「あなた、今日どこへいらしたの、」私は、改つて、とひかけた。

「名古屋へ、」「何か御用向きて」「何に遊びにてすよ、」

「面白かつたてせうね、ちつとお話してもきかして頂戴よ、」

津村さん煙草をすてゝ、「何といふことはないんですけれどね、田舍ほど、つまらないものはありませんよ、氣晴しに行つて來た許りてす。矢張住むなら都てすよ」と躰をゆりながら、例の、在學中からの、田舍排斥論がもち出された。つゞけて「お正月が濟みなしたらね、上京しようと思つてるのですよ、」「何しに、」私はとひかへした。

「無論修學にですよ。田舍では、敎へてくれる者も、伴も、ないからね、」津村の言葉は前のまゝだ。

「女子大學へ、」「え、、そんなものですわ。アハヽヽ、」空を向いて、津村さん得意さうに笑つた。御成功を、まつて居ますからね、どうぞしつかり、」私は、半嘲つた樣な心地ていつた。

「津村さん、又、煙草を燻らす。

「母樣は、おはなしなさいますか、」「行くなといふのてすけれど、母位どうてもなりますからね、」津村は母樣なんか、何てもない樣にいつた。

津村さんは、心地がわるいといつて、俯いてしまつた。二人は、無言のまゝてある。電車が、今津へつくと、津村さんは下りる。「さよなら、御機嫌よく」、と二人はいひかはした。

後は、話し相手もなく、窓にもたれても、外は眞黒だし、一人いろ〳〵と考へた。

今迄自分は、全く無意識だつた。津村さんに、どんな事を話したやら、一向思ひ出されない。あの美しい裝に、見とれて昔の仇に、負けたといふ風な、心地になつて居たのだ。

電車が、神戸につくと、直ぐ自宅にかへて、母にも何の話もせず、床に這入つた。

それから、二三日してから、澤野さんに逢つたので、先晩の事を詳しく話した所、あの人は屹度上京なんかしないわ。良人らしい人と、伴れだつて居たのに、逢ひましたよ」と澤野さんは、平氣て私にかういつたが急ぐからといふのて、其處て、別れてしまつた。

澤野さんにも、逢はないし、津村さんに端書を出したが、返事も來ない。

ふと、今朝、弟を門まて、送つて居ると、澤村さんが、かけて來た。手の新聞を、早く見よとの事、立つたまゝにひろげると、驚いた「母も母なら娘も娘」といふ題のもとに、先晩の津村さんの事が、かいてある。

隣の別莊を、貸りて居た書師と、變な間柄となつた所が。父はなし、兄弟はなしの津村さんだから、母樣が百圓程、金をやつて、二人を遊びに出したところ、便りもなく、十日十五日もたつのに、かへらぬ。心配てならずその筋へ、母が、屆出たそうだ。調べられた所、男は逃げて、津村さん一人となつて居るさうだ」といふ内容だ。私は甚く驚いた。

詩



河井酔茗選

○冬（天賞）

遠江　岸　次子

怪し、よし
さは終日夜すがら
耳馴れし落葉の音は
何時としもきかずなりけり。

靜けさよこの夕べはも
裏山の梢
軒端の梢
（はじ、ぬるて、銀杏、楓——）
皆なべて咡きひそめつ。
烈しかりし苦悶のあとと
骨だちし醜き形態を
鈍の日はなゝめに
赤色の——一縷ののぞみ。
かゝる時、この寂默を
『見よ瞬間ののちの直を』と——
（亡び行く力、光の行へ）——
偉いなる時のひゞきに
そこはかと目的なき魂の
『冬來ぬ』とまどふを見たり。

考をおろそかにせぬ人の用意を嬉しく思ふ、行きあたりばつたりに詩を作る人は澤山あるが、此種用意を持つた作家は甚だ少い、詩は決してなげやりの態度で成功するものではない（評）

○蜘蛛（地賞）

徳島縣　野　菫

美しう照つてゐた日が急に翳つた——
——空が灰色に、冷たい風が吹く
窓のもとで緋の布を縫ふてゐた——
つとめて無心に。
ふと見ると、黒い蜘蛛がごぞ〳〵と
這つて來る——いそがしう。
堪らなくなつて尺て疊をたゝいた、
すると！八つ足を等しく身につけた
——石ころみたいに縮かまつた。
又たゝいた、動かない、一秒……五
秒　十秒——
緋の布を手にとつた。
ふと見るとゐない？、恐ろしくなつ
た——夜出て來る灰色の蜘蛛。
何うしても、蜘蛛は嫌ひ。
緋布を除けた、ゐない。新聞を投げた
それても。

此度は起つた、袖の中を見た、何う
してもゐない。
何所から出て、何所へかくれたのか。

蜘蛛と云ふやつは如何にも氣味のわるい姿をしてゐる、それが隱れて分らなくなつた心持は何うしても不安だ(評)

○こゝろ（入賞）　なゝしぐさ

堪へがたきおもひかな
わが心、まことのこゝろ
あらはすをいたくもいとひ
かなしきに笑顔つくり
くるしきも秘めてぞ過ぎし
うたにさへまことの響
あらはしゝはいくつありや
あゝ我胸、
かなしきに堪ふる力を
くるしきに笑ふ心を
我にあたへし「信仰」をうらむ
胸の扉の奧をひらいて
人によるよはさのあらぬ、
女にはふさはぬこゝろ、
母にさへ妹にさへ
ゆるさぬわれ、
思ひみる廿年のこしかた、
眞實にあたゝかなりし
日、一日ありやと、――
――思へばたゞ堪へ難き心地する哉

「我」と「彼」とは何うしてもかけ離れてゐる、其間隔が遠い、遠いのは永久に遠い、弱い者は此處に煩悶する、個性あるものは煩悶を超ゆると次第に淋しくなる、あゝ若き女も亦此淋しみより免れることは出來ない(評)

【秀逸】

○玉　茨城　黑澤とよ子

落葉一つおちてゐない、奇麗な私の、
胸の坂を、美しい小い玉がころころ
と、ころげ出した、おもしろさうに。
坂は少し、急になつて來た、此度は
止りたい〳〵と、さゝやきながら、
玉を止むるやうな、小石でもあれば
といふ樣につよくころげる。
坂はだん〳〵、急になつて來た。
玉はなほ一層つよく、ころ〳〵とこ
ろげて行く、もふ玉自身の力では、
止まる事は出來なくなつた。
あゝ玉は、深いふかいなやみの、谷
におちるのだ。

巧みな作(評)

○何うぞ　羽前　なみ江

豊樣、豊樣、そんなに引ぱらないで頂
戴、どうぞ、どうぞ、苦しいから――
あれ、あれ、父樣も、伯父樣も、兄樣
も義兄樣も、皆して妾を押しつけて、
そこの穴へ深い穴へ突き落さうとな
さる、
許して下さい、許して下さい、妾は
厭です、そんな穴は厭です、厭です、
姉樣！姉樣！！止めて！助けて！！男の
方が皆して妾を…まあ姉樣！貴方
まで――

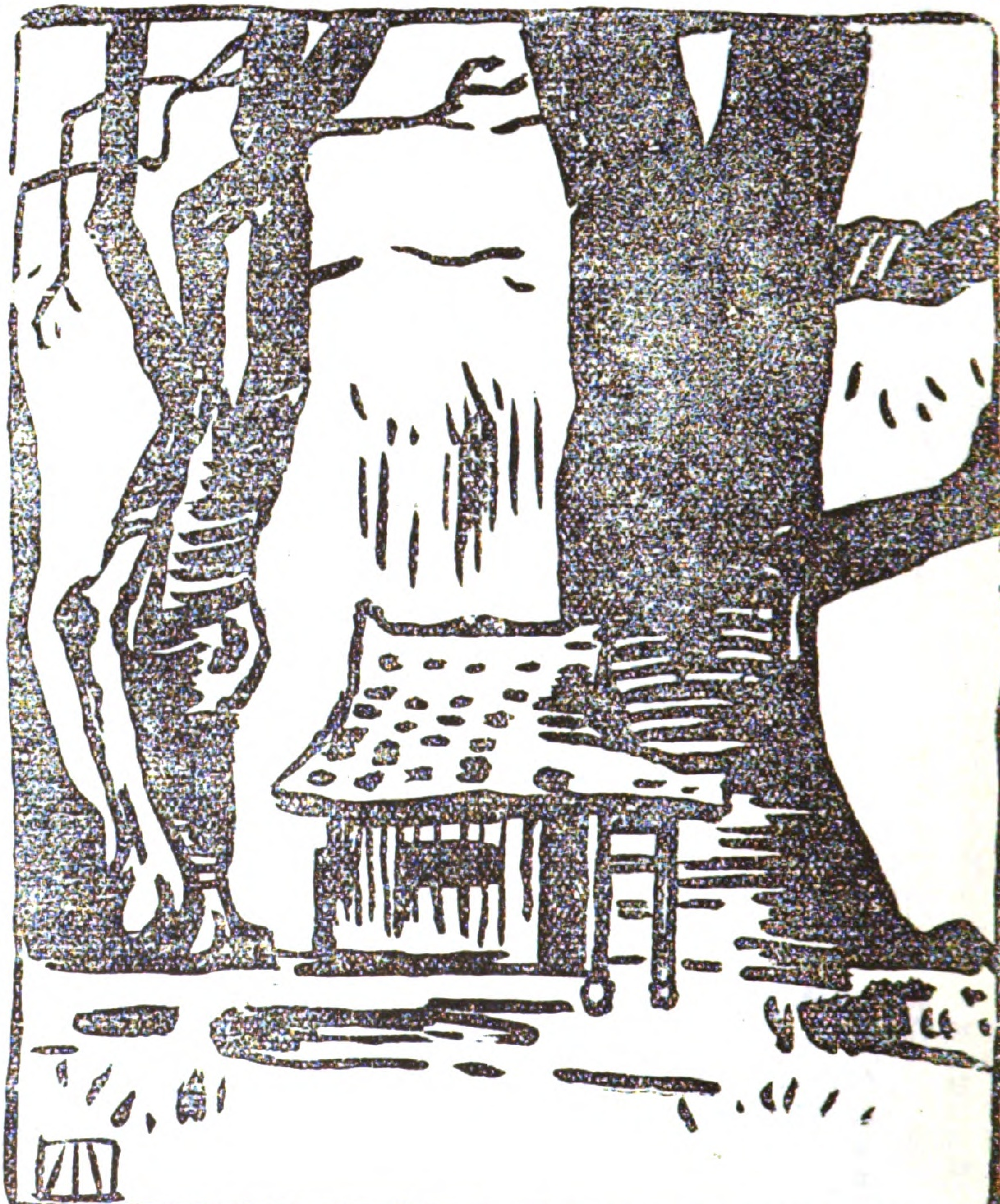
あゝどうしよう――亡母様がゐらしたら――あゝ！亡母様、亡母様あれつもう一足て――誰か來て：豐樣、豐樣、手を引くのを止して、何卒、何卒――あゝ！あ！

却つて散文詩の情趣は斯んな作から好い處を見出すかも知れない(評)

○月

越後　雲井の雁

寂しみ悲しみの空、月は眠つてゐるあゝ泣いてゐる、うるんだ目して、一色の淋しい下に私も泣いてゐる、薄黑い影の肩のあたり亂れかゝつてる毛はかすかにふるつて、露に光つてゐる。すさんで沈み行く心よ、とう／＼人は去つた、はかない夢なつかしい夢あゝ逢ない、崩るゝ雲を洩て光つてる月、眠つた人、すがつて泣いた吾をてらした月、なつかしい人の涙も、にくらしい人のうらみも、こもつた一つの眸、あゝすがつて泣きたい、すがつたま



神木　茨城　小堀みち子

ゝにねむりたい、み膝に――
今月の詩壇中、最も女らしい作(評)

○小曲

京都　井上すみ子

花咲きぬ、紅の
名も知らぬ、花こそ咲きぬ――
吹ききたる、小春の風に
青き葉と、紅き花とは
觸れあふて、何か囁く
またわかれつゝ……

他にあつた二篇は捨てゝも惜くない(評)

○敗けし魂

常陸　木村桂月

恐ろしい嫉妬と云ふ魔が私の魂を
襲ふた、魂は……怖ぢた……
怖ぢて……とうてい勝てないと悟つ
た……刹那……瞬間……
魂は僅かのすきを見て俄かに走り
出した、逃がるべく……
高い急な坂を……幾つも〳〵上つた
り下つたり……喘ぎ〳〵、やがて廣
い〳〵果しない野原についた、ふと
後ろを振り返つて見ると、魔は、も
う直ぐそばまで來てゐる、魂はあま
りの恐ろしさに震えた、
あゝ、無慘……
魂は終に負けた、
勝つた魔は勇しく勝閧あげて元來た
道に歸つて行く、
斃された魂のしかばねは、廣い野
原に、永久……
刻一刻と朽ちて行くのであらう……
……。

嫉妬と云ふことが能く表はれてゐたら好い作
てあつたらうに、少しもないから物足らぬ(評)

○硝子拭き

播磨　さゝ舟

午前の五時だ
鐵の棒のはまつた閾に上つて窓硝子
を拭く、と冷い風が襲ふてくる。足
がつめたくなる、鐵の棒の冷めたい
痛さが足から傳つて全身にしみ込む
――冷めたい。溫い血は皆奪はれて
しまつた、けれど硝子はまだふけて
ゐない。
冷めたい痛さがぢり〳〵と強くなつ
てくる、もう足がしびれて無意識の
樣――
其儘やはり硝子を拭いてゐる。
下の町には一二軒青い瓦斯燈が淋し
い光を放つてゐる。ゆふべの鋭い光
は夢の樣――只僅かに名殘を止めて
ゐる、
次第にうすらいて行く、チヂーツと
音たてゝもう薄くなつたと思ふと一
つはすうつと消えてしまつた。
薄ぐらい町に只一つゝふるひつゝ消え
ゆく青い瓦斯燈の光のみが淋しく殘
つて今にも息が切れさうにしてゐ
る。

少し散漫の嫌ひはあるが、硝子拭も、魂の或
斷面も、捉えたところは好い(評)

○眞晝の室

金澤　むらさき女

沈默ぞめぐる　我室に
痛みにうづく　神經を
今し暫く　安めんと
冥想深き　底に落つ。
風濁せる　空をすぎ
室中に入る　冷かさ
くづるゝ膝の　ほしいまゝ
心は熱く　亂がはし。
我吐く息は　波立ちて
すべての物に　つきまたふ
もだえ苦しき　束の間に
たえ得ず此に　面伏すを――。
沈默ぞめぐる　己が身に
されど心は　亂樂の
響いよ〱　高まりて
眞晝の室ぞ　痛ましき。

形の整へるに似ず內容は意外に貧弱なり（評）

○焰

深川　持田繁子

カツカと、熾んに起つてゐる火の中から、燃へ上る焰？。

トロ〱と、倦る相に……、

消へては昇り、昇りては消へ……。可厭な色だ。

宛で癩病やみの皮膚のやうな、彼の色、薄靑いやうな……、然うかと思ふと紫がかつた、可厭な色、根がある樣な、また無い樣な……、アレ〱又燃へ上つた。

あんな風にしてゐる中に、其所らぢうに火を移して仕舞ひはせぬだらうか？、あゝ氣味の不良い……彼の焰……。

火焰の恐怖は曾て平野萬里君に好い作があつた此作、稽古中のものとしては先づ分つてゐる方だ（評）

○しきゐ

和泉　金田香雲子

私は病院の大きな門をくぐつた。

玄關に並んでる七八人、生の光が薄いやうで、靑白い顏を、俯首て居る。

自分は、悲しい香りの、藥罎を受取つて、玄關から、門へ來た。

大きな門には（死に近よれ）と云ふ樣に、大きなしきいが橫たはつてゐる。

自分は、橫を向いて、またいだ。

詩らしい感じを捉えたには相違ない（評）

○泥濘

明石　田中ますえ

雨はれて、靜かなる朝なりけり、何となく……廂垂れたる、我宿の、わびしさに
其薄暗き入口を出てぬ
秋なれば、空の大海、いとゞ凪ぎ
我が胸の激浪もこれに、應じて――
吹く風の靜かなれば
心の波のいつしか和む
折しも忙しき沓のひゞき
おどろきて我にかへれば

いつしかも大道の泥濘の中に立ち居
たり車の轍深く殘りて、下駄のあと
沓の形入りみだれて、あらされし泥
濘の中にあゝ——泥濘！あゝ泥濘
仰ぐ御空の清き少女の心ならば
泥濘は幾多の男にふみ荒らされし少
女の心よ
いたましき哉
さはれど美くしき〳〵朝日はさせり
我はたゞ、うらにたちて笑みぬ
かゞやかの、日の光
泥濘の香
交々に我を笑ましむ

現代的の女性の姿を想はしめる（評）

○巨濤

衝

雨の上つた未明だつた。磯に立つて大きな波に見とれてゐた。山の樣な波、強い響、それにつれて障子が振ふのであらう、どこの家でもビリリビリリと。ドドドーと寄てきて見上る程高い高い——濤

其時浪がつまづいて底力のあるひどい響をつたへた、其拍子に眞白の泡沫が邊りへパット散る、海面は一面眞白の泡と化つた——あゝハット吾に返ると手をにぎつて私の心も波の樣に叫を立て、天に吼え地に叫むでいたのだつた——全く浪に心をあづけてた——こう思つた後は呆然して——泡水は又小さい乍らも岸にむかつてくる、パッパッと小さな口を開けて折合重なり合何か得ようと、しきりにあせつてくる早く早く、丁度私が光をとらへ樣とあせる樣に、が少しくると疲れ切つて、夢の樣に只暗い蔭をちよいちよい殘し乍ら、と其も束のま、とうとう蔭が消えた、死んだ、力足らずも行なやむで蔭さへ失せた暗い浪の心！光りを失つた私の心！自分の行路を見窮めた樣な氣がした。

細かい技巧が一寸他の人と異つてゐる（評）

○影の花

直江津町　木島磯巾着

形の好い菊の花
壁に影を描いて
どんな話をして居るのだらう
奇しき香——氣高い葉——「影」
其「影」こそ私の好きよ——
——「影」の香……「影」の葉……
ジッと見つめて居る——と
かすかに〳〵葉がゆれる
「影」の花はグラ〳〵と笑ひ出した
さうしてハラ〳〵と落花した
「影」の落花——
「影」の香——「影」の氣高さ——
「影」の落花——

神秘と云ふところまではゆきかねる（評）

○笛の力

相州　善浪達子

かゝる折りふし不圖も聞け

鈍色の空氣を搖りて、
懐しく響く笛の音
涯しなき憂への空に
たゞ一つ小さき明りを
認めたる譜の――ゆる
やかに
又ゆるやかに彼方より
……
われは引かるゝ……
其處に最と强き慰謝の
ありとし思はれて。
定まりし安らひを夢る
こゝろ――
我はその音の
波紋のなかに昔ながら
の我を見る。
淋しき譜されど懐しき
譜……
笛はなほ闇に沁み入る……。
あゝかくて我は始めて
一夜さの恐怖の外に活き能ふ――

「かくれる折しも」て澤山、前の叙景と後の叙景とは不用だから削つて了つた（評）

○火の見

兵庫縣　浪子

昔お倉米を收めて居た殿倉が青年會場となつて、米を計つてゐた門が運動場となつてゐる。運動場の一方に火の見樓が新に建てられて、何處から借りたのか買つたのか古い〳〵半鐘が掛つてゐる。――白い天蓋の下に青銹を吹いた鐘。それが、照る日も、降る日も、曇つた日も、朝も、夕も。村の空高く默然として何ものかに耳を欹てゝゐる。行き過ぎる人毎、「出來たなア」と恰度下の運動の鐵棒が出來た時と同じ事を云つて仰向いて頰笑む。火の見は矢張默然として、北風をまともに浴びて夕ぐれの空に佇つてゐる。

餘り意味が無さすぎる（評）



新春　和歌山　稗田みつ子

○道頓堀筋

大阪市　中野喜代子

青白い空、
何處からか憐に會社の笛が聞える、
力なく——艶もなき、午後四時の寂
しき日影が、淡く——濱側の屋根を
照らして居る、極めて靜かに吹く風、
五大座ののぼりを吹いて、赤や黄や
萌黄が遠く流れて行く。
人通りの烈しい巷、
歩む足音、
人力車も行けば自轉車も忙はしく行
く、日暮れ。
あゝ、小さい胸のどよめき、此の樣
を見て泣く——
孤獨の思ひ
唯一人辻を曲つて行く——、

此頃行はれる都會式の思想だけれど、如何にも[illegible]い(評)

本月の成蹟

本月の詩欄はいつもより作は深山集りました、從來の新體詩風の作と、新しい散文詩の風の作とを併せて、選出しましたが、何うも文語の詩は二三篇を除くの外、皆陳腐蕪雜で殆んどものになつて居らぬ、斯うも時勢の感化は烈しいものかと驚かされた。されば散文詩の方は成蹟が好いかと云ふに、決して然うてはない、多くは只の散文て、詩と云ふ字をつけるのに躊躇される、併し舊い文語の詩の死語ばかりを七五の調か何かて並べてあるものよりは意味がある、て比較的散文詩の方を多く取らなければならないことになるのです、　私はうたとして文語の詩も容易に滅ぶべきものてないと云ふことを信じて居りますし、且皆さん方も、もつと文語詩の稽古を積まれて宜いと思つてゐますから好い作さへあれば文語詩も大いに取りたいのです、無いから仕方がない、此れには一わたり理由のあることで孰れ機會があつたら述べてみやうと思つてゐます。それはさて置き今後詩欄に投稿する方は、文語と口語と隨意に投じて下さい、御自分で判斷が出來かぬれば各一篇づゝ即ち二種投じて下さつても差支ありませぬ、又別項の新詩句もそれに加へて下さつてよろしいのです。　なほ本欄の一部を割いて質問應答の用に供しても宜しいから、餘り漠然たる問は困りますけれど、答へて好いと思ふ問をよこして下さい(醉茗)

○絶望の花

すみれ女史

死の門の
濕めらへる扉に、根を引きて、
低首れ咲ける「絶望の
花」や、香もなく、黒にびの
小葉こそ繁れ。
その花の
露、扉を滴るゝ忍び音は、
呪はれ人の終の息、
古笛のむせび、宛然に、悲しく暗し。
あはれ、その
光なき花、風なき葉、
「希望の神」の手に摘まれ、
忘れがたみの花束や、幸なき人に。

○うきぐさ

横濱　日向葵

身は萍の花なれば
あすはいづこに漂はむ。
君とあそびし故郷は
七とせまへに捨てにけり
水黒ずめる蒼沼に
袖をひたして泣きけるも
たてがみ荒き雄馬の背を
振られて落ちし君みしも
はなれては又俤とほき
思出にのみなりけるに。
ふるさといでて七年の
いままたこゝに逢はむとは。
暫しなりとも語れかし
又も見る時を想はされば。

山の奥から流れきし
ふくべの中の拾ひ子と
幼野おどけし戯れごとも
いまは君にもなかるべし。
「寡婦の石の黒團子
三つ食つて育つた」
小僧はきみが上なりしもの。
戯れ合ひし昔の日の
おもかげいまも眉間に見ゆ。
東の方に風吹かば
葉ぞ散りしかむふるさとの
太夫櫻の碑は
苔にうづみて朽ちぬらむ。
而りし紀念のいとおほき
野はそのまゝの梟ならば。
故郷には墓人もなけれども
なみだぞ落つれ弱き心の
こひしさに――。

○香のけぶり　陸奥　あやぎく

私はどうしても此の烟りが好き‥‥
ぢつと見詰める、香の烟りを、行くへを――私
じめ〳〵と雨が降つて、私の居る室は眞實に陰氣だ、香のけぶりと私と春さんの位牌の外は誰も居ない。
一しきりスースーと烟が上つてスルーツスルーツと巧に輪を描く。
なんと好きな事、此の色。此の香――あゝかく上つて何處まで行くのだろう――

○秘密の箱　白川御殿　春子

いくら解かうとしても、堅く結へた箱の紐、どうしてもとけない、もう指に力もなくなつた、あせつて狂つて胸は激浪のやう、堕れあがつた涙あけてゐる重みに堪へない。ピッショリ濡れた袂を被つて、ヂット目を閉ぢた。
朧月夜の花の下蔭、百合の香みちた若葉の窓、そのさゝやきの宵、そのほゝゑみの日
たのしかつた過去、それは嫁ぐひそれかぎり、永久に心の奥の、秘密として堅くこの箱に封じたのだ。
誓つて必らずあけまいと閉ぢた箱をなぜ持ち出したらう、
過去の夢と葬つたかげを、なぜ私は見たいのだらう。
あゝ何とも知られぬ心の淋しみには、
昔懐しい秘密の箱！‥‥
そのまゝに抱きしめた。

○火の命　近江　小倉　壽榮

晝過ぎの秋の日光は庭をへだてた小間の屋根ふ、やさしく照らして居る。もう蔬縫にも倦々したので、冷たくもない手を火鉢にとかざした。火箸を握つて灰を、かきまはして居ると、細い々々線香を見つけた。無意識にそれを炭火と、炭火との間に入れると、三分ばかり火となつた、すぐにも灰になると思つたのに、一秒ばかりを火の命をもつて居た。
私はふと思つた、‥‥
この細い火、‥‥之も、火から灰となるまでには少しの間でも、火の命はあるのだ。

○私の戀　牛込　星野　愛子

私は戀を戀して居ると常に思つて居る。それは男か女か、はた何んな形をなして居るか、又何處に居るか、其麼具體的のもので無い、たゞ戀しいものが戀しい。
歸り路の。落葉がさら〳〵と私を追ひかけて散つてくる。それが戀しい、而し落葉では無い、矢張り眼に見えないものが戀しい。
私の向ひに美しい男が居る。けれども男が戀しくない、あゝ、私は何が戀しいのだろう。

○靜かな宵　細谷　鏡子

靜かな〳〵宵だ、
木の葉をもれて月がほのめく、
私はのぼせた面を風に吹かせて、
あてどもなく道を歩るいた、
とある黒塀の上から、
コスモスの花がヒヨッと顔を出して又かくれて終ふ、
又顔を出して往來を見て居る、
じつとそれを見つめて居ると、
靜寂――靜寂ふと胸のどこかでかう叫ぶ、
突然笑聲がきこえる、
かんばしつた女の聲もまじつて、
やがて又寂としてしまふ、
月はます〳〵さえてコスモスは依然としてのぞいたりかくれたりして居る。

○のこぎり　越後　佐藤　須子

老人と若い男と並んで頻りと鋸の刃を削つて居る、キッ〳〵と少さいけれど肺腑に食ひ入るやうな音、妾の胸は思ふ存分刺さゝれて終つた、乾度泣いて居るんだ、鋸が――、

此度は横にしてズーイ〳〵と一心にひく、パラ〳〵と鐵の屑が散る。暫くして鋸は磨き上げられて、隅の方へ立てかけられた、ヒカ〳〵光る鋸は戀しさうに其屑を見て居るやうだ、二人はけろりとした顔して眺めて居る。

○折れ櫛　福岡　田中白萩

朗かに晴れ渡つた秋の午下り、カラ〳〵と桐の葉はしきりに落る、椽に立つてぬけ上つた髪を、撫で付け〳〵見て居たら、ふと手が櫛に障つた、そつと取つて見た、あら――折れて居る、何時の間にか、朝さしたなり如何もしないに、ま二つに
あら不思議、私は何とはなしにがつかりした。

○雨　京都府　松原さぬ子

三角の屋根と屋根との重なりを、いとしめやかに覆ふ黄昏の、すゝけ障子の色した、灰色の雲よりしとしとと十一月の雨がそゝぎ瓦より落ちる音のない雨の水が、あくた桶に忍び音をたてて、見はれ人の終の思のやうに悲しく啼くむせびあふ。

○しみ　しのぶ子

眞白い牛紙をスーッとのべて、戀人に送る手紙をかこうと思つたらオヤマアどうしたんだらふ。インキがしみてまわりがぐるつとにじんで居た。無意識にじつとみつめてゐた。そして考へた、誰がこんなにインキをこぼしてしみをこしらへたんだらふと思つて。

○森　信濃　衆影子

夕暮に黯んで見ゆるあの森に、
只おそろしい〳〵と思つて居たあの森に、
私はいつか來てしまつた。
さつとひとしきり風がふいて、
ざわ〳〵といやな音がして落葉する。
地に落ちた葉は風につれてころ〳〵と輪をゑがいて居る、
いつとまるのだろう、
はてがない、
またひとしきり、
幾千とも知れない葉が、
意味ある如くをどつて居る。
私は只無心に見つめる、
淋しいとも何んともなく、

○初冬　西多摩　三ケ島よし子

高い山と山との間に一ところ、乳房なりに東の空が地平線まで垂れてゐる。
それからちやうど山の外を圍んでゐる堤のやうな雲が、だん〳〵紫がかつてくづれると思ふと、とう〳〵堤は破れて、紅の洪水が漲つたかのやうに、蒼空は眞紅だ。
紅葉に染めつくした山が黒ずんで見えて、今無意識に手に觸つてゐた山茶花の花瓣が汚く見えて、
私の心は大きい、新らしい、美しい清い紅ゐに接した。
そして何かうたひながら鳥のやうに飛ばうか、飛ばうかとためらつてゐるうちに、
嶺を撫でてゐた桃色の雲が白けて、寢起の顏へ初冬の朝日がさびしく光をさした。

○お百度　長野市　五月女

水天宮前を通ると、品のよい奥さんらしい人が小よりを左の手に二つに別けて澤山持つて居る。
うつ向きながら一間位の門前を、あちらへ行つては丁寧に頭を下げて、こちらへ來ては格子へ小ョリを落して、何か口の中で一心に云ふて又頭を下げる。
お百度踏だなと想つた。
それにしても水の神樣にお百度踏むとは何んだか不思議だ。
其人の人が水の爲めに、命を取りそこれ樣として居るのか、晝中なんだか恥しい樣な氣がするが、恥しくないのかしら、私なら恥しくて晝間中出來ない。
と想つていつか從姉の家に來た、かへりにはまだお百度を踏んで居た、
別けてあつた小ョリは一つになつたア、一一個かだなと、思つた

○廣野　函館　谷内ふさ子

「こわい、こわい……」と子は叫んだ。
「こわい！」と親も叫んだ。
二人は喘ぎ喘ぎ野を辿つてゐる。
暮の薄い霧が野をはつた。
行途の黒い森の上を、黒い鳥が輪を描いて飛んでゐる。
其の先きには河がある。藪がある。
杜がある。それを越した遠い高い野の果に、小さな火が點つてる。
「腹が空いた――腹が空いた」と子がまた叫んだ
「あゝ苦しい……」と親も叫んだ。空へ向つて
……
二人は又とぼ〳〵と野を辿つた。

暮の靄が野を覆つた。小さな火が遠い野の極に點つてる。

○黄楊の髮櫛　下谷　平野柳子

小窓から往來を見て居る。と、黄楊の髮櫛が落ちて居る。新らしいから目に付きさうなものだが、誰一人として拾ふ者が無い。踏まれて仕舞やあしないかと思ふと人の通ほる度にはつとする。自分が拾つて仕舞はうかと思ふが恐ろしいやうな氣がしてそうも行か無い。かれこれする内に隣の女房が出て、不圖こゞんでそれを拾つた。

○露　四日市　辻一蘆

どの葉にも〳〵靈を宿して居る。神祕もない象徴もない靈は、たゞ朝の低い鈍い光を受けて白う輝いて居る。極めて靜かな野の中に、私は唯一人朝日を受けて立つて居る。日は上つた。――と露は玉の樣に輝き始めた。水晶の樣に輝いた露は、私の目を射る。唯一人の私の目を射る。私は目を閉ぢた、暫時して開いて見た、又目を射る。あゝしかし、暫時して其露は消えた。

○油のないランプ　岩代　佐藤安子

幾度も心を出したがどうしても暗い、見て居るとだん〳〵細くなつて行く樣だ。強くネジを廻したら、ま黒くなつたので思はず向をかへたら赤い燃え殘りの心から銅色の光りがハケて掃いた樣に別れて輝く。ボツ〳〵と鳴り出した。消したくはないので、一層強くねじつたら、先きが灰色になつて光りがないが兩側から黄色い淡い光が出た。ホヤが黑くなつて來た。消え行くのを見て居たくないので、プツト吹いて見たら直ぐに消え樣と思つたのが案外に未だ光つて居る。壺の中に火がは入つてはと、今度は、本氣になつて吹いた。ユラリと青い光りが上つて暗くなつた。

○菊賣　名古屋　板津とし

凩の町に、寒い樣なカンテラを灯して、薫高い、菊の花も埃に塗れて、白くなつてる。其の暗いカンテラの影にみづばなをたらした、いたいけな子がうづくまつてゐる。凩は今町を荒れてゐる。――寒いカンテラは黑い油煙を揚げた。石の樣になつた菊賣は、寒むさうに手を出して、ランプの心を出した。そして嚏を一つした。もう町は暮れて了つた、凩が一しきり。――菊賣の灯が一つ寒う。――

○落葉　信濃　紅百合

さらさら、さらさらと葉が落ちる。夕暮だ。澄んだ空は乳色に變つて、暗はひしひしと迫つて來る。身にしみる冷い風が、さあつと吹く度に、さらさら、さらさらと葉が落ちる。何か囁く樣だ。ぢつと耳をすます。と、紅いのが、

「さらばでござります、華な望も遂げました、嬉しい思を抱いて元の地に歸りまする――」

「さらばでござりまする、燃ゆる望に追ひ付かふ追ひ付ふとする内に血は枯れ肉はうせて仕舞ました、もう生に耐へられませぬ、元の土に歸りまする――」と云つたのが。

今度は黄なのが囁いた。

「紅い望の岸は眼の前でござりますにそれを捨てて元の土に歸るのでござりますか、眼の前の望を捨て――」どつと風が吹いた。紅いのも黄なのも腐ちたのも一所にくるくると舞て、又元の靜寂に返つた。暗はますます迫つて來る。

○たゞ一つ　丹後　中澤いし子

床についてからといふもの、毎日毎夜いろ〳〵と祈禱の文句を上手に考へて、早く病のなほるやう、かずかずの願ひをたてたけれども、恰度曉方の星のやうに、一つ一つ空しくなつてしまつて、今はたつた一つ、私の最も心にかゝる――小さな願ひのすべてを合せたよりも大切な――最後の希望ばかりが、さびしく心細く、私の胸中を僅かに照らして居る。

○霜の朝　備中　篠原しげ子

池の上の板橋に眞白い霜が朝日に一面銀と輝いて居る、此美しい上を、むざ〳〵踏んで渡るのが惜しくて私は暫し立たずんだ。と、何處の子か目のクリ〳〵した男の子が走り

來て惜しげもなう踏んで渡つた、えい、と私も
歩み進めて渡つた、ふり歸つて見ると小さい草
履の跡と、二の字の下駄の跡が二列について居
る。
ドブン池に音がした、と思ふと彼の子が岸に立
つて石を投げて居る、輪波がだん〳〵大きく廣
がつて行くと、さかさまに映つて居る岸の一つ
家がゆらぐ、破れた障子がかえりそうに、軒の
つるし柿が落ちそうに、ゆらぐ〳〵、あゝ私の身
體もゆらぐ、一緒に引き込まれそうだ、

○野の抱擁　小梅子

行く秋の夕べ、赤い花びらは萎えたけれど、若
い血しほは冷えやうともしない、落葉した梢の
上には四つの瞳に似た星の光り。
「別れませう」と男は女の手を握つた、野の抱き
しめに眠るやうな戀の歌を聞きながら、――

○石垣　三島遠山　靈子

男が裏通りの石崖に倚りかゝつてゐる――背い
顔した若い男だ。
うなだれた面を時々擧げては、向ふをしきりに
瞶めて居る、その眉の間に何か不安の色が浮い
てゐるやうだ。
男は思ひ切つたやうに、しほ〳〵と歩き出して
もと來た道へ引き返した、その跡に野菊が咲い
て、萎れた花が重なり合つて――悲しい接吻を
してゐるのだらう。
暫くして男はまた以前の石崖の所を通つた、今
度は一人じやない、庇髮の女の手を握つて――
笑ひながらさも嬉しそうな顔をして居た。….
五分間で變化したのは面白いことだと想つた。
野菊はやつぱり接吻して居る。

○暗　濱松　平岩　白菊

筆を持つてもう二十分になるが何うしても腦が
ムシヤ〳〵して筆が走らぬ齒をくひしばつて目
を閉た
氷つた路をカラ〳〵來る下駄の音こがらしに電
線がピユー〳〵うなるガタ〳〵戸を閉る響が耳
に付く靜かに目を開くと
じい〳〵とランプが燃えて居るが油がつきたら
しい
室内の暗い影がダン〳〵ランプを圍んでくる
ねじを捲き上げた
ぽーつと黑い煙をたてゝ
一度にしんが燃た光りに暗い影は消えた
又すぐ暗がおほうてくる
思ひきつてもう一度ねじた
ぽーつと光つたが最後
消たあとが蝋燭の燃殘りの如に
赤くシンが燃えてゐる
私の意識もいつとなく消てしまつた、
だめだ！と思つて筆を投た。

○別れし後　肥後　池邊　しづ

お別れしてから、
今日でやつとまだ三日だのに、
もう十年も、二十年も逢わない樣な氣がする、
そして何とも〳〵云えない淋しさ、今迄嘗て覺
えない――
それは何故だか、妾にも分らない。
けれど、けれど、其の淋しい中にも瞬間も絶え
ず、君の面影が….
あの輝いた、表情に富んが眼――
あゝ妾はふとして、明日も明後日もいつまで過
ごさればならぬのか、と思えば、あゝ妾は眞實に
苦しい
痩せる樣だ
なまじひに、知らなかつたならばと今では却つ
て怨めしい

○黑船　北海道　薫子

ぼぼう　―ぼぼう―
暗から暗へ消えて行くあの黑船、
あゝと私はあせつた、
岸に返せ　――岸にかへせ――
私の心の叫び、
おーいおーい、聲の出る限り力のあらん限り、
手で招いて一生懸命呼んで見た、聞えないのか
しら。
船はいよいよ暗に行く、浪は高い、
私はもう氣も狂ひそう、
あゝして進んでいつたなら、「幾十人の同胞が、
鯨や鰐の餌食になつてしまふだろう、嗚呼舟の
内の誰れかゞ、一人でも、一人でも――
氣づかないのかしら、
氣が氣でない。
今度は側の小高い丘に立つて、叫んで見た。ハ
ンカチーフを一心にふつた、聲もかれて血もほ
とばしる迄、黑い船は、稽暗に向つて速力を早め
る、私はもう茫として無心に手巾を引きさいた、
そして行く手の暗を凝視した
黑い船はやがて影も形も――

新詩句に就いて

新詩句とは假に名づけたので、一句の詩を意味するのです、近頃の俳句は如何にも形式に流れて、活氣なく、新時代の藝術として何程の價値があらうかと疑はれるやうですから、玆に俳句に對する謀叛を起した譯です。若し之が成功したら俳句に代るべきものかと思ひます、併し俳句には歴史があり、根抵があり、遽に破壞されべきものではありませんから、われ〳〵は好んで俳句を目の敵にする必要を認めませぬ、玆に新詩句と名づけたる一つの新しい試みに向ひさへすれば宜しいのです。

選者は素より皆さんも經驗の無い事ですから、何んなものを作つて好いか一寸方向に迷ふのは無理のないことです、選者の意は一句の中に、主觀でも、客觀でも、從來に見ないやうな新しい思想、又新しい技巧が表はれて居れば宜いと云ふのです。川柳のやうになつてもいけない、俳句のやうになつてもいけない、此二つの習慣から脱して、短い一句の詩を試みたいと思ふのです、これは存外むづかしいことかも知れませんが、俳句が今日迄て命を保つた所以を考へてみると、詩壇の一方にあつても好い試みかと思はれるのです。

形式は何うも口語が宜いやうです、何分短い言語の中に或る意味を含ませるのですから、口語文語と云ふやうな差別はつかないかも知れません、つかなくても可い。

今度は初めのことですから、句の數も四五百しか集りませんし、多くは平凡、無意味、俳句、川柳の類が多くて、新詩句として大いに稱揚するに足るやうなものを見當りません、其中でも少しは苦心されたかと思ふ作を擧げてみませう。

燥な夢、レモンの花を抱いて　遙子
から風が吹く、拔毛が枯枝にもつれてゐる　よし子
淋しい町に初めて美くしい火を見た　さゝ舟
並木の梢の中から鳥が鳴いた　濱越子
空の月をあんなに冷たく誰がした　麗子

取ればこんなものですが、まだ〳〵調子もついて居らず、思想も然う感服するほどではない、更に此等より落ちるかと思はれる作を示してみますと

潮の香、波の音、封じて友に送りたい　しのぶ
波頭、甘い戀の追憶が砕けてゐる　ふみ子
秋風が吹く、夜明方、月はまだ殘つてゐる　とよ子
白臘のやうな涙――あゝ瘦せた　よし子
青い葉が流れる、遠くて鳥が啼く　白菊

此等の句は今少し考へを直すと、何うにか態を成し

たてせう。それから澤山來た句は何う云ふ風か、見本的に少し並べてみませう。

不安、恐怖、恐寒、戀だ、戀だ
初日出天女は雲の上て舞ふてせう
溝、底の知れぬ濁りどす黒い泡を吹出した
南山も北山も繪具を引くり返したやうだ
君と歩みて人あやしまぬ悲しさは

斯う云ふ作は新詩句と云ふものが、何んな風にすれば好いか、少しは分つてゐる人には相違ないが、何分これては公表しかねます、全然取りえのないと云ふのてはないが餘りに投げやりてす。

初蛙苗代の月くもるなり
新蕎や猿曳の太鼓萬歳の鼓
午前四時船火は爽き霧の川

など丶云ふのは何うしても俳句てす、五七五と句を切ると俳句に近よります、なるたけ俳句に近よらぬやう苦心しなければ、新しく試みる價値はありません、それには口語を用ゆるのが宜いのてす。

若水と云ふも一日かぎりなり
朝毎に逢ふて辭儀する人も出來
あゝ私、正月過ぎりや水仕業
自炊生皿を洗はぬ三日なり
田舍者吹いて元氣を消さんとし

斯う云ふのは僞りなしの川柳です、川柳と云ふものも面白いものですが、明治の文藝として再興しそこなひました、機智、頓才の働く人は川柳へ持つてゆく才を新詩句に持つて來て、新しい諷刺、滑稽を含ませるのも宜からうと思ひます、それが川柳の型にはまつては何うもお仲間入がむづかしい。

更に斯う云ふのがあります

トーフイ、向ふのおかみさんが皿もつて飛んて出た
これからはお炬燵て雜誌が讀まれます
世間に私ほど幸福者はない

偖て右に述べたやうな譯て、實際新詩句の試みはむづかしいのてす、短いから易いと思へば間違ひて、短いだけに、パッとした印象を與へる作をこしらへねばなりません、追々傑作も出ることてせうが、何事も然う初期からうまく行くものてはありませんから、本誌が卒先して此れを初めただけても、一つの誇りとして大いに皆さんと研究し、試作し上達したいものてす。折角諸孃が苦心して作られたものを、勝手に引拔いて批評の材料に供したのは甚だ罪深い業てした、是も一に此の新詩句欄を光彩あらしめたい念から起つたことてすから恕して下さい。



散文

編輯局選

○あゝ殘せる友の一人

信濃　はゝき木

房乃樣、今南から列車がくるところです、あの時、ああ、あの時私の乘つて來た時間です。だら〳〵と坂になつてゐる街、あそこを登りつめた處でもう袂別ちましたわね、私一歩は一歩と悲しい思ひがぞく〳〵と迫つて來て……幾度振り向いて見ても立つてゐらした、そのたびにおぢぎした。あの明神樣が見えるあたりになつた時――角になつて西へ曲る處で最後のおぢぎ……。

兩側の店の人々は狂女だと思つたてせう、今でもハッとしますの、泪はシン〳〵と湧いてくるし、頭の後ろの方からしびれたやうに感じました、

この二人の袂別、たゞ女二人の別れだつたけれど、まア、この二人の胸と胸とを頷してゐる或るもの丶影、それに泣いてゐる二人、だれがだれがこの胸の裡の大きく深く鋭どい秘密知つてゐませう、子房乃樣!!

九一日に滿たぬ二人の對座、私は今でもあの時の心持てゐます、忘れられるものてすか、いゝえ決して〳〵

夜、はじめての諏訪の夜、しかも秋てしたわね房乃樣わざと燈火つけないで暗くなつてゆくまゝにまかして無言の對座、黒い北山にたゞ三つ電燈の見えてゐた××館、そして星が屋根の間から七つばかり見えた。

あの二人の無言の時の事を考へて見ましても、どうしてもわかりません、あなただつて同じてせう。

一所に寐かしていたゞいてもつともつと語らうと樂しんてゐたのに、それはあのわけて、ゆるされなかつたてせう、私大てい知りましたから悲しかつたけれど「何よございますよ、少しおあかり細めてゐらして下さいませ」と申上げましたつたわね。

朝!!　あゝ日の出前のあの時、○○○○の靈と白木の

お墓標見た時――房乃樣、あなたは不幸なのね
（ごめんなさいませまたこんなに申して）
あの時の感じはまたゆつくり申上げます。はじめて逢つたのにもう決して二度とはおたづねも出來ないのに、しかも父樣の御墓前へくるやうにだんだんと仕向けられた運びを思ふと私何だか恐ろしかつたのでした、不思議ねえ、と云つた私の目の色を、あなたおわかりなかつて？

　お墓は山でしたわね、
歸る時に見た諏訪の平、あゝ言葉もありませぬ今でもたゞこのやうな、ひろい胸があるなら、みんな〳〵ひゞき、も、いろ、も、そのまゝにたゝみこんで仕まッて置かう、詩といふものに對してわがとるべき態度敎へられた事があります。
花世樣戀しかつた、あゝ花世樣がゐらしたらと….。
歸途、ピカ〳〵光る湖水の波を見た時、もみぢて燃え立つやうになつてゐたあの小坂の觀音境内を見た時、あゝあの重々しいひゞきのある、「氷の湖」の詩が自づと口ばしりました。
もつとかきたいけれど、今心があせつてゐていけませぬ。
南三里の峠一ッ越ゆれば二里の彼方は、戀しいお宅のある町が見えますのに……あの山岳は二人をさきました、いゝえ山はどうでもなりますけれど、二人をさきわけてゐる目に見えないある恐ろしい力。
それだつてくゞりぬければいゝのでせうけれど、お互に弱いのねえ、この權威を恐れぬやうになるまでにはまだ〳〵辛いことが澤山ある、しかしそれが私たちの眞に價値ある生活ではありますまいか。
そんな事いろ〳〵思ふと、また悲しくなつていけない、またのちにくわしく申上げませう。
あの事、どうぞ御自重あそばしてくれ〳〵も。（特別賞）

女二人――無言の對座――意味無く聞き棄てにすればそれまでゞすが、私は玆に深い〳〵意味を見出さうとしました、何故でせう、此文章のところ〳〵に龍の鱗の閃めくやうに閃めいてゐる或る思想、其れが或る女と或る女との間に以心傳心に通じたとすれば、私は現代に現はれたる若き女の上に一道の光明を認めるのです、一人が一人を見出したと云ふことは既に思潮の成立した證據です、あゝ二人の女、玆に二人の女が五組も出來れば世の中は動きます、天下幾許の迷へる女に代つて、女二人の力をお合せなさい（評）

○晝の雨（天賞）

東京　鈴木春子

たとはゞ賴りないうらぶれの子が、病の床に咽び泣くやうな雨の音……單純な青葉勝の庭も處々赤く黃いろく色彩せられてゐるが、何となくから艶消しガラスを透かして見たやうな、にぶい光をもつてゐて、決して、いつもの樣な美感は得られぬ。

けれ共、流石は晝である。淋しいとは云ひ乍ら、何處となく明るい光の流れてゐるやうな頼もしげな處があつて、夕暮のやうな物悲しさうな趣きとは違ふ。

幾千線の白い糸は、何ともいへぬ優しいなかに寂のある響を立てゝ、しのびしのびに木の葉をうつ。木の葉は、しつとりと濡れて、綠の葉は、處々薄い、うすい銀色に光つてゐる。光らぬところは、濃い綠に默してゐる。さながら闇が潜んでゐる樣に、そして、この闇の部分の方が大層多い。夜は此處から次第に四邊に擴がつて行くのじやあるまいか。氣の故か葉の銀色が一層に薄れてきたやうな感じがする。

地には、幾つもの小さな水溜りが、死人の樣な灰色の空と、其をみまもる人の樣な力ない木々の影とを抱いて、心細げに、また恐ろしさうに絶えずわなゝいてゐる。

褐色にちゞれたトチの葉が、雨にひるがへりながら時々ばさりと落ちる。さびしい……私は思はずかうつぶやいた。

印象的に描いてあつて、それが又新しい感じを喚起します、此君の振ふ時は今、選者は多大の望を囑してゐます（評）

○春を迎ふる綠門（地賞）

徳島縣　吉田紫花

門松は冥土の旅の一里塚とやら、考へて見れば儚い譯、それ故にてはございませんが、妾の家では毎年門松の代りに簡單な綠門を拵へるのでございます、材料はいつも裏白と定めて居ます、擔任者は門前の長といふ爺や、元氣の好い昔氣質、血のふき出るとびの手を痛さうにもせず三十何年此の綠門を拵へては屠蘇酒に醉つて年を積んで來たのでございます、大晦日の朝、爺やが裏の山から裏白を莚フゴに擔いて歸るのを見付けると、もう近所の子守や子供は寄り集つて來て、出來上るまで御飯も忘れて樂しさうに見て居る、新暦は他所事の樣にしか思つてゐない田舍の子供の頭にも、幾分か新らしい感じがほのめくのでせう、土臺が出來上ると妾が自慢のお細工の紅白三十輪程の紙製の牡丹を配置よく配り合してさします、するとお父樣が眼鏡を拭きつゝ出來たなといつて出て來られる、元日の未明にはお父樣が明治何十何年と墨新らしう書いた額を綠門に掲げます、其新らしい年號の文字が綠新らしい裏白、艶やかに赤い橙に照り合つて一入長閑に新らしい感じがいたします、此の綠門を拵へる時思ひ出されるのはお母さんがあつた時、お煮メのお芋を洗つた赤い手を拭いひ裏の方から出て來て、マア早きれいに出來ましたナ寒いのにと見ていらしてはお勝手の方が氣になつて急に走り込んで行く後姿、朝結つた丸髷艶やかに

水色の手柄迄懐しかつたが、今は儚ない思ひ出に過ぎませぬ。

爺やも裏白をさしつゝ手傳つて居る妾を相手に、お母さんの事を云ひ出して、自分の長壽を過分の樣に云つてゐる質朴さが嬉しいので、お爺さんいつまでも宅の此の門を掖へて頂戴よ、一年でも長くねといふと、有難う存じます、何でもいけます迄と思つて元氣を出して居りますとしみ〴〵云ふ、妾は眞心から爺やの長壽を祈るのでございます。

ア、迎春の緣門、緣門といへば云ふものゝ、見る影もなき粗末なものではございますが、何事も變り安くうつり行く世に年久しう例變らぬ我家の緣門、分餘の福を迎えるとての門ではございませぬ、虛榮を望む門でも更にない、只只、丁度眞東向きの我家、元日の晨、此の緣門の正面の松原の間から金波銀波に乘つて華やかにさし出る初日の光を拜しては賤が伏家も隔てなきあまねき惠みを思ひ、治まる御代、榮え行く代の目出度さが身にしみるのでございます。

あなたは好い文才を持つてゐます、健實な思想と共に吾が誌上また一つの花です、願くば本年の散文欄を飾つて下さい（評）

○覺めたる惑ひ（入賞）

横濱　日向葵

網に懸つてなほ跪きつゝ、逃れやうと努める小蝶の空しい努力が丁度私の身の上なのだ。今こそ自由を欲する心は遠く天に海に果てもなく馳るも儘だけれど、つひには逃れぬ運命が私を待つてゐる。若い情いをとめの生涯を終へたときには、泣くも跪くも遂には葬り去られる果敢ない私なのだらう。悲しく暗かるべき末を思つては、幾度泣いたか煩ひに耐えない。緋絹綾衣を膝に散らして、美衣と髮飾とに生くる友の花やかな姿と心がいつそ妬しい。好んで寂寥を望むのぢやないのだけれど、いつかわが世は明るい國をはるかに遠ざかつて居たのだもの、ふたゝび明るいもとに歸りうべき身ぢやない。まことに人は私に辛かつた。わが涙を嘲笑ふた人のその蔑みの口元は、忘られぬ心の傷となつて永く殘つた。憤怨はむら〳〵と起つて、思はず血汐は頬にのぼる。

我につらかりし人の情は永久までも忘れるな、他に賴るな、と再びは異性に首は屈すまじき反抗の叫びは、鋭く高い。いまは人を懐ふとも云はない、よし昨日迄の私は弱くとも、今は覺めた私なのだ、冷たい心の自分なのだ。しかしさめて歩み續けるべく、新らしきわが行くみちは何處にあらう。あゝ誰れか云ふ憎い言葉汝はよわい女ぢやないか。」あゝおもへばまことに私は弱い女少女の身。飽く〳〵までも世と鬪ふべく獨り首出し

た勇ましい意志も果てを思へば悲しいさびしい。止まるを知らぬ想ひなら、走るがまゝにはしらしてみたい、山を拔き海を渉り昂然と歩む自由の精神が得られるならば、噎戀に死するばかりが若いいのちぢやないのだ。努めやう、たゞつとめやう。

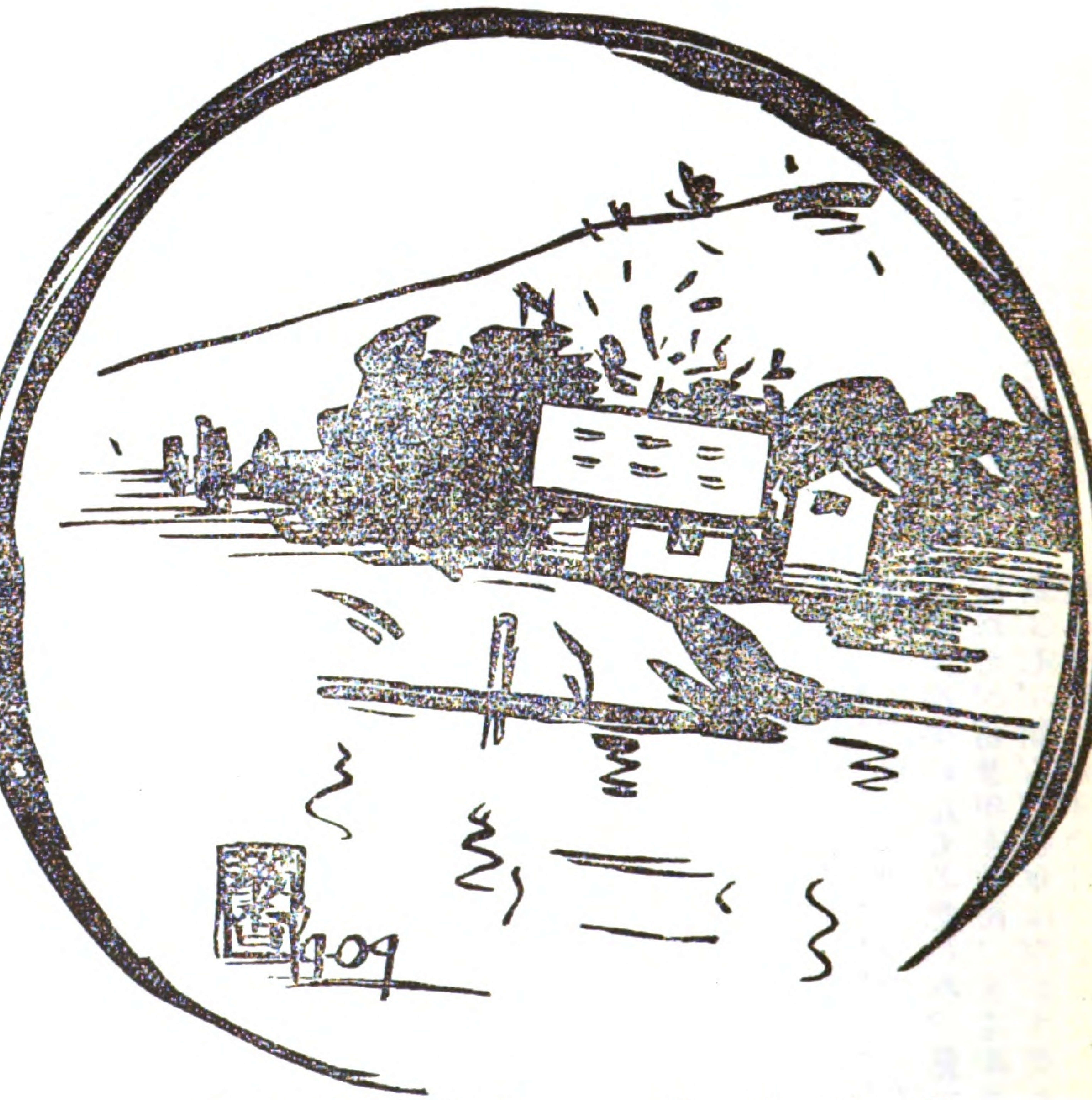
張りつめた情の高潮は確に響きました、文字あるもの、生命は此處で無くて何處にありませう（評）

【秀逸】

○聞えぬ人

白山御殿　春子

耳鼻咽喉科の診察室だ、中央のテーブルに博士は次ぎ〳〵に出る患者を、一々容



秋の川邊　青森　稲垣かほる

體を聞き診察してゐられる、五六人の看護婦は眞白な袖を高く括つて、かひ〳〵しく働いてゐる、鼻を洗ふたび、耳を掃ふたび、脱脂綿を取換へる、消毒する、ガーゼをとる、一時の隙なしだ。アルコールランプが燃えて湯氣がスーと立ち上ぼつてゐる。

「切らなくてもいゝてせうか」一人の鼻患者は椅子を立ちながら……、「うむ、すむかも知れない、明日も一度來て見なさい」博士は口にくはへた眼鏡をとり

ながら側の人に病狀を書かせる。

二十一二許りの質朴な田舍者らしい男、連れてきたのはその父親、「耳が聞えませんので」と丁寧にお辭儀をした、八歳の時遊んで居て、何ういふはづみか高い崖から落ちましたが、その晩から激しい熱で一週間といふものまるつきり夢中でござりやした、そしてそのまゝ耳が遠くなりまして」と語りました。田舍ではといふのでわざ／＼京都の大學病院にも連れて行つたが到底なほる見込は無いといはれた、大坂の名高い醫者にも駄目だといはれた、しかし息子は何とかして聞える樣になりたいと云つてきかない、出來ないまでも上京して診察して頂いたらまたあきらめ樣もあらうかと來たのであるといふ。博士は當時の發熱の樣子を細々ときいて診察した、音を立てゝ耳へよせた、一向響かないやうす、またならした、まだ感じがないらしい。紙に「キコエルカ」と書いて示した、彼は初めて頭をふつた、「駄目てせうか、手術をしましても」父親はこゝぞと熱心、息子は不安の色に博士の顏を見つめてゐる、「とても望みはない、聽神經が無くなつて居るもの、療治の仕樣がない、可憐さうだけれど、あきらめて國へ歸つて、適當な職業をとらせるがよからう、」「はい、ありがたうムります、何卒息子の胸に落ちますやうにあなた樣から」博士は紙へ書いた、「リヨウジシテモキコエルヤウニハナラヌ」ペンの動く先きを一心に見つめて居る息子、永い生涯を、浮くか沈むか、實にこの身にとつてはこの一言が命だのだ、あゝ無慘な宣告！たとひ一瞬間でも萬一の望みをつないでゐたもとのまゝてあらせたいと思つた、「ワカツタカ」又書きたして示した、やうやくに頷いた彼れの顏には、甚しい絕望の色が漂つた。

斯う云ふ境もどん／＼拓いて行けば決してわが散文は一本調子に流れる憂はないのです、勿論若き女子の散文は、主觀的のものに傾くのが當然ですけれど、斯うした世相の一部にも眼を注いて、新しい散文の世界を廣くすることは確に皆さんの務めです（評）

○樹に靠りて　赤坂靜江

私は靜かにとある松の幹によつて立つた。邊は未だ薄靄が立ち籠めて、夢の樣に新らしき年が眠つて居る。

大古此の世界が始めて創られた時の模樣は、こんなではなかつたらふか、希臘の神話に聞く、霧に隱れて建てられたと云ふトロイの街が、其の美しい濃綠の葉づたに覆れた城壁や、高い尖塔の頂きを始めて現したのも、こんな朝では無かつたらふか。

此の霧の奥に凡ての悲しみ、患ひ、歎きの暗らい影は隱れて、舊き年と共に、永遠に過去のものと成つて仕舞ふし、新らしき年はやがて覺め樣として居る。

隱れた幹は幾年の月日を經たか、續く林に只一本高い

樹て、直ぐ足元を細い流れがゆるく流れて居る。片手は樹により片手は、日を重ねた下着の胸に長く垂れたはこせこの飾鎖をまさぐりながら、じいと耳をすますと、幽かに初鶏の聲が聞える。

私の心は限りない平和に充たされて、我が爲に祝福されたる此新年を感謝した。靜かと云ふて今迄これ程の靜けさに遇はなかつた。響と云ふては幽かな小川のせゝらぎと朝風の渡る許り。

幾千本の林の松が、遠く〳〵の果からでも來る樣な風に、一時にサーッとどよめいて又、何處ともなく消えてゆく其響を聞いて、不斗パトモスの島に得た默示を思ふた、地中海中の一孤島に只一人立つて、靜かな海の果に沈む光、輝き出づる曙光を眺めたヨハネの胸にはどんな思が湧いたらふ。それは海、これは山、まして私は高い尊い自然の聲を聞く力はない、無いけれど、今葬られた過去と覺め樣とする新らしき年との間に立ち、或る聲を確にきいたと思ふ。其れが何かは知らない、只心の底に忘れられぬ聲を聞いたと思ふ。

空の薄墨には紅が微にさして、次第に擴つて紫の雲を隅どる金色眩ゆく、東の空高く鴉が一羽ゆるく一線に飛んで行く。私は長い振りの袖の地に引く迄俯して、清い川水を掬ふて口にした。そして靜かに立ち上る其瞬時、金銀琥珀の雲が一時に東に飛んで、紫雲の分くると見る間、ゆら〳〵と上る初日の影！重き高嶺の頭は何時か下つて、幸多き年の祝福を祈る私の胸には、若き十八の溢れ出づる希望輝かしく、萬象さめし朝の空、新らしき響は林に充ちて――。

技巧も確かです、修養もある、眞目も具はつてゐる、つまり品格の高い文章です（評）

○秋

伊藤よしえ

落葉かき

雜草に交つて黄い花や白い花が、秋の透き迊つた空氣にたわ〳〵して居る須賀川の土堤、松並木をたどつて若い女の落葉ひろひが傾斜してる所に落葉かきを持つて下りたつた、秋のサラ〳〵した日光をあびて……今年の秋になつて初めて見た落葉拾ひ。白手拭を姉さまかぶりにして赤いせまい帶を結んで居る。空の高い此の頃、草や木の中で働く落葉ひろひになりたいと羨ましく思ふて、一雨每に紅葉して絞りしやうになつた、土堤の向ふの西山を私は見上げた。

からくり

「村芝居〳〵……」チョン〳〵と柏子木の音がする、四方から馳けて行く草履や下駄の可愛い足音、丁度家の前で荷を下したらしい、暫くしてから針を持つたまゝ窓の障子を細く開けて覗いて見た「……此處からお江戸へ三百里、行きしもどりて六百里……」はたきを

かたにおどけた奴がをどつて居る、側にならんで、頭を飾つたお姫さまにしたらしい女人形と、目のつり上つた袴をはいた男のとが立てゝある、前の子供が男人形の足をふらつかせてあるくまねをしてヒリ〳〵さゝやき乍ら笑つて居る、それも知らずに夢中におどらして居る男、顔色の赤黒い、縞シャッへはげた紺の袷をかさねて、ふところから折つて入れた帽子が半分丈のぞいて居る。

住むべく定まつた土地もなくこうして諸國を流れてあるくこの男には何が樂しみなのだらう、をどらす人形の手を取る度に身は老いて、知らぬ間に髮は白くなり髮はかれるてあらうに……。

奴の鼻をむいて子供を一しきり笑はせた後、箱へおさめると柏子木を打ち乍ら家々へお金を集めに行く、草鞋をはいた足から黒い股引へかけて、秋のほこりが白くついて居た。

地方色が或る部分まで色どられてゐます、描寫も女ならではと點頭かれます（評）

○嫁く人なき人　弦子

ふろ歸りの手拭凍る寒い夜、私はふと、嫁く人をみた、顔はあくまで白くぬり、口は一つぱいに紅をつけて光つてゐた、併し多少よ見にといふので墨を引たとみえ、まつかてはなかつた、髮は水したゝらんばかりの高島田にして、金びらのかんざしは、重そうに頭をうづめてゐた、白紋羽二重の三枚がさねに白厚板の帶きちんとたて矢にしめて、重ね草履の足もおもそう、迎ひの人やら親類の人やらて邊を取りまいて、寒風吹きすさぶ中を靜々とあゆむ。

私はお花嫁樣みんとて騒ぐ群集の中に交つてつく〳〵とみた、そしてある事を思ひ出した、

三年前である、同じクラスの唯一の親友三橋のおときさん、卒業歸省して許婚の某法學士と結婚の式をあげるといふ間際になつてチビスを病んて死んだと傳へられた、その人そつくりてはないか、若しやその人が……併し校長と主任教師と自分の處へは確に通知がきてる、然も父から、併しない事てはない蘇生！　あゝそうだつたらこんなせまい處て噂にのぼらぬ筈はあるまい、日が經つたからつてたまには……かこすてに半年になるけどそれらしい話もきかないもの、併しよく似てゐる、他人の空似か？

三枚と白くぬいた紺のれん、目ぬきの場處に間口の廣いその家、おときさんが初めてこの世にて産聲あげた家！　病とたゝかひつかれて目をつむつた處と、おもへば何となくなつかしくいたましくはいつて線香の一本もあげたいとおもつたのも一再てはなかつた、のれんくゞる事のうら耻かしくて通りぬけては後ふりかへつてみるのがつねてあつた。

なんてよく似てゐるのだらう、あの人と口をきいたら
おときさんと…あゝどこの人か何處へ行くのか――
もしや妹？然し妹のある話はきかなかつたが――

「武田やの若旦那さ、おひな樣の樣な御夫婦だなあ」
「ほんとにいゝ御きりようですねえ、おときさんそつくりで、それにしてもよくあれだけに仕度が揃ひましたねえ、日のないのに、
「そりやあなたおときさんのをそのまゝ、
「なるほど、然しおときさんは可哀相な事しましたね一生懸命勉強してさあといふまぎわに死なれて、それに病氣があんな上にお母さんもあれですから、
「全くですね、あんな心だてのいゝ人はありませんねえ、併しおまきさんは感心ですね、顏なら心なら姉さんそつくりて、おつかさんに似やうものなら取る處はないんだけど、おときさんの病氣の時もおまきさん一人で介抱したそうですよ、
私はぼんやりお嫁入の行列をみ送つて立つたまゝ體は氷の樣、我にかへるとつゝけ樣にくさめが出た。

行きとゞいて、而かも取まとまつた筆づかひですが、何となく感興が薄いやうに思はれるのは何うした所爲でせう（評）

○一線をおきて　八代やゑ

「あの晩は眞個に面白かつたわ。花が薫つて、あの人等の美しい舞踏の姿は忘れられないわ私」と語るのを眺めて
「まあ。ちゑさんの表情の御上手なこと。さすがは：：ですものね」
「いやよ。貴方は大變はしやいでるのね。今日は」
「え。私すつかり醒めちやつて。原に行きたいわ、私」
冷い鋭い力が瞳の中に漲つてた。二階の窓から高い空を大らかに見上げ乍ら
「御覧なさい。恁麼屋根だらけ。屋根の上に此間上つたのよ。けどまだ氣がすまないわ。廣い高原に一人て、雲もないお天氣の日、たつた獨りて冥想してみたい」
あたりの空氣は顫へた。
「それこそ現代のチヤキ／＼だわ。私も氣まぐれにお借したいこと」
「え。たまには自然の空氣をお吸ひなさいよ。全く貴方は植木屋の花式ね」
「て貴方は野生の草花と仰設るのでせう。」
「えゝまあ然うねえ」
「直覺したのよ。偉いてせう」
「けど、眞個に貴女は幸福なのよ。明るくつて暖くつて」
「貴方だつて幸福だわ。天才の：：」
「否、否、そうぢやないの、私は醒めて苦痛なの。けど苦痛の中に又眞味があつて」

「鳥渡待つて頂戴。私に解らないわ」
「解るわ。自覚して苦痛だけど、其苦痛をあがなふだけの快樂でもない或る得るものがある、と云ふのだわ」
「え。」
「じれつたいのね。ちやんと解つてるのに」
「だつて少し解らない——もの」
「酔つてる人には解らないが私には解つてる」
時も所も我がものといふやうな顔して。
固い目をした人は默つた。壁も柱も知らん顔してる。
「ああ。あの原が好きだ朝日の照る原。人なんか戀しかちつともない。自由な原が宜い——わ」
欺かない人は然う云つて自我一つをすべての中から高い者にした。
嬌められ剪をいれられて美しい性格になつたと云ふ人は自らを除いた或るかたまりを大きいと思つた。そして反坑と云ふやうな表情を鳥渡見せて、互の言葉を佝味いつゝ在る。
二人の間に置かれた一線を除くまでは二人は全く中心を異にして居る。

斯うした心持を描寫したものは決して初めてではない、今までにもあつた、散文詩めいた技巧は一の異彩であつて多くの寄稿中、外に類を見ません（評）

○大根洗ひ　　田舎娘

妹を電車迄送つての返り、少し廻つて小川へ來たら土橋の眞中が、くづれて大きな穴が開いて居た。「おや」と思はず云つたら「誰やい」と大聲。びつくりして「私」は、こわ〱のぞくと、草の間から頬冠りした大男が見上て、「あーとう(孃)さんか」。夫て私ゃ安心した。「きつう早うから何處行きなはつた」。「今、妹を送つての」云ひ云ひ、惜しげも無く露を落す枯草を分けて、川淵へ下りてかゞむだ。「あらいゝ大根ね」ごわ〱した眞青な葉に、太い眞白の根。見るから冷めた相なのが數株、「はあはとも、そら、わしらのは肥がゑゝさけ」と、莞爾したのが、いま〱しかつたのか、むきになつて、「自慢や無いけどほんまに、たい(煮)ても漬けても甘うてやらこい(和らかい)し、なあとうさん、ちよびつと上るよつてん食べて見とおくなはい。」「否、いゝのよ、そりや私も、原さんの物は何でも上等だと思つてるんだわ、お母様でも誰でもさう云つてゝよ、本當に。」やつと嬉し相な笑顔をして、籠のを一本一本、赤黑い棒のやうな手て、ごり〱こすつて洗つては積む。私の顔も、原さんの姿も、ちやんと水にうつつてはゐるが、たえずゆれて居る。時折霧の粉が、ゑり元へ吹き當つて思わず首を縮めしめる。互にしばらく無言つて居たが、「寒いなあ」と、思ひ出した樣に原さんが云つたので「本當にねえ」。又無言つて終うと、流の音が心をこそぐるやうに、チョロ〱〱チョロと、いつの間にか袖の先が水にひたつてたので、急いてか

き上る其袖子に。頭から、眞紅なリボンがヒラリと散つて、細かな碁盤縞の鼠色地の半天を着た、不格好な原さんの背へ乘つた、そして、わずかにそよぐ風に、チラ／＼と幽になびいて居る。が、原さんはまだ知らないて、しきりとチャプ／＼やつて居る。お日様のお顏が見えないで靜かな朝。

垢抜のした白い顏の人の善ささうな田舍娘さんを聯想します（評）

○わき見　　つゆ草

本科の人が出はらつて仕舞ふと急にひつそり。大水の引き後の様だ。Ｈ組の生徒が來ると一時がたつく。やがて席が定ると森と元の靜寂に返る。默つてからペンを走らせてるのも隨分いやだ。白い紙と濃い紫インキとにらめくらのせいか目が痛む。眞實に無趣味だこと。



お正月　　大阪　暮葉子

あゝ本科時代が戀しい。もう胸がわく／＼／＼するアノ森田先生の御講義なんか聞かれなく成つて仕舞つて、老ぼれた様な氣がして情ない。専科‥‥この名が嫌、歪専科ときくと若々しい美しい響がありやし無い。葬られた人と云ふ樣な氣が堪えず湧く。五年の教室で讀書が始まつた。此度の張のある清い聲は水野様に異ひない。源氏の夕顏の巻‥‥茫然と耳を澄して居たがふと「現在に忠實なれ」と本間先生が告別の辭として給た格言がきらめき出す。ハッと思つてペンを續ける。Ｈ組でLecture を始める。誰だか先生のｒの響を眞似するのが變手古で笑はずに居られない。次は仙臺の方かいやに鼻に懸る。アラ今度の方はきん／＼聲を張り上げて‥‥嬉しい Copie が

もう終り……一わたり見廻すと、ピチャンと蛙をつぶした樣なのはジャンヌ。マリは餘り頭を傾け過ぎて又先生に鼻て書くのかと叱られさう、字引を開いた儘困つてる青木樣の顏。あきたかペン軸をかみ乍らポカンとしてゐるのは恭樣、皆川樣はマア眞面目だ、碧瑠璃の空の美しいこと。こゝから窓が正面だから外が良く見える。五月晴と云ふのでせう。氣が晴々する。アノ綠色は春の海そつくり。浪あらず舟の帆あらず鳥あらず誠綠は靜なる色つて歌を思ひ出した。細く突き出た白雲は白砂になぞらへ樣か……拍崎の荒濱を見る樣てなつかしい。毎日〳〵遊びに行た幼時の想出の絲をたぐつてほゝ笑だ……が今は海水浴も出來町の面目もまるて改つたとやら。月日はどんな田舍ても決して閑却して置かぬ。築山の裏の柳二本風なきに微に新芽の愛らしい枝がゆれる。パット眠つた庭面に砂を舞して過つたのはミチ、追ひかけるのはジョゼフヒン。二人の影が音樂室に消えると目覺る樣なマーチの曲が……大變遊んだと。もう二十分たつちまつたわ。どれ叱られない中何するのか伺ふと帳面を手にして立ち上つた。

女學生の周圍と女學生の心持が斷片的の裡にひらめいてゐます、文章も書き熟れたものです（評）

東京　わかば

○袴

今日も今日とて又卒業式の御召の品評、「袴はどんな色がよいでせう紫紺も茶も飽き〳〵してしまつたのよ」「下着はやつぱり羽二重の白がいゝわね」等と樂しげに話し合つて居られる。こちらて筆記も手につかず聞いて居る私の心は誰も居なかつたらば泣き出したかも知れない。あゝ女私も女……今迄に幾度手紙に書いては破つたか知れない。着物等は少しも入らないから是非〳〵と母樣に泣いてやう〳〵この專門の敎育を受けさせて頂いたのですもの。これまでも何かと御母樣の御胸をいためて居る。それに今の家の樣子を考へてはどうして御願ひ出來やう。と云うてあの紬の紋付を皆さんの中へ一人着て行くことは忍び得ない。いつそ出まいかとも思うて見るても又これが最後の式てあることや女學校時代の友に對するプライトてある等と考へればあゝ決して出たくないことはない。けれど――思ひは千々に亂れて下習へも手につかず、やるせない悲しみに胸はふさがるのてある。

* * * * * *

それから二三日してなつかしい御母樣の御手紙、ハラ〳〵と五片六片色の切が落ちた。と未だ讀まないうちに感謝と喜びの涙は淡墨の跡をにぢませた。

何んな女にも衣物に對する苦痛と云ふものがあるやうに想はれますが、それな主として書いた人は餘りなかつたやうです、これは能く其處に中りますが、餘りにあつけないから大して褒める譯にもゆきません（評）

○春のまとゐ

岐阜　篠田華水子

かるたにあいた方はこちらへいらつしやい、花樣もうあなたそこやめてこちらへいらつしやい、いらつしやるの、太郎さんも來たの丈ちやんに繁子さん、民二さんはこゝ、年寄つてゝもいゝから佐吉も呼んでこうか、お婆さんもいらつしやい、さあこれから、物かくしをしますよ、何か一つ宛出しあふのですぜ、小さいものを、おゝ出た〳〵、指輪にリボン、手帖、櫛、簪ずにおみかん、一、二、三、四、五、六、もう一つほしいねえ、一人は無くてもいゝけど「では鉛筆をぬけ〳〵つて民さんがいふ、さあよし早く一つ宛とる、殘されたものが鬼よ、あらお婆さん鬼、そんな事だめよ、では私が鬼になるから皆さん一つ宛かくして持つてらつしやいよ私が貴女は何持つていらつしやるかをいひあてたら、當られた人は、何か踊つてもよし、唄つてもよし、物まねするのよ、佐吉もお婆さんも當つたらやらにやいやよ、さあかくしなさい。眼を兩袖でかくしてる、はいよろしい〳〵、さあ、では誰にあてようかしら、皆がにこ〳〵してる、お婆さんあてるのも可愛そうだし始めだから、一つ佐吉にあてゝやろうか、では右から一つと繁子さんは手帖ぢやなくつて？、いえ私おみかんよつて中央へ出しなさる、あはゝゝあ、皆が笑ふぢやあ一つとんで太郎さん、はい、大きな返詞する子あなたは——マッチ、いえ、僕はリボン、こりやどうぢや、一つしつかりやらなきあ、よし〳〵佐吉鉛筆持つてるでせう、へい、つて心配そうに出す、はゝゝゝ皆が笑ふ、さあ〳〵佐吉お前何か藝を一つしなさいよ、孃樣、私に先へあてるなんて、私……どうしませう、そんな雀のまねなとおし、チウ〳〵、おかしな聲、笑ふ、さあ〳〵眼つぶつて居るのよ、へい、よろしい、花樣鉛筆かなあ、おとなりのものぢや手帖よ、佐吉は馬鹿だなあ、自分が鉛筆だつたとて亦鉛筆なんて、と太郎がつぶやく、では鉛筆太郎樣かな、ウン僕だ、何かやれ〳〵と民二さんがいふの、「年の始」を大きな聲して唄ふ、眼をあいて、おばゝにあてゝやれマッチ、あーあ私……太郎樣みていらつせんか、馬鹿いへ、何ぞいへ〳〵、お婆さんナムアミダブッといやいゝがね、つて丈ちやんがいふ、腹をかゝへて皆が笑ひこける。

こりや面白い、お正月の雜誌に無くてはならぬ讀物です、大出來〳〵（評）

○根岸めぐり（二）　鏡孤

豆腐料理で有名な笹の雪だけあつて午後よりは客足を止めて悠然と搆へ込んで居る、さあ是からどつちへ行かふか知らむと、暫時首をかしげてたゝずんだ、と背後から「もし」と聲がする、はつとして振り返ると若い巡査が立つて居る、自分には何の後暗い事がなくとも何故か巡査によびとめられるのはよい氣持がしない、

「貴女道がおわかりにならないのですか」と笑ながら云ふ。まあ尋ねもしないにおせつかいなと思つたがそうもいへないので「いゝえ」と小聲にいつたなりすたすたと足早に派出所の前を通り過ぎた、五六間あるくと「素人義太夫大ざらい」の紙札が門にはつてある、これが根岸にふるくからある鶯春亭で、至つてぢみな搆へである、つと小さい四ッ辻へ出た、右角に庚申塚がある、どこの塚もほゞ似た樣なものだがこうゆふものはよく田舍道などにあるので、此處では何だか變な樣な感じがする、けれど是も根岸名物の一つかも知れない。ふと根岸みやげ青紫蘇のかけ札が目にはいる、店はさゝやかだがおもちやの樣な小瓶や小鉢をていさいよくならべて、道行を着た老人と、此家の主人らしいのが見世先でパチ〳〵碁をうつて居るなどは、たしかに根岸と云ふ場所を代表したるものである。
道は一すじに右に折れて居る、まがる出合がしら三四人の書生が「やあしばらく」こういつてすれちがふ、根岸も思の外人氣の惡るいところだと思ながらつとうつむいて足早にあるいた。夜などは如何にも淋しそうな道だ、右側の板塀の上に脊舍とガスが出て居る、何だか聞いた樣うなと一生懸命に記憶をたどつてやつと思ひついた、さすが日本一の萬年草師の住ひだけあつてどことなく落ちついて居る、ガラス戸を立てられた二間間口の店先に立つて內をのぞくと、かたばかりに美しい鉢が並べてある、突然ガラ〳〵と店の格子戸があいて十一二の男の子がいせいよくかけだしていつた。

慾を云へばもう少し內容がほしいけれど、これでも根岸と云ふ地の輪廓だけは分ります（評）

○金を蓄へたい

備中　篠原しげ子

時計は早や二時を打つた、どうしても眠られぬ、あゝ貯金をせう貯金を、私小學の時毎月一圓つゞ貯金して居たのを何故止めたゞろう、此迄續けてして居たらもう大金になつてるのに口惜しい、あの金が四拾圓餘溜つた時皆出して着物を買つて終つた、其からは一厘も預けない、實に馬鹿な事をした、あゝ明日は私のこづかい殘りが三圓許りあるからあれを兄樣に賴んで預けて通帳を受取つて來て貰はう、こう私が急に此氣になつたのは外では無い、今日二階で小說を讀んで居たら兄樣が來て其な物を讀むよりか此を讀めと出して下さつたのが貯金のすゝめと云ふ本だつた、其を私は讀み始めると中々うまい身に泌み入る樣で遂に夕暮迄に讀み上げた、其からもう私の心はこう變つて了つたのだ、あゝ此からは儉約をせう、リボンも買はない又色々な布切れを買つて遊び事をして居たのももう止めだ、每

月母樣からこづかいにと戴いた金は皆貯金に入れよう其から金儲けの方だ、何して儲けよう内職つて内には姉樣方のと二家の裁縫がされないもの、おゝそうだ、姉樣方に裁縫して來れるからと時々私に着物を買つて下さる、あれを着物はいらないから金を下さいと云つて少しても良いから金を貰はう、其してもう私着物なんか拵へないて未來は大いに貯金をせう貯金を、其して兄樣と姉樣と私と三人兄妹の中て一番出世して大金持になつて見せるわ、其金は國家の爲とか慈善事業とか云ふ塲合にはどし〳〵出して使ふのだ。

あ、明日は早起せう、起きれば先づ座敷だけの掃除をせねばならぬ、髮も結はねばならぬ、すると仕事の時間が後れるから寢る時間をへして早起せう、何、伊藤侯爵は非常に睡眠時間が少なかつたと新聞にあつたから私の樣な寢坊ても始めの中がまんしたら何れ習慣となろう、そしたらもう大丈夫だ、今迄は八時間寢て居たが此からは六時間にして二時間のばそう、必と必と、おや又三時を打つた、もう起きて髮ても結うか、其にしても今夜はちつとも寢ないから一時間なりと寢よう、寢ようたつて中々氣が立つて目が澄んで眠られそうにもない。

金錢に對する慾望の第一步は斯う云ふところから出立するので、微塵も氣取つてない（評）

○碁會

靜岡　辻村かと子

今日は宅に碁會を開くと言ふので下女に碁盤を借りにやる、中村さんから一面、大宮さんから一面、隣から一面、宅のを合して都合四面の碁盤は座敷に並べられた。お客さんが十四人來ると言ふので座布團や火鉢の仕度をして置く、其の内に一人來り二人來りぼつぼつ來始めた、先きに來た人はばちりばちり始めて居る、三時頃迄に十四の布團が皆塞がつてしまつた、隨分暢氣な閑人の多いのに驚いた。自分は明日の試驗の準備をしやうと思つたが多忙なので暇がない、お茶を持つて來い、お火を持つて來いと奥の方では呼んで居る、皆様がお歸りなつてから勉强しようと思つたが中々歸らない、日が暮れても歸らない、十時がなつても歸らない、頻にばちりばちりやつて居る、いや黑さん御座つたな、まあ一寸とこふ繼いて置ませうよ、をやどうもおづないお方だれ、どつこいしよと、こふ安全にして置ませうよ、をや此方を取つたとおつしやるか、へいとつたとつたと江戸からの狀と、をや悚いとおつしやるか、切られたか與三郎取られたか與市兵衛、まあ三目位くれてやれ、それはそれは貰ろう物は夏も小袖、有難く頂戴して置ませうと、おやめなしに文句を言ふて居る。十一時がなると間もなく本家から迎ひが來たが、旦那は歸らない、今から歸つてどうするものかと、こう繼いて置け、明日の朝歸るから提灯は入らぬとこうやつて置け、そんな弓張つた事をしなさんな、提灯はそこへ置いてぶらぶらお歸り、とこふ延びて置きませう、と眞面目でやつて居る。其の内に鷄が啼き出した、碁打ちは親の死に目にも會はぬと言ふがほんとうに打ち始めると止め度がないと、母は愚痴を言ふて居る、自らも勉强は出來ず、ねむいので小さな聲で愚痴を言ふた、下女は白河夜舟てぐうぐう寐て居る。

能く描寫が出來た、碁に集つた人達も文章の材料にならうとは思はなかつたてせう（評）

○轉宅

京都　益子

待ちに待つた新築が落成されたのていよ〳〵けふ引こしと定まつた。いつもより二時間も早くみんな同時に起き用意にかゝる。手傳ふ人も多勢來る、彼れも此れもと運び出す。積んでは送り送りする、何しろ古い家の事土藏や納戸のすみから私のまだ一度も見ぬものや、思ひ出されるもの用にもたゝず、棄てもならぬようなものが、續々と引き出される。午前中には四五臺も運んだがまだ〳〵限りない。私の大切な〳〵文庫や手箪笥はいつどうなつたのやら。分るものと思つても氣にかゝる。生れてから今日までの永い年月住みなれたこの家を今出る時にはどんなに名殘おしく思出多い事であらう、と想像して居たが。扨て其場合の今になるとそれ程でもない。大勢で騒いて居るのが面白くなつてくる、小さい丁稚二人て簞笥一本擔がせられてヘタヘタと潰れかゝつて居る、おかしいやら可哀そうなやら。夕方にはもう日用具や貴重なものは大方送られたのてみんなあちらへゆく。いざこれからとなつて見ると、さすがに感慨は限り無い、眞紅に色染められてるあの紅葉明日は誰れが愛づるのやら……いつそ今日かぎり散つてしまえばなどゝ變な心持ちが出て來る、庭の石燈籠も杉垣もなつかしい。私の作つた菊は云までもなく、梅の木も水仙もとつて行かう。あの無花果の影。葉の繁つてゐる頃が一番嬉しかつたに……も一度かくれて、思ふだけ泣いて見たいような氣がする。が今はそんなこと云つてるどころてはない……。

新宅に着いたらもう火が燈つて居る。運んだものは澤山ごた〳〵と積み重ねられてある。何もかも明日にとし。一同休息し夕飯を終へたらやがて九時てあつた。

もうあちらへ歸らないの。と鑑ちやんに問はれて何とはなしに涙が浮んだ。矢張りあちらの方が好いわれーと妹も云つて居る。ほんとに今日は足勞れた足がだるくなつてきたがきのふまて頭が痛かつたり肩がこつたりして居たのはどこへ行たのやら。と思ひ出した。

忙はしかつた今日の一日の事を思つたり、壁の色が違ふ、天井が少し低いようだなぞと見廻したりしてるまにいつか、寢入つていまつた。

筆が自在に動きます、幸ひな人（評）

○寒い夜の失策

横濱　小田切錦子

「アッイ」姉樣のお聲て、私は吃驚して目が醒た。マアどうしよう、宵の中に入れて置いた行火の炭團が、何時の間にか轉がり落ちて、敷布團二枚、通して疊まで焦してゐる。「錦さん大丈夫ちき消えるから靜かになさい」と、姉樣は上から無二無三に蹈んで居る。私は寒いのも忘いたので歯ががた〳〵と震て仕方がないが、そつと立つて、雨戸を明けた。そして、煙が下へ行かない樣に、兩方の袖で、バサ〳〵と煽ぎ出した。若しお叔母さまにても、知れたちそれこそ大變、二人ともお拂ひ箱になる。火は直ぐ消えたので、ホッと胸なて下すと……、アラッ下で誰か起きた樣子。「ねえ姉樣今の中に詫した方がいゝわ遅くなると行き難いから」と心細げに云ふとだまつてと仰も耳すりつけて聞いて居る。話しはよく解らないが、お叔母樣の聲て、ナニネお爺さんが喧ましくつて仕方がないのよ……お陶さんも起きた二人はしやべりながら、お勝手の方へ行く。ガラ〳〵と戸棚を開けて、又ピシヤリと閉めた。「シュッ〳〵」と、足踏荒く鳴らして、歸つて來た、ホントに此家の樣に鼠の居る處はありやしないとお陶さんが腹立ちげに云ふ。お叔母さまは、ギシ〳〵と廊下を彼方に行く、下は元のひつそりにかへつて、玄關の時計が眠る相に、チン〳〵と一時を打つ。

姉樣と私は初めて顔見交して莞然した。

なるほどこれは大失策（評）

○仕立物

山口　酒向とし子

初時雨の寒い夕暮に小作人諡三の女房が櫛卷に手てんて大きな、うこん風呂敷をかゝへて來ての物語はこうてあつた。

ヘイまあやつと無躰に御奉公をつとめまして――嬉しさおすえ難いと見

えてもう手のこうて清い涙の露をはらつて居た——てあなたさまにやあのむす子も此廿日にや演習地から歸つて來る算用に成つて居りますのでこんに一ッ羽織でも仕立てゝ置いてやろうかと思ひまして町へ出ましたがまあ誠にそつきようなぶしつけなお願ひを申上ましてすみませんが、どんなにでも宜しう御座いますから御孃樣一ッ仕立てゝやつてつかはされますまいかい、誠にもつたいない事を申上まして……まあ可愛想に顔が赤らめておそる〳〵尋れてるもの、いかに病後だからとは云へこれがどうしてことわられやうぞ、向ふては病後などとは露知らず頼みに來たもの、けにもはれにも一人息子の上に上等兵に迄進んで、此度目出度滿期と



かるた　　靜岡　鈴木ます子

なると云ふのであれ程心配してるもの、とても〳〵親二人の心は消えうせんばかりに嬉しいには違いない、……おやぢはあなたさまいづれまた嫁もとつてやらんにやならん事ぢやから、ついでに袴も買つて置いてやれ、あさぎ色は今流行らんらしいから此頃はやるやうな、色なり縞なりれだんの處も聞いて歸れと申しましたので、それもこんに借りては歸りましたが、まああなつさま、光る者といつてはとても買はれませんけど——息子てみりやあこの銘仙の羽織さへあれば、袴とは一口も申ませんけれどおやぢがまあそう申ますのでホヽヽやはり目には慈愛の露が溢れ切つてる、お祖母さんも私とともに感涙の外はない、こりやあまた當分は遊ばせざあなりますまい、この間も彼れの友達が來ての話に、——ならあなんてよこんどいんだら仕事ぢやなんぢあ仕樣たあ思はんてよ好きな事をして遊んでやる……ぼろ洗濯をする

する次の間で聞いて居りましたが息子のやつはあの通りのだまりで何ともいひはしませんで御座いましたけどやつぱり遊ぶ算用て居るに違ひござりません、まあ〳〵當分はひきあてにや成らんてよと話して居るやうな次第て……ハイシヤツから始めて下駄まで持つて向ひに行かんにやなりません、こりやあまた大きな子を座むやうなものでオホ……、兵に出ましたらおかげで大きう成りまして丈も九寸を着るやうに成りましたホ……、おやぢが申ますにやなんでも人が窓とつてのを見るとこう、ふくれて居る樣だから綿を入れた方がよからういの——ぢやが春先にふくれたのを着たのもおかしいがの——まあごいんん居樣に伺つて見たならと申ましたかどれえな者て御座いますやら、ハイ〳〵小袖綿、宜しう御座います早速に持つてあがります、ぢやあほんほんすみませんがお孃樣どうぞお願ひ樣致します、こりやあ夕盃に出まして誠に〳〵おじやま樣致しました、……二反の袴地を包んだうこん風呂敷を雨にぬらさじとしかと兩手ていだいて小走り乍ら門を出て行彼れが親心!!あゝ此寒い夕時雨も氣にとまつたらこそ、おゝあの一里の山のふもとへそれからこれと嬉しい話の數々を待ち詫びても瀧三への土産にとおゝ今も見るやうな、あの小走りを續けつゝ歸る事であろふ。

息子の爲に晴着の仕立をお孃樣に賴むと云ふ一條の話です、田舍人の質樸な樣子が見るやうて好い（評）

○見切り場

夕　ほ　し

私は、後について母樣が、これを持つてと渡す切れを無意識に手にとるばかり、しつとりと重い、赤いダリヤの友禪縮緬、淡紅色に白百合の羽二重、これがやがておん身につく姉樣の、榮あるその夜を思つて、廻りの物騷ぎは、まるで遠い夢の國の響でも聞くやうに茫として了つた。

ふと足下で「あなた、あなたこれがないてせう?」といふのが、突然らしく耳に入つた、狼狽てゝ氣がつくとお召の重れに縫紋の羽織、五分の隙もない當世風の奧樣だ、手に持つたのは派手な糸織の反物、大方可愛らしいお子樣のにのお見立なんだろう、それにしてもお二人でお出ましとは……あれミルクに相違なからうけれど、母樣、母さまと泣いて雖るのに侍女は持て餘してゐるやうな事はあるまいか、と詰らぬ想像を逞しくして、俄かにあたりを見まわした。今ローマ卷の方がお持ちになつた銘仙が奇拔でいゝがフだわれ、まああの破芭蕉の……黑繪かしらなど、彼方キヨロ〳〵、此方キヨロ〳〵、むしろ店員に、注意人物視されなかつたのが不思議な位「もう大抵いゝてせう」と、母樣は起つて亂れた束髮の、前髮をかき上げながら、吐息した「エヽようございませう」と、自分は唯答へて勘定場の方へ行く。頭上を絕えず電車の架空線のやうな所を往き來する傳票、算盤を彈く音、讀み上げる聲電話の鈴、電車の響が、今更、閑靜な山の手へ住み慣れた私の神經を、恐しく震動させる、勘定書が出來上つた、總計て二十五圓九十錢、お隣りにゐた、おかみさんらしい人のは三十何圓といふのであつた、一寸憎らしく思ふ、品物を受取る所や、下足で可成待たせられ、漸く雜踏を逃れたのは午後三時半頃、これから、白牡丹へ行かうと、電車道を橫ぎつた。

「一寸憎らしく思ふ」と云つたのは能く女の弱點を暴露しました（評）

○田舍の天長節

西多摩　よ　し　子

「十九忽ち二十日宵闇」と、よくおばあさんが云はれたのを思ひ出しながら、昨夜寢際に東の窓から眺めた二十日の月を、私は今朝寬の傍に置いてある、水桶の中に白く見出して、一點の雲もない大空を打仰いだ。紅くぼかした東の空から、闇が消えて靑くなつた西の空へ、もや〳〵と銀の霧のやうなものが、高く運ばれて、後ろの嶺の紅葉は美しく朝日に映えてゐるけれども、まだ日輪の出ない時、ちやうど初日の出を待つ心地がした。

あゝ、好いお天氣、東京はどんなに賑やかだらう、霜置く隙もない街路を、金色燦たる大禮服着けて走らせる俥上の人や、袖長い紋付に袴着けて校門を入る人などが目に付いたのも、いつかの今朝であつた。ほんとに天長節はいつでも好天氣、菊に紅葉に天地は美しいのだもの、この山

里だつてこの家だつて、日の丸の旗は古びたけれど、庭には、うら金も紅菊も黄菊も白菊も、すがすがしく咲いてゐる。それを眺めながら小春日のあたゝかにあたる軒の椽側て、柿剝をしてゐるお爺さんを、一人留守居に殘して、めでたい今日の半日を家中總出て、麥蒔に費した。今日蒔かれた麥はどんなによく出來るだらう。

茶の花清く手に觸れる道を下りながら、今日は丸太一本流さない、秋川を見おろすと、岩にあたる所より外には、水の流れるのもわからぬ位、靜に澄んでゐる。汀の畑ほどの小さい田には、晩稻刈る人も見えて、平和な秋の氣はゆたかに滿ちてゐる。さまざまの小鳥が行つては鳴く、あの櫻の木にはかへり花も咲いてゐる。

今朝と反對に、東の山々の紅葉と綠葉濃やかな杉の植林とに、夕日が遠く輝く時、誰が山鳥を打つたのか、銃聲續けざまに三發。こだまにひびくと一しよに、飛び立つたたくさんの鳥が、いつまでも啼き騷いでゐたが遠くはなれた樣子もなく、塒に歸つたらしかつた。

此君の作はいつも調子が好い、描寫がすなほて少しも惡い癖がない（評）

○うつゝな

加賀　勝崎菊子

夜具の上が重くなつた、と急に私の息はつまつた。百貫もある石の下にでもなつたように身動きも出來ない、息もすへない、苦しさに聲を限り人を呼ぶ、不思議には少しも聞えない、直續け樣に呼ぶ、矢張こゑが出ない。

息がきれそうてある、すへるだけ空氣をすつて、手をもがく、其手がしびれて仕舞つて動かない、泣き出した、矢張り聲がない、苦しさと、恐しさとに只もうゝなつて泣いた。

目を開いてマッチを摺らうと思つた、しかし上下のまぶたが縫付けられたよーて開かれない、無理に開いて夜具の中からのび上つた、其時は奈何したものか出る事が出來た、火を燈けた、常とは違つて薄暗い、胸の上を見ようとしても奈何しても見る事が出來ない。

ウン…ウン…うめきながら一生懸命手ておした一支もなく直に肘から折れて仕舞ふ。

苦しさに只泣いた。

ハッ、と思ふた一刹那胸が急に輕くなつて、一度に多くの空氣を吸ふ事が出來た、とたんにパッと兩の目が開いた。胸は輕く何もない、點したはづのランプは消えた儘て枕元にある。

窓ぎはの障子がうつすりと白くなつて居た……。

情緒ばかりを出さうとする所謂散文詩てすが、根本が摸倣から來てゐるので、比較的感服しかねました（評）

○勝ち負け

熊本市　木村清子

伸び足らぬ毛を無理に、お下げに結んで、下の方一寸五分許りは、削つてまだ日が立たないのか、一面青く光つてゐる。絣の筒袖羽織、附けてゐるもの、着てゐるもの皆、この子の性格を表はしてゐる樣だ。それに向つて同じ年頃の圓顔が玩具の七化げを握つたまゝ、弄ばうともしないで、無言のまゝ突つ立つてゐる。

お下げは一歩前に進んで、とゞまつた。圓顔は退き氣味になつた。私は好奇心で横に向つて、二人の顔を見比べた。おさげは憎らしい迄白い顔で大きい目に角立てゝ、相手の顔を睨んでゐる。丈に餘る甘蔗を杖にして。と、その顔の表情が漸次變つて行くのが、面白い位。眼を益々角立てゝ、口を横に一生懸命に、ゆがめる。圓顔は最早や、猫に射られた鼠の樣に、小さくなつて、握りしめた右の手は、わなわなと顫へてゐるのが見えた。お下げは遂に進み寄つて相手の右手なる玩具を引つたくらうとした。その勢は、實に恐しい物であつた。その見幕は誠に、相手の胸に食ひつきもかねまじき有樣だ。圓顔は顫へながら、一途に抵抗した。やるまいと。おさげは遂に勝てなかつたので口惜し紛れ、ぴしやつと一つ打つて退いた。圓顔の眼は異樣に輝いた。口は尙固く、つぐんでゐる。

「おつゆさん——何つ？」二人は同時に聲の方に眼をやつた。
「雪ちやんが强情だからつ。」と、角々しい聲。
「おつゆさん、——雪ちやんとは遊ぶまいよねえ」媚ぶる樣にいふ。おまけは暫く、無言て居たが、何と思つたのか急に、優しく、「雪ちやん一所に遊ぶから——見せる丈でよいからねー」と手を出した。が圓顏は、なかなか、渡さうとせぬ。しつかり握りしめて。
斯んな斷片的の叙事に子供の性格を表はさうとしたのは一寸思ひつきでした（評）

○お友達と私　　和泉　金田代志子

正枝さん——私の友達は皆て五人、其の中て正枝さんは一番年長て今年十九、額に髮を垂れてゐる幼時からお友達中の大將、一寸した事にても强情て皆を困まらせるがくせ、今年の夏の蕈狩に朝顏日記のみ書になつた爲兩親に腹立させて今大阪の某工場の女工になつて居る。行く時に私からリボンを一つ送つたが其の色ももう今さめたのか、情が薄れて今は何の音信もない。お友達にも情が薄かつた爲皆なも今は忘れて居る。
朝子樣——。話し對手もけんくわ對手も此の人。年は十八。朝から晩まで話しをせずに居られないと云ふ、活潑すぎて一寸お轉婆の樣な人。
藤ちやん——。色の白い髮の多い、氣高い優しい方、年は私と同じく十七、お友達中の美人と云ふより村中の美人だから嫁に要にと望人が多いが、まだ一度も浮いた話しが起らない。色をふくんだ話しは大嫌い。私はお友達の中でも此の人が一番好き、又一番私とは仲好し。お嫁にゆく時は色の變らぬ金の指環でも送らうと今から思つて居る。
よね樣——。藤ちやんの妹樣て氣も、心も、姿も、形も、姉樣とは瓜二つ。年は十五。お友達から可愛がられて居る。
私——。自分て自分を評するのも變だから、藤ちやんに評して呉れと頼んだら、其麽ことはよしなさいと云ふからよしてしまふか。右を向けと云へば右を向く、左を向けと云へば左を向く、笑へと云へば笑ふて人にさからふのが嫌い。だが怒れと云はれたら怒れない。雨の日でも風の日でも笑ふのが好きだけれど怒る事は知らぬ、て皆が私が怒つて居るのを見た事が無いと云つて居る。
然う云へば何處か人の好いところが見えます（評）

○大きな息　　三河　つる枝

あゝ倦き〳〵した。
田舍の音にも色にも倦き〳〵した。
毎日毎日なんの變つた味もない、匂もない。
來る日も來る日も同じ古びた其形—
なんてもいゝ。此平凡と單調とを破る刺戟がほしい。私の體は錆びて了ふ。
新しい强い何物にか觸れて見たい。醉つて見たい。
自由に思ふ樣、大空一杯に翅を擴つて翔つて見たい。
思ふ樣、大きな聲て叫んで見たい。
唄へて見たい。
苦んて見たい。
悲んて見たい。
泣いて見たい。
哄笑つて見たい。
自由に歩るく事さへ田舍では眼と口とて縛つて居る若い女のくせにと云ふ。眼も口も構はないとする。自分はそれていゝ。しかし、親と云ふ物、友達と云ふ物が無暗に其眼と口とに服從して居る。そして都合のいゝ時ばかり、親だ、子だ、姪だ、從妹だ、親友だと身動もさせぬ。
田舍の自分の勝手てきめた型へ、入れ樣、入れ樣として親や友達は焦心つて居る。
聲も光も赤も緑も黄も洗ひ去つて、生氣のない、見る人に何んの刺戟も與へない眠つた樣な灰色にし樣と焦心つて居る。服從の圍りにし樣と焦心つて居る。

生意氣な事をするな。
生意氣な事を云ふな。
生意氣な事を考へるな。
素直にせ、女らしくせ。
小說を見るぢやない。
若い男には顏を合せるな。口をきくなぞは以ての外だと責める。そして眼を塞いで、耳を塞いで。
手を引いて、知らぬ所へつれて行く。綿帽子の影で始めて其人を見た。
あゝ、お、もう晚い！
貞操と云ふ鎖につないで身動もさせぬ。いつ迄も眼を塞いて、耳を塞いて、手も足も自分に動かすな。人形になれ!!
所詮は其處だ！

これは男子の書いたものだと判斷する、女子は決して斯う頭の上からおつかぶせるやうな態度で書きません（評）

○あはれな空地

直江津　木島磯巾着

此四月頃から夕方になると可愛いゝ聲で媼ぽつ〳〵か金太郎の歌が聞えるのは、私の家から五六間上の百坪許りの空地である。持主は白毛混りの婆さんて、倅と只二人貧しく暮してゐたが、倅は日露開戰に召集されたのである。老婆は倅の身の上を案じ暮して居た、明治卅七年摩天嶺の激戰に名譽の戰死を遂げたと云ふ報知があつたので、老婆は餘りの驚きに一時はひどく落膽したが、色々人になだめられたり且御天子樣の厚い御てあてや、お葬式の賑しさに、婆さんの心は慰められた。私の家へも時々來ては涙を落して話された、其時宅の兄も出征して居りましたから、一同其物語を聞いては共に感涙をもようしました。夫れから戰爭後間もなく親戚から娘を貰らつて養子にしました、一年許りは兎に角圓滿てしたが一昨年の火難後、家を新築するにつき、養子夫婦が各々其實家より材料を持つて來た、それを隱りだした、老婆即ち義母のあつかいは一變して每日の如く「今日は財產を渡せ、やれ戶主にしろ」と迫つた、一人の倅の命にかへたものを、どうして容易く人手に渡されやう、わざと靜に罵と罵まして居ると彼等は義母を土藏へおしこめて了つた。其日より老婆と養夫婦とは別鍋の飯を食べた、夫れから折にふれて或はすかし或はなだめて說いたけれど駄目なのでとう〳〵養子夫婦は老母の家を出る事になつた、元より家も土藏も我が物だと口にしてるのだから、すつかり破して去る三月高田へ移つた。氣の毒なのは老いさき短い婆さんである「全くあなたは運が惡いのれえ」と同情すれば「何も彼も前世の約束てすからへエ人を困らせて其い目に逢うか、困らせられて居る者が惡い目に逢ふか、あなた方長い目て見て居てお吳れ、捨てる神あれば助ける神あるて、此樣なおひぼれても深切にして下さる方はありますよ」と平氣で云つて居ると云ふ事てある「私の食費はらく〳〵お天子樣から頂戴して居るから心配なしだ」と今は自分の實家へ戾つて居る。
今は其屋敷は子供の遊び場になつて草花のしほれたのや瀨戶物瓦のかけ等樣々の物は散ばつて居る。私はいつも可愛いゝ聲が聞えると、共に喜下に居る倅はどんなに悲しんで居るかと、思はず袖をうるほす事はしば〳〵てある、高田へ引移つた養子夫婦は某町て酒店を始めたが、はやらないて在へひつこむてしまつたと云ふ事を噂に聞いた。

あき地の荒廢した心持が客となつて了つて、其事實が主になつたから藝術品としては二等も三等も下に墮ちました（評）

○山裾の家

廣島縣　伊藤たつ子

茅葺の家、裏は低い山の裾が迫つて、樫の森で掩はれた樣、其の間に二三十本の竹が不規則に並んでゐる、
山に橫穴を掘つてあつて、冷たい水は、いと古びた筧を滔つて、五坪ばかりもある自然形の古池の畔の四斗桶に溜められてある。今日は祖母さんとたゞ二人、秋風さつと障子の開け閉から吹き込む、身を刺されたかの樣、外を見れば柿の葉綠りまばらとなつて哀れ相に、時々風が思ひ出した氣に梨の葉をかすめて來る度每に筧の水の音ずれ聞へて淋しさう。

夕方には日が陰つて冷かに感ずる、椽端に出て、祖母さん一寸隣へ話しに參りますと、尋ねた、祖母さんは眼鏡かけの針仕事、私の方を見て、遊びにか、衣物を澤山着て、風邪をひかない樣にしてよ、一寸其の障子を立てゝ行つて、とまた頭を垂れて針仕事、はいそれては、と障子を閉ぢて駒下駄履いて一間道一町ばかり、御隣の庭に這入つて、中川さんと、呼んだ、返辭がない、裏へ廻つて見ると、菜を小切つて居られる、中川さん冷たいですれー、と言ふと、あら伊藤さん、冷たいですの、と私を見て手を止められる、中川さんは誠に美人てす。

○いてふ

安藝ひだ子

風の吹く度毎に、パラ〱と散る落葉の音が淋しう胸にひゞく。

「武ちやん、此所に好いのがあつてよ、」聲はお隣の、千代さんらしい「ウン此所にもいゝのがあるよ、僕は姉ちやんに持つていつて上げやう、喜ぶから、」とは弟の聲だ、窓を開ると、すぐ目につく本堂の後の大公孫樹の下で、紺絣の筒袖に、同じ樣に白い前掛かけた二人が、せつ〱と、落ちた木の葉を拾つてゐる、可愛い姿を、ぢつと見てゐると、思ひはいつしか昔に歸る。もう七八年も前の事、丁度私が九ツて、從兄の芳雄さんは、二ツ年上の十一だつた、芳さんの家は、つい隣村なので、お休みの日にはよく遊びに入らした、そして秋はきつと二人ていつもあの大公孫樹の下て、飯事して遊んてゐた、眞黄な葉が、紅い夕陽に照されて、それが又散る樣の美しかつた事、散る葉が風でひら〱すると、其度に、夕日にうつつて葉がキラリ〱と光る、下は黄金の花むしろを敷いたやうだつた、それを何時もあの、太い根が長く地上に出てゐる傍に集めて「此所が妾しの家よ、」と言ふと「ぢやあ僕はこゝだよ、」といつて、太い根もとを半分づゝに仕切つて、二軒の家が出來上る、そして、菊や、さふらんや、山茶花や、いろ〱な花やら、葉やらをむしつて來ては、黄金のやうな中に座ると、ずずーと中に落ち込んで、葉は帶の邊り迄、うづめて仕舞ふ、取つて來た花や葉は、小さくきざんで、銀杏の葉の大きいのに入れて、根の上に並べては、「ご馳走が出來ましたから、來て下さいな、」とわざ〱呼びに行つて、二人て食べる眞似しては、面白く遊んだものだつた。

小學校もすんで、中學校へ入學なすつてからも、芳雄さんは、よく遊びに入らつしやるけれど、二人共もう昔しの心には成れない。

○初陣の夜

牛込　平塚白百合

柔かな熱氣もない夕陽がかすかに夕ばえに殘つて、門毎の松の匂ひ！●少女てふ名をかざすべくなつた私は何物にもあこがれの眼に詩化してしまふのです。あの夕ばえ、白衣の女神が紅葉を‥‥などゝすぐ想像がしむ。まだ靜さんは見えない。待ち遠しいやうな今晩のカルタ會をフト考へて見た。私は生れて初めて實に初陣のカルタ會なのです。

そこには電氣の光りが若緑色に少しぼーとして、下に流れるやうに動く白魚の指、マッチにきたへられた骨太の毀歷のチヤンや學習院の貴公子、散しがきの木札をはづみよく上にはねる。抑揚のいゝ透ろこゑが皆の熱した頭に稻妻のやうにひらめくと、目と手は一時に動いて忽ち‥‥。この中をゆら〱と何が流れてゐるのだらう。若々しい青春の活氣がヴァイオレットやローズの香の間を美しくぬつて‥‥。私はこの空氣を畫にして見たいと思つた。

私は靜さんに話しなきいてから今夜がどんなにまち遠しかつたてしやう。けれど私、私といふはづかしがりの影辨慶が。ても場なれた靜さんが萬事をのみこんてゐて下さるとおつしやつてゐらつしやるけれど、ても見ぬうちは瀬ても渡るやう。何となくまたれてまたれて。

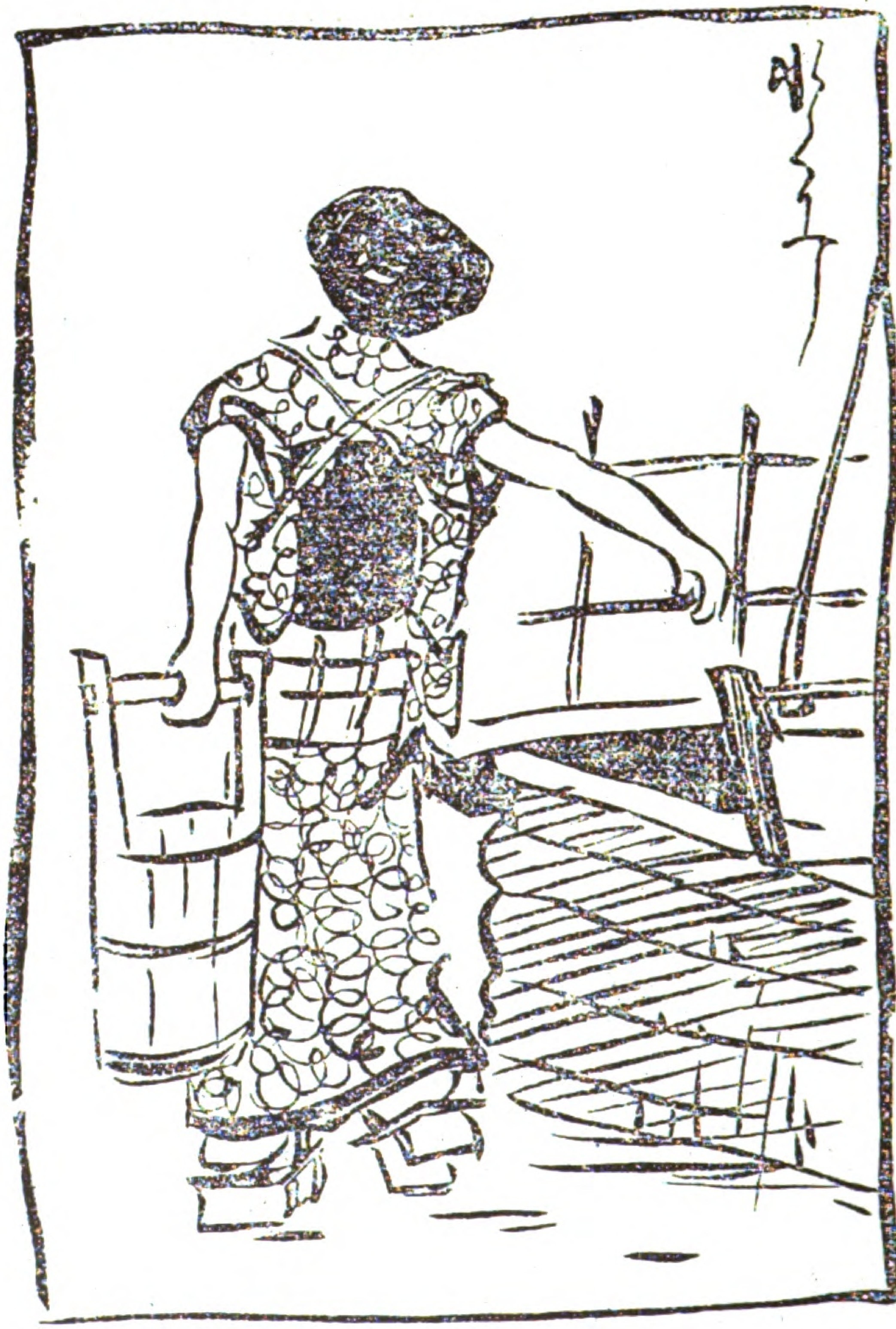
○道すがら

越後　佐藤浪子

「サア、美志ちやん大事になさいよ」と宅を出る時姉樣に包んで頂いた撥を、ソッと長い袖の蔭にかくして、人通の多い一丁目の煙草やの角をまがつた、すぐお菊の井がある、今はポンプが仕付けてあつて朝夕近所の下女逹によつて汲まれる、丁度今中年増が頻りとお芋を洗つて居る、寢ぎすのなぜ眉を搖すつて、其度毎に荒い毛筋の立つた土佐屋形の丸髷

が一際美しく見える、――お祖母様のお若かゝつた頃隨分な評判だつたと云ふ、此町がお屋敷町の頃松原某と云ふ侍があつて某召使にお菊と呼ぶ美人が居た、原因は何か知らないけれど菊は松原に斬り殺された、其後お菊の怨念が毎夜此井戸から現れたと云ふ、今でも芳屋のお爺さん等は聴うものなら膝をたゝいて話をする、――ふと私はお菊と云ふ侍女は此妻君のやうな女ではなかつたろうかと思つた。

お師匠様の家は船江町の中程で紙店が出してある、御亭主はいつも帳場へ座り込んで其横へ仕立板を置いて頻りと帳面紙をたゝむが仕事のやうだ、お師匠様は茶の間の長火鉢の前に居て變る〳〵お稽古に行く人を数へる、きりつとした丸髷に結つて黒繻子の襟かけた着物の着こなし等流石昔を追懐はせる、今頃は今川やの勝吉姐さんや、林やの桃子さん等が來て居る時分、さう〳〵桃子さんと云へば一昨年小鍛治を習つて居た時丁度來合せて、「まアー、お嬢ちやんばち先きの奇麗な弾きぶりね、お師匠さん十二で小鍛治を此麼うまくひきやあ感心てすわれ」



水汲み　かごしま　勝田かつ子

つて賞めてくれた人、眉の濃い笑ふと一寸笑くぼのある……なんと思ふ間にお家の前へ來た、お店の入口へ這入るとご亭主さんは例のやうに坐つて珍らしく今日は新聞を讀んで被居る「御免なさいな」「やアー、お出てなさい」と新聞紙を下に置いて、愛嬌に莞爾した其頬に皺が一筋あらはれた、洗朱の厚板織の鼻緒のすがつた駒下駄と並べて上つた、乾餅の焼ける香ばしい匂がする。

○墓前

大坂市　中野喜代子

たへざる孤獨の思ひに今日も又、

四天王寺の鐘の音が寂しく聞ゆる黄昏時、妾は夕陽岳の片畔り銀杏葉の蔭、淋しく立てる姉様の墓前に立ちました、幽に聞ゆ虫の聲――森々と身に泌む秋風、極めて靜かな此の境、冷かに眠る姉様――妾はもろくも落淚した、一滴二滴冷たき頬に傳はるのてあつた、

あゝ、思ひ出しても恨めしい去年の春、月は朧に霞んで、生溫い風が二人の頬を吹いて、妾と姉様とは裏の紅葉の蔭で、妾は立つて姉様は石の

上に腰を掛けて下を向ひて居た、而して泣いて居た——、
『姉樣何故泣いてるの』と妾が問ふ、
姉樣はあの艶々しい、ふツくりした束髮に薔薇の挿頭の美くしい——、
何となく寂しい涙に曇つた眼を上げて、
『喜代ちやん別れたくないは』
『何故姉樣、そんな事を』『妾、御嫁に行くのよ』と言つて、わつと許り妾の肩の上に、顔を押しあてゝ泣いた、
あゝ、あの時の姉樣のお顔、苦し相なお顔、おさない妾にも、何で彼の時の悲しさが忘れやう——、
翌日姉樣はとう／＼お嫁に行かれた、不幸せな姉樣は行つてから一年も立つて小兒が出來て産後の日立が惡くて死んでしまつた——、
父樣の歎き——母樣の歎き——妾の落膽——二階の一間で泣いて／＼泣き明した、
その姉樣の墓前に立つて、深き沈みに暮れて居る妾、
銀杏葉が音もなく落つる——一片、二片——あゝ、その時の事を思ひ出しては——、
遂に堪へられなくなつて、其塲に泣き伏した、

○夜の戎橋

大阪市　改野たけ子

大丸の向ひ迄リボンを買ひに行つて、彼や此れやと迷つて居た時後ろて、突然、「リボン？」と云つた四ツか五ツ位の男の子がある。モスリンのすつぱりしたのに、水色の兵兒帶を結んだ、可愛い兒だ、つれて居た小僧が、「あれひほだつせ」と云ふと、「ちなうリボンや……」と云つてへだつて終つた。

私はすかしのを二尺買ふことにして、涼しさうに庭を造つた藤井カバーの前に來た。此店は廻りを鏡ではりつめてあるので、店は小さいがうつり合つて立派に見える。丁度十六七の娘が、見て居るのも知らずに、顔をつくらつて居る。その可笑しさ、實は私もカバーを見に入ると、一寸やる方だが、ずいぶん見とむないものだ。戎橋に出た。涼みがてらの人通りが多い、南詰めの四手に、紡モスリンの廣告がある。先、目鼻口頭耳あごと斯う云ふ順序に、子供の顔が書かれて、そこで目をむいて舌を出すと、消えてしまつて五色の風車が、點つたり消えたりすること三度、其が濟むと下に白く、紡モスリンと表れる。此れに次いで日本醬油の廣告がある。簾が靜に卷き上げられると、お多福がフクニホンと書いた扇子を廣げて座つて居る。簾が下ると扇子をすぼめる。次に開くとき、ウメニホンと變つて居る。簾が下ると消えて終つて、上に日本醬油と現れる。仁丹の廣告は、絶えず白、赤、青と變つて、クラブ洗粉や、セム、スミス洗粉、都の花石鹸と、共に輝いて居る。

○からくり花火

常陸　なてしこ

寒い風は數しれぬ人のすそをはろふ。勇ましいがくたいに、聲をからして人を呼んで居た活動寫眞も今しはれて、人はぞろ／＼と出る。そしてからくり花火をやるのを見て居る。十六夜の月は高い見あげる樣な杉の木の梢にかゝつて、築こしにこちらをのぞいて居る。寒い夜風が又吹く。待てど／＼始まらぬ。皆ふるえて居る。然し中々はじまらぬ。するとすみの方から「やう／＼始まる」と云ふ聲に人は思はず上を仰ぐ。やぐら見たいな上に黒い人が二人仕掛けして居る。やぐらから杉の梢へかけて日本朝日艦と紙の軍艦に赤いインキで畫いてある。赤今度はやぐらから向ふの杉へかける。これは露艦だ。漸く仕組が出來ると上の黒い人が火をつける。一つの所へつけたのがだん／＼ひろがる。どてらばんてんを頭からひつかけて居るのはおちつかない若い百姓。腰をもたげてやつと見たと云はぬ許りの老人。變な島田に赤い帶をしだらなくしめて、大きな口をあいて見ている娘、さてははなをたらして居る人、手ばなをかむ人、この片田舍にはめづらしいハイカラ髮に結つた、私こそ女學校へ上つたと云わぬ許りの娘、樣々だ、忽ち耳もはりさけん許りの音、それは露艦のしづむ所だ。まもなく露艦はめつちや／＼萬歳／＼と手をたゝくとすぐ消えた、あたりは又も眞暗。やがて人はぞろ／＼と動く、私も今から歸るのだ。寒い夜風にふかれて。

○學生時代

酒井稻花

あゝ矢張り學生時代がなつかしい。それも女學校時代が一番面白かつた。その中で偲ばれるのは去年一年間の寄宿舍生活である。去年の此頃は忙はしい又愉快な時であつた。クラス二十餘人の中で高師の受驗者ばかり特に同室を許され、室々眺めのよい舍監先生のお部屋に近い八室を與へられた。「六疊に四人とは究屈だ先生もあんまりだわ」などゝあの引きしまつたお口を曲げて泣不平を被仰つた敏子さんのお顔が目の前にちらつくやう。皮肉屋の敏子さんといへば、校内誰知らぬ者はない位、殊に立板に水と云ふお話振、談話會の飛入を以つて名高い雄辯家であつた。此お方には妙な癖があつて、少こし自分の腑に落ちぬ事があると、すぐに能書家と歌はれてゐる文科志望の靜枝さんに賴んで、わざと大きい紙に思ひきり墨太に例の達筆で「人間至る所青山あり」と書いて室の壁にはつて三人ようがられてゐた事を思ひ出すとおかしい。此三人こそ自稱〃クラスの三幅對て前の敏子さん、靜枝さん、樂天家と仇名せられた浪江さんとてある。此浪江さんにも口癖がある、皆頭をかゝへて机に倚つてゐるのに消燈リンがなると特別許されて居りながら、すぐとおやすみになる、其時に必ず「世の中にねる程樂はないものを起きて居眠るあほの三人」とこんな替歌で皆を笑はして寢入した。一度もそれを先生に聞きつけられて、肝心の御本人はご存知ない、後でいつてあげた時のお顔丸て金時の火事見舞よろしくだつた。去年の元日に正裝の三人を私が寫した紀念の寫眞がある。今年の元日にうつしてあげようならどんなものだらうと考へて見る。生徒風の敏子さん、奥樣姿の靜枝さん、女敎師よろしくの浪江さん、これを寫したらどんなに趣味深い事だらう。批評家の私も今年は文金娶ではないか。

○夜半

上毛もと子

何とはなしに茶の間の障子の骨を數へて居たら、目が疲れたので寢返り／＼した。細目にあけてある襖の間から茶の間の豆ランプの淡い光が頭の向ふの障子に一寸ばかり細くさしてゐて僅に反射するのだから、仄白い障子の外は眞暗だ。お祖母さんの寢いきが耳にする、氣の故か顏がけの白く見える樣な……ぢつと見ゝると、美しい小紋の樣な模樣が自分の眼から流れ出す、赤……紫……青……と見れば白いのも交つて、光澤のある樣なのが、何かの圖案で見た樣な美しい花模樣に似たのが、チラと見えた、と思ふと細かい粟粒の樣なのが動く。一秒間もぢつとしてゐない、目の先にあるかと見れば向ふにある樣にも見える。黑地に美しい模樣が流れて、上へも行く下へもゆく、右へも左へも――。四方から眼の前へ出て來ては逃げて行く――消える樣に。上向きになつて、その一つを見てゐると、だん／＼遠くなる／＼、遠い／＼國へゆくやうな……アッ見失つた。又他のを見てる――とその一つ一つが聲を發して飛ぶ樣に見えた。ザーッ、ザーッと、その聲が空間に充ちた。

目を閉ぢて心をすましてゐると、腦中が騷がしい、頭の中を通ふ細脈の音が合つて聞えるのであろうか。ゴトンと音がしたので茶の間の方へ向いた。長火鉢の影の向ふに白く見えるのは猫の樣だ、小聲で呼ぶと枕元へ來た、夜具の端を上げると冷い空氣が流れ込む、小紋の樣な模樣が乳のあたりから、スート擴つて外へ出る、出る。温かい腕を冷い柔かい毛が撫でる――。端を下すと、ゴロゴロ帶の處へまるくなつた。喉を撫でゝやつてたが、とう／＼冷たい顏を温かい中へ入れて猫と頰ずりした。幼な時抱いて寢た人形と頰ずりする樣に――。

○捨られし身

麻布花子

あゝ夢、夢、過去は全たく夢だつたわ。もう思ふ成ては自然に任せませう、抵抗もしませんとも、反抗、抵抗は望みある内のことですわ、生ある内の事ですわ、想うして世から距たれば、理想も空想も皆夢ですわ、不正の方の壓迫も受ますとも、……あれあんなに長く曳く自分の影にも騷ぐ心でありますのよ――月は

くまなく照してなりますのに、心の闇には夢とも現とも覺えませんわ、只行く私の足元さへ照して……あゝ行くべき處はどこでせう？世に捨られて葬られんとせる弱き子の尋ぬる家は何處でせう？行衛は知らず、歩むにまかせて行きませうよ、辿り辿りて行くにも落ち行く處は一ツでせうに、虫の音も、哀に響ますわ、今なる鐘は此の世を距てる最終の聲でせう？、遙に聞た聲も次第〳〵に遠くなりましたわ、……淋しい思ひや遣瀬ない思を憂に惱みし自分の影を踏みますわ、何處まで踏ますわ！あゝこれが世に遊ざかる距らるゝ最後の聲ですわ、……もしもこの聲が聞へたらば……

あゝ思ふに任せぬこの世の事は是非もないわ、——只、渡りくるしき此の世に戀しき人よ、長久に汚れずに、安らかにと戀に望を失ないし、破れし子が世を距とせる最終の思ひ出に果敢ない心の願だわ。

○まねかれて

福島市　齋藤若羊女

秋も半ば過ぎの、晴やかな日、母様の後から、うつむきながら杉山邸の玄關を訪れた。賑やかな庭の木々が紅葉して垣越しに見える、生花品評會の五字も床しい。ここの家の奥様とおぼしい、三十路餘りの、上品な令夫人に導びかれて定めの席に着いた。

三四十分の後、五十を二つ三つ越した、老婦人を頭に、赤い手柄の丸まげ姿、しとやかな令孃、濃艶、人を魔す的の、庇髮など、二十人近く集ふた。十八の、田舍娘然とした私が、年は一番、若かつたらしい。襖ごしに絹ずれの音と、其度に清水のささやきかと怪しまれる、流暢な都辨とが、ホ…の笑聲さへ交つて聞える。一通りの紹介がすむと、自分の席について、姿勢よく、ま白い手に好みの花もつて、或はほちらひ或は得意らしく、或は忙しげに、活動をはじめる。私は、チョキン〳〵と、すみ渡る鋏の音と、見くらべて、一人でにこ〳〵してた。

小一時間の後、白幕うちまわした別室に、赤い實の梅もどき、大輪の菊、白いお茶の花、きやらの木や、竹、南天など、皆位置よく並べられた。恭しく一禮して、根もとまで、よく拜見する。茶話に賞がいつて、ずゐぶん賑やかだつたが、私はたゞ、「遊ばしませ」「およろしうございますの」など、いふ、聞きなれぬ言葉を、珍らしげに口誦んで、すみの方に縮まつて居た。歸宅の道々、母様は「いくら話にきき、本に學んでも、自分一人ては井の中の蛙、なか〳〵うまくはなれません。今日の様に、皆様の中で、拜見さしていたゞくと、よしにつけ、惡しにつけ爲になります。一見は、百聞にしかずつて、ほんとうだよ」つてしみ〴〵いひなさる。私は「母様、あの會にいつて、私は別段益することも、なかつたが、新論文の種が、見つかつて、嬉しくつて〳〵と、申しましたので、ほんとに、お前は、いつも風變りだれつて、笑はれました。

○與兵衛ちやん

埼玉　文窓子

今日は日曜、六日間、わい〳〵暮した自分は、今日になつてみると、何となく、重荷を下した樣な、忘れ物した樣な、妙な氣がする。椽に出て、日向ぼつこしながら、小物をぬふ。六日間の、生徒の動作の可笑しい處など考へ出して、思はず笑つた。ひよいと首を上げてだれか見ては居なかつたかと、見廻したがそんな樣子もない。筋向ふの家でも、日當のいゝ東向の椽へ、陣どつて、與兵衛ちやんの頭をそり始めた。母（色の黑い）がだましながら、前の方をそる、與兵衛ちやんの顔が見えがくれする、突然に首をふると「ウヽ……」と聲を出して、驚いた顔し、かみそり持つた手を遠くへやつて又すかして、そる、漸く前と横がそれた、こんどは後、母は膝へ與兵衛ちやんの額をあてそり始める。動いたり、首をちゞめたりしてそらせぬ、母はあきれて居ると、祖母が駄菓子を持つて來て、だます、與兵衛ちやん、受取ると共ににげだして、口にほほばり「ヘ……」と笑つて居る。駄目とあきらめたか、母は道具を仕まつた。私は堪へかれて、高笑ひすると、ひよいと此方を見て、笑ひ、だんぐり〳〵と歩つて「姉ちやん」とやつて來た。「あれ與兵ちやん、いゝ物持つとろれ、ちこうしおくれな」と顔見ながら手を出すと、眞氣になつて半分よこそうとする、私は閉口て「いゝよ〳〵、與兵衛ちやん、お食べ。あれまあ、ずい〳〵が榮麗に出來た事だれがすつたの、母ちやんが、へーいゝ母ちやんだ事」と云ひながら見やうとすると柱のかげへ、顔をかくした。「おや〳〵後山が刈れないれ」と笑ふと、なほ、かくれる、祖母は袖無しと手拭を持つて來て、着せたり、手拭を頭へかぶせたりして、歸つた。母に似た黑い、と云つて可愛らしい顔をにこつかせて、袖なしのかくしから、茶の實や柏の實を私の前へつかみ出し、數へだした。



和歌

與謝野晶子選

○（天賞） 信濃 櫛原たづ子

山の上初日のぼれば十方の世界ぞ見ゆれ雪の中より

○（地賞） 千葉 神佐久玉子

香煙の中にしづかに横はる君にわが云ふことのつきなく

○（人賞） 能登 近江加能惠

戀の歌二つを愛でて病する少女と云へな彼の子この子に

【秀逸】

○ 東京 はぎ

喜ばずさりとて深くかなしまぬこのおろかなる少女とおぼせ

○ 飛彈 眞砂子

美くしく蓋してあれど毒の瓶持ちたまふゆゑ我は怖れぬ

○ 出雲 白百子

虎の檻まくろき鐵の格子より踵ほの見ゆ俘の少女

○ 加賀 勝崎菊子

我胸の眞白きばらに君はきて口つけにけり紅に染りつ

○ 京都市 楠田紫花

日も月もしらほも生める海原よ我か戀ふる子のいますしま生め

○ 安房 池田かや子

君が手をやがてはなちて別れきてにごれる海を見て歌ふ

○ 福岡 湯川玉子

うき世とは家がきつくり人さけび君に逢ふことさまたぐるもの

○黒髪はまたも亂れぬ横さまに霰をまぜて外は雪ふる　能登　勝田清瀬子

○木犀の強き薫りはわが髪の盛りなりける秋思はする　羽後　三浦ふみゑ

○ゆくと云ふちかひをなして來ぬ人を疎まぬ身をばさかしと言ふや　丹後　壺内文子

○村しぐれ三十路男の夜となりて米とぐ家の軒をぬらしぬ　伊賀　山村龍子

○我こゝろならくにおとしまた日をば見ぬ身とたれのしたまひにけむ　岐阜市　華水子

○春の宵美しき夢あまたもる器たまへなわが祈る神　牛込　塚原けん子

○戀てふは思はるゝ子も思ふ子もかく悶ゆるか夜晝となく　福井　片山千里

○人の死をねたしと口にする少女とがめ給ひぞ悲しき少女　寺尾　那尾子

○心いと平かにして端坐する夜なり灯影に待れまじもの　千葉　宇井紫花

○君といふものこそ我の世をせばめ只一人のみ見よといふなる　金澤　むらさき女

○その昔し美しかりしこの君もおとろへしてふかなしきことば　大坂市　山内深子

○あふがるゝいとこひしかる大そらの月は蝕しぬ惡魔の子ゆゑ　島根　すみれ女史

○椽側にくろかみをすく妹の障子にうつる影のよろしさ　信州　秋月さえ子

○捨てられし日のなげきより死と云へるものなつかしくなりにけるかな　兵庫　杉山春翠

○みやしろの燈籠めぐりまゝごとをせし日しのばるいてふのおちば　山口　酒向とし子

○ほそき灯に父の繩なふ晩秋の夜の姿の悲しかりける　秋田縣　加藤うん子

○神よなど我れにも病賜はざる君などひとり病みたまふらむ　伊賀　岡　花子

○うすべにのわが山茶花の花落ちて想ひ出多き日となりにけり　麹町　橋本ふさ子

○美しき天津乙女のくちづけをうくと夢みてほゝえむや稚兒　播磨　高見とし子

○親のなき子は物足らぬ様をしてとよめく街をうと〳〵と行く　能登　且田曉星子

○　讃岐　長尾ふみ

たはむれに兄がひきます琴の音をかしとほめぬしら菊の花

○　京都市　くちなし

かゝる時我あらずして御傍によその少女のあらば君如何に

○　豐後　小林シメ

初潮のにほひたゞよふ磯村の少女の唄の春めかしさよ

○　遠江　鈴木るかえ

金色にぬりしほとけの御像の今はくろみぬ我れに似るかも

○　兵庫縣　米田比奈

何日までも香りのうせぬ花かとも思ひし我は愚かなりける

○　宮城　沼倉[illegible]子

しみじみと過ぎし我が身のかこたるゝ夜の燈火淋しきかけに

○　茨城　岡田きよ子

秋の日やわがまつ人は紫の衣着て來たり白菊の花

○　東京　わかは

今夏に返しまつりし御文の戀しく惜しき心地するかも

○　長野　臥雲紫子

栗をりて歸る夕の風寒くかなたの森にしらぬ鳥なく

○　神戸　阿山とし子

君が面のやゝ晴れがたき一日より世をはかなしと思ひそめてき

○　兵庫　森口ふじみ

しか言へばわが眼を見つゝ癡の如くしかなし給ふ君が寂しき

○　麻布　花子

あなおえし人のいつはり見んよりは死ははるかにも幸ならむ

○　上總　森[illegible]美

亡き母に似たる病と聞しときうれしかりける死すと思はず

○　信州　藤澤さと子

目とずればふと浮びくるまぼろしの昔かなしき冬の夕ぐれ

○　高岡　野菊

悲しかる世も君ゆゑにわれ忘れありぬ必らず戀ならねども

○　麻布　石井須美衛

おん手をばしかと捉らへてものいへど君は目ふたぎさめざめとなく

○　長野　平林ちはる

はらはらと栗の落葉に音立て時雨降りきぬ君こぬ夕

○　信濃　古畑正枝

そら寐して君を歸しぬいつまでもいひわけ事を言ひ給ふ故

○　信濃　田中あさ子

物淋し花一枝を悉く望みのまゝに散らし見しかど

○　沼津　中村愛子

夜の人はみなおばしまにさそはれて月夜をめぐる大井川かな

○　麹町　牧野はん子

我心一つは君にとらはれて一つは母にさめざめとなく

○　豐前　赤田須美子

言ひ難き悲しみ抱きしらじらと大空をゆく雲をながめぬ

○　千葉縣　宇井花月

月と日のいまだ生れぬ昔より我等戀すと思はるゝかな

○　名古屋　日比いく子

鐘の音に夕日游らぐ山里の今日も暮れ行く春のかなしみ

○　上尾　松本春野

うしろより人のつき來るけはひしてかへり見かちに落葉ふみゆく

○　小石川　夕雲

秋風に身のあたゝかさうばはれてむくろの如く我れはなりぬる

○　中村ちか子

山路に見てわすられず黑蛇の如き目をして吾れを見る人

○　信濃　淺田いと子

此月の末に別るゝ君なりとかく思ふ時わが世はくらし

○　門司市　鈴木靜枝

吾がむれはいたくをどりぬ額上げて憎しと君をおもふと云ひぬ

○　深川　持田しげ子

ひとたびはめづらしき故そのゝちはたはむれ心君と相見る

○　美濃　淺野りう

山の上の御寺にしてなる鐘も耳あたらしう聞ゆる朝よ

○病人の一人殘れる山の湯の宿の廣室に秋の風吹く　石狩　市原まさ子

○こし方のうすくれなゐの花思ひましろの花はつめどさびしき　牛込　平塚白百合

○三年前知りしその夜にわかれけり今日また會ひてまたも別るゝ　近江　小倉壽榮

○故もなく胸のせまりて此頃は落葉ふむにも心おかるゝ　北海道　星　楠子

○紙のべて歌をかゝんと筆執れば窓にましろの桃の花ちる　神田　佐藤いつ子

○涙してあゝ涙してこの我をとらへんとすや惡覺のやから　赤穗　笹　舟

○古池に秋の日てりて藻などみな枯れて浮べりひるの鐘鳴る　美濃　ときわ子

○わがつきしてまりはそれて君が居るさうじたたきぬ春の一日　吳市　碓井松の露

○ふり二尺この紅に身をひめてわが世の果を夢にまぎれむ　東京　つゆ草

○七年を有髮の尼のわれよりと語るもさすがはづかしきかな　小石川　淼　汀

○或ときはさまぐの事言ひたくみ君が心を知らむともしき　牛込　星野あい子

○吾手とり今し行かむとのたまはゞ千尋の底の底までいなむ　千葉　峰島和子

○鴻の聲絶えては聞こゆみことばのいくつをわれの思へる軒に　南葛　鈴木淼子

○想ふ人誰れに誰れより數へにし昔もすぎて歌おとろへぬ　長野市　五月女

○星うすれあたりさびしき朝ぼらけこの天地に我一人立つ　盗　子

○凩の音立てゆくあれ野原枯木にほうとなくは何島　沼津　渡邊とよを

○銀杏の葉まばらに散りて讀經する聲ほのかにもきこゆる御寺　能登　和　子

○あたらしきやかたをつくり金をぬり花に似し子をむかへぬわれは　尾張　廣瀨かなえ

○驚きぬ怪しき鬼がもの言はずわが手をとりて雲をあゆめる　岐阜縣　日野歌子

○夜は明けぬやさしき兄が若水を汲むといでてたる軒のつまより　西多摩　三ヶ島よし子

○恐ろしき毒蛇來りて我が胸をまくと夢見ぬおぞましきかな　常陸　桂　井

○春は來ぬおとろへし子の蒼き頰をかすめて吹きぬやはらかき風　京都　田中よし子

○君といふ一つの灯をば見ればこそ我は行くなれ暗の大野を　奈良縣　福西たづ

○血は冷えて涙かはける君なるか戀なる少女歌にこたへず　横濱　露　子

○わが妹若水くむと眞白なるかひなのぶるを美くしと見ぬ　下總　相川みよ

○何となくものの嬉しく笑まれぬる紅梅さけばうぐひす啼けば　橫濱　千代香

○木枯の吹きやみし野のさびしさは君と別れし心にも似ぬ　下谷　青山季子

○秋の日のあかくとしておちてゆく川のみぎはの白菊の花　麻布　田代一枝子

○夕燒の山に並びて芽を刈る少女あろらし唄のきこゆる　廣島　橫谷島子

○彼の天の少女とわれの戀人と手をとりてゆく夢をみしかな　京都　天野春世

○おちそめし我黑髮のかなしさにそゝけて今日も其まゝに居ぬ　磐城　紫　子

○　信濃　よし子
みにくき手あまた來りてゎ髮の亂れんまでに引き合ふ夕
○　なみえ
わが若さうばひいなむとうちよりて寛の子かたゐと病む姉は泣く
○　讃岐　小野定子
影法師奴僕の如くよく仕へ我が泣く時はなぐさめて居り
○　千葉縣　池田加矢女
黒かみのやかれもやせんゆく秋の日あたるごとに君をおもへば
○　安房　神作いそし
船の笛潮のどよめる沖にしてしづかにふせる山に消えぬれ
○　佐渡　本間緑子
なつかしき小島なく日は姉上のかたみの琴をひきて悲しき
○　愛知　秋月
またしても火の細うなる燈火の下に悲しきみ文を見るかな
○　相模　善浪逸子
戀しかり林檎の花の香りにも似たる思は味ひえぬ子
○　和歌山　木澤てる子
うたゝれか夢のゆくへか冬の夜のかなりつめたき水仙の花
○　長岡　土田りた子
くれないの紅葉の一葉秋風にゆられて君の御ひざに落ちぬ
○　岩代　吉田きち子
山少女落葉集むる手をとめて思出多き秋の雲みる
○　安房　鏡仙花人
我が戀を我が戀歌を送るべき愛男もなく天地に生く
○　安房　花子
君が手にわが手かされて春の潮どよむ渚を二人行くかな
○　越後　美代子
小鳥飼ふ手をばとゞめて眺めけりうすらにふりし今朝の初霜
○　靜岡　金澤愛子
罪ならばそのなつかしき罪人とわれはよばれむ君もろともに
○　北見　今村りせ

雨の日や京の旅なるみ母より二尺にあまる人形のきぬ
○　千葉　澄子
右に富士左に筑波ながめつゝまなかにすめる幸多き我れ
○　かへて
君言はず我も語らず別れゆく磯の松原春の風吹く
○　福岡　林となみ
月をまつ思ひたれすやわが胸は日のおちてゆくかなしみの時
○　下野　富田いち
いく度かわれ思ひみぬ父君い逝きたまひしが夢ならずやと
○　京都　松原きぬ子
うしなひし君を思ひてさめさめとすがりて泣きぬ胸のとびらに
○　備中　篠原しげ子
あな美し君がおん頬と唇とみ手の楓の紅の色
○　遠江　伊藤ぎん子
今朝よりは冬ぞきぬると山の端に時雨の雲のゆききするらむ
○　鳥取　松浦春江子
白菊のあまたさかりに咲き匂ふ垣根に立ちて君を思ひぬ
○　京都　井上澄子
わが心悲しうなりぬ木々の葉のみな黄ばみても散りはてしゆゑ
○　遠江　鈴木小菊女
朝晴て夕は曇る秋空と少女心と何れたのむや
○　若狹　瀧本なみ
秋の風淋しき姉のやせし頬をふくやとおもひ涙おとしぬ
○　大分縣　田[illegible]女
彼の君のきます頃ぞと待ちをれば桐落るにも胸轟きぬ
○　和泉　谷ふじ枝
春の水下界に花を咲かすべく天つ國より來しと思ひぬ
○　伊豫　よしゑ
よき色の薔薇の花は世の中の勝ちし少女のくちびるに似る
○　三河　島英子
すみぞめの衣は昔のまゝなれどいつしか年は暮れにけるかな

○
空の星皆拾ふいと苦しめど君が心はいまだとゞ得ず　神戸市　落葉子

○
朧夜や眉に紫引き我もまたつえにともなひ月を見に出む　相模　はる子

○
人ふたり言葉すくなく物縫へるさびしき夜半の秋の雨かな　北海道　幽月女史

○
里川の清き流れや一えふの紅葉に秋の蝶のせて行く　本郷　相樂きみ子

○
殿に捨てよと神は宣へど忘るるよしのなきかの少女　伯耆　足立春子

○
吾れ一人旅に立出て淋しくも木曾川下る舟に月見る　長野縣　熊崎あや子

○
小春日やたり穂の中を娘達晴衣粧ひて芝居見に行く　筑後　古賀珊美子

○
夢醒めて故里戀ふるこの夜半を誰が母ならむ砧うつなり　小石川　渡邊芳子

○
秋風や友と別るゝ村はづれ雁の一つら鳴きすぎ行くも　本郷　渡邊三枝

○
山里の霧降る中に君が家のほの〲見ゆる朝景色かな　和泉　金田文子

○
栗なりて椎の實拾ふ少女子も玉の都のなつかしさしる　遠江　波多野ゆき子

○
行かじとも亦行くとしも云はざりき何はかられぬおん心ゆゑ　靜岡　鈴木ひろ

○
駒の嶽谷の小流れ草の香の心地よきかな秋の日の霽　徳島縣　野蘆

○
わが心唯何となう寂しさみ覺え來りぬ二十ゆくらん　名古屋　板津とし子

○
我が愛てし薔薇の花も秋風におちぬさびしき白露の庭　熊本縣　西原こめ

土佐　楓の花

○
すゝりなく聲はすれども月影に背きし顔はたゞ灰じろき　横濱　新井野菊

○
大海の渚につゞく砂原の小さき花に蝴蝶のなく　神戸　平田隆子

○
はらはらとあしの花散る川岸に夕の鐘を聞くは誰か子ぞ　岩代　松江女

○
夕ぐれの落つる日影に悲しさは同じかりけりおとろへたる身　神奈川　矢野きみ子

○
春の夜や美き人あまた並びゆく後姿を嘲けるこころ　大分縣　つゆ子

○
垣越しやさゝやくらしき人の影うつりて見ゆる春の灯の窓　信濃　紅百合

○
君戀ひて狂死せむ人ありと云へど寂しく笑み居給へる　秋田　ふみ子

○
夜の町の冷氣の中をあゆみ來し人にも似たり御手は執れども　筑前　中原とみ子

○
病む母とわが二人ある丘の家秋の夜すがら蟲の音を聞く　上總　鶴岡富路子

○
ふる里の野に出て今日も鈴菜つむ我が黑髮をめづる人なき　麻布　池田きみか

○
み名書きてひとり微笑む春の窓花ちる風におどろきしかな　長崎　折口梅子

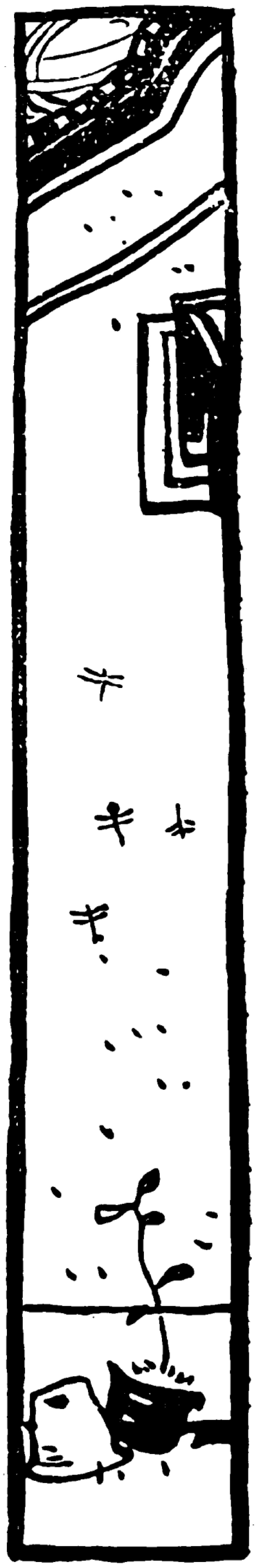
○
からす鳴くみ堂の屋根に霜見えて經きく朝の寒くもあるかな　香川縣　藤澤雪子

○
秋雨とよく似しものが我が頰をば流るゝと云へつれなき君に　本郷　望月蘭子

○
君見れば心の梭の往來して春の錦を胸に織り行く　四日市　辻一蘆

○
春の朝君に送らむ昨夜の夢いと美しき箱に藏めつゝ　三河　富田梅子

白濱のよする汀に紅の木の葉漂ふ秋の夕暮



日記

横瀬夜雨選

○製糸日記（天賞）

大分縣　立川悌子

九月二十七日　今日は私と、八重さんの當番なので、常より早く出掛る。

未日の出ぬ田舎の朝の靜な事、ホロ〳〵こぼれる露を踏んで行くと、荒木の前で八重さんに逢ふ、お早と、云ひ〳〵御門を入て見ると七時二十分、八重さんが水汲、私は煮釜の下を焚付る、中々燃ぬ、燻るので目が痛い、涙を拭き〳〵黒煙を立て居ると、叔父樣が顔洗に出て、「ホー狸祭か、」と、おつしやる、やつとの事て燃出した、

二十三人の七リンに火を入れ、お湯沸すと八時、皆さん集て繭を煮る、ガラ〳〵取初める。

水や、薪を寄せて置て、上枠にかゝる、

八ツの枠が中の二ツの外は中々切る、厭に成かけると先生が入らして「何てすか」と暫く踏て下さるがよく切る、時々知らん顔して八重さんを見ると矢張他所見をしてるのでおかしくてならぬ、

一ツも濟ぬに早十二時、何方もお晝てすよー、此時返事の好い、休時間は例の裏の塀に寄て、明日の試驗の話計午後は四時迄一換終つた、後片付をして、機械に油をさしたり明日の用意をして歸る、

九月二十八日　今日こそいよ〳〵試驗未當番と澄さんだけ自分の所や他の人の所に火を入れたりして當番に加勢してると、皆揃ひ先生が入らして、皆籤を取と一番が當つた、叔父さんの所て番を合して繭を受取、「何番か」「一番「イヤこれは〳〵お口の惡い事、一番籤を取たのが何がコレハ〳〵だろー、私だつて、一番に成されぬとも限らぬと思たが默て居た、今日のは一升三合其内ヤケや玉が二十有たので取換て貰ふ。

三十三のお釜はクラ〳〵沸立て、白湯氣が濛々と立上る。繭を左に網杓子を右に時計を睨事五分、十時を打

と皆さん初てもよろしい六粒付てすよ、先生の聲と共に煮る、口が立て、一せいにガラ〳〵と勇ましく廻轉を初める、四十日間の苦心も此一升何合の繭次第と思へばチユーの聲も上げる者がない、目鏡の下に集る六粒の白玉は飛鳥と踊、ジジジー節が來る、目鏡が拔る氣が氣てない、一生懸命取たので午後はほんの少し殘て一時三十七分に終つた、先の札を枠につけて、澄江さんつなさん、きみさん私、四人一しよに上枠にかける先づ後にもならず無事に濟だ早く糸量と品位が見たいと、明朝早く約束して歸つた」

田舍によくある協同して絲のとりくらをするそれだ、勿論所謂工場ては無いが。お孃さまを見るといやあな氣がする、指ていぢつてぐにやとするとびくとする」と信州うまれの山田くにえさんが言うてゐた、こん度出て來たらつかまへてあなたのお弟子さんにして、させて見ようと思ふ。

大豆納（地賞）

蒲原早蕨

十一月十日。晴。霜が見えて朝風が寒い。髮もそこ〳〵に急いて結うて了つて、すぐ帳場へ座はる。大豆納めの方は後見の叔父から配符を書いて貰つたので、遲れないうちにと齋藤に持たせて朝から小作人達へ配達させた。米納めのも帳面は出來て居るけれど、忙しいから配符は私に書けとの事。「帳面の通りにうつすのですもの書かれ升わ」、といゝ口きいたものゝなれないのだし、そゝつかしやの私もしか間違つたらと不安に念ひ乍ら書き始める。そして一枚毎に〇〇ひろ子と今年から自分の名を書き入れるので、何ともいうに謂はれぬ女とおもふ寂しいやうな……肩が重いやうな……。障子のはり更へと庭の植木の冬がこひの見廻りとにちよい〳〵立つてばかり居たので、夕暮迄に二十六名分だけしか書けなかつた。

同十一日。きのふ落葉をすつかり掃き取つて淸めたのも昨夜のあらしに、散らした木々の紅葉に戸外は一面美しい毛氈を敷きのべた如。杉の葉と松葉はかき集めて薪小屋へ、と、とみときよとに云ひ付けて、帳場へは入つて書きさしの配符を書く。弱い日影が障子一ぱいにさして光線がちら〳〵と私の頰のあたりをてらして、と見て居るまにうすべらく曇つたやうになつて、バラ〳〵と落葉にたばしるたま霰。

裏門の方からけたゝましく荷車のきしる音に、窓からのぞくと、「大豆を納めに來た小作人らしい、「ひろ子大豆藏だよ」と伯母樣がお呼び成さる。齋藤は用先きから未だ歸へらない、困つたなと思うたけれど仕方がないから出る。去年祖父樣がなさるのを見たやうに、サシをグッと俵にさし込んでお盆の中へ五勺程あけて、品質——光澤、乾加減、粒、——を考へて見て異存は無い樣だから俵數のかり受取だけ出して置く。目方や升のことは明日齋藤に立ち合せることゝして。内へは入ると續いて又二人、と後から又一人、みんな大豆勘定の人達て有る。二人は金納て取つて吳れとの

事だつたあとの一人は大豆が不作だから小豆て取つて呉れろと云ふ。それもいゝけれど、帳面が間違つて居やしませんか、〆高が多いので…とぶつくさをたんとこぼして居た。女だとおもうていろんな口を此野郎奴が…と少し腹立てたけれど、譜代の小作でなくて新小作人だしぢつとこらへて帳面を出して見せて「ホラ此朱筆の處だ



午後の仕事　横濱　千代香

け幾口も引いてあるでせう、立見の時の通りに。三め引から、四めん五分も引いてやつて有るぢやないか」と一々靜かに云うて納得させてやつた、あゝ。

『草生水日記』を書いた方ではこんなものは何ても無いでせう、がまだお孃さんだといふのに「この野郎めが」はおどろく、越後は大地主の多いところ、小作人のみじめさが思ひやらる。

○不平日記（入賞）

麻布　池田君香

夕飯の支度は最うすつかり出來た、茶の間の時計を見ると四時…お膳立をするまでには一寸間がある。母樣は朝から妹をつれて牛込の親類の家に遊びに行つたぎりまだお歸りがない。兄樣も何處へゐらしたのか大分遲い事、男は本當に呑氣でいゝ、父樣に障子の張り替へを云ひつかつてゐるのに、あゝして諸方遊んで歩いて日曜でも家になぞ居つた事はないのだもの。私だつて矢つ張り遊んで歩くのは好きだわ、時にはお友達にでも誘はれて出掛け樣ものなら、すぐ母樣の御機嫌が惡く、「何んですね君ちやんは…たまの日曜だもの家に居て自分の着物位い一人で始末しなくつてはいけませんよ」としかられだ、馬鹿〳〵しいたらありはしない。いくら一人で小言を云ふてゐても仕方がない、文さんの處へ返事を書こう…扨てと机に向いて筆を取つてみるが、自分ながら拙文拙筆には愛想がつきる、奈何して文さんは這麼にお上手なのだろう「羨しい、天才だわねー」、ひとりで感心して、今更ながら文さんの手紙に見とれてゐると、何時の間にか兄樣が歸つて入らして、「あゝ腹がへつた、飯だめしだ」、臺所で水をザブン〳〵かけて足を洗ひながら怒鳴つてゐる。「おうるさい、そん麼に大きな聲しなくたつて、つんぼじやない事よ」「何だ其處にゐたのか、早く飯にしてくれよ最う腹がへト〳〵だ」、お腹へらしの兄樣大騷ぎ…。早速お膳立てにかゝると母樣も歸つて入らした、「おやお歸りなさい」「あ只今、母さんが居ないで君ちやん忙しかつたでせうね」と莞爾「その替りお土産を澤山もらつて來たよ、君ちやんの大好きなもの―…」「なーに…？」「當てご覽」「分らないわ」「お甘諸だよ」、何かと思つたら…馬鹿らしい。「千葉からわざ〳〵送つて寄したのだつて…叔母樣がお前の處へつて包んで下さつたよ」おお太い長いのを澤山。でもおいしかつたからいくらでも戴く。眼をショロクロさせてお肴の肉をつついてゐた兄樣、横目でじろり「よく食ふなー」「エー食つてよ」「下の方をお氣をつけ…そんなに食ふと大きくなつてもお嫁にもらつて上げないよ」だつて、厭な兄樣。「いゝわ、兄さんになぞもらはれなくつたつて困りはしないわ」「なんだ…ひよつとこ」「エ…どうせ私はひよつとこよ…兄さんは美男子出ば龜みたいな好男子…」「なんだ」「何だら坊ちやん姉の種」ぼん〳〵云ふてやる。何時もの事とて母樣止めもせずに笑つて被居る。

何だら坊さんあれの種、「なるほど、姉さんの妹だけあつて口ははげしい。

【秀　逸】

○御座敷の日向ボコリ

大分　原田澄子

あのヂルの單衣をこわそうか、少し派手だからこの帶を解こうか、と並べて見せたら、有りもしないのにそうこわしたら後に出來はしないよとお言ひなさるので破布を着て少し許り赤坊の買物をして來た。日向に持ち出してメレンスの袷から裁うと尺を握つたけれど、人樣から聞いた許しては思ひ切つて鋏が當てられない今更に母樣の言葉を思ひ出して、机の下から裁縫帳をとり出しきたなく書き散らした一つ身の部をあけて考へ込んで居たら水町の奥樣が坊ちやんを負つていらした。縫るは此の人と思つてお尋ねすると經驗が有りなさる丈に雜作もなく切り離して下すつた、寸法等も帳面より實物をとお仰つて、態々坊ちやんのを持つて來て下すつたので早速縫ひ初めた、薄綿を入れるので先づ表丈縫ひ終つて擴げて見たら可愛い着物が出來てる、早く此の中に柔かい赤坊を包んで見たいと獨りでニッコリする。今六十日なんて待ち遠いわ、私は女が好きだけれどそれでは肩身が狹いなんてお仰るから何方だかしら？女なら母樣の須惠と私の美雄の頭字を合せて純とするけれど……。不圖思ひ付いて私は障子を閉し衿を明けてムッチリとした乳房をジイッとしぼつて見た、露の樣なのが少しにじみ出た、私は嬉しくつて堪らず俄然表許しの小さい着物をしつかと抱いて、乳房につけてまた嫣然。折からグッツ〳〵と靴の音、オヤお歸りなすつたのかしらと急いで衿を直し玄關に出たら、郵便ッと母樣からの小包、座敷に行つて封を切り、可愛い袖無しや襦袢を日向に並べて薄桃色の長い附け紐を引つ張つて見る。幼い時人形の着物を頂いた時の樣な心地がして母樣に成るなんてうその樣だ。でも、ほら又こんなに動いてるんだもの、窮屈でも靜かにしてなさいよと細帶をゆるめ乍ら獨り言してると、何時の間にお歸りなすつたのか、降つた樣に後に立つて、オイ〳〵と笑て破入る。

夫のもとの戀人から手紙の來たのを見つけて、切なる胸を姉上に訴へたのは誰だつけ、と言うたような記事なり、家内安全、お子さんもお望みの通りきつと女でせう。

○安息日

東京　夕ほし

期待してゐた昨日の運動會も行かれなかつたし、今日零時半からの音樂會も沙汰止みとなつて終つた。何だか氣が無茶苦茶するので、何所かへ參りませうと無理に母樣を引張つて當もなく家を出た。上野へ行つたつて母樣と油繪を見るのも詰らないし、一層電車を御乘用遊ばして淺草の活動寫眞めぐりとしやれ込まうか、考へれば今時分から淺草下りまでゆくのも馬鹿らしい、矢張り例の日比谷が。胸はもう不平の曝裂彈で破裂しそうだ、母樣がほこりが上ると仰有るのを態と、空氣草履の音をさせて、杖いた洋傘の先て、あたりの石やなんかをけりながら歩く。丁度、正則中學の

門から三人連れの書生が出た。洋服着たのが君今日の奏樂は海軍かい、陸軍かい」と云ふと、採み上げのない氣取つた和服のが「戸山だらう」、……ウム三時半？……急がなくつたつて好いや……」。そうだ、今日は日比谷に音樂があつたのだ、菊も、もういゝだらう、ワグナルの代りに、一曲立聽きの音樂もよからうと、俄かに母樣を促した。何とかの門から入ると、日曜で、人は溢れるやうだ、鼻茸で弱つてる自分は、尚更、ムウ／＼して堪らない、ボールの音頻りなるグランドを斜に横切つて花園の方へ行つた。何あんの事だと叫びたい、菊姫の玉顔には御蓋がかゝつてゐるではないか、きけばまだ植ゑ付けた許りて、日光や風にあてぬかてひだそうな、三時の音樂は四時に始まつた。愈ふいて愈ふこれ不平の種か、一週間の安息日も何もあつたものてない、今夜は早くふせらう。(十月二十四日、晴、發信二、)

おそろしくいらく／＼してゐる人だと見える、文も詩も、かくありてこそ、

○雪の日

越後　根岸光子

お寒むいと猫の樣におこたにかぢり付いて居たけれどこれてはならんと勇氣を出して、糸やと二人て道をつけに出た。藁ぐつをはいて其れにカンヂキを付けて頭から角まはしをかぶつて犬仕度まあ一夜の内に二尺五寸位も降つた。糸は先づコイスキて雪をかき分けては道を踏む、私も一生懸命て踏んだ道を廣くつけたらまるてお座敷の樣、それにカンヂキの跡が付いて心地のよい程きれいになつた。あたりの枯木には雪がつもつて丁度眞白の綿でも戴せた樣、其れに朝日がうつてきら／＼として私は冷たいのも何も忘れて浮れ出して、大きな聲て「白がねのうてな白がねの草木一夜になれる」と歌ひ出して、足拍子取りながら踏んで居るとお向ひの信雄さんと、富子さんとが「大きい山へのるよ小さい山へのらん」と歌ひながら面白そうに山をつんていらつしやる、私は丁度銀の世界にても居る樣な心地がして、何も彼も忘れて。

「大きい山へのるよ、小さい山へのらん」おも白し、「雪の名どころこしの國、八百八谷は雪にうもれて、信濃川をも堰きとめん、」私までうたが歌ひたくなりました。

○お守りの半日

伊豆　加藤爲子

「さ敏ちやん、叔母樣と大人しくお留守居して被在いよ。てはお爲樣お頼み致しますよ」
俥の上て、ほや／＼した頰に頰ずりして、姉樣はさも／＼惜しいといふ樣に、敏ちやんを私に手渡す。
「はい／＼憶に」敏ちやんはにこ／＼笑つてゐる。吉が梶棒を上げると、皆「御大事に……」とお辭儀をする。金齒をちらと見せて、莞爾笑つて挨拶なさるや否や、韋駄天と走つて、もう津田樣の前まていつた。
おや、こちらをお向きなすつた「御安心遊ばせ」つて言はうとしたが、聞えないと思つて默つてゐた。

通る人が俥の上を見ていくやうだ、本當に綺麗な方は德なものと見てゐるうちに、漸々少さくなつて、とう／＼横へ外れて了つた。氣がつくと皆內へ入つたとみえ、御門の脇には私と敏ちやんとがおいてけぼり！

「いゝわね敏ちやん」やつぱりにこ／＼してゐる。かうして此處にいつ迄も立つてゐたいけれど、大事の大事の預り子に風でもひかせては大變だと思つて、內へ入つた。二階へ行かうとして、臺所を覗くと、丸髷の恰好がいゝとか、何御器量が好いからだとかいつてゐる。たれの噂かしら。

居間へきて、丸々した足を前に出して坐らせたが、まだ口をきかないのでたゞ玩具を出して並べてやる。京人形が氣にいつたとみえて、頻りに弄つてゐる、なんて可愛らしい顏つき、姉様そつくり。大人しいので、この間にと編みかけの涎掛を編み始める。玉にした糸がころ／＼するので敏ちやん此度はこの方へ來た。まあ嫌、口へ持つていくのだもの。叱るかはりに莞爾笑つてみせると得意になつてゐる。こんどは旗を持つ、棒だからちと氣を付けねばならない、ひら／＼させながら中腰をするので立ちたいのだなと兩手をとつて歩かしてみる。どつこい轉んではいけませんよ。敏ちやん妙な聲をたてゝ笑ふ。ホホ……、まあ嬉しいの、御上手御上手、さこんどはこつち！！



絲あはせ　陸奥　須藤みつ子

逹者な筆だ、ちつとにくゝも思ふ。

○忍ぶ日

愛知　佐分華影

十一月九日

秋の空の美くしい氣もすが／＼とするよい日母様は妹を連れて御出かけ、リボンを三ツも持つて來てどれが宜いかと五月蝿程相談した妹の

衣服などをやう〳〵片付けて茶の間の長火鉢の所へ母様の様に坐した、下女の外は私一人ぽつち寂しい百舌鳥が長く〳〵鳴きつゞけて居る、灰に女子文壇女學世界少女世界と色々の雜誌を無意味に書いては消し篠田さん熊澤さん江口さんとお友達の名を書いたが詰らなくなつて部屋へは入ると雀が驚いて窓から飛び出してコスモスの中へかくれた私の方が餘程驚いた、本箱から去年の日記をくつて見ると本日の日が出た、名古屋の菊を見にとある、今年は二日前に見たし翌日は手紙調べする色々の事が忍ばれると書いてある、おお手紙お友達の、抽き出しから悉皆出して見る、樂天家淑子さんが御嫁入なすつてからは世の中つて復雜した厭なものだとか、いつかお友達つて無くても澤山よく仰有つた元氣なく今は返事にも困る程父母や友達が慕はしいの學校時代娘時代が一日にてもよいからまたして見たいのと、性質が一變して居る御家流の字で此れは母様に敎へて貰ひなつただろふ、峰子さんは毎も流がはりに、前書がいつも御上手て作文が出來る位だ雖然字の墨色がちと。末のグーットバイか目ざはりな日本風のあなかしこが優しくてよいと思ふ。村井さん幼い時の村井様と幾らない滑稽な事を呑氣相に書いてらつしやる、鬼ごつこして叱られた昨日結つて貰つた、髮を横寢してこはしてとか、夜になると目と目が貴女と私とより親密な交際してついコタリコクリして顔に墨ぬられてホ、、、とあるかと見ると私沁み〳〵考へると世の中と云ふ物はと眞面目くさつて厭世じみた事をかく、それて繪書茶の湯俳句の様なおちついた事に妙なとは。早婚なすつて早や赤ちやんのある人、子供の事ばかりいつの手紙も。町子さんは、事より大きい事ばかり書いて私を驚ろかすのがくせて、病氣の時など苦しくて爲様のない様な書きぶりだから御見舞に行つて見ると平氣で大きな聲で我儘云つて見える、等色々のお手紙去年よりふゑて居る、が其れだけ私の金釘流の字が行つて居て、笑はれて見られて居るだろう、ホッと一息すると、ロシヤパンの聲が聞える。

金釘をぶつつける人に限つて必あて字を書く、なかしいけれど、愛嬌にはなるてせう。友達の手紙を持出してあら探し(?)なするのは面白い、も少し深い或ものがほしかつたけれど、

○米搗き日記　土佐　桃野花子

一日、小春日和、暖い南椽で母様の髮を結ぶ、スーッと一すきすると白い拔毛が痛ましく櫛にかゝる。何だか悲しみが胸に沁みて三すきするのを二梳きてよす、母様は「もう婆様になつてねと寂しくお笑ひなさる。雜誌を讀んで居ると：裏てトン〳〵と米搗く音がいつになく胸にひゞく、あゝきつと母様だ!!と強く感じてとび下りて行つて代はつて搗く。トン〳〵とのどかに響く毎に踊り咲きの李がヒラ〳〵と臼の中に散りこむ休み〳〵つき上げた時は暖かそうに照つて居た日の光

お新小屋にさへぎられた頃だつた足の裏に五ッ六ッの豆をふんだ。

五日、秋の空は高く澄んで美しい日の光が何となくほヽゑまれる、五升入れて今日も米つき、踊り咲きのしほらしい花はもう散つて終つて枝から枝に渡した、ぬしなき、さヽがにの糸が輝やかしい。

小山一つ隔てた隣家からもトン／＼と米つく音のひゞいてくる、何となう床かしい、私の搗く音もやつぱり聞えるかしら、それにしてもどんな人!?とほヽゑんで居ると、「夏樣!!ホヽヽヽヽ」白手拭をかヽげて振り向くと垣根越しに光樣がニッコリ立つて居る、燃ゆる樣な紫紺の袴を胸高に、此日曜を音樂會に行くのだといふ、私はぼんやり見送つたが、ふと、たゆみない隣家の音に氣づいて勢よく足を上げた。

せめて、音樂會をもち出す位なら、石油發動機とでも書けばよいに、地から臼を踏むとは氣がきかない。「いれつけばかがろわが手を今宵もか殿のわく子がとりて嘆かむ」おわかりになりましたか。

○薪取りの一日

佐賀　西伊美子

ふりかへつて見ると、まだ縁側て姉樣が笑つてゐらつしやる。竹と私は、背負梯を肩にして薪取りに行くべく山路にさしかヽつた。葉には露が玉を結んでゐる。ホロホロと足におちかかる露の冷くていい氣持……女郎花、藤袴などが朝のよはい風にゆられて匂ふてゐる樣が可愛らしい。狹い道に馬のおとしたものがいくらもある。二三十羽ばかりの蝶がしかも黄色いのが、其上に翼を立ててゐる。歩みよると、パッと散る、蝶は花にてそと思へば、昌子さまなどは、どんなに、ご覧なさるかと、案ぜらる。大陽が地上から一間計り上つた頃ほひより、雑木まじりの道となる。右手の方に枝がさしかかつて、躰一つ入りそうな道がある。キユークッだろーといへば、でも早道てすからと云ふから、そこから登る事にした。中は入口の程までは、ない。だんだん廣くなる。自然のアーチだなーと、一人ほほ笑む。身を包むは新緑の衣。たまらなくなつて山路越えて……を歌ふ。ふと栗とだしぬけに云ふ。見れば、コイい茶色をした栗が、イガからはみ出て、も一おち樣としてゐる。枝よりと思つて、手をかくれば、圓い栗がホロホロとおちる。青いのは、いくつもあるけれど、少し早いから此次の日曜まてと取らずに行く。

馬のおとし物は黄、蝶も黄、そして栗も黄だつたでせう、おいしうござんしたか。

○教室日記

京都市　井上すみ子

第一時、石附先生の數學。禮がすむと、直ぐ三人は呼ばれてボールドの前に立たれた。一番左の磐田樣には綠のリボンが一番よく似合ふ。校内一の皮肉屋も眞面目になつて、XYZと未知數を並べて考へこんでいら

つしやる。眞中の富井樣は、重いやうなお頭を一寸かしげて、チヨークを握つたまゝボールドと睨めつくらばかりして、容易に書き出さうとはしられない。常には隨分お口も達者だが、こんな時には……好い氣味だと獨り心に微笑んだ。右の柏木樣はと見ると、これみよと言はぬばかりに、頻りと運算の誤りを調べてゐらつしやる。三人三色だなと思つた。

第三時、古川先生の國語。大塔宮吉野落の所を敎はる目に淚を浮べて講義して下さるを、四十の廂髮は咳一つしないで聞いてゐるうちに、由良の湊を見渡せば……といふ所まで來た。私は歌かるたの　由良の門を渡る舟人揖をたえ……をふと思ひ出し、そして去年の正月のかるた會を聯想した。先生は、ハンカチフで目を拭ひつゝ講義をしてゐらしたが、私の腦へはちつとも入らなかつた。

第五時、牧村先生の體操。一昨日敎はつたの丶練習。跳ねるやうなピアノにあはし、小聲でマーチを歌ひつゝ四十の紫の袴が、みな一樣に飛んだり跳ねたりするので往還を行く人も立ち止まつて、松や椿の葉の間から覗いてゐらつしやるのもあつた。次に先生の一番お好き──な我々にとつては極めて幼稚なと言つてゐる──シスターダンスをやつた。今日に限つたことではないが、クラスメートでの運動家吉川樣が、憶面もなく大きいお臀をお振りなさるのを見てはふき出さずには居られなかつた。

作者の人格おもひ見るべし。

○栗の香

本所　靜子

臺所の笑聲で目がさめたら眩むさうな朝日は、小な玉の影を障子に寫して室の中が明い、大兄さんのお土産の可愛らしい懷中時計は、机の上で八時を過ぎてゐる。氣まりが惡いのでお飯もそこ〳〵にして、久しくお休みしたお學へ行く、ちびの泉さん來てゐるて私と一所に始た組を今日上ざらひするのだつて、私がまだ半分も進まないのを知りつゝ皆に吹聽してゐる、いやな人だわ、今に追越してやるからいゝ。歸つたら小兄さん來ていやらしやつた、午後明日の練習すまして緣の藤椅子で、濃い紫紺と白のあな糸で銀貨入編ていると小兄さん氣になると見えて、それ僕のかい、とおつしやる、いゝえお艦の兄樣のよと澄していつたら、何んだ此の前の遠洋航海に時計貰たので又何か貰ふつもりだなつて冷かす小兄さんぢやあるまいし其な積りじやないわ、と負けない氣でどなつていたら臺所から用がないなら一寸手傳、頂戴な、と忙しさうな姉さんのお聲、來て見ると姉さんもみれも手を粉だらけにしてかきのふらいしていらしやる、

お手傳すませて皆食卓に付たのは五時すぎ、小兄さんたら、お前の揚たのは生だのまづいのとおしやりながら私の分まで召上てしまつて、お箸を置くとすぐ、歸るのがおそくなつたて制帽やマントを引たくる樣にして急いでお歸りになる、後は急に靜になつて淋しい。今夜鎌倉から久しぶりで父樣と歸京する病弟をまちつゝ火鉢にくべた栗の香のする茶の間で母樣にショールおねだりした。

○冬籠り日記（其一）

越後　佐藤浪子

十一月のある日、雪國はもうそろ〳〵冬籠りの仕度をせねばならぬ、「今日は お天氣らしいからお爽を出して お異れ」つて中島の〇〇へ電

話をかける、お米どんといつも頼むかアーヤをたのむ、きいちやんは飴り嬉しくつてお飯が食べられないつて云ふ、私も御飯が食られなかつた頭が宜かつた。入時がうつ、お母さまにお留守居をして頂て姉さまやなんかと河岸へ行く、今日はお仲間が六七軒もある、大分の賑さだ、お早うだのお寒うだの冬が來て困ります、なんてお定まりのお話が此方にも彼方にも取り換されて居る、其聲がほんにはしやいて居る、春のやうな心地がする。長岡の名物の一つに數へられて居る中島の菜がヨイショ〳〵と運ばれる、私のとこのお菜も來た、キラ〳〵と日が照つて來た、日陰の霜が溶けてゆく、見上げると河岸の木の葉は大方落ちた。サラ〳〵と流れる奇麗な所へ梯子渡して四分板を置いて米俵の空がらを敷いた洗場が三人分拵えてある、今年は私も洗手にして貰ふ、僅かに大人になつたやうだ、姉樣のこしらへて下すつたお菜が一把づゝ洗場へ運ばれた、一株とつてザヤブッと水の中へ入れた、冷い事肩がぞく〳〵する三株と洗はない中に指が蝦のやうになつて一寸も自由にきかぬ、泣き度いやうになつた、今更下るも極りが惡し、ソッと隣りのお米どんを見ると平氣でごしや〳〵やつて居る、つけ方の姉樣が橋の上で笑つて被居る、……‥慣れてくるとそんなでもない、紅い木の葉や枯れた菜つ葉がズン〳〵流れて行く、水が暖くなつて來た、面白い世間話をお米さんがする、散々笑ひこけた、其聲が行く水に流れて何とも云えぬ感がする、お母樣が茶を入れて川越いものお美味しいお茶菓子て「皆さん、御苦勞れ、サアお茶お上り」といらした頃、と見渡すと年かさだけにかーやや一等洗ふ事が上手、姉樣がお嫁にいらつしやると此度は私がお漬け役。……一寸お時計を懐からみると十時半……。

○夕餉のまどひ

福岡市　匿名子

未だ御酒はぬるいようだ、御膳の前につくれん坐つて居ると妹が一封の手紙を持つてきてくれた、見れば御義兄樣からなのだ御父樣が何やらいつて居らしつたが分らず巾巾によんの居ると、御前刺身はなかつたかと少し大きな聲かけられてびつくり、おや忘れてましたよと膳戸棚の中から御刺身を出してきて上げる兄樣の昨今が思ひやられて御箸取る氣にはなれなかつたけどやうやくにして無言の内にすました、弟が廣告を持つてきて御母樣ふとん講の廣告よ掛金が何ほで本くじが何々花くじが何々と順々によんで橋口町武石迄來ると、あゝあのトッピン〳〵ピーン〳〵トッピンやつてる家だよといつたので一同大笑ひ、弟は又よみ初めた、「おもてしろきふとん講」といつたので兩親と私妙な顔と顔とを見合して居ると妹はすかさずおかしい事よ面白きふとん講よといつたのでまあ新三さん馬鹿れと又笑ひ入る私は笑ひつゝも兄樣の事がやはり氣になつてならぬので早く片附けてしづかにしようと思ひ御膳をこちらへ取らうとすると、御母樣がも少し食べさしてとおつしやつたので又々笑ひこけた。

今夜の夕餉はつい三度の高笑ひてまどひをといた。

○日曜日

本郷　折香

朝の内は素足にこたへた椽先も日中はポカ〳〵あたゝかい、今日の樣なよいお天氣に宅に居るのは惜しくて仕樣がないても私は今日は大役があるのだと思て我慢した、毎年漬け込む松茸を今年は私の役にされてしまつた私は手傳てもらう事はきらひだから何もかも一人てしようと思うと隨分忙がしい火を燃しながら松茸を洗て居るともうすぐお湯が煮え立つやつと洗ひ上げて蒸籠へ入れてかけて暫くしばらくするとたまらない程いゝ香ひがする、一つ出してさいて見ると最早むせて居るから下して此度は卯の花と鹽を炒てみんなさましてをく、それから脊松葉取らうと思て庭の松の木へ梯子をかけたけれどもこわくて登れないからこれだけは濟に取つてもらつた、それから卯の花と鹽を等分にまぜて瓶の底へしいて其の上へ松茸をならべ又其上へかけて脊松葉を間へ入になから幾側かに漬けてしまふ、蓋を目張りして全く出來上たら大變な仕事でも仕上げた樣がつかりした、今年のお雜煮へ這入る松茸は自分で漬たのだと思ふと今から其美い美味しさが思ひやられる。

○師走日記

名古屋　胡てふ

三十日、おかちんは出來てきた、母樣のおそばをはなれて始めてのお正月ゆゑどうしたらよいのやら一寸ともわからぬ、夜旦那樣について、梅と廣小路へお正月の買物に行く、メヤ小松や海老串柿に橙々など求かへりま

ぜうと申ゝのに松竹梅の鉢植に價をつけて鳥渡とも彼在らないので梅と二人でかへると、お新が火鉢にもたれて居眠りして居る、旦那樣はとう〳〵大きな鉢植を買ふていらして松や梅をいじつてばかりいらしてお貢組のお相談申しても只フム〳〵と被仰るばかりで相談にはのつて下さらないので梅におそはりながらいろ〳〵と支度する、

三十一日、早朝から御馳走のこしらへをする、田作をいるとおしたじが出來て妙なものになつてしまう、こんな事なら母樣によく伺つて置くのであつたにと一年前のお正月が戀しうなる、晩に神棚や床の間に鏡餅をお飾りして軸も掛けかへて置く、明日の廻禮の御紋付きやお袴を出していずれお友人も被在る事ゆへ私の[illegible]樣も出して置く梅と新とに暮れの忙しいのに仕立てて置いた、ついの縞の綿入と羽織に足袋に足駄を添へて出したらもう〳〵大變な喜び樣、新は目ばかりになつて喜こんでくれた、毎年母樣が何十人の奉公人にかうして出しなさるが、たとへ二人ぎりの奉公人でも今年は自分で出したのを、こうも喜こんでくれたかと思ふと忙しい中を自分で仕立てた私まで嬉しい、里に居る時の今日は朝から目のまはる忙しさだのに此の靜かなのが何んだか母樣が猶更戀しい、此有樣をくはしく〳〵かいて差上げた、床に入つても鳥渡とも眠むれない、どこか遠くで百八の鐘が氷るやうになるー

○齒痛一夜

若松　吉田きち子

肩を使つた故か齒が痛くてお針も手につかんので、讀さしの雜誌を出してみる、例だと姉樣に『何處が痛いのだろー虛病ぢやないか』と言はれる程熱注するのだが今夜はどうしたのか二三頁見たら倦々して見る氣がない、齒ばかりづきん〳〵と痛くつて、肩と耳がくつつきそう、母樣が寐たら何うだと仰るので少し早いと思つたが湯にも入らずに床についた

ふと目が覺めると四方は眞暗になつて居て物の影さへ見へぬ、はて何時頃だろーと思つて、痛い齒をおさへながらマツチを摺つたスツと音がして、パツと明くなる、お父樣もお母樣もよく眠つていらしやる、時計は十二時過だつた、何だか足がホペ〳〵するようで氣持が惡い、て裸になつて風呂場へいつてみた、眞暗だけれど繪のような月が、指し込んでホツホと上る湯氣が齒に見える、今度は眠られようと床に入つたが、時計の音が耳に入つて、何事かを囁く樣で仕方がない目を閉ぢて耳をおさへて、息をつかんようにしてゐたら、今度は聞えなかつた、齒は先刻より何痛む、苦しい泣くまいと思ふのだけれど、涙がずうと頰を傳つて、無中にウーム〳〵唸つて居た、二時頃だつたろう、母樣が目を覺して「まだ痛むのかつて立つて梅干をはつて下すつた、それでも未だ痛むので水で冷そうと思つて起きた、盥へ水を汲んで窓を見ると、月は中天に済く〳〵澄みきつてゐる四隣はしんとして虫の聲だに聞えぬ、こんな時いつも姉樣がなさる事をして見ようと思つて鏡臺の前へ座つて、中から髮剪を出した、鏡を見るとぴかつと光る、何だか恐いようでとる氣になれぬ思ひきつて口熱のはれた所をきる、少し痛かつたけれども氣持が良い眞黑の血が出た。母樣はよく眠つてゐらつしやる。

○晴、曇

京都　田舎娘

十一月七日、日曜日(晴)

花屋のお絹ちやんは、京へ行くんだつて、朝から大嬉びして騒いで居る●私は作済のお手傳で急しい上に、叱られて計り。何となく恨めしい。夕暮、黒繻子と紅友染の立はぎの帶を丸く結んで、紺がすりに紅いふきの六分計りも出た綿入を着た絹ちやんが、張り切つた信玄袋を下て、にこ〳〵物て返つて來た。

八日、月曜日(曇)

毎朝合ふ工人に、今朝は罵倒されて、何だか變だつたから思わず一睨したら、追つて來た友に、背を打たれて痛かつた。

十日、水曜日(曇)

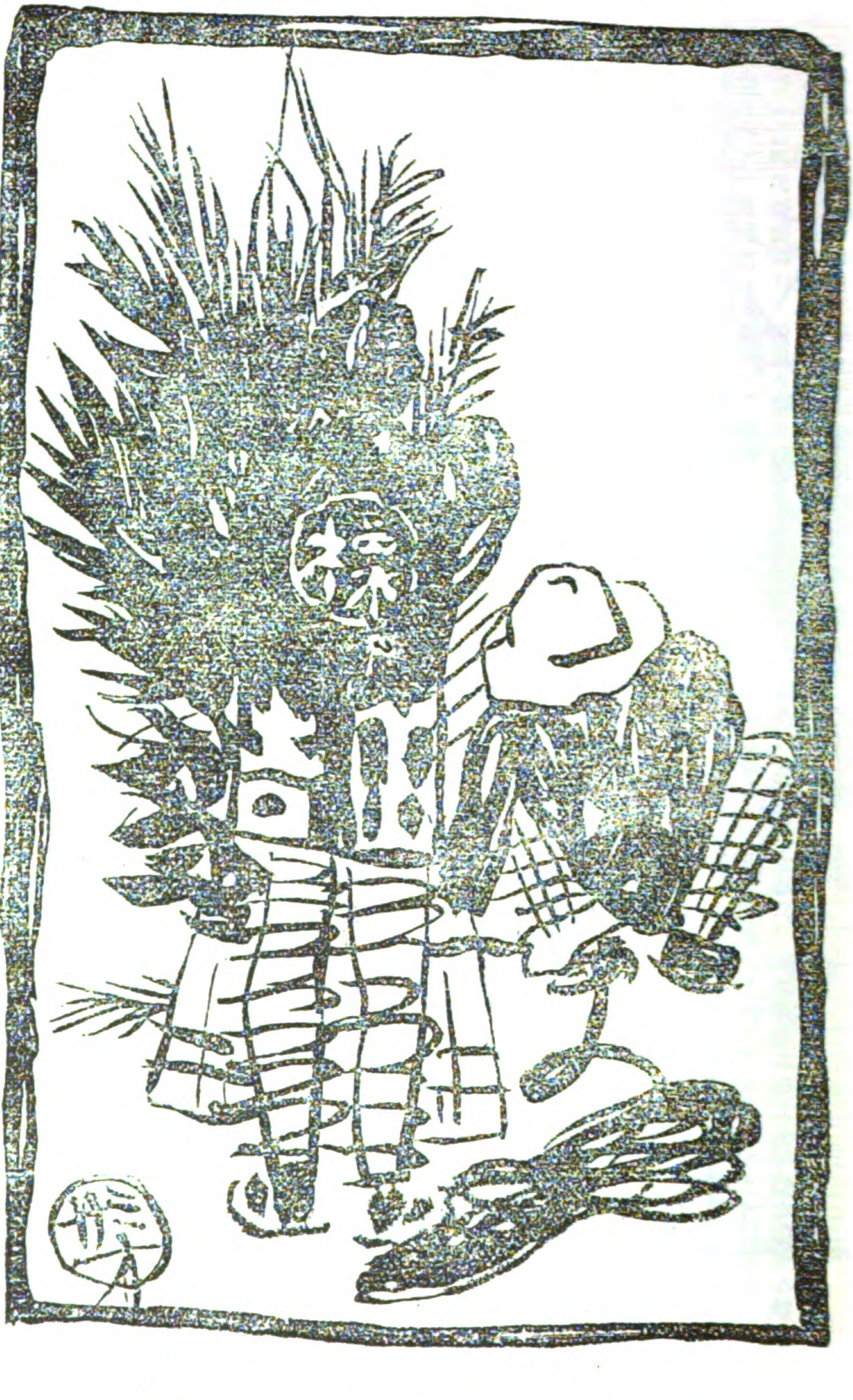
箒を持つて、先生がいらつしやる二階へ上ると向の窓から、秀子樣が「お早う。」「お早う。」貴女、お正月のおべゞもう出來て。」いゝえまだ、今縫つてる最中。」「あらさう、私のはもう出來てよ、けども帶がまだなの。」「え、何が。」帶よ、帶がまだなのよう。」「さう、私は、帶や羽織はもうちやんと出來てゐるの。なんてまるで電話で話し合ツてる樣な大聲で、朝つぱらから、夢中にしやべつて居つたら、「毎度はゞかり樣と」先

生が上がつて這入つたので、皆て、「えへ、、、」と、理無く笑つた。そしてすぐ、大急ぎに、はたいたら、障子に大きな穴が、幾個所も〳〵開いて先生に笑はれたが、父母には叱られた。

○二日間　牛込　かへり花

十月二十九日金曜日、曇天湯より歸りし姉上化粧して着物を着かふ「何處へ」と問へば「買物に」と答ふ。昨日は二十八日なれば姉上は給料を貰ひたるなり。妾もうらやましくなりて、學校なぞ早くよして何處かの女事務員にならんなどと思ひたりき。

姉上は家を出る時、母上や父上に「無駄なものを買つて來るなよ」と云はる、姉上は默つて行きたり。妾は窓を明けて、見えなくなる迄姉上を見送る若い月給取は親の側に居て何不自由なく、取つた給料にて買ひたい物が買へてよい、一人淋しく机に向ふ。



歲暮所見　新潟　吉田みさを

十月三十日、土曜日、晴天。故郷の友より手紙來る。田舍の秋だよりなり。近日栗を少々送るから受取つて下さいと終の方にあり早速返事を認

く治子さん浅草見物にさそひによりたれど、まだ此間行きしばかりなればとてことはる。別に不足らしい断もせずして歸れり。庭に出て洗濯す。空晴れて實によき日なり。高き秋の空を眺め居れば、田舍へ行きたる樣な心地す。

夕方、丸山書店に女子文壇を買ひに行く。暫く少女の友や女學世界をいぢくり廻して、見あきた頃女子文壇を買つて歸る。

姉上は夜勤なればまだ歸らず。

六疊に一人殘て、バラ／＼と云ふ時雨の音をきゝぬ。

○英語のおけいこ　藤澤　常磐幸子

私は今日から英語の御稽古、今迄は、隨意科だからいゝわなんて知らん顔して濟してたけど、近頃兄樣からは煩く責められるし、愈々知らないわては通されないと悟つた故厭でも始める事にした。勉强室に入りて先生の御出を御待ち申す。昨日迄のクリーム色窓掛が鼠色となり、卓上のコスモスが、白菊に替つて、何となくもう天長節だと云ふ感じがする。九時過御出でになつた、お年は廿二三？余り肥ては被在らない、ジミ造りて油氣の無い束髮の亂毛が白いお顔にこぼれた工合一寸淋しいでも大層溫和な親切なやうな方、昨日と今日と御目に掛るのはまだ二度目だが何となくお慕はしく思ふ。

二日、料理講習會の皆樣と明日の天長節かけて鎌倉に遠足する筈が伊藤公爵の薨去に付いて、遠慮して中止となり、大に失望例に依り、朝餉すまして、勉强室に入る。リーダアを卓上に置いたまゝ、襟の線を弄したり前髮を梳して見たりして居ると、コツ／＼扉を叩いて、先生の優しいお姿は現はれた。急いで椅子を進めする、先生は「さ始めませう御本御覽なさいませ」と、丁寧に御敎授下さる、昨夜百合さんが被在つた時、何でも、先生は深い御事情あつて、出敎授なさるのだと御話しになつた。先生は、まだ何とも被仰らないが御顏には、何處か憂が籠つてゐるやう

五日、授業後先生と庭を逍遙する大分色付いた櫻の葉がクル／＼と澄切つた空を舞つて行く、ベンチに休んで柚子の樹に澁黃味掛りた果が鈴なりだが流石に靑生迄も柿の全盛時代の樣な勢はあるまい抔思つてると、ドレミファをオルガンに合はして頻りに聞こへる、あゝ又百合さんだ、同じ事を毎日何遍も繰返し／＼よくまあ倦きないものだ。然う云う自分だつて、發音が拙い、舌を出して、唇をかんでと一々直され通し、他から聞いたら矢張りおかしいだらう、此麼事ではいつ會話が人並に出來るか分りやしないと心細くなつて、「これ先生いつ私覺へられるでせう」と云つたら、先生は「自信は成功の秘訣って御存じでせう、倦きずに御やりなさいませ屹度進みます故」と輕く笑つて被在る、御歸りの時、黃菊白菊五六本切りて差上げた。

○十月四日　葛飾　鈴木春子

落毛のやうに散らかつた藁くづが竹箒の先に絡みついて掃惡くて仕方がない。さゝと音する度に、白い埃がぼーつとよぐれる樣に立つてきら／＼と木の間から射す黃いろい光線にもつれてゐる。母屋も物置も軒下一ぱい稻が積まれて、稻の上から一寸許り見える窓の內は、もう眞暗になつた家と垣根のまわりの雜木畑とてくるつと丸く切拔いたやうな空は、さながら賢い瞳のやうに澄渡つて、淸冷の氣がひし／＼と身に迫るを覺える。折柄、裏山の方で、きゝゝと、絹のやうに張り切つた空氣を引さいてけたゝましく百舌鳥がないた。

お、さうだ、私は急いで火鉢のそばに走つた。そして鐵瓶の下を掻廻した。どうせう、螢火程の火種も無い。もう直ぐおひるだから、まさかお客も來やれやしまいが。けど又此間のやうなとがあつてはと、私は臺所に走つて、消炭を持つてきた。棚の古新聞を炭の上に千切つて、ぽーつとマッチでもやして、吹竹でぷー／＼吹く。なか／＼付かない。自烈たい又一枚、今度は丸毎くべて、やけにふく。と、白い灰が紙形に殘つて、こはすのは惜しいやうだ。そうつと灰をのけて見る。すると、黑い炭のところへ、處々、赤いといつても血のやうではない、一種の輝きを持つた火が付いてゐた。私は或物を得たかの樣な微笑を禁じ得なかつたが其れも暫時、急ぎものといふ烈しい一言にむち打たれて又、裁板の前に座つた。

論文

編輯局選



○社會の優等生たれ

（地震）　磨志緒

學校時代に學業優等品行善良、校の模範生と彰表された其人が、愈々活社會に出てゝ後も、はたして英俊譽高く、社會の優等生たり得る事疑ひないでせうか?、之に反して學生時代には或は野球に熱狂し或はテニスのチャンピオンたる名が高いばかりて學課の成績は、とんとお話にならず、授業中も教師の言は耳に入らず、机上の時計の針にのみ目をつけて、早く運動時間の來るを待ちあぐむと云つた風の人が漸く歳月の經つ儘、危いながらに學校生活を終り、社會の一員として立つたとして、扨て世に處すべき法を知らずして無能の人として一生を終るでせうか、私は決してさうて無いと存じます、學校には一の校則があつて、其定められた圏内に入つて勉強し運動し、又操行を謹しめば、それて立派な成蹟も得られ優等生と呼ばるゝ事も出來ませうが、一度解放され社會に出て活動するにあたりては、學校の如き小規模の中に、齷齪して居る調子ては決して此大舞臺に於て立派に立働く事は出來ないだらうと信じます、されば學校社會の兩方にて優等となる人は素より是程結構な事はありませんが、學校に居るのは多くとも十數年、社會に立つは己が身終る迄てすから、其永い間、殊には世の爲國の爲に立つべき社會の優等生たらん事を望んて、之が基礎を作るべき學生時代に、よく勉強したならば、其優劣によつて慢心或は自棄の心は起さずとも、やがて眞の力を試めすべき社會てふ試驗紙が目の前にありますから、それが青なり紫なり思ひのまゝに變化して參るだらうと存じます。

評　まだ若い處があつて周到ては無いが近頃の快論たるを失ひません、學校て精力を疲らせてそれから先きの勉强をしない樣な日本

人通有の弊に對しても好一針でしやう、と云つて學校を疎略にする者が社會の優等生となる事も嘘でしやう、要は其人の眞面目な態度如何にあります。

○生きる爲に生れたのだ（人賞）

滋子

私は非常に健康でしたが、今年の暑中休暇からふと肋膜を煩ひまして、苦しい時にはもう死んで終ふ方がましだと思ひました、或時は此病重るなら早く重もつて此身に解決を與へてくれとも叫びました、が、ふとこんなことを考へました、抑私は何の爲に生れて來たのだらう、まさかこれまでに育つて、人生の半にも達しない今日この儘て土に入るべく生れたのではなからう、さうだ、天は私を生かす爲に造つたのであらう、私は生きる爲に生れて來たのだらう、死ぬ爲に生れたのでは慥にない、社會に盡すとか働くとかは其上の事だ、病などは月にかゝる叢雲位のものだ、月は爲めに暫しは曇るが永久に光を奪はれることはない、人間の靈は月の樣なもの偉大なるものだ、雲たる病に靈の光を奪れる事はない、又奪はれてはならない生きやう、私は永劫に生きやうと叫んだ、すると今迄の苦しさも、何處へか去つた樣になりました、これは病人の空しい氣焔ではなからうと存じます。

評　綱島梁川氏曰く「若痛の刹那人は往々默して聖者となる」と、病中の瞑想此天來の福音を喚び來つたのでしやう、病は晴雲の如く又低氣壓の如し、これを自覺したのが幸福であります

○人の美點を見出せ【秀逸】

山口紅葉女

人に對しては美的方面を認めなければなりません。然るに女は兎角よるとさはると、人の批評惡口を持ち上げます、多數の人の譽める人でも何か一つの缺點を見出した時には、恰も蠅の臭物に集るが如く、思ひ思ひに惡口して話に枝がつき果が實つて遂に其の人に意外な迷惑を與へる事は度々てす、況して少しく缺陷の多い人等の事は、折にふれて其の惡口を耳に致します。人間神ならぬ以上誰れしも完全な者はありません。然るに其人間の缺點に目を付け出した日には、實に限りのないもので、御苦勞樣にも常にそう云ふ事をして居るならば、知らず知らずの間に我が品性は下劣になつて、人の缺點を探るに名手になつたと同時に自分の德が地に落ちるでしやう。これに反して如何なる缺點の多い人にも必ず一二存する美點を見出してそれに倣はふとするならば如何なる人でも、我が修養上の手本とする事は優に出來ます。又斯の如く常に心掛けて行けば品性は高向になつて、人が惡口を云ふのを聞くも忌

はしくなり從つて若し聞かされた時に於ても、皮相な考からそれに雷同する樣な事はなくなります。之を擴張して世人が皆そう云ふ心掛けて居たならば、惡口誹謗は忽ちやみ從來の惡弊を除く事が出來るだらうと思ひます。

評　互に讓りて各他人を優れりとせよと古の聖者も云ひました、人には何か特長がある、その特長を互に敬し合ふ事が品性修養の上に益あるのであります、此論此消息を論じ得て大に可し、

○女子の務めに就て

近江　靜江

日本は昔から女子のえらい尊い國であります、神代の時には天照皇大神宮樣は女の神樣であらせましたが、日本の國ををさめなされました、されば神話にも春の神樣を佐保姫と申し、又秋の神樣を龍田姫と申して、婦人の德を稱します、日本の國を東海姫氏國とて女の國であると申ます、されば賢婦人として春日の局の如く、松下禪尼の如く又伊達騷動の政岡の如き、其他賢母良妻としては楠正行の母の如き、山内一豊の妻の如き實に得がたき婦人でありますが、しかし夫等は皆婦人の務めの一部分を盡した人等であります、偖婦人が其務を全くするには如何にせば宜いかと申せば、第一は敎育でありますが其も文學や哲學よりも、矢張科學でなければなりません、淸少納言や紫式部の如きは格別として、まづ看護法や理科の書を修めねばなりませぬ、第二は社交の事であります、此は家庭を治める上に、賢母良妻としては內助の働を



靜姿　仙臺　佐藤ふさ子

なすに必要であります、第三は經驗であります、婦女子は兎角外に出ませぬから、時事問題の事を知る事が少うあります故に、時世に遅れぬ樣務めねばならぬ、私が或女學校に居りました時先生の話には西洋の婦人會では皆時事問題を研究して居ると云ふ事であります、最後に修めねばならぬのは婦人の德であります、此は多くの困難に堪へ同情心を養ふ事であります、以上の如く教育社交經驗修德是等を全ふせば、淑女賢婦人及び良妻となるのであります。

されば謙遜にして品格高く、勤勉にして規則正しく、慈悲にしてしかも優美なるべく、内は能く家庭に慣れ、外は能く社交に慣れ、以て子女を養ひ良人を助け勵まし、高尚優美なる生活を爲せば、即ち一家の幸許りではなく、引いては日本國の强大なる譯となります、女子たるものは專ら修德に意を留め女道を守り義務の念を深くして東海姫民國の名を全うすることそ緊要な務めであります。

評　東海姫民國とは近頃の快氣焔なるかな、内容は意氣込程の事もなかりしが、理想一々肯かるゝものあり

○入浴

陸奥　あやきく

皆樣は入浴を遊ばすのに無意識で被居ますか。又は入浴に對して只、身體を淸潔にすると云ふに止つてゞすか。其れは健康上誠に大切てすが、精神上にも健康上と相俟つて、偉大なる關係が御座います。體が少しでも汚れて居ると何となく懶く、懶ければ何をしても其の事に興味が移らず、ぐづ／＼してほんとに氣持が惡う御座います。人に對しましても相手許りてなく共に自分も不快を感じます。然し毎時怠らず入浴して居りますれば、身體の淸潔なだけ其れ丈又精神も淸爽ですから、身心共に快く各々にあたる自分の勤めに極めて興味を持つ事が出來ます。對者には元氣に充ちた對話振りをいかに心地よく感じさする事でせう。

又一寸健康を害しましても、入浴を怠りますならば、いくら滋養物をとり、いくら運動をしても、肝腎の排泄物を十分に除く事には參りませぬから、つとめて新鮮の空氣は身體に觸れませず從つて恢復も、又容易ではありません。

身心の疲勞した時一度入浴致しましたなら、いかに心地よき事で御座いませう。遠足の夕や腦を過度に使つた後は、心身共に安けく、さわやかに始めて自分の體に歸つた樣に感じます。

私はかう思ひます。入浴の好きな方は第一に綺麗好きて、健康に愉快に常に其の身を愼んて、人に對しては不快の感を與へず、誠に奥床しい方でせうと。そして眞に幸福な方だらうと存じます。

評　身體の事やがて靈性の事なり、入浴と雖身體の一部にあらずして全人を洗ひ淸むるなり

○従順と盲従と

丹波　森下ます

古來従順は、女子の道とか、女子の生命とか、いひはやされ、女子にとつてはなかなか、輕くない道德の、一つとなつてゐます、女子と生れた者は、これについては充分に、研究しておかねばならんと思ひます。●考へて見ますのに古今此德について、思ひ違ひをして居る人が随分少くない樣に存じます。

従順とは讀んで字の如く、よくしたがふことであります。しかし、理あり道あるところによく従ふ意であつて、無理非道なことにも徒らに従ふといふ意味ではありません。どんなことにも徒らに従ふのは即ち盲従であります。

貝原益軒先生曰く「惣じて婦人の道は人に従ふにあり。夫の敎訓あらば其仰を反くべからず。疑はしきことは問ふて其下知に隨ふべし。夫若し腹立怒る時は恐れて順ふべし、怒り諍ひて其心に逆ふべからず。女は夫を以て天とす返す返すも夫に逆ひて天の罰を受くべからず。」と、完全無缺の人にならば、先生の敎訓通りにするのが従順でありませう、然し世の中の人、皆完全無缺であるとは、いへませぬ、ずゐぶん、無理なことをいふて、他人をいぢめてゐる人を見受けます。人の腹立ち、怒れる時に、こちらに理があるからといふて、反對するの可否は別問題として。先生の言を察するに、矢張り従順と盲従とを等しきものとして、論じて居られるのでは、なからうかと思ひます。今日の人の中にも「女子といふものは、どんな事にも従ふもの也。自己の意見を通す樣な女は、出過ぎ者也。」といふ樣な、断定を、くだして居る人が、なかなか、ある樣に見受けます。

私は、此樣な人から、いくら、ラシカラザル女子出過ぎ者などの暴評をされても、國のため、家の爲、どこまでも、盲従を廢して、従順にするつもりであります。

評　是れ自覺したる女子の第一に起すべき疑問、而も事實の解决は前途猶は遼遠

○勝手元の女のたしなみ

埼玉　靑葉女

勝手元をするのに、髮を取亂したり、足のうらをきたなくして居たり、又着物の裾をくるりはし折つて、長いゆもじを出して仕事をして居る女の人をよく、見掛ける事が御座いますが、どれも〳〵誠にいやなものでして、そんな方のつくつた、御馳走は、いかに美味なものでも、氣味が惡くてとても美味しく戴けません。主人にしましても、御客樣に下女のしだらのないのを見られるのは外聞の惡いお話しでは有りませんか、で

すから主婦たるものは、吾が身を省るとゝもに、無教育な下女に對してよく〳〵氣をつけねばなりません、臺所や器物を清潔にするのは無論の事、躰もよく清潔にさせ、殊に爪なんかはいつも短かく切り取らせ、裾をはし折る代りに、着物は短かくきりゝと身につけ、帶もちんまり結びましたら、躰も輕やかて又人が見ても決して不快な感を起す樣な事は有りません。

評　簡にして要を得たり、いつもながら有益

○袖附に就いて

大阪　髙山米子

只今皆樣は何を仕立てゝ居らつしやいます？　定めし夏ものゝお縫ひ返しに御忙がしい事と存じます。

衣服はどれでもてすが、別けて單衣は袖附が綻び易く、又袖附の綻び程見つともないものは有りません、仕立て上げた折り、一寸カンヌキ止めなり止め切なりをつけて置けば、めつたに綻びはしませんのに、つい僅かの手間を惜んで後悔する事が度々あります。

男物や大人のものは余り派手な色ものをつけますと、目立つておかしう御座いますが、女の子などの緋や紅の可愛い止め切れが、歩く度にほの見えるのは云ひ知らずなつかしい奥床しい感がするものてす。

男物は成るべく共切れをつけるのが宜しうございますし、筒袖ならば目立たぬ色のカンヌキ止めが適當だろうと思ひます、止め切と申しても、別にわざ〳〵新らしい大きな布を切らなくつても、何か其所いらに小さな端切が有りますてせう。お細工ものに殘つたの、或は又御自分の帶をお仕立て遊ばす折りの縫込など、氣をつけてとつて置きさへすればいくらでも役に立ちます。

て單衣は更なり袷綿入などでも、幼い兒などは容赦なくはね廻るものですから、氣をつけて少しの面倒を厭はずつけて置いてやれば、毎日綻びを縫ふ世話もなく、子供も安心して活潑に運動する事が出來ますてせう、一寸氣づいたまゝを御注意までに。

評　是亦有益の文字

○手紙に就いて感じたまゝ

大分　原田澪子

私は此の一ケ月に郵便不足税を三度仕拂ひました。寫眞の封筒を〆て二錢切手をはつたのや、封書が重過ぎたのて。——何も腹立つる譯てはありませんけれど、是れ位の事を注意して下さればいいにとつひお恨みも申すのてございます。

殊にそれが仲の好いお友達からだと、本當に心苦しいものでございます。自分にはかまわないけれど、若し他人にてんな事があつては失禮だから、一寸御知らせしてあげようかとも思ひますが、そうと云つてやつた

時彼の憂しい方が、「まあ如何しようすまないわ、」と云つてお恨みなさる姿が目にちらついて云つてやるのもお氣の毒なと云ふ樣な風て、却つて受取る方の者が心配する程てございます。

お互に氣心の知れ合つた仲だと左程もありませんけれど、身上の人や、交際し合つて間もない方にそんな事が有ると、失禮は云ふ迄もなく一部の缺點を表はすのも同じだと考へます。萬事に注意深くなくてはならぬ女子の恥と云つても差し支へありますまい。

殊に文學は、其の人の心を代表するとも云つてありますから、せめて表書丈ても丁寧に女らしく書き度いものと思ひます。折角美しい繪葉書を頂いても、所かまわず書き散らして有ると情けない樣な氣がします――それも散らしがきとやらで、配合よく書きわけてありますと一入風流にも見えますが……。て成るべく受取る人に不快な感を與へたり、迷惑をかけたりする樣な事なく、先方に床しい心を起さしむる樣てなくてはならぬと考へます。とりわけ女は手紙に就いて一通りの注意があつて、後悔する樣な事のないように力めねばならぬと思ひます。

評　偶然ながら才氣ほのめいて見ゆ

○誌友交際

千葉縣　眞砂子

皆樣は知らない遠くの誌友と文通して、地方の有樣や風俗等種々な事を交換致さるゝてありませう、然し私は誌友皆樣に限り感じました事を申ます、記者樣が私共の爲めに設けらた誌友倶樂部は、今や小說屋の廣告然となりました、品物や書籍の交換も互の益を計る爲に甚だ好い事てありませう、私は七頁の誌友欄を趣味的に活用致したいと思ひます、皆樣の地方の風俗や、產物又は風景人情等の有樣を投したならば、地理の研究には甚だ都合が好い事てしよう、又自己と自己の交際ては只だ小範圍の知る所てありましよう、これを本誌に投したならば誌友幾萬の利益は大なるものてあります、故に自己て交際する郵稅も不用てあり、隨つて男子と交際する樣な愚な事もないてしよう、私は皆樣が文通する事を誠に悅びますが只誌友欄を改良致したい事を誌友皆樣にお望み致します。

○夫婦論

周防　露子

私は未だ「口尙乳臭なり」の時代て迚も夫婦論などゝ憶劫な事をいふ年、境遇てもないのてすが、私の父が婦人科の醫をしてゐますものてすから、日々の見聞によつて感じた事を手もない鈍い筆て書いて見やうと思ひます。さて、世の中に女程哀れなものはありません、否、已婚の婦人程みじめなものはありません、我家に來られる患者に父が養生法について何彼と申します

と、奥様は初二三度は只ハイ〳〵と諾してかへられますが、父が病氣の爲によくない自ら治癒せぬ様にするのである等と八釜敷申しますと、患者なる奥様は實は申上難いのですが命に從ひませんと平和が保てませぬとさも心外そうに仰しやる、それが一人や二人ではない百人中九十九人迄はそれてある。私これをきく度につくづくアヽ男といふものは何て我儘なものてあろうとつくづく思ふ、どうか肉體的夫婦とならず精神的夫婦となりたいものです、私は戀人と人から笑はれるかも知れませんが、少しも肉躰的關係をもたないてしかも相愛し相扶け夫の慰藉者となり伴侶となつて、一生を潔く終したいものと思ひます、それならば同性の友でもよくはないかと仰せられる方もありませう、一應御尤の事てはありますが女は男の剛なるを好みます男は女の優しい侍づきを喜ぶてせう、異性を好む一つの原因は長短相補ふが爲でせう。しかし世の人の總てが私の様な事申しては種族は絶えて仕舞ます故、要するに精神的基礎によつて夫婦をつくれといふのてあります、そうすれば妻が病氣であるのに我慾を滿たそうとする様な事もなく、家庭は高尚て優美ていつも春の日和の様てあろうと思ひます。

○日本婦人の髮に付て

牛込　本間花枝子

妾は生來かして。日本婦人のいやに西洋かぶれをした麻髮とか何とかいふ髮の結ひ振りが好きませぬ。西洋髷でも後から見てハート形に見えるのは少しは蟲が好くようてすが。矢張り日本髷趣味てある。それに袴を穿ての風の上に就いては此處論外として。和服を着流した時のことてあるのだが。奥様は丸髷。孃様は桃割。天神。鴨脚返し。或は島田などの方が優美圓滑雅趣といふ風が具つてゐるらしく見える。去年の夏頃からだと思ひますがまた〳〵日本髷復興の兆が現れて來て。これある髮を張た婦人を見るが。妾の眼からすれば。これあるが爲め日本美術は東洋の覇王らしく感ぜらるゝのてある。美は客觀と主觀との包合の處に存するといふが。主觀客觀にも幾分具象的美の發露が存して居らねば。主觀に計りに美が樂享せられてくる次第のものてはなからう。矢張り客觀にも先天的の美素がある。其美としての判斷は觀照者の趣味の度量によつて定まるものだ。日本婦人の日本髮を飾つた風は先天的の形體の美素を當然ならしめる美術的用具てある。若し日本婦人の形體から其髷の當然美を去つたならば。日本婦人は見られた格好のものてはありません。木偶にした處て西洋の木偶の方が美術的てある。日本婦人の日本髷を裝うのは究り其缺點を補ふて先天の美質たらしめむ爲めの裝ひてあらう。妾は日本婦人を美として觀照するに異數だらうが日本髷を賞美するのてあります。

○藤原時代の女流文學觀

本所 木稻きみ子

一條帝より堀川帝に至る百年間の上半が、我が國の文學史上忘る事の出來ない歴史を作りましたのは、世の普く知る處てあります、當時、關白道長がわが世と誇り、榮華百年の夢に耽けりし時て、其の勢力は、恐れ多くも皇室までも侵しました、後宮に取り入りて宮女と和歌を唱和し、或は酒宴管絃の宴に荒み、或は女をいれて皇室の外戚とならうと欲し、又詩才ある女子を侍女として、互に才能を競ひ誇る如き、一般に、文藝的傾向を來たし、爲めに女子にして傑作を出だすもの、當時、淸少納言、紫式部の如き、古今を通じて第一流



おくめ婆さん

京都 楠田信子

の文學者を出すに至たりました、淸少納言が其の著、枕草紙は我が國の隨筆の嚆矢として、活潑氣慨描寫の銳利なる、優に男子を凌駕し、觀察の精細なるは、遺憾なく、女子の特性を發揮して居ります、又源氏物語の如き、其の長編を巧みに抑揚波瀾を附け、作中に表はれたる個々の人物の性格を寫し、又式部が理想の女性として、紫の上を點綴し、或は父源子と、子薫大將との、得意と、失意とを對照せしめたる、其の遒勁の筆致、着實て、しかも流麗なるは、實に我が國第一の小說として、少しも恥ぢる處はありません、其の他、歌人として、和泉式部の如き、當時如何に女流文學の全盛を極めしかを偲ばしめます、曾て、卑下されたる女流文學は、却て男子が唯一の學問として、行なはれたる漢文學を壓倒し、光彩燦然たる女流文學

をして千古不滅の名を殘し、後世假名文全盛時代と仰がれたのも盖し、故なき事てはありません。斯くの如き、榮ある歴史を有する我が女流文學は、引き續き今日に至りましたが、其の數百年の長い間、一世に名を博する作家は、殆んどなきかの樣に思はれます、そして、今や、我が國は東西文學の二大思潮を融化する秋に當り、第二の女流文學全盛時代を作るに最も、好時期てはないかと思ふのて御座います。

○偶感

尾張　宇佐美鈴江

○

増刊短篇小説のオスカー、ワイルドの婦人觀中よりと言ふの中に『婦人は其の感情を婚姻の時まて隱匿す、結婚の時始めて其の眞情を現はす』と言ふのがあります。私はあれを讀んて非常に感じました。全く此の一行の文字は私共の爲めには金科玉條てす、若い婦人は何方ても斯う云ふ心持ちて居なくてはなりませんと思ひます。

文明の餘弊と申しませうか、若い御婦人方の御作りになつた、主觀的な散文等の中には、隨分如何はしい卒讀に堪へぬのがあります。男子の御方が、婦人の墮落と云ふ事を口やかましく仰言いますが、要するに此れらが原因の一つかとも思へます。

ハイカラな、よく語る、よく笑ふ婦人は、青年男子の間にもてると聞きます、が、それら青年男子は、女子を弄ぶと言ふ點に於て、欺き易いと觀たからてせう決して深い意味のあることてはありますまい。

斯う言ふ御婦人は戀するには適當てせうが、女子と言ふ天禀の幸福を享け、責務を全うせようとする婦人の仕業てはありません。

女は何處までも、女らしいと言ふ事が肝要てあります徹頭徹尾と申すのてはありませぬが、或程度迄は御姫樣振る必要があります。

○

私は頭がボーッとなつて來ると、白山神社の杜へ行きます。そうして其の綠陰に憩ひますとき何處よりか神が來て頭の疲れを治して下さる樣に、直ちに頭が清々します。

て今日も石段の處て休んて居ますと、何時の間にやら小さな絲蜻蛉が私の手に憩つて居ました。私は凝乎とそれを見ました。やさしいあの軀、又なくなつかしくあります。指の先てそつと觸れて見ました、恐つてプイと翔つても行きませぬ。又元の處に憩ひました。何たるやさしい事よ、私は何時迄も此の手に憩はしたく思ひました。

婦人は、恰度あの蜻蛉の樣な心持ちがなくてはならぬと思ひます。

書簡文



編輯局選

○父上に上つる文（天賞）

羽前　なみ江

去る日は久々にての御拜顔、誠に〳〵御なつかしく、嬉しかりし日の未だ昨日のやうに覺え申し候、さばかりの御奮闘にさぞ御白髪も御皺も多くなり給ひつらんと老いませし御姿を心に描き候ひつるに、何といふ嬉しさに候ひつるぞ、五年以前の御元氣にもまして、若々しく在せしとは、たゞ御頭の頂の少し薄くなり給ひしにのみ御年の程もうかがはれ申し候ひしが、壯者を凌ぐ御氣象の何よりも何よりも心強く存じ上げ候

こゝは鳥海も月山も眞白に成果て、裏の欅のそよぎ霰のみだれのみ夜毎に強くなりまさり候に、都にては如何に渡らせらるゝや、幼き子等を多く抱へ給ひては御母上の朝夕の御手も如何許り煩はしくおはし給はんに、若しや例の御持病など出て給ひなば、御父上御一人にて何と遊ばされ候ぞなど御案じ申し上げ候へば、このまゝに嫁げとの御仰せは限りなき御慈愛よりと知りながら却りて御怨みにこそ存じ候へ、伯父上の御言葉もさる事ながら左樣に急がずとも宜しかるべく、健樣にもよく申し上げ御猶豫を請ひ申すべく候、町子もはや十五才にもなり候へば姉上の御手許にて心づかひもなかるべく、何卒々々御膝下にて下女の役仰せ付け下され度御飯の水加減もお汁の仕立方も人並みには出來るつもりまた以前の如き我儘者にては決して〳〵候はず、徒に御母上に拗ねまつりし日のたゞに口惜しく、何ともして眞の御いつくしみも賜りたく、娘として心のかぎり御むねに添ひまつりたき不孝の子の御願ひ、無理にも御許し下されて、來よとの御一言をひたすらに願ぎまつり候。

筆力勁健なる上に、一種の奇氣が文に横溢して居る、而も這がに女氣

のやさしいところを失はない、此人愈々たゞの駈出しにあらざることが分つた乞ふ自重せられたい（評）

〇姉樣に（地賞）

紀伊　胡蝶

此程は上着御送り下され、いつに變らぬお情の暖さ綿入、一しほうれしくぞんじ參らせ候、又私より差送り申せし反物柄合もお氣に入り候由、折角えらびし甲斐の候て、まことに本意に御座候、就ては甚だ申上兼候へども彼の代金、近々にお送り下さるまじく候や、わづか五圓のお金は少しにて候へども、私如き日給取りには、此月をしのぐべき資に候まゝ、忙しき内に恐れ入り候へども何卒ねがひ上候愚痴は私の性分にて候へともこの頃はよく／＼情なさの身に沁み申候、いかに厄介の身とは云へ、食料だけは拂ひ居るにて候ふものを、叔父樣もあんまりなとぞんし候。勤め先より歸ればすぐ叔父樣の内の手傳致し、朝は誰よりも早く起きて臺所の仕事をなし、日曜なぞも終日追い使はれて、始の目的たる勉強なぞ思ひもよらず候殊に叔母樣の死後、いかに叔父樣の御寵愛深き故とは云へ召使の峰が思ふまゝなる振舞、何事も遠慮して居る私に、命令がましき口調の小面憎く、かつては峰が母親は、内の母樣も目を掛け遣はせしに、と口惜しく候、小さき身體をいとゞ小さくし、手紙書くにも氣を兼ねて居るに附けても、優しき叔母樣の在さばと思はぬ事とて御座なく候。

兄樣よりの御手紙にては、私に學校の事は思ひ切り潔よく諦らめて呉れよとの御言葉、よく／＼辨へ居り候へども如何せん、一本筋の袴附けたる女學生を見れば、あゝ世が世ならば、我も……など不覺の泪止めもあへず、可愛き附屬小學校の生徒の手を引きて散歩せる師範の學生に逢ひては、せめてあの境遇にあらば、と思ひて、なか／＼に思ひ切れず候、今夜も叔父樣と峰とは「輕業」とかを見に行くとて出て行きやがては歸るべく候故、これにて筆止め申候、何事も姉樣が頼りに候故、勝手なる事のみ聞え上候

あら／＼かしく

生活人情等の複雜なる經緯を弱々しき筆にてしるして亂れざるところを多しとす（評）

〇都の兄へ（人賞）

沖繩　かね子

兄樣御手紙有難う御座いました、御手紙によると御地は大分御寒いやうで御ざいますね、當地は熱帶の中に在るのでせうか、一向秋らしくもありません、四方八方は青々として尾花ばかり沖繩の秋を代表してをるや

うて御座います、昨日の天長節には單衣でもむし暑くて困りました、少しはこの暖かさを兄様の所へ小包で送りたう御ざいます。母様は相變らず御元氣て御ざいます、毎日冬の用意遊ばして御居てなさいますから御安心遊ばしませ、私もお辨當を提げて學校に參りまして、終日みね子様と眞面目に勉强致します、兄様夏に御歸り遊ばした時勉强が足らぬとおつしやいましたから、一生懸命にやるつもりでございますれけど、何分夜は非常に蚊が出まして少しも出來ません（兄様眞でございますよ）あの兄様大分夜が長くなりましたね、さぞ御勉强遊ばす事で御座いませう夜遅くまで起きて御出でなさいますと、御腹が御空き遊しませんか、私ね前週の割烹で西洋菓子をならひましたの、それですぐ兄様に上げやう



若水な　新潟　水澤紫子

と思ひましていつもの時よりくわしく習ひまして、早速日曜の朝から大騒して造りましたの、母樣は東京にはまだよいお菓子が澤山ありますよつておつしやいましたけれど、初めて造るのでございますから、是非差上げねばなりませんものね、兄樣そして幾度も手帖を見てまちがはぬ樣にと心掛けましたので多くの時間を費しました、乳母は後からとりちらしたのをかたづけ役でやつと出來上りましたもう〳〵暑くて眞に苦しう御座いましたが、兄樣の所へ送るのだと思ひましたら、うれしくつてうれしくつて耐りませんてした、まあどんなのが出來たかと見ましたら不格好のものばかり、兄樣にはなるべく格好のよいのを撰りました、格好は惡くてもきつと兄樣の御口に合ひませう、母樣もよく出來たとおつしやつて居被いました、今度送りますお羽織は私が縫つたのでございますよ、母樣が女は裁縫が何より必要だと、しかし私はきらいでございますから、一層の事男に生れゝばよかつたと思ひますけれども、仕方が御座いません、兄樣今度のが御氣に召しましたらこれからどうぞ縫はせて下さいませ、さよなら。

第一に地方的特色に於て優り第二眞情の露出を以て優り第三稚氣多くつくらざる筆を以て勝る（評）

【秀逸】

○未見の姉上に

弦子

野分の風の一日〳〵に吹きまさり候て世はいとゞ淋しうあはれさまし候かなさて過ぐる日御縁ありて、辰夫樣の御側に朝な夕なかしづき參らせ、夫とあふぎ妻と呼ばるゝ身とは相なり申候、いまだ御目もじの榮は得申さず候へ共、御寫しえにて御健やかげなる御姿拜し參らせ、御なつかしく慕ひ參らせ候、さて今更申あぐるも御耻かしき事ながら幼なくして母に逝かれ候事とて、全くの野育ちに候へば、禮儀作法はもとより何事も辨へぬ不束者にて候まゝ、何卒御氣ながく何くれと御おしへ下され度就ては、一日も早く御越しねがはしく存じ候、さりながら御老體といひ、殊に蒲柳の御質とか、わきてこれよりは日に〳〵寒さ相まし候とて、なれ給はぬ地に御越し遊ばされ候て、万一御身にさはりなどこれあり候ては、申譯けもなき次第、まして今より來春四月頃までは海上もなか〳〵にあれ候よしに候へば、今是非にとは申かね候まゝ、春五月頃には是非〳〵御越しにみちびき下され度かへす〳〵御願ひ申あげ候、主人も御別れ申候てはや二タ年近く相なり候よし朝夕御目にかゝりたき旨申居られ候、妾も前申あげ候通り、早く母に別れ候て、母の味

知らぬ身は母上樣のできしが何より嬉しく一日も早く御目もじ致したく常に主人より御噂聞き申居候、親と頂き子といはるゝも何かの因緣にて候べし、何卒末ながく變らぬ御情けもて不束の者を御指導下され度くりかへし御願ひ申あげ候、

時節柄御養生おさ〳〵御怠り遊ばさぬ樣さし出がましき事ながら、かげにて祈り參らせ候、

まわらぬ筆もて心におもふふし〳〵かいつまんで御あいさつ旁々右御ねがひ申あげ候、

あら〳〵かしこ

かゝる書簡は尤も困難なるをよく禮を失せず情を失はず是れまで書きたる遒がに此人なればと敬服に堪へませぬ（評）

○春やへ

はぎ

昨日は午前に歸つて來るつもりだつたが、つひお君樣に引きとめられて、歸つたのはかれこれ夕方だつたのよ、お晝前に歸宅するかも知れないと云つてだつたから、もしかもう逢はれないかと、氣が氣でなく歸つて見たらもう春やはやつぱり汽車中の人だつたのですもの、三時頃まで待つて下すつたつてね、濟まなかつてよ、ほんとに、でもね、またいつか逢へるわねえ、ほんとに今度春やに逢へてどんなに嬉しかつたか知れないのよ、あら御免なさいよ、春や、春やつてつひ癖になつてるもので餘けいなところにまで春やをふりまはして惡いわねえ、でも許して頂戴よ、あなただつて左樣でせう、私はやつぱり昔のあまつたれ子の通りに思へるんでせう、ホヽヽ

私ね、ほんとにまだ話し度い事が澤山あつたの、大抵母樣から御聞きだつたらうと思ふけれど、あの事ね、如何したらいゝかと實に困つてしまふの、謙吉さんはいまにうちに來るんだつて、そしたらいゝわ私春やのところに行く事よ、逃げて、でも春やの田舍で一週間も暮したらすぐ倦きて了ふわね、困つてしまふ、如何したらいゝんでせう、

あ、さう〳〵、お土產有り難う、栗はこれから毎晩お伽に出て來るてせう、あの新小豆ておいしいおしるこして貰ふのを樂しんでます、また手紙あげる事よ、春やも返事頂戴な、誰にも見せないから、委しく、思ひ切つたところをかいてね、いゝのよ、大丈夫よ、私逃げたりなんぞしない事よ、うちて暮した方がおもしろいから、左樣なら、

相變らず輕快縱橫の筆敬服々々（評）

○山里より故鄕の姉に

隼子

寒さ俄に相加り申候處、御なつかしき御姉上様には、如何お渡り遊され候や。善ちやんの火鉢番もおひ〳〵はじまる頃ならんと、ひとり、思ひ浮べ申しては、ほゝゑまれ申し候、さて、私事、近頃は用心家の御祖母様より、重ね着させられ、ほと〳〵困り居り候。はては、御自分のたけ短き御羽織まで、是非にとおすゝめ遊され候、誠に此の姿御覧に入れたく候。されど、郵便配達夫の外、人足遠き山里に候へば。殊に夜分の淋しさは、一入に御座候、年頃、弟や妹とのみ戯れ候ひし私には、誠に、堪へがたく、身も心も消え入る様とは、げに此の里の夕に候べく、暮れ行く秋の陽日の光薄く稲田に落つる夕間暮、雨戸くりつゝ東の方を眺め候へば。片谷墓地のほとりを、急ぎ行く稲荷へる農夫の姿、さながら、御代の様に見受けられ候。臆病者の馬鹿言、何卒御笑ひ下され度候。柿の葉散る故郷の戀しさは、十八の秋、また、失せ申さず、こは〳〵ながら、墓地あるほとりに向つて、なつかしの空眺め參らす事に候墓地と申せば二三日前お墓參りにとて、向原の御婆様、御越し遊され候。其の節奥様の惡口澤山に聞かされ、誠に困り申候、殊に、縫ひ仕事の遅さとて、そればかり四五度も仰せられ、誠に、私も恥入申候。明日より叔父様の袷を仕立つる筈に候まゝ、お姉様、何卒、早く出來る様お祈り下され度候。

かしこ

山里のさびしさ深刻に銘せられて可、その他少しの無駄なく書けて居ます好消息

○寄宿舍にある妹へ

大阪市　渡瀬淳子

御玉章拜見、承れば舍内の同級生が御身の好成蹟妬みて何かにつらくあたるとの事、世に頼り少き二人の姉妹の上にふりかゝる災身に引かへて思ひ煩らい候、就ては然るべき由縁を求めて通學したいとの御望み、誠に無理とは申さず、さりながら通學には通學にて家人への氣兼、俗間の誘惑など新たなる苦もあるべく、まして二三年の後世に出られ候時は是非逆境非境に立たねばならぬ場合も度々有之べく、と存ぜられ候。今の學校出の女は學問ばかり出來てとはよく耳にする所に候、滿更皆々其通りてもあるまじく、殊に寄宿舍などに住む人は心掛一つて女の一日の務、他人に對する道など一通りは會得せらるべくと存ぜられ候。幾度か思ひ餘りての御玉章を無下に退くるには候はねど、何れは嫁ぐべき身の小姑を多く持てる事と思し召されて德望に於ても全校に秀でられ候はゞ、自然現在の苦みの

去ふ事もやと存じ候。所詮不運の姉妹なれば萬事人様同樣に承り兼ね候べくよく〳〵御辛抱遊ばされ度候。尙々寒さ烈しく相成候へば御身おいとい遊ばさるべく、お正月には是非御歸省なさる樣待ちをり候。

しつかりとした手紙、但いさゝか男性的傾向が勝つて、情の滴るみ少きが殘念（評）

○廻狀へのお返し

京橋　冬の花

大分寒くなりましたのね、これ書くにも手がつめたう御座いますもの、寒いと學校の敎室の隅のストーブが思ひ出されます事ね、眞赤に石炭が燃えてゐるまはりに、みんな集まつて、ストーブ會議の議事を進行させた、その樣子がまるて目に見る樣にうかんてきますの、當時の議長として雄辯を以て聞こえたM樣、この頃はとんと、おうはさ伺ひませんけれど、どう遊ばして？

Y樣お好物の書生羊羹、これから益々旨くなりますわね。またポカ〳〵煙の出てるあつたかいのを澤山お馳走しますから、みなさんお揃で、お出遊ばせ。去年の樣に盛に騷ぎませう。Hは此の頃一人きりて、あばれられないて、淋しくていけません。時々妹や弟と云ひ合つて（何てす、大きくなりして）と叱られますの。

肩の先きに一寸殘してあつた肩上げ、をかしいと口ぐせに云はれるので、思ひ切つて二週間ほど前にとりました。でもまだ自分では何だか妙な氣がして、鏡の前にいつては、肩のところを、つまんでみたり撫たりします。お口の惡いT樣（そんなにをしいの）とお笑ひ遊ばすな。廿三になつても、まだおとり遊ばさない方さへありますもの、Hは未だ十九てすわ。

毎日グツ〳〵してゐて、學校へ行くのと寢るのが大役（お前は實によく寢る）と家てはあきれてゐます。（ても、寢ないと毒てすもの）とお當人は至極すましたもの。口の方は相變らず達者て、口も八丁手も八丁と申しますけれど、Hのは、慾目て見ても口か十二丁に手が四丁位、手も足も出さずに、口ばかり働かせて、ゐます。口の惡い弟（姉さんは口から先きに生れたのだ）と然しこれは自分ても認めて居りますの、T樣、Y樣のお心配はおめてたてすつて？ほんとならばY樣にお祝申しますわ、

まあHの近狀はざつと以上の通りてす此日大失敗をしましたけれど、こん度まて秘密にしませう。

また回狀の來るのを樂しみにしながらこれて！

感興溌溂の筆なか〳〵どうして是れては手も十二丁と云って宜い。（評）

○嫁ぎし友へ

横濱　臼井道子

二人むつまじい、美しい春の様な處を見るかと思へば、忘れられ、忘れて仕舞た辛い處を、見ましたりして、夜毎の夢は樣々御座いますのに！昨日の同窓會は、ほんとに、多美樣攻擊會とでも申したい位てしたの、彼方からも、此方からも、無情の、冷淡のと、思ひ思ひの尊稱を、奉て居りました、其時、肝心の御本尊樣は、可愛い赤ちやんに紅友染の、御布團敷いて、小春日和を御添乳ても、ね、そうてせう、大きな御髷に、赤いお手からの、初々しい御奥いゝえ、御母樣姿が、私まざ／＼と、見えますもの、お嫁きあそばした事を、存じなかつたのも、私一人と思ひの外、あなたも、私も、まああなたもと、云ふ樣な次第、今更お目出度う存じますとも、申されないては御座いませんか。始めての同級會の夕べ、皆樣を御送りして仕舞ても、まだまだ別れがたない思ひて、殘たのが五人、彼の日の事、御忘れにはなりますまいね？けれど全く、無情なおしうちと恨みますわ多美樣。昨日は面白い餘興も澤山、御やりになつた皆樣、それ／＼面白い御話も、山と伺ひましたが、罰として、先は御あづけけ。新年會には是非共、御出席あそばせよ、そして、滿座の中てお丸髷下げて、御謝罪をなさいませと、此れは昨日の滿場可決ホ……私を先頭に、續々御恨みの征矢が參りませう。

どんなに御好きていらしつたてせう、彼の木犀の、きつい、きつい、匂ひがね、其木犀の茶褐色に、色こそ異れ、匂ひは矢張り、お好きな香ひ、封じ込んで置きますから、かいて頂戴、かいて思ひ出して下さらなくちや厭！。

恐ろしい皮肉な手紙もあつたものかな、氣の弱い選者などは外から見てさへハラ／＼する辛辣なる筆（評）

○山里より

信濃　小梅子

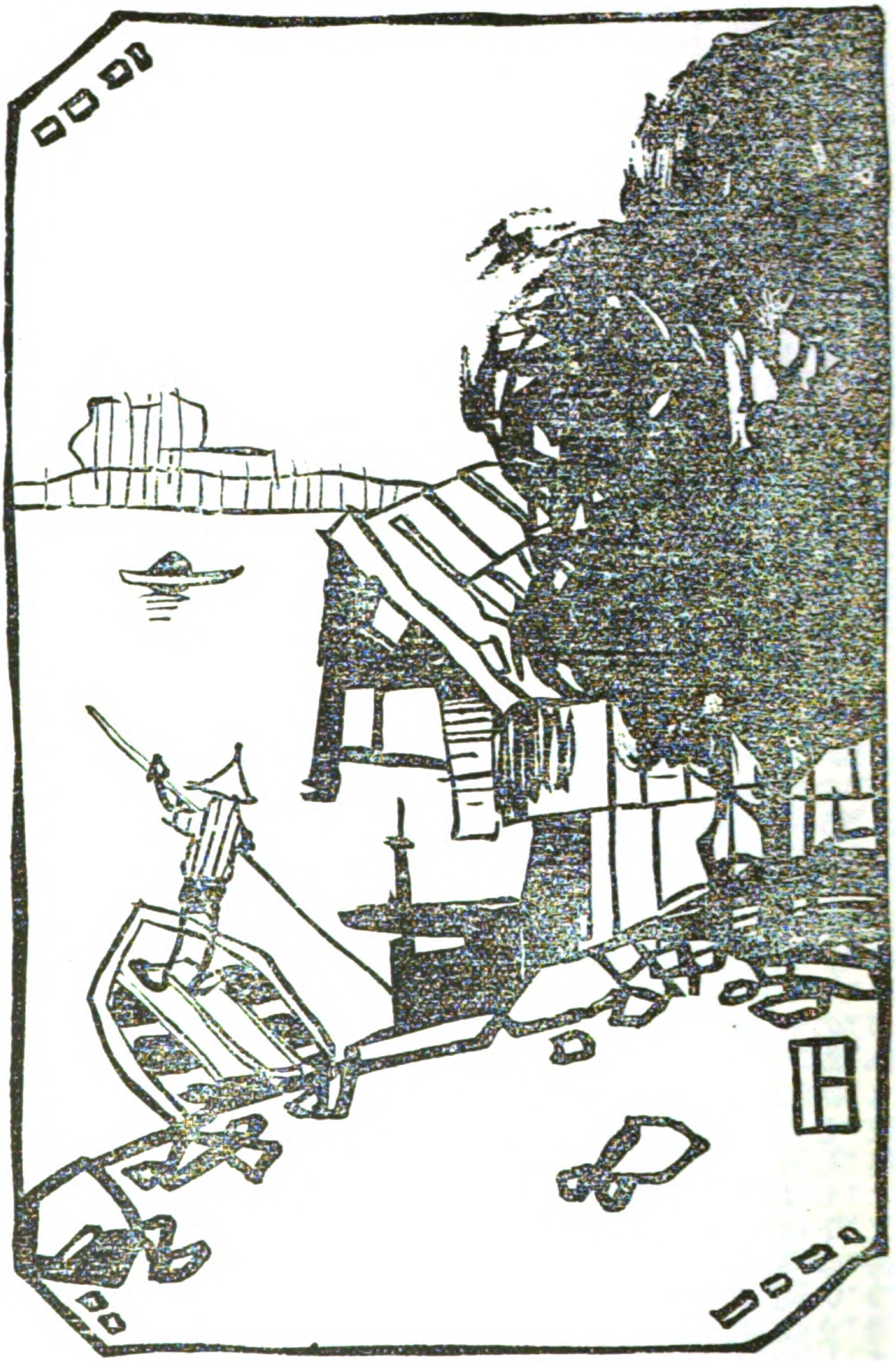
椽先の落葉を掃きすてゝ、斯う濁つた空を見つめて居る、と向うの山は時雨がもうバラ／＼と庇へ音をさせて來ました、梢にはさびしさうに散り殘つた葉がひらめいて、何者かの暗示を私に與へて居ります。

此村に來てもう八ケ月にもなりますけれど、まだ私には親しい人が一人もありません、そりや隨分才學のすぐれた方もあるさうてすが、みんな取りすましてお在てのやうて少しも馴れませんし、近所の人は下らないことばかり言つて、何のかのとうるさく附きまとうので嫌になつてしまいました、それて此頃は何處へも出ませんて、授業が濟むと逃げるやうに歸つて來て、もう家にばかり怠屈てなりません、そして私は今お願ひ

するのですから今夜は是非遊びに來て下さい、清様

か騒がしく鳴つて、何だか恐ろしいやうな中に、

に葉様お誘ひてね、珍らしい街のお話澤山うけたまはりたくて、私毎日華やかな北の空ばかり眺めて居ります、山里の秋は靜かで泣けるやうでございます、先日生徒と栗拾ひに行きました、風の日林　した。



人なき渡し　青森　立花とも子

小さい兒等が平氣に坂路を走り廻はつて、谷川のあちこちを愉快げに、椎の實や柴栗を拾ふのを見て、ひそかに恥かしい思ひがしま

長夜のつれ〴〵に獨り柴栗燒いたことも幾たびてありませう、澤山拾つてはありますが早く盡きないうちに、山里の誇りてある燒栗の匂ひをお知らせしたいのてあります、今から皮をむきに初まりますから、今夜はきつとお出て下さいましきつとてすよ、

今街の辻には何が出て居りますか、嬉しいお話しの料にお持ち添へを願ひます。　あら〳〵かしこ

汚れなき山里の風流書簡又以て珍とするに足る（評）

○豆を送る

金澤　むらさき女

それは秋の晴れた日てした、澄み切つた空氣が、穩に波立つて氣持よく髮の毛をなぶつてゐました。私は白い手拭を姉さん冠にして、草履をはいて背戸から納屋へ、束ねた豆を持はこんでゐました、落葉の上をさらさらと歩きますと、何だか秋も、もう終りだと囁くやうでしたし、それから嵐の烈しい夜なんか、外て木枯の怖ろしい音をきゝながら、爐の傍で皆がよつて、おもしろい話をし乍ら、豆をむいたのです。御存じの兄は絕えず高笑ひしてました。父は眞綿てくるまりながら時々つまらない事を口入れして、獨りて喜んてゐました。母は愼ましげな手附をして、むいてゐました。このやうにして此豆は、とり入れられました、つまり

ませんけど、年末のおかちんにても、お入れ下さい。
さよなら。

味たつぷりの添書（評）

○親戚なる友に

四多摩　よし子

先日の御手紙により、金剛寺の和尚樣の御病氣を初めて承りほんとに驚きました。その日直に手紙て尋ねましたら、今日「もう全快した」といふ御はがきを下さいましたから、先づ何よりの喜びてすが、どうも御筆蹟がいつもと違ひますし、消印も隣村の局から出したやうになつてゐるのですよ、してみるとまだお筆などはお執りになれないできつと御見舞に行つた人にても御賴みなされたのだらうなどと叔母と申しましたの。何しろもう御老體のことですから、それにお話相手になる人がおいてにならないので、どんなにお寂しいてせう。まゝになる身なら、四里位の山道、半日もかかれば行けるのですに、何といふ事てせう、この地へまゐる時突然にあがつて、後にも前にも唯一夜泊めて戴いたきりなのですよ。それてもまるで御自分の子のやうにいろ〳〵のお話をして下さいましたし、あの廣いお座敷にお手づから蚊帳など吊つて下すつて、「浪（僧の兄の孫）が來た時もこゝへ寢かしたのだ」などと

おつしやいました。あの長押の美人の額は、貴女の曾祖母様の御肖像なのですつてね！その下の襖にたくさん貼つてあつた短冊を、枕元に置いて下すつた行燈の光で拜見しましたが、大かた和尚樣が世に亡き御兩親をお慕ひになつてお詠みなされた御歌なのですね！浪子様！あなたは當分御歸郷出來ないでせう、私來月の末にはぜひ都合して伺ふつもりですから、そしたら御様子委しく申しあげます。さよなら

才氣ある筆この不用意の書中にも見えたり（評）

○姉様に

しのぶ子

當地は今朝初霜がふりました。姉樣御變りも御座いませんか、さて御母樣の御病氣もすつかり全快なさいましたから御安心下さいまし、昨日から熱心にお眼鏡の蔭をふき／＼姉樣の綿入をぬつて居られますから出來上り次第小包でお送りいたします。御父樣も至極御達者で毎日お庭の手入をなすつてお出になります。たまには横根の伯父様がお見えになつて終日棋をおうちなさる事もあります。五十餘種の菊の花はお父樣のお丹精でみ事に／＼咲きました、姉樣お父樣はいつもこうおつしやいますの「これまでに花をさかせるには一通りの骨折じやないがお前達を育てるにはどんなに心配し、骨を折つたかしれない、どうか此の花よりも尚々立派な花になつてくれ」つて。まあ勿體ないわねえ、姉さん、一生懸命に勉强いたしませう。それから本宅でも兄さん始め皆々丈夫ですから御安心下さいな。姉樣當地はね大演習で大さわぎですの、本宅では二階全部と階下の八疊二間と一週間前からとう／＼宿舍にあてられてあります、一昨日からは第十四師團の統監宿舍に當られて鮫島師團長閣下が御出になつて居ります。當町は一萬有余の軍人でかこまれてしまいました。一昨日から砲のひゞきがたえまなく、殊に昨日から今朝にかけての市街激戰は實戰を見る樣だつて誰もいつて居りました、くはしい事は後に叔父様にうかゞつてから申し上げます、姉樣兵隊さんは感心ですね、靴下でもなんでも一寸のすき間を見ては自分で洗濯いたしますよ、男でさへこうですもの、私ども女はハンケチ一つよごれて居てもはづかしうございますわね、それに兵隊さんは規律が正しい事、上官の命令には型のやうに服從なさるのね、姉さんもどうぞこの兵隊さん方が上官をおそれて命に從ふ様にご自分の良心をおそれてその命令にはどこまでも服從なすつて下さいましな、これが私の何よりのお願です。それから姉さんおよろこび下さいな、私來年小學校を卒へてから東京の女學校に出して下さるつてお父樣から御許しが出ましたか

ら。先は精々おからだをお大切にあそばせさよなら。

つくろはずして味其のうちにあり(評)

○都の弟へ

札幌　立岩ゆきや

謙ちやん御健全かい、九日附の端書拜見仕りました、御地は袷一枚てすつて本當なの、當地なぞは雪が今日てすよ、然根雪ぢやないの、根雪までには未だ一月もあるてしよつて、今年は一體暖でしたから、いくら東京でも袷一枚ぢや寒いてしよ、風など引いてはいけませんから羽織でも着ておいてなさいよ、お母さんが心配していられますから、姉さんとお母さんて今夜十二時頃迄て綿入を作て居りますよ、一兩日中に御送り申しますから、端書によると下宿屋を換えたそうてすがあまり轉宅しないようにをし、學生なぞは何處でもよいてはありませんか、芝つてよいとこなの、學校が近くつて、遠い位が體の爲てすよ、此方の中學の御方達は町の中大聲だして琵琶や詩を吟じて歩きますが、健ちやんなどそんな事してはなりませんよ、眞に見苦しいものてすから、ね、文雄さんの御話ては慶應義塾の生徒はハイカラて生意氣てそのくせ學問の出來るものつたらありやしないつて、ハイカラなぞしては成〻ませんよ、質素にし、必ず町を歩く時は袴を付てお歩きなさい、モー學期試験になるんてしよ、勉強して優等て御級第なさいよ、姉さんお母さんも其のみ樂みにして居るのですから、兄様から、昨日手紙が參りました、大演習が終ればすぐ歸隊なさるんてすつて、十一日の朝日新聞を御覧になりましたか、兄さん中尉に成られましたよ、未だ兄さんから御手紙は參りませんが明日でも參るでしよ、お母さんは大嬉び、兄さん所へ轉宅の事御知らせしましたが、御歸になつて見るかも知れゝて來ましたよ、兄さんは今宇都宮に御居てす、勉強なさいよ、體を御大切にしてね、餘は後便て、さようなら。

甘言苦言交々いたる、謙ちやんたらもの須らく會々服膺せねばならぬ、あゝ兄弟仲と云ふものはいつもいゝものなる哉!(評)

一筆啓上

歳の暮に近づきて一筆申送り候、東京の歳暮は年々歳々活氣を呈し居り候、世間は不景氣なりと申候へ共、東京ほど多くの人間の居る處は御座なく候。夕方などに須田町、又は銀座の四角などにて電車を待合し候折、人が人を踏み倒しはせぬかと危ぶまるゝ許りに御座候、お前様など一度此地を踏まれ候はゞ必ず眼を眩すことゝ存じ候、歳改まり候とも同じれんれえにては到底兼ての野心を果すべく出京のことも御勸めかれ候、しつかりなさるべく候、以上

東京の兄より

田舎の妹へ



短文

編輯局選

○青春（天賞）

山口縣　梛良美奈子

はつと氣付ては持ち換へる、換へても亦すぐ忘れてしまふ世人は云ふ、食事の時箸の根を持つものは縁が早くつて、端持つものは縁遠いつて、あゝ自分は、やはり縁遠いのか、と思ふと云ひ知らぬ悲しさと淋しさを覺ゆるのである。

（評）徹にして徹

○兄さんの横着（地賞）

遠江　鈴木小菊女

三個も並べてある水壺を、一々倒にしても一滴も出ない――、常日もなら直ぐ、妾に入れて來いつて云ふのだが、お母さんと裁縫をして居つたので、云はなかつた、――直ぐ困るのに自分からは入れて來うやとはしない、雨落へ硯を出して、ポチ〱と入れて、それてすます、まあ何て、横着な兄さんてせう!!!其癖何ても妾が行き屆かない〱つて責めるの……

（評）こんな處て一つ凹ますんですれ

○さびしき笑（人賞）

京都　登子

失敗に失敗を重ねた揚句多少の不動產さへ人手に、明日よりは住みなれた此家にも居られぬみじめな境遇に陷つてるが一同平然として夕食をして居る、と一人がクスと笑つた、するとみんな待ちかまへたようにそれを受てドツと笑つた、而し直ぐ力なく消へてしまつて元の樣に皆平然と默つて仕舞つた。

（評）惜むべし今少しよく書かば絕好の小品となりたるものを

【秀逸】

○もち花

德島縣　吉田　梁花

長い枝垂れ柳に、弟と妹が手を淨めて丁寧に付けた餠花をお棚に結ひ

付けると、天井をすべつて座敷一ぱいに枝垂れた、さながら流星の様、夜になつて神明を上ると柳につるした飾物の影が大きくうつつて、靜かにゆれると切て縫つたはい子が手毬の方へはつて行く樣てある。

（評）折鶴も飛ばん氣勢

○秋　雲　加賀　豚崎　梨子

足元には、おそ夏の黄色い花が弱々と咲いて居る、はてしもない空には恐ろしい黑雲が渦卷いて、此世の中の邪慳な人を捕へに來たようてある。

おつと見てると、漸々我に近付いて來た、はては吸ひ込まれさうてある、私は、恐しさに思はず身震した。

（評）自然の威力、貴なる花の暗示、

○虎　公　小樽　清野　芳枝

門口から今歸つたよと威勢よく飛込て來た虎公、今産をした許りだから靜かにしろよとお隣の秋さんに云はれてエそいつはと足を拭いて上りどうも皆さん御厄介て男てすか女てすか。虎公の坐つたのは今日がはじめて。

（評）一つは赤ん坊に對する禮

○留守居の夜　信濃　淺田千代子

叔母樣の高い枕を借りて、大きな夜具の中へ、富ちやんと二人て寢ました。枕元のランプを消しますと、月の光りが丸窓からサッと、後への襖の唐繪が明瞭見えて、恰當幻燈の如な氣がします、折々窓際の竹の葉が妻戸にさら〳〵と、川の瀬音が遠く、遠くかすかに聞えます。

（評）良夜

○何ぜてせう　播磨　K　子

私なぜてせう、此頃こんなに冷淡になつてしまつて……あんなに涙脆かつた私が如何してこんなになつてしまつたんでせう。いくら悲しい事があつて皆さん泣いていらつしても私ちつとも涙が出ませんの。ほんとに如何したのてせう。

（評）人生の一過程

○お榮　長野　加奈江女

お榮が五年ぶりに年首に來た、お榮つてあの赤茶けた毛を鉢卷して、喜ちやんを負つてた、あのお榮よ、と思つて會つて驚いた、まア艶々した髮を丸髷に結つて、鳥渡黑縮緬の羽織なんか着て、淡化粧した樣子のいいこと‥‥確か私と同年だつた‥‥と私の心はふしぎに騷いて來た。

（評）人は不思議なもの

○冷たき胸　信濃　小梅子

「人妻」どんな思ひのするものだらう、私にはふさはない名てあらうけれど、一生ミッスのこの胸にも唯一と度、しんみりとした感じが得て見たい。淸樣の丸髷姿を見たり、富樣のお緣談を承はつたりして、羨ましいとも妬ましいとも思ふのてはな

いけれど、——

（評）先づ投げる石を地底せよ

○簪　京城　富迫眞枝子

富永樣の前を通る時奧樣は思ひきい大廂髮の白ばらの簪をつと拔いて袂に隱し俯向き乍ら橫町に曲がつてそして再びお挿しなされた、何だか怪しいと思たが問ふては見なんだ。

（評）女のよくやる藝當

○秋雨　三島　遠山露子

酒文と大きな字の側へ、一三六と番號の書いてある番傘をくる〳〵廻して酒屋の小僧が通る、川岸の燒芋屋から立つ白い煙りが雨交りに消えて終ふと、莚をかけた船が通るのが柳の間からちら〳〵見える、淋しい秋雨の日である。

（評）秋雨の情景

○新年の暮　下關市　山本芳子

丘て兄さんと拜した初日が漸く西山に隱れた。黝んだ煙突の黑き〳〵煤煙は、洋館の左の靑々しい木立を甜める樣に廻つて、四邊の象は悉くこれを呼吸した。

塒に急ぐ鴉の聲と共に、新年の夜の幕は除ろに閉されたのである。

（評）淡き哀愁

○こほろぎ　上總　森婦美

秋の夜は、更けて近所では、ばたばたと、戸を閉める、一人机に向つて考へて居ると、こほろぎがなき出した、と亡くなつた妹が、姉さんかたさせすそさせつて。私達に、敎へるの、とよく云つたのを思ひだして泣き伏した、今頃はあの冷たい御墓の下で、こほろぎの鳴くのを聞いてゐるでせう。

（評）涙痕滿紙

○のこりの柿　落葉

毎日毎日、腕白小僧に、長い竹竿て、叩き撲ぐられてあつた、柿の木。今は、小さいヘゴな實を、二ツ三ツつけたきり、淋しくたつてゐる。

なぜ、あの柿は、とりのこされたであらう。あれても、柿實といふ、資格をもつてゐるてないか、形がわるいたつて、味に於ては、變りあるまい。

それに、あゝして、小僧にまて、坂られた上句の果は、鳥にても、つゝかれてしまふてあらうに。

年頃になつても、片づかないてゐる、隣の娘の理由も、略ゞかつた。

（評）多く悟り過ぎた氣味あり

○喜び　神奈川　木村涙花

「ちや文子樣之で失禮致します又來年お目に掛りますホヽヽ」とお別したが、何だか斯う悲しく成つた、來年!!!明日は最十八「オヽ厭だ」と、身震ひした、が何かまう事ない、年の名が殘る丈けだ心も形も變りやしない、其麼心配より明日の遊びが何麼

に樂みだらう。

(評)甘味に苦味の添ふ時代

○寫眞

信濃　山村あい子

九月撮りました寫眞は自分乍淋しい顔にみられます村山樣と靜子さんに贈つたらお二人共、什うあそばしましたの淋しいお顔ねというて返信がきました人がよく申ます寫眞にうるみのくる年は死ぬそうです私とてもまだこれからが花ですのに——

(評)弱い女氣

○星の瞬

京都　綾子

碧澄める空を天の川とも見せて眞一文字にかき切つたる薄雲の影より、かすかな稻妻がもれて來る。靜にみて居ると、其度毎に兩岸の星列が一齊にキラ〳〵と瞬する。星の瞬—自然の奥秘を晌する星の瞬——。此時自分の生命の源は彼處にあるのであるまいかと私は思つた。

(評)神秘觀

○暖爐

相州　善浪　逢子

二階の廣間から賑な笑聲が聞える。下には誰も居ない。午后の二時。雪氷辷して來た後の冷氣がひし〳〵と身に泌みるので、開いてゐた扉を其儘室に這入つた。湯の氣の多い空氣の濕りが心地善く身體に觸る。暖爐の上の護謨糊のみが、淡い倦怠の色を表はして居た。

(評)倦怠の色、此處ではいまだ附燒刄なるが如し

○病院の夜

吉野　阿隆

數へても見なかつたが柱時計は今たしかに十二打つたと思つた、忙かつた筆記の手を止めて中庭へと足を運んだ、あたりはしんとして、何んのけはいもない、唯硝子戸ごしに電氣が力無げに光を放つて居る、熊笹を撫て來る風のさうと襟元をかすめて通ると、思はず身ぶるいした、あゝ何て淋しいのだらう、虫の一聲だに無く月は朦朧に霞んで、時々氷を砕く遠音の院内にひゞきわたるのみてある。

(評)患者の見た病院に非ず

○海

牛込　かへり花

月島の海岸に私は立つた。白帆が二つ三つちらほら見える。霞の樣にずーと向ふに見えるのは安房だ、あゝ其の岸に誰か立つて東京の海を想うては居やすまいか。すぐ下を魚を乗せた小船が靜かにこいて行つた。

(評)海が思ふて涙うつて居る

○零落

福井　稻の花

入相の鐘がゴーンと餘韻ながく響いた時、母樣は思ひ出した樣に沈んだ調子で「淋しいものだねえ」と被仰る、そして私の顔をしみじみと見て被入る、その眼には涙の露さへ宿つてゐる、見られた私はなぜか顔をも得上げずすゝりなくのてあつた。

(評)人生の夕暮

○薬の香　佐賀縣　ふじ子

今私は薬局で丸薬を受取つた。そして何氣なしに嗅いで見た。あら——去年の秋柿の實が色着く頃一級上のたき子樣が肺病とやらて學校およしになつた、その方のいやな香の藥！と、まあ同じ香、あゝもしや？胸が波うつ。

（評）御尤も

○里がへり　熊本縣　宮野かずゑ

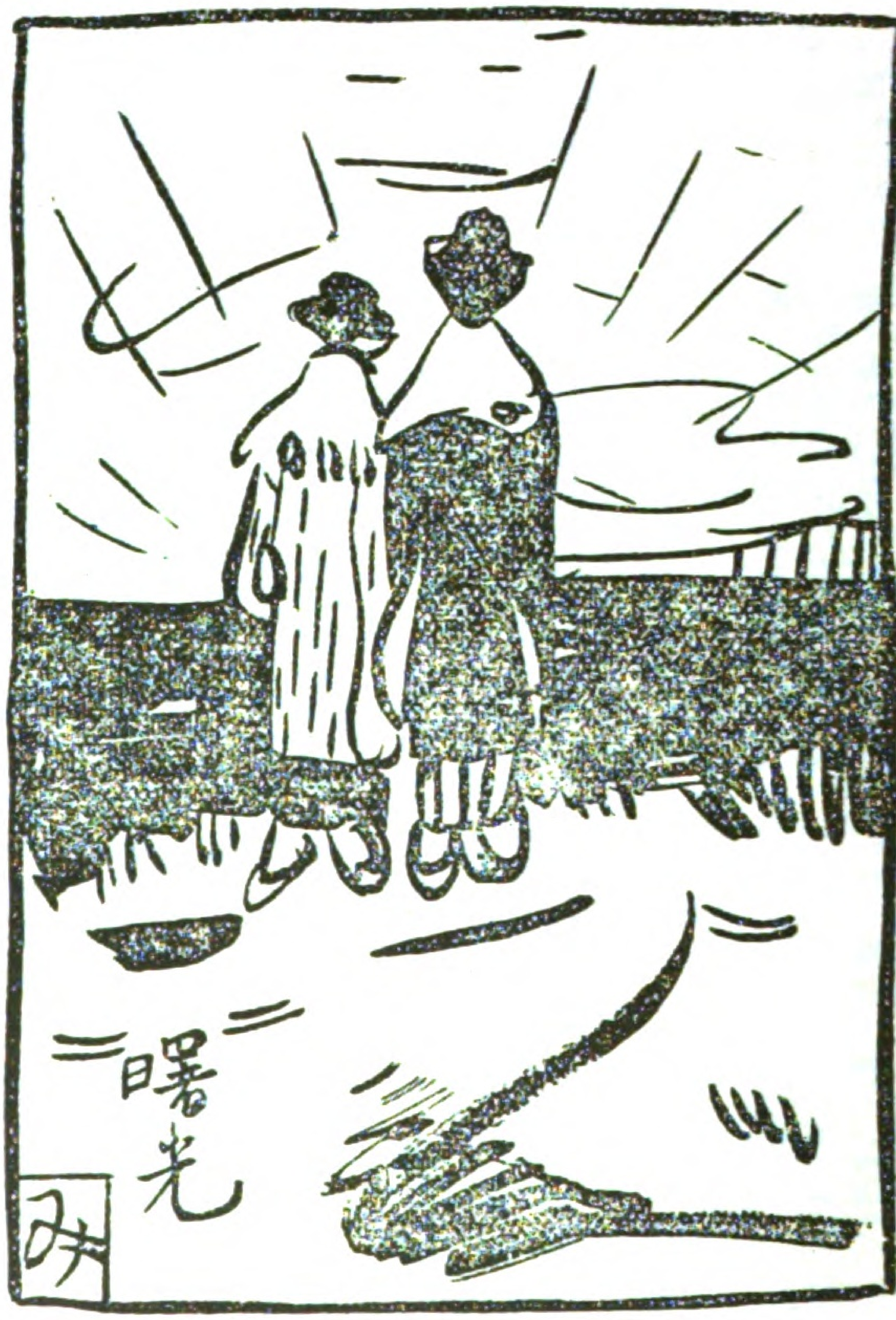
二年前に嫁入つた姉さんはもう秋も濟したと云ので、子供を背負つて久し振て歸て來た嫁に行くまては、歌留多や試驗を心配して居たのに、今ては蠶や作のことを話して居る、それても妾は姉さんが一番好です、土産は栗をたくさん持て御出た。

（評）意識せざる哀しみ？

○大工さんの歌　尾張　珠子

私方の隣家に住んでる大工さんは、いつても小聲て何だか、わけのわからないことを唄ひながら、仕事をしてゐます。或日丁度私が遊びに行つてると弟子が「親方あなたの歌はなんといふ事てす」つてきゝましたら恐い顔して親方が「馬鹿ッ唄ふおれさへわからんものが貴樣達にわかつてたまるものかッ」と叱りつけましたので私はたまらなくなつて、お腹を抱へて、飛んて家へかけ込みました。

（評）仕事の出來る唄



希望の海　紀伊　稗田みつ子

○朝　秋田　大山愛子

お隣の御爺さんの咳拂ひて「びつくり」起きて、朝の冷氣を入れ樣と急いで雨戸を、あけた、庭の大輪菊の屋根にも、向ひの會堂の屋根にも、霜が眞白に、降つて居る、昨日迄は木の葉がくれにはつきり見えなかつた、觀音樣の屋根は、今朝餘程よく見える、やつぱり白い。

○川向ひの畑　德島縣　野　[illegible]

ぱつと、朝日が映した川向ひの畑！さと芋の葉、大根の葉、ねぎ等が何とも言はれない輝がしてゐる。一面眞白いそばの花には、今にも白い蝶がまい出しさう。黃ばんだ稻——分けて今年は豐穰が重々しいので、作男のほく／＼顏が思はれる。

○山茶花　遠江　富永　雪子

村のお寺の廣くもない庭には、今し山茶花が白紅を交へて、一つぱいに咲き亂れてゐる。寺の中では、和尙同志の碁を打つ石の音が、ヒシリ／＼と幽かに聞える、と何處からともなく一羽の白鳩が舞ふて來て、山茶花の枝にとまつた、花は二三片秋のひざに散つた。

○猫　四日市　辻　一直

ニャーと一聲なけば「おゝ可愛さうに……」と云ふ彼の猫の大切の／＼お婆さんは昨日死んだ。村の人は婆さんの葬式はすましたが猫は養はない。彼の猫が「ニャー」となけば「畜生」と頭を撲る。此頃は大變やせた。彼にはどうなるだらう。

○ある朝　安藝　ひだ子

爺やがついてゐる鐘の音を夢中て、聞いて起きて見ると、もう夜は明けてゐた、外に出ると寒くてたまらない、本堂も庫裡も屋根は、霜て眞白い、石屋はもう來て庭の方て、コツ／＼音さしてゐる、あの冷たい石に腰掛けてどんなに寒いだらう、朝寢したのが恥かしい。

○元旦日記　靜岡市　さち子

元日早々延喜てもない弟も妹も學校へ行く途中てころんだと言つて新調の晴着を泥だらけにして泣いて來た。弟は去年拵へた着物て喜んて行つた、妹は中々承知しない。女のペーニチー、敢へて成人せし婦人を責むべくもあらず。

○雪の夜　陸奥　あやぎく

雪がヘラ／＼と障子を打つ、もう十時だと云ふのにお父樣のお歸りのお遲い事、母樣は火鉢を片寄せて一心にお針をして居られる、床に活けた大菊とひなぎくの影がユラ／＼と動いた。つと母樣はお針の手を止めて洋燈におかけになる、「母樣！お父樣お迎ひに行つて來ませうか？」!!!

○朝　美濃　ときわ子

裏の岡へ登つた、清淨な朝の空氣の滿ちた四方はサツパリと洗ひ上げたように心地が好い、東の空は濃い紅色に染つて居て、山々の間から、木葉や、草の露を吸つて、盛に霧が登つて居る、五六ヶ所て鷄が啼いて居た。

○新墓　備後　吉川血有子

伯母さんは靜濕つとりと水を含んだ穴の中に、眠つてゐるのだらう。高く盛られた土の上に小さい屋根を載せ、周圍は花て飾られた、白張の提灯も立てられた、親族の人々は順に水祭をしてゆく。あゝこの美しく飾られた墓も一度の雨に、どんなに淋しくなることだらう。伯母さんは淋しいとも思はないて、永い間の冬籠。

○曉　千とせ

深い霜柱をさく／＼踏みしだきつゝ小川の岸に立ちて、水の底に沈て居る銀の如な月を目掛てざぶりつと、月の光は更々と碎けて亂れ乍に手桶へ移した、夫を家迄もとそろ／＼、一歩二歩……、どこかて一番鷄が寂莫を破つて東天紅、と高らかに……。

○薄命　美濃　篠田きん子

寒い北風がすつと入る窓の下に机を並べて、君子さんと私は平常も叔父樣の講義を聞いた、叔父樣は長い白鬚を捻りながら、二人に諄々と論語を敎へて下さつた。その年長けた叔父樣は今も尙ほ講義を遊ばすに、曉薄命な君子さんは……。

○小春　兵庫　靜　子

裏の藪て騷いて居た雀の聲が靜まる、庭を隔てた離房からは、大工の鉋の音がかすかに聞へて、折々吹く生暖かい風には新しい木の匂ひがプーンとする、隣室にはお客樣の絹ずれ音しとやかに。お隣の雛が何か思ひ出したやうに鳴いた。

○薄明　埼玉　青葉女

夏の夜なんか前の稻田へ、涼みに行くと、辰巳のひくい空がぼうと明るんで居ます、それは、戀しい東京て、電氣が空へうつるのです。行きたい。あゝ、せめて市街が空へうつゝて、一生出る事の出來ないこの山の乙女に、見せてくれたら。

○遊子　島根　すみれ

「歸ります」「待て居る」もう幾度繰り返し書かれたのやら、歸省の日が近づくに連れて故鄕戀し

きの思ひが増す、土產も揃ふた、一身体許りが彼貫と敎室で講義を聞く、心は疾に姫路でお母さんと語つてゐる、夢にまで現々と。

○樂天家　攝津　よし子

民子樣が、此頃大變しづんでいらつしやるので、何う遊ばしたの、つて聞いて見たら、私に秘密があるのよ、つてほゝ私も一度、彼樣にしづんで、何故其樣に煩悶していらつしやるの、て言はれて見たいわ私だつて、秘密があるのだけど、しづんで見たいと思つてもしづまれやしないわ私の樣なのが、眞の樂天家でしようか。

○冬　丹後　香童子

朝から寒い北風が破れ障子を絶え間なく鳴らして居る、針運ぶ手を休めては火鉢に暖めて居ると豆腐屋のラッパが如何にも寒そうに響いて來る、嗚ー冬だ、芳三樣が渡清してから三年になる——。

○太陽の沒する時間　伊　知　子

午後五時二十六分、夕陽は五島の山の絕頂に落ちて居ます、西のみ空は薄黄色で、其中に眞紅な太陽はずん〳〵見てる間に半分になり、アレ〳〵と云ふうちに遂々島の陰に隠して仕舞つた。時計はちようど五時二十九分、太陽直徑の沒する間三分間。

○義理　神田　蒿　子

富子は箸を執らなかつた。實兄は、義姉故に無言つてゐる。義姉は又實兄の不實なのを、氣の毒がつて、頻りに進めて吳れた。富子の小さい胸は、恨めしさと嬉しさに、亂れて、不思目を熱くして、顔を素向けた。

○闇　伊賀　よしゑ

ひる前に浸しておいた洗濯物が、忙しくてとう〳〵日が暮れかけてから漸くかゝつた、絣飛白の私のを洗つて居る……、暗い影が四方からせまつて、公孫樹のかげは猶くらひ、すると此の着物はお母樣のだと思つたり、猶くらくなつた時には、亡母さんのだと思つた。

○星　若松市　佐藤　安子

九日の月は、絹の樣な浮雲の中からのぞいて居る。その下に、銀色の星が三つ、兵營から聞ゆる、軍旗敬禮の練習の喇叭と、たがはずに調子を合せて居る、私はいつまでもあの喇叭を吹いて居ればよいと思つた。

○罪　本鄕　望月　國子

公園の花を採つてはならぬ位は、知つてゐる、けれど病床に待ちわびてゐる妹に、一輪見せたい、あゝあの紫の、あの紅いの……ダリヤの咲き亂れた所を二三度往來した。これ一輪採つたとて與を害なふ事もあるまい花神も許してくれようと……遂に罪の一枝は紅鮮やかに秋の中に香つた。

○冬の夜　越後　吉田かほる

木枯は庭の枯葉にかさ〳〵と物凄い音をたてゝ居る。さつき迄騷いで居つた弟や妹は最う寢靜まつたか小聲一つだにしない、絕えず時計のセコンドを刻む音は耳底に殘つて居て折々障子のブウ〳〵と字鳴る音が嘻しい私は宵に倦いて煩杖て喰何想ふともなく行燈の灯を見詰めて居ると、ジイーッと油のにじむ音がした。私はあゝ眠くなつたと大きな欠伸

○灯　大阪市　中野喜代子

寂しい秋風に吹かれ乍ら、暗い——暗い、トンネルの樣な町を、唯譯もなく心嬉しう歩いて居る内、遙か向ふの通りに灯が見える、五つ六つ、例へばそれがほんのりと春の灯の樣に、その前を奇麗な電車の行き交ふのが、恰度夢の樣に見えます——、

○父樣に氣の毒　横濱　小田切錦子

ツル〳〵と、光つてる、お父樣の頭に、大きな創が、あります。それは、私の幼い折に父樣に背負して、大きな石で頭を臺にして、ペン〳〵を搗いた時の、創だ相です。一年〳〵お齡を召すと私は氣になつて仕方がありません。今更に、御免なさいとも、わびられず、毎日苦んで居ます。

○元日　呉市　碓井松乃露

外には犬が嬉しそうに叫んで居ると、羽根つく音や、鞠歌が節面白く聞へる、私は古梅の枝を切つて、名刺受の所へ生けた、名刺が四五枚、まあお早いこと、臺所からおいしそうな御雜煮の香が、鼻へつく。

○落葉　三河　淺井眞龍子

傾き易い秋の日は刈立てられた稻架を金屛風の樣に形どつて居る、野分の風は我が物顔に時々吹いてそして木の葉は散る。今年はじめて色づいた紅葉もいつか亂れ散つて、冷き庭石はその落葉を載せてゐる。昨日まで隠れて居つた明神

の趾も今からはよく見る。

○寒夜　三重　川原みさを

鬼瓦の角も折れよとばかり、強く吹き荒れてゐた風がハタと止んで、怪し氣な鳥の聲が折々聞える。夜遊びの歸りでもあらう、二三人足駄の音が七軒め家の角の邊で消えてしまつた隣の老母様はまだ談がふつ切れない。

○留守居　宮城　手戸まさる

引き入れる様な低い調子の尺八が余韻を幽に消えて行く、窓は既に白んで夢の様な月光がカアテンを洩れて射込んでる、かるた歸りの一行らしい人が通て留し杜絶えた道を北に人の來るけはひ、今度こそはと耳を澄すと電柱に雪拂ふ音して空しく過ぎ去つた。

○野菊　長野　東條しう子

昨日の夕方迄小さい花ながらも枯れ野には一きはの誇になつてゐた野菊の花。夜の霜に凍つて——今おのぼりになるみ光の爲に花は崩て葉は赤茶けてしまいます——寂へ行時はかの日輪様さへお見捨てになるかと思つて妾は非常に悲しくなりました。

○秋祭りの宵　秩父　近藤登久

夕食の仕度が出來たので庭石傳ひに隱居にお迎ひに行くとお祖母様は面白そうに昔御自分がおとつた芝居のお話をして居らつしやる傍に妹は新調の袷姿可愛らしうにこ〳〵と聞いて居る處二人を連れて外に出た時丁度山の端から眞丸いお月様が上つて鎮守の森に芝居の寄太皷が陽氣に響いた。

○安房より　安房　宮本白露

皆さんが秋だとお云ひなさるけれども獨り安房ばかりは秋は來ません、濱には秋風も吹かない青い青い夏の芝生があります、海も夏とは變りませず、船もゆつくりと淡い煙をなびかしてをります、山にも紅葉はありません百舌鳥も秋らしくはないのです。

○羽子　兵庫縣　正子

お正月早々お隣りの文子様と、羽子を、ついて居た所が、私の番になつて、ペンとついた拍子に、今御通りなさつた方の、綿帽に羽子がとまつた、其方は、何も御存じなく、さつ〳〵と、歩んで被入る、あら、私どうしやう。

○坊やのおことば　つゆ草

よく肥つてマア頭が二直に成つて居る。紅梅の蕾に似た口のあたりの愛らしさ堪らず一寸つゝくとオコーン〳〵とお話するのですもの、思はず頬ずりする。でも坊やの言葉は伯母様に何にも分らない。否私計にや無い誰にだつて——只アノ白い羽持つ天使と坊やの若い美しい母様にだけは通じるのでせうといつも思ふ。

○戀　札幌　立岩ゆきや

戀、私はどうすれば戀か解らぬ、人様がよく戀とかラブとかおつしやるが云ふ其人々も知つてをるのか私はあやしいと思ふ、小說で見る様な、あれが戀でしようか、つまらん、なにも面白くない事、あんなものなら、一度はあると云はれたが無い様に祈ります。

○秋雨　濱松　平岩白菊

細い雨が黒板塀へ銀の線を縦に劃しては又すぐ消して居る。菊の花おもの哀れにうなだれて瞑想に耽つてゐるかのやう、紅いつたの捲きついた石燈籠のあたりで、鳴く蟋蟀雨滴の音が合して淋しい夢のしらべのやうにひゞいてゐる。

○通　しのぶ子

私は毎日通をもつて御酒買ひにまゐります、はじめ新らしいきれな通をもつて行く頃は、番頭さん丁寧にかいてくれましたが、古くなつて大分表紙もよごれた此の頃はチヨイ〳〵とつけてくれます。私は其度にこう思ひますの。人も心をキチンとさせるには先づ容儀を整へるが第一だと。

○小春日　牛込　平塚白百合

スッカリお掃除の出來たお座敷はカラリとあけ開かれて、暖かい日が一ぱいあたつてゐるご椽にほした夜具綿の中に、玉がスヤ〳〵ねむつてゐる。座敷の中には光線が縞になつて、ゴミがキラ〳〵光りながら上になつたり下になつたり。ゴミの靜まる迄と、私もご椽に出た。庭の銀杏がヒラ〳〵まひ落ちて、何處かで屑い屑い、とにぶい呼ごゑが私の魂をねむらせやうとするやうに、にぶいながら力強く聞えてくる。

○散歩　京都　鐵本周子

「そうぢや、ありませぬか」
「でも——」
白い——柔い——手の指が觸れる。暖い息が顔にかゝる、肉の濕みが微に、頬に感ずる。ポーと眼が霞んで來る、黙つて來る。二人の間に、置かれた一線が夢の様に消えて了ふ。



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）　東京　藤掛常子

冬の温泉の君まぼろしに見られけり

○（地賞）　信濃　庫山秋草

秋逝かば逝けよと鐘のひゞきかよ

○（人賞）　京都　伊藤常子

茶の花に鶯の子の行衛かな

【秀逸】

枕石腰かけ石や春の草　福岡　今井とし子

元日の讀むもの多き机かな　京都　井上澄子

明月や笛吹く人のうしろ向き　小樽　堀尾清子

初雪や犬と子供のかけくらべ　千葉　小高京子

元日や紫衣のお僧のもの〳〵し　札幌　藤井八重子

初東風や美き三百の稚子の顔　神戸　森本柿女

橋守は何人とおよるぞ月の宵　芝　龜井芳江

旅枕秋も越路の霜の月　赤坂　木村はや

秋の夕赤き柿の實なほ赤く　備中　田中佳枝

斷橋や小石川原の秋の霜　山形　小河原とみ

文机や梨地の硯今日の月　大阪　沼生美代

大原に此木蔭あり蟬の聲　尾道　ゆたか

小鼓を枕に春の月を見る　麹町區　牧野はん子

明月や大根車の露白し　相州　善浪逢子

いそ〳〵と行く人影や冬の月　東京　藤村美代子

昨日今日落葉を掻けば鵯啼く　北海道　淸野芳枝

こちら向いて何に笑ふぞ小春人　京都　宮原みどり

見送れば見返る人や木枯す　紀伊　磯枝子

乾鮭や山風寒き臺所　上總　鶴岡富路子

錢あれば酒て一冬籠もるべく　沼津　山縣梅園

明星のまたゝき寒し朝の空　本郷　望月麗子

蕉境に入る其俳諧や今朝の秋　下谷　平野柳子

水淸く石は皆奇に紅葉哉　水戸　田土部常子

山燒けや雛僧出て門をとづ　靜岡　辻村かと子

時雨るゝや暮れて薪わる納屋の人　四日市　辻一蘆

夕顔のかけや筧の落し水　加賀　勝崎菊子

もらひ人もなく木枯の野風呂哉　山口縣　郷原美奈子

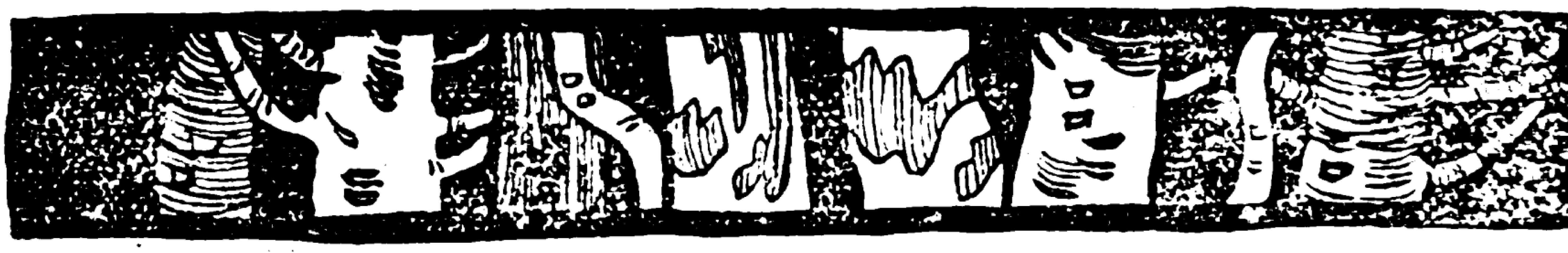
雪だるま紅さゝばやと思ひけり　備前　豊成園花子

ひと束ね落葉掻きある小屋根哉　大阪市　橋本久子

菊枯れて蓬生の戸に月細し　山口　つきくさ

秋の雨紅葉の塲の人空し　和泉　金田よし子
門の月犬に追はるゝ乞食哉　遠州　高畑小菊子
我門を覗く野犬や秋の暮　千葉縣　三橋愛子
谷川や落葉の中に月の影　府下　英子
露の萩袂すほめて通りけり　横濱　新井野菊
心願の成就して冬の月を見る　静岡縣　遠藤寂子
閉め切りし一間〳〵や冬構　出雲　百合子
新玉の若水くみて肌寒し　伯耆　足立春子
山本は大竹藪や殘る雪　長野　熊崎あや子
霜の夜やから〳〵となる車井戸　本郷　渡邊三枝
梅雨や君病む屋根にからす鳴く　遠江　波多野雪子
梅咲ひて孝女が村の水清き　静岡　鈴木ひろ
霜枯れや飯焚き習ふ小傾城　遠江　伊藤ぎん子
田舍路やある臤拜む地藏尊　佐賀　西いと子
元日や謠好きなる君の醉　神奈川　矢野きみ子
枯柳米磨ぐほどの流れかな　大分縣　つゆ
呼ぶ尾花送る小萩も秋の風　岡山縣　巴子
猿の足跡を焚く落葉かな　羽後　すみれ
月を背に歸り來る子の謠かな　岩代　吉田きち子
裏庭に玉の泉や蝶拂　信濃　山本操
初東風に糸の進みやいかのぼり　牛込　小栁菜山子
螢火やおとぎ話の夢の宮　北見　今村りと
開帳は何の佛ぞ山ざくら　兵庫　杉山春翠
いかめしく岩そば立ちて秋の山　遠江　鈴木いし子
初冬や花壇の上に蝶の殼　讃岐　雲の色
落ち合ひし水それ〳〵の紅葉哉　信濃　かつ子
同道や木の實たばしる馬の顔　静岡　金澤愛子
醉さめて月を寒がる男かな　麹町　橋本ふさ子
冬の月詩人の墓を照しけり　信濃　若林しづ子
秋の水銀のかんざし落しけり　福岡縣　湯川玉子
藪柑子一つ殘冬を飾りけり　讃岐　衣輪すゑ子

瀧流や笠に雨もる秋のくれ　丹後　香蓮子
朝神樂神來ます時鷄の聲　島根　すみれ女史
時雨るべき雲の早さや欅木立　奈良縣　中富よしみ
雁仰ぐ眉に冷たき夜風かな　廣島縣　一笑
梅咲て佛の蝶を拂ひけり　廣島縣　すゞき
さびしさに殘れる柿もかぞへけり　東條周子
大犬の藪より出たり冬の月　三重縣　川原みさを
庭掃やこゝにも咲ける菊の花　秋田縣　小原あき子
獵人が一歩を盗む落葉かな　信濃　淺田千代子
雲一朶動かぬ秋の日和かな　豊後　小林しめ
秋初郭巨の釜を掘り出さん　羽後　蕾薮女
甕の穂にみちくる汐や沙魚をつる　羽後　三浦ふみ
秋風や流人が宿の竹柱　羽後　菊地まき
追羽根のうらみを更に歌留多かな　上總　森嬉美
朝露と共に散りたる紅葉かな　信濃　玉子
菊の香にことさら清き朝かな　長野　上波多廣枝子
老僧や小雪降る間を鉦叩く　札幌　黑子
夕風や一鳥飛んで雲に入る　水戸市　玉川すま
白菊の微醺の人に香りけり　東京　夕ほし
我れの影の倚物すごし冬の月　上毛　松本春野
うぐひすの起きて聞けとの高音かな　静岡　寺田ゆき子
梅の香にそと立ち出てぬお庭先　徳島縣　野澤繁子
春の風孔雀の羽を吹き絶えず　千葉縣　宇井紫花
椽とりて土塊に登りぬ春の人　豊前　赤田すみ子
屋とんで一水白く冬近し　静岡市　根岸綠子
初雪の野を見て過ぐる馬上かな　寺尾　山西照子
君と我一つ違ひや草の花　越後　藤原偶女
侘びぬれば白きすみれを愛でにけり　松代　芳子
枯川の淺き流れや散る紛雪　岩代　羽洸子
三尺の髮を吹きけり秋の風　赤穗　鉦舟
琵琶を彈く瞽者が軒に時雨かな　美濃　ときわ子



わがアルバム

(餘　　　　興)

○北の國（天賞）

赤坂　静江

本箱の上にのせた儘の繪端書帖、遠くは蘇格蘭の名湖、ベスビアスの噴火、近くは飛鳥の櫻迄あります　生來想像の好きな私は、名もない城趾に亡びしバビロンを偲び、スコットの名詩湖上の美人を生んだ遠き山河を慕ふたりしました。中にロッキーの雪景は私の北の國を懷しむ心を一層强めたのでしたが、昨年遂に父に伴ふて幾年かの望通り極北の新領に行きました。九春古丹と改めたコルサコフ、豊原と呼ぶウラジミロフカ、皆繁華の街ですが――、其れも疲れた漂泊の旅の人々の暫しの宿、落葉松の密林にすさむ凩の樣に、冷たい心拗ねた心に泣かされて歸りました。魚漁の豊かな西海岸の異岡、トンナイチャの土人部落、珍らしい犬そりの畵、是迄はどんなに嬉しく眺めてせふ。今は暗らい思出てす、いつそ〳〵集めて悲しき思出諸共、月波の麓に、我に愛されし狹き自然と仰せた夜雨先生に差し上げ度う御座い升

○悲慘な物語（地賞）

見に角座殿してる

牛込　平塚つゆ子

白綸子に緋ばらを現はした私の命から二番目のアルバム、一枚くるとパット目をくらますやうな西班牙の女優デオトラが右手をかざして、肉付のよい曲線美を薄衣のひだに表らはした立姿、もすそに細くペンのはしりがき「さすらひの浮草より」。私がこのゑはがきを手にしたのは一月前、この畵の中には涙と血とがこの女優の姿をこしらへたやうに悲慘な物語りがあるのです、兩親に死別かれてお叔母樣をたよつてゐらしつた處、無理に進められた結婚を拒絶したとかてそれは〳〵つらひおしむけ、何日も櫻の木の下でテニスに夢中な級の人を水のやうにすんだ目に見るから折々は空に思ひふけつてゐらしつた。あれはもう三年前、卒

葉間近になつてとう〳〵家を拔けられた切り三年の間何のおたよりもなかつた。と、この繪はがき、私は薄倖な靜さんに神の愛をねがひながら裏をかへすと、「さすらひの子は此處に決心なりていよ〳〵、デオトラと迄ならずとも一廉の女優となりて、短かき一生を面白をかしうあやつり申すべく、何れその折は御めもじおゆるし下され度、こゝ五六年は文通もたち申すべく……」。やさしいすなほな靜さんがこれ迄に、私は、私は涙なしにどうしても見る事が出來ません。特に卷頭にあげて靜さんの立身をいのつてゐるのでございます。

物語が主

○弟の志（入賞）

四多摩　よ し 子

私の弟が十二歲の春、まだ日露戰爭の終らない年でした。當時の大將の肖像や戰地の光景などをいい加減に彩色した、一枚五厘位の繪葉書を二十枚ばかりどこで買つたのか、隱しかなじんで持つてをりましたが、いよ〳〵他家に行かうといふ前夜、大切な品として、餘程惜しさうでしたが私に預けて行きました。それから翌年のお正月になつて、見違へる程成長して、歸つてきました時、姉さんにといつて眞先に出してくれたのが、今も持つてる金字で海老茶の表紙にアルバムと英字で書いてある繪葉書帖なのです。まあといひながら開けて見ると、美人のも景色のも草花のも紀念のもいろ〳〵ありましたが、なほ空間があるから、あのいつか預かつたのを挾まうといつて、丁寧に納つて置いたのを手匣から出しましたら、「姉さんそんなものはお止しなさい、私が又歸京れば良いのを送るから」と云つて、傍に居た幼い弟に持たせてしまひましたが、その後ちさいつぱいにはさめました。

弟の心の推移見えて面白し

【秀　逸】

○旅行先から

信濃　優 栗 子

私は今、旅行先から家へ出した繪葉書でアルバムを飾らへて居ります。一番始めのが二重橋で此春東京へ行つた時第一信に出したもの。それから五枚が東京ので、次が横濱からのです。海の繪で鯨波から。淺間山頂上のスタンプ附のもあれば、戸隱の奥社からのもあります。此アルバムを開く度、其時の事がはつきりと思ひ出されます。

○鼠の用心

京城　富迫露秋子

兄樣御皈省の通知が來るや否、一アルバムを奥室の押入に隱した、それは此前好い繪葉書悉皆持つて行かれたからなんです、そして三日目心配なので、そつと出して見ると大變大事な〳〵アルバムも繪葉書も滅茶苦茶に鼠の奴が嚙つて了つてる、口惜しくつて〳〵突俯して居る所へ歸した」と兄樣がいらつしつた、實を云ふたら「馬鹿な奴」と大笑なさるので、原因は兄樣故ぢやないかと一層口惜しいので御出發まで話もせずに怒つて居ました、それから暫くして小包が來た中に美しい〳〵アルバムが私にとて送つて下すつた、嬉しくつて〳〵矢張り兄樣は宜い人だと思ひました。

○形見

常陸　木村那賀子

私のアルバムは日露戰爭に從軍していたましい病死なすつた、兄樣の形見です、中に挿んである

繪葉書は皆肉筆です、南山附近の野戰病院に、忍孜にかゝつて入院した時退屈しのぎに書いた物て、大抵は戰爭の光景です、中には見るからに涙のこぼれる樣うな院内の病人の有樣等もあります、全部廿三枚、いろ〳〵の事を書き送くつたのを、其儘順々に揷むで置きます、最初のは病むでから十六日目、最後のは死ぬる十一日前、五十入日間の苦しい病院生活を書き付けてある此アルバム、六年後の今日も開いて讀む度に當時の有樣を聯想して涙を流します。

○只一枚！

青森　樊館　惠子

私のは極古いので一册ご座いますが、表紙の「繪葉書帖」の金文字など剝げて、おまけに所どころ綻つてるので、お友達が來られて、見る度にひやかされます、私の性分でもありませうか、ドウして も新いのを購めて、現在のをすて樣と云ふ氣にはなれません、はがきは兄樣が居られた頃兄樣と一緒に、夜見世などてチョイ〳〵買ふたのが二十枚ばかりと、兄樣が大學へ入校になつて、東京から送つて下さるのとてかれこれ、唯今では五十枚ほどになつて居ります、が、皆つまらぬものばかり、然しその中の一枚て——私にとつて、捨てがたいのが挾めてあります……封皮のまま



秋晴れ　小石川　渡邊霞子

○獨逸から

秩父　近藤登久子

お父樣何日歸るのつて兄が獨逸へ行く前夜千代子がさも名殘り惜しげに云つたものですから兄は本箱から美しいアルバムを出して千代子に渡してこう申しましたの父樣お彼地へ着く〳〵千代ちやんに度々美しい書葉書を送るから千代ちやんそれを一枚もなくさないてこれにはさんでお置きそしてそれが一ぱいになる時は父樣が歸るからね、つて眞實にうまい事を考へたと思ひましたわ

仰しやつた通り書葉書は度々千代子の許に屆くものですから今では姉まで興がつて樂しみにして居りますの

○全國より

濱松　しらぐき

青地に白色薔薇の打出して五十枚揃買つた當座は舶來やスタンプ物ばかり揷して、ボール箱へ入て虎の子の樣に大切にしたが、此頃はもう交換ものばかりで日本中の寄集り、西は九洲天草島から、東北は秋田縣、北海道まて、筆蹟ていつも其人の性質を想像してみるペン萬年筆毛筆鉛筆て、金釘流ミヽズ流、中には英文もある、文句は種々雜多だが趣意は交換を願ひ度いと言ふに過ない、無文句の人も二三枚ある、また自分の姓名がないのもあるが是は多く東京の方に多い聞

國の御方はすべて文句が長いように思ふ、秋田縣の佐々木いさ子樣は毎日暇だと言つて、切手の四ツ角を折て貼て寄こす、隨分物好な方だと思ふ、中央に一枚大切に挿んであるのは洋裝美人畫だが 送つて下さつた人は――秘密――此の繪葉書が一番大好、

○いつまでも　岐阜市　華水子

私のアルバムは七十枚ばかりさせますが、それて春は春らしい模樣とか景色とかに、夏秋冬といづれもそれ〴〵とりかへますが、その中に或一二枚の或繪端書は、どうしても、私がはづして外のとゝりかへる事が出來ません、お御斷的にひつゝいてしまつたのでもなければ、面いといふのでもありませんが、それそこに日くがありまして、私は決して〳〵ブックが無くなるか、私が死して他人の手に懸るか、てなければいつ迄も〳〵其ページをはなれぬ事を證します。

○私の寳　陸奥　おやぎく

私の机上をかざるアルバムは私を慰さむるものゝ一つですの、一日の勤めに疲勞した身を机に横たへて、さてサラ〳〵と雨戸うつ雪と共に更け行く夜を、ハラ〳〵とアルバムを繰る私の心は丁度天國に遊ぶ樣てせう燃る樣に美しい花や花束もやはり我がアルバム花なのです。それから軍服姿の太郎サンも次郎サンも洋服姿の百合チヤンも、振り袖の美チヤンもどれもこれも可愛い天眞らんまんの子寳を私幾人持つて居る事てせう、オホヽそして皆賢しこくつてね母樣の私を一番よく慰さめて悦ばせてくれます。これが第一に我がアルバムの花と實てすよ、起念絵葉書や名所繪葉書も多くさんあるのですが、子寳アルバムは私一番好きてそして私の寳です。

○おもひ出　本郷　望月麗子

私の繪葉書は他人に見せれば何だこんな物、縁日て五枚一錢だ位に仰やるに相違ありません、それもその筈美しいのもなければハイカラなのもなく彩色のない山水の寫眞版。旅行先から郡の知人に出した餘てすもの。……然し御嶽山へ行たのは今頃だつたか、一などと思ひながら秋の夜長に出して見るとあゝこゝが花を採つた所だこゝてお辨當を開いたつけなどゝ追想すると月夜の甲府の町寒かつた諏訪の一夜……暫し懐かしい思ひにかられます。

○私は――　伊藤よしゑ

場末の汚らしい店に居た私は、三年程以前に此家へ買はれて來た、最初の主人が遊學する時に妹さんの手に渡されたので今の主人は二度目である。いつも習手本や歌集なんかと一緒に本箱に寢ているけれども折ふし花模樣の美しい机かけの上へ出されると、きつと友達が來る、主人と同じ年頃のよく笑ふ方ばかり……、私は花と美人の受持て表紙は青色、飾り氣なしに英語てアルバムとかいてある、けども私の妹分として此の間出來たのは風景ばかりの受持て表紙はあい色の絹に、凝つた竹模樣、姉妹は同じに愛されて居ると姉のアルバムはこんな事を申します。

○教訓　小樽　白菊

私のアルバム？決して皆樣の樣な美しいのではありません茶色て少しの飾もなく隅に少さく「光子」よりと紀された文字は消えかゝつて居りますけれども私の心に不滿の起つた時利己心の燃え上つた時此アルバムが如何に私を慰さめるてしよう諫めるてしよう實に私のアルバムは皆樣のと異つた歴史を持て居ります頃は丁度今から五年前私がまだ女學校の一年十三の時てありましたその頃五年に光子樣と云ふ心もお顔も美しい姉樣が入らしたが何ゆう理か私を非常に愛して下さつた光子樣は熱心なクリスト信者時々讃美歌を謠ては泣いて居られたが花もちり行く秋のはじめ神經衰弱とかて國に歸られたきり何のお便もなかつたが翌年の一月二日美しい葉書と共に屆いたのが此アルバム裏に美しい字て「世の波風に打かつていつ迄も今の美しい心て居て頂戴」とそれから今日迄姉樣の御便は更にないけれどもこのアルバームは今も尚永久に私に貴い貴い教訓をたれて居るのであります。

○三百六十八枚　小石川　田村波津子

私は、繪葉書大好きなものですから、皆樣から、美しいのを送つて下さいます、其の度毎に、此度アルバムに、はさんて一昨年より、今日まで、枚數三百六十八枚になりまして、人物、景色、鳥獸類、又外國製、實寫畫、と別々に、致して置きますもはや、三册のアルバム、は、一ばいに、なりまして、あとのも今年中には、處なくはさむ事が、出來ます、そして美しいのを四册來る正月には友に得意になつて見せる事が、出來ますので、樂しみに致して居り升

○父のかたみ　近江　鈴木小菊女

廿四日の大掃除―妾は二階て古雜誌のごた〳〵

を片方から整頓しました、そして一番の終りに眼に付いたのは、ゴク古びたアルバム―けれども之が妾に取つては極々大切な品だ。

マア這麼所に誰が置いたのでせう!!恐らしい―先達いくら探したか知れアしない―と呟き乍ら繰つて見る―通學時代同窓だつたお友達から來た繪葉書もあれば、冗談好の絹子さんからのもある、妾は讀んで思はず吹き出した、又一枚繰ると、 靜岡名所の繪葉書 之こそ父が靜岡の病院に居つた時此の帖にそへて送つて與れた繪葉書―文意は「病氣も日に〱よくなるから此分てはもう近い内に皈れる其時は色々面白い話を聞かせる」と云ふ事が書いてあつた―吁此の父、眞の父は妾を一人殘して不歸の客となられたのだ!!!と妾は急に眞の父が懷かしくなつて其所に泣き伏した?。

〇高崎市にて　磯巾替

繪葉書帖を開くと一番目に付くのは女學生が國旗をつないで居る下にペンで「先日は結構なおはがき有難う私も遠からず中に出征致すこと〻思ひますから何れ定まれば電報て通知するから皆樣に宜しく」(高崎市ニテ作太郎) と書いてあるはがきてあります私は此はがき當時の心配そうな母の顏や、 口にのみ誇つて居る父の心や、淋しかつた彼時の家庭など思ひ出してブツクをしつかり握つたま〻暫もなく泣く事は度々ムいます。

〇學生時代の紀念　大阪　高山　米子

一番古いアルバムの第一頁に挿んであるのは、

繪葉書とは名計りの貧厭て製へたやうな趣きの無いもの、 でも之は私にとつては大切な紀念なのです、級て仲よしの美喜子樣が、轉校なすつた折り初めて下すつたお便り、 三十五年七月廿四日とスタンプが押されて在る。

其れから二三頁繰ると、大阪博覽會の繪葉書、どれもこれも粗末なのだけれど、 其頃は珍らしがつて居たのだから嬉く。

なつかしいのは學校の紀念繪葉書、 同じのが五枚も來て居る、皆「是は私共卒業紀念として御贈り致します」と書いてある、 是れを見る度、いつも云ひしらぬ苦痛を感じる。

〇生きた敎訓　大阪　攻野　夢垣

五冊ある繪葉書帖の中、 三冊迄は皆日露戰役當時の、消印のある物ばかりて、見る度に涙て御座います。 是こそは父が出征の紀念‥‥否々、かたみなので御座いますもの。

中に、錢に骸骨の落ちて居る處へ、

古人の俳句を汝に與ふ將來
以是家庭を修せよ
「骸骨の上を粧ふ花見哉」

と、書いてをかれたのが御座います。數ある美しい繪葉書中字も消えなんとする是ばかりは、私にとりまして賊に、生きた數訓なので御座います。

〇各地名所　淺草　酒井ふく子

去年勸工場て福引に當つたのは、此のアルバム、中に挾んであるのは、 名所風俗の繪葉書、開卷第一のは、大島の婦人水汲の服裝、水桶を頭に載せて、かすりの前かけをしめて、草履をはいて居る、此地ては、何でも頭へ載せて、歩むそうな。次は富士山の胸突八丁、大へんな岩石ばかり、其中を二三の人が下りて行く。次のは頂上の劍ケ峯先のとがつた岩のまはりを、 龍のような雲が包んで居て、一寸見てもぞつとする、 よくこんな所へ上る人があつたものだ。 アツ奈良の大佛が出た、何時も私の顏を睨みつけて居るよう、 怖いから此が出ると、急いて頁を返してしまふ。次は稻根神社、 の前の、「奉献大捷祈願成就」と書いてある長い旗の棒から、 八方に各國の國旗がつながつて居る。

〇殆んど誌友　福井縣片山　千里

妾は三十八年の四月に、 父上の大坂へ行かれた土産として、アルバムを一冊もらつたのですが、すぐ其中へ今迄家へ來たのや、女子文壇や、女學世界、にあつた繪葉書を挿んて、 一ぱいにしましたが、どうも家へ來たのや、郵便の消印の無いのは、挿んだといふだけて、少しも興味がありませんから、三十九年の女子文壇の三月號て、文學好きの姉上樣に交際を求めましたが、 今井さんや安森さん、 前田さんを始めに十二三名のお方が長く交際してくださいますやら、 又妾のやうな者の作ても當選しますと、方々の姉上さん(津田樣や片岡樣は同縣だといつて殊に澤山くださいました)迄から繪葉書をくださいましたので、今ては妾に來たの許りて、 二册もきつしりつまりました。

〇キツス　信濃　小梅子

手匣の底深く秘めてあるアルバムを、 ひとり密と取り出して私は每日キスして居ります。オリーブの表紙、第一の頁に挿されてあるのが、 私

の好きな菫を紫のリボンで束れた繪へガキで、其花片に書いてある歌の盃の匂ひが、なつかしくて堪へられない。まだ明いて居る終りの一枚も、今宵は美くしいので飾られるのであります。あゝそれからはどんな接吻がされるでせう。

○兄妹同帖　呉市　碓井松乃露

去年七十五錢奮發して買つた、百枚挾みのアルバム、これは兄さんと私と一所なのです、アルバムの半分は、進水式や日本海海戰の、紀念繪葉書、又中には面白い事が畫いてあるのもあります、日比谷公園の夜、二人の男女学生が、手を握りつゝある繪に、二人のささやく言葉は何？、とも書いてあるのや、永遠に幸あれとか、又和歌も澤山あります、其内私のすきなのは、白鳩と忘れな草の繪に。名にしおはゞ行きてかたれよ白鳩よ忘れな草のその趣を、と言ふの、之は東京の方から來たのですが、私はこの歌が、一番すきなの、繪では呉の山口さんから來た、月夜に帆を上げた船の水彩畫が一番すき。

○御覧なさい　つゆ草

さう貴女草花が御氣に召して？美しいわね、でも私菓物も好き、ねこの林檎等食べ度い樣でせう。その墨繪の萩に御歌の書いてあるのが葉書。優しい御氣性にふさはしいわ。えゝさういつもうつむき勝のあの方よ。西洋の子供のも随分集めたでせう、天眞爛漫の風が可愛いからなの。佛蘭西のは皆鏡樣からよ。秋の郊外の景は中でもいゝでせう。鏡樣よく被入るんですつて――この高い建物は鏡樣の學校で前の廣い川はセーヌ。夕陽に上部だけ染つた帆が何て美しいか。これ見ると胸が跳るわ。何故つて……まア貴女羨しく無いこと。鏡樣のハイカラに成つた風が見度いわ。夫？、オホヽ故郷の弟ですよ。庭の樹ですつて。燈籠が歪むで升の。でも一心にスケッチしたのかと思ふと可愛くて捨てられません。家も偲ばれますしね。そんなに笑はずに次を御覧遊ばせ。川端樣に被入る若枝樣の御筆ですからさ。

○あたまの藥　三重縣　川原みさを

妾のアルバムには一つとして未使用の繪葉書はない、いづれも親しいお友達から頂いたのばかりです。

書齋に引籠つて、宿題に出された算術の問題を考へても考へられんと、氣が無茶苦茶になつて、其上頭痛がして來て　どうも仕方がないそうなるとアルバムです。書籍棚から取出して見ると、もう何だか眞底から樂しい様な、嬉しい様な氣がお腦に滿ち滿ちて、之は此春上京なすつたお隣の花子さんから……之は本誌で親しくなつた名古屋の澄江さんから……其次は從姉妹の春さんから頂いた一番大好な西洋婦人の繪葉書、とそれからそれへ操つてる間に、頭痛は何處へやら去つて、氣がせい〳〵する、再び問題を始めると、今度はたやすく解し得られます。丸で妾のアルバムは藥の樣です、苦い目もしないでほんとうに重寳な藥です。

○文句　越後　根岸光子

オリーブ色の金字のブック、第一番にさゝれてあるのが、聯隊旗、軍旗祭の紀念スタンプが押れてある。次は、亂れ髮の西洋美人が、花輪を以て、にゆうと立つて居る　隣は幸子樣から來たお便り、赤き西洋ばらの上に、うるはしい水茎「光子さんお寫眞有難う、大そう良く取れましたよ、あゝあの持つていらつしやるバイオリンから今にも音が出そうよ。あのスタイルだけでもたしかに、音樂家たるの價値あるわ。」まあ、隨分よ、次へうつる手は止つて、目は再び文字をくり返した。

○優しい人　安藝　吉川ひだ

三冊ある中で、一番好きなのは、銀色の表紙に、詩的繪端書帖と、金文字で書いてあつて、其左になつかしきひだまんに呈す、と細く床しい女文字の、それです。

これは三年前、今は世に亡い從姉樣が、京都に入らつしやる時、送つて下すつたものです。優しい人でした、中には、京美人や、京都の名所や、いろ〳〵美しいのが、挿んで有りました、其書状がまだ、あちらへ屆くか、とどかぬに、お從姉樣は、心臓痲痺で逝つて仕舞ひました。

何んだか、「アルバムを送つて下すつたのが、紀念に下すつた樣な、氣がして、此繪端書帖を見る度に、あの優しい、お顔や、お姿を見る樣な、心地が致します。

○九州　熊本市　淸子

山水の模樣の表紙を開くと續くものは名所、舊跡、學校、官衙等種々ありますが、皆、各〻思ひ出となるもの。

三角と長崎と佐世保と八代と大牟田の者。之れはこの三年間に於ける修學旅行の時、各地て見た處の許りを、集めたのです。

女子衛生問答



産科婦人科
醫學士　北島孝夫述

問　無毛　私は廿才になつても未だ局部に發毛を見ません、如何なる譯でせう。（霄月花女）

答　先天性素質の然からしむる所之に對する療法は無し或は皮膚に刺戟劑を塗布しその部分に生ぜる繊毛をして完全なる毛髮に生育せしめんとするもそは唯だ徒勞に屬するのみにて著効を擧ぐるを得ざるなり、加之ならず刺戟劑の爲めに却て皮膚の炊衝を來し更に新き苦みを買ふに止る可し、

問　多血質　私は元來多血質で、一寸した音樂なぞを聞き、又人に會つたりしますと涙がこぼれます。どうしたら刺戟少ない性になれるでせう。（十八年女）

答　所謂神經質にして余りに感覺と感念の過敏なる爲めであります、智識の發達、體質の健康、情神の練磨、社會上の感念、等の進歩するに至らば自然に自個の心念も强くなり猥に他動的刺戟に動かされ之に支配せらるゝ事無きに至らん、

問　排膜性子宮内膜炎　(a)排膜性子宮内膜炎とは如何なることが原因てなるのてすか。(b)それから私は記憶力が減じ、神經が過敏になつて困りますどうしたらよろしいてせう。（からさは）

答　(a)排膜性子宮内膜炎の原因、は今日の科學上尙ほ不明てあります、(b)毎度申す神經衰弱なるべしその療法は最早や數十回も御答へしてあります、通り、規則的運動、攝食を規則正くする事、冷水浴、適宜なる執務勞働、胃腸の攝生、精神の過勞を避ける事等が主なる療法てあります、醫藥を用ゆる事は抑も末てある、

問　貧血は　日常身體虛弱なるものに於て月經量があまりに多き時は貧血になりますか。又貧血は如何なる原因てなるものてすか、ヒステリー症になりやすいとは眞實てせうか。（貧血女）

答　月經過多は勿論身體の貧血及び衰弱を出す者てあります、元來貧血は種々の原因から起るのてあるが殊に婦人に於ては生殖器の疾患（就中子宮の疾患）の爲めに白帶下の多量に且つ長時日間の排泄を來し所謂體液消耗（獨乙語て「セフテフエルクルスト」と申す）を醱すが爲めに全身の貧血狀態を來すのが多いのてあります、その他不定性生殖器出血、月經の過多、及び全身病等の爲めに貧血を招くのも少からざるを見る、全身の貧血は全身の衰弱を伴ふ可き者なればその結果として身體の諸器官に故障を來すべきは數の免れざる所にして神經性官能にも影響を及ぼすは勿論てあります、隨ひて「ヒステリー」症の起る事もそれに依りて說明が出來ませふ、

問　お恥かしいお尋れ　てすが私は本年十八才てありますが、陰毛が少しよりございませんので人知れず心をいためて居ります、確な毛生藥はありませんか。（心痛生）

答　未だ完全なる成熟期に達せざる御年齡なれば左程苦心せらるゝにも及ばざる可し、他日體軀の發達すると共に都合よき狀態に達するならん、絕對に無きに非ざれば落意し給ふ可らず、

問　痔疾　(a)私は二三年前より痔が起りまして、今年の九月頃には肛門のくろにイボの如きものが出來ました。根治法をお敎へ下さい。(b)小兒は受胎後何日間て産れるものてすか。(c)唯一回の交媾ても受胎するものてせうか。（千葉、質問生）

答　(a)全然醫治を受くより他に策なし(b)二百八十日を經て分娩するなり(c)疾病と故障との無き限りは有り得可き事てあります、

問　遺傳　身に惡疾の遺傳あるものは、醫治によつて其疾患は除かれるてせうか。若し除かるれば結婚しても差支へないてせうか。（YK生）

答　惡疾と申すのみては甚だ了解に苦む、元來疾患の遺傳と申す事は社會の誰人も唱ふる所なれども何病も遺傳する何病も遺傳すると申す様に澤山ある者てはありません、眞に疾病にして遺傳すべき種類は甚だ少ないのてありま

す、殊に歐洲はその一に數ふ可き者であるが他に余り有りません然し他に現今の醫學社會に於て何ほ疑問のものもあります、又遺傳と申してもそは親より子に必ず傳はるべき者とその子に傳はらざる者もあります、

遺傳性疾病(?)と結婚問題を關聯して論ずるのは隨分學者社會でも喧ましき事柄であります、あなたの仰せらるゝ惡疾の何者たるを知悉する事が出來ませねば御問ひに對して意見を述ぶる事が不可能である、

問　カマキリ　私は生れ付き痩ぎすなので、友達はカマキリと惡口を言ふので殘念で堪りません。肥える藥はありませんか。(呉市、名無草)

答　肥滿するとせざるはその人の先天性體質である、然し身に何等の疾病もなく健全强壯ならば體軀の成熟すると共にその人相當に筋肉の發育も遂げ、[恰好宜しき體格と容姿を得らるゝのであります、

問　耳だれ　本年六歳の女兒、一昨年の春過ぎから耳だれが出て、それからといふものは、醫者にも見てもらひ、洗滌もしましたが一向にきゝめがありませんが如何したらいゝでせう。(御願ひ女)

答　耳漏(みゝだれ)は耳そのものゝ種々の疾患に因りて起るのであります、外耳、中耳、內耳と申して耳には複雜なる構造あり、それ等の中に炎衝起ればその症候として耳漏を來すのであります、唯だ「みゝだれ」と許り御仰せらるゝのみでは如何なる原因の爲めに來れるや又如何なる療法が宜しきか指示する事は出來兼ねます、殊に恐る可きは結核性中耳炎或は內耳の或部分に於ける結核性疾患であります、倘し結核性炎患なりとせば唯だ單に耳の洗滌位ひでは到底全治せしむる事は出來ません然る可き根治療法を醫士(耳鼻科專門醫)の手に專任するより他に方法はないです、大事のお嬢さんの事なれば知名の專門大家に根本的療法を御受けなされ、唯だ紙上にて聞て推量の療法を御示ししても想像は矢張り想像に止り、害多く功少き事と考へます、

問　二三日間　私は十八歳、處女でありますが、毎月月經閉止十日計り後白帶下が二三日間必ず下りますが病的なのではありませんか。(不安女)

答　格段に異狀ありとは認められず、多少の白帶下は婦人生殖器の分泌物排泄なれば何等意に介す可きに非ず殊に月經時に於ては分泌旺盛なる者なれば白帶下の生ずる事自然であります、

問　鼻頭の汗　私はどんな寒い日でも鼻の頭へ汗が出て困りますが、良き療法はありませんか。(心配女)

答　格別に好療法とては有りません、時々冷水濕布罨法をなさるゝも一方法と考へます。

問　脫毛を防ぐ法　(a)近頃赤毛白毛染と稱して〇〇〇なるもの流行す、一體かゝるものは何にて製し、毛の本質に惡結果を及ぼさざるや。

(b)鼻汁出て、頭痛いたし、のぼせ症にて心地惡し。

(c)脫毛を防ぐ方法は如何。(淸子)

答　(a)賣藥の種類によりては隨分抱腹に耐へぬ物がある、甚しきに至ては羊頭を揭げて狗肉を賣らんとする者あり。余はその種類のものを調査したる經驗なし随て之が是非を論ずるを得ず、

(b)全治し得ざるに非ざるべし、良醫(專門科)に就くを要す、

(c)屢々文壇にて御話し致しおきましたが脫毛は多く頭皮の榮養不良が原因となるのである所へ頭皮と頭髮を淸潔にし滑き油を用ひ務めて毛髮を粘結せざる樣に注意せられよ藥劑は殆ど無効なり、

問　神經衰弱　八年前肺炎に罹り、此の九月より神經衰弱を病んで居ります。左の目尻に大變に動悸がうちまして肋間がキリ〱と痛みます。神經衰弱だとのことですが、此は不治の病氣ですか。(無果花)

答　顳顬動脈の脈搏(めじりの動悸と申さるゝは之なり)及び肋間の疼痛は神經衰弱に關聯して居るや否や紙上の說明のみでは判定致し難し、然し神經衰弱の爲めに神經過敏症を起すは素より爭ふ可からざるを以て或は仰せの如き二症候もその類ならんかと考ふ、神經衰弱は不治の疾病に非ず、

問　双生兒、畸形兒　甚だ御面倒ですが双生兒、畸形兒は何故に生れるのでせうか。(山口縣、石竹女)

答　(a)双胎兒の分娩‥‥双胎兒は一の卵に

二精系の受容せらるゝが爲めに生ずるものと二精に二精系が個々に受容せらるに因り生ず、(b)「カタワ」とは胎兒の畸形の事ですか、畸形胎兒には種々の種類が有ります、一括して申せば胎兒の畸形は先天性發育不全にして其の原因等は多く不明であります、然し畸形によりては胎生學上より觀察して其の發育不全の狀態を說明する事が出來ます、

問 受胎 (a)一度でも交媾すれば受胎するものでせうか。若しすれば立派に發育しませうか。

(b)又私は鼻が時々惡臭を放つて、鼻汁のかたまりのやうな異樣なものが出ます、て大きなせきをしても又その樣なものが出ます、一たい何病氣でせうか。(熊本、心配女)

答 (a)一回の交媾にても兩性健全なれば受胎し得可し、而して妊娠及び胎兒共に健康なれば分娩後に於ける生兒も能く發育するを得、

(b)鼻腔及び咽喉、咽頭並に喉頭に慢性加答兒あるを認む、自家療法では全治し難し、醫師に就き治療を受けられよ、醫治を受くるに何等逡巡すべき理由は無し、

問 冬になると 私は毎年冬になると唇の皮が破れて、痛み、血が出ます、それで毎晩リスリンをつけてゐますが別に身體に害はありませんか。(沼津、秋音)

答 格段に害を身體に及ぼす可き事無しと雖も往々病毒傳染の媒約を爲すの恐れあり、醫治を受けられよ、

問 ニキビ ニキビの治療法と藥とをお敎へ下されたし。(無學女)

答 面皰(ニキビ)は顏面皮脂腺疾病なり、務めて無刺戟性石鹼を用ひ淸洗し其の後百倍乃至五十倍硼酸ワセリンの如きものを塗布せられよ、

問 身體が臭い (a)私は身體が臭くて困ります、長く一つに居ると他人へも傳染するのです。

(b)イボを簡易に落す法をお敎へ下さい。(困難生)

答 (a)身體の異臭は多く腋臭(ワキガ)若くはその他の部分に於ける皮膚の皮脂腺及び汗腺より分泌せらるゝ分泌物の惡臭を放てるより起るのである(殊更に身體を不潔ならしむる者を除き)、須らく醫治に就かれよ、

(b)贅疣を除くには三倍乃至二倍「サリチール」酸「コロヂユム」を塗布せられよ

問 くせ毛 私はくせ毛で困りますが何卒此れをなほす法をお敎へ下さい。(失名)

答 溫濕布杯は多少有効なるべし然し根治は難し、

問 荒れ性 (a)九月頃から顏にブツ〳〵が出來て見苦しくて困ります。

(b)荒れ性で困ります、良き療法はありませんか(M8生)

答 (a)第十六答を參照せられよ、(b)「グリセリン、」若くは「ベルツ」水或は百倍硼酸ワセリン杯を塗布せられよ、又餘り水若くは湯を使用し給ふな、

問 あくび 私は少しどうかすると直きに欠伸がでて困ります、アクビの出る原因は何んでせう。私は終日家に閉ぢ籠り靜の仕事をしてゐます。(山井たみ子)

答 噯欠(アクビ)は不隨意に發するものにして多くは催眠、倦怠、退屈等によりて反射的に起るものなり、

問 二十日間 私は月經なき時は半年もなく、ある時は二十日間も續き、其の後白血が多量にあつて實に困ります。何故でせうか。(大阪、不安生)

答 恐らく生殖器の障害に基因する者と認めます、專門醫師に治療を受けなさい、

問 赤くなる 冬の日外出して風に當たれば頬が紅くなつて困ります。赤くならざる法はありませんか。(みき子)

答 冬の寒冷なる空氣に觸れて顏面皮膚の紅潮するのは生理的自然であります、特に之を止むる方法もなし又た停むるに及ばずと考ふ、

問 便通 私はいつも逆上せて顏赤くなりて困ります。若しや便通が惡いせいではありませんか、便通藥としては如何なるものがよろしいでせうか。(赤顏女)

答 第二十三問を參照せられよ、下劑としては種々ありますが便祕を催さゞるも毎朝上圊する習慣を繼け給はゞ自然便通の習慣を來します、その他適當の運動を爲し餘り澱粉質の物を多くとらず、時々菓物を攝食せられよ。



讀友倶樂部

おめでたう

○新年になりました、皆さんお目出度う存じます、讀友くらぶも追々繁昌してお目出度う存じます、相變らずよろしくと云ふ言葉は最も本欄にふさはしいのです、皆樣も互ひに其心持だらうと想像します、毎々申上る通り本欄は全く開放されたる諸賢の機關ですから、自由にお出入して下さい、中には横着な方もあるやうに見受けますが、それらは又一々通告されゐ方もあつて大抵は分ります。此上にも誠實を旨としていろ〳〵の交換や、思想上の交りを結ばれたいと思ひます、新年に當りまして一寸一言御挨拶まで　（記者）

交際を望む

○歌よみたまふ方に　恐入り升が記者樣一寸この欄を拝借させて下さいまし、諸孃樣に御願が御在升の。聞いて頂戴な。四月號の口畫の薔薇と申升のれあれに「なつかしみ香によふ君によりそひて……うばら花垣」もう一ツ、五六枚はぐると春の雲と云ふのが御在ませう。あの傍にはゆく雲にわが夢のせん……と姉がかきましてつけて見よと申升が困て居り升の。どうぞ皆樣……の所をつけて頂戴。お葉書て、私の所は（小石川戸崎町五三宅恒子）

○津輕のはてより　讀友の皆々樣私は日本のはてに一人淋しく暮しておるものですが小い時から本は好きて假名を讀む頃から本誌を愛讀致しておつたのです其の時分は町内でも本誌を愛讀するものは自まんのようですが私一人てありましたがだん〳〵愛讀する人が多くなつて今てはどこの友達の所に遊びに行つても女子文壇がありまして私らのためになつてこんな好い雜誌はないと云ふから私自身の味方を得たように嬉しいのも偏に記者樣方の御れつ心と皆々樣が一生懸命になつてよい御作を投書なさるからだと深く思ひます年新たまると共に皆樣ます〳〵本誌の盛んになるように致しましようれあまり幼少の時から讀んだために文壇が山をなす程ありますから皆樣の不用の品物や本（雜誌てなし）何んてもかまいませんから交換して下さい御好み次第何册ても差上げますから但し誠實なる人に限ります（青森縣北津輕郡五所川原町、林ちゑ）

○裁縫心掛る方に　讀友の皆樣の内で行末裁縫を以て獨立なさんと思ひ居らるゝ御方と是非御交際致したく尙又東京裁縫女學校に學ばせらるゝ御方も是非〳〵御交際致したう御座いますから何卒御願ひ申ます（富山縣滑川町水野長次郎内蜷川きよ子）

○愛讀者會　皆樣是非共本誌愛讀者會を開きたいと存じます、何卒ぞ御賛成の方は盛んにご盡力遊ばして下さい（麻布富士見町池田香子）

○半紙に認めて　妾は男子のお方でも女子のお方でもかまひません、あらゆる方面の人と手紙の交際がしたうございます、どうぞ尋常小學校しか卒業しない人でもよろしい、半紙にきちんと行儀よく認めてお手紙をください、筆の零と題する一册に綴りて、一は自分の文範とし、一は老後の樂しみにする積りです（福井縣丹生郡

吉野村余田片山千里)

○晶子女史の歌　　はじめて本欄で御あいさつ申し上げます、さて初めから御願ひですが、皆様のうちで晶子女史の歌集何なりとも御持ちの方は、そのうちの數首をたゞの葉書に御うつし遊ばして御送り下さいませんか。ぜひ御願ひ申上げます、御返事は繪はがきで必ず申し上げます又御望みにより、中學世界その外新聞など御入用の方には添へて差上げます。(府下西多摩郡小宮村、森屋方よし子)

○改まりて　　諸姉上樣には美はしく新年をおむかへ遊ばした事と嬉しく存じます。私は女子文壇を何よりの友として暮して居ります、ついては情深き誠ある誌友を得たいと思ひますが、何分無學者故と願はずに居りましたが姉樣方の御交際を見お羨ましくなり、年も改たまつたのを幸ひにお願ひ致します。學校は小學校の補習科及び別科だけで今年十九歳となりました、至つて惡筆ですし、一月に二三度と云つては差上げられませんけれども長く御交際をして戴きたいのです、以上おことはりして置きますもし御交際してやろうとおつしやる方がありましたら下名へ、高き教育を受けられた方から願へれば此上もない幸ひです、どうぞよろしく(近江長濱町御堂前小倉壽榮)

○十九の春　　妾も今年十九の歳を迎へました本誌を友に暮すも四年になります、がこれぞと云ふ誌友を持ちません、今年から澤山の方と御交際を願ひたうございます、そして繪端書なり玉章なりかまいませんから和歌俳句一首づゝ書いて送つて下さい、名所絵葉書に妾の寫眞を添へて御返し致します、何人でもお斷りはしません。(福島縣田村郡三春町北町百十八橋本ふさ子)

○お願ひ　　誌友の諸姉樣方、私は今から拾五年前に父を失ひ、其れからと云ふものは、淋しさは増る貧はつのるし隨分とこれまで母と二人で苦勞心配も仕揚げましたが、惡運はつよく、又私は四年前から腦病に罹り、爲めに高等の教育をうける事も出來ず、今に此の片田舎に何をするでもなく唯々自然を友として、心淋しく日を送つて居る不束者で御座いますが、おいとひなくば御交際を願ひ度う存じます。幸ひにお姉樣方、壹冊の古雜誌なりとも御惠送下さいますならば、私の身に取りましては此の上なき悦びて身に餘る嬉しさで御座います。何卒お姉樣方末長く御交際をして下さいませかへすがへすも願ひます。(大分縣直入郡原村四六九番地渡部艶子)

○全快　　諸姉上樣私れ永らく病床で苦んで居ましたの、これからは前に倍し御交際下さい、からだも大ぶん丈夫になりました。(兵庫縣瀧野霞城町高瀬方森下沛御子)

○歌が好き　　私は歌が大好きなのよ同好の御方は御交際くださいまし、情深き姉樣方よ歌集や繪端書御惠みくださいませんか切に御願ひ申します(新潟縣刈羽郡北條村大字東長鳥金塚傳左衛門方美代子)

○常陸の方に　　常陸の木村なか子樣田村はつ子樣初深さく子樣ぞどう御交際を望みます私も常陸で土浦の町です、木村なか子樣あなたは土浦でございませんか妾は數年前から東京に來て居ることとて土浦でも土浦のお方がわかりませんて、もしや土浦高等女學校にかつてお通學遊はしてお出てゝありませんか(小石川區指ヶ谷町一四五石井方渡邊倚子)

○誌上て　　皆樣明けましておめでたうよ今年も相變らずよろしふに、……徳島の吉田栄花樣御同性よ、そして名も一字の差よおなつかしいのねー、私は昨年四月に女子賃業學校に入學致しました本年十七歳の少女よ何卒〳〵誌上て御交り下さいねー、おねがひよ寫眞を投書致しましたので何卒御らん下さいましねー、(豫州血杵大橋寺橋通三三四ノ二、吉田散花)

○相變らず　　皆さん昨年はいろ〳〵御厄介になりました本年も相かわらず御交際をお願申し升

祝女子文壇の發展

盃のいくつかされて明の春

(羽後由利郡院内村院内、三浦ふみえ)

○裁縫會　　誌友の皆樣妾どもの村に高等一年以上の女生徒と十五歳よりの娘が集り十二月より裁縫會が冬の内始まり。休みの時間に編物や造花、作文などを致します、會員が三十人程御座います、一同にて新年以後皆樣と繪はがき、圖畫、編物、寫眞など交換を願ひます在校の少女の方もぜひおまじわり下さいませ(信濃下高井郡往郷村にて庾花岡會)

○受讀會　　月に多少のお金を出し合つて雜誌其他を廻覧してゐる會合です、目下十一名の會員があります、皆樣も贊成して下さい(宮崎縣宮崎郡青島村折生迫、岩切秩陸)

○パン製法　誌友の皆樣の中で日常茶うけに用ひるカステパンの製造法及びやき方を存じの方ありませんか、ありましたら知らせ下さいお禮には大生黨ふかしパン種に、製造法をお知らせ申します（岩代若松市七日町五ノ三十一、吉田きち子）

○福島縣の方に　福島縣の誌友の皆樣の中で文學に趣味を持つて居なさる方と御交際をお願ひしますそして繪はがきに和歌や俳句など書いて送つて下さい妾もまずいのだが必ず返事は上げますよ尚ほ妾は新潮、新聲、新文林、秀才文壇五十册ばかり有りますが郵税と三錢切手封入して申込むで下らば送つてあげます是非お願ひします（福島縣田村郡三春町北町百十八橋本ふさ）

○以前のやうに　家事上の都合で暫らく御別れしていましたが亦昨年の七月から誌友になりましたの、どふぞ以前に變らず御交際なすつて下さいまし（肥後國天草郡本渡町池邊しづ子）

○孤獨　私には一人の兄弟もありませんのでお正月が來てもほんとに淋しいつてす　あはれと思ふ皆さん玉章の御交換でもし下さい（岩手縣岩手郡巻堀村、高橋きみ子）

○學校の樣子　私は上總の山の中に日を送つて居る何も知らぬ者であります、どつぞ東京にお出でる皆樣のうちにて渡邊裁縫女學校と體操學校との樣子を御存じのお方がありましたらお敎へ下さいませ規則書もお持ちでしたらお送り下さいな伏してお願ひ申します、又どちらからの一方だけでも宜しうございます、お禮はいたします。（千葉縣夷隅郡太原町南、田中方米壽子）

○讀み古しの本誌　薄倖な私も皆樣のお情で昨年は樂しく暮しました。御存じの方は以後も宜しく：：丸山の香川樣は格別の御同情下さいましたがなさけない事には僅か半年でお心は妹に移り私は見捨てられました。僞りの同情とは知らず心を弄ばれたのが口惜しくてたまりません香川樣に代りてお讀古しの本誌を毎月お送り下さるお方あらば清く眞面目な思想の交換も終生變ることなく願ひます。男子の方でも宜しいが平凡な人を好みませんからそのおつもりで。（陸前國宮城郡七北田村上谷刈山添九番地萱場きよの子）

○鹿兒島のお方に　お情深き皆樣よ何卒御手紙頂戴な殊に出水郡のお方よお情有らば一寸なお惠み下さい遠く離ては古郷を懐く存升（臺灣臺北臺廠神社官舍内川神宮子）

○新年の餘興　記者樣御目出度う御座います尚諸姉諸兄御芽出たう御座いまず就ては皆々樣この御目出たい新年を何うして送りませうか？歌留多や雙六をして御互に樂もしく御遊び申す事が出來ますとこれ程結構なとは有ませんが何しても遠く離れて入破る方は到底及ばない事でありますから樂しい玉章の交換でも致しましてゆかしく新春を送りませう、エハガキにて：：：（東京市神田區猿樂町卅九竹内方佐藤しづ子）

○留學　全國の誌友諸氏よ私は沼津高女を卒へてより尚現に同校補習科一種に在學中ですが誌友の内で東京に遊學してあくまで苦學をつゞけ成功したいと思ふ方は私の所へ早くレター下さいよ（靜岡縣沼津町川廓、山縣梅園）

○韓國より歸る　妾事其後は渡韓致し居り候爲め御無沙汰致し候へども都合上にて去月歸京致し候尚御見捨てなく御交際の程を幾重にも御願ひ申上候（千葉縣香取郡日吉村篠本三匠、大木榮枝）

○誇りを以て　可愛い文壇もカツ飾な頁れました何卒諸姉樣技能を揮つて愈一層文壇をお飾り下さいませお願ひ致します、全く態度に短日月に發展の著しい文壇は有りません私は他の社に比して聊か誇つて居るのでムゐます、：他の雜誌を愛讀して居る友達には猶更強く誇つてゐるのです、で私は永らく文壇を愛讀致して居る者ですが何卒以後無學な者の私に御目を注がれて親實に御交際下さる樣諸姉樣に御願ひ致します（神奈川縣鎌倉郡片瀨、島非とし子）

○職業持てる女子　京都、大阪、姫路、岡山、の四市の方にて事務員、電話掛、電話交換手の御方にお交りを願ひます後日御目に掛りたいのが私の望みで御座いますから一時的の方と男子はお斷り申します（兵庫下澤通四丁目二四浦山昌子）

○山口縣花月子樣　私はおつしやる通りの誠に不束なものでございます、ハー寫眞は見すぼらしい古いのが間にあはせに文壇の光りか新美文あたりに出て居ります姉妹ない私人なつかしくてなりません。何れ誌上で最近の私をお目にかけませう、どうぞ御交りを。（牛込區[illegible]内坂町平塚白百合）

○お正月には御遊びに　大晦日一日は平日の三倍も働いて、元日一日は寢ようと思ひますの神詣すましてから、二日の日は朝から晩迄家に居ります。願はくば大方の誌友諸姉。遊戲道具

とては儚けれども、家は鎮びつ、古くさけれど、むさけれど、赤静に樂しき會合を致さばや家には済子といふ姉の子あればまぜかへしに姉ちやん／＼といふて來るやも計られず、されど只我眞心のみを馳走と思ひして（岐阜市縣町篠田とみ子、雅號華水子）

○文學趣味ある方　私は女子大學附屬に居りましたが只今病氣で休學いたし田園生活をいたして居ります。外國におはす誌友の皆様御交際をのぞみます、また文學趣味ある同じ年位の方ならどなたでもよろしうございますから御たより下さい御返事きつとさし上げますそのかはり字は下手でございますから、年は十六才です（茨城縣筑波郡若森村大久保方黒田眞弓）

○女教師の方々　私は山里で教員をしてゐる者でして、小學校教員檢定試驗を受けてゐます御同職のお方や御同志のお方はどうか御交際下さい、又師範出のお方には御指導下さいませ、其他皆様よろしくお願み申ます、（愛媛縣東宇和郡嘉喜尾小學校内、渡邊文子）

○十四才　皆様方私は兄さんが一人あるばかりで女の姉妹は一人もありませんのですそれですから誌友の方は皆姉さんのやうに思ふて居ります、なつかしい姉さん方の内で行末長く御交際して下さる方はありませんか未だ私は十四才にしかなりませんがエハガキ位はさし上げます（伊勢國河藝郡白塚村、宮野よし子）

○健康　世に健康ほど嬉しき者はありません！妾は久しく病床にありて諸姉様と御交際中絶いたしましたが或妙藥で全治いたしましたから姉上様の内で胃で苦しみ月經不順や通じの惡しき方は切手入れ御申込下さい御通信いたします十日服めば根治するそうです又此より今迄の通り御交際願上ますよ（大阪東區久寶寺橋内詰南入丸山滿津方岡本しづ）

○書畫　此新年を機として誌友皆様の御書き遊ばした書や畫を戴き度いので御座い升が皆様何卒御只捨てなくお惠み下さいまし普通の半紙でさへあれは何んな書でも繪でも結構で御座い升又學校にお出で遊ばす御方は學校名、級、御年なども添書して下されば猶更嬉しう御座い升（東京神田區錦町三ノ十一齋藤政子方今泉美輝）

○淡路にて　私は千鳥泣き通ふ淡路島の磯邊に物さびしく日を過す一少女でございます、どうかなつかしい誌友の姉様方お近くへのお便りもございましたら遊びに居らつしつて下さい、そしてどうかお玉章繪葉書の交際を願ひます（兵庫縣三原郡市村青木組眞野えみ子）

○交際中止　妾事一時は音樂にせよ諸國の諸姉上様と御交際を希望いたしましたもの丶或事情により意志の强からぬ私は到底其に反對して永續する事は不可能でありまゝ、それで此に男女に關らず一切御斷りいたします何卒惡しからず（兵庫縣加東郡小町井上方北山とも子）

○文通が樂み　女子文壇も日にまし盛になりまして誠によろこばしき事でございますさて皆様如何!!あの姉君たちに妾は不束なる者ですが年の初と共に末長く導き御交際下さいませ妾は文通はなにより樂として居る一少女でございますからもし御心ざしがございましたら御玉章下さい（東京深川區東元町一鈴木喜美子）

○お目出度ふ！　どうか相替りませずに、投書家の古い方々のお顔が見えないようですれ、ちとお顔をお見せなすつてはー、埼玉船津千代子さんおいたつきはいかゞ（京都の宮原みどり）

○左の皆さんから歳が改まりましても相變らず御交際を願ふとの事です、一々本文を掲げる筈ですが例によりて省きます、交際を望まれる方には能く注意して誠實に有益あり興味ある御交際をお初めなさい。

○岐阜縣加茂郡黒川村中新田鷲見方、春野秋子
○北海道渡島國松前福山町十二、平田みや子
○大阪府東成郡中本村字本庄七九五、東艷子
○鹿兒島縣揖宿郡指宿村十二町、柳田迫いと子
○石川縣鳳至郡七浦村字皆月ソ十一、芝睦子
○豐前四日市局區田口正喜方、芳滉子
○青森縣西郡鰺ヶ澤新町、小泉もと子
○石川縣鳳至郡七浦村字皆月、酒井梅子
○兵庫縣龍野町、森下藤枝子
○靜岡縣磐田郡上阿多古村長澤、大城せい子
○長崎市濵平町一三〇、持丸たけ子
○千葉縣夷隅郡千町村須賀谷、鶴岡富路子
○根室國和田村三〇三番地、平田富美子
○福岡縣朝倉郡小石原村荒川醫院内、荒川兄妹
○若松市六日町宮原樣方、YM
○神戸市明石町三十八番地インターナシヨナル銀行、角谷靜子

○福岡縣朝倉郡實珠山村仲道久松方、姉澄子妹靜子

○佐賀縣神埼郡脊振村一番、瀨音成昶

○横須賀市汐入五百八十小川方、中島重子

○金澤市片町五十番地奥川屋方、後藤よし子

繪葉書を好む

特に年賀狀の交換

○皆樣妾も先月より愛讀者となりましたから一度なりと繪葉書雜誌等を送つて頂戴な、御返禮は必ず〳〵いたします、殊に年賀狀の御交換を願ひ上げます(大阪堂島濱通四丁目龜田方、森ふみ子)

○讀友の皆樣明けましてお目出度 昨年中は色々お心添下さいまして 有り難うございます、私れ繪葉書の交換大好きなのよ、お情けある 皆樣! どうぞ初春の紀念としてお美しいハイカラな繪葉書で年賀の交換をお願ひよ、色紙短册の 交換も致しますわ(秋田縣山下郡藏琴村太良鑛山 梅澤すみれ)

○年頭にさいして諸姉樣と繪葉書の 御交換を乞ふ、而して新まりぬる年々共に諸姉樣と更に親密なる御交際下さる樣 祈ります、(京都 元入組建町橋本かれ)

○讀友の皆々樣新年御目たう尙年始狀の 御交換を着次第何方樣にても 御挨拶致します(千葉縣海上郡飯岡町字非花月)

○妾もエハガキや書繪の御交換を願ひ升 御惠み下されば、本は美文とか又は小學英語本でもよいのですから送りて下さいエハガキなら美しいのを五枚以上お送り下さい御禮は相當に致し升又は他の參考書でもよいのです 妾は男の方でも末久しく交際を致す人はかまいません(岩手縣一關町九佐藤すみれ子)

○皆樣、私にも何卒繪葉書を送つて頂戴な、御返事は屹度致しますかられ、(大阪市北區富島町一日丁山內方、いちじく子)

○何卒女學中學校や各種の諸學校繪葉書を送て頂戴 妾からも名所又は美術エハガキにて御禮致します(栃木縣足利柳田幸吉方君子)

○內外繪はがき又は俳句など書いて 交換をねがひます(千葉縣山武郡嗚濱村白幡八一〇、藤田すみれ)

○妾に玉章又は繪葉書を下されました御姉上樣には當地風景繪葉書四枚宛 御禮として差し上げます男の方は御斷わり(千葉縣夷隅郡大寄多町森宮、錦龍たま子)

○御交際を願ふのは 初めてゞ何にも存じませんから色々御教へ下さいまして どなたでもよろしいから繪はがきの御交換をなして下さいましな(岐阜縣土岐郡多治見町南小路町、中西百合子)

○私も大の繪はがき狂ですの、手元にはたくさんもつて居ます皆樣の內で 水彩畫はがき、舶來ゑはがき等御持合せの 御方は 御與下さいませれ、きつと禮は書籍でなり上等ゑはがきでなり御返禮 申上げます(福岡縣八女郡豐岡村溪雪子)

○舶來繪葉書の未使用を交換を願ひます 返葉は屹度致します(大阪市 東區空堀通り一丁目 梅鉢せい子、芳子)

○皆樣私は繪葉書が何よりも大好きです 何卒美術的の立派な繪葉書の 御交換を願ひます、然し畫面へ切手を貼つて 短文又は俳句の樣なものを書いて下さい、必ず御返葉致します(下野國足利町榮町、柳田柳月子)

○讀友の姉上樣方よ 御變りもありませんか、私は和歌や俳句が大すきですから同好の御方は新年に郵便葉書か繪はがきに 和歌俳句を書いて交換し、新年を樂しく遊ぼうではありませんか 又名所繪 はがきの交換も願ひます(千葉縣成田郵便局區內山內、山田方雪枝子)

○地理歷史研究の爲め毎月名所 舊跡の繪葉書限り五枚宛交換す 私方より地方の御方に限り完結まで東京名所を御送り致します(赤坂檜町六、清岡龍)

記者と讀者

○記者樣、妾は和歌を研究しようと思ひますのですが、新詩社は もうつぶれたのでせうか、入社しようと思つたらどこへ申込むのでせう、明星はもう出ないそうですが、トキハギとかいふ雜誌があるといつかの 誌上にありましたが、發行所はどこでせう、そして 外に和歌を研究するによい雜誌がありましたら、御面倒ですが、御教へをお願ひします(片山千里) (記者曰、新詩社は存在してゐます、「明星」は 廢刊しました、新詩社は神田東紅梅町二です、詠草は 雜誌「スバル」に出てゐます、「スバル」は和歌を學ぶ方には最も宜しい雜誌です、發行所は 神田北神保町二番地昴發行所です)

○記者樣私は三河島にゐるものでございますが同じ三河島に木下尙江先生が 御いて遊すといふことを承りましたので いろ〳〵人にもきいてみましたが 一向御住居が わかりませんで殘念に存じ

てなります記者様御存じていらッしやいましたらどうぞ御知らせ下さいませ（三河島木原英子）
（記者曰、木下氏の住所は三河島の内、町屋です）
○在米の初子さんに。其通信を待つて居ります（記者）
○山本美津子さんに、必ず十五日と限りませんお寫眞はいつでも受附けてゐます（記者）
○大分縣の本田一枝さんからのお知らせによると、東京神田の暖々社とやらから「才媛詞藻」と云ふ本を出版すると欺いて何某かの前金を取つてそれなり送本しないさうですが、直接に然う云ふことを勸めてゆくのは大抵怪しいのです、殊に地方の諸孃は其手にのせられぬやう御用心なさい、本田さんには御通知の勞を謝します、（記者）

各地通信

○横濱より　新しき年が又もや妾逹の前に現れました。昨年は當地は大分不景氣のやうでしたが、今年からはそんな事はないでせう。生糸は一昨年に比して、百斤に付き百圓も安かつたのです。長野縣の上一番格（標準物）は、百斤八百三四十圓位で、極く安い時には、八百〇五圓位でした。本邦一番の輸出物が斯くの如くですから凡てがそうでした。然しお米は、大分安いやうで、妾逹のやうな、豐かならざる者は、大助りでした。――皆樣、又新らしき年に向つて、大いに援ひませう。（横濱市、矢野きみ子）
○磐城より　妾の住むで居るところは戸數千六百戸許りある小さな町です、商業を營むで生活をして居ます。世に有名な三春駒を想ひもこの近傍で産します、人情も質朴で貧乏者は誠に住み好い、汽笛は聞かれずとも鐵道馬車の笛の音、製糸場の汽笛は明に聞えます、學校も縣で優良な方で教育も盛んで景色の好い所に在ります、（福島縣三春町、橋本ふさ子）
○岩手より　本縣の首都たる盛岡が明治三十六年以來新建築物がきのこの生える樣に立つた其主なる物をあぐれば高等農林學校、縣廳。郵便局、武德殿、櫻城小學校、銀行三、南部伯爵別邸、前内務大臣原敬氏別邸、現東京府知事阿部浩邸宅、知事官舍、赤十字支部、高等女學校、師範學校（岩手縣岩手郡巻堀村、高橋きみ子）

寫眞

○希望は夢現の内に髣髴たる間に既に年は去つて了ひました、慈しみ深き皆樣の中に寫眞、繪葉書の交換を許し給ふお方はありますまいか、寫眞は十五枚ありますが御交換下さる方は名所葉書一枚づゝ差上げます、必ずお返しを致しますから、どうぞれ（岩手縣花巻川口町坂の上、中島幽美子）○皆樣の御寫眞を送つて下さい、私のも送ります、名所エハガキをそゑて御送り致升（伊勢飯南郡射和參貳登、中瀨方福永芳枝）○永久の紀念として戴きたいのは誌友の諸姉上樣の御寫眞です、何卒御惠み下さい、必ず御返禮致しますわ、茨城縣久慈郡西小澤落合十三、船橋捨子）○誌友の諸孃様よ私も女子文壇の愛讀者となりましたから御交際を願ひます、寫眞を下さつた方に私の見苦しき寫眞を差上げますお玉章を下さつた方には、乾度御返事を差上げます（熊本縣阿蘇郡南小國村黒川、四原こめ）○賢明なる皆樣よ誌上てばかり名を聞いて御面影が見度くあります故、妾の許に御送り下さつた方には、ハンカチーフ、ヒシツキ、シオリ當地名所繪葉書等で御返禮致します、尙先着四名には妾の寫眞も、そえて上げます、惡口は申ません（岩代國原局下共和乙一二〇、中村清子）○妾は只今女學校二年生で御座います、編物や、繪葉書の交換を願ひ申します、尙皆さんの御寫眞御送附下さいな、妾の見苦しい寫眞、リボン、繪葉書をそへて返禮いたします、（大阪市南區鰻谷東町一八七、龜山芳子）○皆樣の内で寫眞をお持の御方は二人限り下名まで御送附下さい、御禮には四十二年特別大演習大本營郵便局（紀念スタンプ附）繪はがきに名所繪はがきを添えて、御返禮致します（下野那須郡大田原町大字門前、高井末子）

編物、樂器、造花

○編物雛形　懐かしき誌友の諸姉様に私は編物の雛形を深川集め度と思ひますが皆様の中で若し御存知の方はお敎へ遊ばして下さい私もシオリ寫眞掛なれば知つて居りますから御知らせ致します失禮ながら尙エハかキ玉づさの交換も永久に御願ひ致します、（千葉縣撿見川町稻毛村石塚澄子）
○琴あり　只今私の手許に琴手風琴御座いますが都合に依り世の皆樣に御讓り致したいが御氣に入りの御方は御一報下さい而し琴は近々に求めましたので新しいものです。（富山縣滑川町水野長次郎内　蜷川きよ子）
○筑前の琵琶を求む　皆樣の内に築前の琵琶

の御不用が御座いましたら相當代價で御讓り下さい、もし御女連の御方で讓ると申す方が御座いましたら御一報下さい、きつと御禮を申上ます（札幌南四條西九丁目番外地、立岩ゆきや）○妾は今春岡山高等女學校を卒業致した誠に不束者で御座いますが、只今まで親密な友が無いので悲しんで居りますのよ、何卒御交際のお方は寫眞、繪葉書、玉章、編物の御交換を願ひます、亦たハモニカも一箇ありますて御望みのお方が有りますれば御交換しますよ、神に誓つて御返し致すのてす（岡山縣上道郡玉井村森岡武市宅、萩原薫子）○なつかしき誌友姉様方、妾は不用の最新式早取寫眞器（教授書付、薬品等一切付）一箇持つて居ます、（ヴアイオリン）（手風琴）（ハモニカ舶來）と、交換して頂戴な、その時は葉書にて知せて下さい。（鳥取縣氣高郡大郷村金澤村、松浦春江子）○お寫眞。栞。ひじつき等お送り下さい。お禮には雜誌を。お寫眞。ひじつき（三冊）栞（二冊）の分にて差上ます。又藤村の「若菜集」泣菫の「暮笛集」お持ちの方は妾の「花袋小品。弔花小品。キリシタンバテレンの法。幻妙不可思議術」等と御交換の程お願ひ申します（四日市市濱色辻治吉方辻一葉）○寫眞栞編物等の交換をねがひます（神戸市布引元丸山茶畑。梶常子）○其後久しく御無沙汰致しました其後諸姉様には御無事にて御暮し遊ばされ候か一寸御伺ひ上ます此に諸姉様の内にて「ヴアイオリン」の御不用の方は御讓り下さい、キツト御この〻みの品と交換致します（吳市二河口畔、T S子）○文壇愛讀者の諸姉上様妾の許に手製編物のヒジツキ、シホリ妾の寫眞寫眞かけ等ありますから皆様のヴアオリン、小說夏子、犬子、孝女白菊、戀學生、女學生、血の涙、自然主義、新小說、ゴブシ三冊、寬風戀風（二冊）青海、露子、婦人世界、女學世界、等と御交換致します新年狀下されし方々には相當のお禮致します寫眞下されしお方にも お望みの編物お送り致します（大和山邑郡朝和分局區內、西尾操子）○天下の諸姉様の内に ひじ突、しをり絹製寫眞掛、リボン、造花其他御手細工品を送つて頂戴な、御禮は 雛子、夏子、良人の自白、寬風戀風、己が罪（全部）青海、金色夜叉、ハイカラ令孃、若き姿、嫁ヶ淵、にて致します。妾は誓つて不實な事は致しません（大和朝和分局內長柄 二一三、飯田方、伊津子）

問合せ

○堅石照子様　姫路の生の方で五六年前美作の國の東北の山寺に父上と供に住つてゐらしつた十六歲の少女てす御住所御存じの御方は誌上にて御知らせ下さいませんか、御禮はきつといたします（門司、鈴木靜枝）

○加藤琴子様　大阪本田三番町の加藤琴子様もしやあなたは四區第一高等小學校に御通學遊ばされていらしやつて參學年にて御退學遊ばされた御方と違いますか一寸御尋ね申上ます（淡路にてクラスメート）

○赤穗の森中千鈴子様　私も赤穗の者てすが何だか同鄕の女子文壇愛讀される方かと思ひますとおなつかしい様な氣が致します、突然御伺ひ申しては失禮ては御座いますが、赤穗の何處にお住ひてすか（赤穗町さゝ舟）

持つて居る書物讀みたい書物

○新年に讀みたい　人は羽根などついて遊ぶお正月に私は本をよんで暮し度うございます、お情ある御姉様方の中で何なりと面白い小說御持の方は少しの間おかし下きいませんか、心ばかりてすが自分で編んだ栞をそへて御かへし申ます（相模國浦賀町川間、佐久間華子）

○田舍源氏　「田舍源氏」を一度讀みたいと存じますが、博文館本は絕板になつたさうてすし當地の本屋にも一冊も見當りませんが、若し皆様方の中にお持合せのお方がございましたら、暫時て宜しうございます、拜借願へませんてせうか、切にお願ひ申します、また「演藝畫報」第一年六號貸失ひまして殘念でございますから、誰方か相當の代價てお讓り下さいませんか。（岐阜金岡町水田方、藤井みどり女）

○青海を望む　青海（小形）御不用の方がありましたらぜひ送り下いさませんか、家庭日記、短篇小說、新撰辯論上下、四十二年九月のスバル、地理、歷史、百家名論集、その外古雜誌がありますから御禮として右全部ても御望みの品だけても御不足の分は切手を差し上げてもよろしうございます から一寸御通知下さいまし（西多摩郡小宮村三ヶ島よし子）

○演藝畫報　皆様の中にどんなに古いのてもよろしゆうございますから演藝畫報御持ちのお方様どうぞ一部てもよろしゆうご座いますから

お惠み下さいまし御禮は婦人世界、栞、ハンカチなどにて必ずいたします。(岩代國川俣町瓦町五十嵐久良子)

○明治文藝史　諸孃の中て太陽の明治文藝史御持合せがあるならば御譲りくだされませんか、又他の本なり雜誌なりと御交換くださつても結構て御座ります。(東京京橋區尾張町二ノ二六、筒井吉)

○文學參考書　妾手許に新體詩作法(岩野泡鳴先生著、美文作法(田山花袋先生著)俳句獨習(內藤鳴雪先生著)紀行文作法(西村醉夢先生著)作文問答(西村眞次先生著)作詩の栞、文の栞、佐々木信綱先生著)など不用になつて居ますから、皆樣の小說と交換を願ひます、但御交換下さる方は前以て御相談を願ひます。(東濃加茂郡黑川一二　古田桂吉方、古田とし子)

○地方雜誌　諸兄姉の中に何なりとも地方雜誌御所持の方はありませんかもしありますなら御惠み下さい必ず繪はがきか文章世界にて返禮致します(福島縣石城郡平町新屋敷、根本耕)

○青春其他所有す　皆樣寒い冬を如何お暮してすか妾に左の不用書があります故繪はがき又は編物、風景寫眞、て お中込さ下いませ、青春、不如歸、己が罪全部、紅葉全集一二、長野縣案內、乳姉妹、筆子日本少女節用、信濃の宮、青海、文學世界、婦人世界、女子文壇、外他雜誌あります　先着のお方に先へ順に差上ます。(信濃下高井郡 [illegible]郷村康、丸山とサ子)

○歌書を有す　私の許に佐々木信綱先生の詠歌自在及詠歌辭典(定價一圓宛)があります、書海、辭林、有名な英和辭典、などと御交換願ひます、又お伽花籠、萬朝短篇小說傑作集があります之は何か小說類と交換いたし度っ存じます(長野縣飯田八幡代田、長瀨かなゑ)

○新聞の交換　萬天下の御姉樣に御願ひ申します妾しは信濃山地に住居致して居ります何卒新聞の交換を御願致します就て御玉章ご願上ます(信濃國南安曇郡南穗高村細萱、丸山峰子)

○誌友のお內に昨年の女子文壇七月號お持合せの方は何卒妾にお惠み下さいませんか、お禮には他の雜誌、又は寫眞編物等をお送り致します、(大阪府堂島濱町通四丁目龜田方、森ふみ子)○不如歸、後の不如歸、新不如歸、良人の自白、寬風戀風、相思怨、千代紙、新造軍艦、短刀少年、塔中の怪、聖書、又それに關する諸書籍、婦人世界、女學世界、文藝倶樂部、日本地理辭典、大町桂月著、美文集、福翁百話、英語雜誌など不用小說雜誌などでもありますから何卒、諸姉上樣の筆子の卷、少女の煩悶、ハイカラ令孃、青春(夏秋の卷)、澄子、夏子、己が罪、少女の秘密、ヒジツキ、等と御取り替へ下さいまし(美濃加茂郡黑川村山手、美能枝)○懷しき誌友諸賢よ、妾にも御文通を玉へ必ず惡筆ても御返書いたしますよ、繪葉書雜誌交換も併せて願ます、私は昨年の十二月からの愛讀者てすから前の女子文壇お持の方は御送り下さいお禮にはムラサキなり繪葉書にて御返禮申上ます終りに望んで申上ます、臍充血療法を數部もつていますから雜誌書籍と交換いたします(熊本縣八代郡宮原町中田方、春穗子)○誌友の皆樣方、私の手元に家庭敎科書小說雜誌いろ〳〵、名は書きませんが澤山有ります、御入用の姉上樣には送ります、又火のないこたつも有ります、お望のお方は、往復はがきて御照會下さい、姉上樣の御許に家庭料理法、家庭自宅療法、家庭必備(花むすび)娘に與へたる(母の書翰)藍香水、香袋、姉上樣の御手製の刺お持ちの方は御惠み下さい、御禮には右の本に下總成田山の名物お札、掛物、手製の編物に、種物を添へて送ります、但し男子ても宜し(常陸國金江津局內戌渡る、山口らう子)○私の手許に古いてすが女學世界、小女界、婦人世界、小女世界、冒險世界、文藝倶樂部、其外小說等不用がありますから皆樣の內に婦人畫報や其他御持ちの方は何卒御交換を希ひます又繪葉書の通信も好みます(山城乙訓郡久世村、長岡淸子)○私の手許に小說琵琶歌、貞か不貞、可憐の小女、不言不語、小猫、不如歸、多情多恨、沖の小島、小說家、化粧くらぶ、罪のゆくへ、思ひ出の記、愛弟通信、野の花、コブシ、夏子、春雨集、片戀、不如歸の歌、女夫波の歌、己が罪の歌、金色夜叉の歌、藤村集、實用裁縫全書、女子裁縫教授書、家庭編物全書等あいています御望の方へは御貸し致しますよ、又左記の本も御交換下さいませんか、上等繪葉書惠みの方へは相當な本て必ず御禮致します、二人孤兒、寬風戀風、濱子、追恨、伯爵夫人、無花果、盛き戀、自暴自棄、緣の糸、月魄、女裝の探偵、戀無情、忘がたみ、女の一心、噫無情、生、妻、運命、小女の意、紅蛍、(熊本縣天草郡姫戶村、松崎澄子)○皆樣のうちで和歌作法(又は他の獨習書)和歌辭典、歌集(なるべくは解釋のつきたるもの)詩集等で餘り痛まないのを御ゆづり下さる御姉上樣がございますなら失禮乍ら先きに御知らせ下

さいませ(山口縣吉敷郡矢原村波多野方、中塚繁子)〇私の手許に少女界、少女世界、秀才文壇、女子文壇、少女の友などたくさんありますから皆様の女學世界又はリボンシオリ給はがきと御交換なすつて下さい(駿河富士郡土原町 宇和島秀子)〇皆様私の許に小説「不如歸」「後の不如歸」「後の新不如歸」「椨の花」「慘風悲雨世路日記」「婦人世界二十九ヨリ三ノ十四マデ」「女學世界」「少女界」「文藝倶樂部」「女子文壇」等ありますから「金色夜叉」「ハイカラ令孃」「婦人日常生活」「家庭菓子製法」名所エハガキ等と交換下さいませ、(京都市小川二條上ル、清水たみ子)〇私の手許に寛風戀風、脚本金色夜叉、不如歸、未來の哭、良人の自白、二人令孃、貧しき娘、涙子など不用になつて居りますから皆樣御持の乳姉妹、笹子、夏子、樅可憐孃、御持ちの方御交換下さいまし、(新潟縣西蒲原郡黒崎村、石川高子)〇皆様の御不用のヴア井オリンと、私寛風戀風上中下三冊、日本地理辭典、ナショナル舶來四、郁文舍發行の英會話辭典、其の他小說各種、御交換下さいまし(美濃加茂郡黒川村中切、正枝子)〇妾の手許に駿庭王(四冊 後の世(二冊)思出の記、テニソンの詩、不如歸、草ひばり、山と水(二冊)サンデー、一號より全部ありますから諸姉様方に「コブシ」「紅染全集(何編ても宜うございます全部なら結構)」噫無情、等御持ちの方は御寫眞ん添へて御交換御願します(福島縣相馬郡太田村、西きく子)〇我が女子文壇愛讀者の諸姉さま、私の手許に女學世界九月號、同おどろく手紙、運命開法 その他昨年中の女鑑がありますから、女子文壇十月號又は短篇小說家庭日記の中、一さつだけても よろしくございますから、交かんあそばして下さいませ(東京市淺草區向柳原町一ノ二十九、金田志津子)〇誌友の皆様妾今度愛讀致しました小説を殘らず下手ながら思はく(評)を書き添へて小さな冊子と致しまして(此道のお方に差上たいと思ひますから何卒給葉書にお自分の慕たはれる作者と小説の名と最もよかつた頁とを是非知らして丁戴よ尚ほ新刊小説で好・物がありましたら一寸知らして給へ(奈良縣柳本局内・森本のぶ)〇皆様私の手許に、 田村虎藏編のオルガン敎科書第一の本がありますので何卒皆様の御許に手風琴獨案内の本と御交換下さいな、亦其他古雜誌又は編物を御送り下さいな、御禮には私の手許にある雜誌又は給葉書て致します、先づ御送り下さる前に御一報下さいな(岡山縣上道郡金岡村、山縣鎭子)〇皆様の中に婦人畫報御不用の御方は何卒おめぐみ下さい御禮には女學世界、少女世界、少女界等さし上ます何號でもかまひませんのよ但し男の方はおことわりてす(岐阜市金町二丁目松葉光治郎方、しづえ)〇私の手許に左の不用書があります、友子文壇、婦人世界女鑑、文壇の花、文壇の光、新美文、短篇小說、文のはなし、ハイカラ令孃、前後世路日記、さゝなみ、朝櫻上卷、婦人立志傳等數十冊皆様の內の聖書、手風琴、最新家計簿記、編物指南、家庭料理法通俗書翰文(一葉女史)晶子先生の常夏みだれ髮其他歌集と御交換下さい、御有志の方は先きに御一報下さいまし、誓つて僞言は申しません御望みの本に相當の御品を附けて必らず御送りいたします(福島縣伊達郡梁川町天神町、猿島マサ)〇皆様の御手許に英語雜誌、女學世界、婦人世界、中學世界、秀才文壇、文章世界、兄弟姉妹、ハガキ文學、ホトトギス、婦人畫報、地方雜誌等若し御不用のが御座いましたら一冊にてもよろしいから御恵み下さいませんかお禮はきつとします(攝津國小濱局區內口谷、阪上嵐翠子)〇私の手許に「娘に與へたる母の書簡後編」「千山萬水」「古今和歌集」「俳句のしをり」「日本歷史讀義錄」「煩悶引受所」「文藝くらぶ」「女子文壇十四五冊」「女學世界」「趣味」等外に上等エハガキ、リボン等いろ〳〵ありますから皆様の「婦人畫報」「料理の本」「おてんば娘日記」「女學講義錄」「藤村の詩集」及び和歌集と交換して下さいましな、ハーモニカや手風琴お持ちの方はどうぞ私のもつてる書と替へて下さい(越後十日町、樋口清子)〇誌友諸嬢様、笹子(笹子の卷)コブシ、夏子、御持ちの方送つて下さい妾の見にくい寫眞と金色夜叉、寛風戀風、又は寫眞器械暗箱のみを差上ます(岐阜縣加茂郡黒川村中切、山竹てる)〇誌友の御姉様に御賴み申します、私の手許に少女雜誌が澤山ありますから十月の婦人畫報婦人世界と御交換下さいませんか(福岡縣宗像郡吉武村、高山いちえ)

追加

〇皆様のお内に三木先生著編物指南おもちの方がございますなら私の森本先生著家庭編物全書とお換へ下さいませんか、若しお志がありますなら御一報下さいまし私の方から先きに御贈り致しますから。(大阪市北區小松原町三七七高山米子)〇毎號女子文壇女學世界にて御才筆をおふろひ遊ばす牛込平塚白百合様 私は田舍に住む

淺學なる者ですが常に君の御作を拜見する度に未だ見ぬ御姿を胸に描いておなつかしさのあまりおしたい申て居ります。せめて一度なりとも御教授給りたいと思はぬ日は一日もございませんがまだ乙女心のうらはづかしく心の内の萬分の一も語りえぬ者とて今日までひかへて居りましたが慕姉を思ふ念さりがたくこゝに投書致しました白百合様時には一度なりとも御教授給らん事を願上ます(淡路三原郡北阿萬村武岡長太郎方、叔美)○茨城縣の文子様にお答致します、文子さんあなたは妾の弟と從弟の間違へでせう弟なれば唯今東京に居ります、土浦中學に居りましたのは一昨年の三月までです、二年級修了して退學したのです、中學は去年卒業したのです、明治大學には入學致しません唯今は早稻田大學内の豫備科に入つて居ります、本年第一高等學校に志望すると申して居りますが父の言葉に從つて陸軍士官學校か或は海軍兵學校に志望するかも知れません、兎に角軍人士官となるには四ヶ年はかゝります高等學校に入つたなら多分醫科を志望するでせうから學士の肩書を取るまでには七年もかゝります、何分六人兄弟の中一人男ですからなるべくならば士官學校に入つて軍人となつて國家の爲めにつくせとは父の言葉なのです、そして妹は唯今三年級です服にはバンドが輝くと申しますけれどもあれはお茶の水の紀章です、登校の時は靴とバンドは必ず着ければらぬのです、東京でもお茶の水はハイカラで西洋風のスタイルをするところはありません、こんなにこまごまとお答致しましたのはあなたのことは存じませんが妾の方をよくご存じの様子ですからいたすのです、今後の御書状には必すご住所を……(本郷、渡邊三枝)○上總より、兼て本紙の十月號で『中流以下の女の働振り』と題して、山路愛山先生が述べた如く、私の村(長者町附近)あたりでは、地主の主婦でも、金持の孃様でも、せつせと働いて居ります。殊に年の暮ですから、毎日の様に蜜柑等を籠に入れて賣りに行きます。その働振といつたら、非常なものです。まさか、越後の様に『喰わせることが出來なければ夫を持つな。』こんな譯でもありませんが、兎に角よく女子は働きます。聞けば女の働くのは越後地方と、私の地方のみだそうです。蠶業等は、女子が田や畑けに出て、働くのは至つて少ないそうです(上總、一枝子)○お寒さの折柄記者様には御障りも御座いませんかお伺いたします。次にこの文は御飯をたいたりお味噌汁をこさへたりします間に一寸かきましたがメ切がせまつて書き直してゐひまが御座いません。ほんにぞんざいな書様で誠に失禮でございますが、このまゝ紙くづのなかへ入れますのも何となく不本意に存じ御目にかけます事に致しました。元より沒書は覺悟致して居りますが隅の方に御評だけでもよろしい故一寸拜見いたしたいと存じます(府下、鈴木苔子)○皆様のお内に婦人畫報、女學世界をお持てしたら私の婦人世界と換讀をれがひたいものです直ぐお返し致します鳥取の方なら更によしお知らせを(鳥取市若狹街道筋二四、川口苔子)○讀友の皆様私にも葉書や新聞の交換を願ひます(京都市小川二條下ル、寺井芥子)○男子の御方様にても名所絵葉書などの交換ならばお願ひいたします(大阪市東區紀伊國町九百三十番地、一柳文子)○私は寫眞を取りましたが、一々御交際の御方にと思ひましても澤山の人々故繪葉書にしようか又は文壇の口繪にして頂こうかと考へておるのですよ(長崎、蘭)○第十號小説「宵祭、函館、谷内ふさ」は函館毎日新聞より剽窃せしものと認む(函館、某女)○十八から二十歳位までの方で文學好きの方と御交際を希ひます(秋田縣湯

寫眞の時季

新年は晴着粧ふ時です、晴着を粧ふ時は又多く寫眞を撮る時です、記者は此時期を察して諸孃に寫眞の寄贈を注意します、三枚の内一枚は本社にお貸し下さることを希望します、誌友諸孃の寫眞は凡て沒書しない筈になつてゐます、到着順に應じて紙上に出すことになつてゐますから、安心してお送り下さい、寫眞の裏には「乞返送」と云ふ文字と、住所姓名は忘れぬやうに書き添へて下さい。

澤町、中野もと子）○不束な者てございますけれどお手紙下さいませ御返事はきつといたします（奈良縣北葛城郡高田町、貴治久子）○私の手許に「女學讀義録」前後期共。女子漢學讀本三册、及び「小公子」「もしや草紙」等ありますから皆様の内で「寛風戀風」「後の不如歸」「續後の不如歸」「藤村詩集」等お持ちてしたら交換して下さい、御持ちの方は下名まで御一報を煩します。（香川縣香川郡福岡、藤澤方、貞子）○妾の手許に小說や雜誌類が澤山不用てすから　繪物か寫眞ひじつきと交換したいのてす別けて　寫眞を御惠み下さつた御方には見惜ひ妾の寫眞を添えて御送り致します尚は繪葉書の交換も御願ひ致します。（福島縣北會津郡湊村共和乙一、一八三齋藤咲江）○妾は本年から美人繪葉書を澤山集めやうと思つて居ります、皆樣の內て御持の方は御送り下さい、妾の肉筆の繪葉書、文學雜誌、花物種子て屹度御禮致します、それとも御讓りして戴いてもよう御座います、先着三名に限り妾の見苦しい寫眞と當郡地圖をそえて差上げます。又妾の手許に、紅葉全集全部、眉山全集全四册、新乳姉妹、乳姉妹、不如歸、新寛風戀風、新食道樂、學女白菊、自然と人生、後の不如歸、破れ戀、バイロン詩集、暮れ行く海、等其他文學雜誌數十册ありますから、皆樣のうちに、コブシ、寛風戀風、血鳴不如歸、椿姬八犬傳、天うつ浪、少女の煩悶、何れかゞあります御方は交換か御讓りして下さいな、妾は決して不正なことは致しません、（靜岡縣引佐郡都田村新木六十三、鈴木小菊子）

●早●春●花

青梅の町の野崎と云ふ知人から私に贈與された高山植物早春花と云ふのは。見たところきたならしい花だ、高山植物ゝ聞くだけに珍しいやうにも思ふ、葉などは宛然枯葉て青い處は少しもない、花も釣鐘のやうな形をして、濃い淡い紫けた色をしてゐる、同君の添手紙に云ふ「此花は巖の間の土に根ざして花は埋られさうになつて咲いてゐます、落葉を掃いのけて漸く見分けるのです、渓流のちよろ〳〵流れる邊りから二三間離れた處に地を占めて居る、一谿と一谿とつたひながら漸くにして發見するのです、容易には見付かりません、其代り探り當ると叢三四枚數ける處に彼方にも此方にも生へてゐます、けれども然う澤山あるのではなく大抵は五株か六株てす、冬なら日あたりの好い處に咲いてゐます、夏は太陽の照らさない所に生へてゐます、山の頂上も風が強いから生へません、要するに早春花は風の吹かない日當りの好い（大木の下もきらつて）場所に、嚴冬獨り花咲いて地中の匂を秘めて滿足してゐるのでせう」（醉茗）

短●評●欄●を置く

誌友くらぶ欄のなかに次號から短評欄を置きます主として本誌前號の本欄又は投稿欄の作物を短く批評して下さい。又本誌投書家の批評もよろしい、更に進んでは文壇全體の批評 新しい作物の短評や、文學論めいたものでも結構です、然うして成るべく忌憚なく正直に思ふた通りの評をして下さい、文章は上手てなくても、着眼の勝れたものを採ります、追々に此欄を擴張して誌友互ひの意見を鬪はすやうなこともやりたいものです、原稿には「誌友くらぶ短評」の字を添えて下さい。

（記者）

○夢●二●畫●集

竹久夢二君から畫集を寄贈された、これは『春の卷』であつて、なほ夏の卷、秋の卷、冬の卷、及び夢二繪がたりと云ふのが出ると豫告してある、夢二君の繪は今更言ふまでもなく、本誌の讀者も知つてゐられる通り、才氣の溢れた、氣の利いた繪てある、君は抒情詩人肌の人て、飄逸な性格を持つてゐる、其性格が作物の上にも表現されるので、添た文章と、繪とを合せて見ると、スケツチとして好個の題目を巧みに捉えてゐる、只、繪として見る事以外に、繪の意味をも想はせやうとする處に君の機智は能く働いてゐる、就中若い女の表情と、子供の動作を描くことがうまい、君は元來文學者にならうとして早稻田に學んだことのある人だが、繪は全く天才的の器用なところから今日のやうに名を傳へられるやうになつたらしい。願はくば今後の大成を希望する。偖て本書は菊版大の形て幾頁あるか分らぬが凡そ一寸程の厚さがあつて、毎頁皆繪、何れも此れも興味がある、發行所は麹町二丁目洛陽堂、定價は五十錢（醉茗）

豫告

本號は前月の豫告以外新たなる材料輻湊せし爲め、豫告中のものにて更に次號に廻したるものあり、又執筆の約ありしも病氣其他の事故の爲め寄稿の延引せしもあり、それらは凡て次號以下に發表することゝなりたれば、豫め作者と題名のみを茲に掲げ置く。

小さな疵　窪田空穗
歸郷　水野仙子
冷涙記　横瀨夜雨
評論　生田長江
パステーユの四人　秋田雨雀
浪子の墓　外山霞
女子容貌論　一色醒川
既往五年間に於ける女子文壇の閲歷　記者

溝口白羊君の入社

白羊溝口君、今回本社編輯局に入り、本誌の姉妹雜誌「少女」を主宰することゝなりしが、本誌の爲にも亦併せて其編輯を助くべし、偏に讀者の愛顧を希ふ。

「餘興」課題（二種）

私が入學するならば　▲紀念號編輯に心を取られて二月號に發表する筈の餘興の課題を前號に出すことを失念しました、茲に出しますから皆さん急いで作つて下さい、此題の要旨は皆さんが入學するならば、何う云ふ準備するか、何う云ふ學校を選むか、實際に着手してゐることでもよし、又理想として考へてゐることでもよし、何でも凡て入學に關することを含む、十五行以内、十六字詰、締切は特に本月十日限りとします。

廣告新聞　婦人向

餘興の餘興たる實を擧げんとする好個の募集に應ぜよ

▲題が變つてゐるから一言の説明をします▲これは四頁の新聞をつくるのです、さうして四頁とも皆廣告で埋めるのです▲それで皆さんに其廣告を募集するのです▲實際の廣告ではありません、假りに廣告らしいものを作つて見るのです▲例へば雜誌發刊の廣告、小說其他書物の廣告、賣藥の廣告、化粧品の廣告、個人の廣告、賣出しの廣告等種類に限りはない▲但し眞に世間にあるものゝ廣告は採用しません、矢張諸君が假りに物をこしらへて、それを假りに廣告するのです廣告の本文は勿論體裁にも意匠を凝らして下さい▲餘り大きな場所をふさぐのは取りません成るべく小さくて氣の利いたものを取る、締切は本月十五日限り三月號發表、同賞例の通り。

雜報

都會の顔と眼

▲惡い年だとか不景氣な年だとか云つて居る間にいつか知ら四十三年とアデユーを言換す時が來た。嚴粛な引緊つて居た空氣が、散漫とも稀疎とも一寸形容に困るやうな浮調子に成つて、何處ともなく人を見るやうな華やかさが、密々と人の胸に入つて來る。こんな時に弱い人の心は墮落の道筋を見附けるのだと思ふ▲電車の中で、巷の雜沓の中で、我々が見る歲暮の顔は、どれもこれも色の蒼白い、逃げる物を追驅けるやうに底光のした血走つた眼の顔てある。默つて賑やかな四辻に立つて、人々の通つて行く風つきを見て居ると、沈着かない空虛な心のさまが顯然と見え透くやうな氣がする、中心の定らない――後から押されるので據なく歩いて居ると云ふやうな風が其力ない足の踏方にも見える。私はそんな顔のそんな人を幾人見たか知れない▲其の中にたつた一人――赤い顔の人が居た、帽子の縁も赤かつた、袖の縁も赤かつた、秀てた眉字に燃えるやうな活氣が充實して居る、――歲暮の電車の中で、私はこんな顔を見やうとは思ひがけなかつた、兵隊だ▲肩章に數字があつた、併し私と數字とは何の關係もない、暫くすると車掌が來た、矢張り獸の眼だ靑い顔だ。「貴方は全体何處まで行くのです、二時間前から乘つてるんでせう」と其獸の眼がヂツト兵隊を睨んだ▲併し兵隊は動じなかつた、そして「俺は東京を見物して居るんだ」と答へた▲新兵かも知れぬ――併し新兵でも何でも可い、俠ツこましい、忙しい歲暮の町に斯う云ふ餘裕のある大きい答を得たのは、僕に取つては▲特筆大書すべき一大事てある▲不景氣だと云ふ歲の暮の紅い顔は兎に角特記すべき顔てあるに相違ない、▲次に見た顔は矢張り靑かつた、たゞ一つ道の方を向いて居た、自分は銀座通を京橋の方へ歩みながら發姿　不貝な顔だなと思つて見て通つた、顔面神經のたゐんだ、――血走つた眼とは反比例に――曇つた沈んだ眼の男の顔だ、これ等の顔は物を逐ふ野獸の眼つきてはなく、疲勞し切つてもう何物を逐ふ力も拔けた絶望の眼をして居る。こんな眼は正月がダシヌケに其顔の前へ來る事があつても、別に驚きもせずにボンヤリと只見て居るだらうとさう思つた▲第三の顔の印象は白かつた、若い女の顔だ、滿員札をかけた電車の扉につかまつて、黑い眼が憧憬れて居た、只物を追ふのてはない――沈着いた心の奥に強い歡樂を求める縦まゝ　情緒が潜んで居る――その心の閃きてある、この顔とこの眼は陽春の櫻咲く頃に見るべくして、歲暮の町に見るべきものではない、私は沙漠の春に逢つたよりも珍らかな感じに打たれてその顔を見た、その眼を見た。私は斯うして見た都會の顔と眼の各〻に潜在する トラヂエデエの筋書を興味を以て讀んだ。

三宅博士と語る

近き頃の或る朝、三宅博士の邸宅を訪ひ、奥様に用事を濟ました序に博士にお目にかゝつた、新聞を讀む心得に就いてお話を伺ふ積りてあつたが、博士は讀者の階級が餘りに澤山あつて、皆好きな處ゝ勝手に讀むと云ふ風だから、纒つた心得と云ふやうなものも考へ得られないとのお答てあつた。其折いろ〳〵新聞に就いて語られたが、記者は新聞の話から引いて、現今のルビ存廢のことに問及んだ。博士曰く、ルビは無用のものゝやうだけれども、あれを今直ぐ全廢すると云ふ譯にも行くまい、只習慣上つけて來たものだけれど、一種の粧飾的の意味を持つて居るので、ルビを取つて了うと活字が淋しく見える、活字と云ふものが四角張つてゐて、圓みがないからルビをつけると字面にまるみがついて、和らかに見える、俄にルビを取ると何となく紙面がかたく見える、『日本新聞』も初めはルビがなかつたけれど、後にルビがつくやうになつた、漢字とルビと合せて一つの字と見て了うと云ふ傾があるので、ルビを廢するなら其代りに何かもつと和らかな角張らぬ活字が出來ると好いと思ふ云々。

閨秀作家の動靜

▲曾て『萬朝報』に連載せられた、國木田治子女史の『破產』は、故獨歩氏の短篇『親子』とを合せて一册とし、近く出版せらる。

▲長谷川時雨女史は、女流劇作家として、種々の新脚本を試みて居るが、今度新歌劇『夢』と云ふのを作つて、坪内逍遙氏の校閲を經て、今春早々發表の筈。

▲此の新歌劇に用ゐる音樂は、和洋樂を合せ用ゐるのださうて、又舞踊も、西洋のダンスに我國の踊を加味したもので、已に一部分は鈴木鼓村氏の試みて作曲したとの事てある。

▲森鷗外氏夫人しげ子女史は、その處女作『寫眞』をスバル誌上に書いた以後、又『波瀾』を表した、今春に入つて更に大に文筆に親む由。

▲自由劇場の試演の際、岡田八千代女史、長谷川時雨女史、それに森眞如女史の三人は、打連れて二日其場内に見受けた。

▲云はずとも、岡田八千代女史は、自由劇場の主宰、小山内薫氏の實妹で、芹影女史の名で、雜誌『歌舞伎』上で劇評筆を採つて居るし、長谷川時雨女史は女流劇作家の唯一人たる人で、森眞如女史は、森鷗外氏の實弟、故三木竹二氏の未亡人であろ、今も尚『歌舞伎』誌上に精細な劇評を公にせられて居る。

▲女流作家として、英川澄子女史の温順な筆致而して觀察のフレッシユな、女性獨特の態で、見方、描寫は一部に注意されてゐる、女史は『文章世界記者』前田木城氏の夫人である。

自由劇場を觀る

昨冬十一月廿七八兩日、有樂座で自由劇場の第一回試演があつた。脚本はイプセンの絕筆『ジヨンガブルエル、ボルマン』で、森鷗外氏が譯されたのである。開幕前に小山内薫氏の挨拶があつた『此處に一人の文學好きの若い書生があつて、又今樂屋でイプセンの寫眞像を側に据えて、頻りにイプセン似顏に扮して居る、若い青年俳優とが、測らずも意志が合つて、一つ我國に新らしい演劇を起さうぢやないかと言つたのがもとで、茲に初めて自由劇場が生れたのである』と何處までも新藝術に眞面目な態度は何時の時代でも新らしい藝術が起るのは、斯かる人達に依つて眞の改革が行はれるのである。

先づ幕が上ると、ボルクマン夫人が倚子に靠れて縮刺をして居る。其處へ夫人の妹のエルラが訪れて來る、夫人とエルラは元來雙生兒の姉妹であつて、その若い姉妹二人は共にボルクマンを戀し合つた。處が戀人は遂に姉に取られて了つたので十八年間の長い歲月二人は會はなかつた。その間にボルクマンは銀行事業に失敗して、今は此の別莊に閑居して居るのである。その夜は厳寒の夜で二人の姉妹は初めて長い間の暗鬪が事實として現れた。即ちボルクマンの子息の取合が初つた。第二幕は同家の二階で、十八年間同居したから決して妥に合はなかつたボルクマンが居る。其處へ銀行書記の文學者の親友が來たが、二人は遂に絕交して了つた。その後にエルラが上つて來て昔の戀の述懷があつて、遂に承認を得て子息をエルラが貰ふ事になる。第三幕は元の階下の室で、ボルクマン、夫人、エルラの三人が互に子息の取合ひをして居る處へ、子息が入つて來たが、彼は三人共の要求を拒絕して、某未亡人と公然駈落する。第四幕目ではボルクマンは遂に自己の事業と云ふ意志のために取逆上せて、厳寒の深夜雪を犯して自分の夢眩を逐つて、遂に寒氣の爲めに死んで了ふ。此處で二人の姉妹は最早子には逃げられ、戀人には死なれ、初めて二人は十八年間の互の敵視は解決せられて、死人の上で手を握合ふた。之れで此の演劇は終つた。

女の味方

昨今の婦人界には表立つた問題もないが、最も摯實な意味で若い女の味方をする人が甚だ少いやうに思ふ、それは第一今の若い女の心持が分らないからだと云ふ人もあらう、成程女學校の先生に聞いても、燈臺下暗して飛んだ見當違ひな警戒をしてゐるやうであるし、文學者に聞いても女の心持は女でないと分らぬと云ふ、處が女其人に聞いて見ても矢張分らぬと云ふ、それでは何處へ行つて若い女の心持を聞いて可いか分らなくなる。此分らないと云ふのが現代の所謂懷疑であつて、單り女性問題にも限るまいが、女性は日に日に新しい刺戟を受けて行くから、分らない〳〵と云ふうちに、何う云ふ方角へ迷ひ行くか甚だ賴りない。凡てを經驗から割出し、常識から斷定してゆく迎合主義の人達ばかりで、今後の婦人界が立つてゆけば苦勞はないが然うはゆかない、時代の矛盾に連れて、矛盾した女性もこれから現れてくるに相違ない、婦人界の謀叛人も現れるに相違ない、男性は自覺して吾儘が募る、女性は自覺して反抗すると云ふことになると、兩性間の關係はます〳〵亂脈になる、西洋のやうに婦人が政治問題に立入らうとしたり、社會的運動を試みやうとしたりして、過激なあら〳〵しいことをするのはもう時代後れの態がある、もつと深い考を以て女性の立脚地を根抵から覆して來て、男性に當らうとして來たら茲に痛々くも暗鬪を生ずるに相違ない、現に一部の家庭ではそれがありさうに思はれる。さればと云つて女性が自覺した結果、結婚を恐れるやうになつてもゆゝしき一大事で猶更棄てゝは置かれぬ。此際に當つて能く若き女性の心持を呑込み、彼等に味方し、彼等を誘掖し、其立脚地も定め、考への方針も立てゝやると云ふことは、世の婦人問題に心を掛る者の最も留意すべき

てはなからうかと思ふ。

目出度い氣分

太箸で雜煮を食ひ、田作數の子の重組を前に屠蘇を汲む、變挺な味のものながら目出度い氣分になる、よし吾に六分のハイカラ氣味ありと雖、未だ元旦に七面鳥を裂き三鞭を上ぐるまでは改めたくは無い。今日大路のまん中で娘達にテニスをやられるよりは、矢張長袖を振りはえて、カチン〳〵と突く羽根のあぶない門松のトンネルを除けて通る方、コンペンションの醉か知らぬがよい氣分である。と云つて平素の衣食住に至つてはさうでもない格にもなきにハイカラ氣あり、又古るきものゝ忘るゝに未練がある、もうよからうと太陰暦を取り上げられてさへ直接利害はないが心細い、「僕は洋食に喉佛を鳴らすが又刺身に舌鼓をうつを忘れない、スリツパ穿きてドアを開け、ソフアーに横はつて新聞を讀むのも惡くないが、青疊に寐そべつて檐の風鈴を聞く趣味は捨てがたい、仕事するには洋服が着たいが、其代りこの風呂敷的和服を取上げられては生甲斐も無いやうに思ふ、ピヤノの音に魂を銷しても、又新内の流しに泪が生れ變つて出る、殊勝なものだ、この新年にしても若し初湯無く初荷なく出初めなく加留多遊びても廢まつたらどんなだらうと心配だ、そんなに東西共に取るのは贅澤だと死んだ兎民譜に叱られるかも知れないが、それが出來ないては新進日本に生れた甲斐も無い、お箸を持つ事が出來ず、無箸では手が廻らず、鼻緒をかけては足が出ないと云ふのは泰西巨人の譬であるが幸にも――或は不幸にも 箸の廻る如くフオークも把れば、無箸の如くペンでも紙を走る、俎板を踏む變に馴れて靴を鳴らすにも妨げない、誇りと云へば誇りである、これを一時の過渡の現象だなぞと太陰暦同樣の最後は見たく無いのである。

お才越後に歸る

詩人横瀨夜雨の詩にも入り、また夜雨の家の家の子としても、病んで起居不自由なる夜雨の保護者としても、まめやかに仕へた柔獨女お才は、初め越後より常陸に來たのだが、近日越後に歸ると云ふことだ、夜雨の近信に曰く「お才は越後へかへることになつた、十五で來て三十でかへる、二人の子なつれて三國峠を越えるのだ、再び東に來ることはなからうと思ふ、自分の父が骨折つたゝめに恩給も下るやうになつたし、貯金も四百圓ほどためさせた、わが家の保護をはなれてももう大丈夫であらう」と。彼女が十五年の勞苦に酬ゆるには病詩人の『お才』一篇は何よりのお土產であらう。

文界消息

▲北原白秋氏は郷里筑後に歸省した。

▲生田長江氏は蓄膿腔物を患ひ手術を施したが課後は大いに快しと。

▲永井荷風氏は『東京朝日』に冷笑を掲げ初めた二三回見たばかりだが面白さうだ。

▲同紙に新たに『文學欄』が出來た、擔當は森田草平氏で、諸家の評論が出て居る、小宮豐隆氏の個性の寂し味を論じた一篇は短かつたけれど透徹した好論文であつた。

▲岩野泡鳴氏は北海道より歸つた。

▲小山内薫氏は家庭を出て下宿生活に入るさうだ。

▲中村星湖氏は牛込辨天町に一家を構えた。

▲早稻田大學では地方巡回講話の計畫がある。

▲嚴谷小波氏は前月十七日朝歸朝した。

▲中村春雨氏は去月十四日敦賀に着いた、歐州から汽車で歸つたのである、大阪を經て東京に入つた、同氏の友人等は氏の爲に舊臘二十六日上野精養軒に於て盛んなる歡迎會を開いた。

○天佑社の創立

以前大阪に於て關西青年文學會を起した當時、大いに關西文運の爲に努力した小林天眠氏等は、同會の後身とも云ふべき天佑社を起し、豫てより社友を募集してゐたが、今回規模を擴張し、向ふ百ヶ月計畫を以て同好の社友を募つてゐる、以前より關係の深かつた中村春雨氏は勿論其他の諸氏も或は發起者の一人となり、或は贊助者となつてゐる、文藝を愛して入社したいと思ふ人は大阪市東區谷町一丁目一〇二寺田方天佑社創立事務所に規約書を請求すれば詳細が分る。

ふけの有害について

○本市四谷區舟町三二佐藤洋々堂製の「ふけしらず」と名く香水は如何に多い頭垢にても遺憾なく清除せらるのみならず脫毛をも豫防し得らるる無害有効の物なりと、蓋し頭垢は讀むで字の如く極めて不潔的の物、而から頭の痒きは「ふけ菌」の毛根を刺戟するためなり。尙は頭垢は必らず毛髮を惡化し脫毛を多からしむ、最と怖るべき有害物なれば、當々之を濟除するは衛生上肝要の事なり。

新刊

○信仰　アンドレーフ原作　中村春雨譯

アンドレーフは露國の現代小說家中尤も深刻なる作家として知られて居る、我文壇にも既に飜譯された作品も少くない、この『信仰』は其流布未だ多くないが、自然主義より更に一歩進んで生理肉體以上精靈的乃至靈魂的煩悶を描破せんと努力して居る徵象主義的作物て、アンドレーフの傑作てあること序文にもある如く、いかにも初めから終りまで疑問に充ちて、考へ／＼讀ませる、而して卷を掩うて人間の運命を深く考へさせる、所謂宗教問題的小說て、現代の思潮を知らんとする者は是非一讀しなければならぬ作だ、譯文亦原作の深刻を傳へる、附錄に『沈默』の一短篇を添ふ。クロース美本、（定價八十錢、神田駿河臺春秋社發行）

○日本宋學史　西村天囚著

此書は標題の如く我邦に於ける宋學の傳來と發達とを記述したもので、初めに宋學の由來を解說し、鎌倉時代に傳來し、室町時代に研究されてより以來、文化旺盛の德川時代に至るまで、わが國民の中堅思想を支配し、武士道的文明に貢獻したる淵原を詳しく歷史的に闡明したものである、又これまで餘まり知られなかつた西國に於ける斯學の學徒の事蹟なども該博なる眼光によつて紹介せられてある、近來有益なる新著てある、挾入の王仁木像以下二十有餘の寫眞版亦珍となすに足る、菊版四百頁クロース本。（定價二圓、京橋區梁江堂發行）

○學窓日記　光風館發兌

幾多種類のある日記の中て最も學生向に出來てゐる、體裁は一寸『吾家の歷史』に似た處がある、一日の處を學校、家庭、社會得たる智識、雜事、備考の六項に分ち、欄外には其日の歷史上の出來事と格言とがあつて格言は英和對照になつてゐるから英語を覺えるのに便利だ、要するに行屆いて賑やかな日記てある、製本堅牢（定價四十五錢、神田區神保町光風館出版）

○俳話と評釋　內藤鳴雪著

斯道の大家內藤鳴雪氏が俳句に就ての談話又は評釋を集めたものてある、俳句に熱心な人達には座右の好參考てあらう、評釋は殊に俳句の初心者に取つて何より宜い作法の手引になるだらう。（定價三十八錢　博文館發兌）

○近世大陸文學史　松原至文述

二十世紀の文學を知らんと欲する者は大陸文學殊に佛蘭西露西亞獨逸等の文學に通じなければならぬ、文學を語る者が是等大陸文學の近事を知らないなどは寧ろ耻辱てある、本書の現ることは決して偶然てない、譯述者松原至文氏の筆力は此等の文學史を書くに最も適當してゐる（定價金六十錢、本鄕東片町昭倫社出版）

○ガリヴアー旅行記

此書も松原至文、小林梧桐兩氏の共譯て、世界の一大奇書として知られるガリヴアー物語の詳しい譯てある、家庭の讀物には殊に面白からう（定價八十錢、同上出版）

○秘密の箱

秘密の箱、黃金の鵝、双頭の天馬の三種のお伽噺を集めたもので、何れも西洋の面白いお話を譯したのである（定價二十錢、巢鴨內外出版協會出版）

○純潔　江田楓窓著

譬へ何んな刺戟があつても女子の純潔は保ち得ると云ふことを寫した小說て、本書の著者澤田氏は『自然界に於ける兩性の秘密』其他婦人論を著して女性研究には經驗のある人だから、普通の小說と異つた根據を持つてゐる（定價八十五錢、京橋區西紺屋町良明堂出版）

○自然と印象　第八集

福士蕙雨氏と福田夕咲氏との近作の詩集てある夕咲氏の作には佳品がある（非賣）

○銀月文

伊藤銀月氏の小品文集てある、氏一流の奇峭な文字を味ふには此種の小品文に限る（定價九十錢、京橋區南小田原町樂山堂發兌）

○今日の歷史　高橋淡水著

一月一日から十二月三十一日に到るまでの每日の歷史上の出來事を一件以上二三件づゝ集めたもので、其日其日の事だけに家庭などて子女の爲には好い訓話となるてあらう。（定價七十五錢、同上出版）

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小說と詩と短文には振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は同字詰三十行以內、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以內、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大きさにて薄き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る▲投稿は毎月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小說、散文）
天賞金參圓。　地賞金壹圓五拾錢。　人賞金七拾錢。

▲乙種（家庭日記、新論文、書簡文、詩）
天賞金貳圓。　地賞金八拾錢。　人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）
天賞金壹圓。　地賞金五拾錢。　人賞金貳拾錢。

◉各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の吳服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座　東京第壹七貳九番

○定期發行分　▲▲▲▲毎月一回（一日定期發行）
- 一冊（一回分）　定價金拾五錢：郵税一錢五厘　計金拾六錢五厘
- 三冊（三月分）　同前金四拾三錢五厘：同　四錢五厘　計金四拾八錢
- 六冊（半年分）　同前金八拾四錢：同　九錢　計金九拾三錢
- 十二冊（壹年分）　同前金壹圓五拾六錢：同　拾八錢　計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分　▲▲▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）
- 一冊（一回分）　定價金貳拾錢：郵税一錢五厘　計金貳拾一錢五厘
- 二冊（半年分）　同前金三拾八錢：同　三錢　計金四拾壹錢
- 四冊（壹年分）　同前金七拾貳錢：同　六錢　計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部▲▲——十六回▲▲▲
- 四冊（三月分）　定價金六拾三錢五厘：郵税六錢　計金六拾九錢五厘
- 八冊（半年分）　同前金壹圓二拾二錢：同　拾貳錢　計金壹圓三拾四錢
- 十六冊（壹年分）　同前金貳圓二拾八錢：同　二拾四錢　計金貳圓五拾二錢

▼申込注意　振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絶）、凡て前金拂込に限る

明治四十二年十二月廿六日印刷
明治四十三年一月一日發行

本號に限り定價金參拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話（本局）六〇七番　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、

女子文壇新春第一增刊

若き婦人

▲二月十五日發行▼

紙數二百三十頁
美麗口繪數葉入
定價金貳拾錢
郵稅壹錢五厘

我邦婦人の地位は日に高められつゝあり、此時若き婦人が抱けるわかく〳〵しき思想を、最も自由に發表し來るものは此の『若き婦人』なり。文學を本位とせる本誌が小說、散文、詩歌等の創作に重きを置くは勿論ながら、併せて現代の若き婦人が言はんと欲する處の境遇上の告白、女性の眼に映じたる社會の觀察、靑春時代に得たるさま〴〵の實驗談、世に隱れたる婦人界の事實等、採擇すべき材料の範圍は極めて博きを期したれば、紙面の活氣あるとと變化に富むこととは稀有なるべし。而かも是等各種の記事は勿論、表紙口繪に到るまで、皆此れを世の才媛諸孃に募り、全然若き婦人の代表的雜誌を以て自任せんとす、例に依りて江湖の淸覽を仰ぐ。

東京市京橋區
銀町十二番地

女子文壇社發行

（振替口座東京）
（第壹七貳八番）

賣捌
全國雜誌書店

第六年第壹號
（每月一回一日發行）
女子文壇
滿五週年紀念號
（明治四十二年十二月廿六日印刷納本）

世の多くの婦人は

子宮病の治療を誤て居ないか

一概に子宮病と云ても其種類は隨分多く、從て治療法も種々あるが、一般婦人の自宅治療を見るに甚だ勝手氣儘て、服藥は厭だの、洗滌は面倒だ、さし藥は困ると、病原を考へ藥を適要せず、自己の都合より割出した藥物應用てある、爲めに內服藥の必要なる症狀に向て外用藥を用ひ、外用藥の必要に內服藥のみを用ゆる矛盾の治療をして、子宮病の不治を嘆く婦人の多きは誠に殘念である、津村順天堂の自宅治療法は、一藥萬能主義でなく十數種の加減內服藥と數種の外用藥を以て婦人病の根治を保證するのであるが、今外用藥中將球を使用すべき諸症を同病患者に告白す、幸ひに自己の症狀を考慮して本劑を用ゆれば必す滿足なる結果を得べし、尙詳細を知らんと欲せば詳しき容體を記して本舖津村順天堂へ申込れよ



子宮座藥
中將球
一名 白帶球
大日本東京
本舖津村順天堂

定價 四十五箇 貳圓九箇入五十錢
二十箇 壹圓三箇入廿錢

㊀中將球は子宮內膜炎とか白帶、赤帶、こしけ、子宮痙攣、子宮炎、子宮加答兒、膣炎、膣加答兒、子宮糜爛、子宮惡臭、子宮搔痒、尿意頻促、月經時の疼痛、痳毒性子宮病等に特効あり、殊に良夫の痳疾に罹り居る時は痳毒菌の爲め心付かざる內に子宮を害する事多ければ常に中將球を使用して本病を豫防せられよ、

㊁不姙症と流產　子宮內膜炎の分泌物及び酸性の粘液は精蟲を害し不姙症を起し子宮の炎症は卵の發育を妨げ姙娠するも流產となる事多ければ本劑を使用して病根を斷つ事肝要なり、

中將球本舖 東京日本橋通四丁目 振替口座一六八〇番 **津村順天堂**

郵稅 貳錢五厘

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）